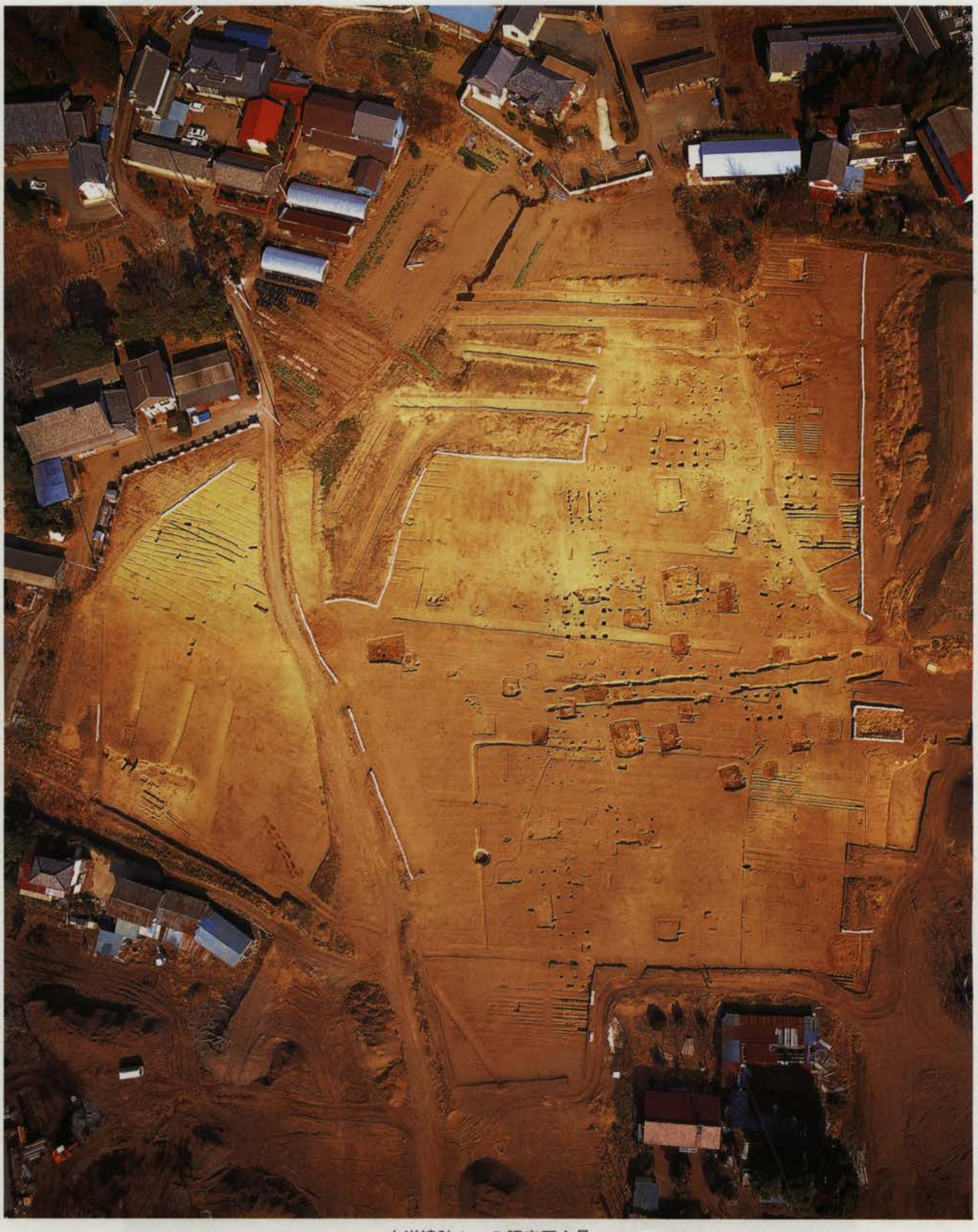
大胡西北部遺跡群

堀越中道遺跡

「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　—第3集—



中道遺跡 A ・ B 調査区全景

A調査区中央部

J16号住居跡全景

18号住居跡全景

31号掘立柱建物跡全景

序　　文

平成4年から始まった「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査も平成8年度で終了いたしました。試掘調査を含めると足掛け6年の月日を要し、旧石器時代の遺物から近世に至る長期間の遺構・遺物が検出されました。

発掘調査後の整理事業は、本年度と次年度の2年間で第5集を刊行する予定であり、当町に於ける先人の歴史が次々に解明されつつあります。

ここに報告いたします第3集「堀越中道遺跡」は、縄文時代と平安時代の集落を中心とする遺跡で、縄文時代の集落は、関東でも類例の少ない前期前葉の調査例であり、第2集の「横沢新屋敷遺跡」の報告とともに重要な資料であります。

平安時代の集落では、県内で2例目の報告となる礎石をもつ竪穴住居跡、道路跡、出土遺物では焼印・把手付鉄鍋、巡方、墨書土器、祭祀儀礼の一端を垣間見れる刻書土器等があり、一般集落の様相とは異にする遺構・遺物が検出されました。

調査の実施に当たりご協力・ご指導をいただきました各位に感謝申し上げると共に、厳しい自然条件の中で調査に携わりました皆様の労をねぎらいます。

終わりに、この成果を広く公刊し、当町並びに本県の歴史の解明を探る資料として多くの方々の学習の一助となれば幸いであります。

平成9年3月

勢多郡大胡町教育委員会

教育長　剱持平三郎

例　言

1　本書は、「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」の実施に伴い事前に発掘調査された大胡西北部遺跡群のうち、大胡町大字堀越字中道に所在する「堀越中道遺跡」の発掘調査報告書である。

◎大胡西北部遺跡群発掘調査一覧

平成４年	堀越西一丁田・西天神遺跡、横沢柴崎遺跡	平成４年10月10日～５年２月25日
平成５年	横沢新屋敷・宇持・乙関替戸遺跡	平成５年９月１日～同年12月18日
平成６年	堀越中道遺跡	平成６年10月15日～７年２月18日
平成７年	横沢二本松遺跡・向田遺跡・向山遺跡	平成７年10月11日～８年２月29日
平成８年	茂木二本松遺跡	平成８年10月９日～同年11月７日

◎大胡西北部遺跡群発掘調査報告書一覧

第１集	乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡	平成６年３月刊行
第２集	横沢新屋敷遺跡	平成９年３月刊行
第３集	堀越中道遺跡	平成９年３月刊行
第４集	西一丁田遺跡他	平成10年３月刊行予定
第５集	横沢二本松・向田・向山他	平成10年３月刊行予定

2　遺跡の名称は、大字名小字名を併記し堀越中道遺跡と呼称する。

3　発掘調査地区は、大胡町大字堀越字中道1565番地外に所在する。

4　発掘調査は、大胡町教育委員会直営で平成６年10月20日より平成７年２月18日まで山下歳信と藤坂和延が担当し、実施した。

5　本書の作成は編集・執筆を山下が行った。

6　発掘調査によって出土した遺物については総て大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵棟で管理・収蔵している。

7　発掘調査から本書作成の過程で下記の方々や機関からのご協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県埋蔵文化財センター
群馬県土地改良事務所　株式会社測研　技研測量設計株式会社　須賀工業株式会社
パリノ・サーヴェイ株式会社調査研究部考古学研究室　株式会社東都文化財保存研究所
前橋文化財研究所　百瀬長秀　上田典雄　綿田弘美　澁谷昌彦　綿貫邦雄　谷藤保彦　関根慎一
高島英之　鈴木徳雄　松田光太郎

8　石器等の石材の同定・　竪穴住居跡の炭化材分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

9　発掘調査作業員及び整理作業員は次のとおりである。（敬称略）

阿久沢福造	五十嵐文江	石井　よね	井上美代子	江原喜美	遠藤芳雄	大野京子
大原きみ子	奥野富子	小沢チヅエ	笠原録郎	神尾　茂	北爪珠美	喜楽トヨ
境野豊四郎	桜井　弘	下山　敏	菅田ツル	鈴木久美子	須藤すみ子	関谷清治
（故）高橋充子	田村志づ江	勅使河原幸枝	登坂うた子	中村新太郎	長岡徳治	萩原秀子
福島逸司	松倉菊江	山下雅江	山田茂雄	横沢和代	横沢恵子	若林俊次

凡　例

1　位置図（第１図）は建設省国土地理院発行の５万分の１の地形図「前橋」に加筆して使用した。

2　第２・３図は、大胡町役場発行の2,500分の１、１万分の１現況図に加筆して使用した。

3　遺構番号の略称は、住居跡はH、土坑はD、掘立柱建物跡はB、溝はMとし、縄文時代の遺構にはJを頭に付した。

4　本書掲図の縮尺は次のとおりである。

遺構

全体図１：1200　全体図割り付け遺構図１：400　遺構分布図１：400　住居跡１：60　炉址１：30
土坑１：40　掘立柱建物跡１：80　溝１：200～300　道路址１：300　礎石遺構１：80

遺物

土器１：３～６　石器１：１～４　　鉄製品１：３　古銭１：1.5

5　遺構図中に記した断面基準線は標高である。

6　遺構図中に示したN方位は、座標北である。

7　縄文時代の住居跡の主柱穴はトーンを付した。

8　胎土中に繊維を含むものは、断面に●を付している。

9　須恵器と還元炎焼成の土器の断面は、塗り潰した。灰釉陶器・黒色処理された土器についてはスクリーントーンを貼って示した。

10　掘立柱建物跡の柱間は、30cmを１尺とした。

11　発掘調査に至る経緯については、大胡西北部遺跡群第１集に記されているので割愛した。

平成６年度県営ほ場整備事業大胡西北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査は、平成６年８月31日付けで大胡町長横堀文雄と前橋土地改良事務所長高山雅之との委託契約に基づき行われた。

目　　次

巻頭カラー図版
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
挿 図 目 次
挿 表 目 次
写真図版目次
抄　　録

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1～5
　第1節　遺跡の位置 …… 1
　第2節　周辺の遺跡 …… 1～5
第Ⅱ章　検出された遺構と遺物 …… 5～195
　第1節　遺跡の概要（第4～10図） …… 5～13
　第2節　縄文時代の遺構と遺物 …… 14～65
　　(1)　住居跡 …… 14～51
　　(2)　土坑 …… 52～60
　　(3)　表土・グリット等の出土遺物 …… 61～65
　第3節　古墳時代の遺構と遺物 …… 66～72
　第4節　歴史時代の遺構と遺物 …… 73～192
　　(1)　住居跡・出土遺物 …… 73～149
　　(2)　掘立柱建物跡・出土遺物 …… 150～177
　　(3)　敷石遺構・出土遺物 …… 177～179
　　(4)　溝状遺構・出土遺物 …… 179～185
　　(5)　道路遺構・出土遺物 …… 185～189
　　(6)　井戸状遺構・出土遺物 …… 189～191
　　(7)　土坑・出土遺物 …… 191
　　(8)　表土・グリット等の出土遺物 …… 192
　第5節　中近世の遺構と遺物 …… 193～195
第Ⅲ章　出土炭化材分析報告　堀越中道遺跡における住居構築材の用材 …… 196～209
第Ⅳ章　調査のまとめ …… 210～243
　第1節　縄文時代の遺物について …… 210～243
　第2節　歴史時代の遺構と遺物について …… 214～242
　　(1)　竪穴住居跡 …… 214～216
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 217～220

(3) 出土遺物について……221～232
(4) 文字関係資料……233～237
1）墨書土器……233
2）刻書土器……233～235
3）刻書・刻字紡錘車……235～237
(5) 鉄・銅製品……237～242
1）焼印……237～241
2）把手付鍋……241～242
第3節 結語……243

挿図目次

第1図 遺跡の位置図……2
第2図 遺跡周辺現況図……3
第3図 周辺の遺跡……4
第4図 調査区全体図……6
第5図 遺構実測図Ⅰ……7
第6図 遺構実測図Ⅱ……8
第7図 遺構実測図Ⅲ……9
第8図 遺構実測図Ⅳ……10
第9図 遺構実測図Ⅴ……11
第10図 遺構実測図Ⅵ……12
第11図 縄文時代の遺構分布図……15
第12図 J1号住居跡・炉址・出土遺物……16
第13図 J2号住居跡・炉址・出土遺物(1)……17
第14図 J2号住居跡出土遺物(2)……18
第15図 J3号住居跡・出土遺物(1)……20
第16図 J3号住居跡出土遺物(2)……21
第17図 J3号住居跡出土遺物(3)……22
第18図 J4号住居跡……23
第19図 J4号住居跡出土遺物……24
第20図 J5号住居跡・炉址・出土遺物……25
第21図 J6号住居跡・炉址……26
第22図 J6号住居跡出土遺物(1)……27
第23図 J6号住居跡出土遺物(2)……28
第24図 J7号住居跡・炉址……29
第25図 J7号住居跡出土遺物……30
第26図 J8号住居跡・炉址・出土遺物……31
第27図 J9号住居跡・炉址……32
第28図 J9号住居跡出土遺物……34
第29図 J10号住居跡……35
第30図 J10号住居跡出土遺物(1)……35
第31図 J10号住居跡出土遺物(2)……36
第32図 J11号住居跡・出土遺物……37
第33図 J12号住居跡・炉址・出土遺物……38
第34図 J13号住居跡・炉址……39
第35図 J13号住居跡出土遺物(1)……41
第36図 J13号住居跡出土遺物(2)……42
第37図 J13号住居跡出土遺物(3)……43
第38図 J14号住居跡・炉址・出土遺物……44
第39図 J15号住居跡・出土遺物……45
第40図 J16号住居跡・炉址……46
第41図 J16号住居跡出土遺物(1)……47
第42図 J16号住居跡出土遺物(2)……48
第43図 J17号住居跡・炉址・出土遺物……49
第44図 J18号住居跡・炉址……50
第45図 J18号住居跡出土遺物……51
第46図 縄文土坑(1)……54
第47図 縄文土坑(2)……55
第48図 縄文土坑(3)……56
第49図 縄文土坑出土遺物(1)……59
第50図 縄文土坑出土遺物(2)……60

第51図　表土等の縄文時代の出土遺物(1)……62
第52図　表土等の縄文時代の出土遺物(2)……63
第53図　表土等の縄文時代の出土遺物(3)……64
第54図　表土等の縄文時代の出土遺物(4)……65
第55図　古墳・歴史時代の竪穴住居跡分布図……66
第56図　40号住居跡……67
第57図　40号住居跡出土遺物……67
第58図　41号住居跡……68
第59図　41号住居跡出土遺物……68
第60図　42号住居跡・出土遺物……69
第61図　43号住居跡……70
第62図　43号住居跡出土遺物……71
第63図　44号住居跡……72
第64図　1号住居跡・カマド跡……74
第65図　1号住居跡出土遺物……75
第66図　2号住居跡・カマド跡……76
第67図　2号住居跡出土遺物……76
第68図　3号住居跡・カマド跡……77
第69図　3号住居跡出土遺物(1)……78
第70図　3号住居跡出土遺物(2)……79
第71図　4号住居跡……80
第72図　4号住居跡出土遺物……80
第73図　5号住居跡……81
第74図　5号住居跡出土遺物……82
第75図　6号住居跡……82
第76図　6号住居跡出土遺物(1)……83
第77図　6号住居跡出土遺物(2)……84
第78図　7号住居跡……85
第79図　7号住居跡出土遺物……86
第80図　8号住居跡……87
第81図　8号住居跡出土遺物……88
第82図　9号住居跡・出土遺物……89
第83図　10号住居跡……90
第84図　10号住居カマド跡……91
第85図　10号住居跡出土遺物(1)……92
第86図　10号住居跡出土遺物(2)……93
第87図　10号住居跡出土遺物(3)……94
第88図　11号住居跡……96
第89図　11号住居跡出土遺物……97
第90図　12号住居跡・カマド跡……98
第91図　12号住居跡出土遺物(1)……99
第92図　12号住居跡出土遺物(2) ……100
第93図　12号住居跡出土遺物(3) ……101
第94図　12号住居跡出土遺物(4) ……102
第95図　13号住居跡・カマド跡 ……103
第96図　13号住居跡出土遺物 ……104
第97図　14号住居跡 ……105
第98図　14号住居跡出土遺物 ……106
第99図　15号住居跡・カマド跡・出土遺物 ……107
第100図　16号住居跡・カマド跡 ……108
第101図　16号住居跡出土遺物 ……109
第102図　17号住居跡・カマド跡 ……110
第103図　17号住居跡出土遺物 ……111
第104図　18号住居跡・カマド跡 ……113
第105図　18号住居跡礎石掘り方 ……114
第106図　18号住居跡出土遺物(1) ……116
第107図　18号住居跡出土遺物(2) ……117
第108図　18号住居跡出土遺物(3) ……118
第109図　19・20号住居跡 ……119
第110図　19号住居跡出土遺物(1) ……120
第111図　19号住居跡出土遺物(2) ……121
第112図　20号住居跡出土遺物 ……122
第113図　21号住居跡・出土遺物 ……123
第114図　22号住居跡 ……124
第115図　22号住居跡出土遺物(1) ……125
第116図　22号住居跡出土遺物(2) ……126
第117図　23号住居跡 ……127
第118図　24号住居跡 ……128
第119図　24号住居跡出土遺物 ……128
第120図　25号住居跡 ……129
第121図　25号住居跡出土遺物 ……129
第122図　26号住居跡 ……130
第123図　26号住居跡出土遺物 ……130
第124図　27号住居跡・カマド跡 ……131
第125図　27号住居跡出土遺物(1) ……132
第126図　27号住居跡出土遺物(2) ……133

第127図　28・29号住居跡 ……134
第128図　28号住居跡出土遺物 ……135
第129図　29号住居跡出土遺物(1) ……137
第130図　29号住居跡出土遺物(2) ……138
第131図　30号住居跡 ……138
第132図　30号住居跡出土遺物 ……139
第133図　31号住居跡出土遺物 ……139
第134図　31号住居跡 ……140
第135図　32号住居跡 ……141
第136図　32号住居跡出土遺物 ……141
第137図　33号住居跡 ……142
第138図　33号住居跡出土遺物 ……142
第139図　34号住居跡 ……143
第140図　34号住居跡出土遺物 ……144
第141図　35号住居跡 ……145
第142図　36号住居跡 ……145
第143図　36号住居跡出土遺物 ……145
第144図　37号住居跡 ……146
第145図　37号住居跡出土遺物 ……147
第146図　38号住居跡 ……147
第147図　38号住居跡出土遺物 ……148
第148図　39号住居跡 ……148
第149図　南東竪穴状遺構 ……149
第150図　南東竪穴状遺構出土遺物 ……149
第151図　掘立柱建物跡分布図 ……150
第152図　1号掘立柱建物跡 ……155
第153図　2号掘立柱建物跡 ……155
第154図　3号掘立柱建物跡 ……156
第155図　4号掘立柱建物跡 ……156
第156図　5・5'号掘立柱建物跡 ……156
第157図　6号掘立柱建物跡 ……157
第158図　7号掘立柱建物跡 ……157
第159図　8号掘立柱建物跡 ……158
第160図　9号掘立柱建物跡 ……158
第161図　10・11号掘立柱建物跡 ……159
第162図　12・12'号掘立柱建物跡 ……159
第163図　13号掘立柱建物跡 ……160
第164図　14号掘立柱建物跡 ……160
第165図　15号掘立柱建物跡 ……161
第166図　16号掘立柱建物跡 ……161
第167図　17号掘立柱建物跡 ……162
第168図　18号掘立柱建物跡 ……162
第169図　19・20号掘立柱建物跡 ……165
第170図　21号掘立柱建物跡 ……165
第171図　22・23号掘立柱建物跡 ……166
第172図　24号掘立柱建物跡 ……166
第173図　25号掘立柱建物跡 ……166
第174図　26号掘立柱建物跡 ……167
第175図　27号掘立柱建物跡 ……167
第176図　28号掘立柱建物跡 ……167
第177図　29号掘立柱建物跡 ……168
第178図　30号掘立柱建物跡 ……169
第179図　29・30号掘立柱建物跡模式図 ……169
第180図　31号掘立柱建物跡 ……170
第181図　32・33号掘立柱建物跡 ……171
第182図　34号掘立柱建物跡 ……171
第183図　35・36号掘立柱建物跡 ……172
第184図　37・37'号掘立柱建物跡 ……172
第185図　1号柱列 ……174
第186図　掘立柱建物跡出土遺物(1) ……175
第187図　掘立柱建物跡出土遺物(2) ……176
第188図　石敷遺構 ……177
第189図　石敷遺構出土遺物 ……178
第190図　溝状遺構分布図 ……179
第191図　1～3号溝 ……180
第192図　4・5号溝 ……181
第193図　3号溝出土遺物(1) ……183
第194図　3号溝出土遺物(2) ……184
第195図　歴史時代道路遺構（MD） ……186
第196図　道路遺構（MD1）出土遺物(1) ……187
第197図　道路遺構（MD2）出土遺物(2) ……188
第198図　道路遺構（MD2）出土遺物(3) ……189
第199図　井戸状遺構・出土遺物 ……190
第200図　土坑 ……191
第201図　グリット出土遺物 ……192
第202図　1号地下式土坑・出土遺物 ……194

第203図　２号地下式土坑・出土遺物 ……195
第204図　１号墓坑 ……195
第205図　撚糸圧痕文を持つ土器 ……211
第206図　竪穴住居跡規模分類図 ……215
第207図　礎石建ち竪穴住居跡集成 ……216
第208図　掘立柱建物跡模式図分類 ……219
第209図　掘立柱建物群 ……220
第210図　28号と29号住居跡出土遺物 ……221
第211図　19号と20号住居跡出土遺物 ……222
第212図　編年基準資料 ……228
第213図　竪穴住居跡時期分類 ……229
第214図　１・２期土器群 ……230
第215図　３期土器群 ……231
第216図　４・５期土器群 ……232
第217図　墨書集成 ……233
第218図　墨書文字分布 ……234
第219図　九字・五芒星マークの出土例 ……235
第220図　刻書土器・刻書紡錘車出土分布……236
第221図　鉄・銅製品出土分布 ……238
第222図　焼印集成 ……240
第223図　把手付鍋の集成 ……242

挿　表　目　次

第１表　竪穴住居跡規模分類 ……214
第２表　竪穴住居跡面積分類 ……214
第３表　掘立柱建物跡構造分類 ……217
第４表　掘立柱建物跡面積分類 ……217
第５表　掘立柱建物跡棟方向分類 ……218
付　表　縄文時代石器計測表 ……244

写真図版目次

図版１　A調査区（真上から）
図版２　１　J１号住居跡(東から)
２　J１号住居跡(真上から)
３　J２号住居跡(西から)
４　J２号住居跡(真上から)
５　J３号住居跡(北から)
６　J３号住居跡(真上から)
図版３　１　J３号住居跡遺物出土状況
２　J４号住居跡(東から)
３　J４号住居炉址
４　J５号住居跡(東から)
５　J５号住居炉址
６　J６号住居跡(東から)
図版４　１　J６号住居跡(真上から)
２　J６号住居炉址
３　J７号住居跡(南東から)
４　J７・11号住居跡(真上から)
５　J７号住居炉址
６　J８・９号住居跡(真上から)
図版５　１　J８号住居跡(西から)
２　J８号住居炉址
３　J９号住居跡
４　J９号住居炉址
５　J10号住居跡(南東から)
６　J10号住居跡(真上から)
図版６　１　J10号住居炉址
２　J10号住居跡遺物出土状況
３　J13号住居跡(真上から)
４　J13号住居炉址
５　J14号住居跡(西から)
６　J14号住居炉址
図版７　１　J15号住居跡(真上から)
２　J16号住居跡(東から)
３　J16号住居跡(真上から)
４　J16号住居炉址
５　J17号住居跡(南から)
６　J18号住居跡(東から)
図版８　１　J18号住居跡遺物出土状況
２　J19号住居跡(西から)
３　J４号土坑
４　J５土坑
５　J５号土坑遺物近撮
６　J14号土坑
図版９　１　J23号土坑
２　J25号土坑
３　D調査区全景（東より）
４　40号住居跡(真上から)
５　40号住居跡遺物出土状況
図版10　１　41号住居跡(真上から)
２　42号住居跡(真上から)
３　43号住居跡(真上から)
４　１号住居跡(真上から)
５　１号住居跡セクション
６　１号住居跡遺物出土状況
図版11　１　２号住居跡(真上から)
２　２号住居跡セクション
３　３号住居跡(真上から)
４　３号住居跡炭化材出土状況
５　３号住居跡焼印出土状況
６　４号住居跡(西から)
図版12　１　５号住居跡(西から)
２　６号住居跡(真上から)
３　６号住居跡(西から)

4　7号住居跡(真上から)
5　8号住居跡(真上から)
図版13　1　9号住居跡(真上から)
2　10号住居跡(真上から)
3　10号住居カマドセクション
4　10号住居跡遺物出土状況
5　10号住居跡遺物出土状況
6　11号住居跡(真上から)
図版14　1　11号住居跡セクション
2　12号住居跡(真上から)
3　12号住居跡遺物出土状況
4　13号住居跡(真上から)
5　14号住居跡(真上から)
6　14号住居跡セクション
図版15　1　15号住居跡(真上から)
2　16号住居跡(真上から)
3　16号住居跡遺物出土状況
4　17号住居跡(真上から)
5　17号住居跡炭化材出土状況
6　17号住居跡鎌出土状況
図版16　1　17号住居跡鉄鉗出土状況
2　18号住居跡(真上から)
3　18号住居跡礎石(S 1)
4　18号住居跡礎石(S 2)
5　18号住居跡礎石(S 3)
6　18号住居跡礎石(S 4)
図版17　1　18号住居跡鉄製品出土状況
2　19号住居跡(北から)
3　21号住居跡(西から)
4　21号住居跡カマド
5　22号住居跡(西から)
6　22号住居跡遺物出土状況
図版18　1　23号住居跡(西から)
2　23号住居跡カマド
3　25号住居跡(西から)
4　26号住居跡(真上から)
5　27号住居跡(真上から)
6　28・29号住居跡(西から)
図版19　1　30号住居跡(西から)
2　31号住居跡(真上から)
3　32号住居跡(真上から)
4　33号住居跡(真上から)
5　34号住居跡(真上から)
6　36号住居跡遺物出土状況
図版20　1　37号住居跡(西から)
2　38号住居跡(真上から)
3　把手付鉄鍋出土状況
4　39号住居跡(西から)
5　南東竪穴遺構
6　1号掘立柱建物跡
図版21　1　1・2号掘立柱建物跡
2　4号掘立柱建物跡
3　5号掘立柱建物跡
4　6号掘立柱建物跡
5　7号掘立柱建物跡
6　8号掘立柱建物跡
図版22　1　10・11号掘立柱建物跡
2　11号掘立柱建物跡
3　12・12'号掘立柱建物跡
4　13号掘立柱建物跡
5　14号掘立柱建物跡
6　16号掘立柱建物跡
図版23　1　17号掘立柱建物跡
2　20号掘立柱建物跡
3　21号掘立柱建物跡
4　22・23号掘立柱建物跡
5　24号掘立柱建物跡
6　25号掘立柱建物跡
図版24　1　26号掘立柱建物跡
2　28号掘立柱建物跡
3　29・30号掘立柱建物跡
4　31号掘立柱建物跡
5　石敷遺構(真上から)
6　石敷遺構(西から)
図版25　1　石敷遺構(北から)
2　石敷遺構 (S 2・3)
3　平安時代道路址
4　道路址側溝雁股鏃出土状況
5　井戸状遺構
図版26　1　1号地下式土坑
2　1号地下式土坑内部
3　同内茶臼出土状況
4　1号墓坑
図版27　1　J 5号土坑出土十三菩提式土器
2　道路址(MD2)出土№4遺物・墨書「立」
3　同遺物・墨書「下殿」
図版28　1　11号住居跡出土遺物・墨書「山椎」
2　3号住居跡出土遺物「九字」
3　3号住居跡出土焼印

報告書抄録

ふりがな	おおごせいほくぶ　いせきぐん　なかみちいせき
書　　名	大胡西北部遺跡群　中道遺跡
副 書 名	「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第3集
シリーズ名	大胡町埋蔵文化財発掘調査報告書
編 著 者 名	山下歳信
編 集 機 関	大胡町教育委員会
所 在 地	〒371－02　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1,115番地　☎027-283-1111
発行年月日	西暦　1997年　3月　21日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀越中道（ほりこしなかみち）	勢多郡大胡町（せたぐんおおごまち）堀越字中道（ほりこしあざなかみち）	10304		36°25′44″	139°09′22″	1995・10・20 ～ 1996・02・18	15,000m²	県営ほ場整備

所収遺跡名　堀越中道遺跡

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落跡	縄文時代・前期～後期	竪穴住居跡　18軒 土坑　22基	縄文土器（前期 二ツ木式・中期 加曽利E 3～4式）・石器 縄文土器（二ツ木式・十三菩提式） 遺構外遺物 前期黒浜式・有尾式・諸磯式・十三菩提式 中期 加曽利E式　後期堀之内式・加曽利B式等
集落跡	古墳時代・前期	竪穴住居跡　4軒	土師器等
集落跡	平安時代	竪穴住居跡　39軒 掘立柱建物跡38棟 土坑 溝 石敷遺構 道路址 井戸状遺構	土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器・羽釜・墨書土器（立・山椎・益等）・刻書土器（九字等）・鉄器（焼印・釘・馬具・鎌・火打ち鎌・金鉗・刀子・鉄鏃・把手付鍋等）・石製（砥 石・紡錘車・石錘等）・土製品（羽口・紡錘車） 土師器・須恵器・鉄器（釘）等 土師器・須恵器・墨書土器（立・小林等）・石製品（巡方）土師器・須恵器 土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書土器（立・下殿）・石製品（砥石）鉄製品（鉄鏃）等 土師器・須恵器等
	中・近世	地下式土坑　2基 墓坑 溝 道路址	内耳式土鍋・茶臼 古銭

特記事項

縄文時代	前期花積下層と関山式の型式間に埋める「二ッ木式」の住居跡の検出は、県内で最大規模の軒数である。該期の様相を知る資料として貴重である。
平安時代	一般集落の様相とは異なる性格であり、下級官人に掌握された鉄生産に拘わる中継基地的集落と考えられる。礎石建ち竪穴住居跡は、県内2例目の検出であり、集落の核的存在である。集落では共通標識として「立」の墨書・焼印が使用され、九字や紡錘車に見られる刻書は、祭祀の一端を示すと考えられる。

大胡西北部遺跡群

堀越中道遺跡

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１節　遺跡の位置と環境（第１・２図）

群馬県の中央部に聳える「上毛三山」の１つ赤城山は、コニトロイデ型の複式火山で裾野を長く引いて、南側には広大な関東平野が開けている。大胡町は、赤城山南麓の火砕流堆積物と火山泥流状堆積物で構成された裾野にあり、荒山の東側の谷に源を発する荒砥川をはじめ寺沢川・神沢川などが南流する。これらの河川は谷地形を作り出し、畑と桑園が多くを占める台地と谷地形が放射状に織り成している。赤城山を東～南～西方と取り巻く勢多郡の南東部に位置し、北から北東は宮城村、南東に粕川村、南から西に前橋市、北西には富士見村が接している。

当町は、天正18年の徳川家康の関東入国に伴い、牧野康成の城下町として発展し、江戸期には日光裏街道の宿場町として栄えた。明治32年に町制施行して大胡町が誕生した。近年では、県都前橋市のベットタウン化が著しく、米麦作・養蚕から近郊農業型へと変化している。

遺跡は、上毛電鉄大胡駅の北西1.7㎞の距離に所在する大胡町の中央部の大字堀越字中道地内に位置し、南方部の一部分が字薬師となり、標高は199m前後の台地上に選地する。台地部は300m前後幅で小谷地を携えて南北に続き、南方の先端部まで2.3㎞を測り、縄文時代中期の集落跡と古墳群が検出された上ノ山遺跡となる。台地の中央部には南北に通過する町道上ノ町・前野線が東に走行し、字関替戸との地区界となっている。調査区の東でこの町道部分を谷頭として50m前後幅の低地が貫入し、同低地は西方で、蛇行しながら一丁田沼や薬師沼から南流する薬師川の低地と350m南で合流する。

第２節　周辺の遺跡（第３図）

旧石器時代の遺跡としては、相沢忠洋氏が昭和25年に調査された三ッ屋遺跡(21)では、尖頭器、ナイフ形石器、エンド・スクレーパー、スクレーパーが出土。上ノ山遺跡(26)では槍先形尖頭器、日光道東遺跡(33)では、細石核、ナイフ形石器、尖頭器、削器等、新屋敷遺跡(2)では細石核が出土している。

縄文時代の草創期～早期の遺跡としては、浅見遺跡(34)の天王山地区があり爪形文土器・押型文土器が出土している。前期前葉の集落跡は、堀越中道遺跡(1)、堀越芝山遺跡(3)、新屋敷遺跡(2)で花積下層式～二ツ木式、堀越二本松遺跡(8)では関山式期、堀越向田遺跡(5)、横沢向山遺跡(7)、天神風呂遺跡群(19)、関替戸遺跡(38)では有尾式・黒浜式土器、上大屋・樋越地区遺跡群(32)では黒浜式～諸磯式期が検出されている。

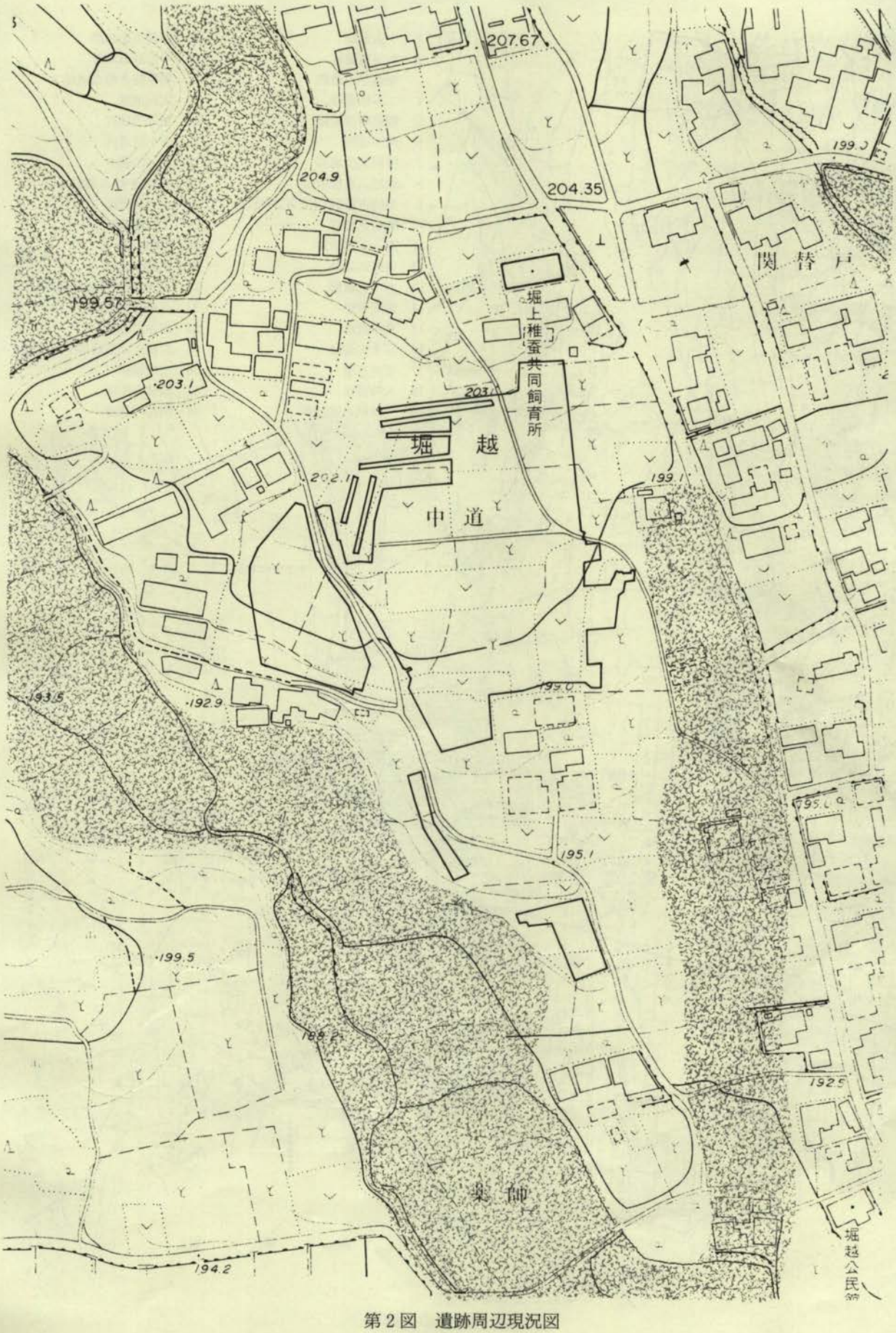
中期では、中葉の阿玉台式・勝坂式土器が出土した天神遺跡(18)、後葉の加曽利Ｅ式の集落跡が検出された西小路遺跡(25)、上ノ山遺跡(26)、諏訪東遺跡(20)、中川原遺跡群(21)、稲荷窪Ａ地点遺跡(22)、甲諏訪遺跡12等があり、諏訪東遺跡では焼町式土器、稲荷窪遺跡では中峠式土器が出土している。

後期では、堀ノ内式～加曽利Ｂ式・三十稲場式土器を出土した天神遺跡(18)と加曽利Ｂ式土器を主体とする包含層が検出された西一丁田遺跡(11)等が知られている。

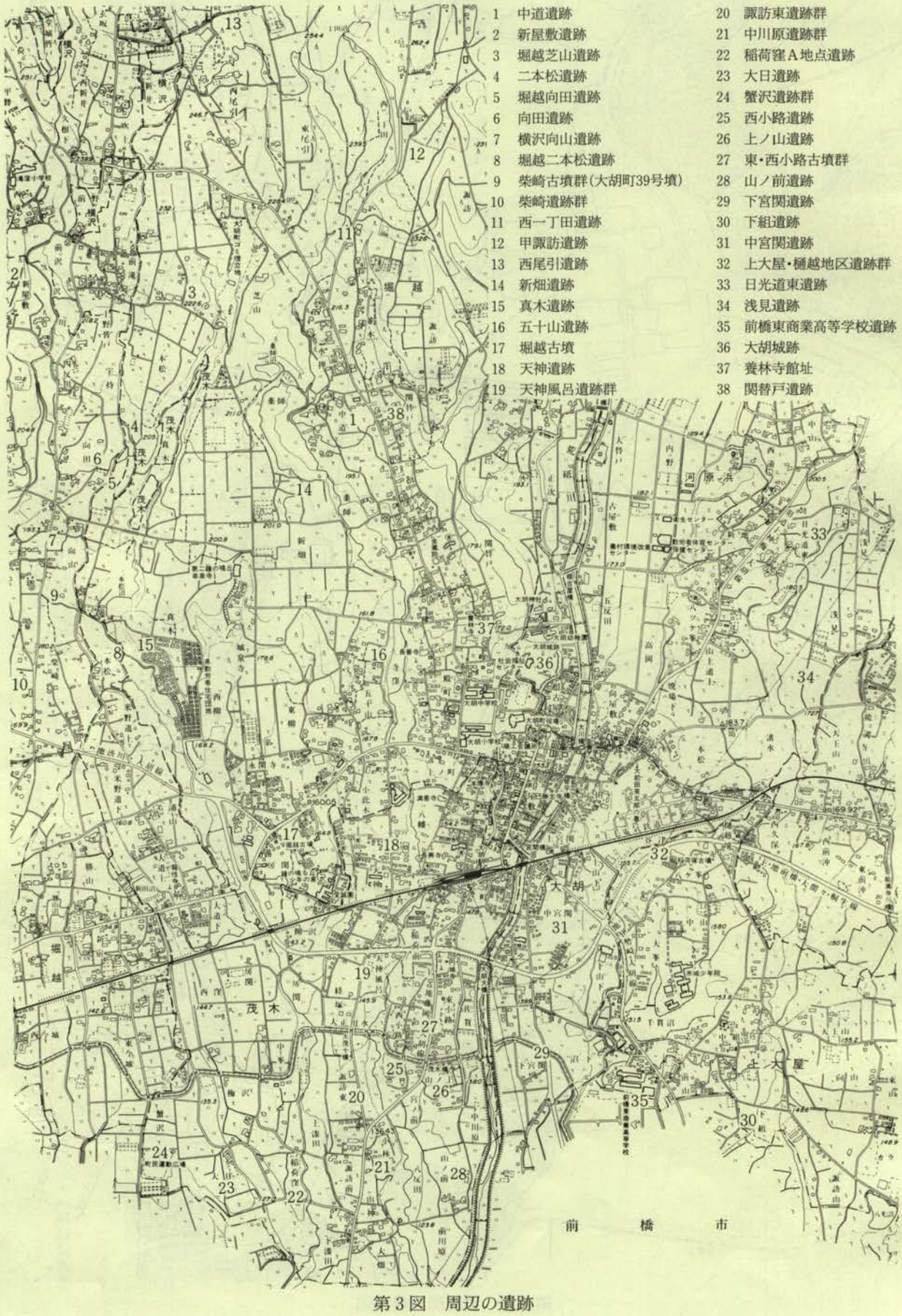
弥生時代では大胡町や北に続く宮城村、西方の富士見村一帯がその存在が希薄な地域である。町内では、再葬墓と考えられる大胡金丸遺跡が知られている。近年では、有孔磨製石鏃や木葉痕の底部が表採されており、集落跡の存在が考えられる地点が想定される。

古墳時代では、５世紀末から７世紀末にかけて古墳が構築され、上ノ山遺跡(26)には、５世紀末～６世紀初頭の竪穴式古墳群があり、県指定史跡の堀越古墳(17)は、截石切組積みの石室で終末期古墳として知

第１図　遺跡の位置図


207.67
204.9
204.35
199.57
203.1
203
202.1
199.1
193.5
192.9
195.0
195.1
199.5
199.2
194.2
堀越中道
堀上稚蚕共同飼育所
関替戸
墓地
堀越公民館

第2図　遺跡周辺現況図


1 中道遺跡
2 新屋敷遺跡
3 堀越芝山遺跡
4 二本松遺跡
5 堀越向田遺跡
6 向田遺跡
7 横沢向山遺跡
8 堀越二本松遺跡
9 柴崎古墳群(大胡町39号墳)
10 柴崎遺跡群
11 西一丁田遺跡
12 甲諏訪遺跡
13 西尾引遺跡
14 新畑遺跡
15 真木遺跡
16 五十山遺跡
17 堀越古墳
18 天神遺跡
19 天神風呂遺跡群
20 諏訪東遺跡群
21 中川原遺跡群
22 稲荷窪A地点遺跡
23 大日遺跡
24 蟹沢遺跡群
25 西小路遺跡
26 上ノ山遺跡
27 東・西小路古墳群
28 山ノ前遺跡
29 下宮関遺跡
30 下組遺跡
31 中宮関遺跡
32 上大屋・樋越地区遺跡群
33 日光道東遺跡
34 浅見遺跡
35 前橋東商業高等学校遺跡
36 大胡城跡
37 養林寺館址
38 関替戸遺跡
大胡
茂木
上大屋
前橋市

第3図　周辺の遺跡

られる。柴崎古墳群(9)の大胡町39号古墳からは、群馬県内でも類例の少ない獅噛環頭大刀が出土している。住居跡の検出は、前橋市と境界を接する上大屋下組(30)で４世紀初頭～に降下したと考えられているＣ軽石が堆積する住居跡が検出された。新畑遺跡(14)・堀越中道遺跡(1)、五十山遺跡(16)、前橋東商業高等学校遺跡(35)では、石田川式期の土器が出土している。５世紀に該等する遺跡には、下宮関遺跡(29)等があり、弘仁９年の地震災害によると考えられる液状化現象が確認されている。６～７世紀に入ると天神風呂遺跡群(19)や中川原遺跡群(21)、稲荷窪Ａ地点遺跡(22)を中心に集落が営まれている。

奈良・平安時代の集落跡としては、本遺跡の他に天神風呂遺跡群(19)・諏訪東遺跡(20)・中川原遺跡群(21)が同じ台地上に続き、他に新畑遺跡(14)・大日遺跡(23)・蟹沢遺跡群(24)・日光道東遺跡(33)・浅見遺跡(34)が発掘調査されている。天神風呂遺跡群では、瓦塔が表採されており寺院跡等の推定地と考えられている。また、民間開発に伴う発掘調査によって浄瓶、朱墨土器等が出土している。生産址としては８世紀代と考えられる須恵器窯、製鉄炉・炭窯等が検出された上大屋・樋越地区遺跡群(32)と製鉄炉・炭窯・住居跡が検出された西尾引遺跡(13)がある。西尾引遺跡の炭窯より出土した木炭の分析では、製鉄燃料材として使用されたことが示唆されている。水田跡としては弘仁９年の地震災害に起因する泥流で埋没した下宮関遺跡(31)がある。真木遺跡(15)では火葬墓が検出されている。

中世の大胡町は、現在の大胡町から西あるいは南西の前橋市を含む旧利根川の河岸段丘に沿った村々を範囲とする大胡郷に属していたと考えられている。この地を本拠地として活躍したのが秀郷流藤原氏の大胡一族である。その居城として大胡城の西方に位置する養林寺(37)の寺域が推定されている。中世の遺跡としては、昭和32年に調査された茂木古墓（26の上ノ山遺跡の南縁）があり、鎌倉時代末期の年号を刻む板碑や骨蔵器が出土し、日光道東遺跡(33)でも古墓が検出されている。山ノ前地区(28)は居館跡と考えられ、15～16世紀前半に埋設された備蓄銭が出土している。

当町の近世は、天正18年の牧野康成公が大胡二万石の城主として入城することで始まる。居城である大胡城(36)は、荒砥川によって侵食された急峻な崖をなす舌状台地に築かれ、本丸と二ノ丸が群馬県指定史跡となっている。城郭部の東崖下には根古屋、西方一帯が殿町の地名を残し、城下町の様相が残る。城下町は、日光裏街道の宿場町として繁栄した。

第II章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要（第４～10図）

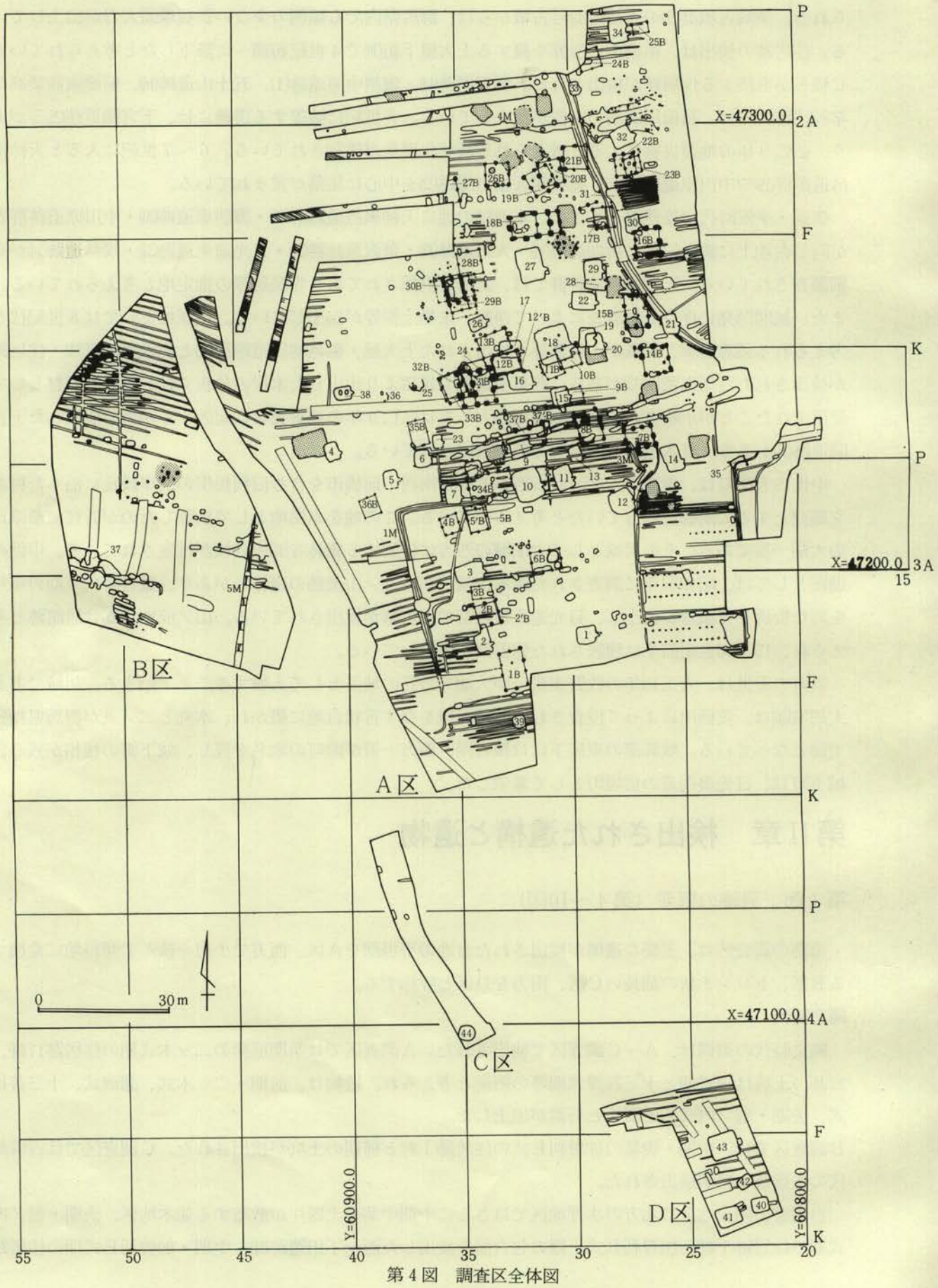
遺跡の調査区は、主要な遺構が検出された台地の平坦部をＡ区、西方で小道を挟んで傾斜地に変換するＢ区、トレンチ状の細長いＣ区、南方をＤ区と呼称する。

縄文時代

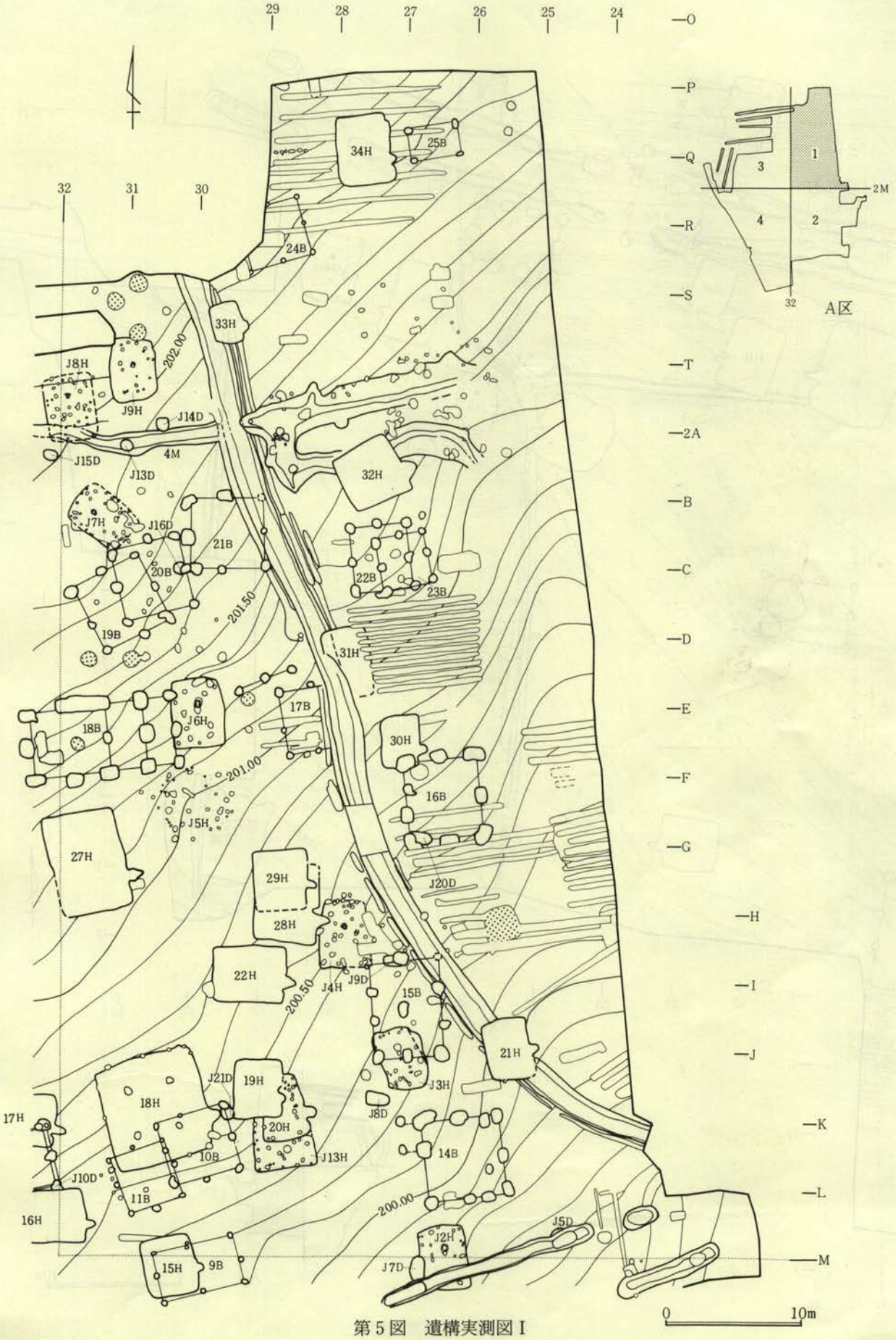
縄文時代の遺構は、Ａ～Ｃ調査区で検出された。Ａ調査区では前期前葉の二ッ木式期の住居跡17軒、22基の土坑は同式期と十三菩提式期等の所産と考えられ。遺物は、前期・二ッ木式、諸磯式、十三菩提式、後期・堀ノ内式の土器片と石器が出土した。

Ｂ調査区では、中期・後葉の加曽利Ｅ式の住居跡１軒と前期の土坑が検出された。Ｃ調査区では古墳時代の住居跡１軒が検出された。

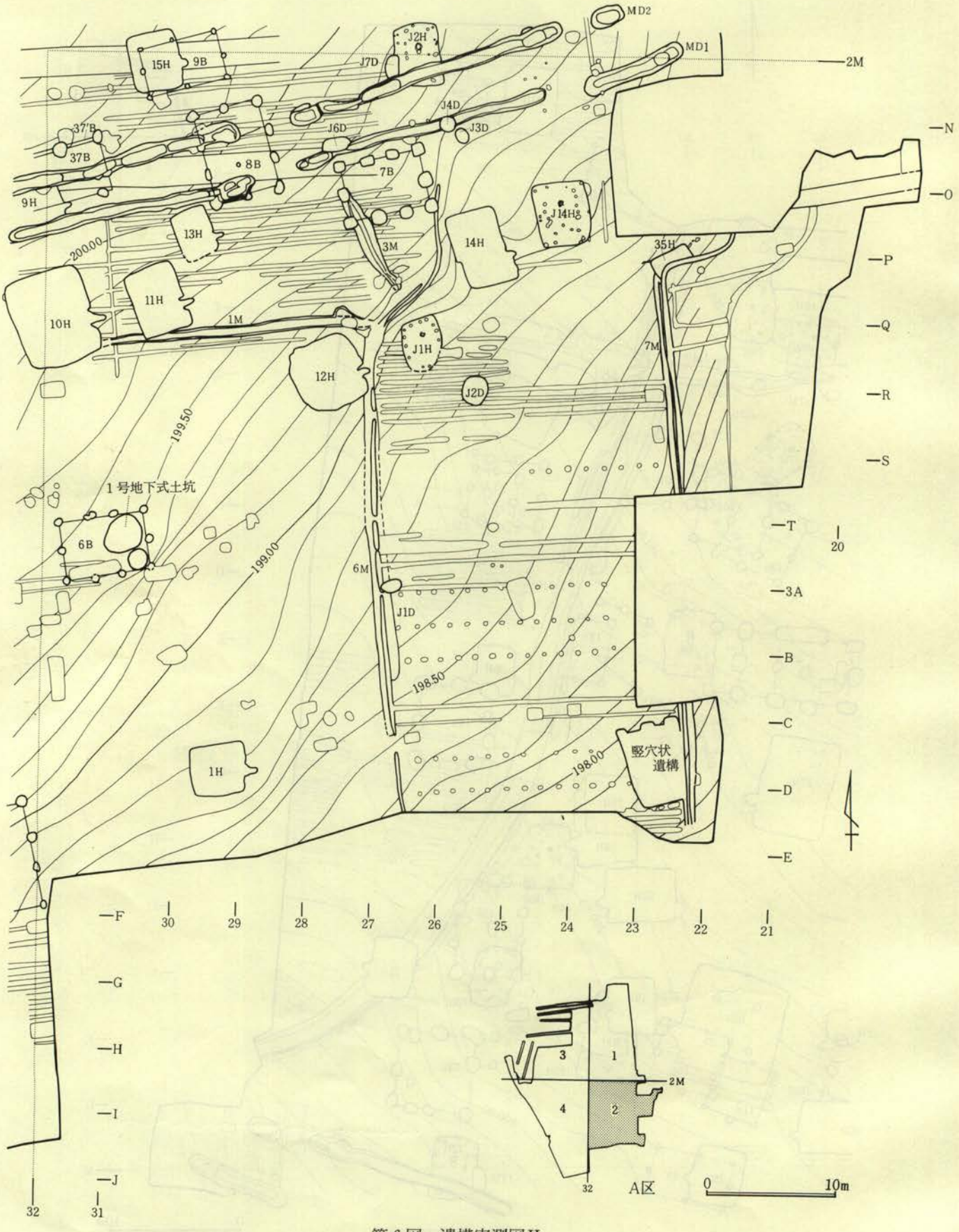
当遺跡の同台地上で北方の水押地区ではさらに中期中葉の土器片が散布する並木地区、後期・堀ノ内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式土器の包含層を検出した西一丁田遺跡(11)、中期・加曽利Ｅ式期の住居跡


X=47300.0
X=47200.0
X=47100.0
Y=60900.0
Y=60800.0
2A
3A
4A
15
P
F
K
A区
B区
C区
D区
0
30m
55
50
45
40
35
30
25
20

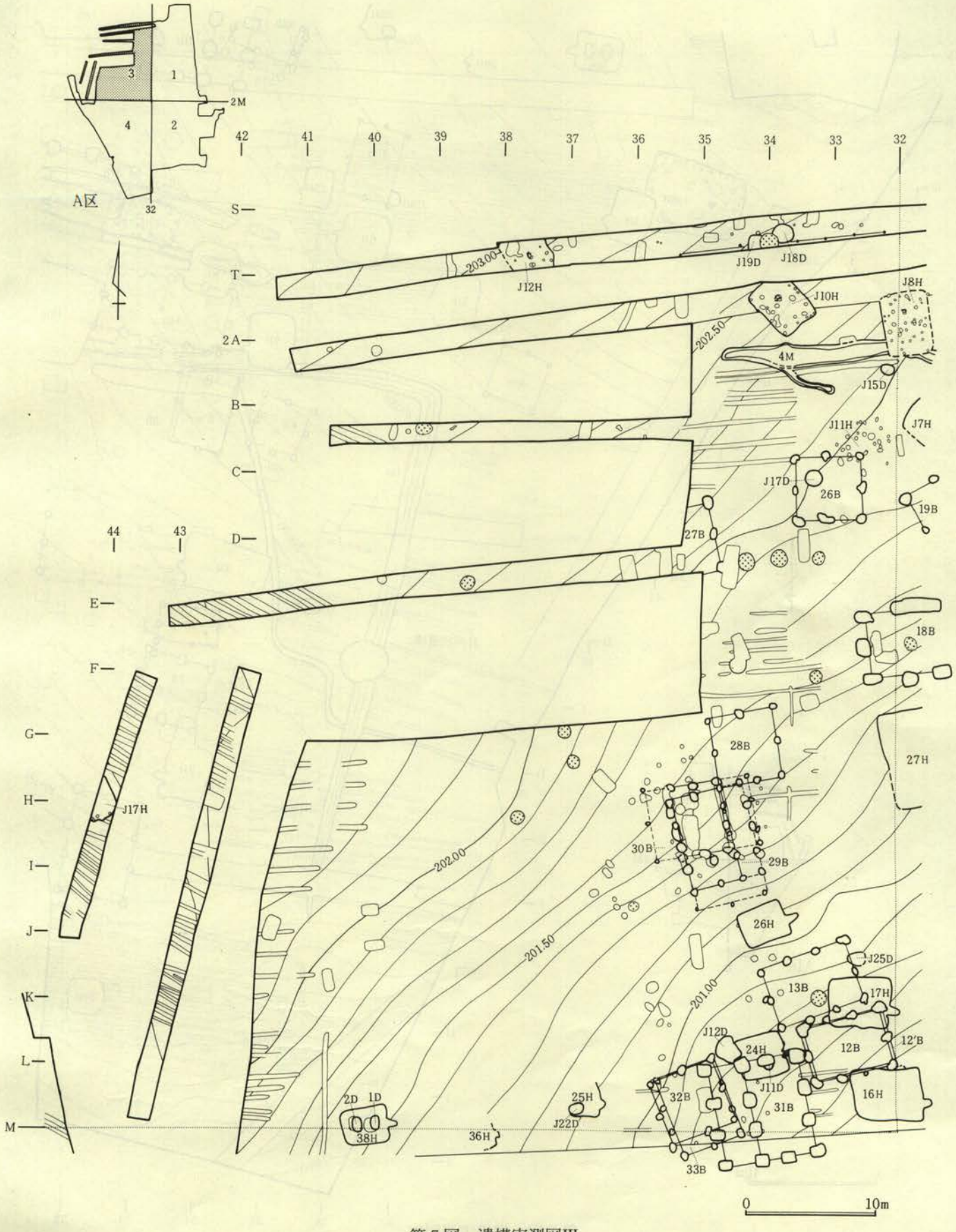
第4図　調査区全体図


29
28
27
26
25
24
32
31
30
O
P
Q
R
S
T
2A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
34H
25B
24B
33H
J8H
202.00
J9H
J14D
4M
J15D
J13D
32H
J7H
J16D
21B
20B
22B
23B
201.50
19B
31H
17B
18B
J6H
30H
201.00
16B
J5H
27H
29H
J20D
28H
22H
J4H
J9D
200.50
15B
21H
J21D
19H
J3H
18H
J8D
17H
20H
J13H
14B
10B
J10D
11B
200.00
16H
J5D
J2H
15H
9B
J7D
1
2
3
4
2M
A区
0
10m

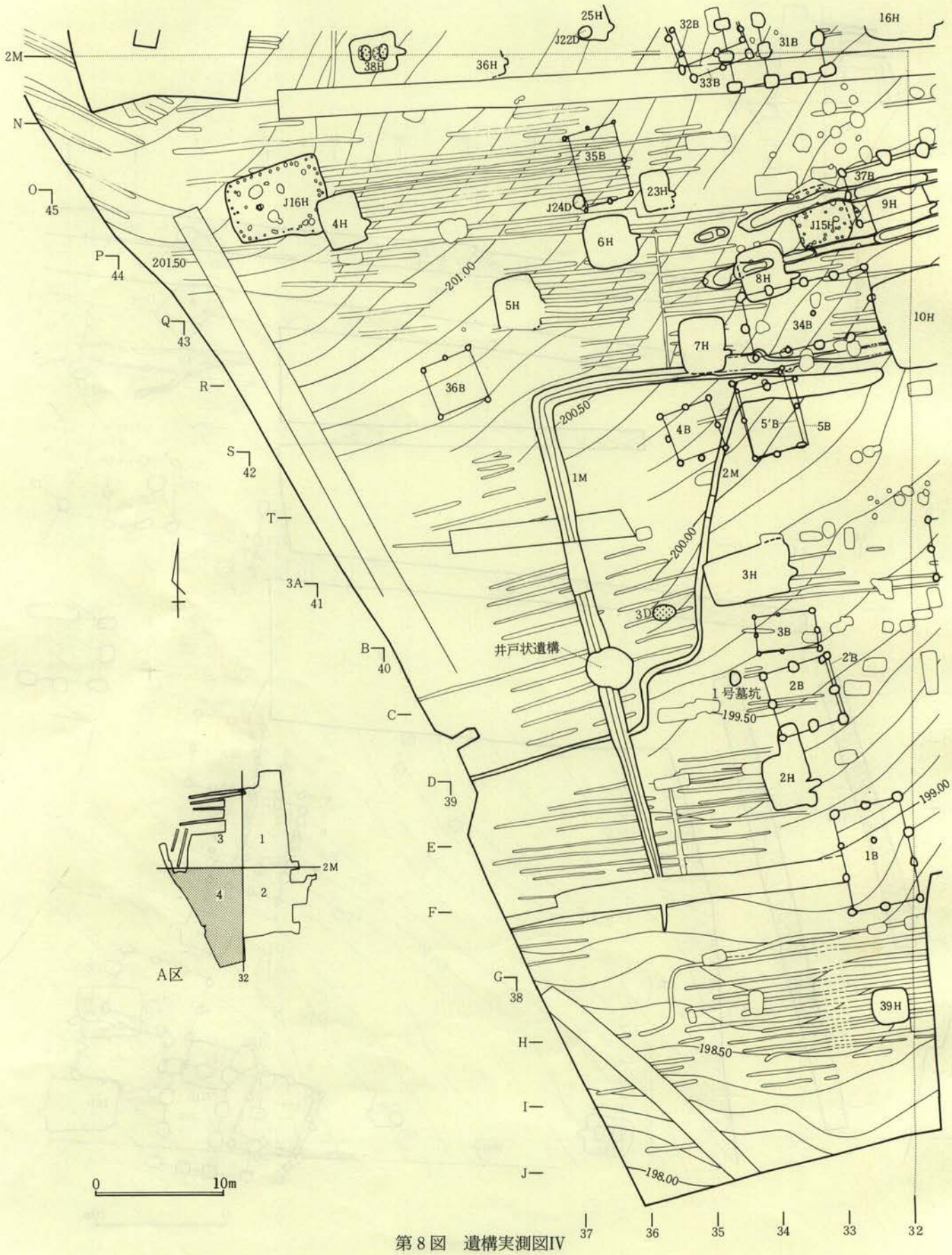
第5図　遺構実測図Ⅰ


MD2
MD1
2M
J2H
15H
9B
J7D
J4D
J6D
J3D
37B
37B
8B
7B
9H
13H
200.00
3M
14H
J4Hg
35H
10H
11H
1M
J1H
7M
12H
J2D
199.50
1号地下式土坑
6B
199.00
6M
J1D
198.50
1H
竪穴状
遺構
198.00
—N
—O
—P
—Q
—R
—S
—T
20
—3A
—B
—C
—D
—E
—F
—G
—H
—I
—J
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
32
31
3
1
2M
4
2
32
A区
0
10m

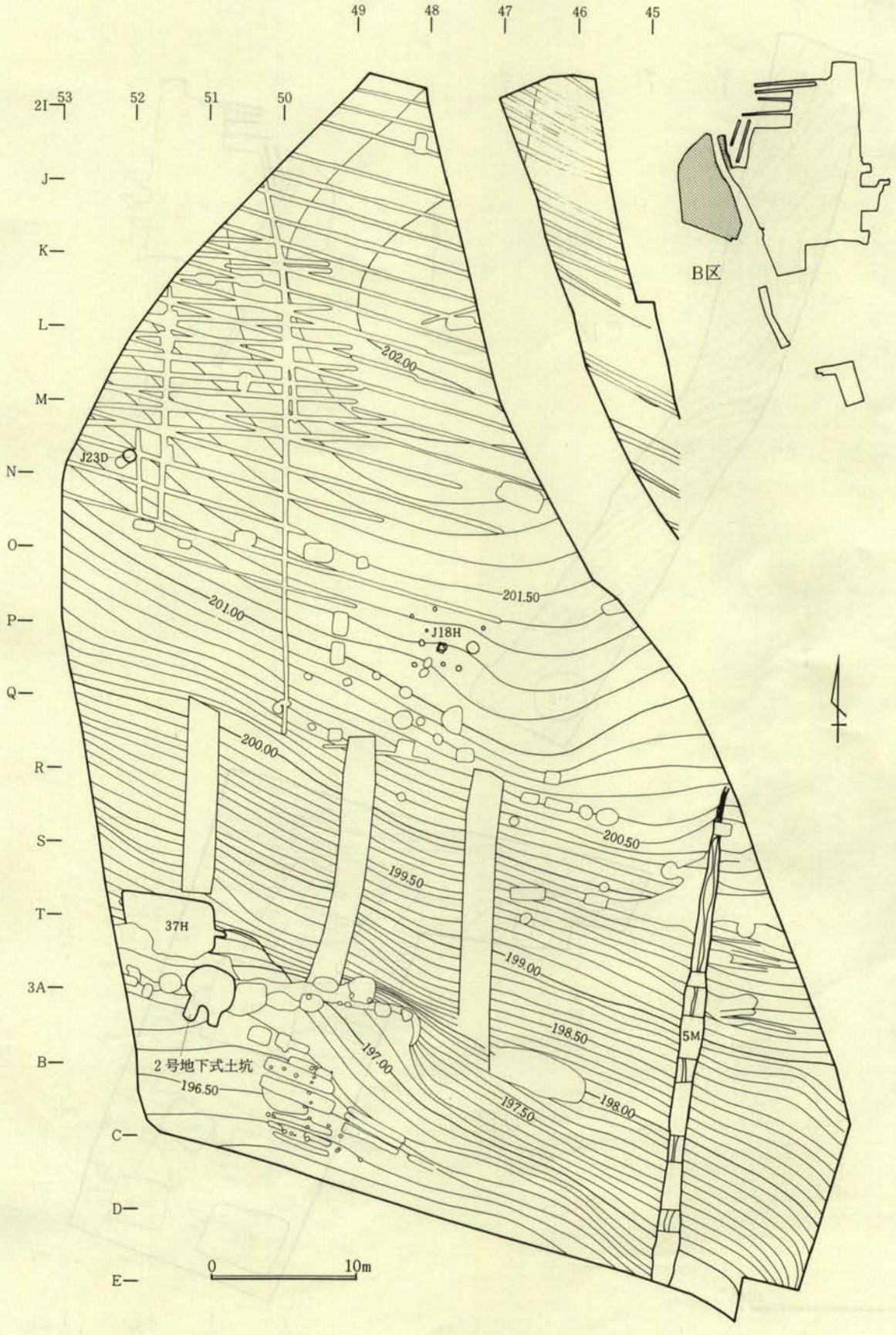
第 6 図　遺構実測図 II



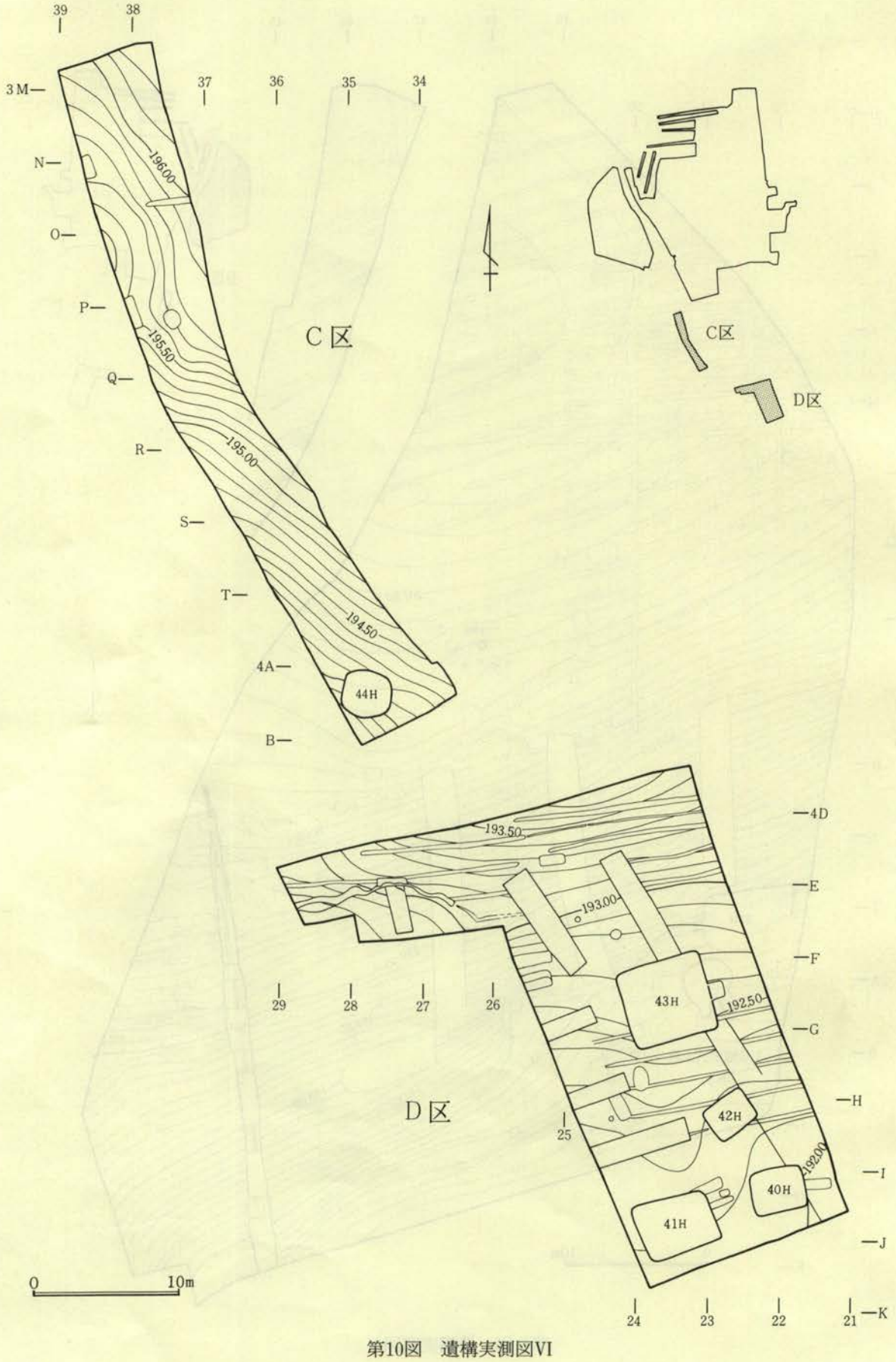
第7図　遺構実測図III


2M
N
O
45
P
44
Q
43
R
S
42
T
3A
41
B
40
C
D
39
E
F
G
38
H
I
J
25H
J22D
32B
31B
16H
38H
36H
33B
35B
37B
J24D
23H
9H
J16H
4H
J15H
6H
201.50
201.00
8H
5H
34B
10H
7H
36B
200.50
4B
5'B
5B
1M
2M
200.00
3H
3D
井戸状遺構
3B
2'B
2B
1号墓坑
199.50
2H
199.00
1B
39H
198.50
198.00
A区
3
1
4
2
2M
32
0
10m
37
36
35
34
33
32

第8図　遺構実測図IV


49
48
47
46
45
2I
53
52
51
50
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
3A
B
C
D
E
B区
202.00
J23D
201.00
201.50
J18H
200.00
200.50
199.50
37H
199.00
198.50
5M
197.00
2号地下式土坑
196.50
197.50
198.00
0
10m

第9図　遺構実測図Ⅴ



第10図　遺構実測図VI

が検出された甲諏訪遺跡⑿、東方には前期の住居跡が検出された関替戸遺跡㊳があり、早期～後期に至る縄文時代の濃密な遺跡地帯である。北西600mには堀越柴山遺跡⑶、さらに1.3kmには新屋敷遺跡⑵が調査され、前期・花積下層～二ッ木式期の貴重な一資料を得ている。

古墳時代

D調査区で4軒の住居跡を検出した。同時期の遺跡は、薬師沼から南方に続く谷地を挟んで新畑遺跡⑭があり、大規模な集落が営まれていた。さらに800m程南下すると五十山遺跡⑯がある。

歴史時代

A調査区に集中して竪穴住居跡等が39軒と掘立柱建物跡38棟（建て替えを含める）・柱穴列・側溝をもつ道路址・礎石遺構・井戸状遺構等が検出された。南方でのトレンチ調査では当時代の遺構は検出されておらず、また北方では民間開発に於ける試掘調査でも検出されていないことから、本集落のほぼ全容が調査されたと考えられる。竪穴住居跡では礎石建ちの竪穴住居跡が注目され、県内では2例目の事例である。掘立柱建物跡は竪穴住居跡とほぼ同じ軒数が検出され、その構造も多種である。側溝をもつ道路址はほぼ集落の中央部を東西に過ぎっている。

遺物では、古代の文字資料として「立」の印文の焼印、「立」等の墨書土器、刻書紡錘車、祭祀儀礼の存在を示すドーマンの刻書がある。鉄製品には県内では初見の把手付鉄鍋等が検出された。

中近世

A・B調査区で地下式土坑2基、土坑墓、道路址等が検出された。道路址は調査前から既存する道路であり、明治年間の地籍図にも記載されており江戸時代には存在したと考えられる古道である。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

(1) 住 居 跡

Ｊ１号住居跡（第12図）

Ａ調査区の２Ｐ・Ｑ―26Ｇ、標高198.90～199.00m付近に検出された。南方部分には東西に走行する耕作溝が住居跡を切っている。南東方向にＪＤ２号土坑が位置する。

形状は、南北に長い隅丸長方形を呈するが、南辺が幅狭となっている。規模は、長軸長3.70m前後、短軸長３mを測る。長軸方向は、Ｎ－９°―Ｗである。掘り込みは、残存の良い北壁部分で30cm前後を測る。柱穴は壁柱穴が13カ所に検出された。

炉址は、中央やや北寄りに配され、南方部を開口して三方をコの字状に縁石で囲み、中央部に偏平な礫を敷いている石囲炉である。

遺物は、炉址の前面(1)とP_{10}の脇(2)に深鉢形土器片が出土。

出土遺物（第12図１～９）

１は直線的に開く胴部下半より内湾し、頚部で縊れる。胴部最大径は22.3cmを測る。縄文はＬＲとＲＬで羽状構成する。６と７の胴部片は、１と同一個体と考えられる。２は緩やかに屈曲する胴部下半片で０段多条のＬＲ・ＲＬを結束し羽状構成する。３はＬＲとＲＬを結束し羽状構成する。４は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状構成する。５はＬＲを施す。８は０段多条のＲＬを施す。９は石鏃形を呈する安山岩質凝灰岩のスクレーパー。

Ｊ２号住居跡（第13図）

Ａ調査区の２Ｌ・２Ｍ―26Ｇ、標高199.75m前後に検出された。南方部分に道路址の北側側溝が当住居跡を切っている。西辺にはＪＤ７号土坑が重複する。

形状は、南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は、長軸長4.80m前後、短軸長3.30mを測る。長軸方向は、Ｎ－４°―Ｗである。掘り込みは、主柱穴は、P_1～P_6の６本柱と考えられる。

炉址は、P_2～P_5の対角線の交点よりやや南に配され、南方を開口し三方を縁石で囲み、中央部分に偏平な石を敷いている石囲炉である。南前面には30×25cmの円形で深さ12cmの掘り込みを設けている。

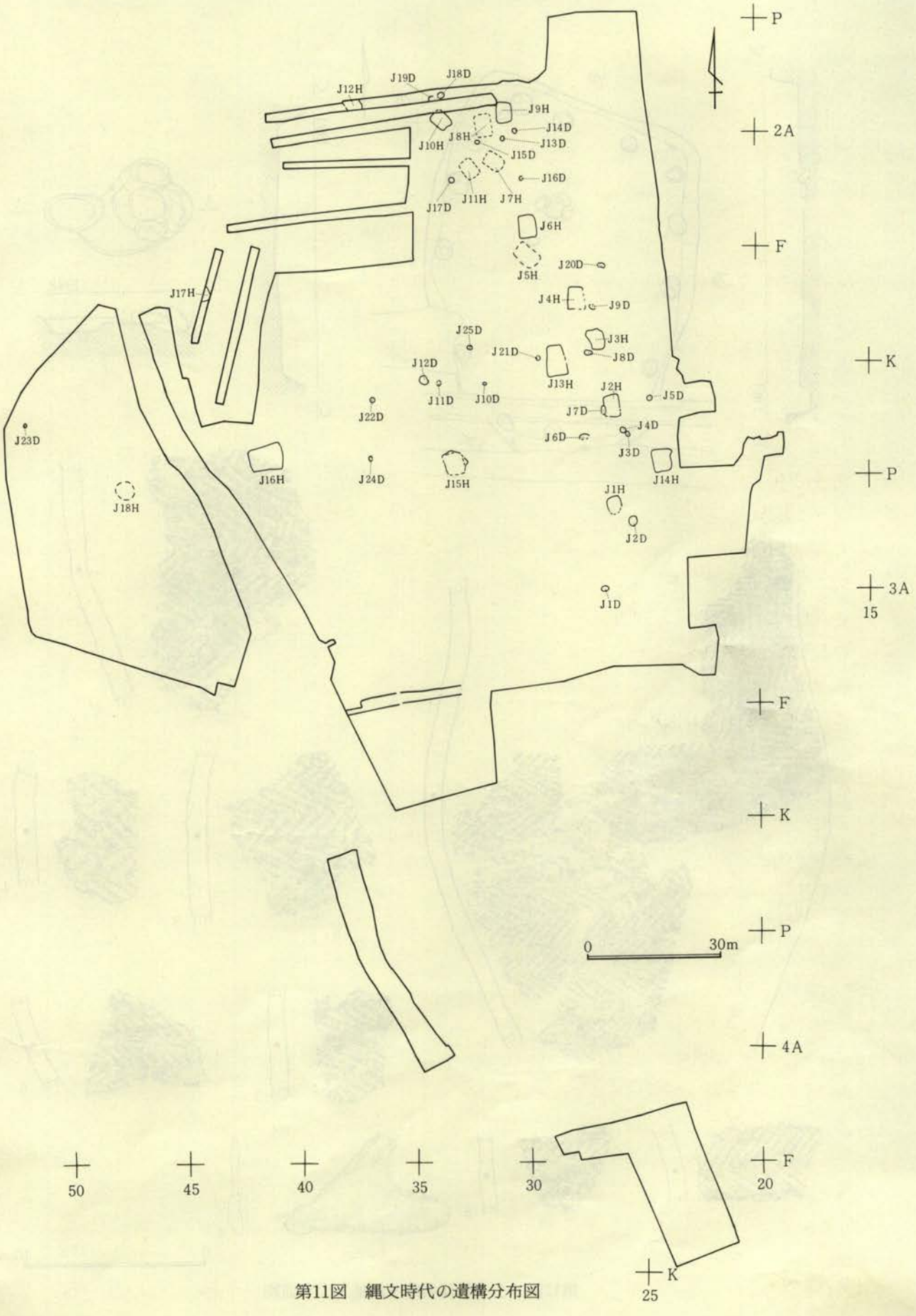
遺物は、北方部分に集中し、P_3からP_4の間に磨石・凹石、P_4の西に深鉢形土器(1)が出土。

出土遺物（第13・14図１～19）

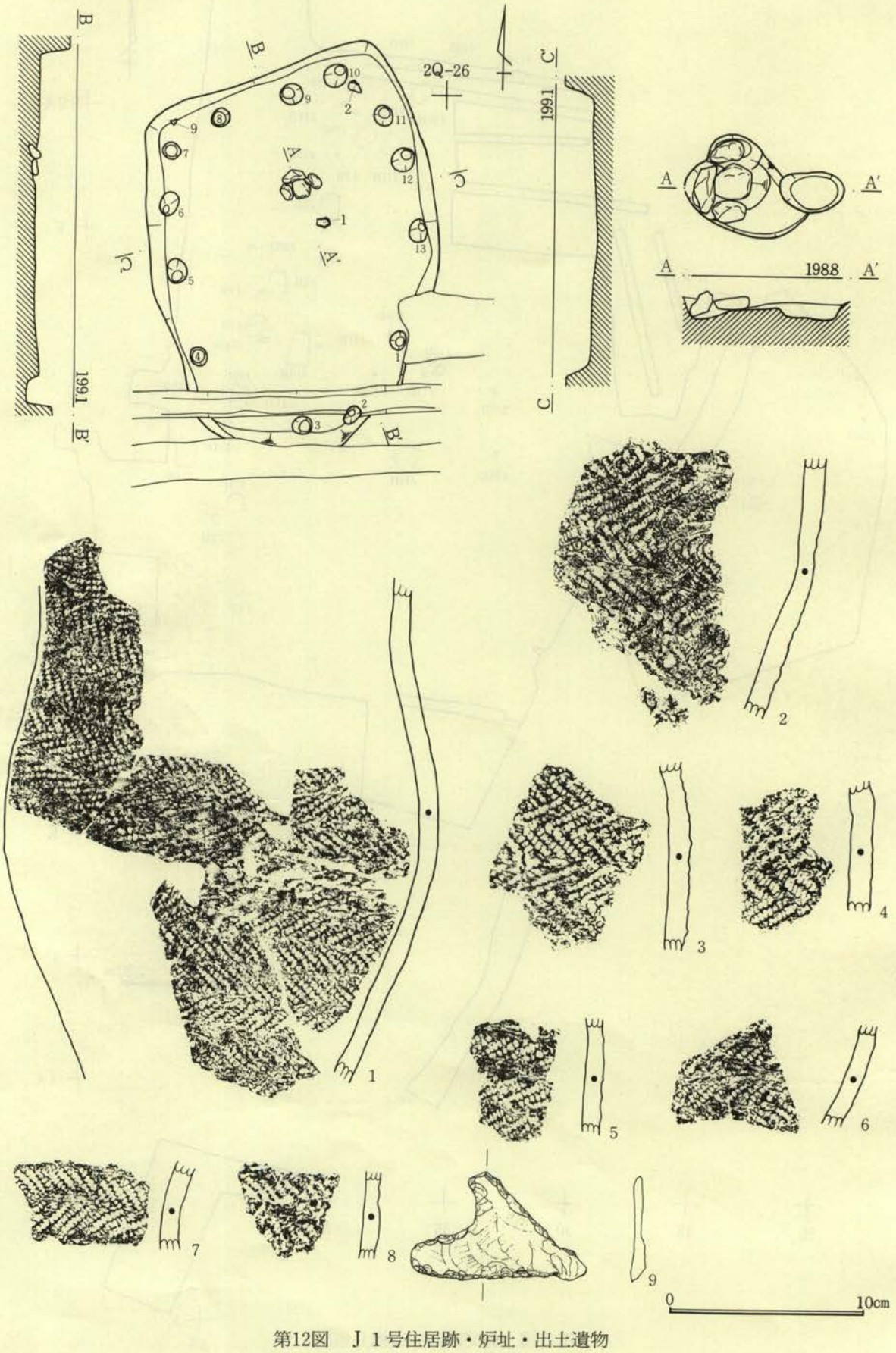
１は４単位の山形突起を呈する深鉢形土器で、器高40.1cm、口径30cmを測る。上げ底の底部より直線的に外反し、胴部中位で屈曲して直立気味とする口縁部に移行する。突起の頂部には横位にスリットを施している。縄文はＲＬ・ＬＲを羽状に施している。

２は直立気味に外反し、口唇部を尖り気味とする波状口縁部片で、刻みを縦位に連続して施した細隆帯を口唇部下と胴部に巡らして文様帯を区画する。波頂下には２重の菱形文が施され、空間部分には円形刺突文と撚糸側面圧痕文（２本１組によるＬとＲ）を併せ施文する。胴部の縄文はRLを施している。

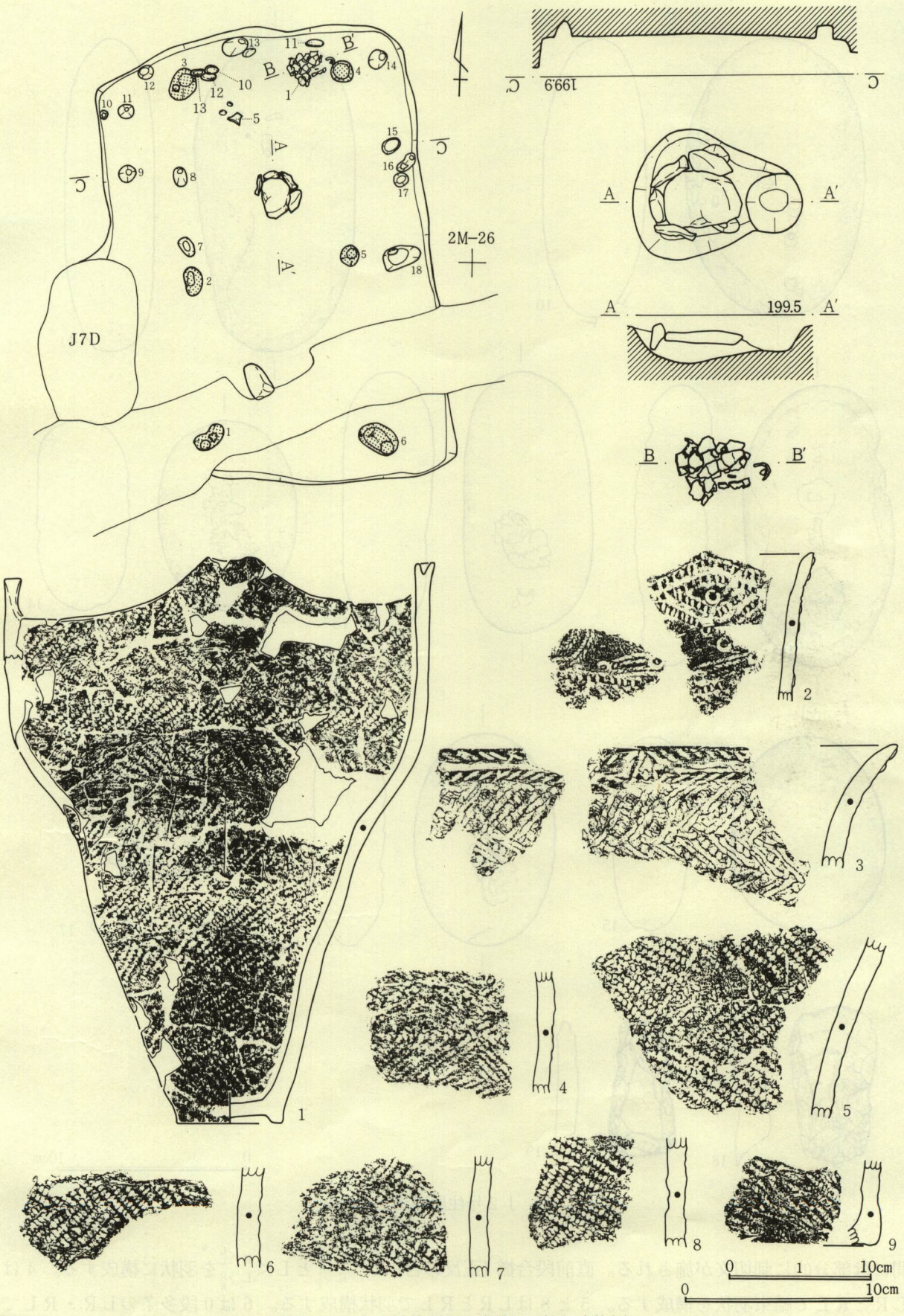
３は外反して開く口縁部片。口唇部を尖り気味とし、口唇部下に２本のやや太めの隆帯を巡らし、上下の隆帯に矢羽状となる刻み目を連続して施し、隆帯を繋ぐ様に刻み目を施す円文が配されている。隆帯



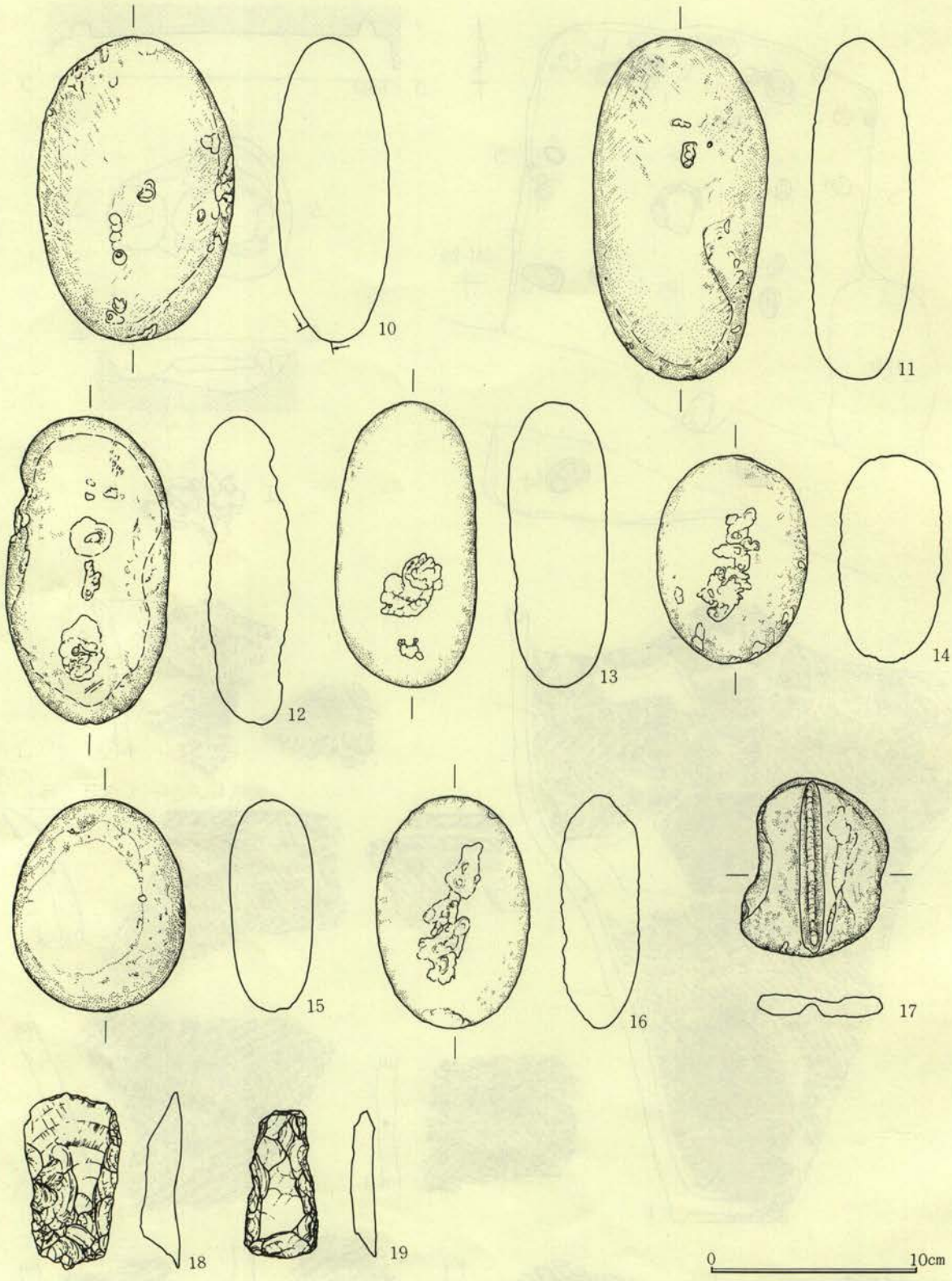
第11図　縄文時代の遺構分布図



第12図　Ｊ１号住居跡・炉址・出土遺物



第13図　Ｊ２号住居跡・炉址・出土遺物(1)



第14図　Ｊ２号住居跡出土遺物(2)

間には部分的に刺切文が施される。直前段合撚（正反の合）Ｒ＜$^{L}_{R}$ $^{<R}_{<L}$とＬ＜$^{R}_{L}$ $^{<L}_{<R}$を羽状に構成する。４はＬＲとＲＬで結束羽状を構成する。５と８はＬＲとＲＬで羽状構成する。６は０段多条のＬＲ・ＲＬで

羽条構成する。7は直前段合撚（正反の合）R＜$^{L}_{R}$とL＜$^{R}_{L}$で羽状構成する。9は上げ底の底部片でRLを施す。

10～16は磨石で石材は輝石安山岩。15を除いて表裏面に敲打痕や逆円錐状の凹孔が施されている。17は砂岩の有孔砥石。18は凝灰質砂岩、19はデイサイトの撥形打製石斧。

Ｊ３号住居跡（第15図）

A調査区の２Ｉ・Ｊ―26・27Gにまたがって、標高200.20m付近に検出された。15号掘立柱建物跡の柱穴（P_7とP_8）が重複し、南東方向にＪＤ８号土坑が隣接する。

形状は、南東～北西方向に長いやや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は、長軸長4.5m前後、短軸長３mを測る。長軸方向は、N―26°―Wである。掘り込みは、10～20cmを測る。柱穴は、21カ所に検出されたが主柱穴は不明である。

炉址は、南方を開口し、三方に磨石等を利用して縁石をコの字状に囲み、中央部に偏平な石を敷いている石囲炉である。遺物は、P_4とP_{13}の間に集中して出土した。

出土遺物（第15～17図１～18）

１は平口縁の深鉢形土器で、口径26cm、残存器高22.3cmを測る。内湾気味に直立する胴部より外反して開く口縁部に移行する。口唇部は平坦とする。縦位の刻み目を施す細隆帯で上下２段の文様帯を構成する。文様は円形刺突文と蕨手状の撚糸側面圧痕文（３本１組）を併せて施文する。胴部の縄文は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状構成する。

２は４単位の波状口縁を呈し、縦位の刻み目を施す２本１組の細隆帯で文様帯を区画する。文様は撚糸側面圧痕文（Ｌ・Ｒの２本１組）で三角形を上下に相対させて菱形文を構成し、左右の端部を蕨手状とする。空間部には円形刺突文を充填する。胴部縄文は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状構成する。３は２と同一個体。

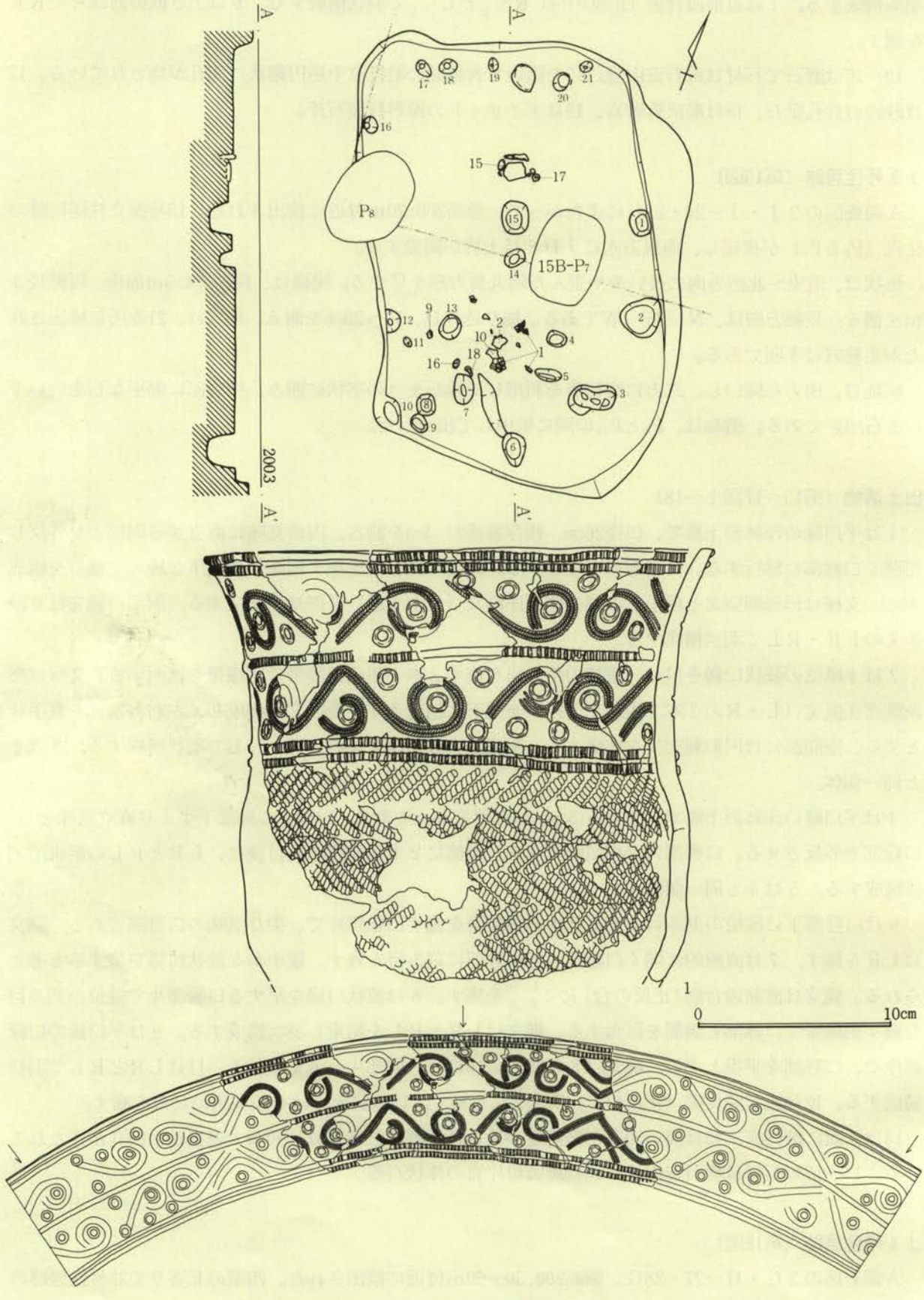
４は平口縁の深鉢形土器で、口径25.5cm、残存器高26cmを測る。内湾する胴部下半より直立気味とし、口縁部を外反させる。口唇部は平坦気味とする。頸部に２本の隆帯を貼付後に、ＬＲとＲＬの結束で羽状構成する。５は４と同一個体。

６は口唇部下に縦位の刻み目を施す２本の細隆帯を施す口縁部片で、尖り気味の口唇部である。縄文はＬＲを施す。７は直線的に開く口縁部片で口唇部に刻み目を施す。緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。縄文は直前段合撚（正反の合）R＜$^{L\ \langle R}_{R\ \langle L}$を施す。８は波状口縁を呈する口縁部片で縦位の刻み目を施す細隆帯で口縁部と胴部を区画する。縄文はＬＲとＲＬを結束し羽状構成する。９は平口縁の口縁部片で、口唇部を平坦とする。縄文は８と同じ。10は３の胴部片と考えられる。11はＬＲとＲＬで羽状構成する。12は直前段反撚（正反の合）Ｌ＜$^{R\ \langle L}_{L\ \langle R}$を施す。13の底部片は０段多条のＲＬを施す。

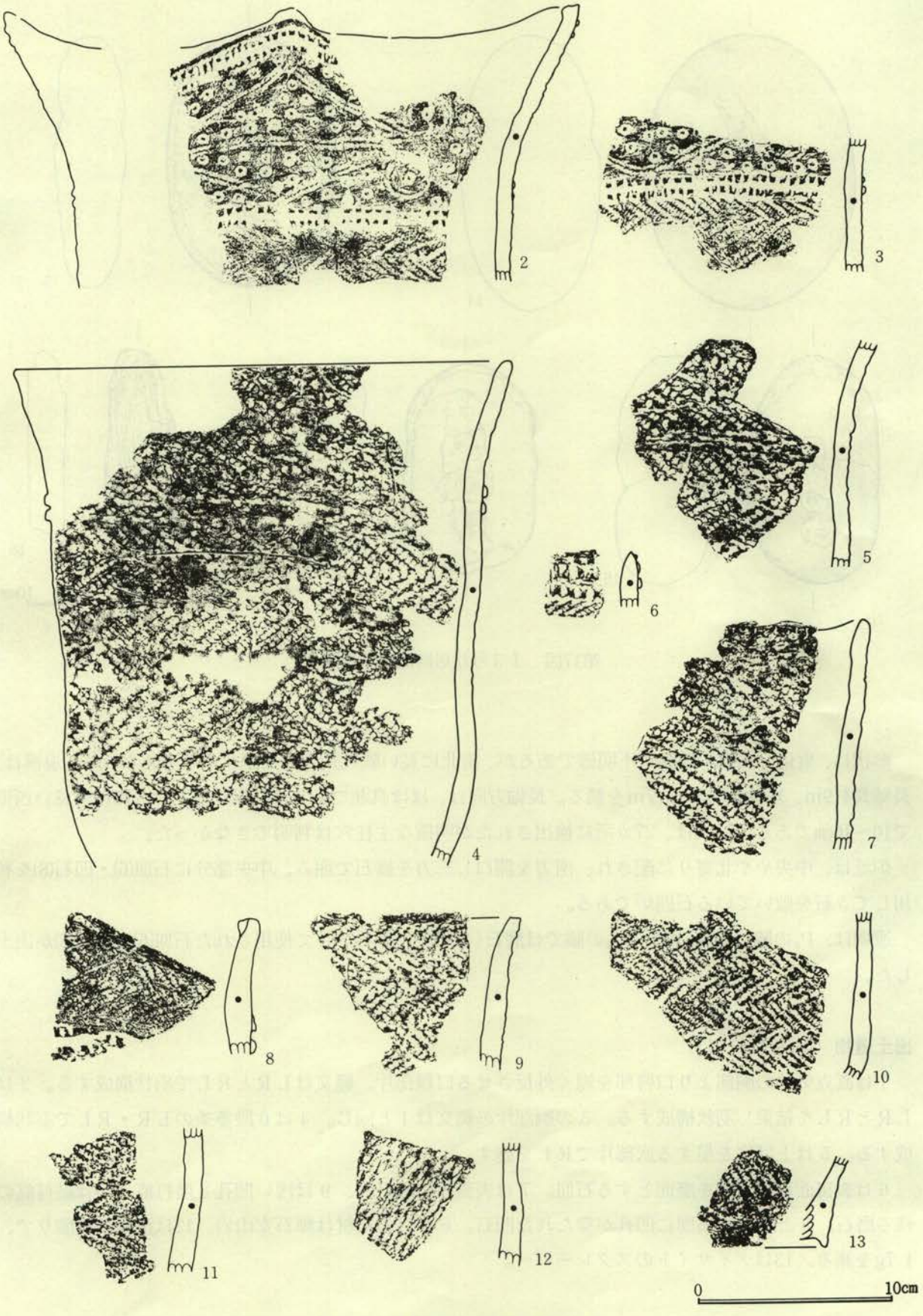
14は片面に敲打痕、15は浅い凹孔と敲打痕が見られる磨石、16・17は凹石で表裏面に凹孔が穿たれている。14～17の石材は輝石安山岩。18は黒雲母片岩の棒状石器。

Ｊ４号住居跡（第18図）

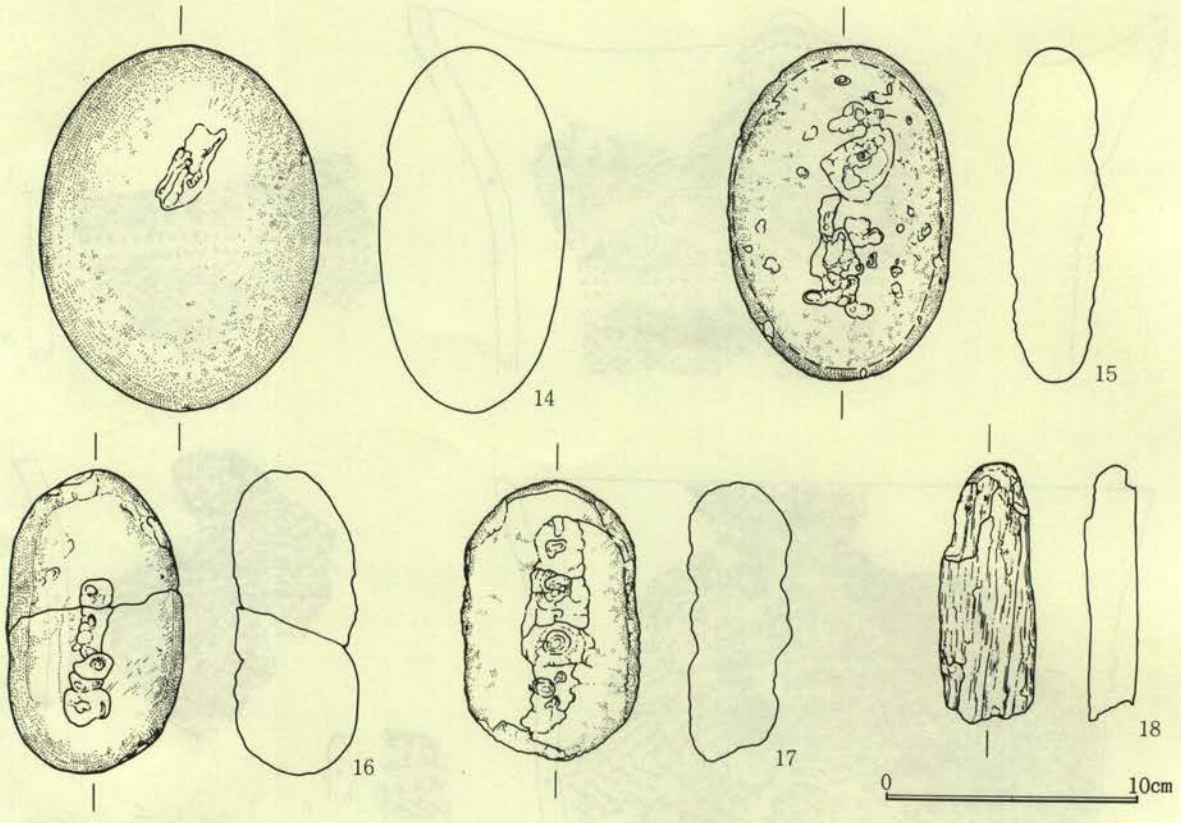
A調査区の２Ｇ・Ｈ―27・28G、標高200.50～60m付近に検出された。西壁の北寄りで28号住居跡のカマド、南東部で15号掘立柱建物跡のP_1が重複し、南東にＪＤ９が隣接する。



第15図　Ｊ３号住居跡・出土遺物(1)



第16図　Ｊ３号住居跡出土遺物(2)



第17図　J 3号住居跡出土遺物(3)

形状は、東辺と北辺の残存が不明確であるが、南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、長軸長4.9m、短軸長3.5～3.7mを測る。長軸方向は、ほぼ真北であろう。掘り込みは、残存の良い西壁で10～16cmである。柱穴は、27カ所に検出されたが明確な主柱穴は判明できなかった。

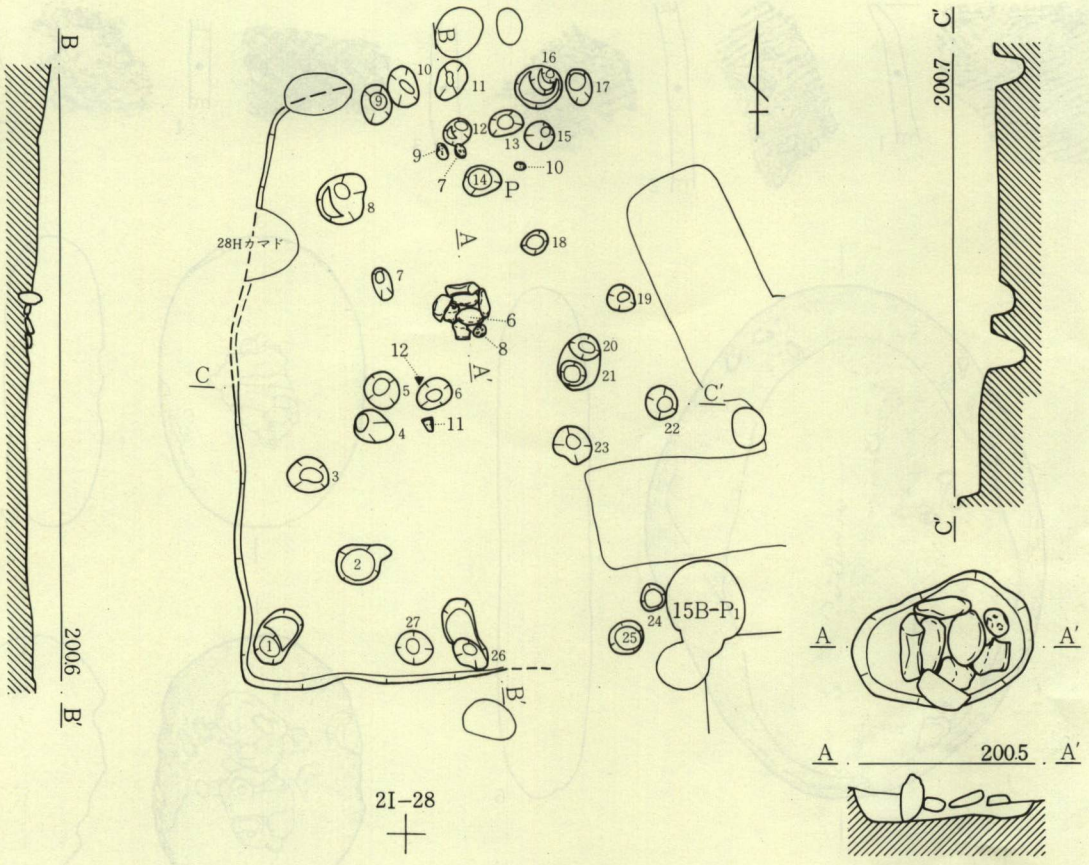
炉址は、中央やや北寄りに配され、南方を開口し三方を縁石で囲み、中央部分に石皿(6)・凹石(8)を利用して5石を敷いている石囲炉である。

遺物は、P_6の脇に装身具(12)、P_{12}の脇では磨石(7・9)、炉石として使用された石皿(6)と凹石(8)が出土した。

出土遺物（第19図1～13）

1は直立気味の胴部より口唇部を短く外反させる口縁部片。縄文はＬＲとＲＬで羽状構成する。2はＬＲとＲＬを結束し羽状構成する。3の胴部片の縄文は1と同じ。4は0段多条のＬＲ・ＲＬで羽状構成する。5は上げ底を呈する底部片でＲＬを施す。

6は表裏面の平坦部を磨面とする石皿。7は表裏面に敲打痕、9は浅い凹孔と敲打痕、10は敲打痕の残る磨石。8と11は表裏面に凹孔が穿たれた凹石。6～11の石材は輝石安山岩。12は滑石の垂飾りで、4.7gを測る。13はデイサイトのスクレーパー。



第18図　Ｊ４号住居跡

Ｊ５号住居跡（第20図）

Ａ調査区の２Ｆ—29・30Ｇ、標高201.00m付近に検出された。北方にＪ６号住居跡、北西に18号掘立柱建物跡が隣接する。

形状は、南東～北西方向に長い長方形と考えられ、長軸方向はＮ—50°—Ｗであろう。主柱穴は、P_1～P_6の６本柱の可能性が考えられる。

炉址は、P_2～P_5の対角線の交点やや西よりに配され、南東方向を開口し、三方を縁石で囲み、中央部に偏平な石を敷いていると考えられる石囲炉である。

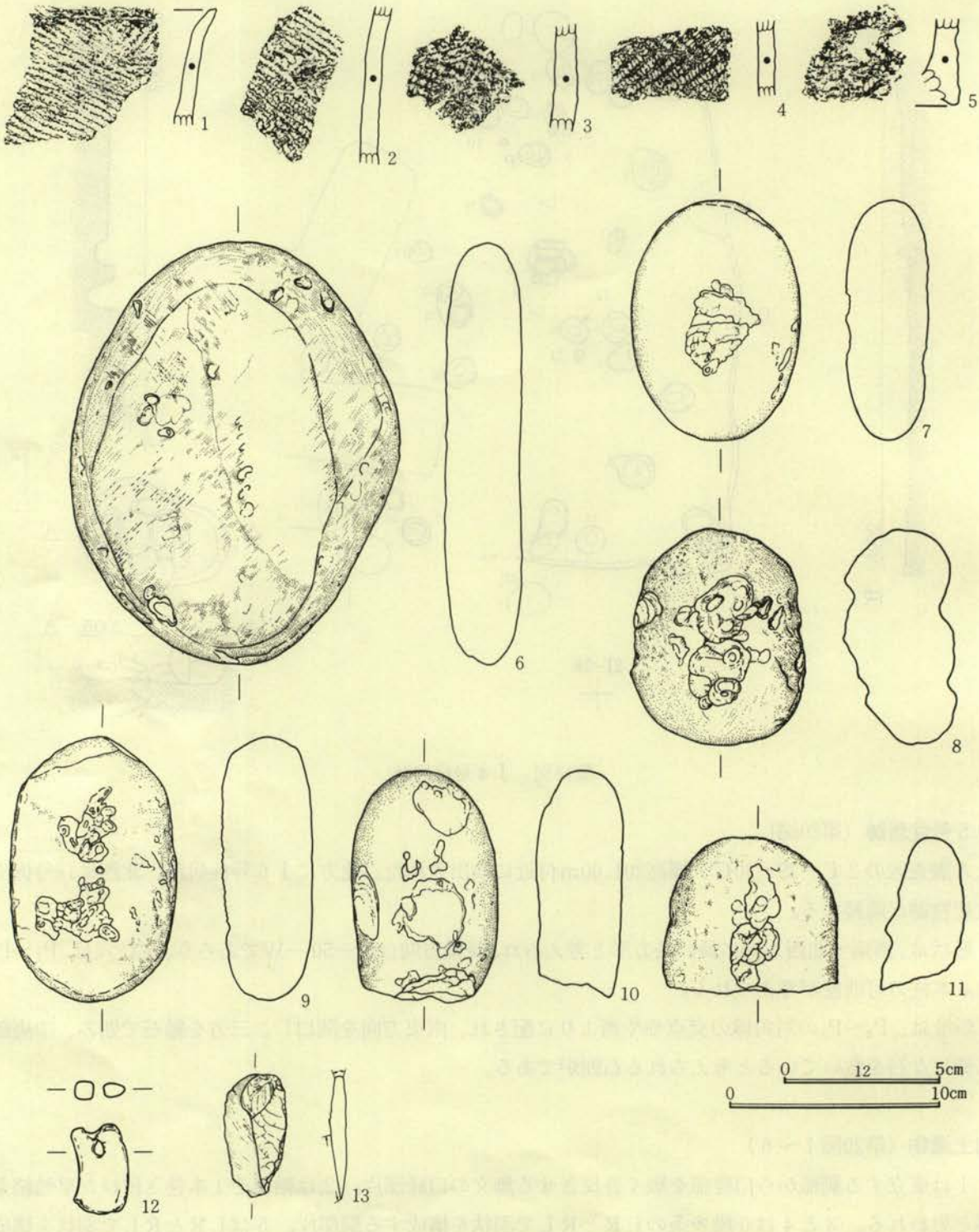
出土遺物（第20図１～６）

１は直立する胴部から口唇部を短く外反させる無文の口縁部片。２は軸縄を１本巻き付けた単軸絡条体と思われる。３と４は０段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する胴部片。５はＬＲとＲＬで羽状を構成する胴部片。

６は片面を磨面として使用した磨石で、表裏面に敲打痕と凹孔が見られる。石材は輝石安山岩。

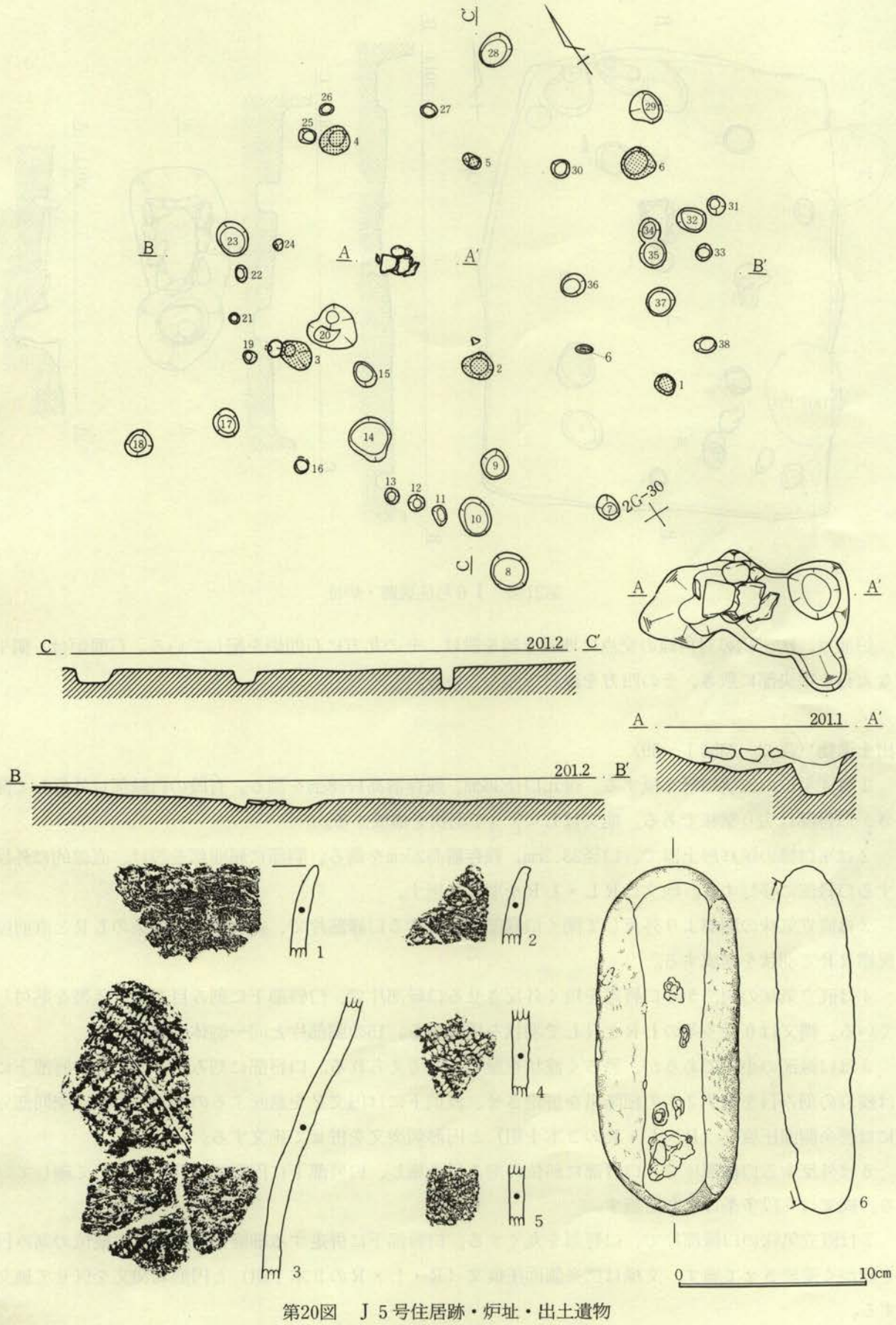
Ｊ６号住居跡（第21図）

Ａ調査区の２Ｄ—29・30Ｇと２Ｅ—29・30Ｇにまたがって、標高201.20m前後に検出された。西辺には18号掘立柱建物跡が重複し、南方にＪ５号住居跡が隣接する。

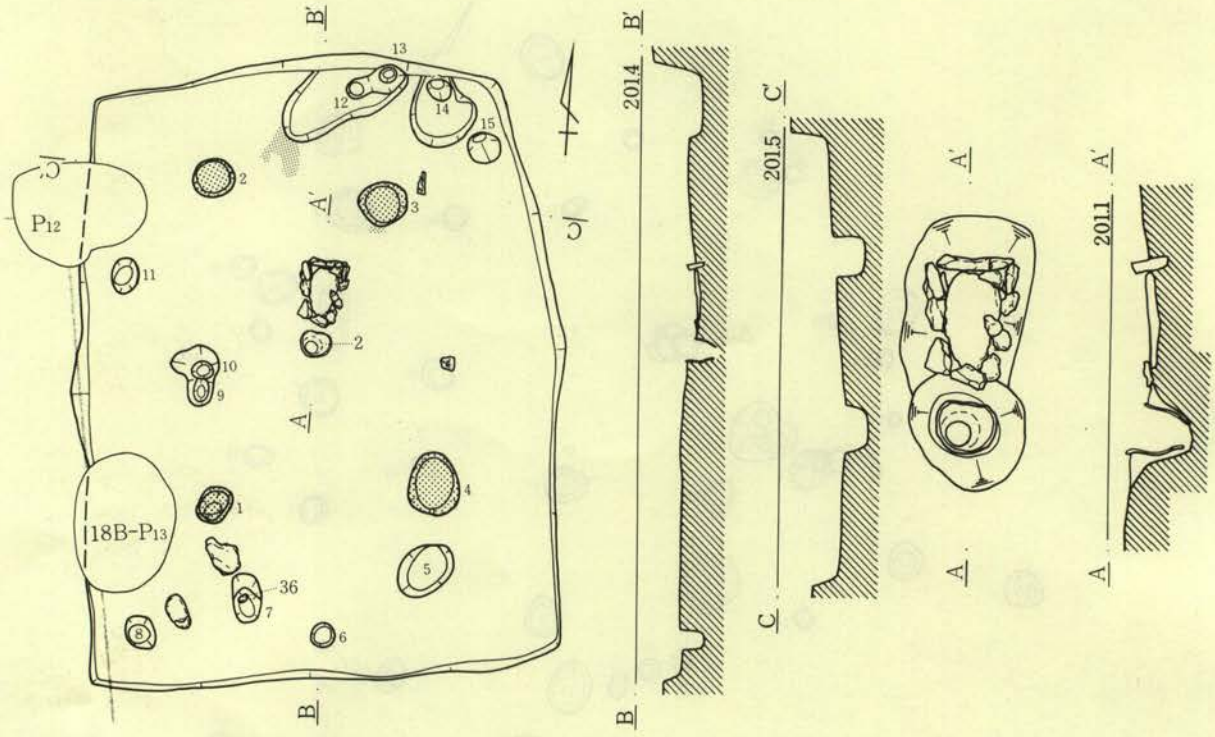


第19図　J 4 号住居跡出土遺物

形状は、南北に長い長方形を呈するが、北辺がやや南辺より短い。東辺の中央部は鈍角にやや突出する。規模は、長軸長4.87m、短軸長3.70m前後を測る。長軸方向は、N－4°－Wである。掘り込みは、7～25cmが残存する。主柱穴はP_1～P_4の4本柱と考えられる。



第20図　Ｊ５号住居跡・炉址・出土遺物



第21図　Ｊ６号住居跡・炉址

炉址は、P_1～P_4の対角線の交点に埋設土器を設け、その北方に石囲炉を配している。石囲炉は、偏平な大石を中央部に敷き、その四方を縁石で囲んでいる。

出土遺物（第22・23図１～39）

１は４単位の波状口縁を呈する。復元口径36cm、残存器高17.8cmを測る。有段の口縁部は外反して開き、口唇部は尖り気味である。地文はＬ＜$^{R\ \langle L}_{L\ \langle R}$で羽状を構成する。

２は平口縁の深鉢形土器で、口径23.2cm、残存器高25cmを測る。胴部に屈曲部を設け、直線的に外反する口縁部に移行する。地文はＲＬ・ＬＲを羽状に施す。

３は直立気味の胴部より外反して開く口縁部に移行する口縁部片で、縄文は０段多条のＬＲと直前段反撚ＲＲで羽状を構成する。

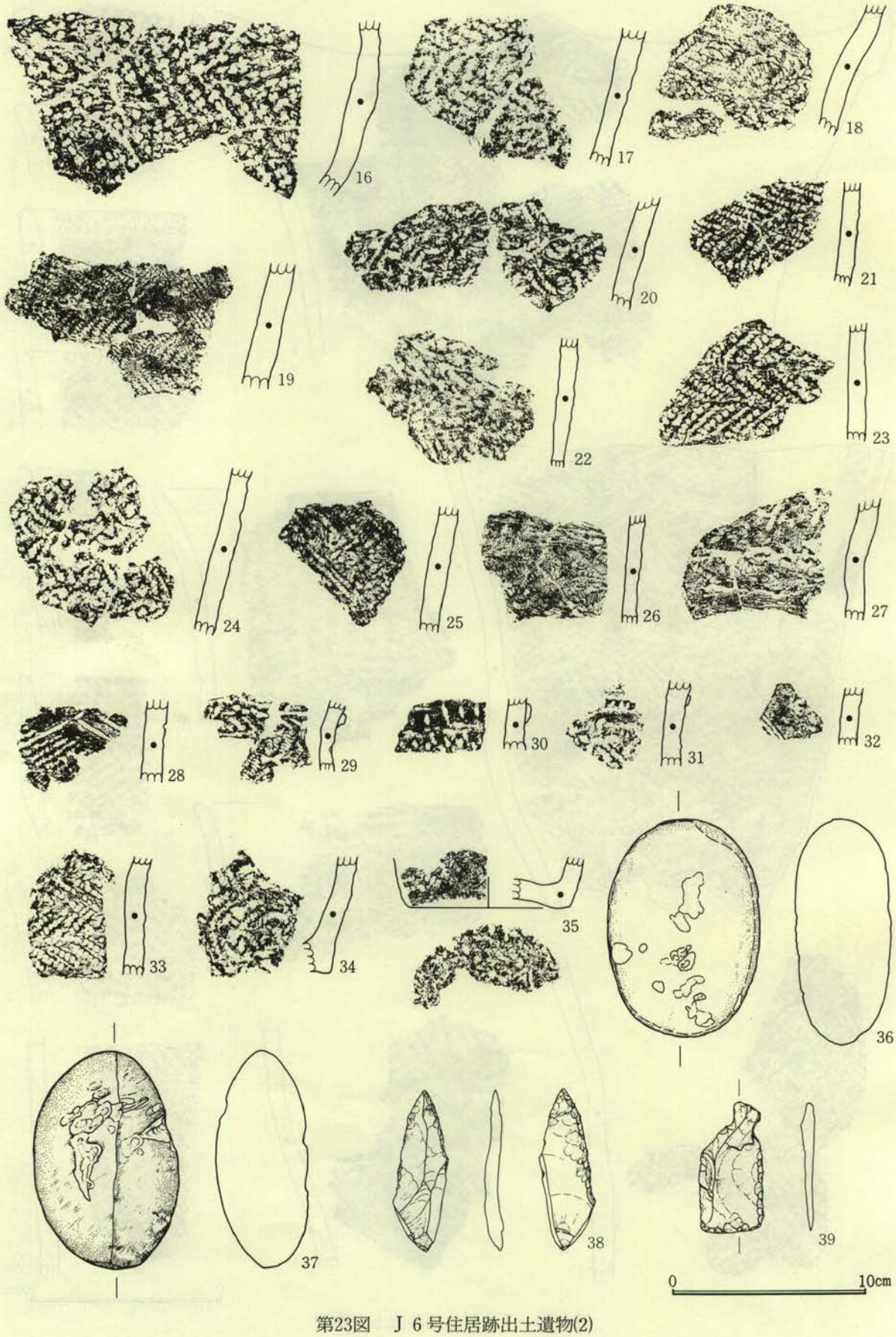
４は直立気味の胴部から口唇部を短く外反させる口縁部片で、口唇部下に刻み目を施す隆帯を貼付している。縄文は０段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する。15の胴部片と同一個体と思われる。

５は口縁部の小片であるが、恐らく波状を呈すると考えられる。口唇部に刻み目を施し、口唇部下には縦位の刻み目を施す２本の細隆帯を併走させ、波頂下には円文？を意匠するのであろうか。空間部分には撚糸側面圧痕文（Ｒ・Ｌ・Ｒの３本１組）と円形刺突文を併せて施文する。

６は外反する口縁部片で、口唇部に斜位の刻み目を施し、口唇部下に円形刺突文を連続して施している。縄文は０段多条のＲＬを施す。

７は直立気味の口縁部片で、口唇部を丸くする。口唇部下に併走する細隆帯を貼付し、縦位の刻み目を細かく連続させて施す。文様は撚糸側面圧痕文（Ｒ・Ｌ・Ｒの３本１組）と円形刺突文を併せて施文する。

第22図　Ｊ６号住居跡出土遺物(1)



第23図　J 6 号住居跡出土遺物(2)

8の口縁部片は0段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する。9は直前段合撚Ｒを施す。10はＬＲ、11と12の口縁部片はＬＲとＲＬで羽状構成する。13の胴部片は0段多条の結節Ｌ・Ｒで羽状を構成する。14は0段多条のＬＲ・ＲＬ、16はＬＲＬとＲＬＲ、17はＬＲとＲＬで羽状を構成する胴部片。18は0段多条のＬＲを施す。19は0段多条のＬＲ・ＲＬ、20と24は0段多条の結節Ｌ・Ｒ、21は0段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する。22はＲＬを施す。23は0段多条のＲＬとＬ＜$^{R}_{L}$＜$^{L}_{R}$で羽状を構成する。25はＬＲとＲＬで結束し羽状を構成する。26、27は不明。28は矢羽状に刺切文を施す。縄文はＬＲとＲＬで羽状を構成する。29はやや太めの隆帯上に斜位の刻み目を施し、隆帯に沿って円形刺突文を連続する。縄文は0段多条のＬＲを施す。30は太めの隆帯に縦位の刻み目を施す。縄文は0段多条のＬＲＬを施す。31は細隆帯に縦位の刻み目を施す。縄文はＲＬを施す。32は7と同一個体。33はＬＲとＲＬ、34は0段多条の結節Ｌ・Ｒで羽状を構成する。35はＲＬを施す底部片。

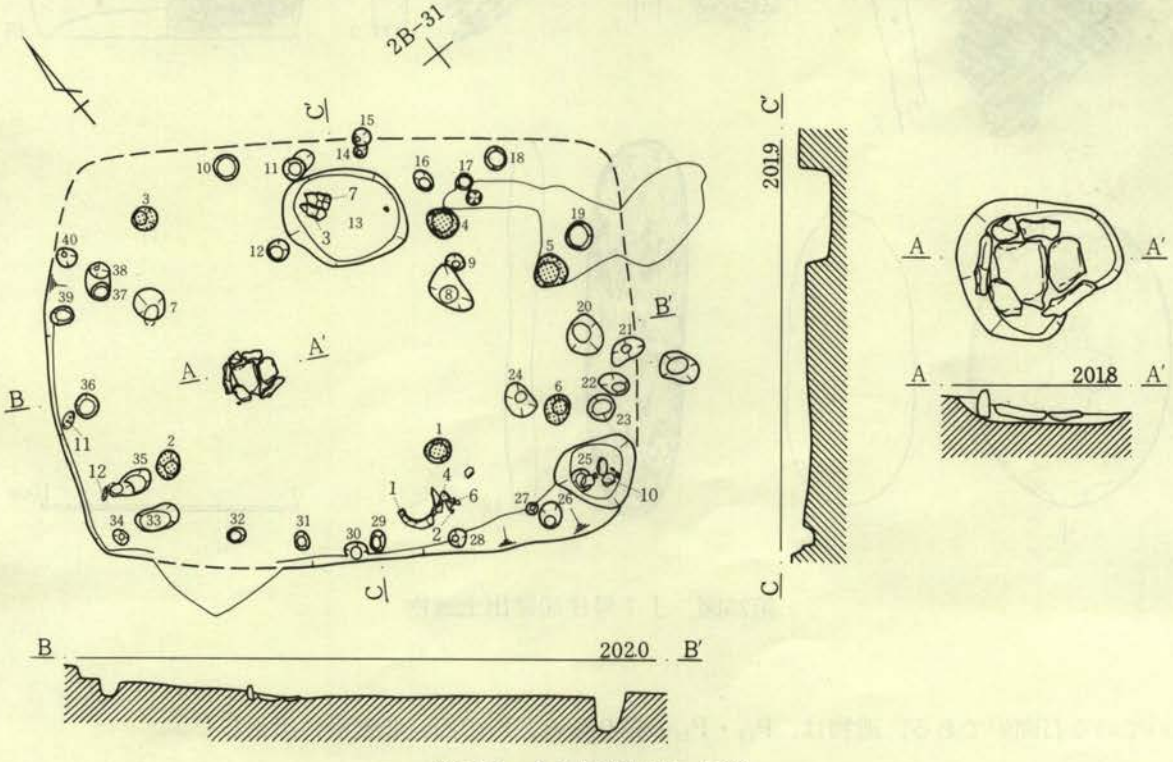
36・37は輝石安山岩質の磨石で36には表裏面に浅い凹孔と敲打痕、37は。38はデイサイトのスクレーパー。39はホルンフェルスの縦型石匙。

Ｊ７号住居跡（第24図）

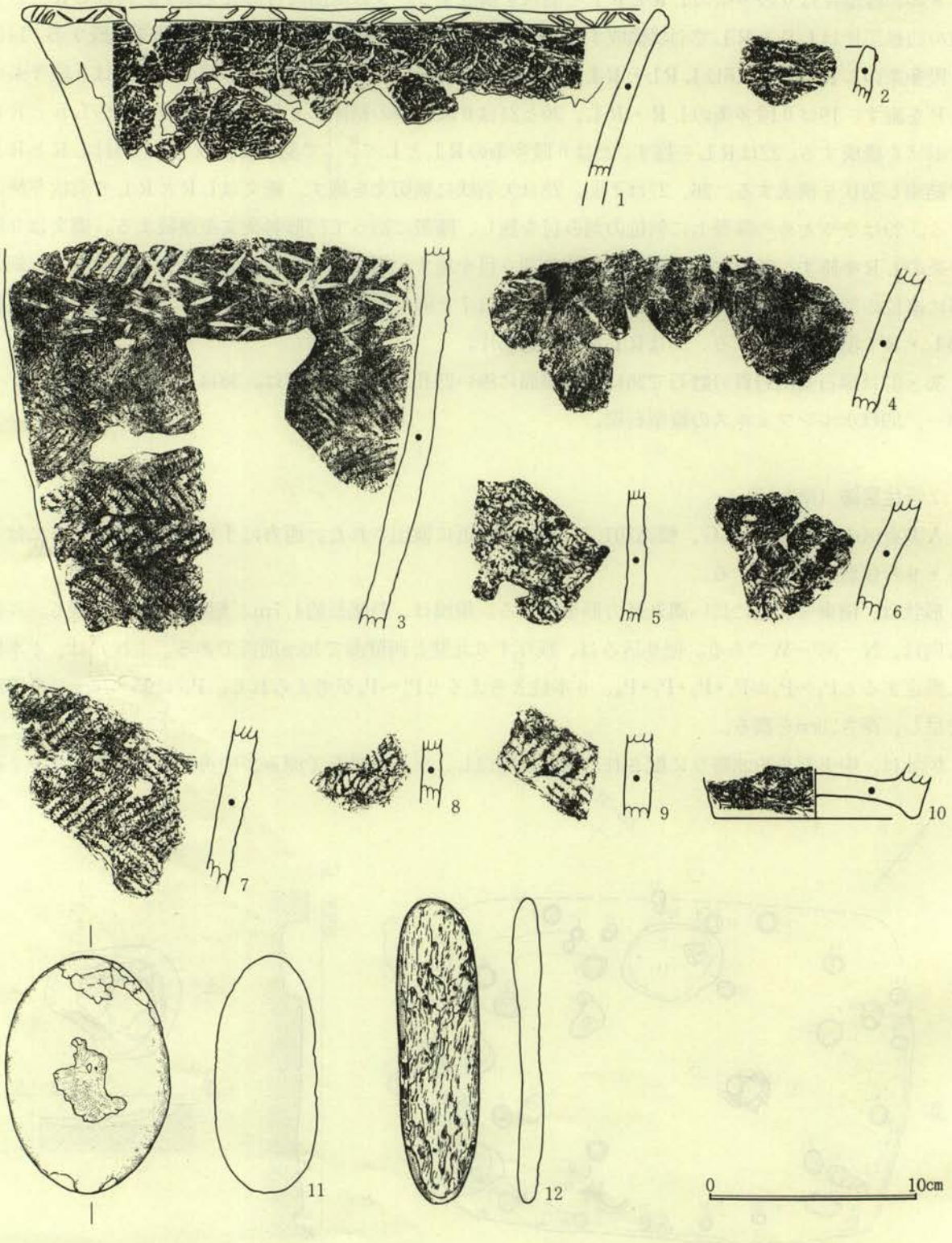
Ａ調査区の２Ａ・Ｂ－31Ｇ、標高201.75～.90m付近に検出された。西方にＪ11号住居跡、北方にはＪ８・９号住居跡が隣接する。

形状は、南東～北西に長い隅丸長方形を呈する。規模は、長軸長約4.7m、短軸長3.4mを測る。長軸方向は、Ｎ－53°－Ｗである。掘り込みは、残存する北壁と西壁部で10cm前後である。主柱穴は、４本柱と推定するとP_1～P_4かP_1・P_2・P_7・P_8、６本柱と考えるとP_1～P_6が考えられる。P_{13}は95×76cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

炉址は、中央部やや北寄りに配され、南方を開口し、三方を縁石で囲み、中央部分に偏平な礫を２石



第24図　Ｊ７号住居跡・炉址



第25図　Ｊ７号住居跡出土遺物

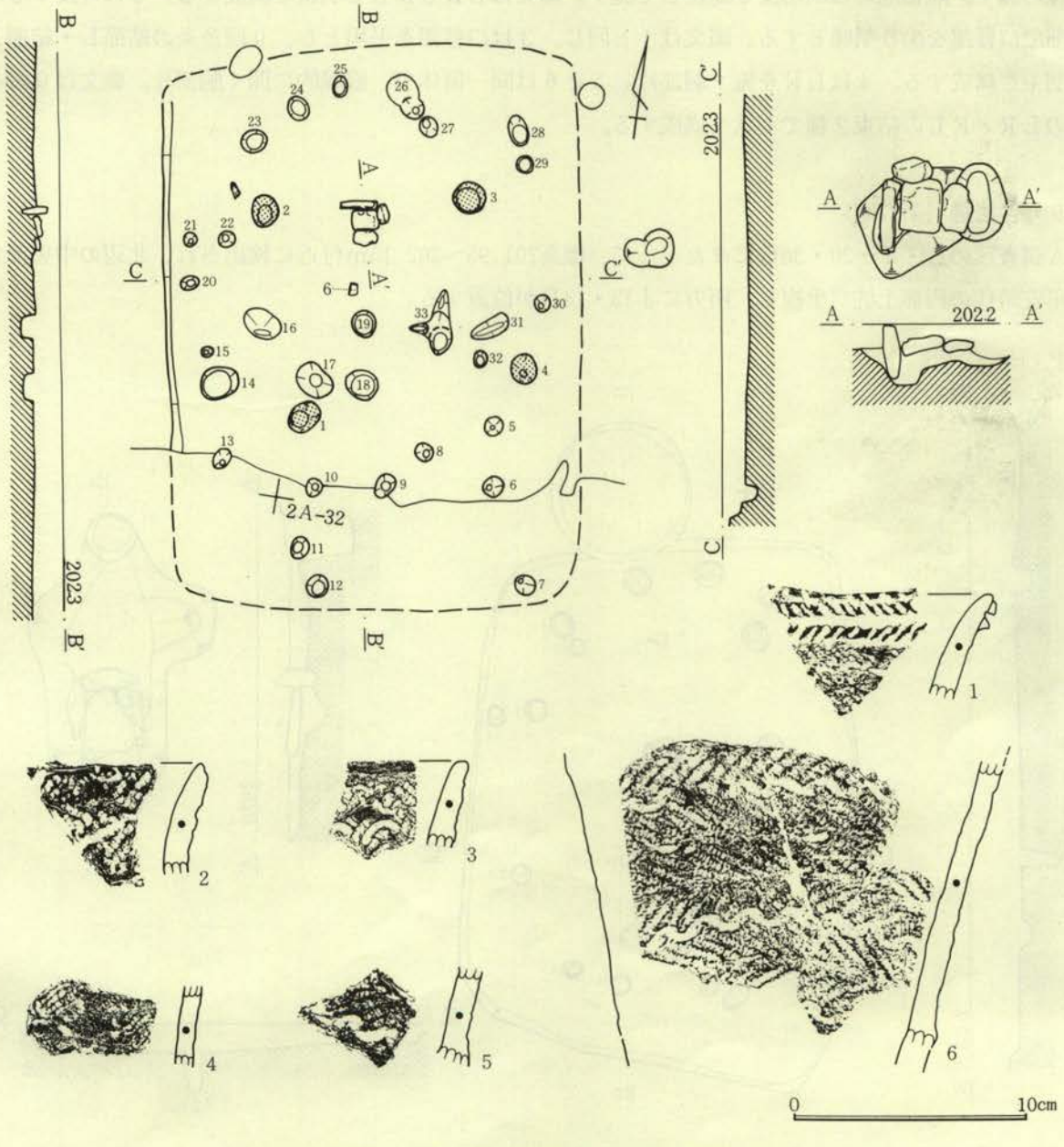
敷いている石囲炉である。遺物は、P_{13}・P_{25}の掘り込み、P_1の西、北壁沿に出土した。

出土遺物（第25図１～12）

１は平口縁を呈し、口径30.7cm、残存器高8.5cmを測る。外反して直線的に開く口縁部片で、肥厚する口縁に刺切文を矢羽状に施す。２は口唇部を僅かに肥厚させる口縁部片で、口唇部に僅かであるが矢羽根状とする刺切文が見られる。３は直立気味に内湾する胴部片で、上位には刺切文を矢羽根状気味に施す。縄文は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状を構成する。７は同一個体。４と６は１と同一個体と考えられ、結節Ｒを施す。５は結節のＬを施す。８は０段多条の結節Ｌ・結節Ｒで羽状を構成する。９は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状を構成酢。10は上げ底を呈する底部片。

11は輝石安山岩の磨石で端部と表裏面に細かい敲打痕が見られる。12は雲母片岩の棒状石器。

Ｊ８号住居跡（第26図）



第26図　Ｊ８号住居跡・炉址・出土遺物

A調査区のT－31・32Gと2A－31・32Gにまたがって、標高202.10m前後に検出された。南辺には4号溝が重複し、北東方向にJ9号、西方にJ10号住居跡が隣接する。

形状は、西壁が10cm前後残存するのみで、東・南・北辺の壁の立ち上がりは明確でないが、南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、長軸長4.90m、短軸長3.55mと推定される。長軸方向は、残存する西壁からN－9°－Wである。主柱穴は不明確であるが、深度と配置からP_1～P_4と考えられる。

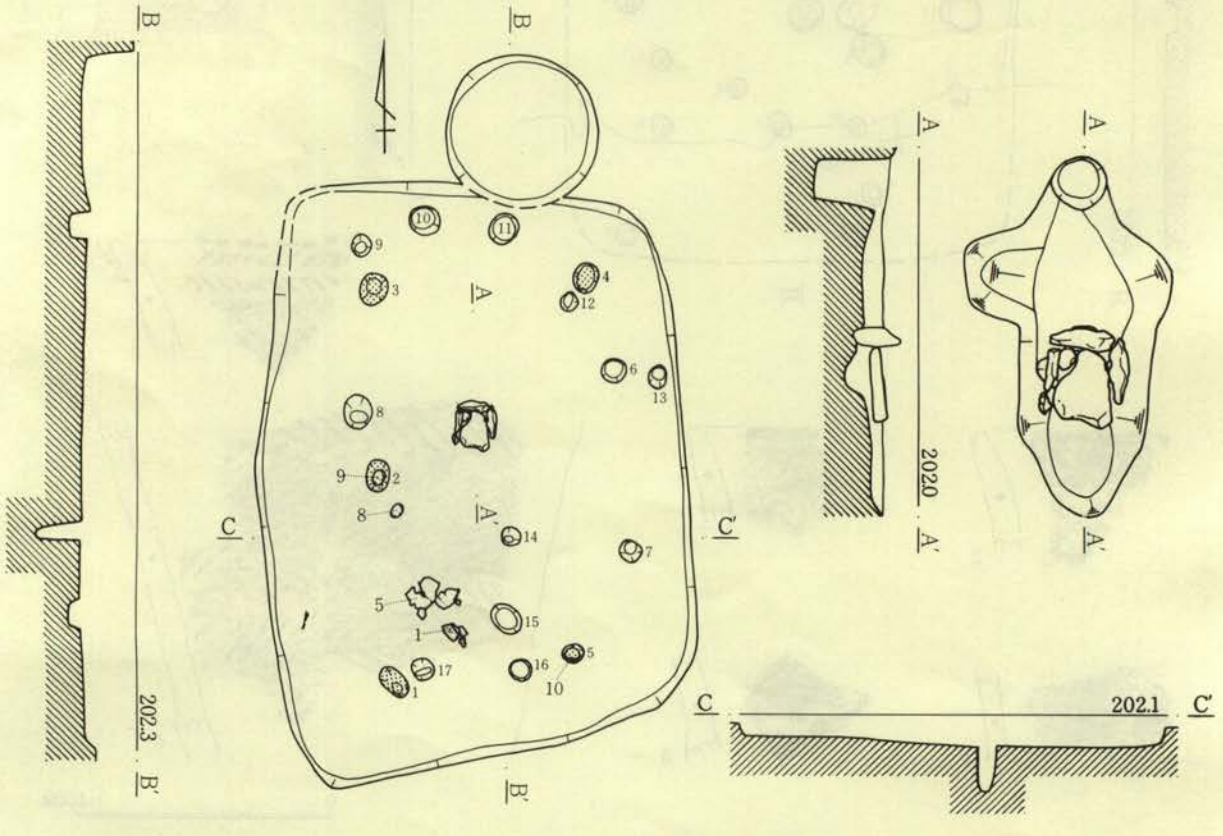
炉址は、P_2とP_3のライン上の中央に配されている。残存状況より、恐らく南方を開口し、三方をコの字状に縁石で囲み、中央部分に偏平な礫を敷いていたと推察される石囲炉であろう。

出土遺物（第26図1～6）

1は外反して開く口縁部片で、口唇部下に2本の隆帯を併走させ、斜めの刻み目を上下で矢羽状となる様に施す。隆帯間には刺切文を連続して施す。縄文はLRとRLで羽状を構成する。2は外反する口縁部で口唇部を尖り気味とする。縄文は1と同じ。3は口唇部を平坦とし、0段多条の結節L・結節Lで羽条を構成する。4はLRを施す胴部片。5と6は同一個体で、直線的に開く胴部片。縄文は0段多条のLR・RLの結束2種で羽状を構成する。

J9号住居跡（第27図）

A調査区のS・T－29・30Gにまたがって、標高201.95～202.15m付近に検出され、北辺の中央部分に平安時代の円形土坑が重複し、南方にJ13・14Dが位置する。



第27図　J9号住居跡・炉址

形状は、南北に長い隅丸長方形を呈し、南西部分がやや張り出す。規模は、最大長軸長4.75m、短軸長3.4mを測る。長軸方向は、N－4°—Wである。検出面からの掘り込みは、8～18cmを測る。主柱穴はP_1～P_5と考えられるが、P_4とP_5の間の柱穴は検出されなかった。

炉址は、中央やや北寄りに配されている。南方部を開口し、三方を縁石でコの字状に囲み中央部に偏平な礫を敷いている石囲炉である。

遺物は、炉址の南方部分の床面（1と5）に集中、P_2より磨石(8)が出土した。

出土遺物（第28図1～10）

1は4単位の波状口縁を呈し、J10号住居跡の出土遺物1と同様な文様構成である。波頂部分は欠損するが刻み目を施す2本の隆帯が垂れ、併走して巡る矢羽状の刻み目を施す隆帯が胴部と区画する。この隆帯からV字状に左右対称気味に蕨手状の撚糸側面圧痕文（L・Rの2本1組）を施し、円形刺突文を空間部分に充填する。胴部は0段多条の結節L・結節Rで羽状を構成する。

2は肥厚する口縁部片で、0段多条のLRを施す。3は0段多条の結節Lを施す胴部片。5は内湾する球形状の胴部を呈し、頚部に斜位の刻み目を施す隆帯を巡らす。1と同一個体と考えられる。6は撚糸側面圧痕文（L・Rの2本1組）で文様を意匠する。7は0段多条の結節L・Rで羽状を構成する。8と9は、端部と表裏面に敲打痕を残す磨石。10は表裏面に浅い凹孔と敲打痕を残す凹石。8～10の石材は輝石安山岩。

J10号住居跡（第29図）

A調査区のT－33・34G、標高202.35～50m付近に検出され、東方にJ8・J9号住居跡、北方にJ18・19号土坑が位置する。

形状は、南東～北西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸長4.25m、短軸長3.35mを測る。長軸方向は、N－38°—Wである。検出面からの掘り込みは、4～7cmと浅い。主柱穴は、調査区外に1穴が存在すると考えられる6本柱で、P_1～P_5が該等する。壁沿には壁柱穴が巡る。

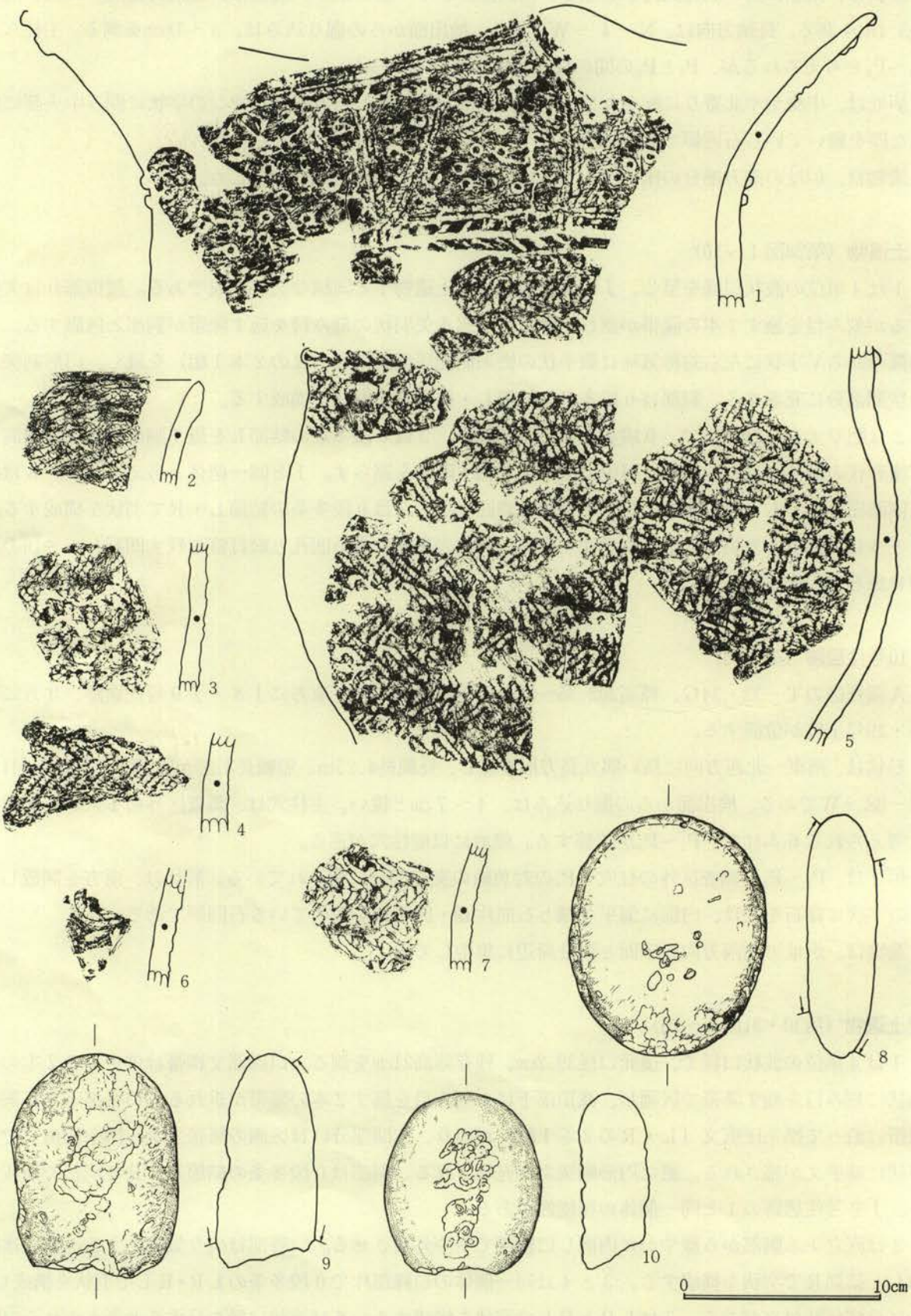
炉址は、P_2～P_3～調査区外の柱穴～P_4の対角線の交点部分に配されている。形状は、南方を開放してコの字状に縁石を設け、内部に偏平な礫と石皿片(19)・凹石(18)を敷いている石囲炉である。

遺物は、炉址の北西方向の床面と炉址周辺に集中して出土。

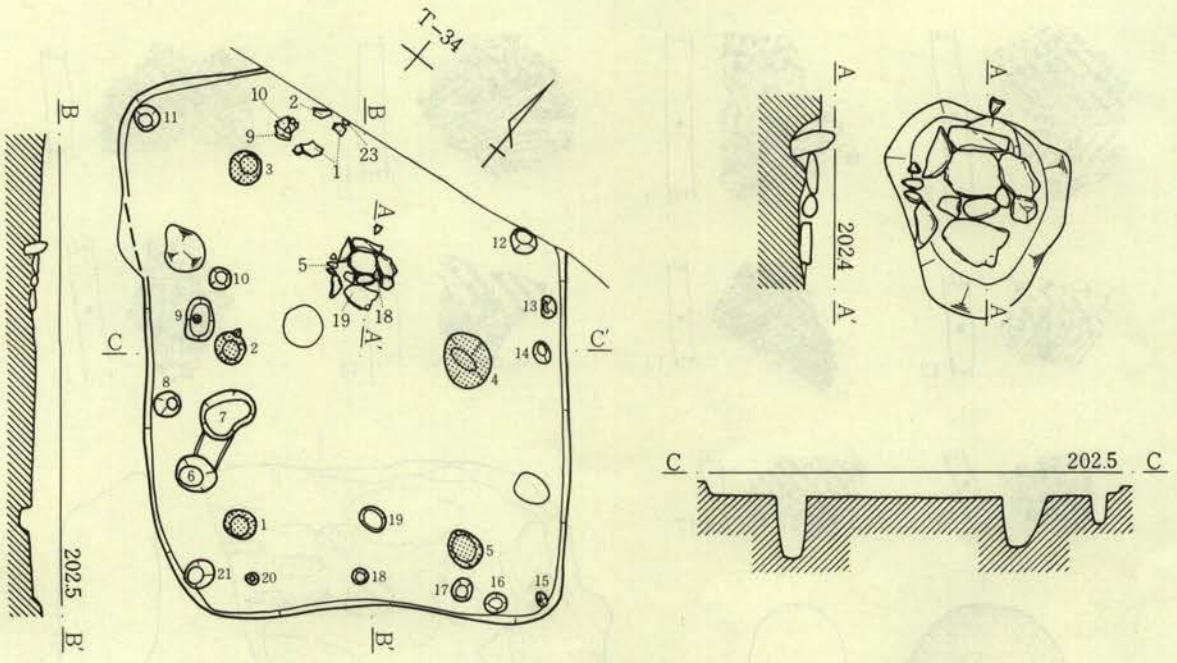
出土遺物（第30・31図1～26）

1は4単位の波状口縁で、復元口径39.2cm、残存器高21cmを測る。口縁部文様帯は併走する2本の矢羽状に刻み目を施す隆帯で区画し、波頂部下にも刻み目を施す2本の隆帯が垂れる。口唇部下と区画の隆帯に沿って撚糸圧痕文（L・Rの2本1組）が巡り、空間部分には区画の隆帯上から撚糸圧痕文でV字状に蕨手文が施される。更に円形刺突文が充填される。胴部は0段多条の結節L・Rで羽状を構成する。J9号住居跡の1と同一個体の可能性がある。

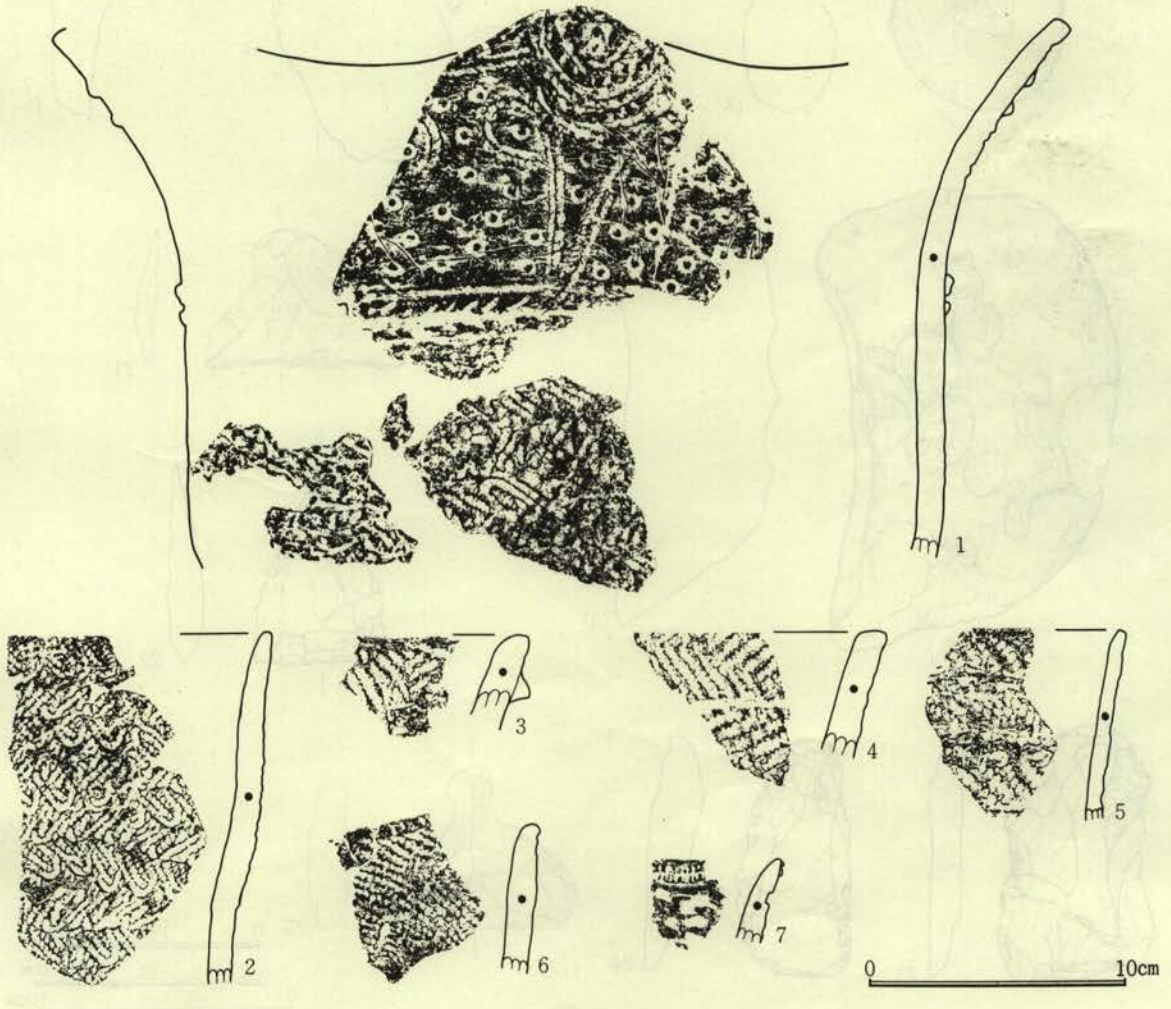
2は直立する胴部から緩やかに内湾し口縁部でやや外反させる。口唇部は尖り気味とする。縄文は結節Lと結節Rで羽状を構成する。3と4は同一個体の口縁部片で0段多条のLR・RLで羽状を構成し、3には瘤状貼付文がある。5はLRとRLで羽状を構成する。6は波状口縁を呈すると考えられる口縁部片で、RLを施す。7は縦位に細かく連続する刻み目を施す細隆帯が口唇部下に巡り、下方には先端



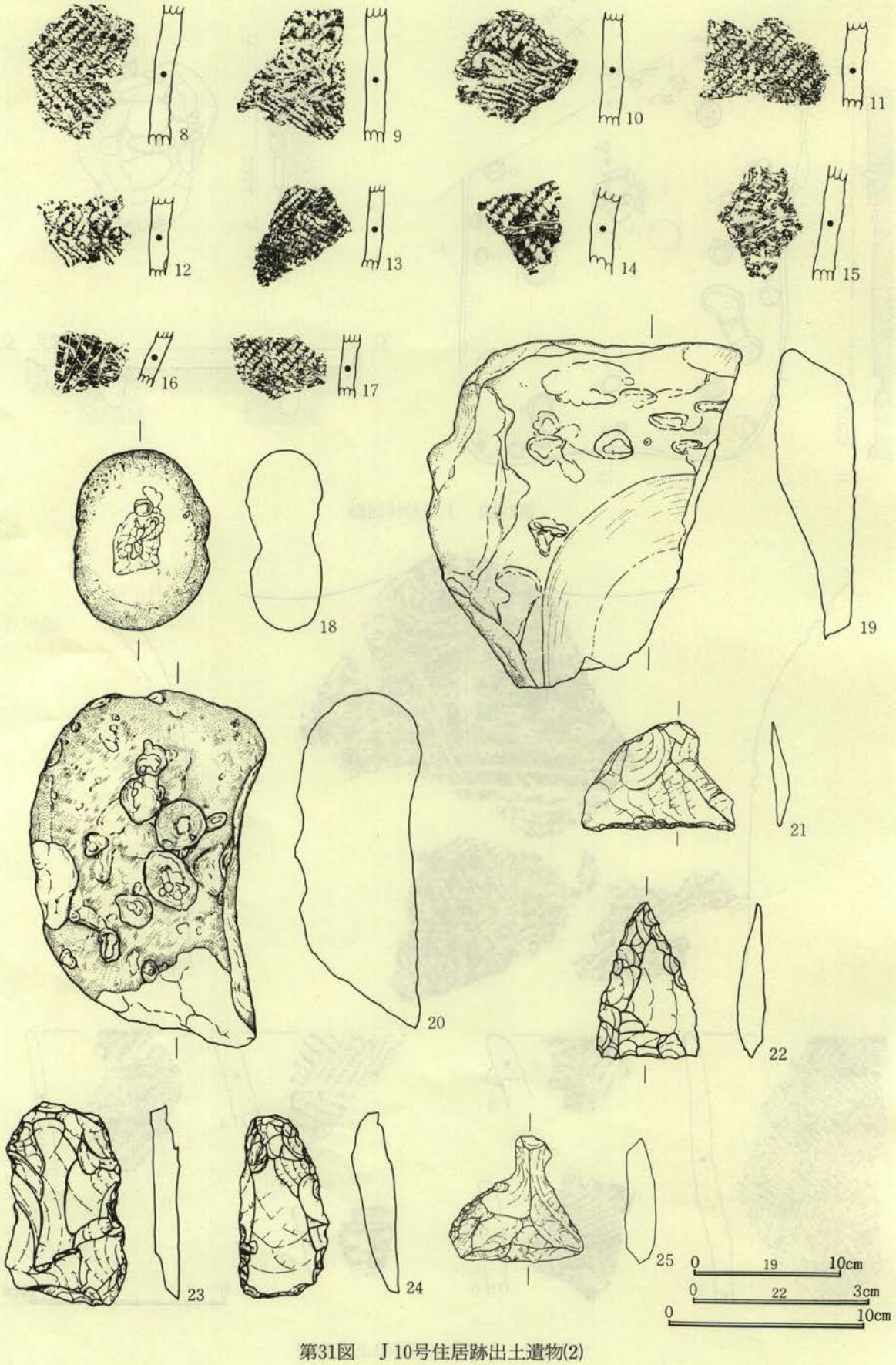
第28図　Ｊ９号住居跡出土遺物



第29図　J 10号住居跡



第30図　J 10号住居跡出土遺物(1)



第31図　J 10号住居跡出土遺物(2)

部が3㎜幅の平な工具で刺突をする。8・9・13・14・17は0段多条のＬＲとＲＬ、10と12は0段多条の結節Ｌ・Ｒで羽状を構成する。11はＬＲを施す。15は網代状の単軸絡条体を施す。

18は表裏面に凹孔が穿たれ、側面に敲打痕が残る凹石。19は炉石に使用された石皿で縁辺に凹孔が穿たれている。20は凹孔が多く穿たれた多孔石。18～20の石材は輝石安山岩。21は安山岩質凝灰岩のスクレーパー。22は緻密質安山岩の石鏃。23は安山岩で短冊形、24は緻密質安山岩の篦状の打製石斧。25・26は安山岩質凝灰岩の横型石匙。

Ｊ11号住居跡（第32図）

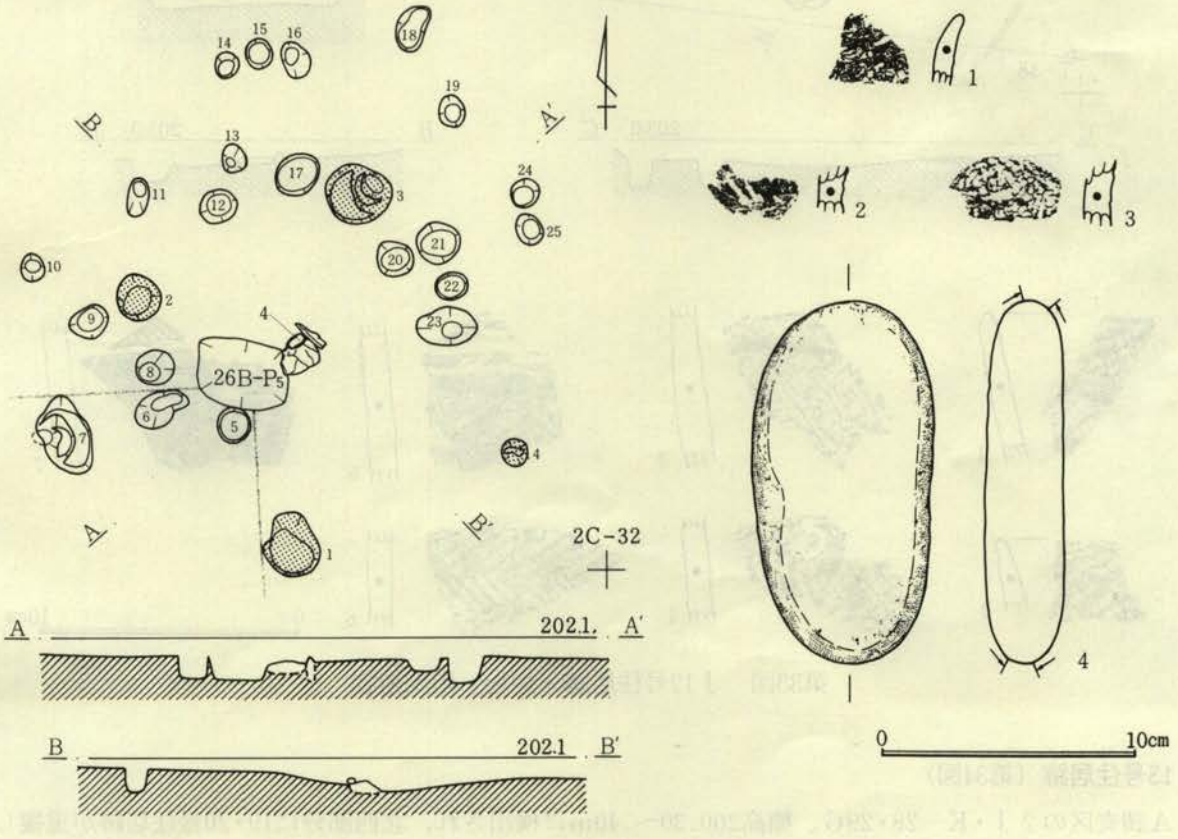
Ａ調査区の２Ｂ－32Ｇ、標高201.90～202.00m付近に検出された。26号掘立柱建物跡と重複し、その柱穴（P_5）が炉址の一部を破壊している。東方にはＪ７号住居跡が隣接する。

形状・規模は不明である。主柱穴は、P_1～P_4の４本柱と考えられ、主柱穴の配置から長軸方向は、Ｎ－36°－Ｗとしている。恐らく南東～北西に長い長方形を呈するのであろう。

炉址は、主柱穴の対角線の交点よりやや北寄りに配されている。中央部分に敷かれた偏平な礫と１石の縁石と磨石(4)が残存する。出土遺物は僅かな土器の小片がある。

出土遺物（第32図１～４）

１は口縁部片で、口唇部下に鋭利なヘラ状工具で刺切文を縦位に施す。縄文はＬＲを施す。２の小片には撚糸側面圧痕文（Ｌ・Ｌの２本１組）が施されている。３はＲＬとＬＲで羽状を構成する胴部片。４は輝石安山岩の磨石。



第32図　Ｊ11号住居跡・出土遺物

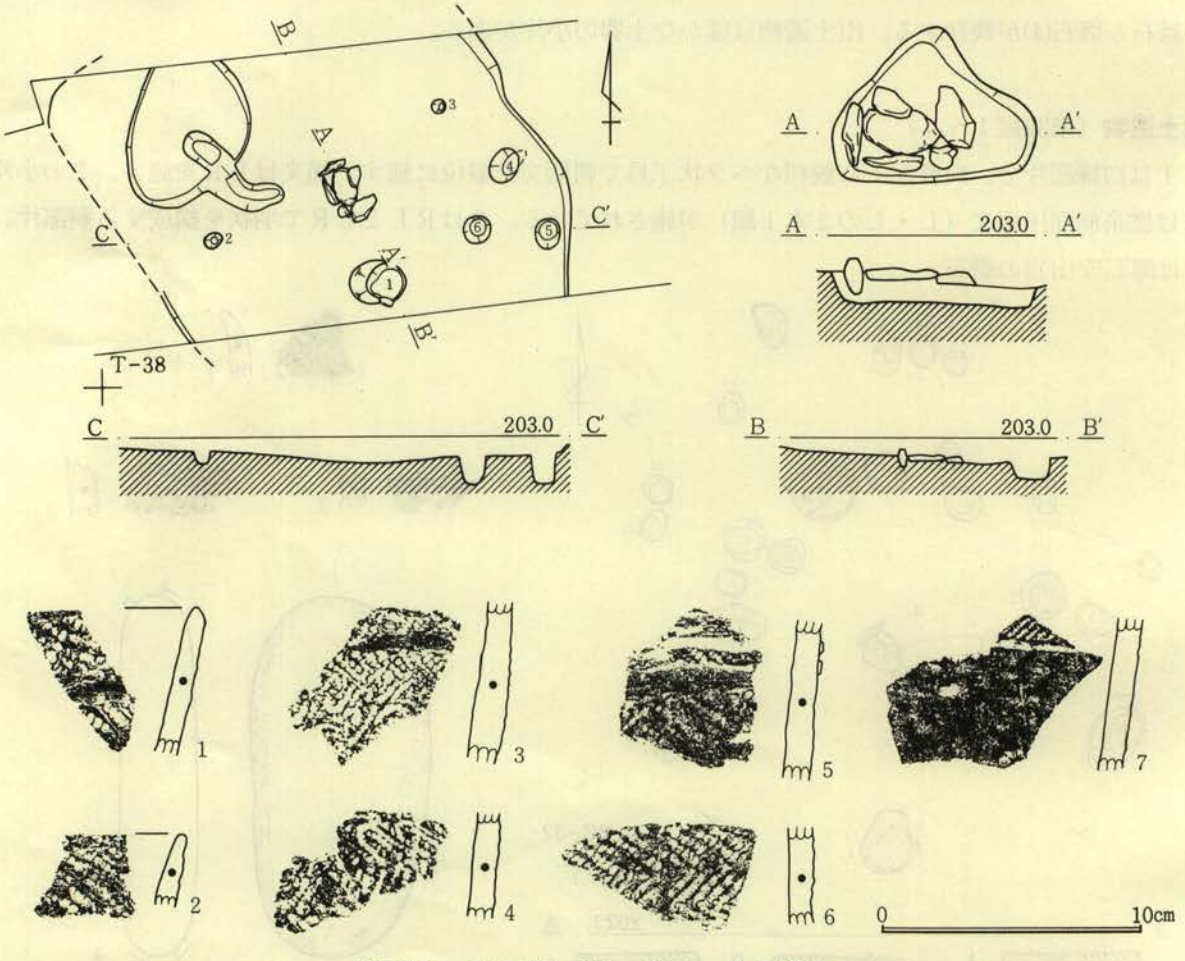
J12号住居跡（第33図）

A調査区のS—37G、標高202.90m前後に検出された。形状・規模はトレンチ間の検出の為に全体像は明確でないが、形状は南北に長い長方形を呈し、短軸長3.25m前後を測る。長軸方向はN—30°—W前後であろう。掘り込みは、3～9cmと浅い。柱穴は6カ所に検出されたが主柱穴は不明である。

炉址は石囲炉で東の縁石が内部に倒れる状態から南方を開口して三方を縁石で囲み、中央部に偏平な礫を敷いている。出土遺物は覆土内より土器片が見られる。

出土遺物（第33図1～7）

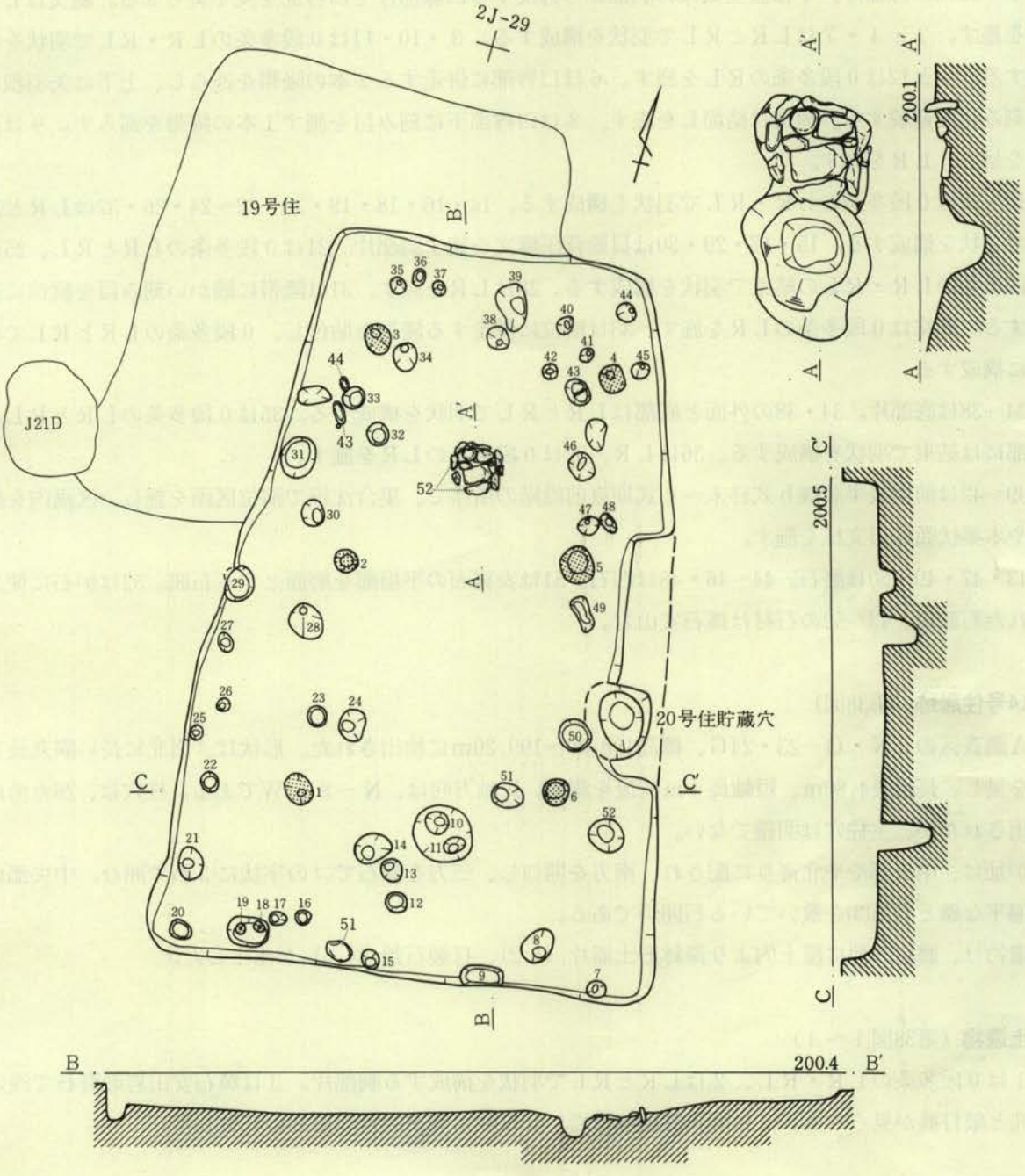
1は0段多条のLRとRLで羽状を構成する口縁部片。2はRLを施す口縁分布図片。3は側面環付の縄文を施す。4は結節Lと結節Rで羽状を構成する。5は2本の隆帯が巡る胴部分片でRLを施す。6は0段多条のLRとRLで羽状を構成する胴部片。7は後期の堀ノ内II式期の所産と考えられる。



第33図　J12号住居跡・炉址・出土遺物

J13号住居跡（第34図）

A調査区の2J・K—28・29G、標高200.30～.40mに検出され、北西部分に19・20号住居跡が重複し、北東方向にJ3号住居跡、西方にJ21号土坑が位置する。



第34図　J 13号住居跡・炉址

形状は、南北に長い台形状を呈し、長軸長6.60m、南辺4.5m、北辺2.8mを測る。長軸方向は、N－8°－Wである。検出面からの掘り込みは、17～22cmである。主柱穴は、6本柱でP_1～P_6が該等すると考えられる。

炉址は、P_2～P_4の対角線の交点に配され、南方が開口し、三方をコの字状に石皿片(52)等で縁石で囲み、中央部分に偏平な礫を敷いている石囲炉である。遺物は、P_{33}の脇で磨石が出土した。

出土遺物（第35～37図１～52）

１～12は口縁部片。１は直立気味の胴部から外反する口縁部片で口唇部を丸く尖らせる。縄文はＬＲＬを施す。２・４・７はＬＲとＲＬで羽状を構成する。３・10・11は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状を構成する。５と12は０段多条のＲＬを施す。６は口唇部に併走する２本の隆帯を巡らし、上下に矢羽根状に刻み目を連続する。縄文は結節Ｌを施す。８は口唇部下に刻み目を施す１本の隆帯を巡らす。９は波状を呈し、ＬＲを施す。

13・27は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状を構成する。14・16・18・19・20・22～24・26・32はＬＲとＲＬで羽状を構成する。15・17・29・30は貝殻背圧痕文を施す胴部片。21は０段多条のＬＲとＲＬ、25は０段多条のＬＲ・ＲＬの結束で羽状を構成する。28はＬＲを施す。31は隆帯に細かい刻み目を縦位に連続する。縄文は０段多条のＬＲを施す。33は横位に併走する隆帯を貼付し、０段多条のＬＲとＲＬで羽状に構成する。

34～38は底部片。34・38の外面と底部はＬＲとＲＬで羽状を構成する。35は０段多条のＬＲとＲＬ、底部には結束で羽状を構成する。36はＬＲ、37は０段多条のＬＲを施す。

39～42は前期後半諸磯ｂ式終末～ｃ式期直前段階の所産で、集合沈線で横位区画を施し、区画内を斜線や木葉状弧線の文様を施す。

43・47・49・50は磨石。44～46・48は凹石。51は表裏面の平坦部を磨面とする石皿。52は炉石に使用された石皿片。43～52の石材は輝石安山岩。

Ｊ14号住居跡（第38図）

Ａ調査区の２Ｎ・Ｏ－23・24Ｇ、標高198.90～199.20mに検出された。形状は、南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸長4.80m、短軸長４m前後を測る。長軸方向は、Ｎ－８°－Ｗである。柱穴は、26カ所に検出されたが、主柱穴は明確でない。

炉址は、中央部やや北寄りに配され、南方を開口し、三方を縁石でコの字状に５石で囲む。中央部には偏平な礫と磨石(3)を敷いている石囲炉である。

遺物は、磨石の他に覆土内より深鉢形土器片（1.2）、打製石斧（4.5）が出土した。

出土遺物（第38図１～４）

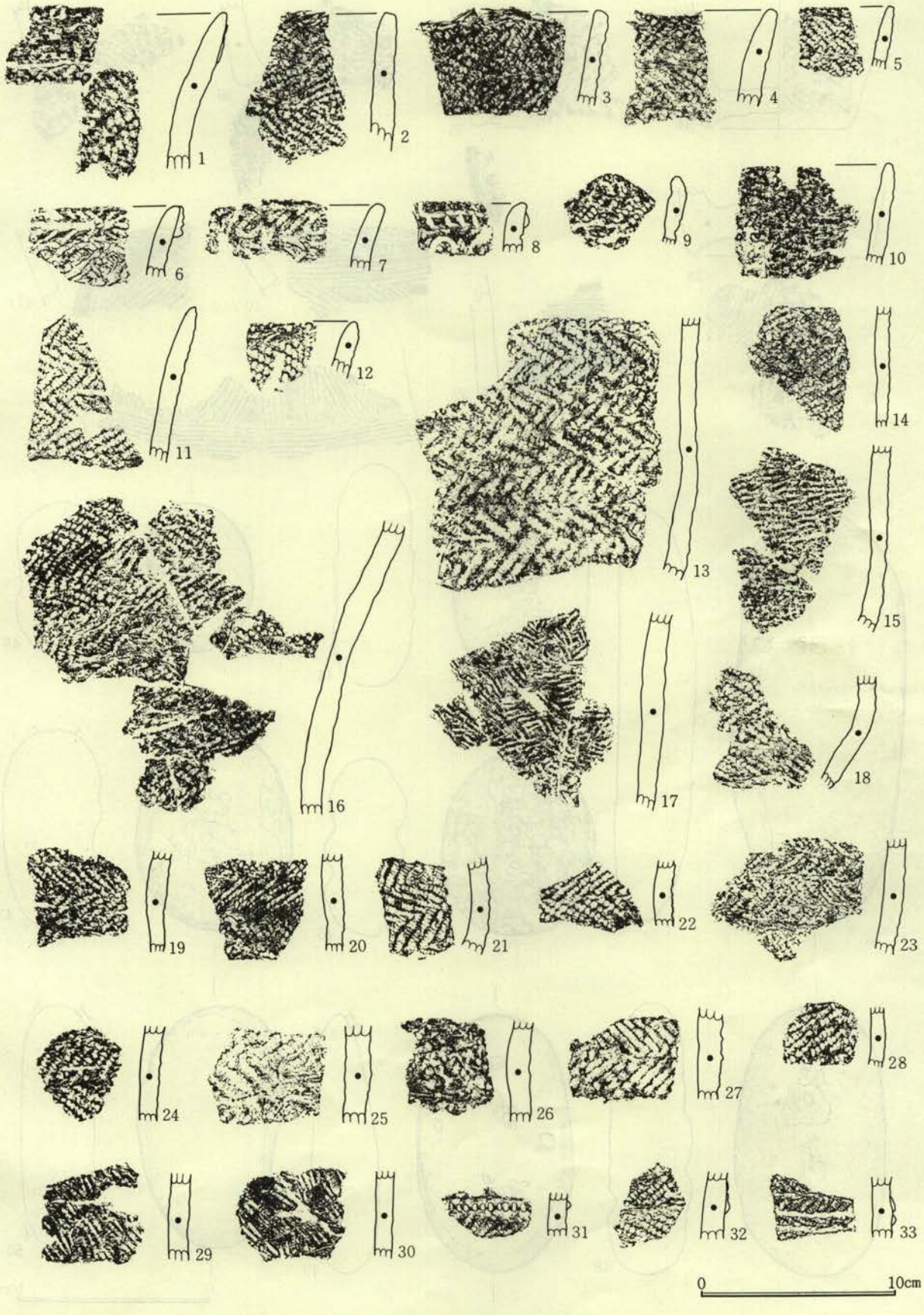
１は０段多条のＬＲ・ＲＬ、２はＬＲとＲＬで羽状を構成する胴部片。３は輝石安山岩の磨石で浅い凹孔と敲打痕が見られる。４は凝灰質細粒砂岩、５は緻密質安山岩の撥形の打製石斧。

Ｊ15号住居跡（第39図）

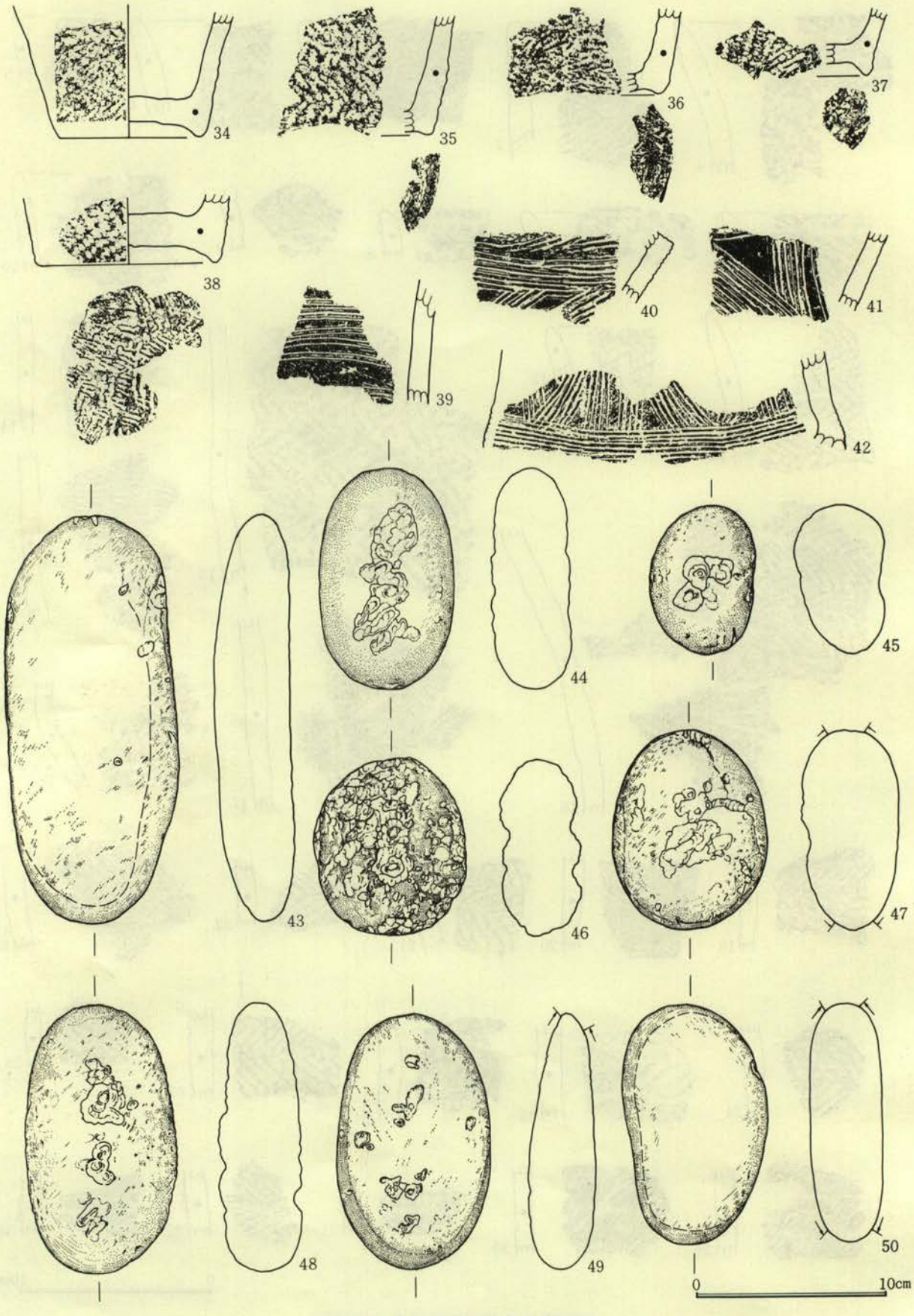
Ａ調査区の２Ｎ・Ｏ－33Ｇ、標高200.20m前後に検出された。炉址が配されたと考えられる部分と南辺に道路址の側溝が住居を切っている。

形状は、南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられるが、明確なプランを追及できなかった。規模は、長軸長4.7m、短軸長4.0m前後と推定され、長軸方向はＮ－16°－Ｗである。掘り込みは、壁の残存が良い西壁で最大20cmを測る。主柱穴は、４本柱か６本柱かは不明確であるが、４本柱の場合はP_1～P_4、６本柱の場合にはP_1～P_6の可能性が考えられる。

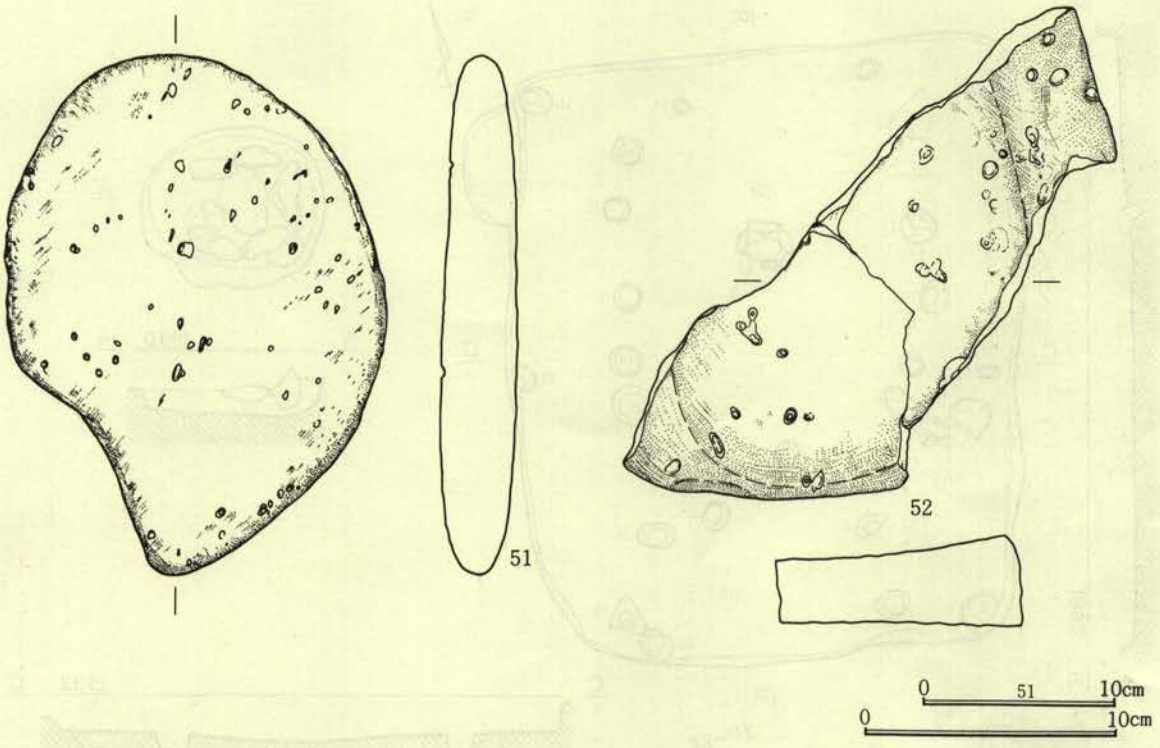
炉址は、道路址の北側溝によって破壊されていると考えられる。埋設土器(1)が溝内より検出された。



第35図　J 13号住居跡出土遺物(1)



第36図　J 13号住居跡出土遺物(2)



第37図　J 13号住居跡出土遺物(3)

出土遺物（第39図１～５）

１の埋設土器は直線的に開く胴部から直立気味に内湾する平口縁の深鉢形土器で底部を欠損する。縄文は０段多条のＬＲ・ＲＬで羽状を構成する。口径24.5cm、残存器高28.1cmを測る。２は直立気味に外反する口縁部片で０段多条のＬＲ・ＲＬ、３の胴部片はＬＲとＲＬ、４は０段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する。

５は輝石安山岩の磨石で表裏面に凹孔を穿たれている。

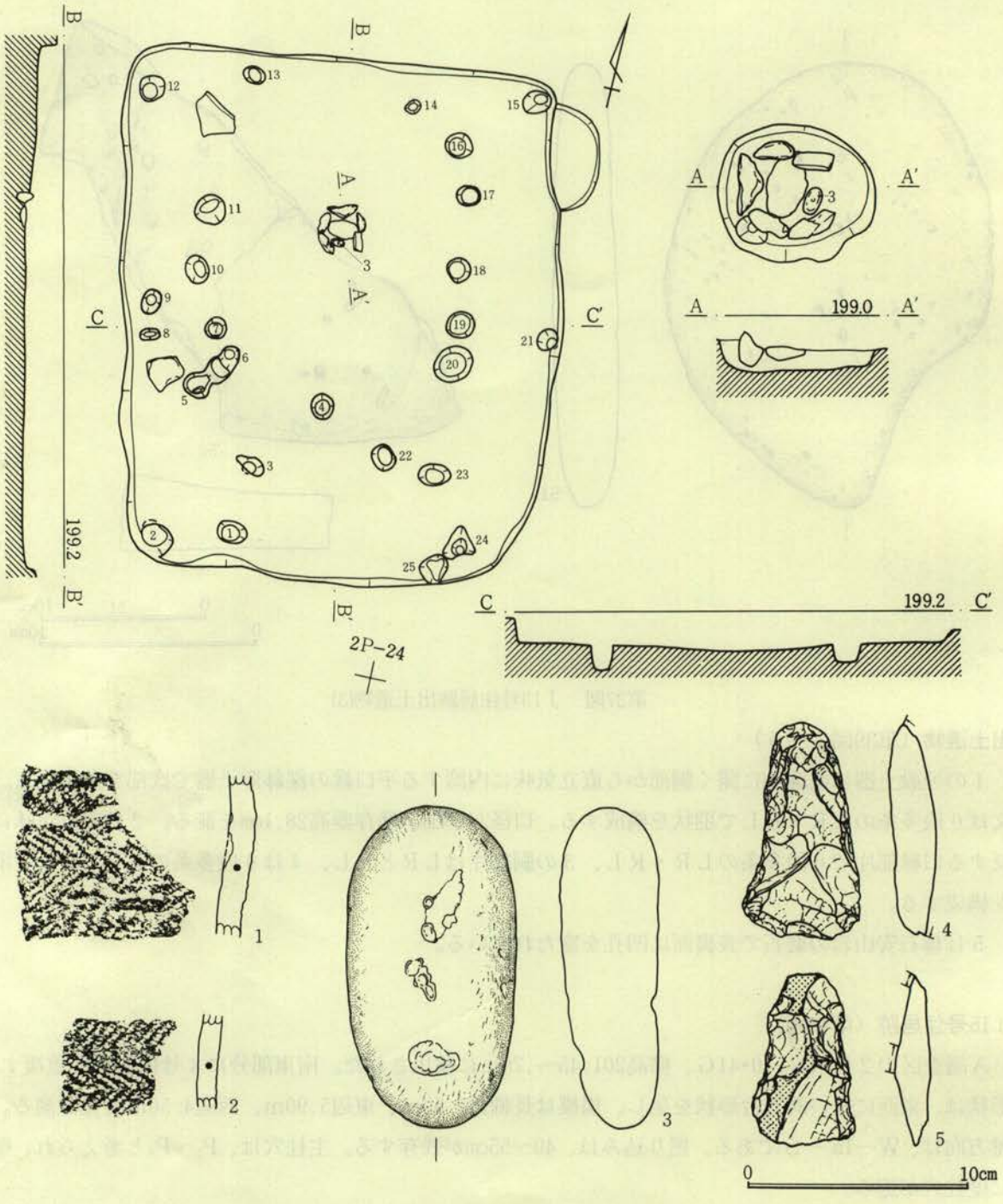
Ｊ16号住居跡（第40図）

Ａ調査区の２Ｎ・Ｏ－40・41Ｇ、標高201.45～.70mに検出された。南東部分に４号住居跡と重複する。形状は、東西に長い隅丸台形状を呈し、規模は長軸長7.50m、東辺5.90m、西辺4.50m前後を測る。長軸方向は、Ｗ－15°－Ｓである。掘り込みは、40～55cmが残存する。主柱穴は、P_1～P_6と考えられ、壁沿に壁柱穴が巡る。

炉址は、P_2～P_5の対角線の交点に配され、東方を開口して三方を縁石で囲み、中央部分に２石を敷いている石囲炉である。前面には20cmほど離れて深鉢形土器(1)を埋設している。P_2と炉址の間には開口部が80cm、底面1.4m、深さ70cmを測る袋状土坑（P_{58}）がある。

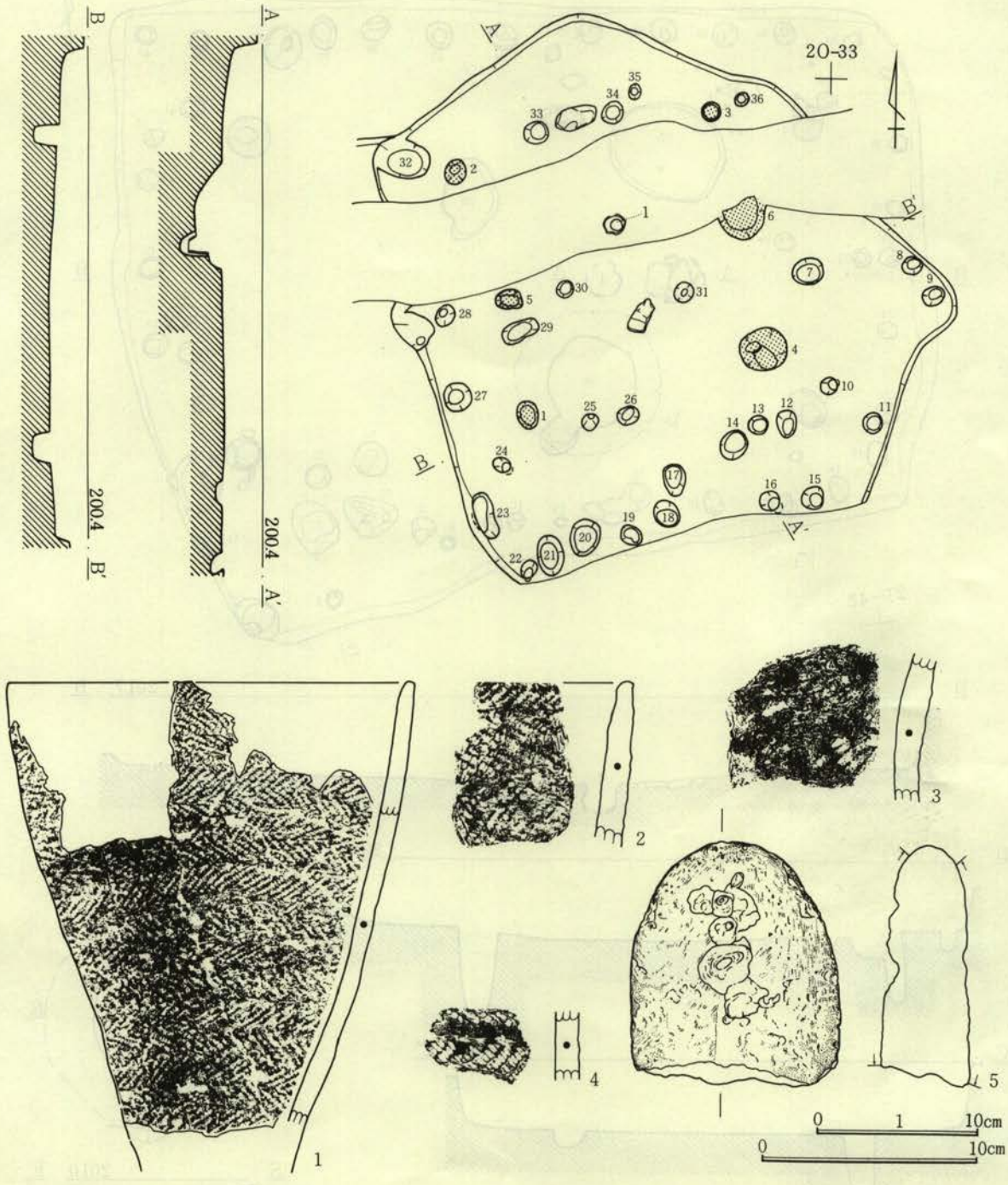
出土遺物（第41・42図１～42）

１は炉址の前面に埋設された深鉢形土器である。披熱により非常に脆く、現時点で復元作業は困難を極めている。内湾する球形状の胴部から外反して開く口縁部に移行し、復元口径36cm、残存器高さ25cmを測る。２は緩やかに内湾する口縁部片である。縄文はＬＲとＲＬで羽状を構成する。３はＬＲとＲＬ



第38図　J14号住居跡・炉址・出土遺物

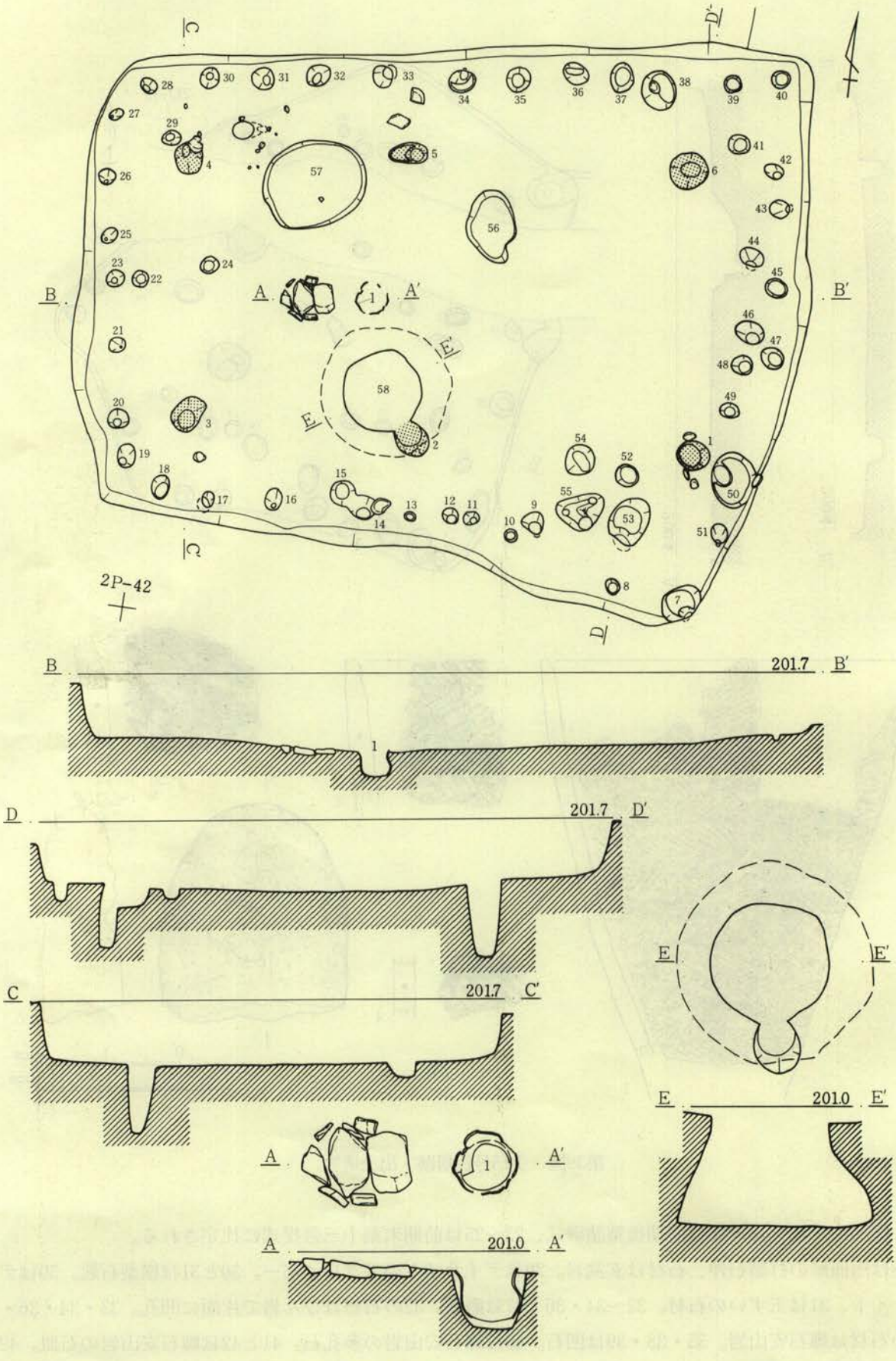
の結束で羽状を構成する。4は波状を呈する有段口縁で貝殻背圧痕文を施す。5はＬＲとＲＬで羽状を構成する。6は口唇部下に刻み目を施す隆帯を巡らす。7は波状を呈する口縁部片でＬＲを施す。8は口唇部に細かく連続する刻み目を施す。縄文は0段多条の結節Ｌ・結節Ｒで羽状を構成する。9は撚糸側面圧痕文（Ｌ・Ｒ・Ｌ・Ｒの4本1組）で蕨手状文を施す。10・14・16はＬＲとＲＬ、15・17は0段多条のＬＲ・ＲＬ、20は0段多条のＬＲとＲＬで羽状を構成する。19は口縁部文様帯に施される円形刺突文、21と22は刻み目を施す細い隆帯で文様帯を区画し、21は区画内を刺切文で充填する。27は上げ底



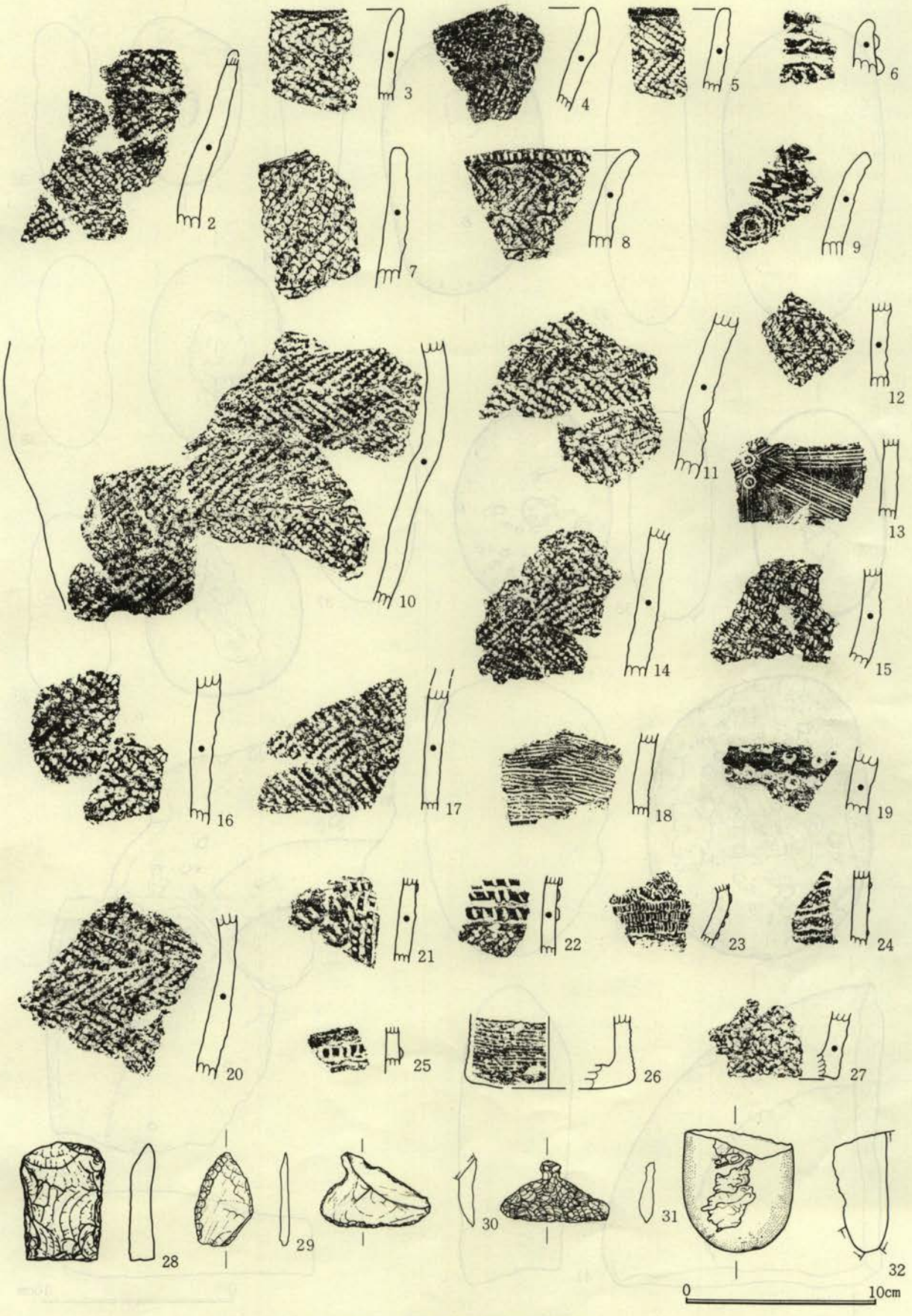
第39図　J15号住居跡・出土遺物

状の底部片。13・18・26は前期後葉諸磯式、23～25は前期末葉十三菩提式に比定される。

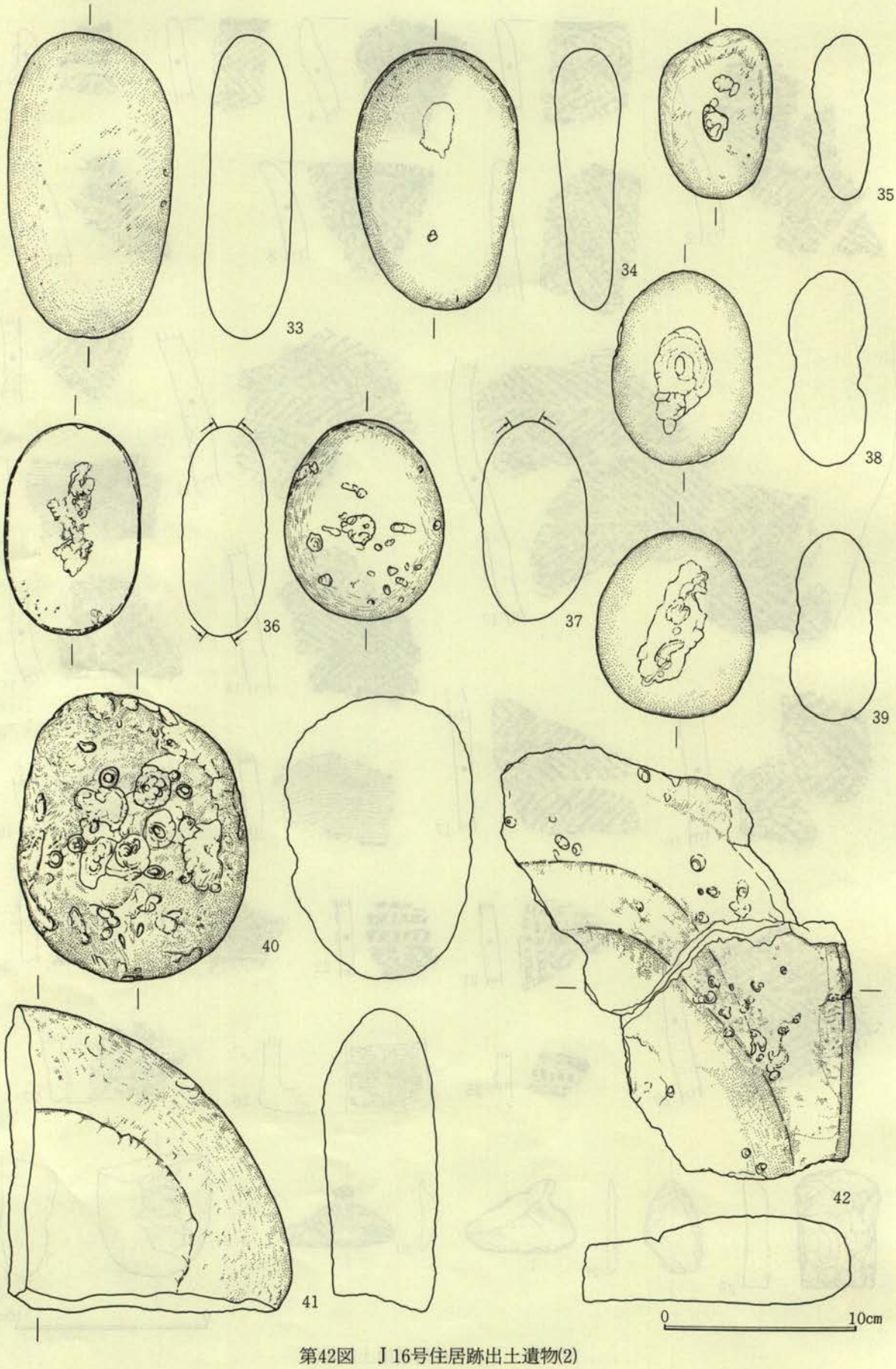
28は短冊形の打製石斧、石材は玄武岩。29はデイサイトのスクレイパー。30と31は横型石匙。30はデイサイト、31は玉ずいの石材。32～34・36・37は磨石。32の石材はひん岩で片面に凹孔。33・34・36・37の石材は輝石安山岩。35・38・39は凹石。40は輝石安山岩の多孔石。41と42は輝石安山岩の石皿。42の縁部に朱痕が見られる。



第40図　J 16号住居跡・炉址



第41図　J 16号住居跡出土遺物(1)



第42図　J 16号住居跡出土遺物(2)

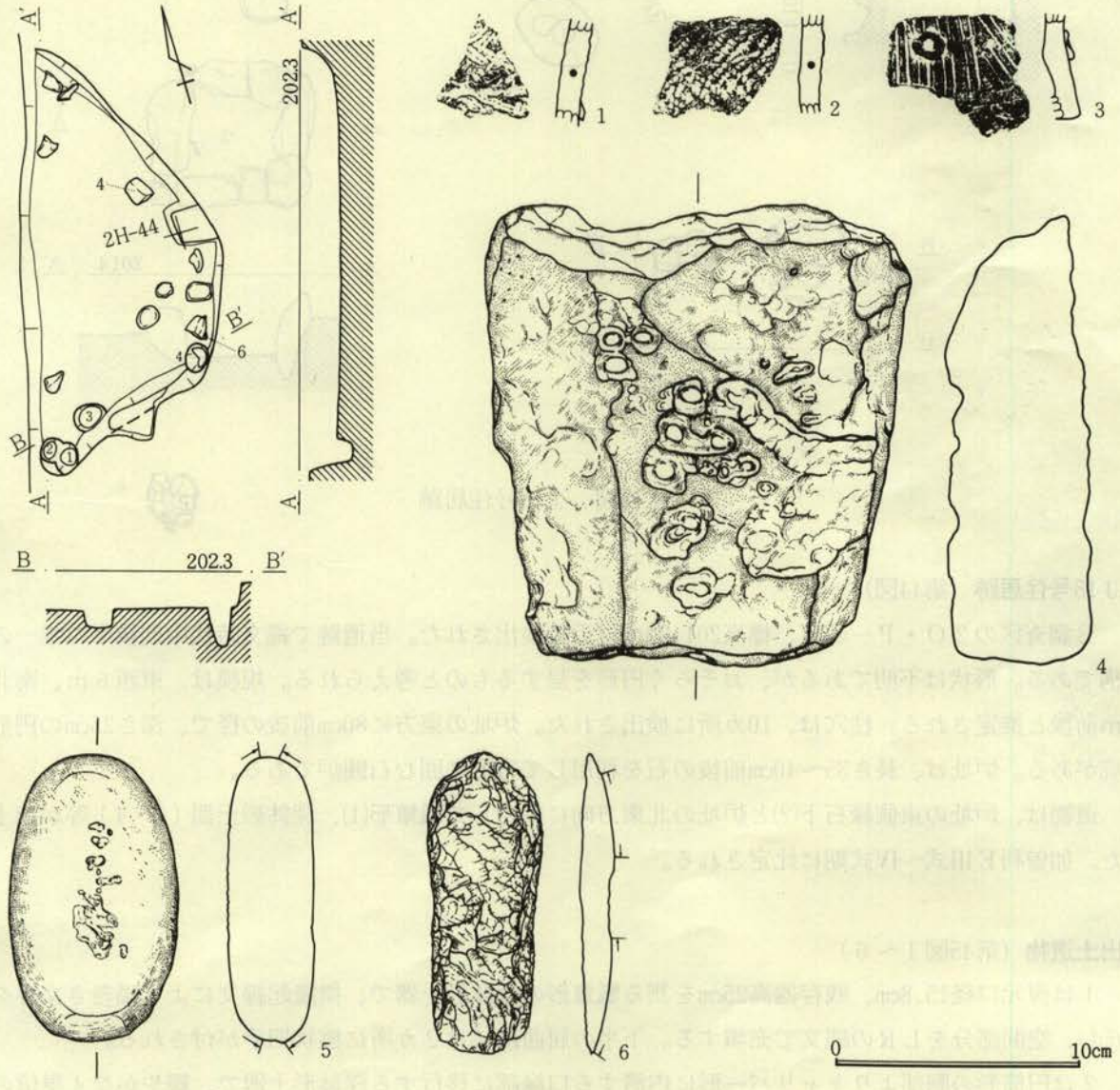
J17号住居跡（第43図）

A調査区の2G・H—44G、標高202.20m付近に検出された。形状・規模は、全体像の把握ができない為に不明確であるが、南北に長い長方形を呈すると考えられ、長軸方向はN—30°—W前後であろう。掘り込みは、12～25cmを測る。柱穴は南壁沿いに4カ所検出された。炉址は調査区外と考えられる。

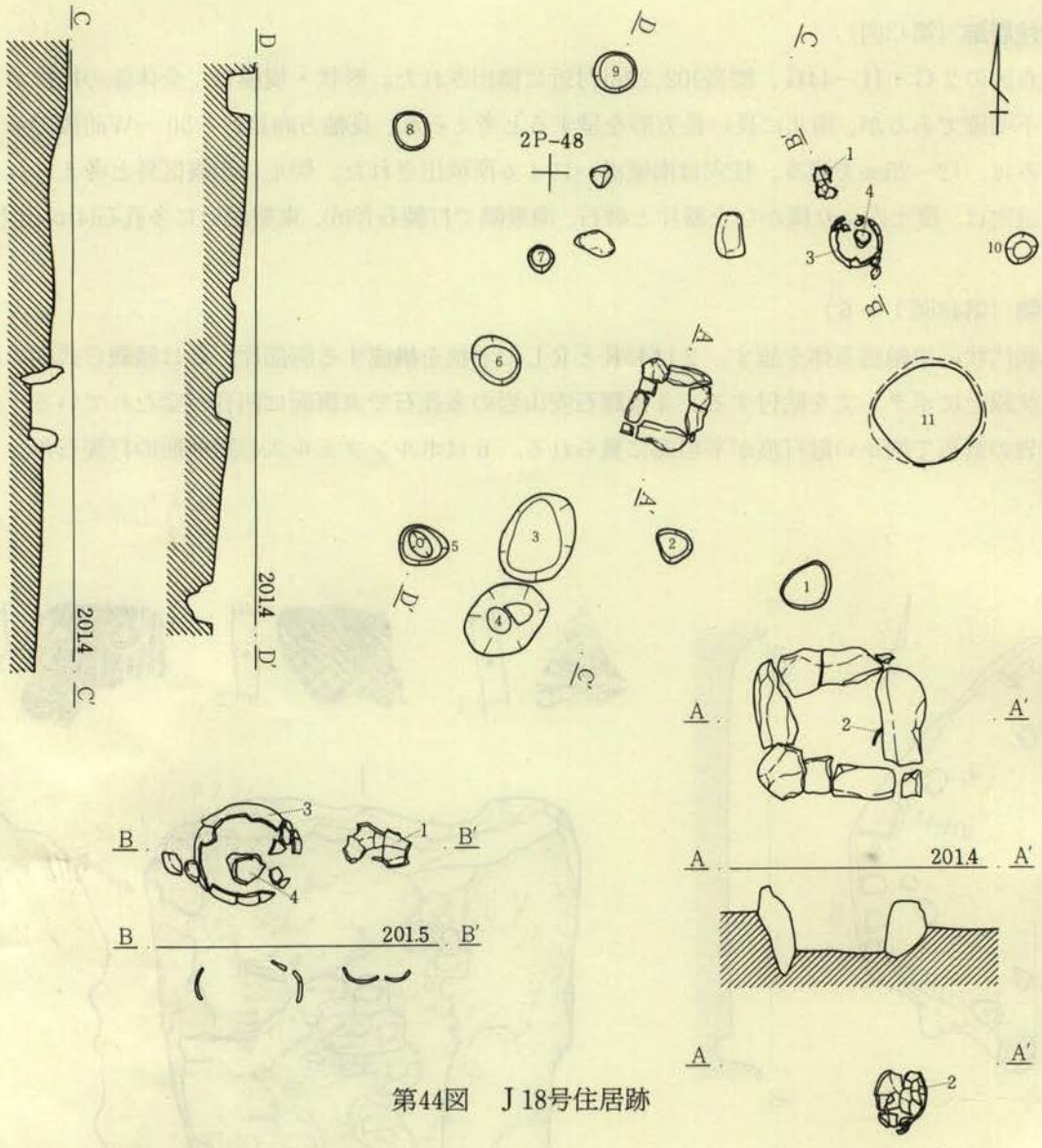
出土遺物は、覆土内より僅かな土器片と磨石、南東隅で打製石斧(6)、東壁沿いに多孔石(4)が出土した。

出土遺物（第43図1～6）

1は網代状の単軸絡条体を施す。2はLRとRLで羽状を構成する胴部片。3は諸磯C式期の底部片で集合沈線上にボタン文を貼付する。4は輝石安山岩の多孔石で表裏面に凹孔が穿たれている。5は輝石安山岩の磨石で細かい敲打痕が平坦面に見られる。6はホルンフェルスの短冊形の打製石斧。



第43図　J17号住居跡・炉址・出土遺物



第44図　Ｊ18号住居跡

Ｊ18号住居跡（第44図）

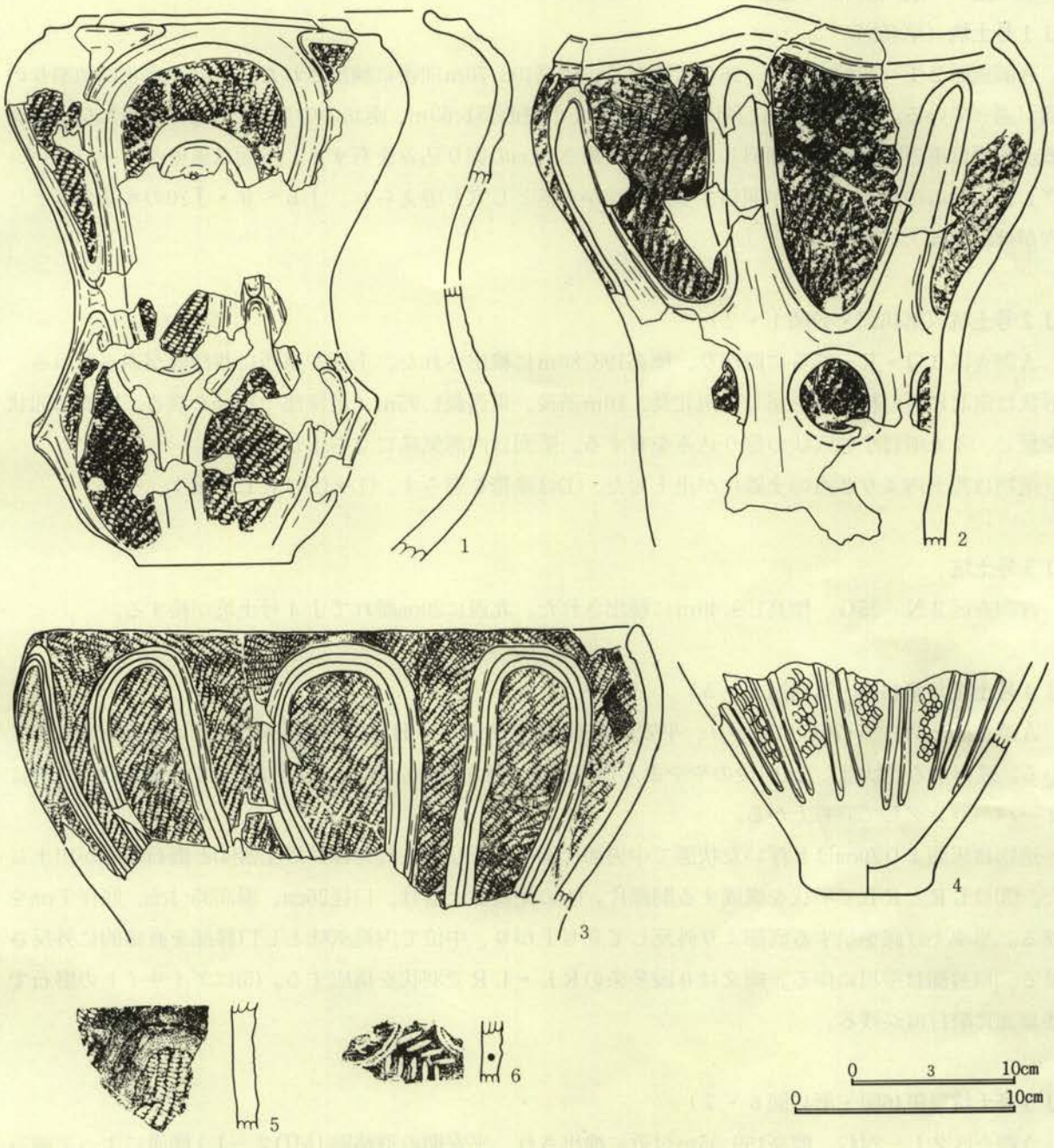
Ｂ調査区の２Ｏ・Ｐ－47Ｇ、標高201.20m付近に検出された。当遺跡で縄文時代中期後半の唯一の遺構である。形状は不明であるが、おそらく円形を呈するものと考えられる。規模は、東西６ｍ、南北５ｍ前後と推定される。柱穴は、10カ所に検出された。炉址の東方に80cm前後の径で、深さ35cmの円形土坑がある。炉址は、長さ35～40cm前後の石を利用して方形に囲む石囲炉である。

遺物は、炉址の東側縁石下(2)と炉址の北東方向に集中して瓢箪形(1)、深鉢形土器（３・４）等が出土した。加曽利ＥⅢ式～Ⅳ式期に比定される。

出土遺物（第45図１～６）

１は復元口径15.8cm、残存器高25cmを測る瓢箪形の深鉢形土器で、微隆起線文により渦巻き文等を意匠し、空間部分をＬＲの縄文で充填する。下半の屈曲部には２カ所に橋状把手が付される。

２は円筒形の胴部よりキャリパー形に内湾する口縁部に移行する深鉢形土器で、緩やかな４単位の波状口縁を呈する。口径は19.5cm、残存器高24.4cmを測る。口唇部下は・炉址沈線によって区画された幅



第45図　J18号住居跡出土遺物

狭の無文帯を設けている。文様帯は上下二段で構成され、上部は波状文、下部は円文を上部の波底部と相対して施文する。

3は平口縁を呈する深鉢形土器で、口径36.2cm、残存器高19cmを測る。2本1組のなぞりの沈線でアーチ状文を連続して意匠する。地文はLRを充填する。

4は2本1組の沈線を垂下させて文様を意匠する。地文はLRである。5はなぞりの沈線で文様を区画し、区画内をRLの縄文を充填する。

6は撚糸側面圧痕文（L・Rの2本1組）と刺切文を併せて施文する。

(2) 土　　坑（第46～50図）

Ｊ１号土坑（第46図）

Ａ調査区２Ｔ－26Ｇ・３Ａ－26Ｇに跨がり、標高198.70m前後に検出された。上面を南北に地割りの溝が過っている。形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長1.63m、南北の中央部で98cm、深さ1.66mを測る。底面は東方に緩やかに傾斜し、中央部に深さ40cmの掘り込みを有する。壁面は東壁がオーバーハングし、短軸の中央部で上部が開口する。形状から落とし穴と考えられ、Ｊ６～９・Ｊ20の６基の落とし穴がほぼ直線上に配列する。

Ｊ２号土坑（第46図・49図１・２）

Ａ調査区２Ｑ・Ｒ－25Ｇに跨がり、標高198.80mに検出された。上面を東西に耕作溝が過っている。形状は南北に長い楕円形を呈し、南北長2.10m前後、東西長1.95m、最深部で18cmを測る。底面は皿状を呈し、４カ所に小柱穴状の掘り込みを有する。壁面は内湾気味に立ち上がる。

遺物は覆土内より２点の土器片が出土した。(1)は隆帯を巡らす。(1)と(2)はＲＬを施す。

Ｊ３号土坑

Ａ調査区２Ｎ－25Ｇ、標高199.40mに検出された。北西に20cm離れてＪ４号土坑が接する。

Ｊ４号土坑（第46図・第49図３～５）

Ａ調査区２Ｍ－25・26Ｇに跨がり、平安期の道路跡（ＭＤ１－Ｈ・Ｉ）の側溝によって上面を切られている。残存する形状は1.2m前後のやや歪んだ円形で、深さ30cmを測る。底面は平坦で、壁面は部分的にオーバーハングして立ち上がる。

遺物は床面より20cmほど浮いた状態で中央部に偏平に圧し潰された深鉢形土器(4)と磨石(5)等が出土した。(3)はＬＲとＲＬで羽状を構成する胴部片。(4)の深鉢形土器は、口径26cm、器高35.1cm、底径７cmを測る。やや上げ底を呈する底部より外反して立ち上がり、中位で内湾気味とし口縁部を直線的に外反させる。口唇部は平坦に作る。縄文は０段多条のＲＬ・ＬＲで羽状を構成する。(5)はデイサイトの磨石で表裏面に敲打痕が残る。

Ｊ５号土坑（第46図・第49図６・７）

Ａ調査区２Ｌ－24Ｇ、標高199.55m付近に検出され、平安期の道路跡（ＭＤ２－Ｌ）側溝によって南方部分が切られている。形状は1.08m前後の径を測る円形で、深さ90cm前後を測る。底面はほぼ平坦で北から西方の壁面がオーバーハングして袋状とする。

遺物は中央やや北寄りの底面から30cm浮いた状態で十三菩提式期の深形土器(7)と口縁部片(6)が出土した。

(7)は４単位の山形突起を付し、口径20cm、器高21.5cm、底径６cm前後を測る。底部より内湾して立ち上がり、胴部下半を筒状とし、中位から外反して開きキャリパー状に内湾する口縁部に移行する。文様は、連続爪形文を施す隆帯で意匠される。口縁部文様帯の区画内には、鋸歯状に隆帯をくねらせ、突起下には縦位に３本を垂下させ、胴部文様は併走して４本が巡る。地文はＬＲを充填する。

(6)の口縁部片は細かく連続爪形文を施す隆帯で文様帯を区画し、内部にソーメン状隆帯を縦位に充填

した後に斜位に貼付する。

Ｊ６号土坑（第46図）

Ａ調査区２Ｎ―27Ｇ、標高199.70ｍに検出され、平安期の道路跡（ＭＤ１―Ｇ・Ｈ）側溝によって南方の上面が切られている。形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長約2.20ｍ、南北長1.3ｍ、深さ2.10ｍを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がり上部で開口する。形状から落とし穴と考えられる。

Ｊ７号土坑（第46図）

Ａ調査区２Ｍ―26Ｇ、標高199.80ｍ前後に検出され、Ｊ２号住居跡の西辺の南方で重複する。形状は南北に長い隅丸方形状を呈し、南北長1.75ｍ、東西長1.05ｍ、最深部で48㎝を測る。底面は南方から北方に連れて緩やかに傾斜し、北方部分には凹凸がある。壁面は内湾気味に立ち上がり、上部で開口する。

Ｊ８号土坑（第47図・第49図８）

Ａ調査区２Ｊ―27Ｇ、標高200.20ｍ付近に検出された。北方にはＪ３号住居跡が隣接する。形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長1.71ｍ、南北長90㎝前後、深さ1.67ｍを測る。底面は平坦で中央部分に20×15㎝の楕円形で深さ40㎝の小柱穴が設けられている。壁面は直立気味に立ち上がり、上部で開口する。形状から落とし穴と考えられる。

遺物は覆土内より緻密質安山岩の篦状石器(8)が出土した。

Ｊ９号土坑（第47図）

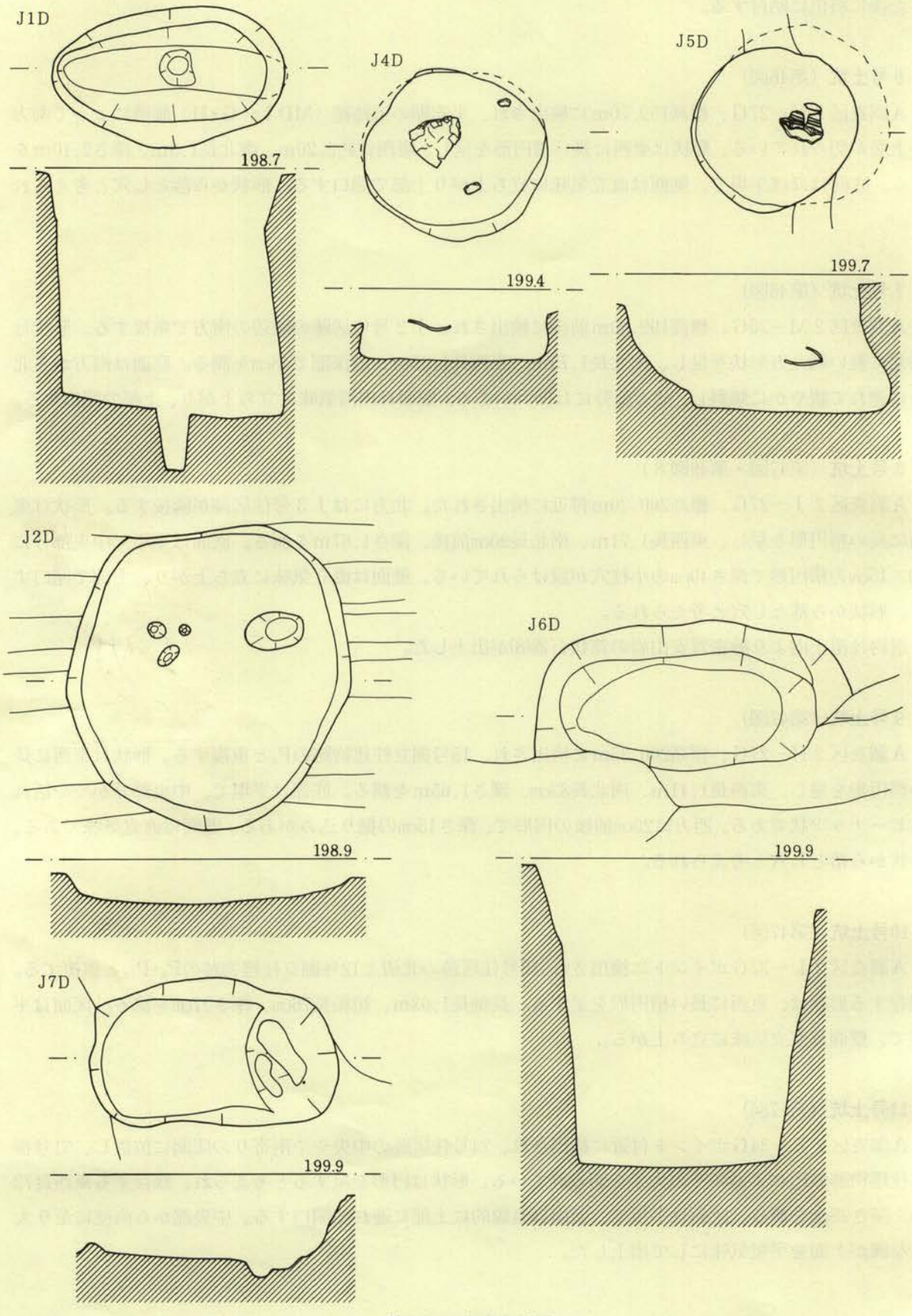
Ａ調査区２Ｈ―27Ｇ、標高200.35ｍに検出され、15号掘立柱建物跡のP_2と重複する。形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長1.41ｍ、南北長83㎝、深さ1.65ｍを測る。底面は平坦で、中央部分がやや括れるピーナッツ状である。西方に20㎝前後の円形で、深さ15㎝の掘り込みがある。壁面は直立気味である。形状から落とし穴と考えられる。

Ｊ10号土坑（第47図）

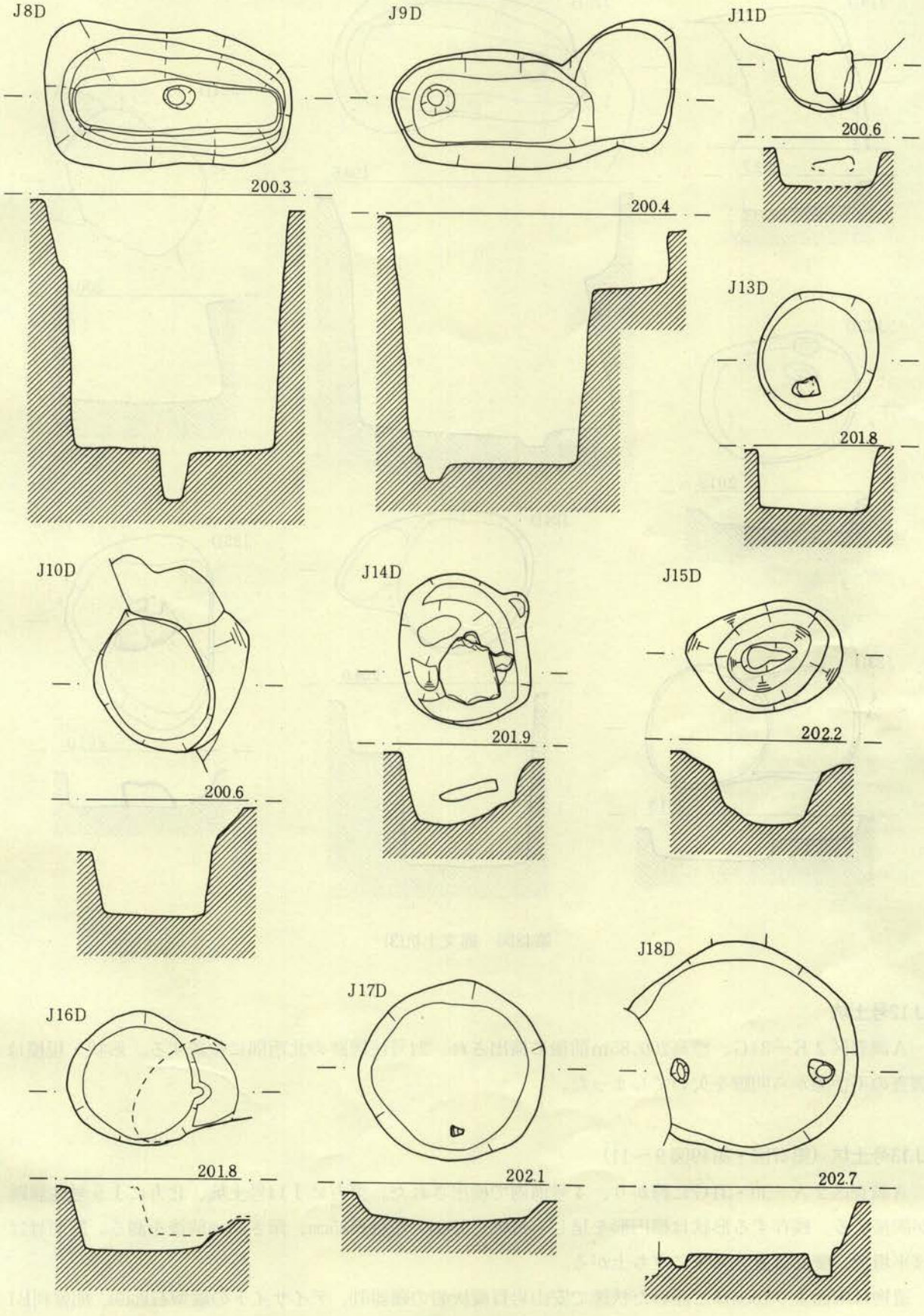
Ａ調査区２Ｌ―32Ｇポイントに検出され、16号住居跡の北辺と12号掘立柱建物跡のP_8・P_{18}と重複する。残存する形状は、東西に長い楕円形を呈する。長軸長1.03ｍ、短軸長76㎝、深さ27㎝を測る。床面は平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。

Ｊ11号土坑（第47図）

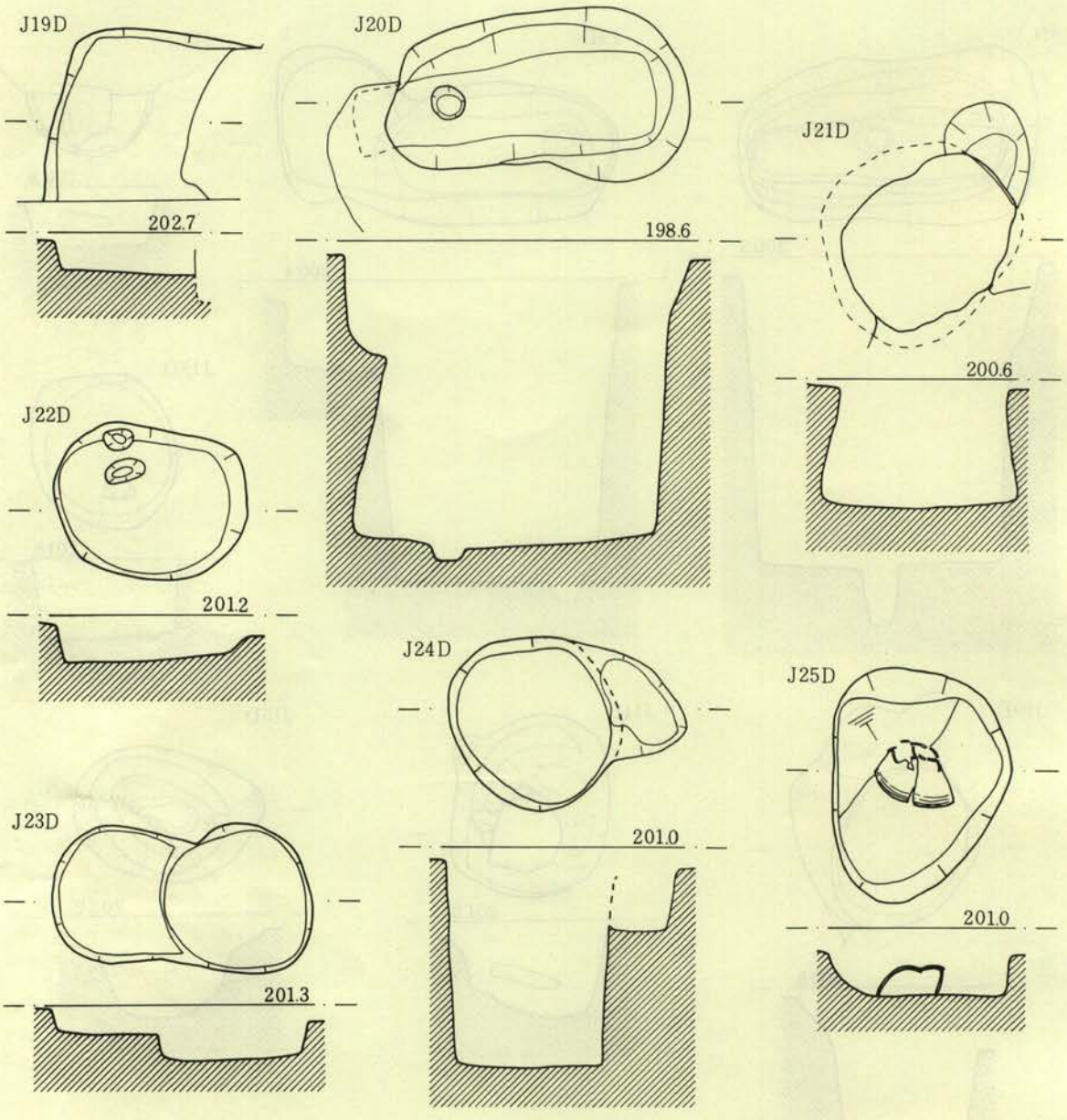
Ａ調査区２Ｌ―34Ｇポイント付近に検出され、24号住居跡の中央やや南寄りの床面に位置し、31号掘立柱建物跡のP_5によってその大半を切られている。形状は円形を呈すると考えられ、残存する東西長72㎝、深さ25㎝を測る。床面は平坦で、壁面は直線的に上部に連れて開口する。中央部から南壁に至り大きな礫が上面を平坦気味にして出土した。



第46図　縄文土坑(1)


J8D
200.3
J9D
200.4
J11D
200.6
J13D
201.8
J10D
200.6
J14D
201.9
J15D
202.2
J16D
201.8
J17D
202.1
J18D
202.7

第47図　縄文土坑(2)



第48図　縄文土坑(3)

J12号土坑

A調査区2K—34G、標高200.85m前後に検出され、24号住居跡の北西隅に位置する。形状・規模は調査の不手際から明瞭を欠いてしまった。

J13号土坑（第47図・第49図9～11）

A調査区2A—30・31Gに跨がり、4号溝内で検出された。東方にJ14号土坑、北方にJ9号住居跡が隣接する。残存する形状は楕円形を呈し、長軸長95cm、短軸長85cm、深さ45cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。

遺物は床面より10cmほど浮いた状態で安山岩質凝灰岩の礫器(11)、デイサイトの縦型石匙(9)、加曽利B1式の土器片(10)が出土した。

J14号土坑（第47図・第50図12）

A調査区T—30G・2A—30Gに跨がり、標高201.85m付近に検出された。南方の一部を4号溝が切っている。形状は南北に長い隅丸方形を呈し、長軸長1.05m、短軸長90cm、最深部で67cmを測る。底面は北西部に最深部があり緩やかに内湾して立ち上がり、西方を除いてテラス状の段を設けて直立気味の掘り込みとする。南方寄りに偏平な角礫と20cm前後の礫が検出された。

遺物は覆土内より表裏面に凹孔を穿ち、側面に敲打痕の残る輝石安山岩の凹石⑿が出土した。

J15号土坑（第47図）

A調査区2A—32G、標高202.00m付近に検出され、北方にJ8号住居跡、南方にJ7号住居跡が隣接する。形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長1.10m、南北長75cm前後、最深部で50cmを測る。底面は瓢箪形を呈し、直立気味に内湾して立ち上がり、上部で開口する。

J16号土坑（第47図）

A調査区2B・C—30Gに跨がり、標高201.70mに検出された。20号掘立柱建物跡のP_6と東方部分が重複する。形状は90～95cmの円形で深さ45cmを測る。底面は平坦で、壁面は上部に連れて直線的に開口する。

J17号土坑（第47図・第50図13～15）

A調査区2B・C—33Gに跨がり、標高202.00mに検出された。東方にはJ11号住居跡が隣接する。形状は1.26m前後の円形を呈し、中央部で深さ23cmを測る。床面は皿状で緩やかに内湾して壁面が立ち上がる。

遺物は覆土内より3点の土器片が出土した。⒀は直線的に開く肥厚する口縁部片で貝殻文を施す。⒁は口唇部を平坦とする口縁部片でLRとRLで羽状を構成する。⒂は太めの隆帯を貼付後にLRとRLで羽状を構成し、隆帯に沿って円形刺突文を施す。

J18号土坑（第47図）

A調査区2S—33G、標高202.60mに検出され、すぐ西にJ19Dが接する。このJ18DとJ19Dの中間に円形の攪乱がある。形状はやや東西に長い円形を呈し、東西長1.6m、南北長1.48m、深さ38cmを測る。底面はほぼ平坦で2カ所に小柱穴状の掘り込みがある。壁面は底面より直線的に開いて立ち上がる。

J19号土坑（第48図）

A調査区2S—34G、標高202.65m前後に検出され、東方を円形の攪乱によって切られている。形状は方形を呈すると考えられ、北辺で1.10mほどが残存する。底面はやや東下がりで壁面は直立気味に立ち上がる。

J20号土坑（第48図）

A調査区2F—26G、標高200.40mに検出され、16号掘立柱建物跡のP_1と重複する。形状は東西に長い楕円形を呈し、長軸長1.75m、短軸長は中央部で96cm、深さ1.65mを測る。西壁は底面よりオーバー

ハングし、他壁は直立気味に立ち上がり、上位を開口する。底面はほぼ平坦で20cm径の円形で深さ10cmの掘り込みがある。形状から落とし穴と考えられる。

J21号土坑（第48図・第50図16～18）

A調査区2J—29G、標高200.50mに検出され、19号住居跡と10号掘立柱建物跡のP_5と重複する。形状は、南北に長い楕円形を呈し、南北1.06m、東西84cmで深さ70cm、底面は南北1.15m、東西1.06mを測る。浅い皿状の床面からオーバーハングする壁面に移行する袋状土坑である。

遺物は覆土内より2個体の深鉢形土器が出土した。⑯は3単位の波状口縁を呈し、復元口径18.6cm、残存器高11.5cmを測る。地文は0段多条のLR・RLで羽状を構成する。⑰の底部は⑯と同一個体と考えられる。

⑱は直線的に外反する胴部より内湾気味に直立する口縁部に移行する深鉢形土器で、口径14.5cm、残存器高20.4cmを測る。口縁部と胴部には沈線状の軽い縦れがある。地文はLRとRLで羽状を構成する。

J22号土坑（第48図）

A調査区2L—36G、標高201.30mに検出され、25号住居跡によって上面を切られている。形状は、東西に長い楕円形を呈し、長軸長1.13m、短軸長86cm、深さ20cm前後を測る。底面は西方がほぼ平坦で東方は緩やかな傾斜面とし、北西部の2ヶ所に小柱穴状の掘り込みがある。壁面は東方を除いて直立気味である。

J23号土坑（第48図）

B調査区2M—52G、標高201.20mに検出された。南西に円形の攪乱穴が接する。形状は85cm前後の円形で深さ20cm程を測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。

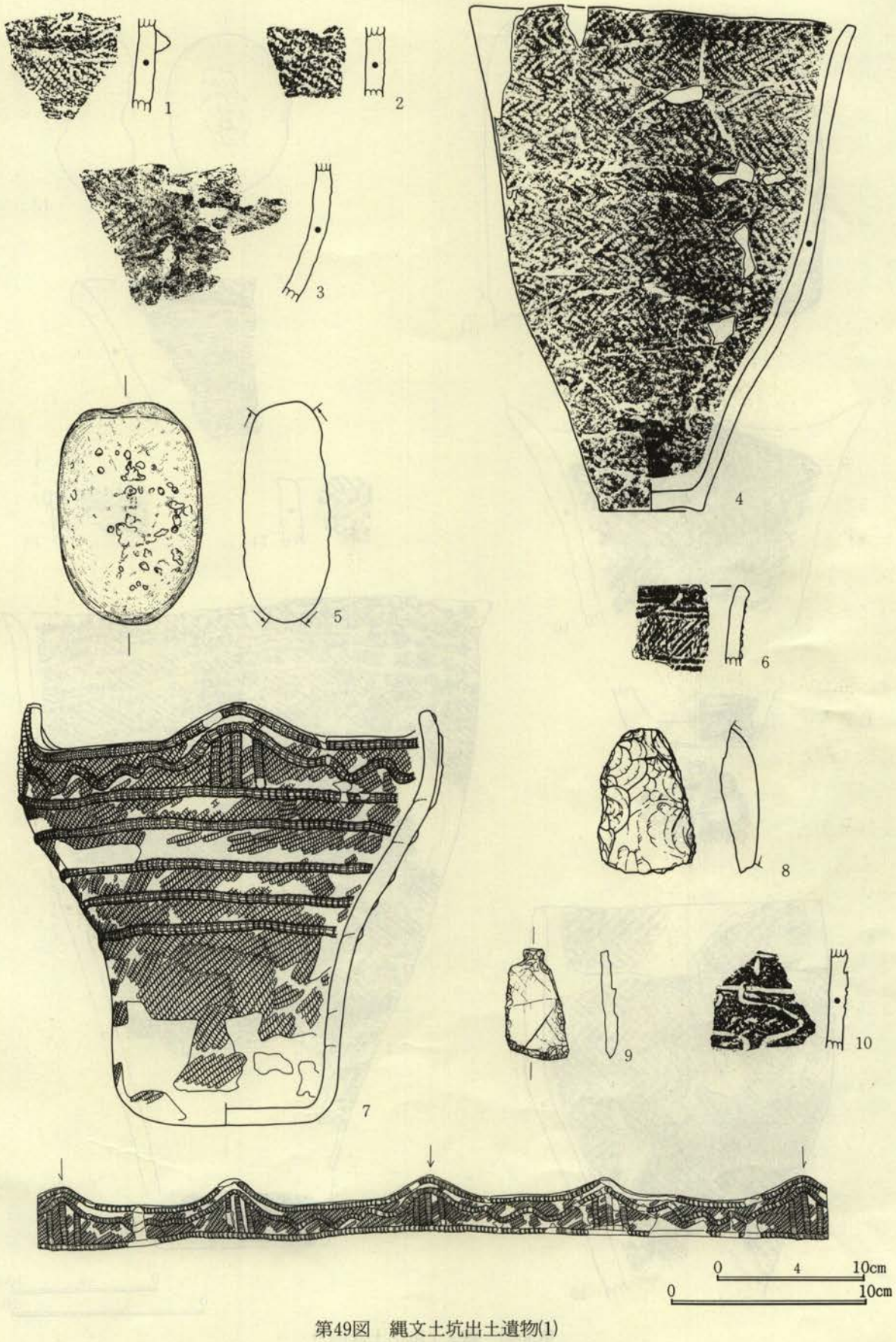
J24号土坑

A調査区2O・P—36・37Gに跨がり、標高200.90mに検出された。35号掘立柱建物跡のP_3に接する。形状は東西がやや長い円形を呈し、東西長1.03m、南北長94cm、深さ1.2mを測る。底面は平坦で、壁面は直立気味で円筒状の掘り込みである。

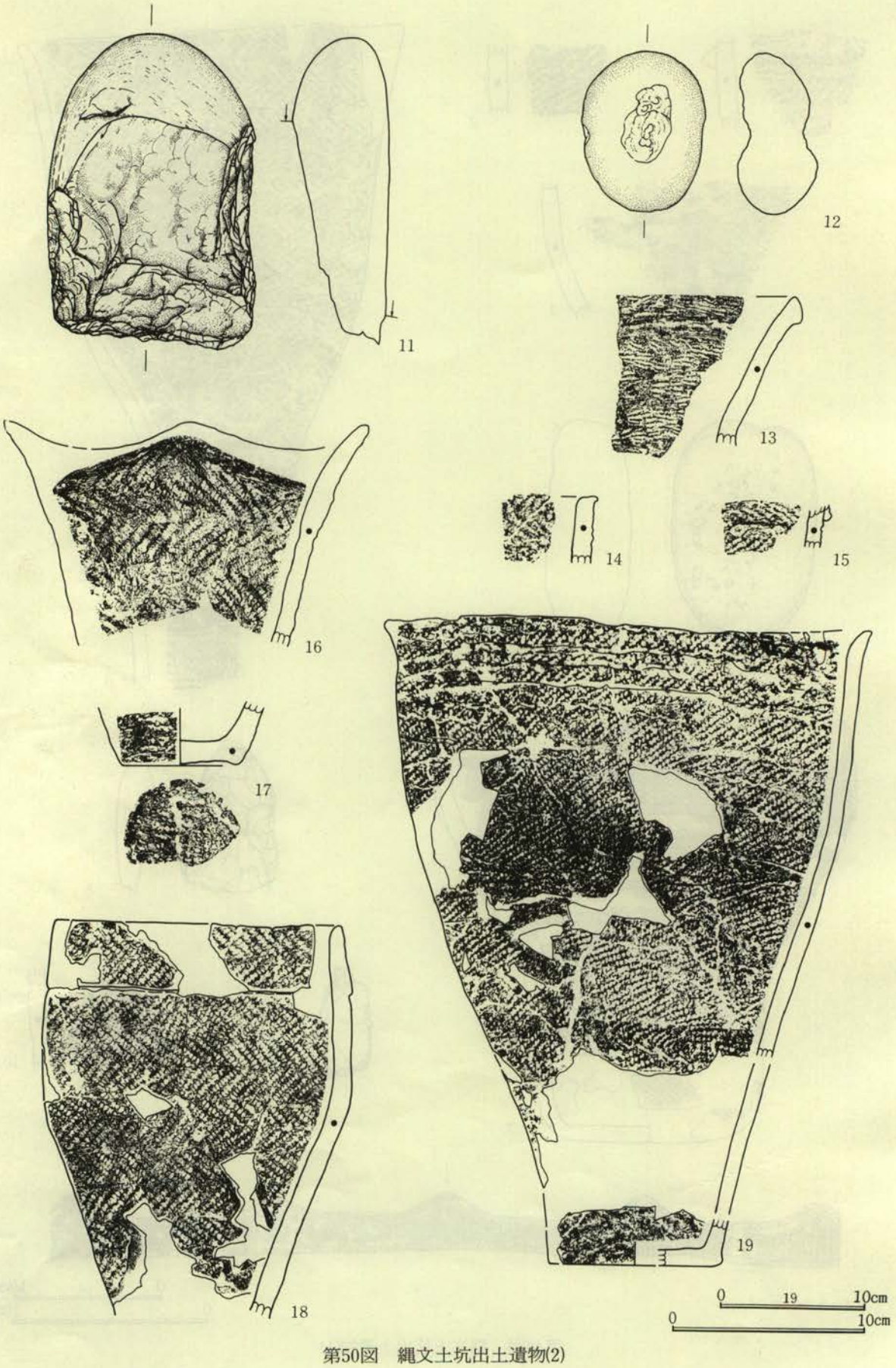
J25号土坑（第48図・第50図19）

A調査区2J—32G、標高200.90mに検出され、13号掘立柱建物跡と重複する。形状は東西に長いやや歪んだ楕円形を呈し、東西長約1.15m、南北最大長1.02m、深さ25cmを測る。壁面は北東部を除いてほぼ垂直気味に立ち上がる。底面の中央部に底部を欠損する深形土器⑲が出土。

平底の底部より緩やかに外反し、胴部上半で直立気味となり短く外反する口縁部に移行する。口径33cm、復元器高49.9cm、底径11.5cmを測る。縄文はLRを充填する。



第49図　縄文土坑出土遺物(1)



第50図　縄文土坑出土遺物(2)

⑶ 表土・グリット等出土遺物

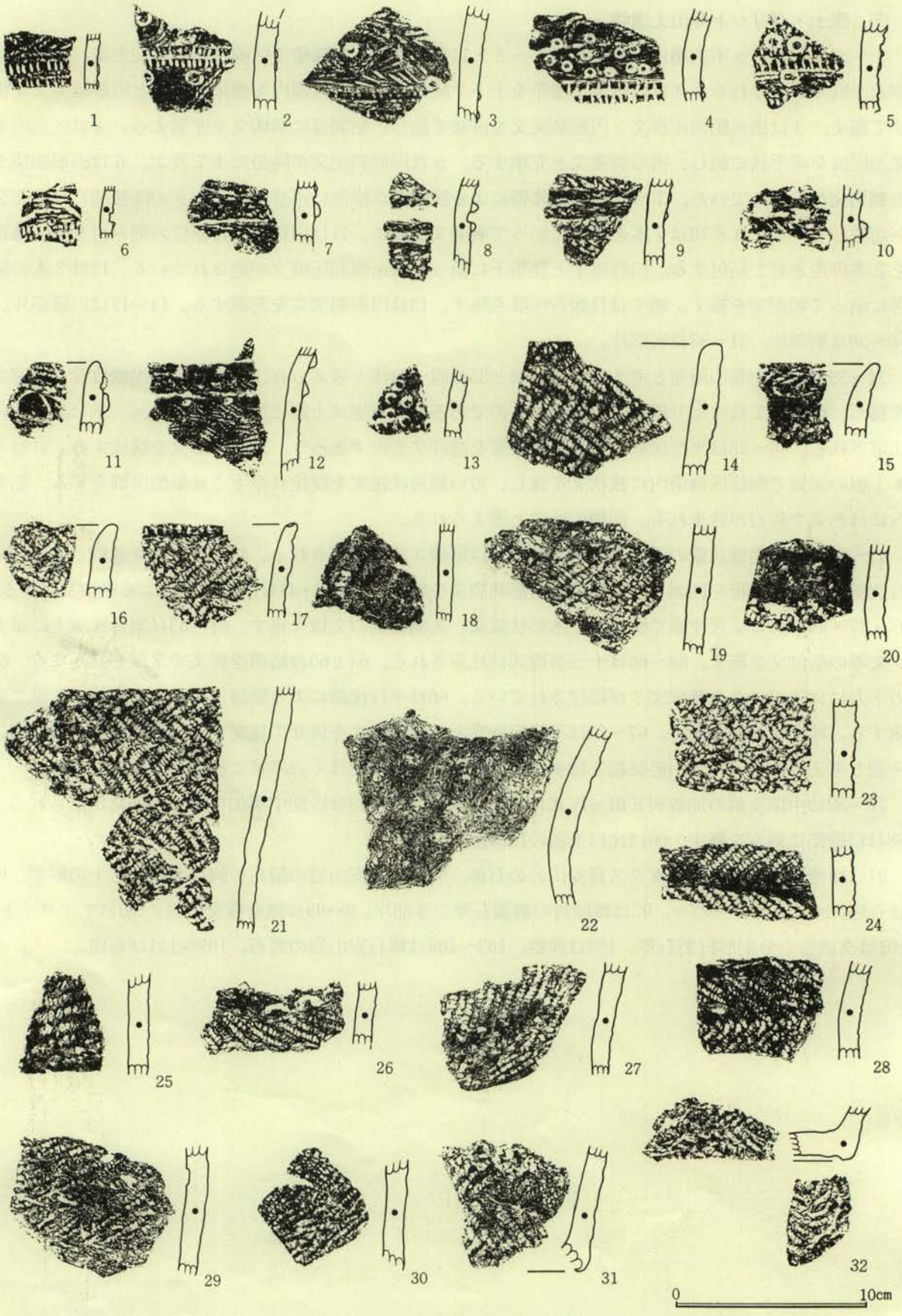
1～33は前期二ッ木式期に該等する。1～6・11は刻み目を細隆帯で区画される有文土器。1は撚糸側面圧痕文が施される。2は口縁部文様帯を上下2段に区画し、区画内を撚糸圧痕文と円形刺突文を併せて施す。3は撚糸側面圧痕文と円形刺突文を併せて施し、空間部に刺切文を充填する。4は区画内を撚糸圧痕を蕨手状に施し、円形刺突文を充填する。5は円形刺突文が隆帯にまで及ぶ。6は円形刺突文と刺切文が施されている。7～10・12は隆帯による区画文が横位に巡りる。7と9の隆帯間には刺突文が連続している。8と10は2本の隆帯に沿って刺突文を施す。11は口唇部下に斜位の刻み目を施す隆帯を2本併走させて貼付する。口唇直下と隆帯下に沿って撚糸側面圧痕文が施されている。12は2本の隆帯に沿って刺突文を施す。地文は貝殻背圧痕を施す。13は円形刺突文を充填する。14～17は口縁部片。18～30は胴部片。31～33は底部片。

34～39は前期中葉の所産と考えられる。34と35は同一個体と考えられ、口唇部下に半截竹管で刺突文を施し、櫛歯状工具により菱形文を意匠するのであろう。有尾式土器に比定される。36～39は黒浜式に比定される。36～38は平行沈線により菱形文等を意匠するのであろう。39は菱形文を構成する。41は3本1組の工具で横位区画帯内に波状文を施し、短い刺突状施文を縦位に垂下させ縦位区画をする。胎土内には石英や片岩が含まれる。前期の所産と考えられる。

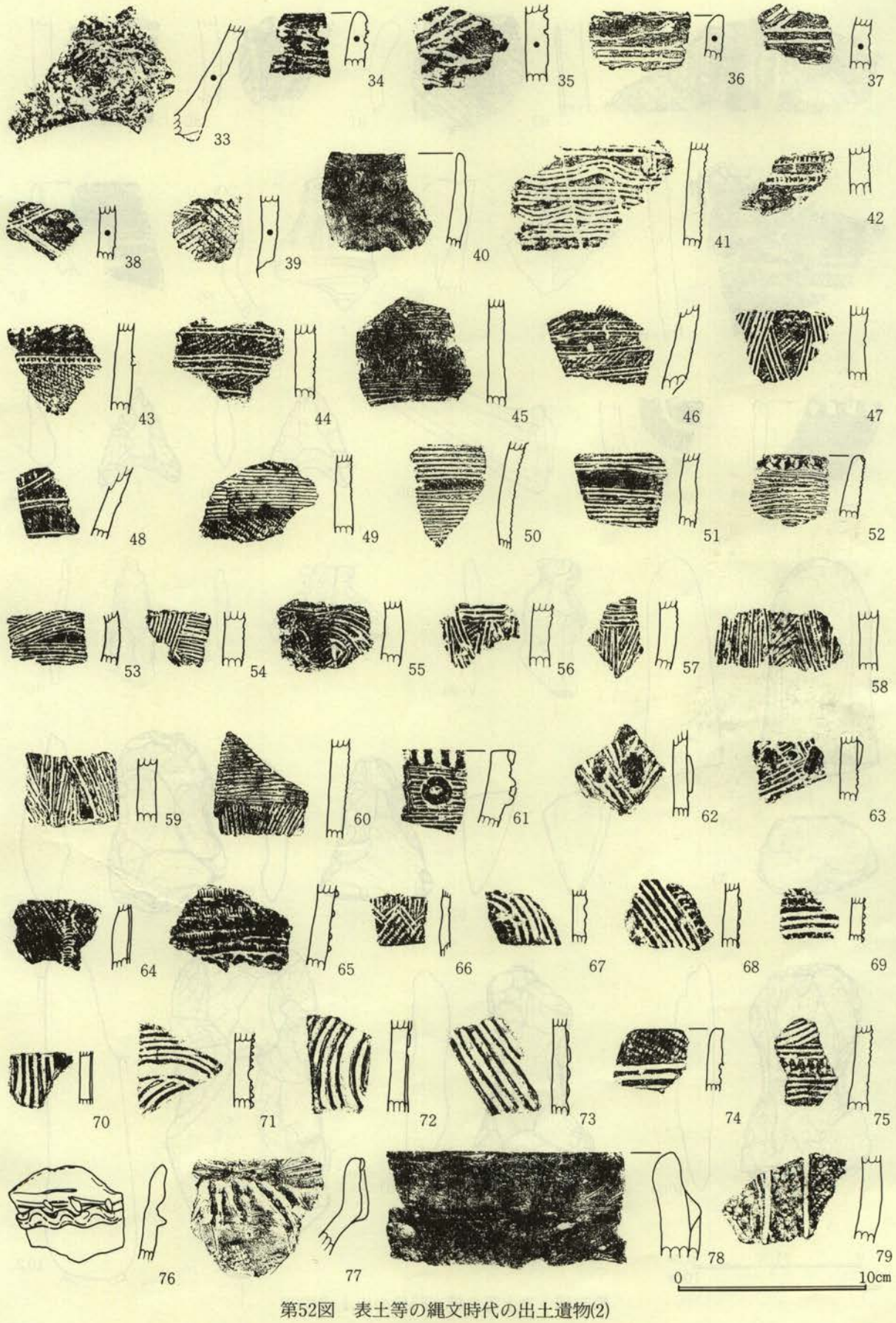
42～63は前期諸磯式期の所産である。42と43は諸磯a式に比定される。43は爪形文を連続して施す平行沈線により文様帯を区画し、空間部に円形刺突文を施す。44・46・48は平行沈線による横位文が巡る。45・47・49～60は集合沈線で横位文や木葉状弧文、矢羽根状の文様を施す。61～63は集合沈線上にボタン文等の貼付文を施す。64～66は十三菩提式に比定される。64と65は結節浮線文で文様を意匠する。65の下方には隆線による波状文？が貼付されている。66は平行沈線による鋸歯文の上方を縦位の沈線で充填する。地文はLRを施す。67～73は半隆起線文と結節浮線文を併せて施文する。十三菩提式並行期の所産と考えられる。76は山形突起を付す口縁部片で76は77は77はくの字状に屈曲する口縁部片で、

78～82は中期後葉の加曽利EIII～IV式に比定される。83～89は後期中葉加曽利B式期に比定される。88は口唇部に刻みを施す。90は注口土器の注口部。

91は緻密質安山岩、92はガラス質安山岩の石鏃。93は輝石安山岩の敲石。94はデイサイトの縦型、95は石匙。96はスクレーパー。97は輝緑岩の磨製石斧で基部片。98・99は緻密質安山岩、100はデイサイト、101は玄武岩の分銅形打製石斧。102は礫器。103～108は輝石安山岩の磨石。109～111は石皿。

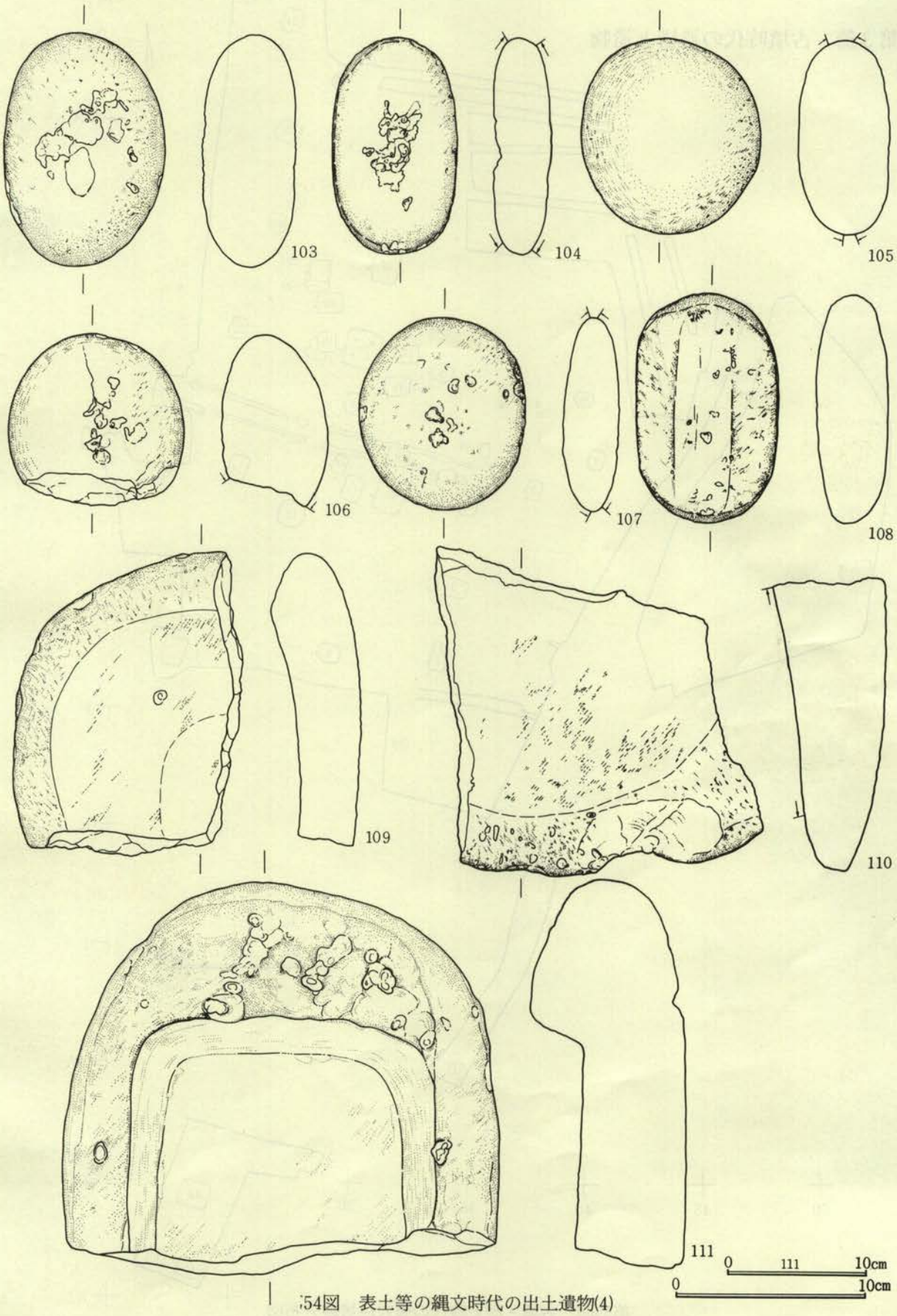


第51図　表土等の縄文時代の出土遺物(1)

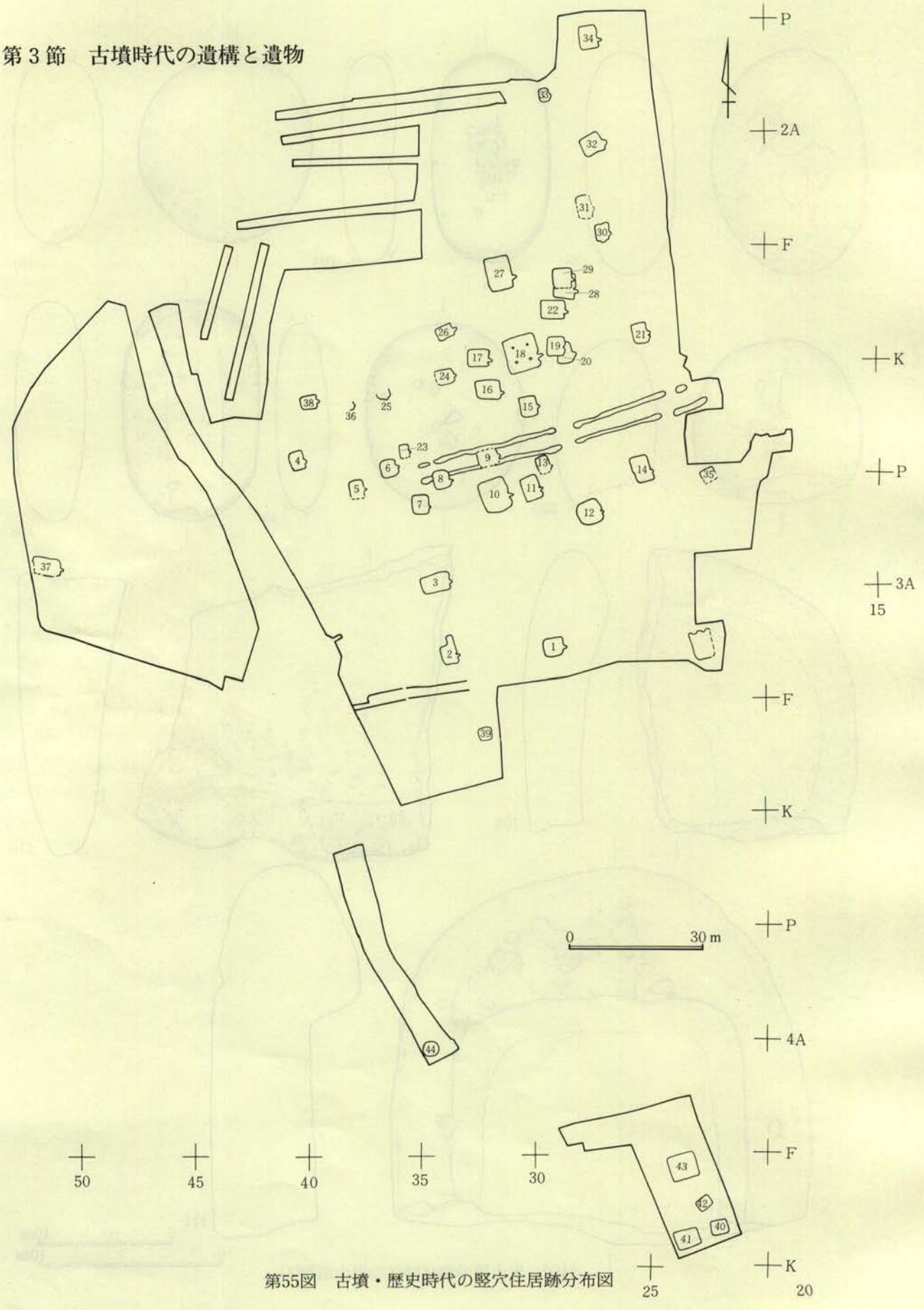


第52図　表土等の縄文時代の出土遺物(2)

第53図　表土等の縄文時代の出土遺物(3)



54図　表土等の縄文時代の出土遺物(4)



第55図　古墳・歴史時代の竪穴住居跡分布図

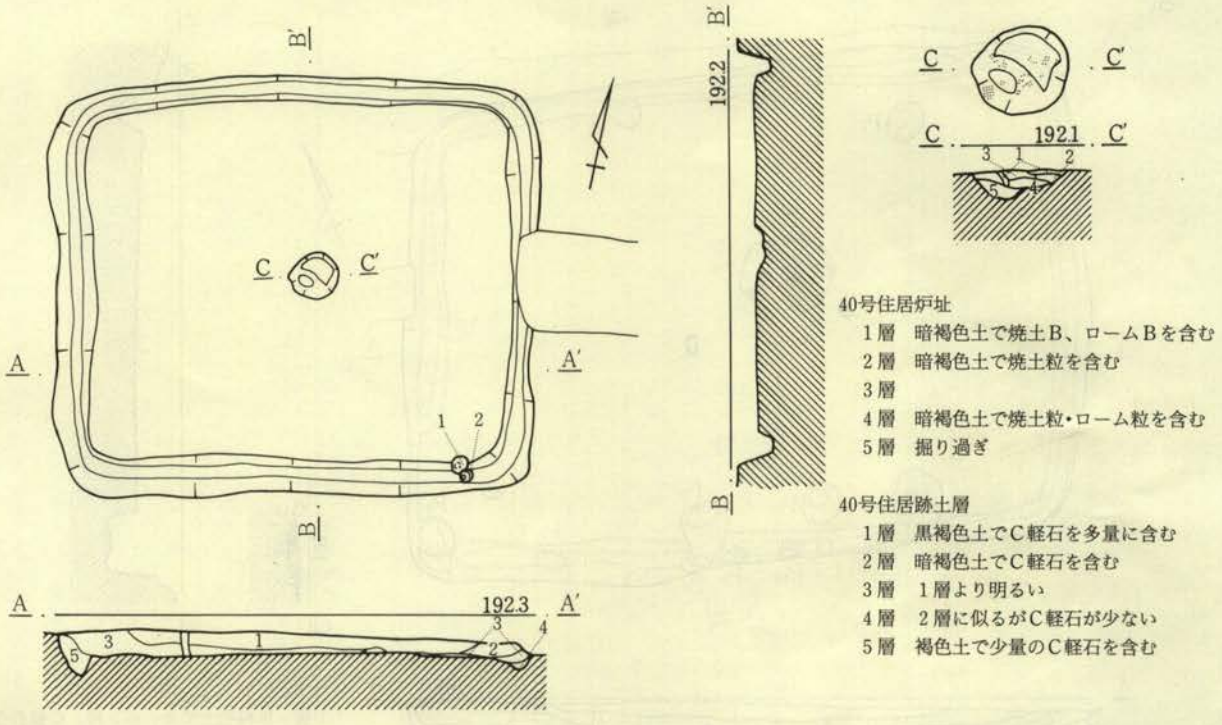
40号住居跡（第56図）

D調査区の4Ⅰ—21・22G、標高192.00m付近に検出された。西方に41号住居跡、北方に42号住居跡が隣接する。

形状は、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸長3.8m、短軸長3.2m前後を測る。長軸方向は、N—77°—Eである。掘り込みは、4～28cmが残存する。

床面は、平坦であるがさほど硬化していない。周溝は、幅15～20cm、深さ6～13cmで全周する。柱穴と貯蔵穴は検出されなかった。炉址は、四隅の対角線のほぼ交点に配され、35×40cmの円形で深さ7cmである。

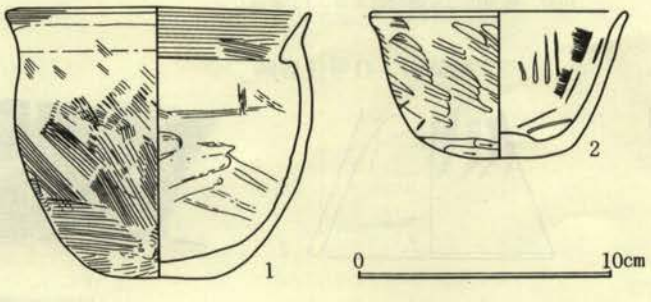
遺物は、南東隅の周溝上に小形甕(1)と坏形土器(2)が出土した。



第56図　40号住居跡

40号住居跡出土遺物観察表（第57図1・2）

No.	器種	法量		胎土	焼成	色調	備考
1	小型甕	口径12.0	器高10.8	粗砂粒	良好	淡褐色	胴部と口縁部内面は櫛歯状工具による調整
2	碗	口径10.2	器高 5.8	粗砂粒	良好	暗褐色	外面は斜位の撫で、内面は横位の撫で。



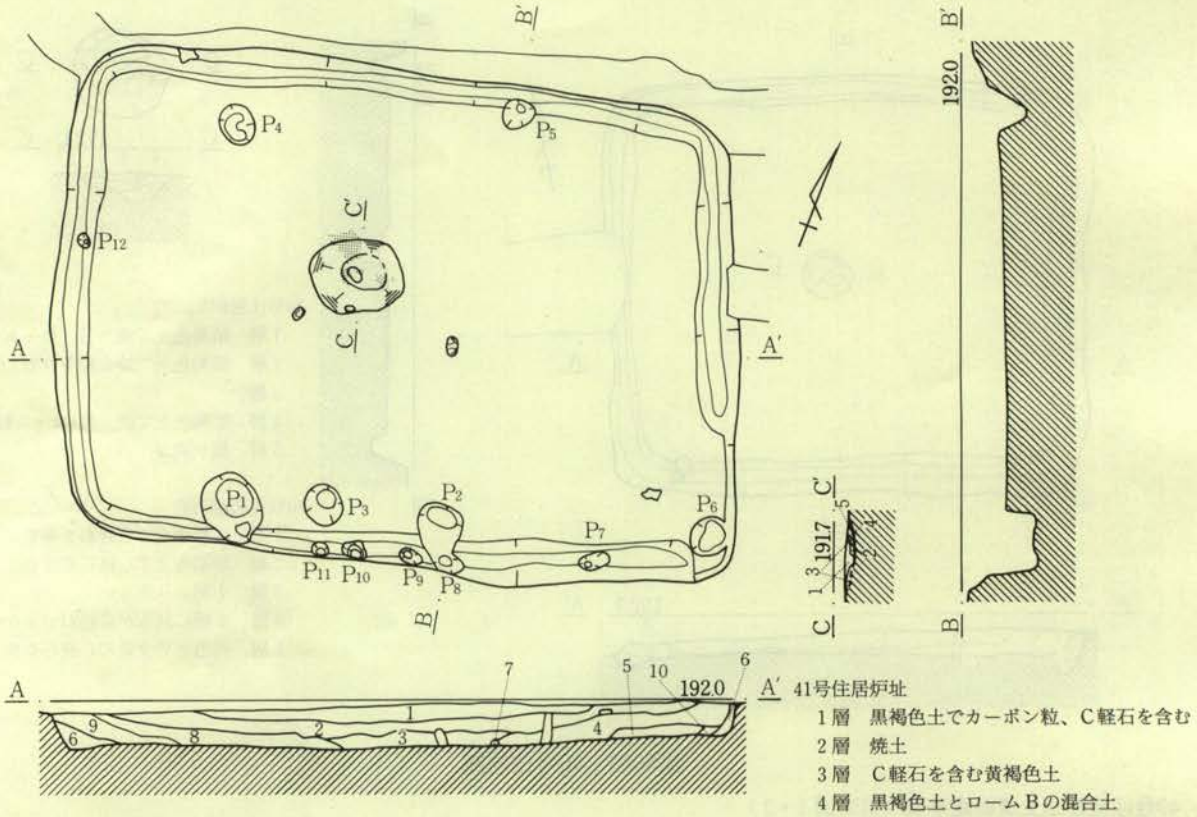
第57図　40号住居跡出土遺物

41号住居跡（第58図）

D調査区の4Ⅰ—22・23G、J—23G、標高191.80～90m付近に検出された。東方に40号住居跡が隣接する。北辺と東辺の一部に耕作溝が走行する。

形状は、東西に長隅丸長方形を呈する。規模は、長軸長5.40m、短軸長4m前後を測る。長軸方向はN—71°—Eである。掘り込みは、16～32cmが残存する。床面はやや南傾斜を呈している。周溝は、南東部を除いて連続し、幅20cm前後、深さ2～8cmを測る。

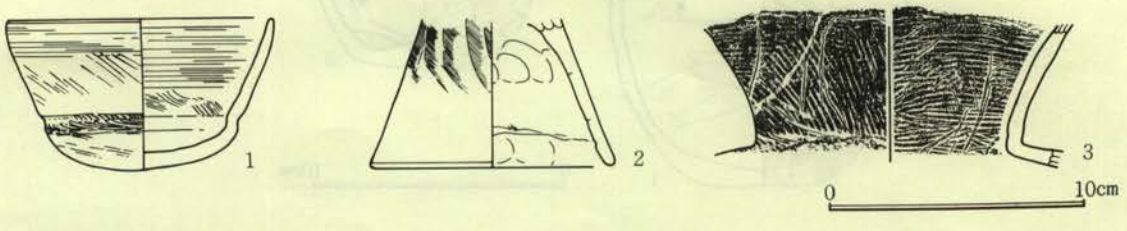
柱穴状掘り込みは、P_1～P_5とP_7～P_{12}が検出された。P_1～P_3は入り口部に拘わる柱穴と考えられる。貯蔵穴は明確な判断はできないが南東隅に設けられたP_6の掘り込みの可能性が考えられる。規模は30cm前後の円形で深さ8cmと浅い。炉址は中央やや北西寄りに配され、76×60cmの楕円形で最深部で7cmである。



41号住居炉址
1層　黒褐色土でカーボン粒、C軽石を含む
2層　焼土
3層　C軽石を含む黄褐色土
4層　黒褐色土とロームBの混合土
5層　ハードローム

41号住居跡土層
1層　黒褐色土でFPを含む
2層　黒褐色土でFPを多量に含む
3層　暗褐色土でFP、ロームBを含む
4層　暗褐色土でFPを含む
5層　暗褐色土で4層より暗い
6層　暗褐色土で少量のFPを含みソフト
7層　ロームB
8層　暗褐色土でFPを2層より多く含む
9層　暗褐色土で多量のFPを含む
10層　暗褐色土で黒褐色土B、FPを含む

第58図　41号住居跡



第59図　41号住居跡出土遺物

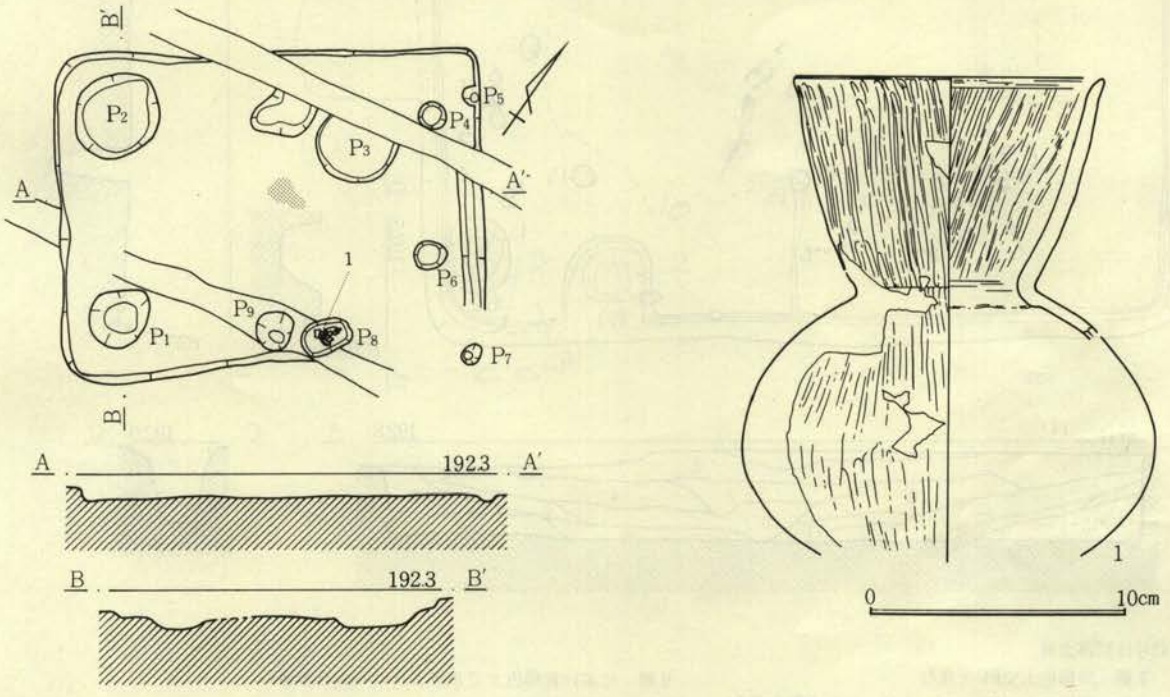
41号住居跡出土遺物観察表（第59図１～３）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坩	口径(10.5)　器高 6.0	微砂粒	良好	褐色	
2	脚部	底径9.5	微砂粒	良好	褐色	脚台付甕の脚部片
3	甕		粗砂粒	良好	淡褐色	内外面に櫛歯状工具による撫で。

42号住居跡（第60図）

D調査区の４G—22Gと４H—22G、標高192.10～20m付近に検出された。南方に40・41号住居跡、北方に43号住居跡が隣接する。２本の耕作溝が壁の一部を破壊している。

形状は、南西～北東方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は、長軸長3.30m、短軸長2.40～60mを測



第60図　42号住居跡・出土遺物

る。長軸方向はN—50°—Eである。掘り込みは、６～８cmが残存する。床面はほぼ平坦である。周溝は、東辺に一部検出され、幅15cm、深さ５cmを測る。柱穴状掘り込みは８カ所に検出された。炉址は、明確でないが、ほぼ中央部分に分布する焼土と考えられる。

遺物は、P_8の底面より坩形土器が出土した。

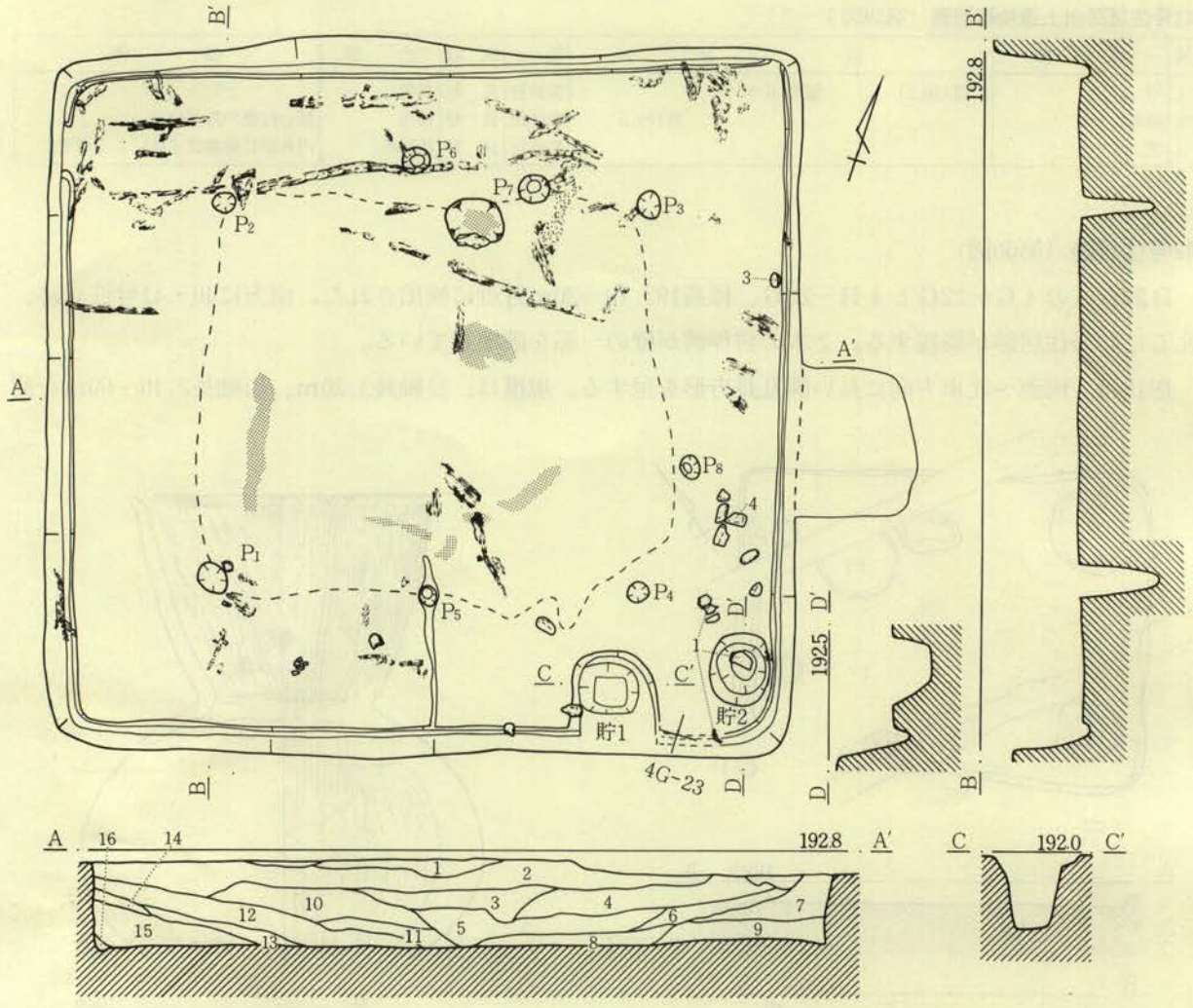
42号住居跡出土遺物観察表（第60図１）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坩	口径 12.0	粗砂粒	良好	淡黄褐色	器面の外面を丁寧な磨き

43号住居跡（第61図）

D調査区の４F・G—23・24G、標高192.60～.70m付近に検出された。南東方向に4.5mほど離れて42号住居跡が隣接する。

形状は、やや東西に長い方形を呈する。規模は、東西長6.05m、南北長5.6～5.7mを測る。長軸方向は、N—72°—Eである。掘り込みは、ほぼ垂直気味で42～71cmの深さを測る。



43号住居跡土層

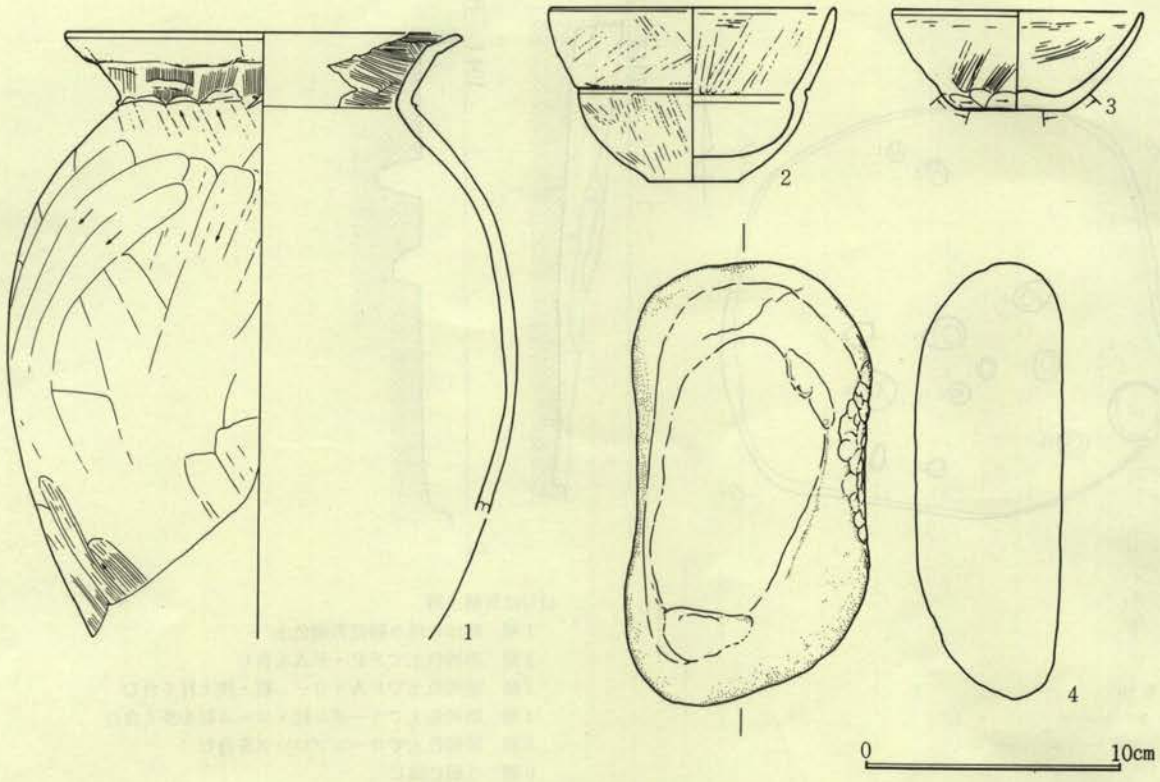
1層　黒褐色土でFPを含む
2層　暗褐色土でFP、ロームB、ローム粒を含む
3層　暗褐色土で2層より暗い
4層　暗褐色土で斑点状にロームBを含む
5層　暗褐色土で4層よりロームBが少ない
6層　黒褐色土
7層　暗褐色土で4層に似る
8層　にぶい黄褐色土で焼土粒、ロームBを含む
9層　にぶい黄褐色土で8層よりロームBが多い
10層　4層に似る
11層　暗褐色土で大きめのロームBを含む
12層　暗褐色土でロームB、ローム粒を少量含む
13層　6層に似る
14層　にぶい黄褐色土でロームBを多量に含む
15層　9層に似る
16層　ローム崩壊土

第61図　43号住居跡

床面は平坦で、P_1～P_4の内部は硬化面が分布する。床面上には、中央やや北寄りとP_1の南方、P_5の北方に建築部材が炭化して残存する。周溝は、幅5～8cm、深さ2～10cmでほぼ全周している。

柱穴は8カ所に検出され、P_1～P_4が主柱穴である。主柱穴は、ほぼ4隅の対角線上に位置している。P_1は27×23cmの楕円形で深さ66cm、P_2は20×17cmの円形で深さ60cm、P_3は22×19cmの円形で深さ61cm、P_4は18×19cmの円形で深さ63cmである。柱間はP_1～P_2・P_3～P_4が3m、P_2～P_3・P_1～P_4が3.4mである。P_1とP_4の中間にP_5が配され、南壁に向けて間仕切状に浅い溝が検出された。P_6～P_8は5cm前後の浅い掘り込みである。

貯蔵穴は、南東隅に2カ所検出された。貯蔵穴1は南壁に南北65×東西70cmのU字形の浅い掘り込み



第62図　43号住居跡出土遺物

に47×40cmの方形で深さ50cmの掘り込みを設けている。貯蔵穴2は南東隅に配され、57×49cmの楕円形で深さ32cmを測る。炉址は、P_2とP_3のライン上でやや東寄りに配されている。50×40cmの浅い楕円形を呈し、内部は焼土化している。南の立ち上がり部分に一石を設けている。

遺物は、南東隅と貯蔵穴の底面より甕形土器(1)、東壁の中央やや北寄りで坏形土器(3)、南東部に薦石が散在して出土した。

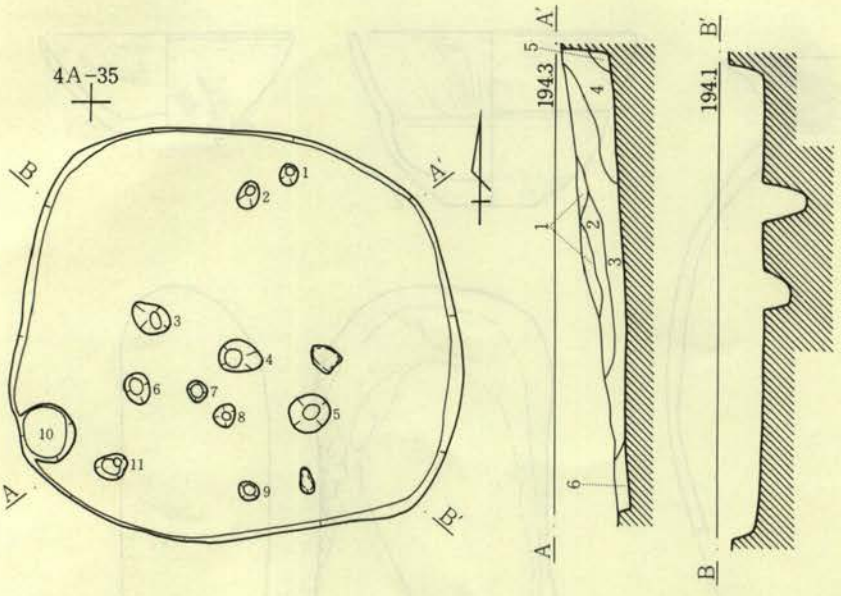
43号住居跡出土遺物観察表（第62図1～4）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口径 15.6	残存器高23.7		粗砂粒	良好	褐色	胴部は篦削り調整
2	坩	口径(11.1)	器高 6.8	底径3.6	微砂粒	良好	淡黄褐色	丁寧な磨き
3	坏	口径 9.9	器高 3.8	底径4.4	微砂粒	良好	くすんだ褐色	底部と体部下半に篦調整
4	敲石	全長 17.4	幅 9.6	厚さ5.8	重量1545g			石材は輝石安山岩　片側面に敲打痕

44号住居跡（第63図）

C調査区で検出された唯一の遺構であり、南端の標高194.00m前後を測る傾斜面に位置する。形状は、東西に長い歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西長3.50m、南北長3.23mを測る。掘り込みは垂直気味で、残存の良い北東壁で37cmで南西方向に連れて壁高を減らす。床面は緩やかに南方に傾斜する。柱穴は10カ所に検出されたが、P_7・P_8・P_{11}は住居跡に帰属しない新しい掘り込みである。周溝は検出されなかった。炉址は中央部のP_4と考えられるが、明確ではない。

出土遺物は皆無に等しく、時期決定には資料不足であるが、覆土で確認されるC軽石から古墳時代の所産と考えられる。



44号住居跡土層

1層　耕作に伴う砂質黒褐色土
2層　黒褐色土でＦＰ・ＦＡを含む
3層　暗褐色土でＦＡ・ローム粒・焼土粒を含む
4層　暗褐色土でカーボン粒・ローム粒を多く含む
5層　暗褐色土でロームブロックを含む
6層　5層に同じ

第63図　44号住居跡

第4節　歴史時代の遺構と遺物

本遺跡において、9世紀前半代から10世紀前半代に至る竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝等がA調査区とB調査区に検出された。その大半は9世紀の所産と考えられる。

竪穴住居跡は、39軒が検出され、A調査区の南東隅には竪穴状遺構がある。その大半はA調査区に集中し、37号住居跡のみがB調査区で検出された。特質すべきは、県内では二例目となる礎石を有する18号竪穴住居跡があり、本遺跡の竪穴住居跡では最大の規模を有する。(註1)

掘立柱建物跡は、竪穴住居跡とほぼ同数に近い37軒がA調査区の中央部に南北に連なって検出され、中には大形の掘り方を伴う建物跡がある。礎石遺構は、A調査区の北東に検出されたが明確な結論は導き出せなかった。道路址は、A調査区の中央やや南寄りに東西に走行して2条の側溝が検出された。

遺物として注目されるのは、古代集落における文字資料がある。県内6例目の検出事例である3号住居跡出土の「立」の印文の焼印、焼印と同じ「立」の墨書土器、刻書紡錘車等がある。また、県内では初見である鉄製の把手付鍋がある。(註2)その他の鉄製品には、鞘口金具・兜金・鉄鏃・馬具・金鉗・鎌・刀子・火打鎌・飾釘等の多種が出土し、管見では類例のない17号住居跡出土の青銅品の八角柱管がある。把手付鍋は、鉄製品の模倣である土製のものを含め、関東では類例の少ないものである。石製品では、刻書紡錘車、腰帯具である石製の巡方(潜り穴)等がある。

これらの遺構、遺物は一般的な集落の様相とは異なり、井上氏が言う「郡衙でも一般集落でもない遺跡」(註3)としている官衙的な要素が垣間見られる集落跡である。

(註1)群馬県では、糸井宮前遺跡の平安時代の第32号住居跡が知られている。本遺跡の礎石を有する住居跡の状況を見聞した石野博信氏は、「古代住居の話」(吉川弘文館)のあとがきに「礎石をもつ穴屋」としてコメントを記している。

(註2)鉄製の把手付鍋は、管見の限りでは秋田城と多賀城に出土例があり、本県では境町三ッ木遺跡より銅製品の出土例がある。

(註3)井上尚明氏は、郡衙の下位に位置する官衙としての郷家あるいは郷衙の存在を肯定している。

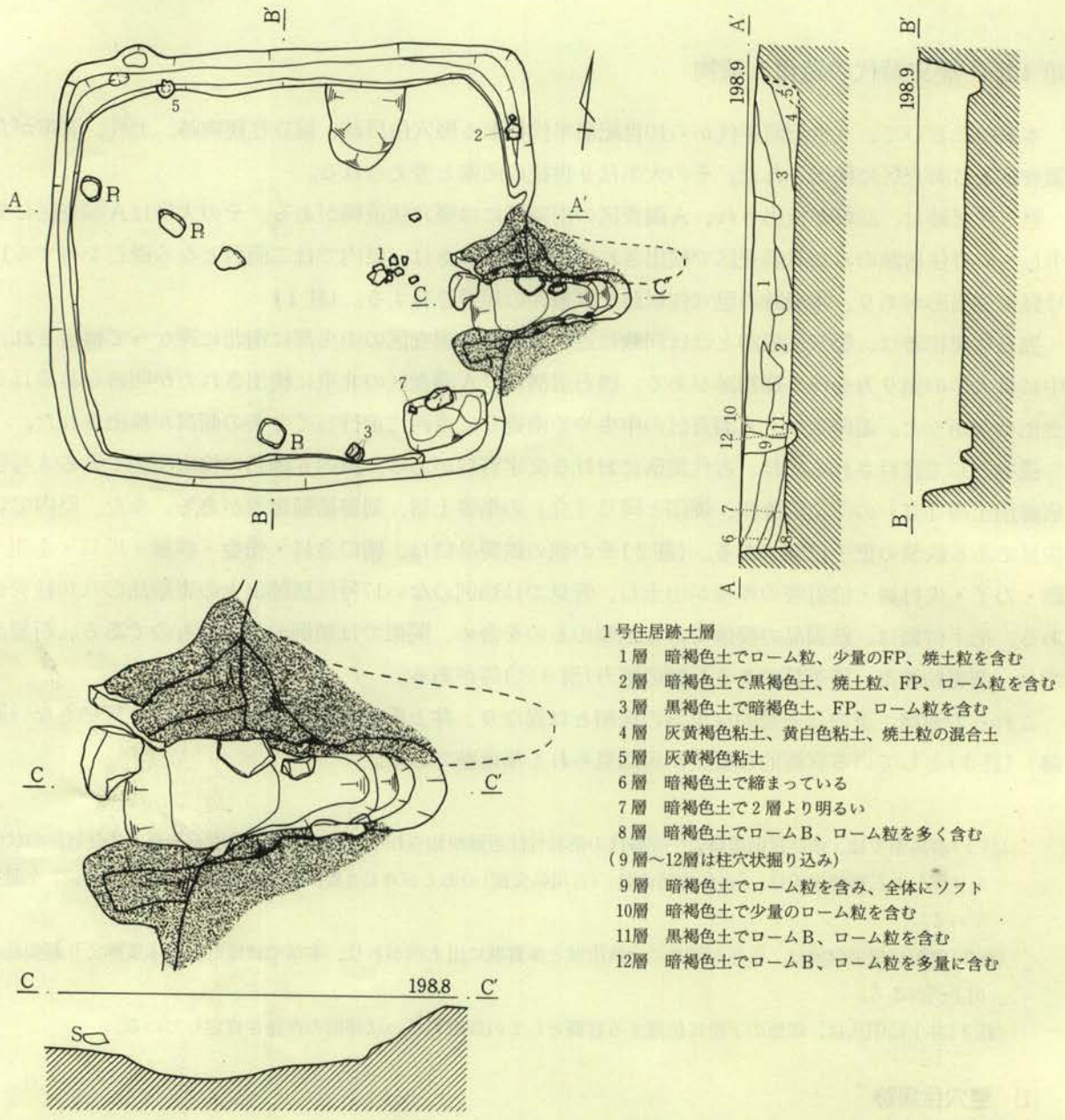
(1)　竪穴住居跡

1号住居跡（第64図）

3区C・D－28・29G、標高198.80mに検出された。当該期の竪穴住居では最南に位置し、西方に1号掘立柱建物跡・2号住居跡、北西方向に6号掘立柱建物跡が配されている。

平面形は、東西にやや長い隅丸方形を呈し、東壁はカマドの左右が30cm程食い違う。規模は、東西長4.4m、南北長3.9mを測る。主軸はN－77°－Eを示す。壁は30～40cmが残存する。周溝は貯蔵穴とカマドの両脇を除いて連続し、幅は10～30cm、深さ5～10cmを測る。床面は安定した平坦面で硬く締まっている。柱穴はP_1～P_3の3カ所に検出されたが、P_2は住居跡より新しい。貯蔵穴は南東隅に設けられ、長軸75cm、短軸45cmで、東辺がやや短い長方形を呈し、底面は8の字状に窪む。カマドは作り替えが行われている。最終使用のカマドは東壁中央やや南寄りに灰白色粘土と礫によって構築され、焚き口より煙道部まで1.6mを測る。

遺物は、カマド前面に甕(1)、貯蔵穴に砥石(7)、南壁のP_3と貯蔵穴の中間(3)、北壁の西方の周溝(5)に須恵器坏、東壁の北方の周溝上に土師器小型甕(2)が出土。



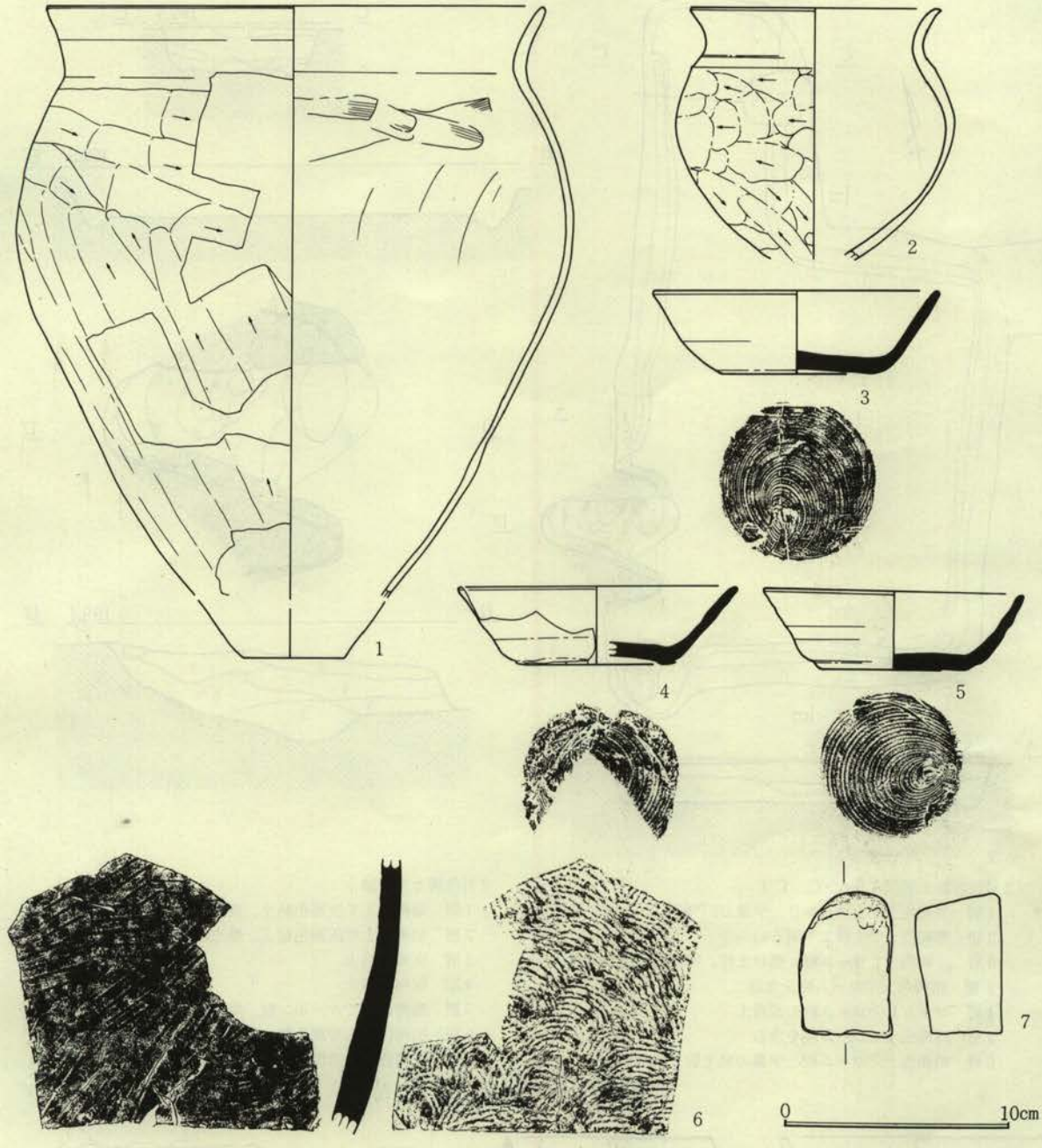
第64図　1号住居跡・カマド跡

1号住居跡出土遺物観察表（第65図1～7）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（22.0） 残存器高 26.3 胴部最大径 35				
2	脚台付甕（土師器）	口径（10.8） 残存器高 11.3 胴部最大径 12.4	粗砂粒	普通	暗褐色	
3	坏（須恵器）	口径 11.5 器高 3.5 底径 6.7	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
4	坏（須恵器）	口径 12.2 器高 3.5 底径 7.2	微砂粒	良好	灰褐色	底部周縁に重ね焼き痕
5	坏（須恵器）	口径 12.8 器高 4.2 底径 7.0	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り未調整
6	甕（須恵器）		微砂粒	良好	灰褐色	外面平行叩目・内面青海波の当て目
7	砥石（石製品）	長さ 6.4 最大幅 4.3 重量 183g				石材は流紋岩 表裏面と側面使用

2号住居跡（第66図）

3区C・D－33・34G、標高199.30mに検出された。南東に1号掘立柱建物跡、西方の張り出し部で

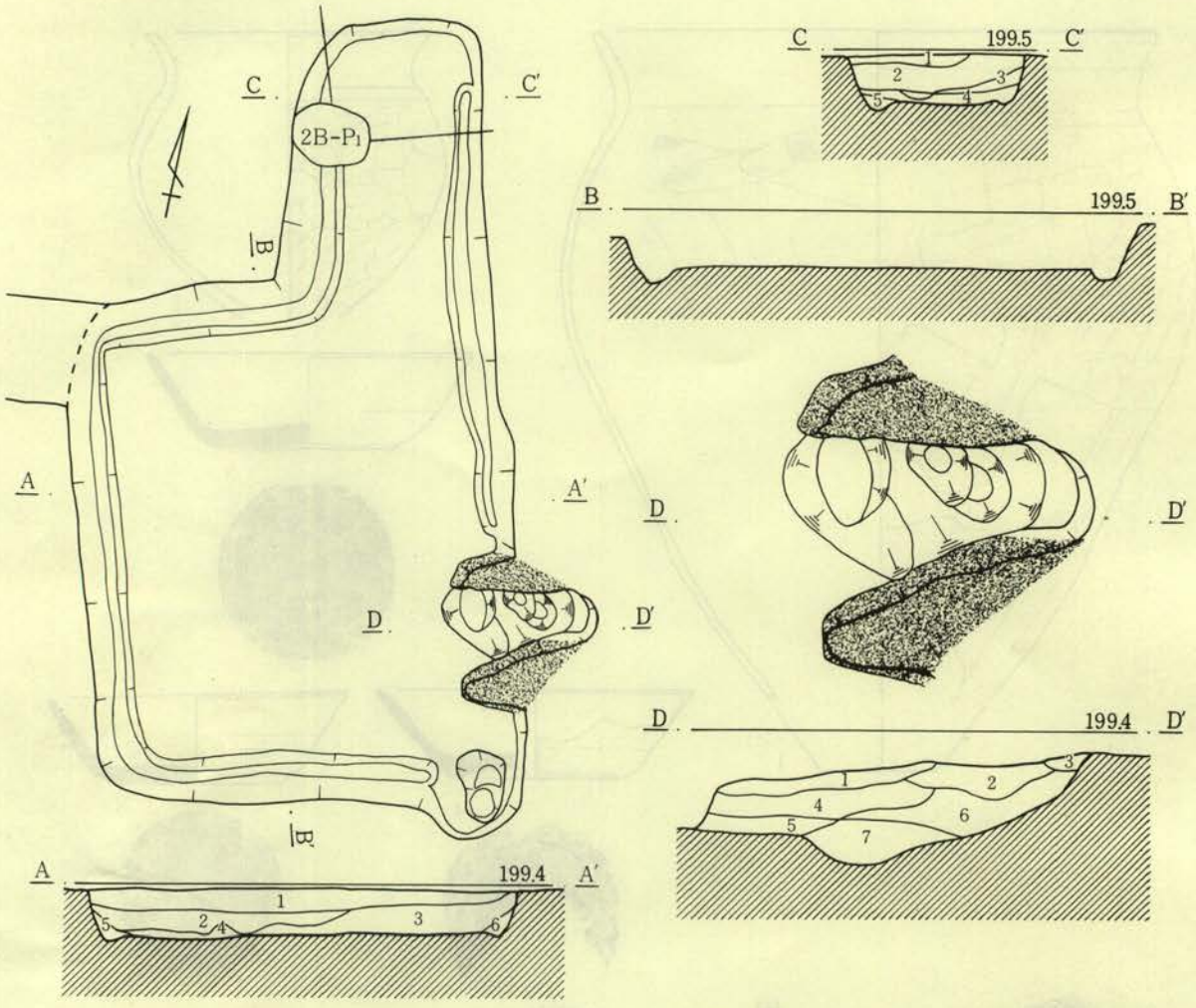


第65図　1号住居跡出土遺物

2号掘立柱建物跡のP_1と重複する。新旧関係は本住居跡が2号掘立柱建物跡を切っている。

平面形は南北にやや長い隅丸方形を呈し、北壁の東寄りに張り出し部を設け、貯蔵穴部分も南方に突出する。規模は(張り出し部を含めた)南北長6.2m、東西長3.5m、張り出し部は最大幅1.7mで2m程北に突出する。主軸はN－77°－Eを示す。壁は27～40cmが残存する。周溝は張り出し部の先端部分とカマド・貯蔵穴部分を除いて連続し、幅30cm、深さ10cm前後を測る。床面はほぼ平坦で、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に設けられ、55cm×40cmの歪んだ楕円形を呈し、深さ41cmを測る。カマドは東壁の南寄りに灰褐色粘土で構築され、焚き口より煙道部まで1.25mを測る。

遺物は、貯蔵穴より刀子(3)、覆土内より土師器坏と須恵器坏片が検出された。



2号住居跡土層（A－A′・C－C′）

1層　黒褐色土で小ロームB、少量のFPを含む
2層　黒褐色土で1層より明るい
3層　暗褐色土でローム粒、焼け土粒、灰白色粘土を含む
3'層　暗褐色土でローム粒を含む
4層　ロームBとローム粒の混合土
5層　暗褐色土でローム粒を含む
6層　暗褐色土でローム粒、少量の焼土粒を含む

2号住居カマド跡

1層　暗褐色土で灰褐色粘土、焼土粒、少量の黒褐色土を含む
2層　暗褐色土で灰褐色粘土、焼土粒を含む
3層　灰褐色粘土
4層　灰褐色粘土
5層　暗褐色土でカーボン粒、焼土粒、ローム粒を含む
6層　灰褐色粘土で焼土粒、少量のカーボン粒を含む
7層　灰褐色粘土で焼土B、ロームB、暗褐色土を含む

第66図　2号住居跡・カマド跡

第67図　2号住居跡出土遺物

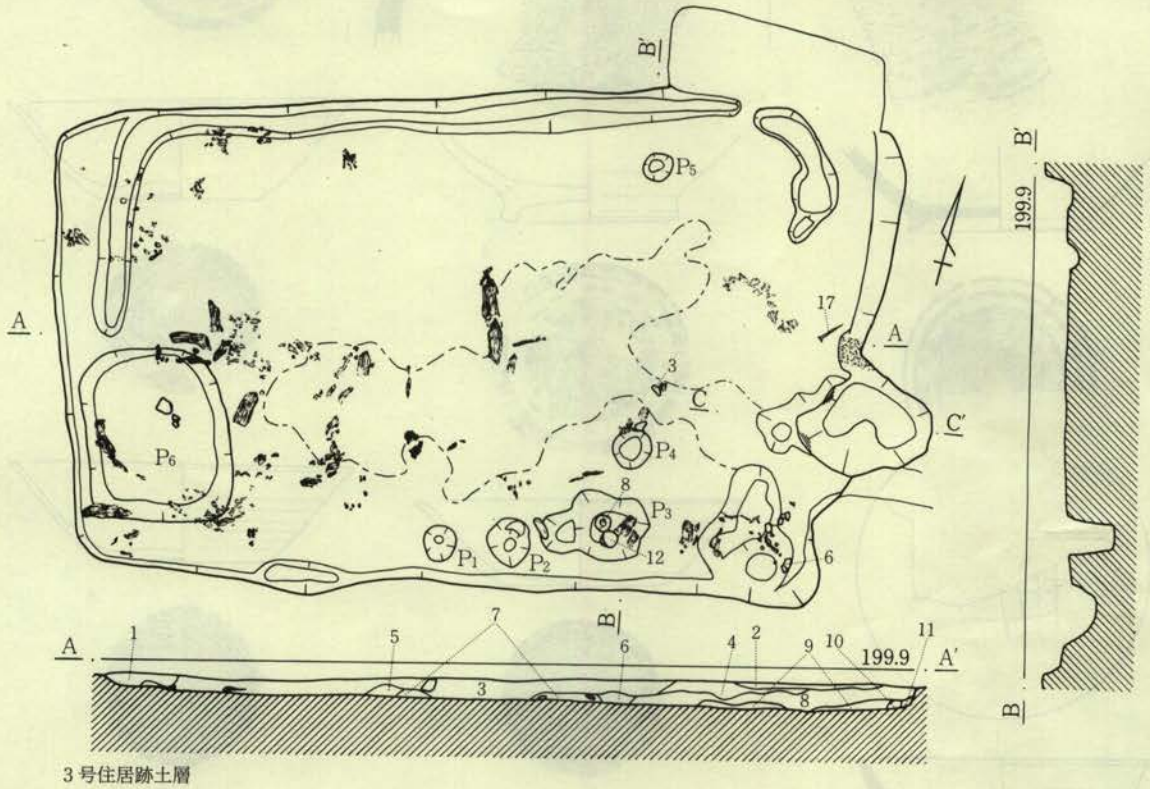
2号住居跡出土遺物観察表（第67図1～3）

No	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏　（土師器）	口径（12.0）　器高（3.8）	微砂粒	普通	褐色	体部外面に爪痕・底部手持ち篦削
2	短頸壺　（須恵器）	口径（9.2）　残存器高 2.0	粗砂粒	良好	灰褐色	
3	刀子　（鉄製品）	長さ 18.8				背に関　茎先に木質が残存

3号住居跡(第68図)

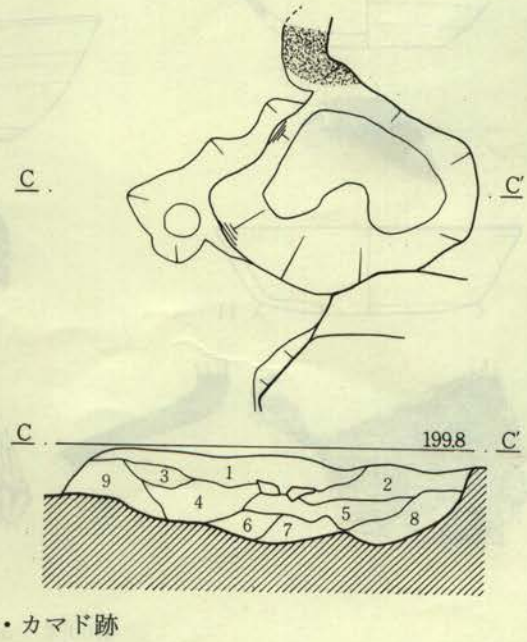
2区T－33～35G、3区A－33～35G、標高199.80mに検出された焼失住居跡であり、炭化材が南半分の床面に集中して分布する。南方に3号、北方に4・5号掘立柱建物跡が位置する。

平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。規模は東西最大長6.7m、南北4.1mを測る。主軸はN－77°－Eを示す。壁は6～18cmが残存する。周溝は南壁の一部と西壁中央～北壁～東壁にかけて検出され、幅20～25cm、深さ2～8cmを測る。東西の周溝は壁部より30cm程内側に設けられている。床面は平坦である。柱穴・土坑状の掘り込みはP_1～P_6が検出された。P_6は1.4×1.3mの方形で深さ30cmを測る。貯蔵穴



3号住居跡土層

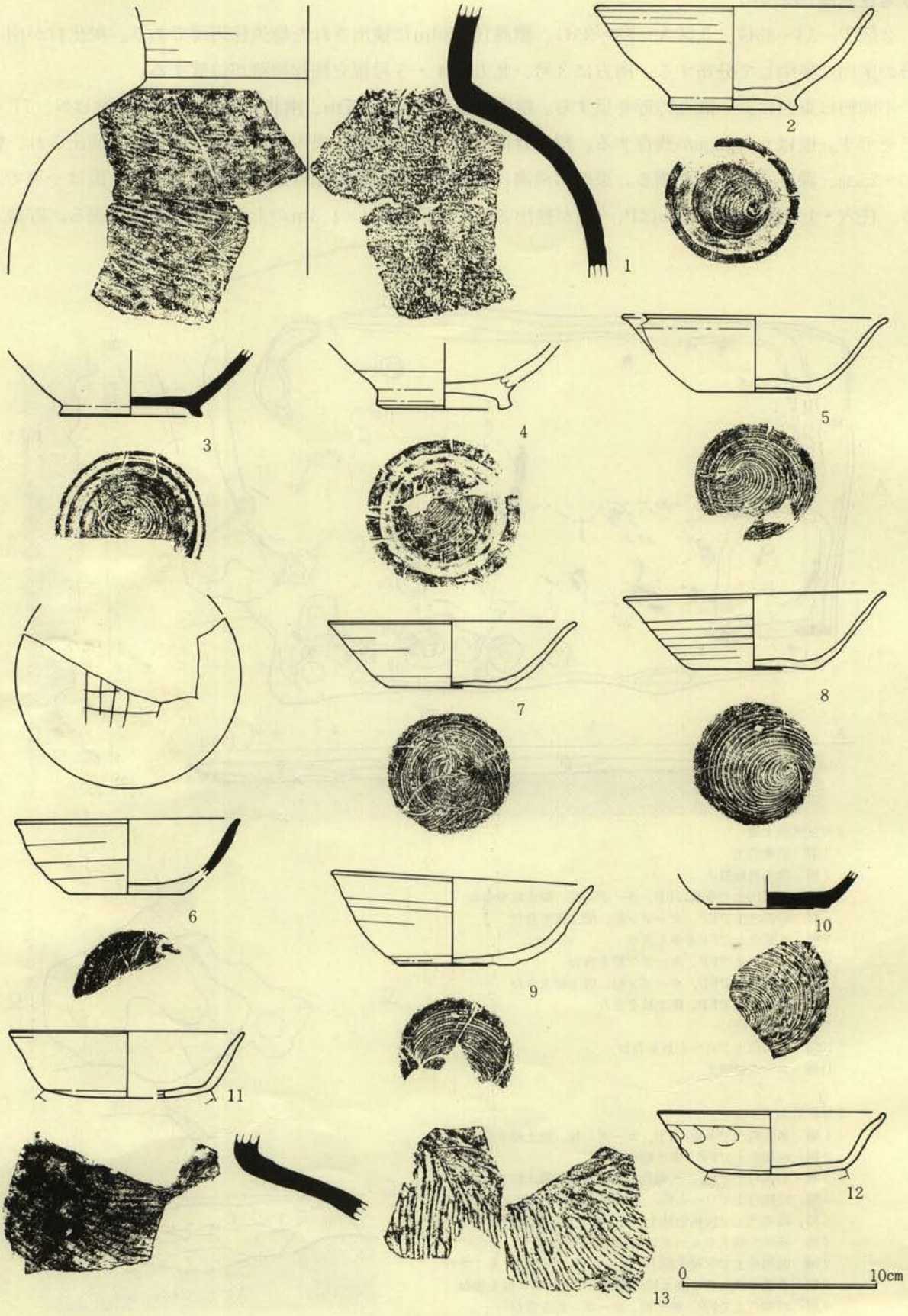
1層　黒褐色土
2層　黒褐色砂質土
3層　黒褐色土で多量のFP、カーボン粒、焼土粒を含む
4層　暗褐色土でFP、カーボン粒、焼土粒を含む
5層　黒褐色土でFPを多く含む
6層　黒褐色土でFP、カーボン粒を含む
7層　黒褐色土でFP、カーボン粒、焼土粒を含む
8層　黒褐色土でFP、焼土粒を含む
9層　7層と同じ
10層　暗褐色土でロームBを含む
11層　ローム崩壊土



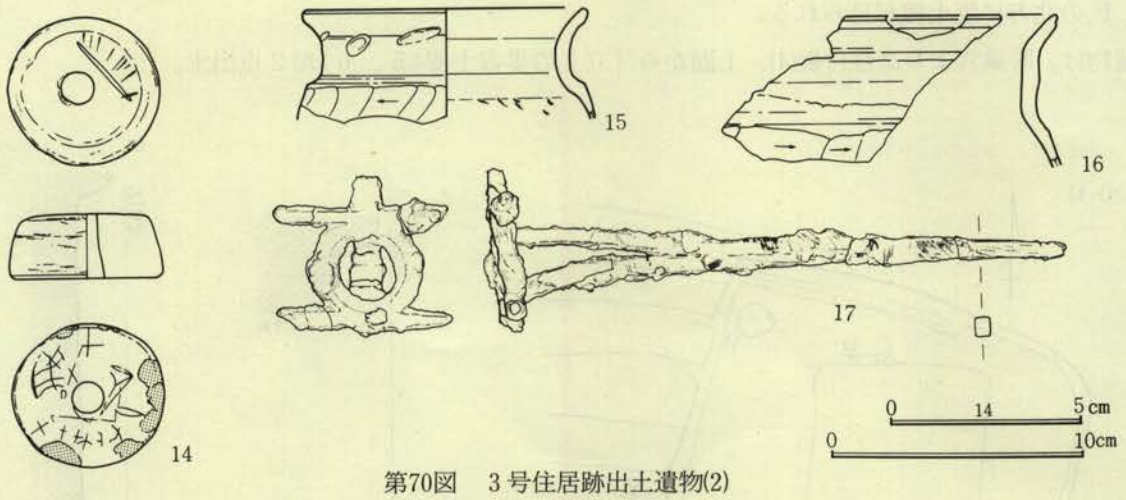
3号住居カマド

1層　黒褐色土で多量のFP、カーボン粒、焼土粒を含む
2層　暗褐色土でFP、焼土粒を含む
3層　暗褐色土でFP、灰褐色粘土、多量の焼土粒を含む
4層　暗褐色土でローム粒、カーボン粒、焼土粒を含む
5層　暗褐色土で灰褐色粘土、カーボン粒、焼土Bを含む
6層　灰褐色粘土でカーボン粒、焼土粒を含む
7層　暗褐色土で灰褐色粘土、ロームB、焼土粒を多く含む
8層　多量の焼土Bと焼土粒の混合土でカーボン粒を含む
9層　暗褐色土でFP、焼土粒、カーボン粒を含む

第68図　3号住居跡・カマド跡



第69図　3号住居跡出土遺物(1)



第70図　3号住居跡出土遺物(2)

は南東隅に設けられ、カマドは東壁の中央やや南寄りに黒褐色粘土によって構築されている。

遺物は、カマド左袖前面で焼印(17)、覆土内より刻書紡錘車(14)、貯蔵穴より内底に井桁状の線刻を施す須恵器坏(6)、P_3の掘り込みより須恵器と土師器の坏(8・12)が出土。

3号住居跡出土遺物（第69・70図1～17）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	広口壺（須恵器）				粗砂粒	普通	灰褐色	胴部外面に「×」印
2	高台付碗（還元焔）	口径（14.0）	器高 5.3	底径 6.0	微砂粒	良好	灰～黒褐色	底部回転糸切り後付高台
3	高台付碗（須恵器）		残存器高 3.3	底径 7.5	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
4	高台付碗（還元焔）		残存器高 3.3	底径 6.6	微砂粒	良好	淡黄褐色	底部回転糸きり後付高台
5	坏（酸化焔）	口径（13.5）	器高 3.9	底径 6.3	微砂粒	良好	淡赤褐色	底部回転糸切り未調整
6	坏（須恵器）	口径（11.4）	器高 3.8	底径（5.9）	粗砂粒	良好	灰褐色	〃　内面底部に九字の線刻
7	坏（酸化焔）	口径 12.9	器高 3.4	底径 6.4	微砂粒	良好	淡黄褐色	底部回転糸きり未調整
8	坏（酸化焔）	口径 13.3	器高 3.9	底径 6.4	粗砂粒	良好	淡黄～赤褐色	底部回転糸きり未調整
9	坏（還元焔）	口径 13.2	最大器高 5.0	底径（5.9）	微砂粒	普通	灰褐色	底部回転糸切り未調整
10	坏（須恵器）		残存器高 1.8	底径（6.0）	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸きり未調整
11	坏（土師器）	口径（12.6）	器高 3.4	底径（8.6）	微砂粒	良好	褐色～黒褐色	底部手持ち篦削
12	坏（土師器）	口径 11.6	器高 3.3		微砂粒	良好	褐色	器面全体に剝がれ
13	甕（須恵器）				微砂粒	良好	淡灰褐色	内外面に平行叩目と当て目
14	紡錘車（石製品）	最大径 4.0	高さ 1.7	重量 47.8g				石材は滑石 上下面に線刻
15	小型甕（土師器）	口径（10.8）	残存器高 3.4		微砂粒	良好	褐色	内面に爪痕
16	甕（土師器）				粗砂粒	良好	赤褐色	コの字状口縁
17	焼印（鉄製品）							

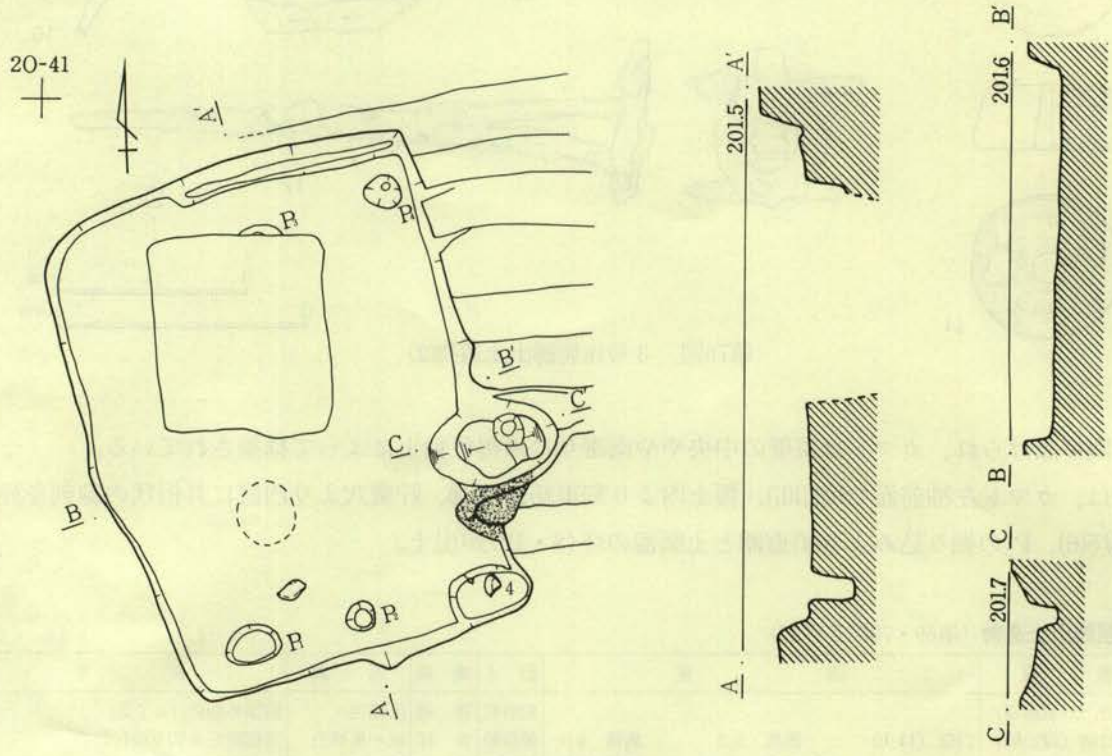
4号住居跡（第71図）

2区O－40G、標高201.40mに検出された。南東方向に5号住居跡・33号掘立柱建物跡、北方に38号住居跡がやや距離を置いて位置する。北西部分でJ16号住居跡と重複する。

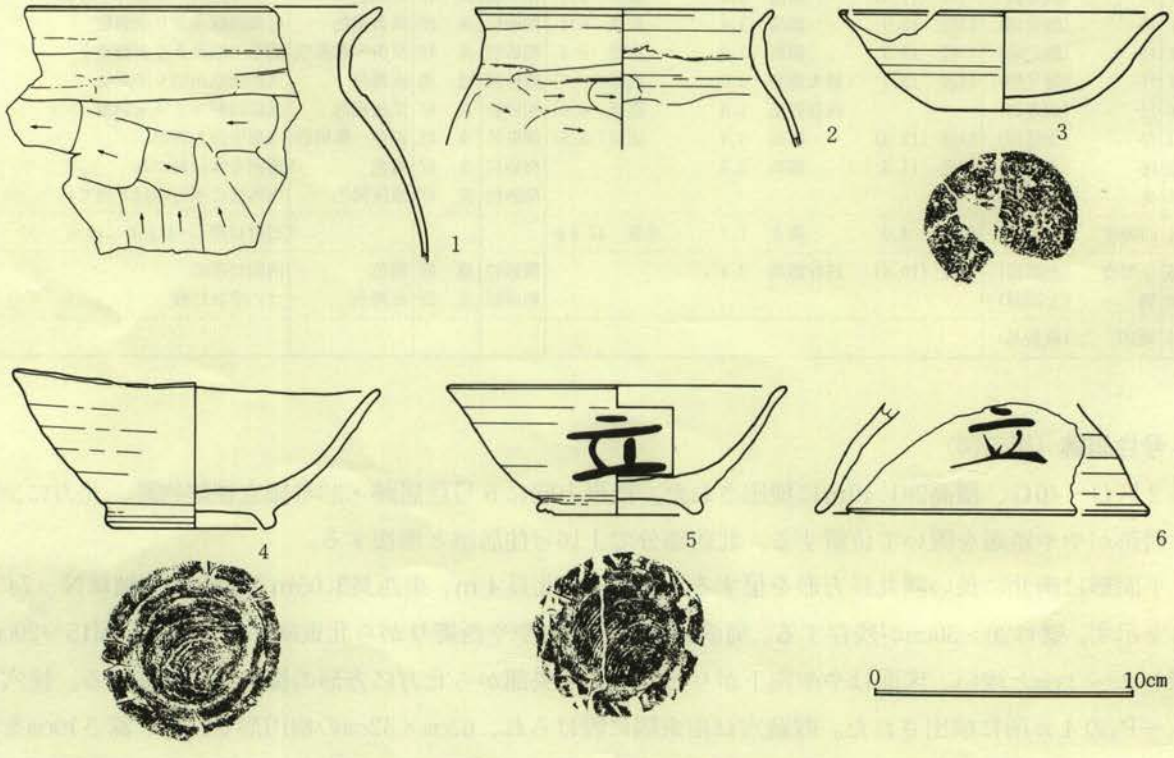
平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は南北長4m、東西長3.05mを測り、主軸はN－74°－Eを示す。壁は20～30cmが残存する。周溝は北壁の中央やや西寄りから北東隅に検出され、幅15～20cm、深さ2～3cmと浅い。床面はやや南下がりとなり、中央部から北方に方形の攪乱穴が存在する。柱穴はP_1～P_4の4カ所に検出された。貯蔵穴は南東隅に設けられ、62cm×32cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰白色粘土に寄って構築され、焚き口より煙道部まで1.02mを測

る。P_1の北方に焼土塊が見られる。

遺物は、貯蔵穴より高台付碗(4)、上面から「立」の墨書土器(５、６)が２点出土。



第71図　４号住居跡



第72図　４号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物観察表（第72図１～６）

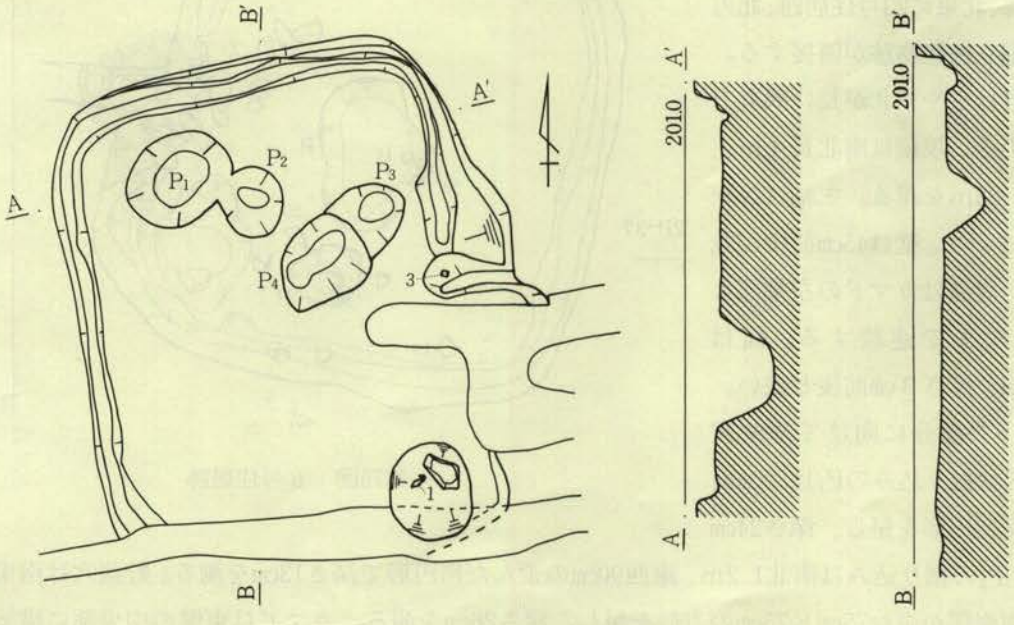
No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）				微砂粒	良好	明褐色	コの字状口縁
2	小型甕（土師器）	口径（11.7）	残存器高 5.2		微砂粒	良好	褐色	〃
3	坏（還元焔）	口径（12.6）	器高 3.9	底径 5.7	粗砂粒	普通	灰～黒褐色	底部回転糸切り未調整
4	高台付碗（還元焔）	口径 14.4	器高 5.6	底径 6.2	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整後付高台
5	高台付碗（還元焔）	口径 13.3	器高 5.0	底径 5.5	粗砂粒	普通	淡灰黄褐色	体部外面に「立」の墨書
6	高台付碗（還元焔）	口径（12.8）	残存器高 4.3		微砂粒	良好	褐色	体部外面に「立」の墨書

5号住居跡（第73図）

２区Ｐ・Ｑ－37・38Ｇ、標高200.80～90ｍに検出された。南西に33号掘立柱建物跡、北東に６号住居跡が位置する。東西に走行する耕作溝によってカマドと南壁部分が切られている。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長４ｍ、東西長3.5ｍを測り、主軸はＮ－80°－Ｅを示す。壁は良好に残存する北壁で20cm前後を測る。周溝はカマドの左袖部より北・西壁沿に連続する。幅15～20cm、深さ２～９cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴は北方部分に４カ所検出されたが本住居跡に帰属するものではない。貯蔵穴は南東隅に設けられ、72cm×65cmの楕円形を呈し、深さ10cmの皿状の掘り込みである。カマドは東壁の中央付近に灰褐色粘土で構築されているが、耕作溝により南半分が破壊されている。

遺物は貯蔵穴内より須恵器坏(1)、カマド左袖部で砥石(3)、覆土より墨痕のある土器片（４・６）等が出土した。

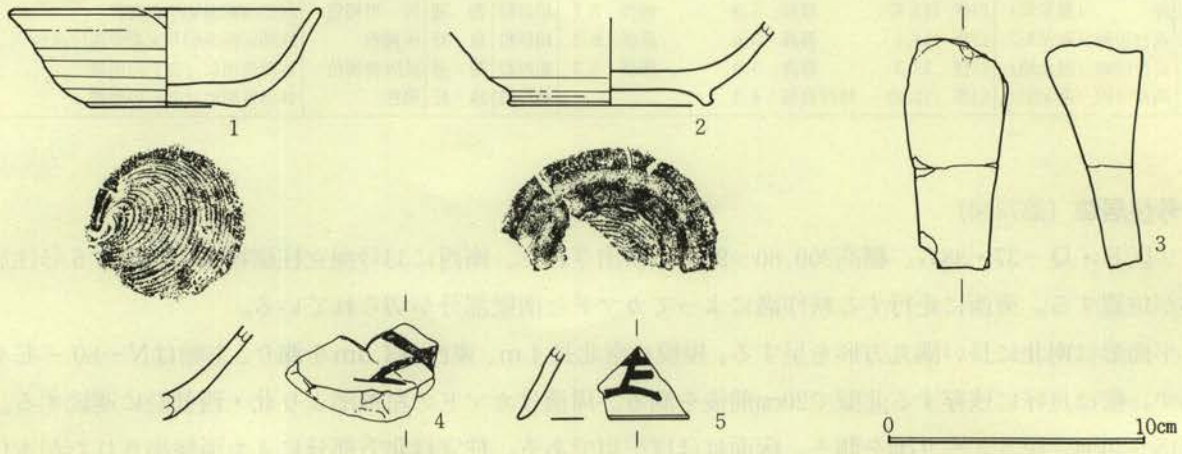


第73図　５号住居跡

5号住居跡出土遺物観察表（第74図１～５）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	坏（酸化焔）	口径（12.0）	器高 3.8	底径 6.3	微砂粒	良好	褐色	底部回転糸切り未調整
2	高台付碗（還元焔）		残存器高 3.3	底径（7.4）	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り後付高台

3	砥石 (石製品)	長さ 9.1	最大幅 4.0	最大厚 4.0	重 量	124g		石材は輝石安山岩
4	坏？ (還元焔)				微砂粒	良 好	明灰褐色	体部外面に逆位で「立」の墨書
5	坏？ (還元焔)				微砂粒	良 好	明灰褐色	体部内面に墨痕

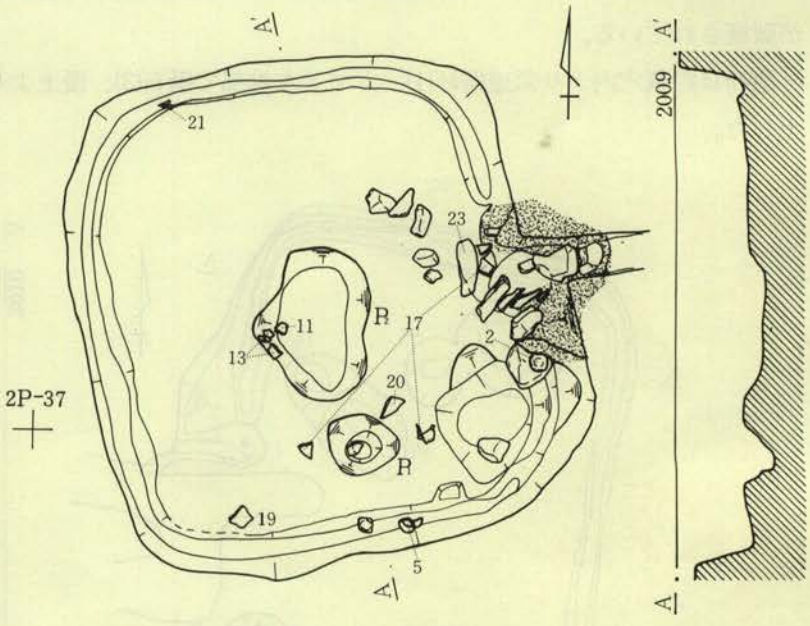


第74図　5号住居跡出土遺物

6号住居跡（第75図）

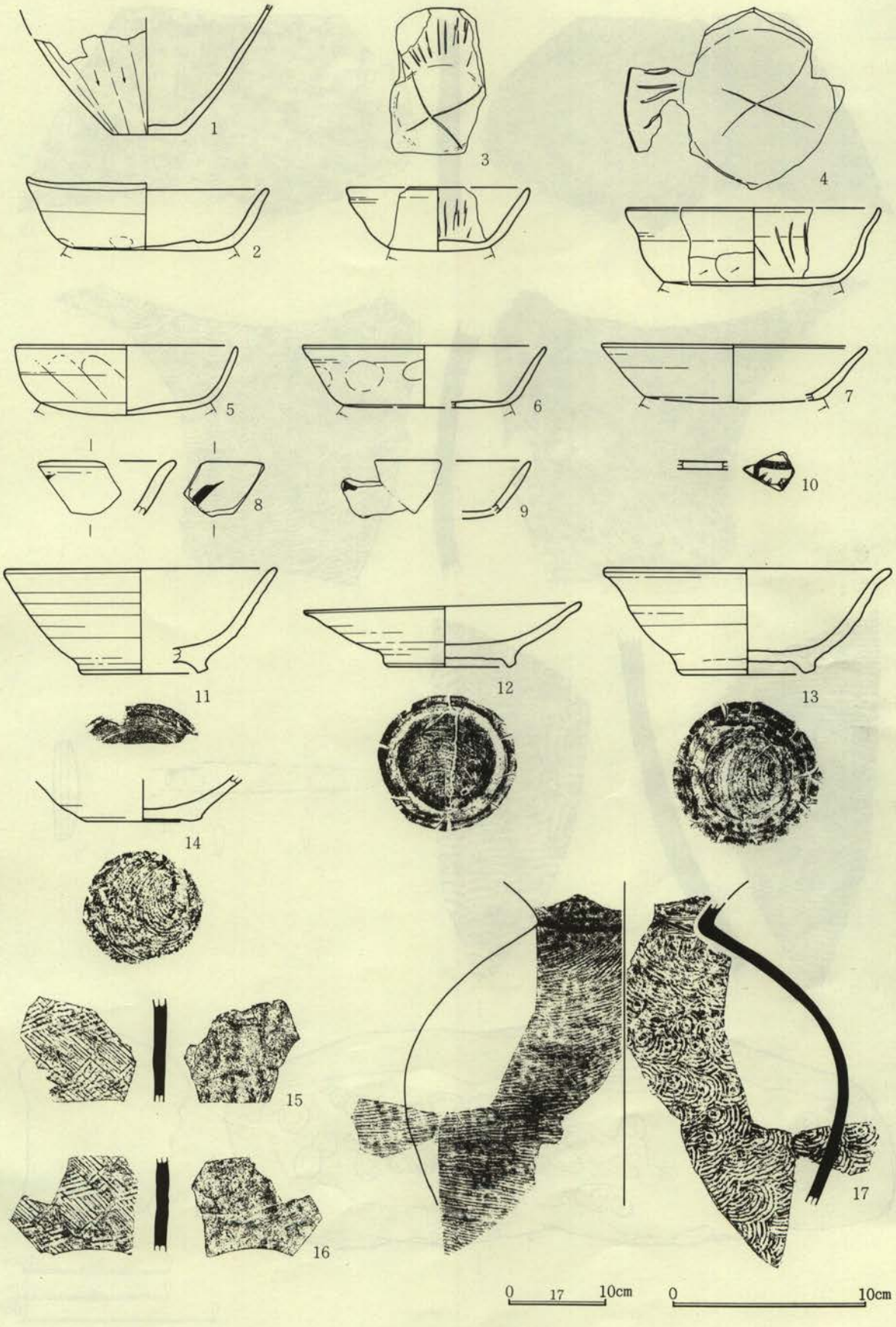
2区O・P－36G、標高200.70～80m間に検出された。南西に5号住居跡、北東に23号住居跡、北方に32号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形はやや南北が長い隅丸方形を呈する。規模は南北長4m、東西長3.85mを測る。主軸はN－78°－Eを示す。壁は45cm前後が残存する。周溝はカマドの左袖部より貯蔵穴まで連続する。幅は15～30cm、深さ3cm前後と浅い。床面は中央部分に向けてやや窪む。柱穴状掘り込みのP_1は50cm前後の歪んだ円形を呈し、深さ24cmを測る。P_2の掘り込みは南北1.2m、東西90cmの歪んだ楕円形で深さ13cmを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ、南東部が歪む75cm×75cmの方形を呈し、深さ26cmを測る。カマドは東壁の中央部に構築されている。焚き口部には天井部に使用された礫が崩落している。

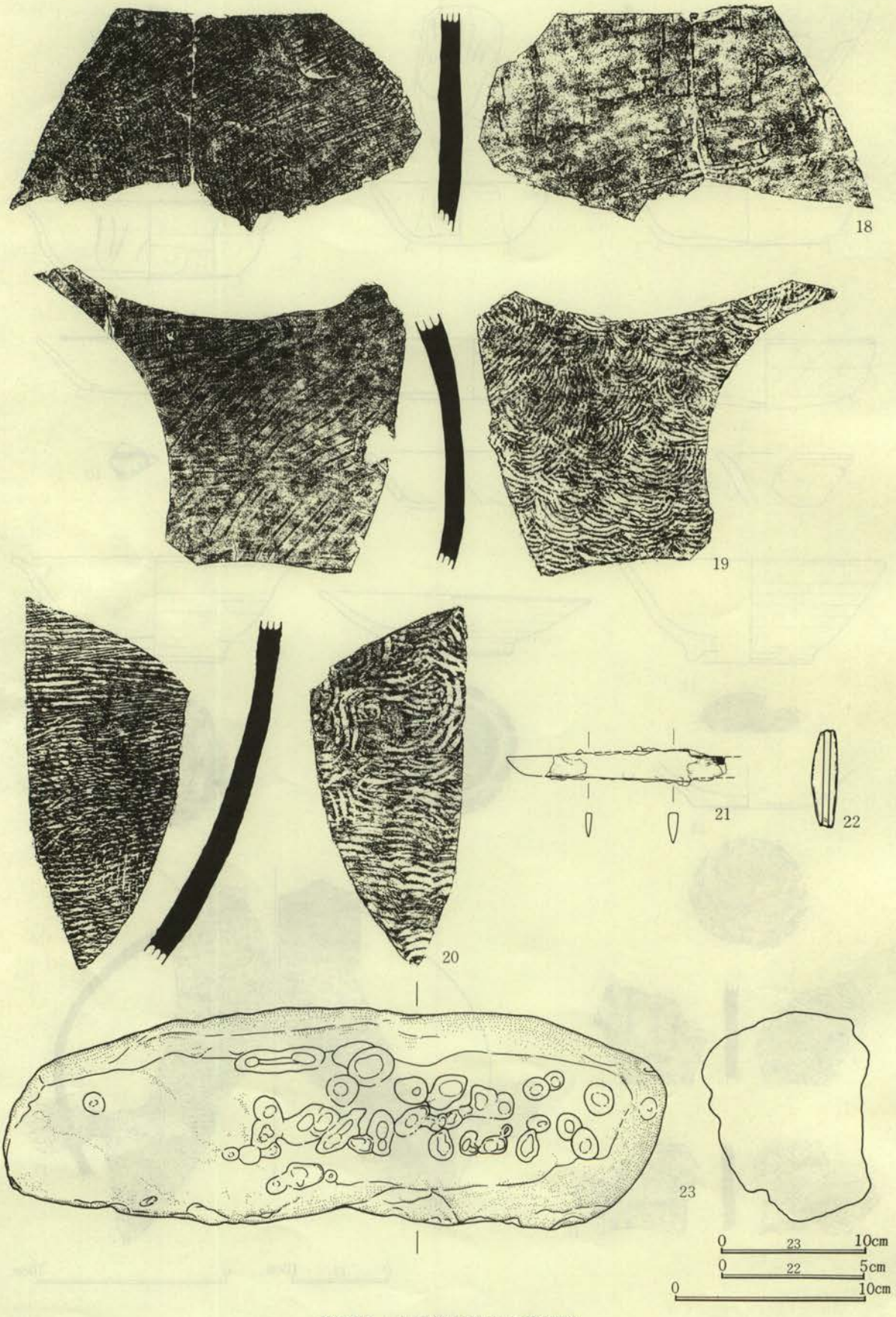


第75図　6号住居跡

遺物はカマドの前面やP_1・P_2の掘り込み、東壁の周溝に散在して出土。カマドの右袖部より土師器坏(2)、P_2の西側立ち上がり部より須恵器高台付碗(11、13)、カマドの焚き口部とP_1周辺部より須恵器の壺形や大甕片(17、20)、北側の周溝やや西よりからは刀子(21)、カマドの天上石として使用された多孔石(23)、覆土内より墨痕の土器片(8～10)、内底に「×」の線刻し、内面に暗文を施す土師坏(3、4)、土錘(22)等が出土。



第76図　6号住居跡出土遺物(1)



第77図　6号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡出土遺物観察表(第76・77図1～23)

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕 (土師器)		残存器高 6.5	底径 3.8	微砂粒	良好	褐色	
2	坏 (土師器)	口径 12.4	器高 3.5		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
3	坏 (土師器)	口径 (9.4)	器高 3.3	底径(5.1)	微砂粒	良好	褐色	内面に暗文、内底に「×」の線刻
4	坏 (土師器)	口径 (13.9)	器高 4.0	底径 9.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削、内底に「×」の線刻
5	坏 (土師器)	口径 11.4	器高 3.6		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
6	坏 (土師器)	口径 (12.4)	器高 3.2	底径(8.5)	粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
7	坏 (土師器)	口径 (13.6)	器高 2.9	底径(9.2)	微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
8	坏 (還元焔)				微砂粒	良好	淡灰褐色	体部内外面に墨痕
9	坏 (土師器)				微砂粒	良好	褐色	体部外面に墨痕
10	坏 (土師器)				微砂粒	良好	褐色	底部内面に墨痕
11	高台付碗 (還元焔)	口径 (14.0)	器高 3.4	底径(6.1)	粗砂粒	良好	灰褐色	
12	高台付坏 (酸化焔)	口径 14.2	器高 3.2	底径 6.4	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
13	高台付碗 (還元焔)	口径 14.8	器高 5.5	底径 6.5	粗砂粒	普通	淡褐色	底部回転糸きり後付高台
14	坏 (還元焔)		残存器高 2.2	底径 6.2	粗砂粒	良好	淡黒褐色	底部回転糸切り未調整
15	甕 (須恵器)				微砂粒	良好	灰褐色	外面は平行叩目
16	甕 (須恵器)				微砂粒	良好	灰褐色	15と同一個体
17	甕 (須恵器)				粗砂粒	良好	灰褐色	外面平行叩目、内面は青海波の当て目
18	甕 (須恵器)				粗砂粒	良好	赤褐色	外面平行叩目
19	甕 (須恵器)				粗砂粒	良好	淡褐色	外面平行叩目、内面は青海波の当て目
20	甕 (須恵器)							17と同一個体
21	刀子 (鉄製品)	残存長さ 8.8						刃先と茎先を欠損、関は両関
22	土錘 (土製品)	長さ 3.4	最大径 0.9	重量				
23	多孔石 (石製品)	長さ	厚さ	重量 9.5kg				石材は輝石安山岩

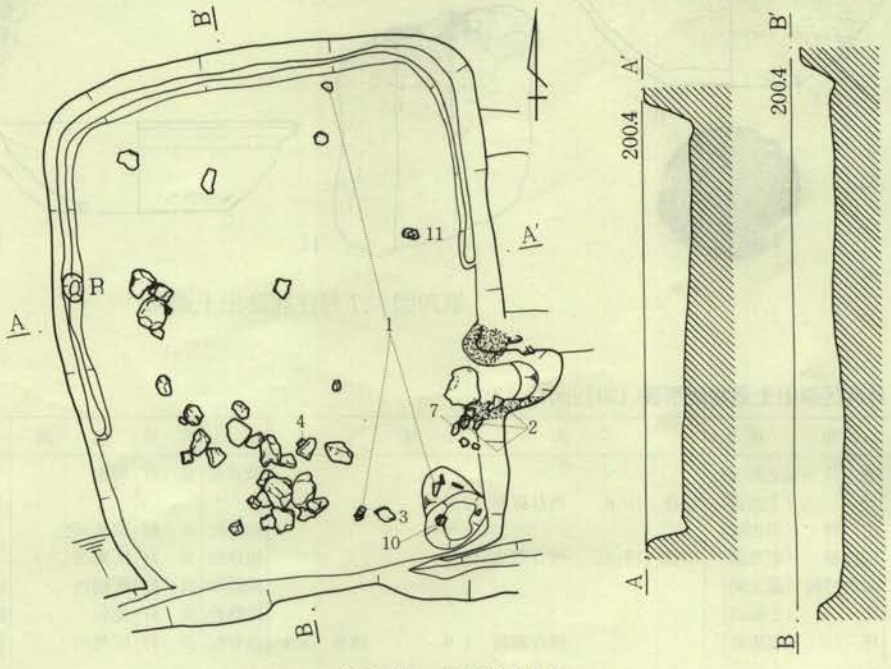
7号住居跡 (第78図)

2区Q－34・35G、標高200.40mに検出された。南方には4・5号掘立柱建物跡、東方には31号掘立柱建物跡、北東に8号住居跡が隣接する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長4.35m、東西長3.5mを測る。主軸はN－70°－Eを示す。壁はは24～37㎡ほどが残存する。周溝は西壁中央やや南寄りから東壁の中央付近まで連続する。幅は15～20cm、深さ3cm前後と浅い。床面はカマド前面と貯蔵穴周辺がやや窪む。柱穴は西壁の周溝にP_1があり、主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に設けられ、55cm×35cmの楕円形でカマド寄りに舌状に突出したスロープが見られる。

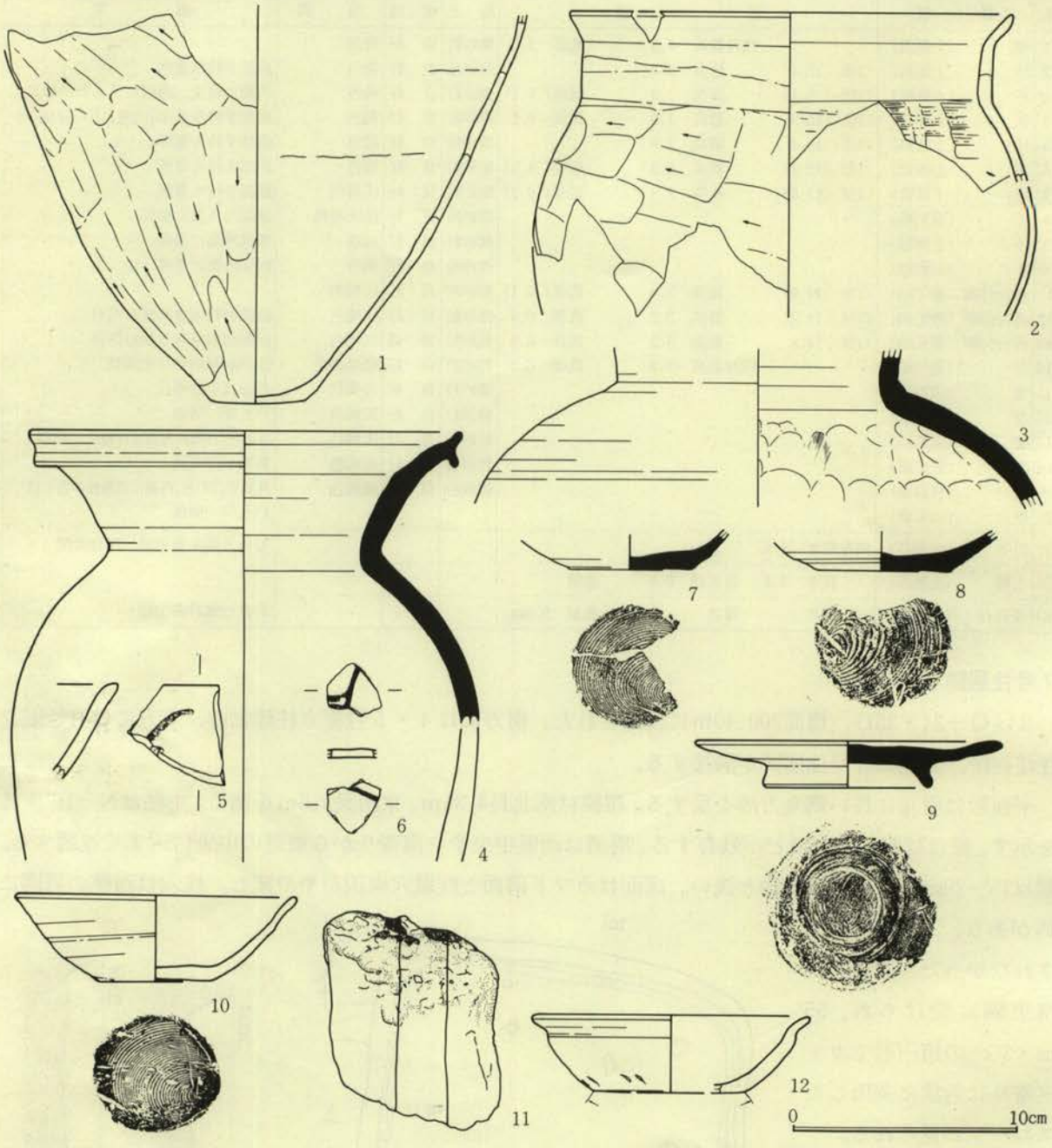
カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されている。

遺物は、カマドと貯蔵穴周辺に集中して出土。東壁の周溝付近には羽口(11)が見られる。覆土内より墨痕を施す土器片2点(5、6)、南方から西方



第78図　7号住居跡

にかけて礫が集中して廃棄されている。



第79図　7号住居跡出土遺物

7号住居跡出土遺物観察表（第79図1～12）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）				微砂粒	良好	褐色	
2	甕（土師器）	口径 19.8	残存器高 12.6		微砂粒	良好	褐色	コの字状口縁
3	広口壺（須恵器）				粗砂粒	良好	暗灰褐色	
4	広口壺（須恵器）	口径（19.3）	残存器高 19.4		粗砂粒	良好	灰褐色	
5	高台付碗（還元焔）				微砂粒	良好	灰褐色	体部内面に墨痕
6	坏（土師器）				微砂粒	良好	褐色	底部内外面に墨痕
7	坏（須恵器）		残存器高 1.6	底系 5.4	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整

8	坏 (須恵器)		残存器高 1.8	底径 6.0	微砂粒	良 好	淡赤褐色	底部回転糸切り未調整
9	高台付皿 (還元焔)	口径 (13.0)	器高 2.1	底径 (7.2)	微砂粒	良 好	灰白色	底部回転糸切り後付高台
10	坏 (還元焔)	口径 12.2	器高 3.9	底径 5.1	微砂粒	良 好	黒褐色	底部回転糸切り未調整
11	羽口 (土製品)							
12	坏 (土師器)	口径 (12.4)	器高 3.5	底径 (6.9)	微砂粒	良 好	褐色	外面に爪痕

8号住居跡（第80図）

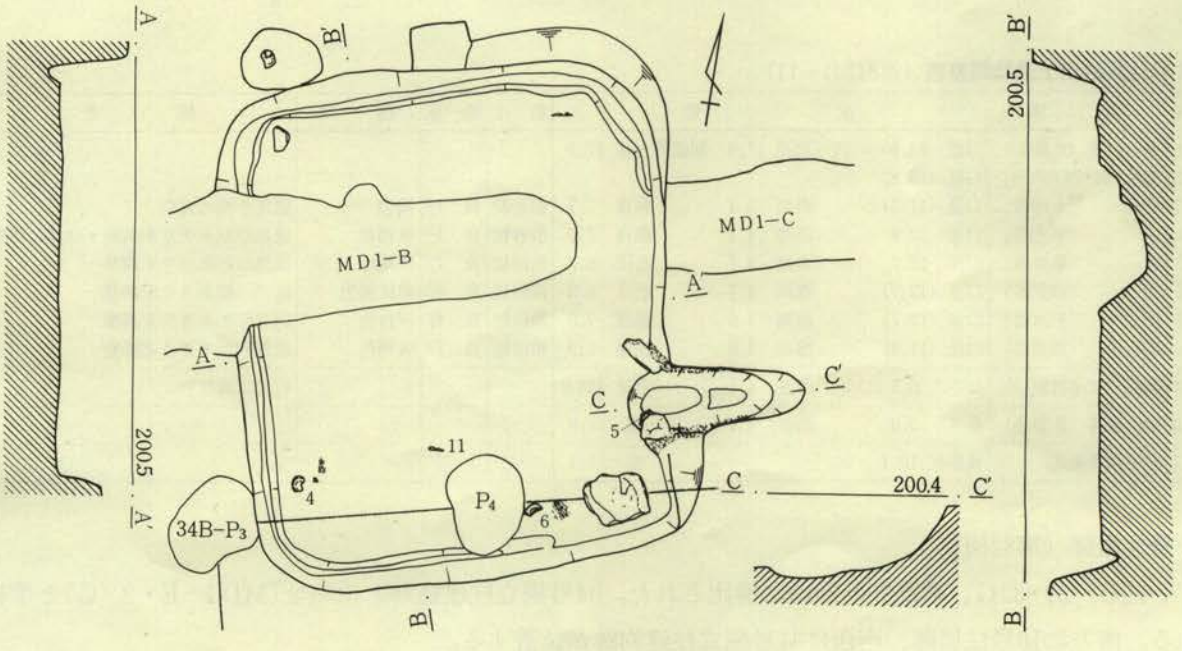
2区O・P－33・34G、標高200.40mに検出された。南方で31号掘立柱建物跡、床面の中央部やや北寄りに東西方向で道路址(MD1－A)が重複している。この3遺構の関係は31号掘立柱建物跡→8号住居跡→道路址である。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長4.2m、東西長3.65mを測る。主軸はN－76°－Eを示す。壁は40～50cmが残存する。周溝は南壁の中央やや東寄りから東壁の北寄りに連続する。幅は15～20cm前後、深さは南壁部分で13cm、北壁部分は2cmと南方～北方に連れて浅くなっている。床面はほぼ平坦であり、僅かであるが南壁部にも炭化材が残存する。柱穴は検出されなかった。

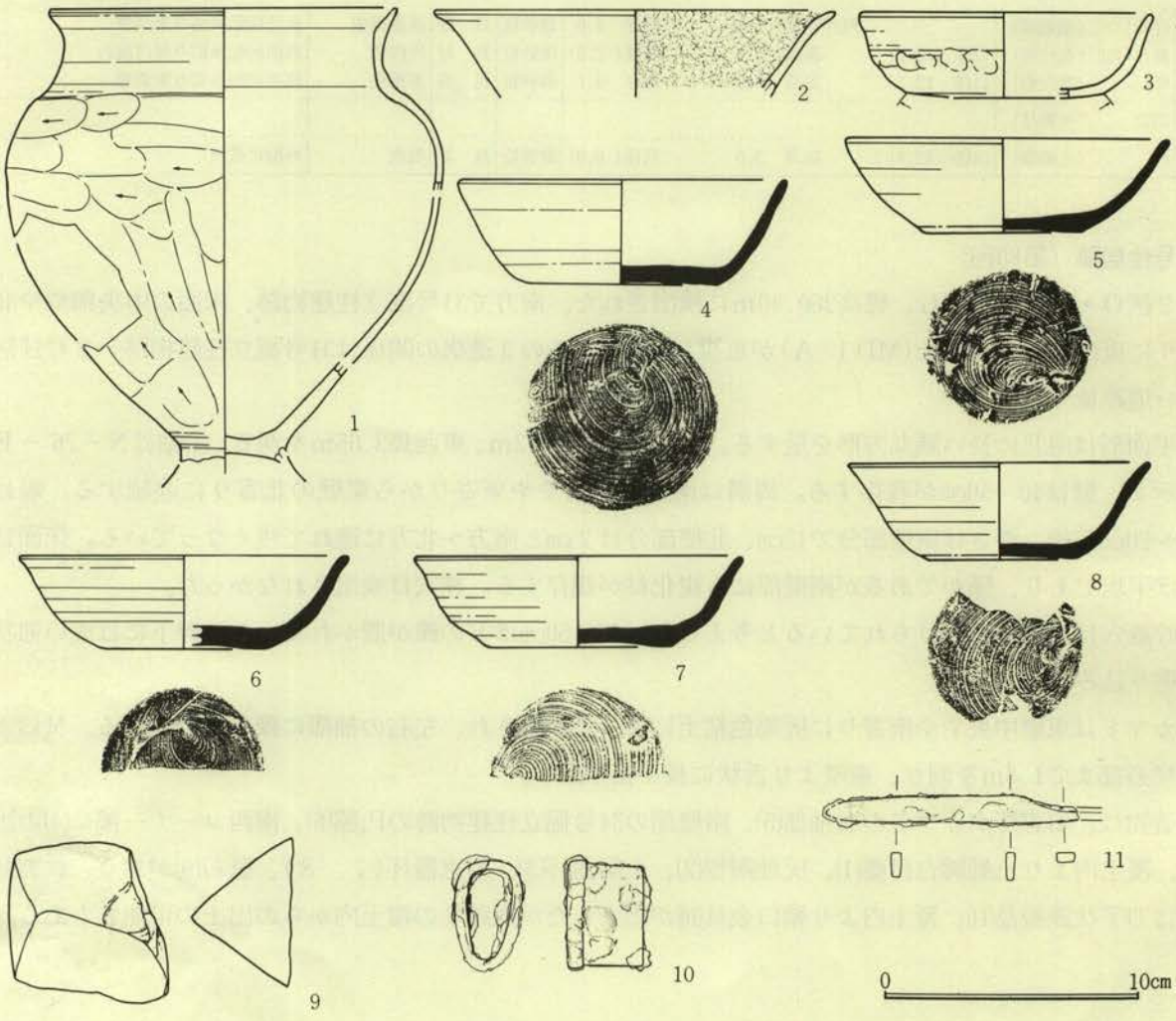
貯蔵穴は南東隅に設けられていると考えられ、40×50cmほどの礫が置かれていた。礫下には浅い皿状の掘り込みが見られた。

カマドは東壁中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、左右の袖部に礫を用いている。焚口より煙道部まで1.4mを測り、東壁より舌状に長く張り出す。

遺物は、須恵坏がカマドの右袖部(5)、南壁部の34号掘立柱建物跡のP_4脇(6)、南西コーナー部に(4)の出土。覆土内より土師脚台付甕(1)、灰釉陶器(2)、土師器坏(3)、須恵器坏(7、8)、砥石(9)があり、鉄製品には刀子状鉄製品(11)、覆土内より鞘口金具(10)が出土したが道路址の覆土内からの出土の可能性もある。



第80図　8号住居跡



第81図　8号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物観察表（第81図1～11）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	脚台付甕（土師器）	口径 13.5	残存器高 17.9	胴部最大径 17.2				
2	高台付碗（灰釉陶器）	口径 (15.8)						
3	坏（土師器）	口径 (11.5)	器高 3.4	底径 7.7	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	坏（須恵器）	口径 12.8	器高 4.1	底径 7.6	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整・底部に墨書
5	坏（須恵器）	口径 12.7	器高 3.7	底径 6.3	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
6	坏（須恵器）	口径 (12.7)	器高 4.7	底径 6.3	微砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸きり未調整
7	坏（須恵器）	口径 (12.7)	器高 3.6	底径 7.0	微砂粒	良好	灰白色	底部回転糸きり未調整
8	坏（須恵器）	口径 (11.9)	器高 3.8	底径 5.9	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
9	砥石（石製品）	長さ 6.5	厚さ 4.1	重量 153g				石材は流紋岩
10	鞘口金具（鉄製品）	長さ 3.0	高さ 4.4	幅 2.8				
11	刀子状鉄製品	残存長 10.1		幅 1.1				

9号住居跡（第82図）

2区O－31・32G、標高200.20mに検出された。34号掘立柱建物跡と道路址（MD1－E・2－C）と重複する。南方に10号住居跡、南西に31号掘立柱建物跡が位置する。

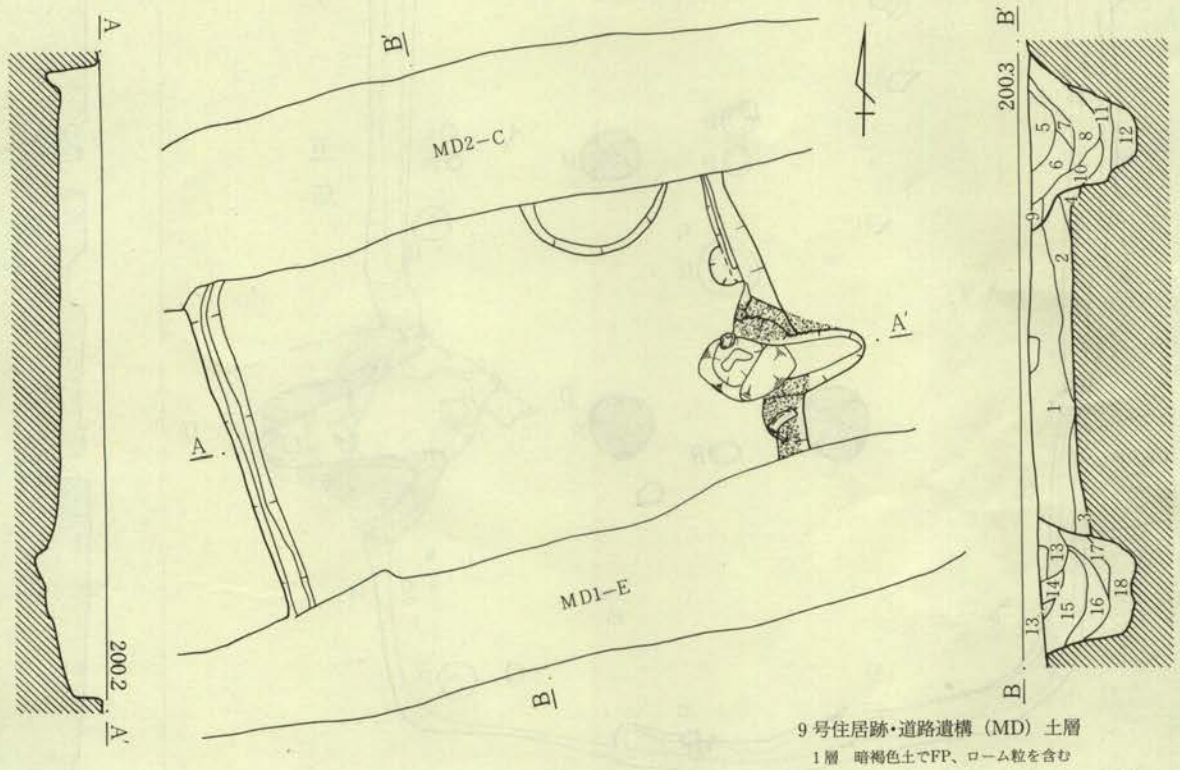
平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。道路址は9号住居跡より新しい。規模は東西長4.4mを測る。

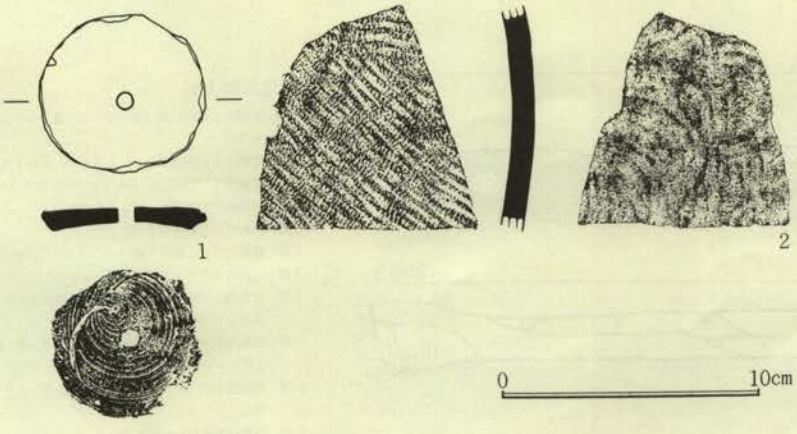
主軸はN－71°－Eを示す。壁は28～35cmが残存する。周溝は西壁に全周し、東壁はカマドの左袖部付近まで検出された。幅は10～20cm、深さ５～10cmを測る。床面は平坦である。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴部分は道路址(MD１)によって破壊されていると考えられる。カマドは東壁中央付近に灰褐色粘土によって構築されている。焚口が煙道部まで1.3mを測る。

遺物は、覆土内より須恵器坏の底部を利用した紡錘車(1)と須恵器の大甕の胴部片(2)が出土。

９号住居跡出土遺物観察表（第82図１、２）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	紡錘車（須恵器）	径 6.5×6.2　孔径6.5㎜　重量38.2ｇ	微砂粒	良好	灰褐色	須恵器坏底部使用
2	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	黒褐色	外面は平行叩目、内面は青海波の叩目





９号住居跡・道路遺構（MD）土層

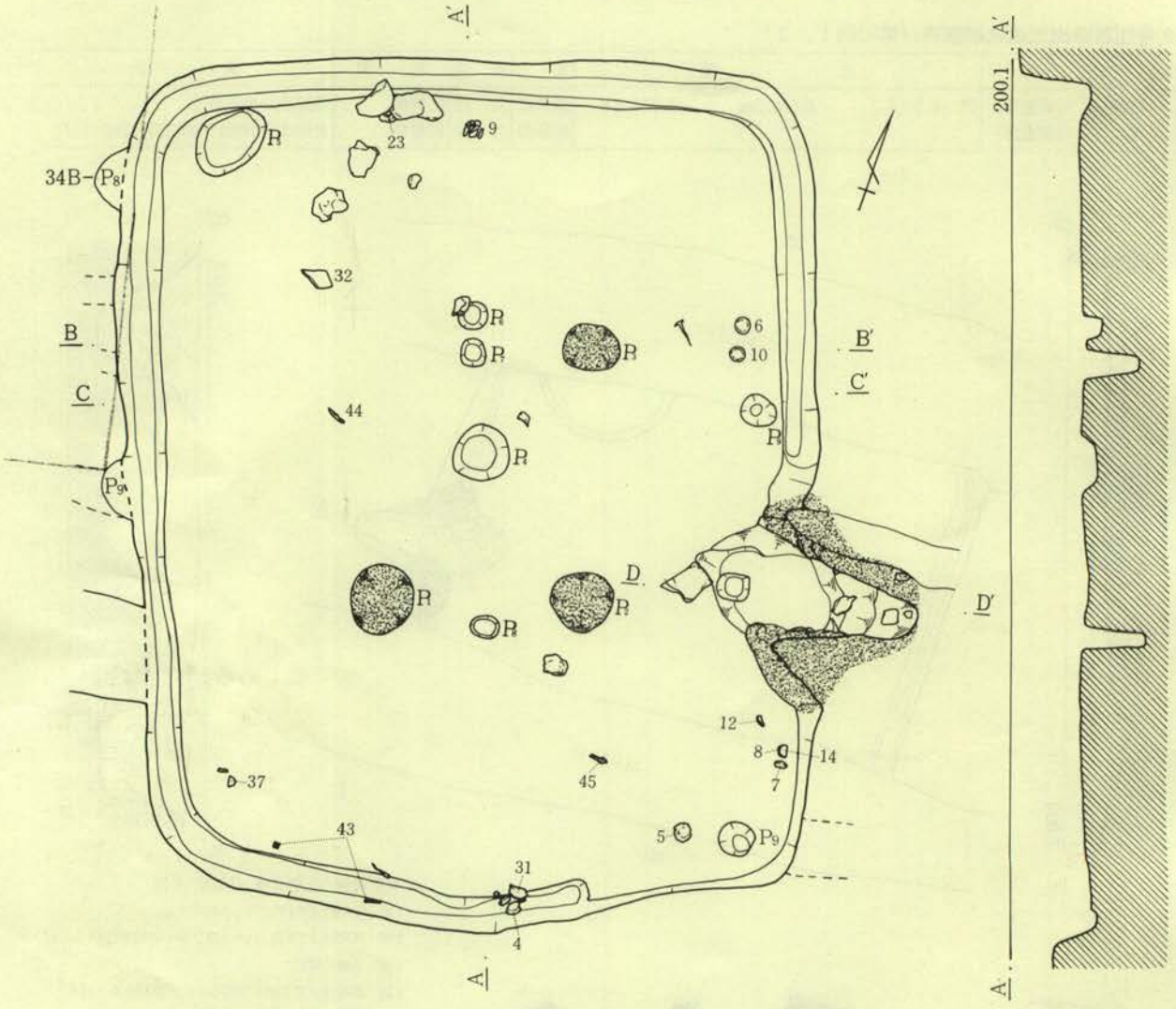
1層　暗褐色土でFP、ローム粒を含む
2層　黒褐色土でFP、ロームB、ローム粒を含む
3層　2層と同じ
4層　黒褐色土で2層より明るくローム粒を多く含む
MD2－C（5層～12層）
5層　暗褐色土で焼土粒、FP、ローム粒を含む
6層　暗褐色土で多量のローム粒を含む
7層　暗褐色土で5層より焼土粒を多く含む
8層　黒褐色土でFP、ロームBを含む
9層　黒褐色土でFP、ローム粒を含む
10層　黒褐色土でローム粒、カーボン粒を含む
11層　黒褐色土でロームBを多く含む
12層　ロームBとローム粒の混合土
MD1－E（13層～18層）
13層　暗褐色土
14層　暗褐色土で多量のロームB、ローム粒、FPを含む
15層　暗褐色土でFP、ロームB、カーボン粒を含む
16層　黒褐色土でFP、ローム粒を含む
17層　黒褐色土でロームB、ローム粒、FPを含む
18層　ロームBとローム粒の混合土

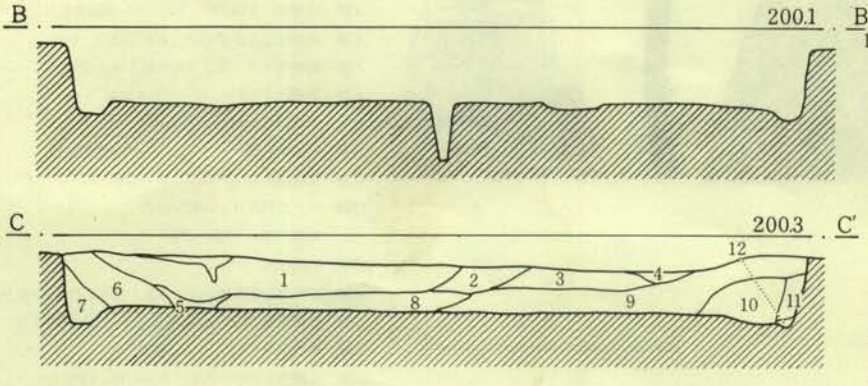
第82図　９号住居跡・出土遺物

10号住居跡（第83図）

2区P・Q－31・32G、標高199.80～200.00m間に検出された。西壁で31号掘立柱建物跡と重複し、東方に11号住居跡、北方に9号住居跡・34号掘立柱建物跡が位置する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈し、南壁の中央がやや突出する。規模は南北長7.4m、東西長5.9を測る。主軸はN－80°－Eを示す。壁は30～62cmが残存する。周溝は南壁の中央やや東寄りからカマドの

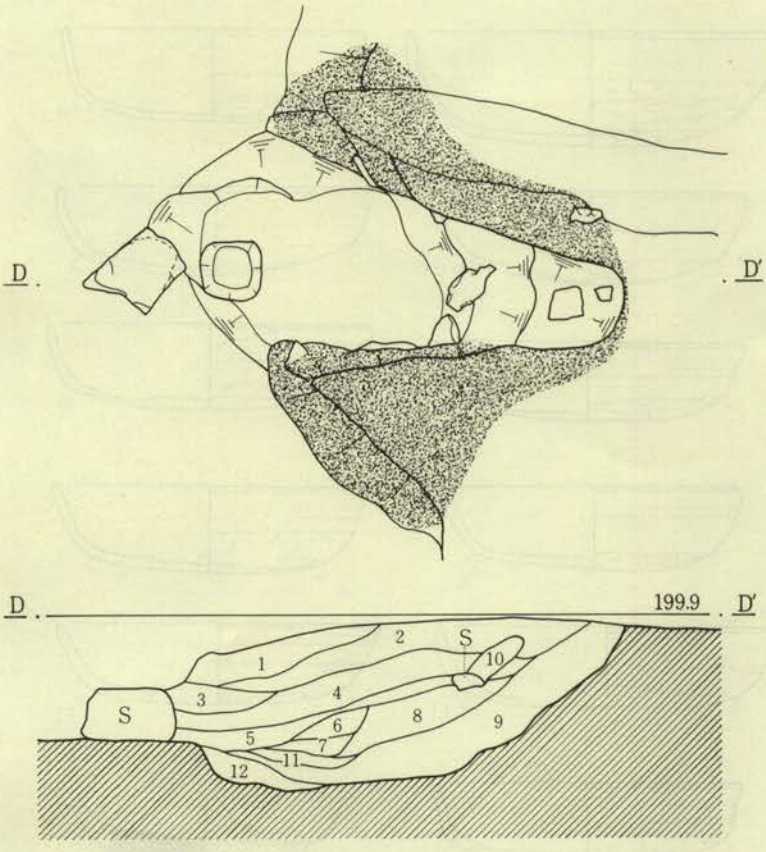




10号住居跡土層

1層　暗褐色土でFP、焼土粒、カーボン粒、ローム粒を含む
2層　暗褐色土で斑点状にロームBとローム粒を含む
3層　暗褐色土でFP、ローム粒、カーボン粒を含む
4層　暗褐色土で多量のロームBを含む
5層　黒褐色土で粘質を帯びる
6層　暗褐色土で1層より暗い
7層　暗褐色土でローム粒、ロームBを含む
8層　暗褐色土でFP、ローム粒、少量の黒褐色土Bを含む
9層　暗褐色土でFP、灰褐色粘土B、カーボン粒、焼土粒、ローム粒を含む
10層　暗褐色土でにぶい黄褐色土B、FP、ローム粒を含む
11層　暗褐色土でローム粒を含む
12層　暗褐色土で灰褐色土粘土Bを含む

第83図　10号住居跡



10号住居跡カマド土層
1層　にぶい暗褐色土でカーボン粒、FP、焼土粒を含む
2層　灰褐色粘土で少量のローム粒、焼土粒を含む
3層　暗褐色土でカーボン粒、ロームB、灰褐色粘土を含む
4層　暗褐色土で少量のFP、黒褐色土B、灰褐色粘土、焼土粒、ローム粒を含む
5層　暗褐色土とロームの混合土で少量の焼土粒を含む
6層　焼け土B、灰褐色粘土、ロームBの混合土
7層　暗褐色土でロームB、焼土Bを含む
8層　焼土B
9層　灰褐色粘土
10層　ロームB、ローム粒、灰褐色粘土の混合土
11層　焼土Bと灰褐色粘土の混合土
12層　灰褐色粘土とロームBの混合土

第84図　10号住居カマド跡

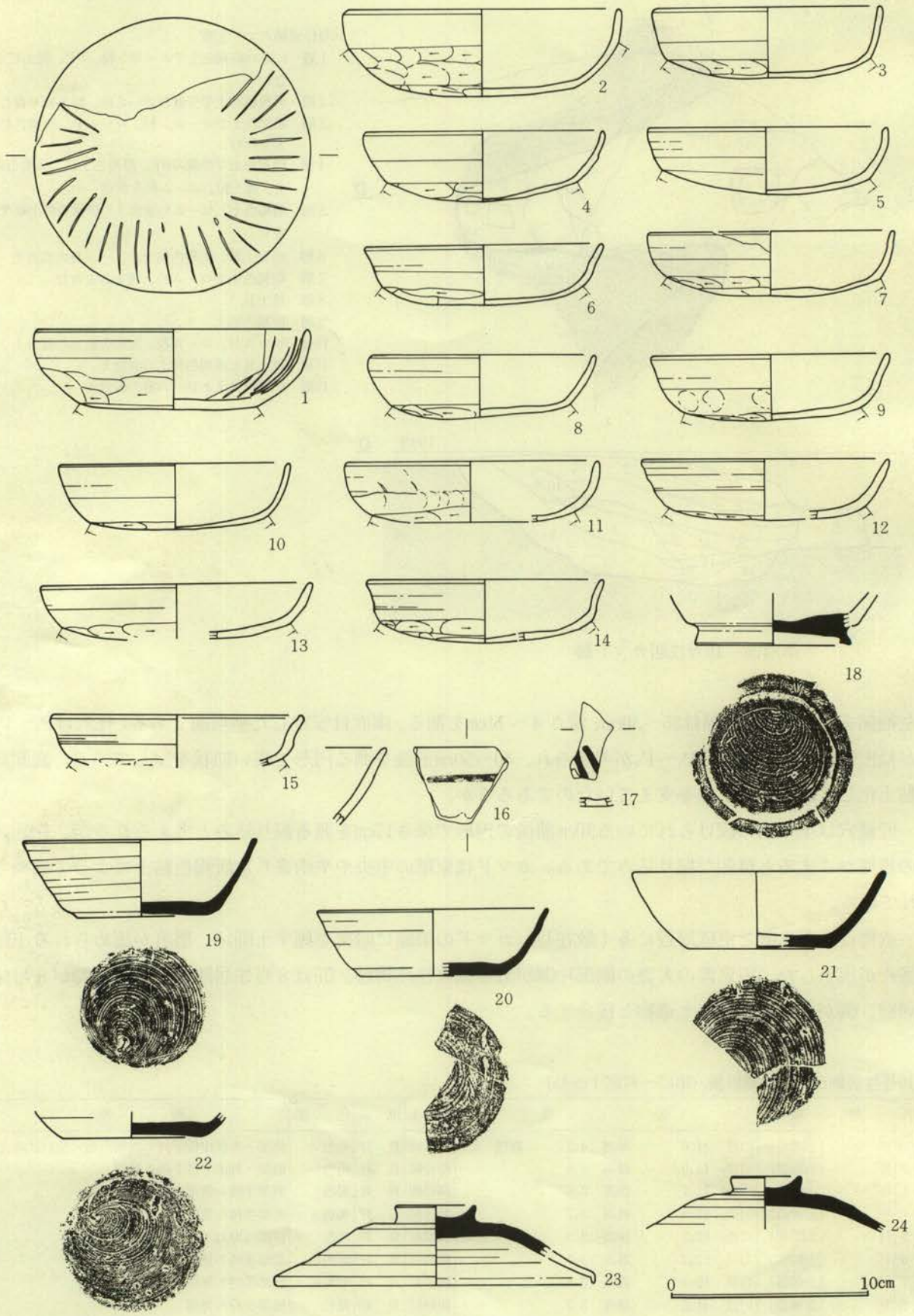
左袖部まで連続する。幅は25～30cm、深さ4～11cmを測る。床面は安定した平坦面である。柱穴はP_1～P_9が検出された。主柱穴はP_1～P_3が考えられ、40～50cm前後を測る円形で浅い皿状を呈している。底面は粘土化し、礎板等で主柱を支えていたのであろうか。

貯蔵穴は南東隅に設けられている30cm前後の円形で深さ17cmを測る掘り込みと考えられるが、住居跡の規模からすると貧弱な掘り込みである。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されている。

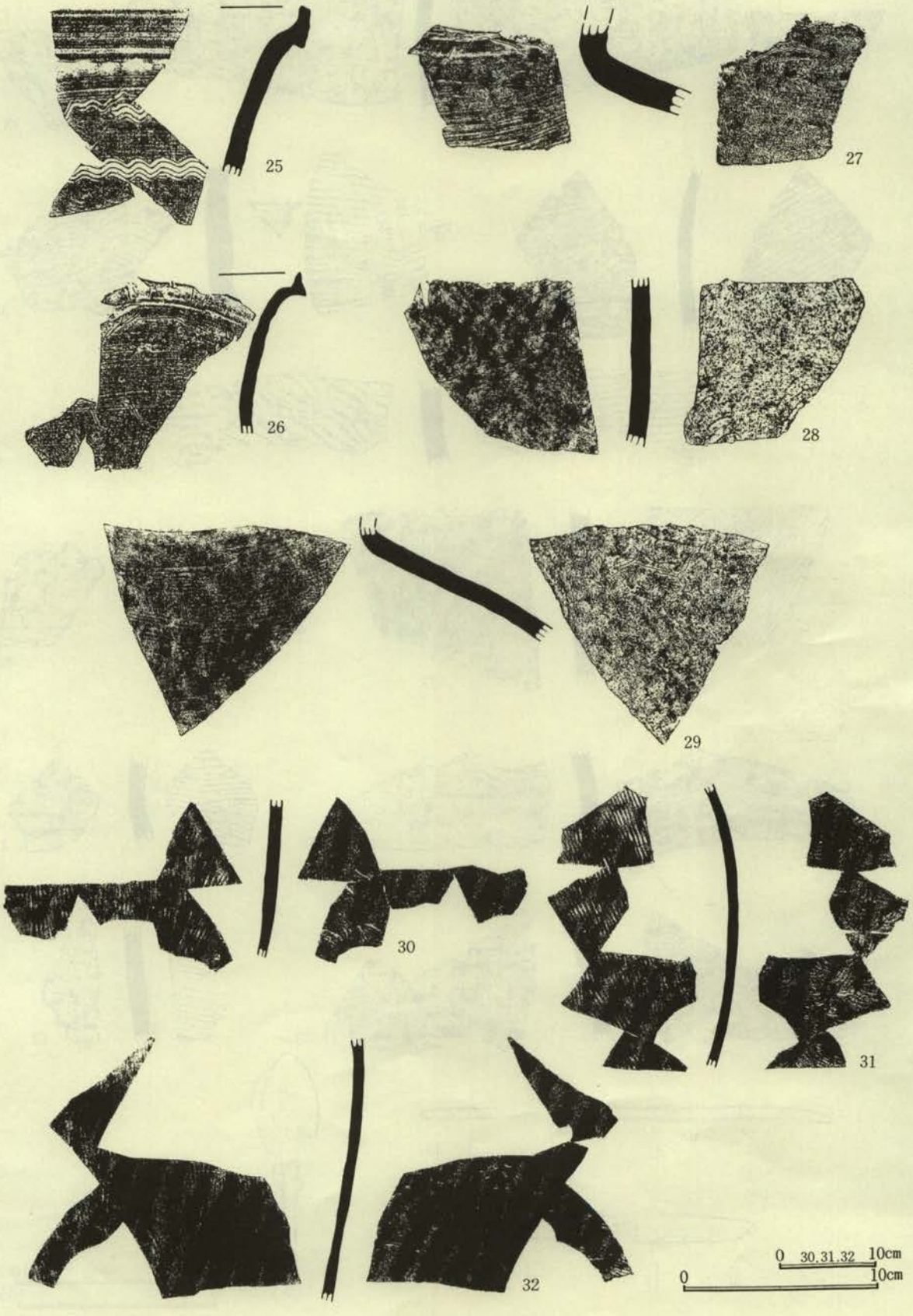
遺物は、南北壁と東壁周辺に多く散在し、カマドの東脇に暗文を施す土師坏、墨痕が認められる土師器片が出土した。須恵器の大甕の胴部片(30)が31号掘立柱建物跡、(31)は8号住居跡の貯蔵穴、(33)が6号住居跡、(39)が9号住居跡出土遺物と接合する。

10号住居跡出土遺物観察表（第85～87図1～45）

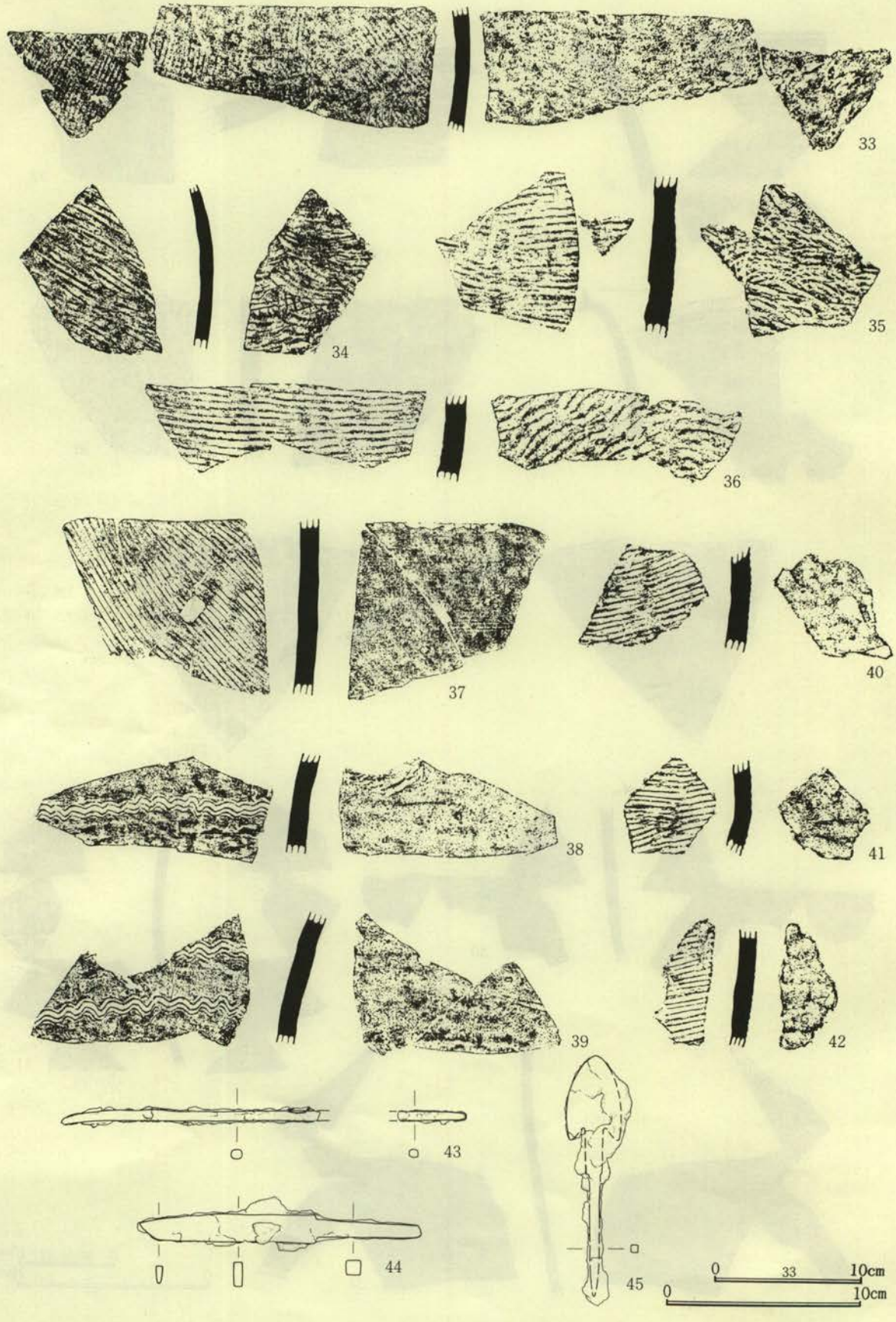
No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	坏（土師器）	口径 14.0	器高 4.2	底径 9.2	微砂粒	良好	褐色	底部・外面中位手持ち篦削内面に放射状暗文
2	坏（土師器）	口径 14.0	器高 4.5		粗砂粒	良好	褐色	底部・外面中位手持ち篦削
3	坏（土師器）	口径 11.7	器高 3.6		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削 内底部に剝がれ
4	坏（土師器）	口径 12.3	器高 3.7		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
5	坏（土師器）	口径 12.2	器高 3.5		微砂粒	良好	褐色	底部は擦れている
6	坏（土師器）	口径 12.2	器高 3.1		粗砂粒	良好	暗褐色	底部手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径 12.4	器高 3.3		粗砂粒	良好	暗褐色	底部手持ち篦削
8	坏（土師器）	口径 11.5	器高 3.2		粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
9	坏（土師器）	口径 12.3	器高 3.4		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削　内面に吉？の墨書



第85図　10号住居跡出土遺物(1)



第86図　10号住居跡出土遺物(2)



第87図　10号住居跡出土遺物(3)

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
10	坏（土師器）	口径 11.8　器高 3.4	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削　外面に爪痕
11	坏（土師器）	口径 (13.0)　残存器高 3.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
12	坏（土師器）	口径 (12.4)　器高 3.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
13	坏（土師器）	口径 (13.7)　残存器高 2.9	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
14	坏（土師器）	口径 (12.1)　器高 3.3	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
15	坏（土師器）	口径 (12.7)　残存器高 2.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
16	坏（土師器）		微砂粒	良好	褐色	内面に墨痕
17	坏（土師器）		微砂粒	良好	褐色	底部に墨痕
18	高台付碗（須恵器）	残存器高 2.5　底径 8.2	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り後付高台
19	坏（須恵器）	口径 11.9　器高 3.9　底径 6.8	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
20	坏（須恵器）	口径 (12.0)　器高 3.4　底径 7.5	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り後周縁部回転篦削
21	坏（須恵器）	口径 (12.8)　器高 3.9　底径(7.3)	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸切り未調整
22	坏（須恵器）	残存器高 1.4　底径 7.1	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
23	蓋（須恵器）	口径 16.5　器高 6.2　鈕径 4.2	微砂粒	良好	青灰褐色	
24	蓋（須恵器）	残存器高 2.7　鈕径 3.7	粗砂粒	良好	灰褐色	内面に朱痕
25	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	赤灰褐色	櫛歯状工具で波状文
26	壺（須恵器）		微砂粒	良好	明黒褐色	長頸壺の口縁部片
27	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰褐色	外面は平行叩目
28	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰褐色	外面は平行、内面は青海波の叩目
29	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰褐色	
30	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	黒褐色	外面は平行叩目、内面は青海波の当て目
31	甕（須恵器）		〃	〃	〃	30と同一個体
32	甕（須恵器）		〃	〃	〃	30と同一個体
33	甕（須恵器）		粗砂粒	普通	明褐色	外面は平行叩目
34	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰褐色	外面は平行叩目、内面は格子状の当て目
35	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	青灰褐色	外面は平行叩目、内面は青海波の当て目
36	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	青灰褐色	35と同一個体
37	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	黒灰褐色	外面は平行の叩目、内面は横撫
38	甕（須恵器）					25と同一個体
39	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	赤灰褐色	櫛歯状工具で波状文
40	甕（軟質須恵器）		粗砂粒	普通	黒褐色	40～42は同一個体
41	甕（軟質須恵器）		〃	〃	〃	
42	甕（軟質須恵器）		〃	〃	〃	
43	紡錘車（鉄製品）					
44	刀子（鉄製品）	全長14.6　刃長9.1				
45	鉄鏃（鉄製品）	全長12.6				

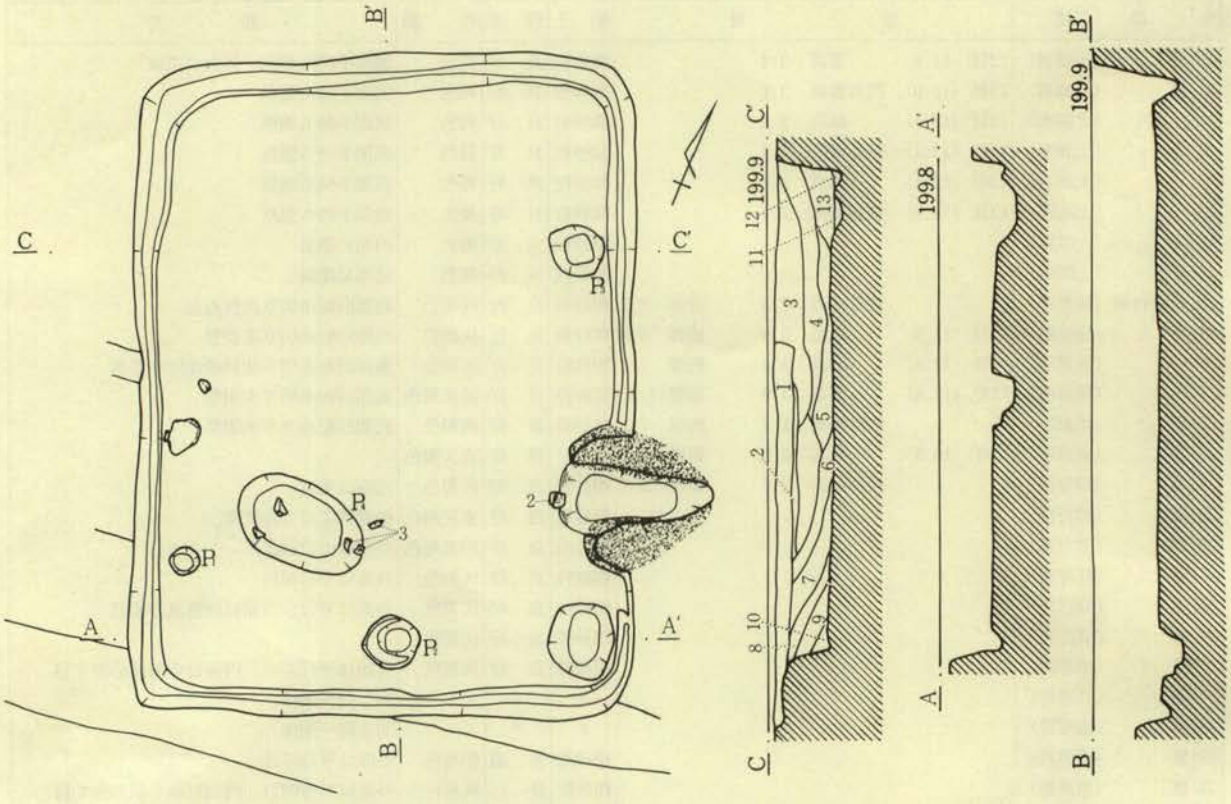
11号住居跡（第88図）

2区P・Q－29・30G、標高199.80mに検出された。北東方向に13号住居跡、西方に10号住居跡が隣接する。

平面形は、南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長5.2m、東西長3.9mを測る。主軸はN－53°－Eを示す。壁は25～48cmが残存する。周溝はカマドの両脇より全周する。幅は12～30cm、深さ5～10cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_3が検出された。P_4の東西に長い土坑状の掘り込みは、1.1m×65cmの楕円形で深さ12cmを測る。

貯蔵穴は南東隅に設けられ、50×60cmのやや歪んだ楕円形を呈し、深さ14cmを測る。カマドは東壁中央やや南寄りに灰褐色粘土により構築され、焚口より煙道部まで1.2mを測る。

遺物は、P_4の周辺で「山椎」の墨書土器(3)とカマドの焚口部に須恵器坏(2)、覆土内より「平」の墨書土器(4)、高台付碗(1)、土師器の坏(5)、カマド内より甕片（6、7）が出土。



11号住居跡土層

1層　暗褐色土でロームB、ローム粒、カーボン粒、FPを含む
2層　暗褐色土でロームBとローム粒を含み締まっている
3層　暗褐色土でロームB、ローム粒、FPを含む
4層　3層よりロームB、ローム粒を多く含む
5層　暗褐色土でロームB、ローム粒、黒褐色土Bを含む
6層　暗褐色土でロームB、ローム粒、黒褐色土B、焼土粒を含む
7層　暗褐色土で焼土粒、ロームB、ローム粒を多く含む
8層　黒褐色土で少量のロームB、ローム粒を含む
9層　暗褐色土で少量のロームB、ローム粒、黒褐色土を含む
10層　暗褐色土でロームB、ローム粒を含み、全体にソフト
11層　黒褐色土でロームB、ローム粒を含む
12層　11層と同じ
13層　黒褐色土で少量のロームB、ローム粒、暗褐色土を含む

第88図　11号住居跡

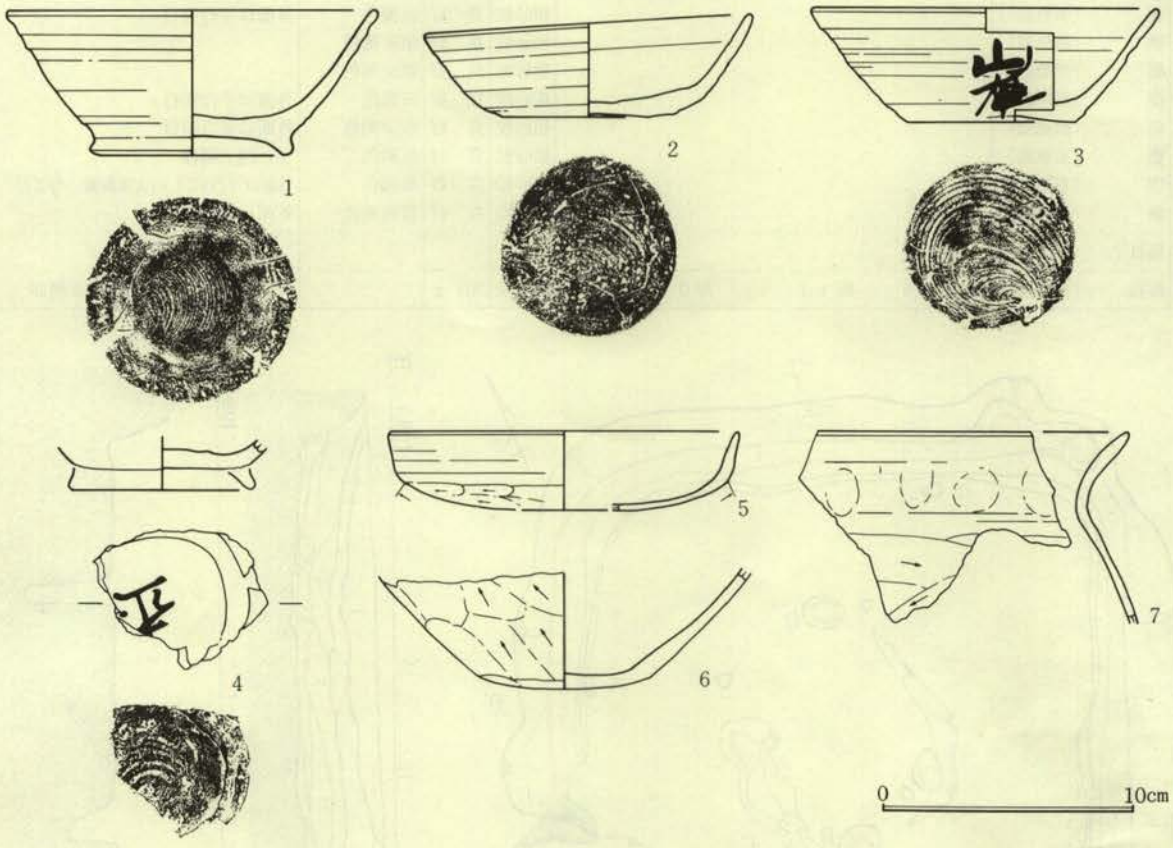
11号住居跡出土遺物観察表（第89図1～7）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	高台付碗（還元焔）	口径（14.2）　器高 5.7　底径 7.2	粗砂粒	良	黒褐色	回転糸切り後付高台
2	坏（還元焔）	口径 12.8　器高 3.7　底径 6.8	粗砂粒	良　好	淡赤褐色	底部回転糸切り後周縁部手持ち篦削
3	坏（還元焔）	口径 13.6　器高 4.5　底径 6.7	粗砂粒	良　好	灰褐色	底部回転糸きり未調整 外面に「山椎」の墨書
4	高台付碗（土師器）		粗砂粒	良　好	淡黄褐色	底部外面に「平」の墨書
5	坏（土師器）	口径（13.6）　器高 3.1	微砂粒	良　好	褐色	底部手持ち篦削
6	甕（土師器）		微砂粒	良　好	赤褐色	
7	甕（土師器）		微砂粒	良　好	褐色	

12号住居跡（第90図）

2区Q・R－27・28G、標高199.20mに検出された。東方にJ1号住居跡、西方にやや離れて11号住居跡北方に1号・3号溝が位置する。

平面形は南北にやや長い隅丸方形を呈し、規模は南北長5.4m、東西長4.8mを測る。主軸はN－64°－Eを示す。壁は40～70cmが残存し、東辺のカマド左袖部～北～西壁は上部で緩やかに開口する。周溝は南西隅より東壁のカマド付近まで連続する。幅15～35cm、深さ2～5cmと浅い。床面はほぼ平坦であるが、地割れが床面中央やや東寄りから南西に蛇行して南壁の西部まで走行する。



第89図　11号住居跡出土遺物

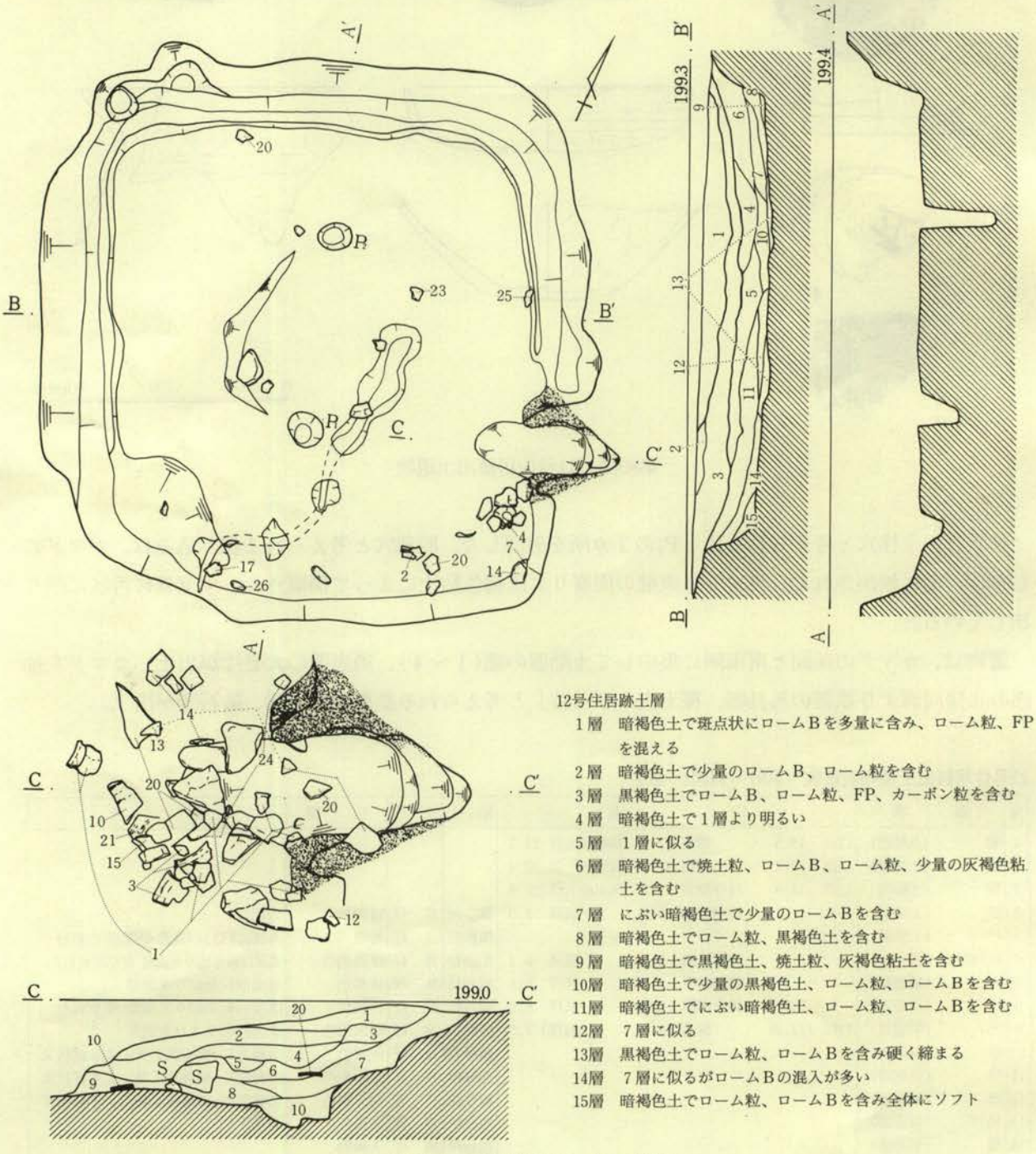
柱穴は、主柱穴と考えられるP_1とP_2の２カ所を確認した。貯蔵穴と考えられる掘り込みは、カマドの右袖部の南に検出された。カマドは東壁の南寄りに灰褐色粘土によって構築され、東壁外に舌状に張り出している。

遺物は、カマドの前面と南東隅に集中して土師器の甕（１～４）、須恵器の大甕片が出土。カマド左袖部の北側周溝より鉄製の馬具㉕、覆土内より「益」と考えられる墨書土器片(5)、敲石㉖が出土。

12号住居跡出土遺物観察表（第91～94図1～26）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 19.5	器高 27.8	胴部最大径 21.7				
2	甕（土師器）	口径 20.7	器高 27.1	胴部最大径 22.4				
3	甕（土師器）	口径 18.6	残存器高 22.2	胴部最大径 20.6				
4	甕（土師器）		残存器高 8.0	底径 8.0	微砂粒	良好	暗褐色	底部片
5	坏（土師器）				微砂粒	良好	褐色	外面に「益」の墨書 内面黒色処理
6	高台付碗（還元焔）		残存器高 2.1	底径 8.2	粗砂粒	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り未調整 底部爪痕有り
7	坏（須恵器）		残存器高 2.1	底径 6.8	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
8	坏（須恵器）		残存器高 2.8	底径 8.2	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整 墨痕有り
9	坏（須恵器）	口径 (12.3)	器高 4.2	底径(7.6)	微砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸きり未調整
10	甕（須恵器）				微砂粒	良好	灰褐色	口縁部片 櫛歯状工具による波状文
11	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	暗赤褐色	口縁部片 櫛歯状工具による波状文
12	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	淡赤褐色	口縁部片 櫛歯状工具による波状文
13	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	肩部片
14	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	
15	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	暗灰褐色	外面は平行叩目

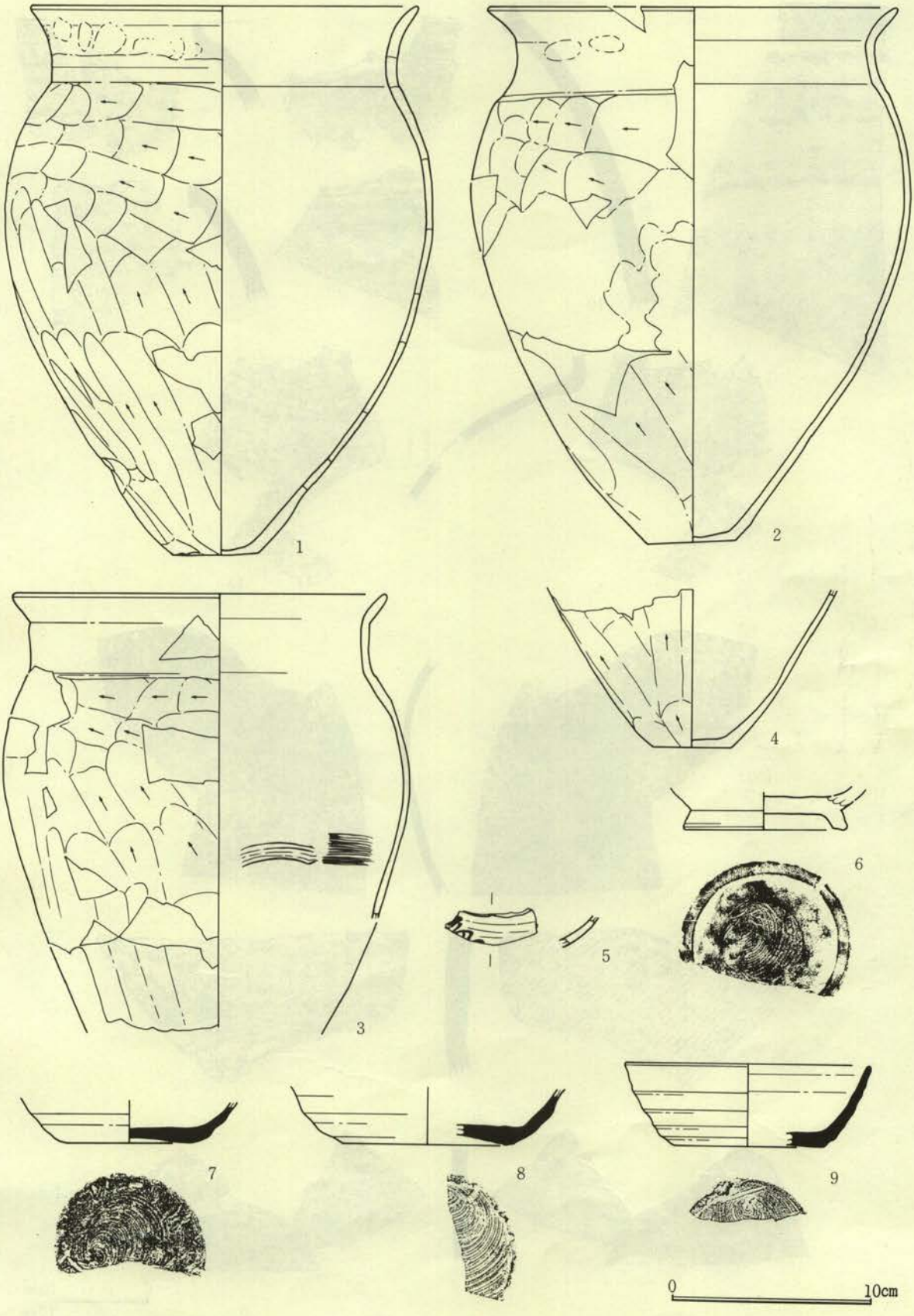
16	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	灰褐色	外面は櫛歯状工具による調整
17	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	灰褐色	外面は平行叩目
18	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	暗灰褐色	
19	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	暗灰褐色	
20	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	灰褐色	外面は平行叩目
21	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	暗灰褐色	外面は平行叩目
22	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	灰褐色	19と同一個体
23	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	黒褐色	外面は平行叩目、内面青海波の当て目
24	甕	(須恵器)		粗砂粒	良	好	青灰褐色	外面は平行叩目
25	馬具？	(鉄製品)						
26	敲石	(石製品)	長さ 14.6　　幅 6.1　　厚さ 4.4	重　量	703 g			先端部を敲打面、平坦面を磨面



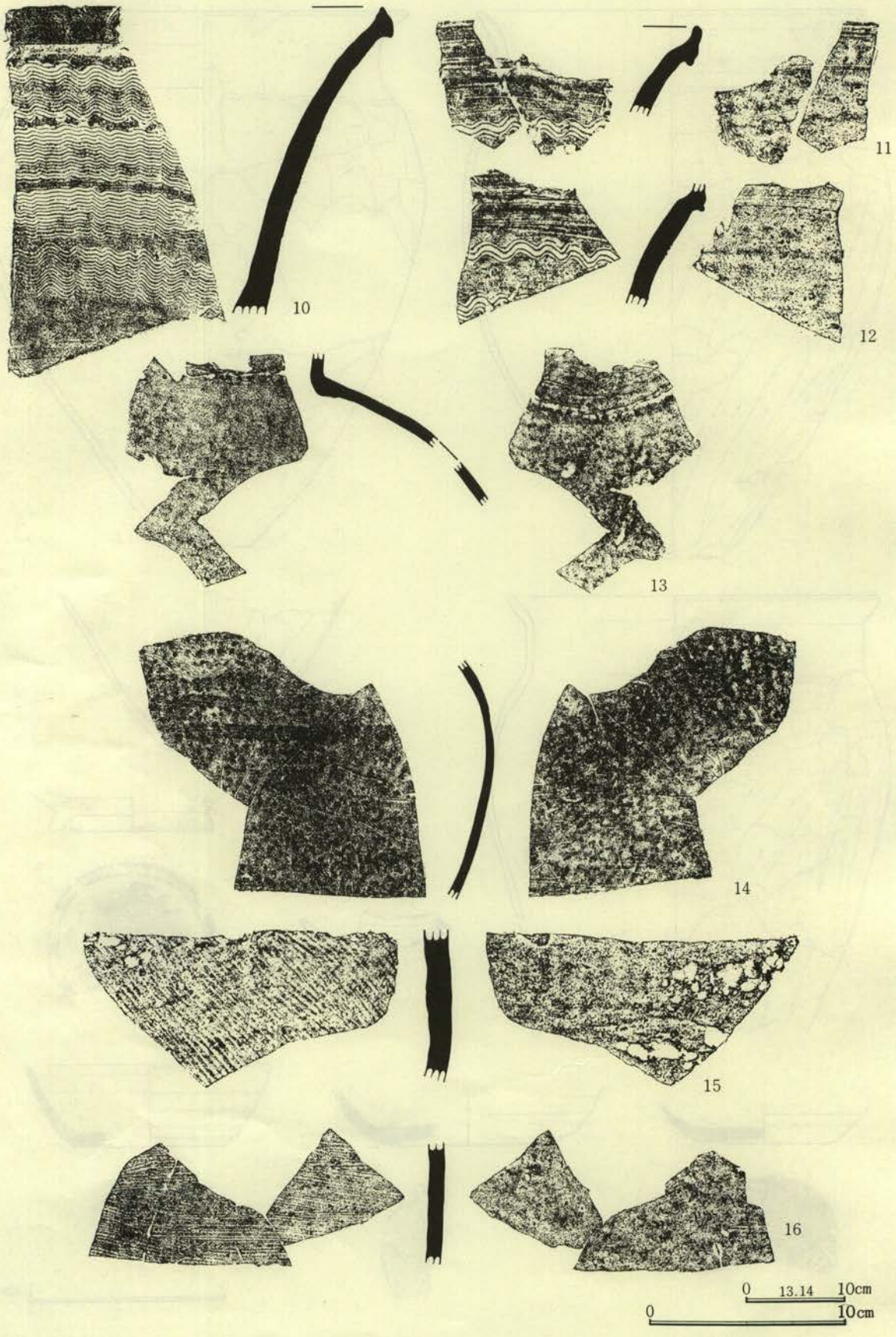
12号住居跡土層

1層　暗褐色土で斑点状にロームBを多量に含み、ローム粒、FPを混える
2層　暗褐色土で少量のロームB、ローム粒を含む
3層　黒褐色土でロームB、ローム粒、FP、カーボン粒を含む
4層　暗褐色土で1層より明るい
5層　1層に似る
6層　暗褐色土で焼土粒、ロームB、ローム粒、少量の灰褐色粘土を含む
7層　にぶい暗褐色土で少量のロームBを含む
8層　暗褐色土でローム粒、黒褐色土を含む
9層　暗褐色土で黒褐色土、焼土粒、灰褐色粘土を含む
10層　暗褐色土で少量の黒褐色土、ローム粒、ロームBを含む
11層　暗褐色土でにぶい暗褐色土、ローム粒、ロームBを含む
12層　7層に似る
13層　黒褐色土でローム粒、ロームBを含み硬く締まる
14層　7層に似るがロームBの混入が多い
15層　暗褐色土でローム粒、ロームBを含み全体にソフト

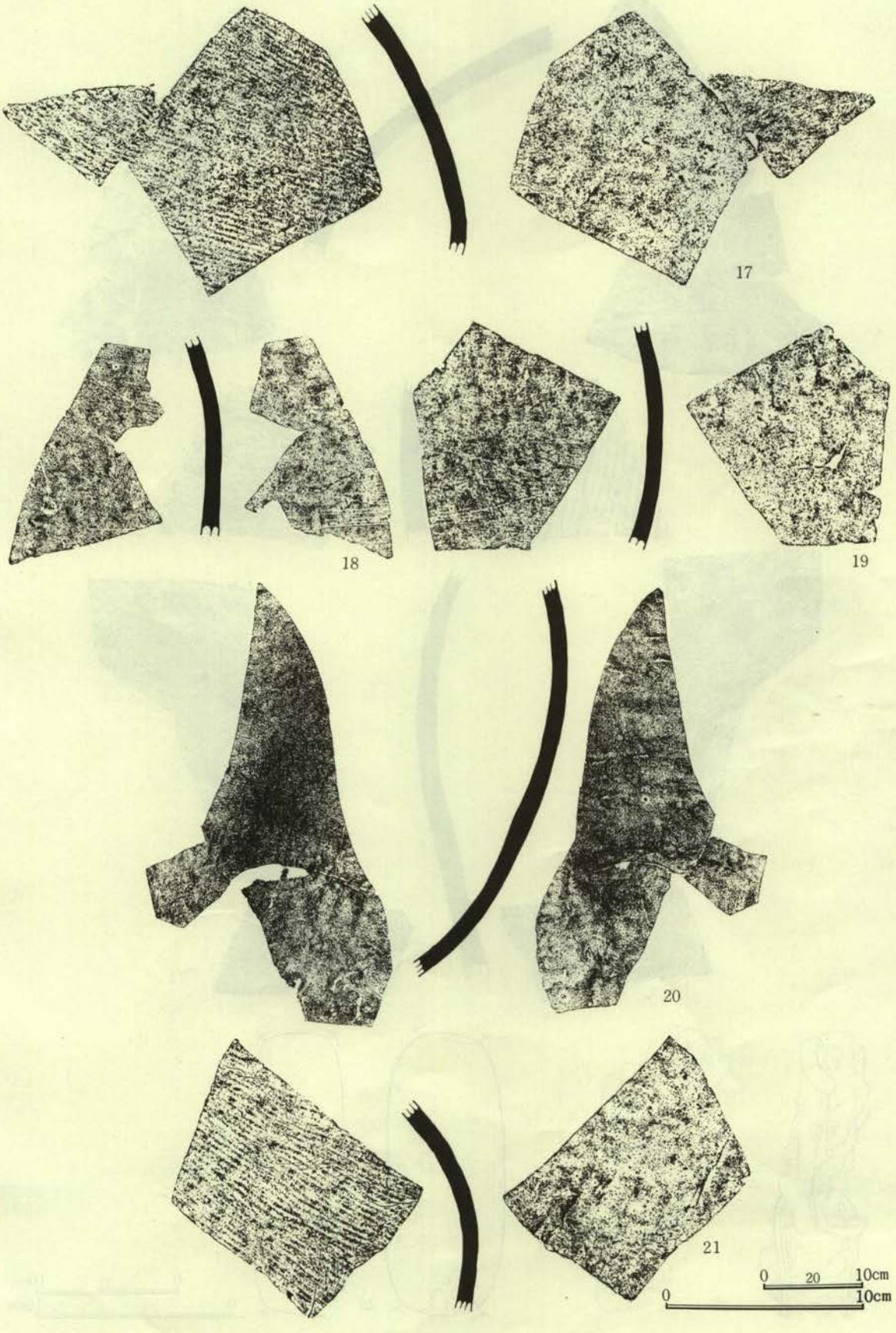
第90図　12号住居跡・カマド跡



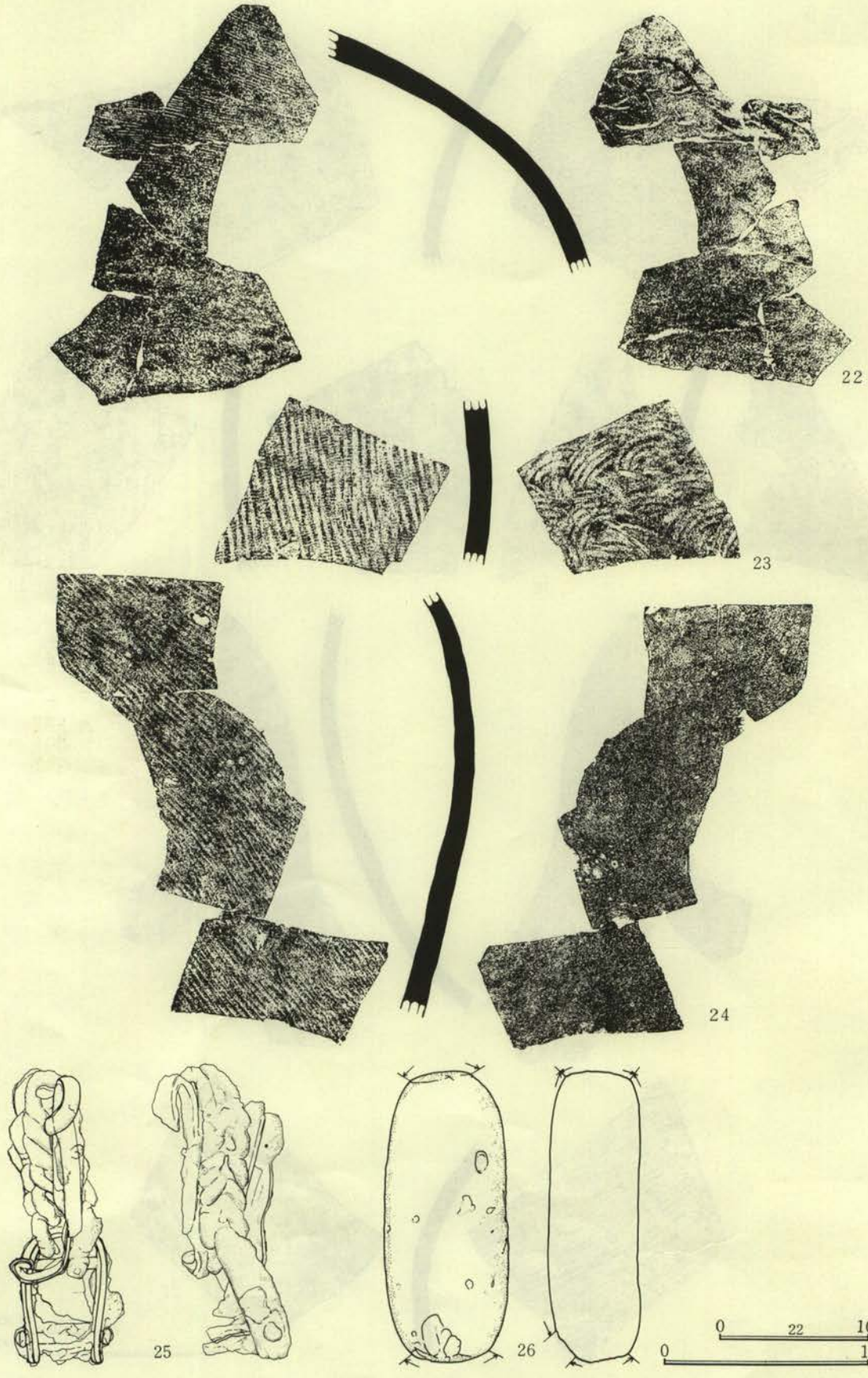
第91図　12号住居跡出土遺物(1)



第92図　12号住居跡出土遺物(2)



第93図　12号住居跡出土遺物(3)



第94図　12号住居跡出土遺物(4)

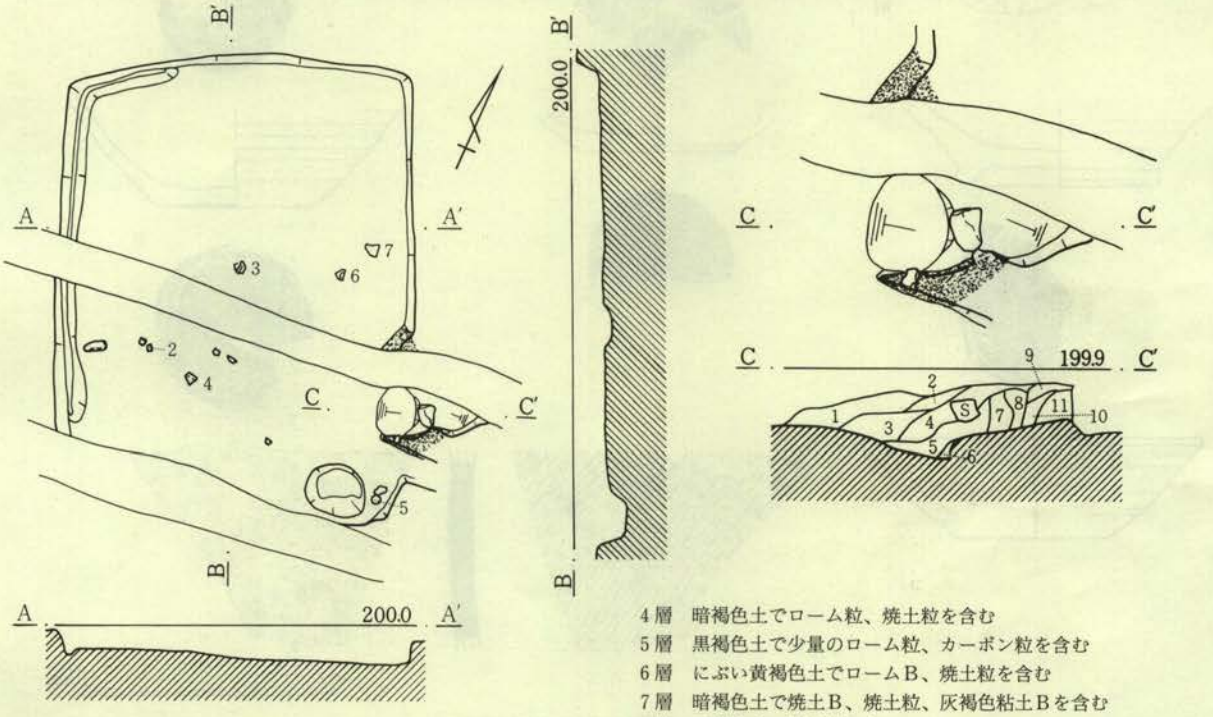
12号住居カマド跡

1層　暗褐色土で少量の灰褐色粘土、ローム粒を含む
2層　暗褐色土で灰褐色粘土、ロームBを多く含む
3層　灰褐色粘土
4層　暗褐色土で灰褐色粘土、ロームB、ローム粒、FPを含む
5層　暗褐色土でロームB、焼土Bを含む
6層　灰褐色粘土で少量の焼土B、ロームB、暗褐色土を含む
7層　灰褐色粘土で焼土B、ロームBを含む
8層　暗褐色土でロームB、黒褐色土B、焼土粒、カーボン粒を含む
9層　暗褐色土で少量のロームB、ローム粒、灰褐色粘土を含む
10層　掘り方 ボソボソのローム

13号住居跡（第95図）

2区O－29・30G、標高199.90mに検出された。南西に11号住居跡、北西に8号掘立柱建物跡が隣接する。中央部と南壁に耕作溝が東西に走行し、カマド中央部と南壁の大半を破壊している。

平面形は南北に長い方形を呈する。規模は南北長約3.75m、東西長2.85mを測る。主軸はN－65°－Eを示す。壁は15～20cmが残存する。周溝は西壁の南部より北西隅までL字形に検出された。床面はカマ



13号住居跡カマド

1層　暗褐色土でFP、ローム粒を含む
2層　暗褐色土でFP、ロームBを含む
3層　暗褐色土でロームB、焼土粒を含む
4層　暗褐色土でローム粒、焼土粒を含む
5層　黒褐色土で少量のローム粒、カーボン粒を含む
6層　にぶい黄褐色土でロームB、焼土粒を含む
7層　暗褐色土で焼土B、焼土粒、灰褐色粘土Bを含む
8層　暗褐色土で焼土粒を含む
9層　暗褐色土で焼土Bを含む
10層　暗褐色土で焼土粒を含む
11層　暗褐色土で焼土粒、FPを含む

第95図　13号住居跡・カマド跡

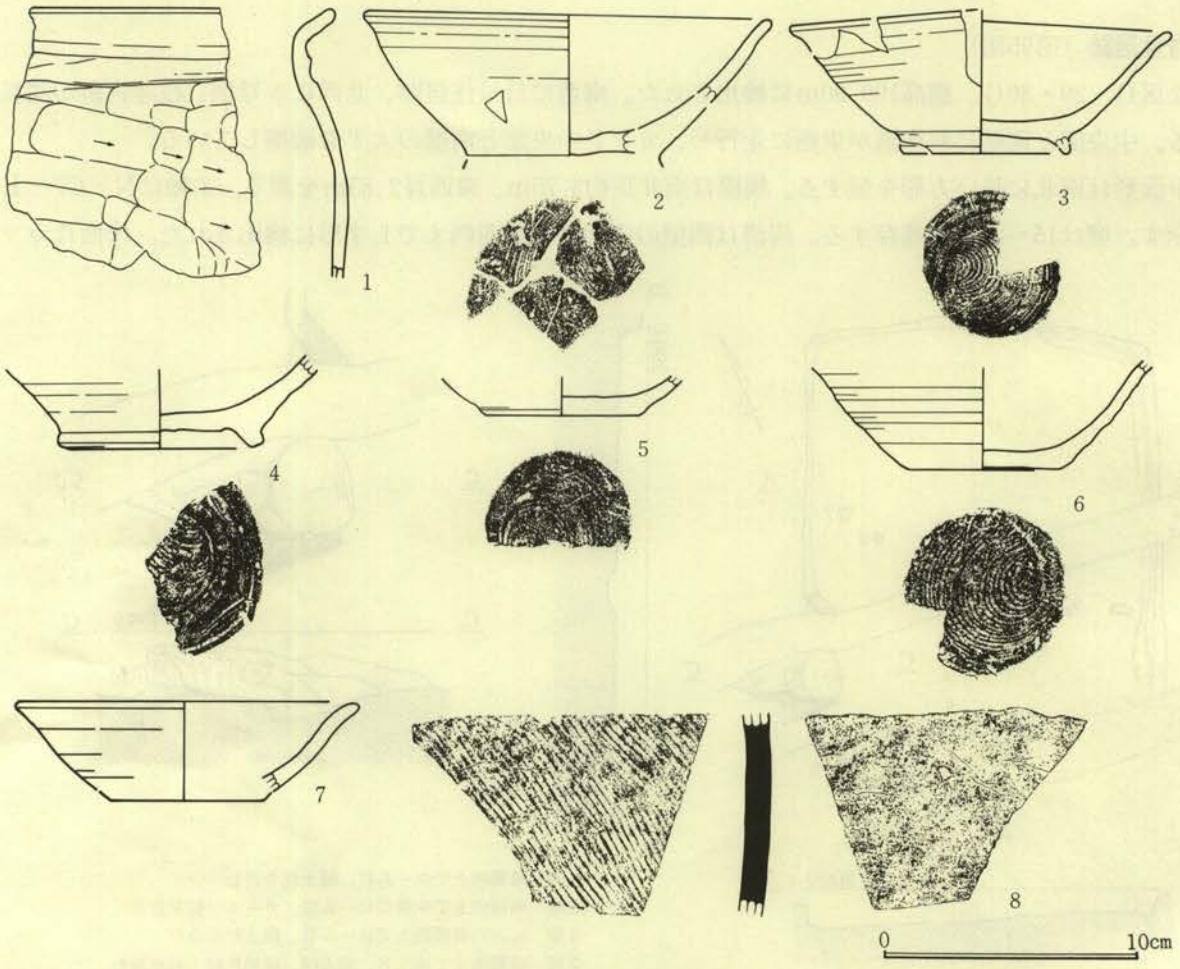
13号住居跡出土遺物観察表（第96図1～8）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）				粗砂粒	良好	褐色	
2	高台付碗（還元焔）	口径 15.8	坏部器高 5.5	坏部底径 7.7	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整　高台欠損
3	高台付碗（還元焔）	口径 14.7	器高 5.6	底径 6.4	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台　爪痕有
4	高台付碗（還元焔）		残存器高 3.1	底径 7.4	粗砂粒	良好	黒褐色	底部回転糸きり後付高台
5	坏（還元焔）		残存器高 1.4	底径 6.1	粗砂粒	良好	淡灰黄褐色	底部回転糸きり未調整
6	坏（還元焔）		残存器高 4.1	底径 6.0	粗砂粒	良好	淡灰黄褐色	底部回転糸きり未調整
7	坏（還元焔）	口径 (13.3)			粗砂粒	良好	淡灰褐色	
8	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	黒褐色	外面平行叩目

ド方向に緩やかに傾斜している。柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴は南東隅に設けられ、47×41cmの楕円形で深さ14cmを測る。カマドは東壁の南寄りに灰褐色粘土と礫により構築されている。

遺物は、中央部から南方に散在して甕片、須恵器坏・同高台付碗・同甕片が出土。



第96図　13号住居跡出土遺物

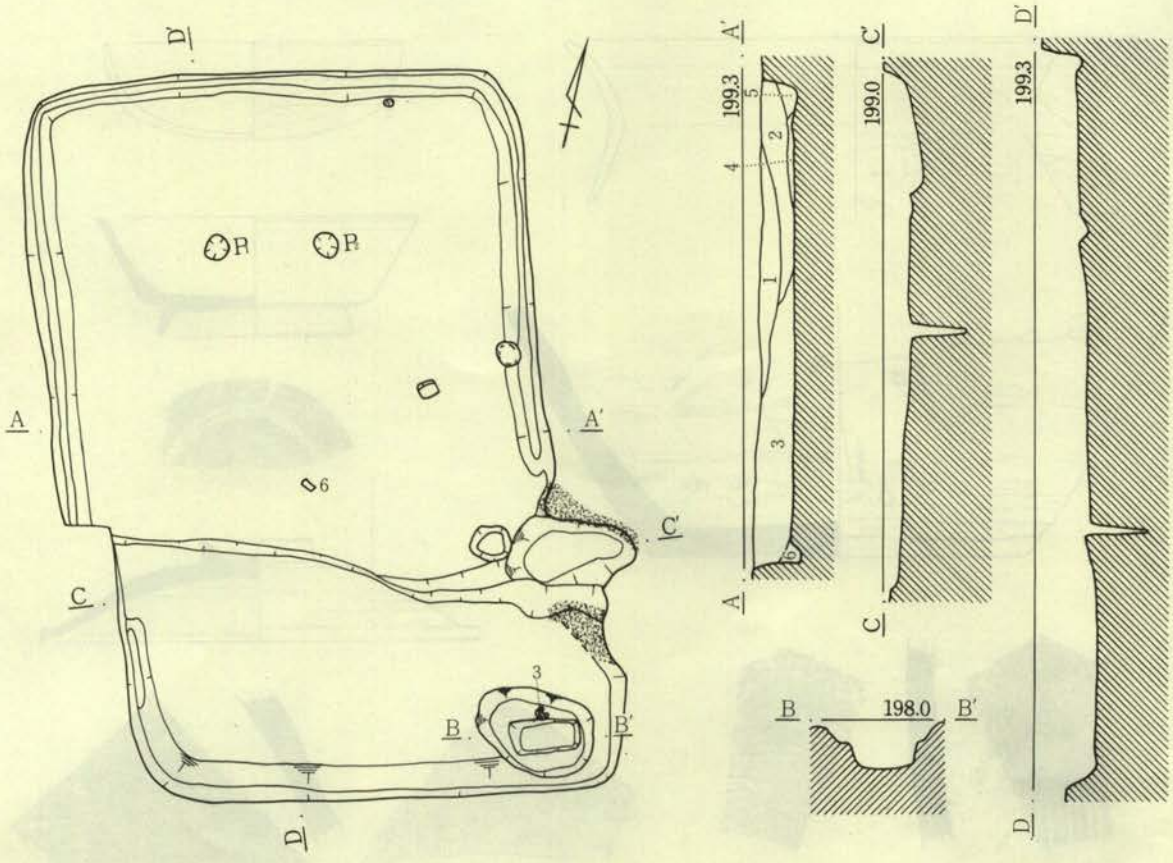
14号住居跡（第97図）

遺物は、中央部から南方に散在して甕片、須恵器坏・同高台付碗・同甕片が出土。

2区O・P－24・25G、標高199.20m前後に検出された。東方にJ14号住居跡、南西にJ1号住居跡、北西に7号掘立柱建物跡と3号溝が隣接する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈していたが、カマドの右袖部から西壁部に地震の地割れが走り、南方部分が東に35cm程ずれている。規模は南北長6.05m、東西長3.95mを測る。主軸はN－72°－Eを示す。壁は14～30cmが残存する。周溝はほぼ全周するが貯蔵穴と地割れによる食い違い部分で途切れる。幅は20cm前後で深さ1～5cmと浅い。床面は僅かに南下がりである。柱穴はP_1～P_3の3カ所が検出されたが、P_1とP_2は5cm前後の浅い窪みである。貯蔵穴は南東隅に設けられ、95×65cmの楕円形を呈し、内面に一段低い55×25cmの長方形の掘り込みを有する。最深部で32cmを測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで1.05mを測る。

遺物は、カマド内より土師器の甕片、貯蔵穴で土師器の坏、他に墨痕がある土師坏片等が出土。



14号住居跡土層

1層　黒褐色粘質土で多量のロームB、ローム粒、FPを含む
2層　暗褐色土で多量のロームB、ローム粒、FPを含む
3層　黒褐色土でロームB、ローム粒、FPを含む
4層　暗褐色土で灰褐色粘土、ローム粒を含む
5層　暗褐色土で灰褐色粘土、ローム粒を含みソフト
6層　暗褐色土でロームB、ローム粒を含む

第97図　14号住居跡

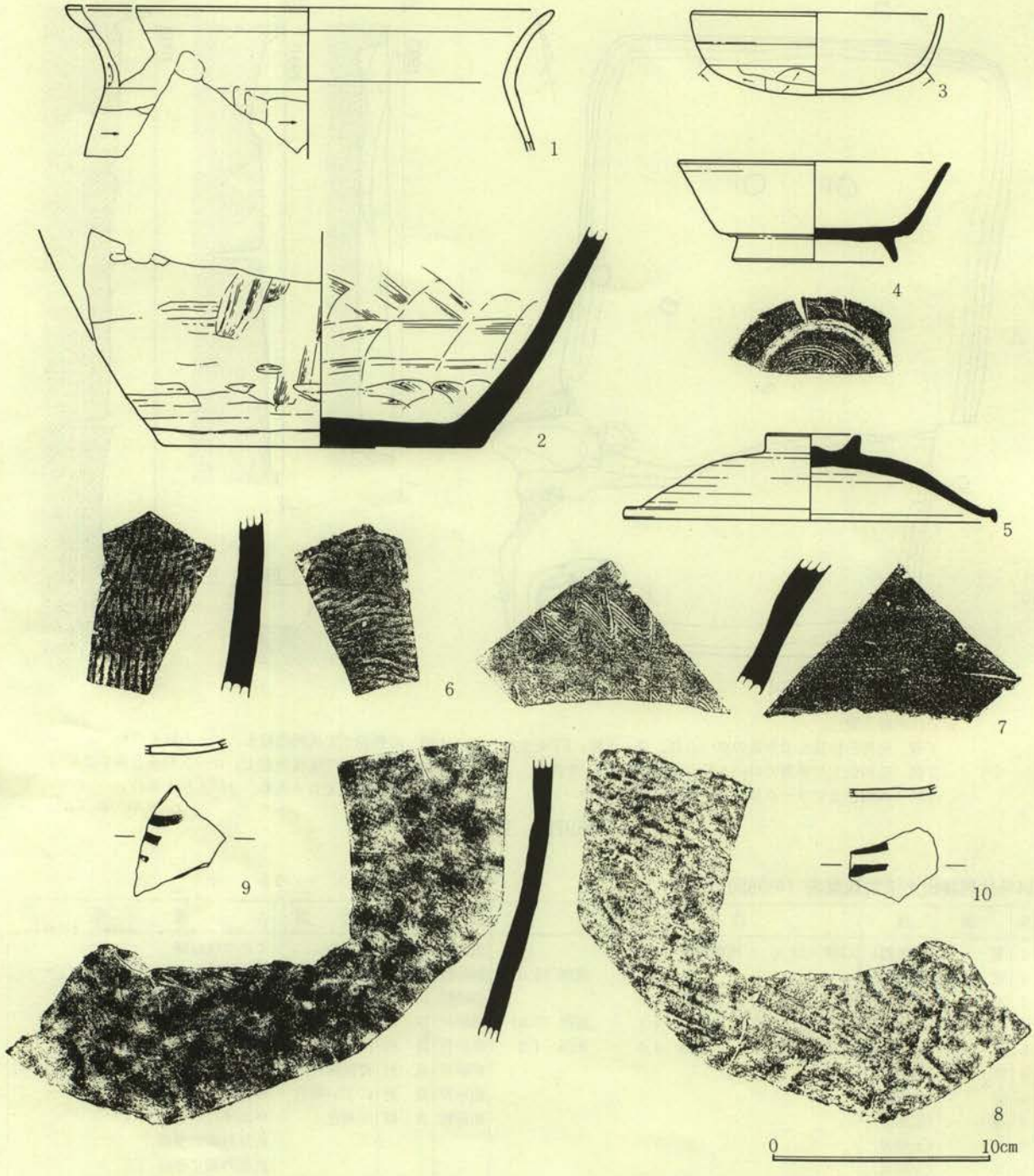
14号住居跡出土遺物観察表（第98図1～10）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（22.4）	残存器高 7.0		微砂粒	良好	淡褐色	くの字状口縁
2	壺（還元焔）			底径 15.0	粗砂粒	良好	灰褐色	
3	坏（土師器）	口径 11.7	器高 3.8		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	高台付碗（須恵器）	口径（12.3）	器高 4.7	底径（7.8）	微砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸きり後付高台
5	蓋（須恵器）	口径（17.1）	器高 4.0	鈕径 4.2	微砂粒	良好	灰褐色	
6	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	青灰褐色	外面平行叩目、内面青海波の当て目
7	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	にぶい褐色	外面に櫛歯状工具の波状文
8	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	外面平行叩目
9	坏（土師器）							底部外面に墨痕
10	坏（土師器）							底部外面に墨痕

15号住居跡（第99図）

2区L－30G、M－29・30G、標高200.30m付近に検出された。9号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北4.5長m、東西長3.7mを測る。主軸はN－78°－Eを示す。壁は20～30cmが残存する。周溝は北壁の中央から西方部分の北西コーナーに検出された。床面はほぼ平坦である。柱穴はカマドと貯蔵穴の中間にP_1が検出されたが本住居跡に帰属するのもかは不明。貯蔵穴は南東隅に設けられ、50cm前後の歪んだ円形を呈し、内部に40×30cmの楕円形の掘り込みを



第98図　14号住居跡出土遺物

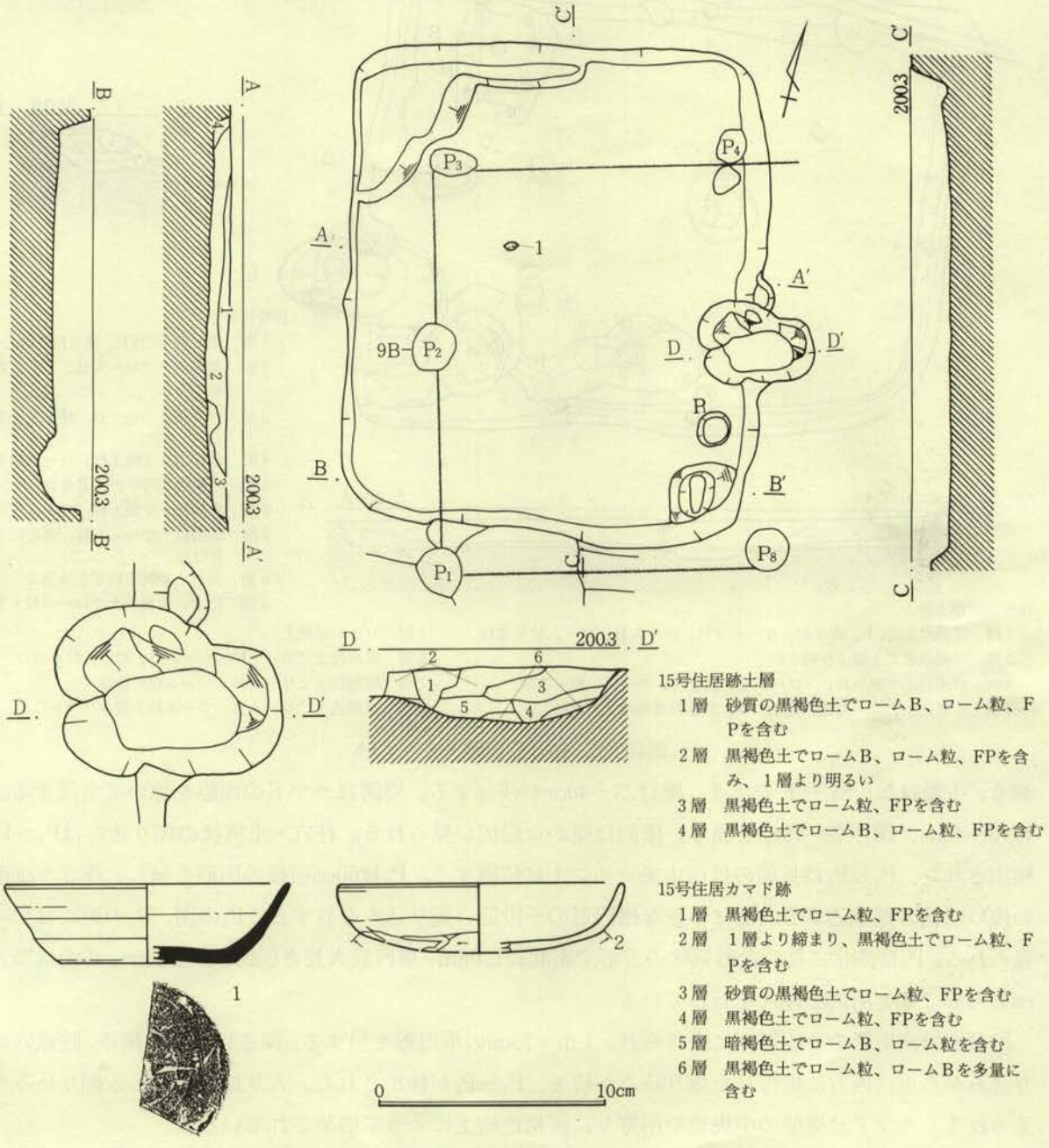
有する。最深部で16cmを測る。

カマドは東壁中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されていたが袖部の張り出しは不明であった。

遺物は、僅かで中央のやや北西寄りで床面より７cmほど浮いて須恵器の坏(1)と覆土中より土師器坏(2)が出土。

15号住居出土遺物観察表（第99図１、２）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（須恵器）	口径（12.6） 器高 3.5 底径（7.9）	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転篦削
2	坏（土師器）	口径（12.8） 器高（3.1）	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削

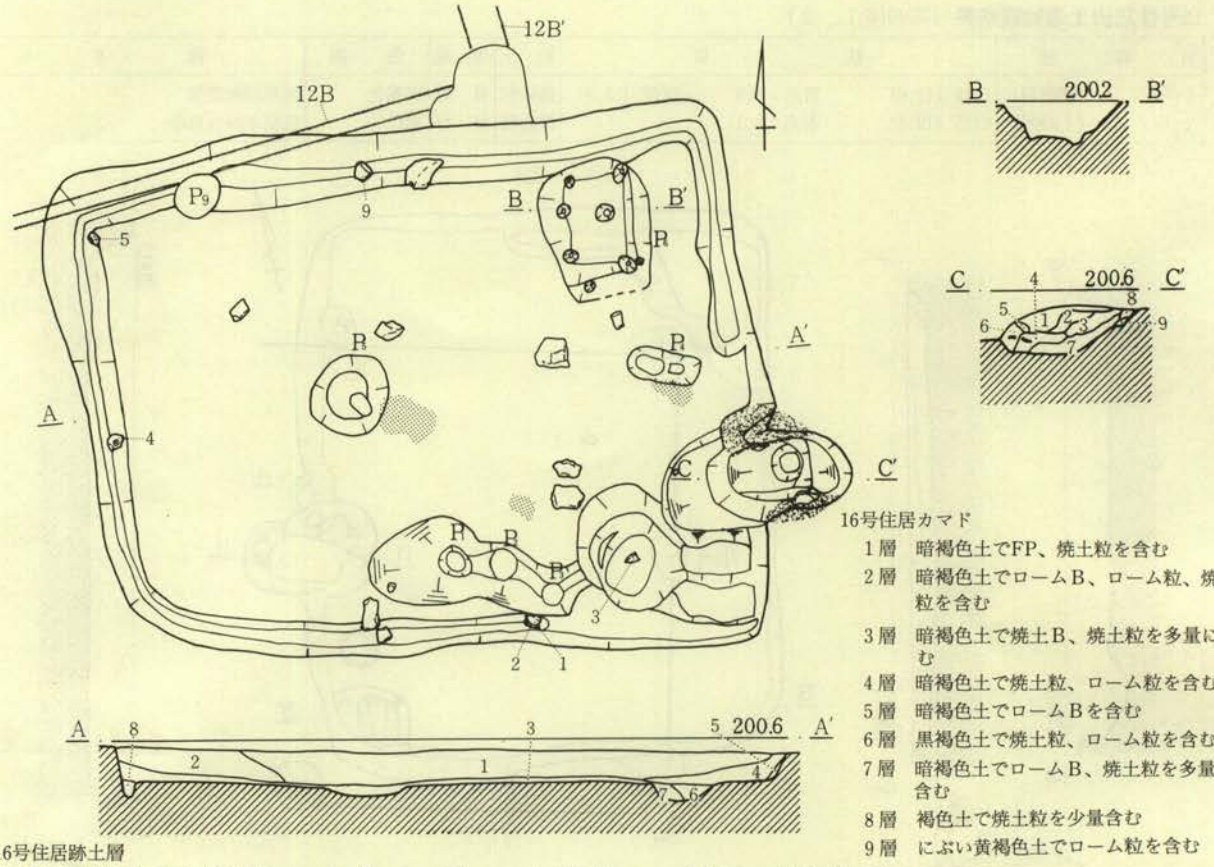


第99図　15号住居跡・カマド跡・出土遺物

16号住居跡（第100図）

２区Ｌ－31・32Ｇ、標高200.50ｍに検出された。北壁で12・12′号掘立柱建物跡と重複し、南東に15号住居跡・９号掘立柱建物跡、東方に10・10′号掘立柱建物跡、西方に28号掘立柱建物跡が隣接する。12号掘立柱建物跡と新旧関係は、16号住居跡が新しい。

平面形は東西に長い隅丸台形気味の方形を呈している。規模は最大東西長5.6ｍ、最大南北長4.3ｍを



16号住居カマド

1層　暗褐色土でFP、焼土粒を含む
2層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼土粒を含む
3層　暗褐色土で焼土B、焼土粒を多量に含む
4層　暗褐色土で焼土粒、ローム粒を含む
5層　暗褐色土でロームBを含む
6層　黒褐色土で焼土粒、ローム粒を含む
7層　暗褐色土でロームB、焼土粒を多量に含む
8層　褐色土で焼土粒を少量含む
9層　にぶい黄褐色土でローム粒を含む

16号住居跡土層

1層　暗褐色土でFP、焼土粒、カーボン粒、ロームB、ローム粒を含む
2層　暗褐色土で1層より明るい
3層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼土粒、カーボン粒を含む
4層　暗褐色土でローム粒、焼け土粒、少量の黒褐色土を含む
5層　ローム崩壊土
6層　暗褐色土で焼け土粒、ロームB、ローム粒を含む
7層　暗褐色土でロームB、ローム粒を含む
8層　暗褐色土でロームB、ローム粒を含みソフト

第100図　16号住居跡・カマド跡

測る。主軸はN－81°－Eを示す。壁は23～40cmが残存する。周溝はカマドの両脇を除いて全周する。幅は15～40cm、深さ2～10cmを測る。床面は僅かな起伏が見られる。柱穴・土坑状の掘り込みはP_1～P_6が検出された。P_4とP_5は長軸のほぼ中央ライン上に位置する。P_5は60cm前後の円形を呈し、深さ5cm前後の浅い皿状の掘り込みで内部に小さな楕円形の一段低い掘り込みを有する。P_4の南、P_5の東には火床が見られる。P_6は南北に長い台形気味の方形で南北長1,08m、東西最大長さ89cm、深さ26cm、底面は75×60cmの方形で6カ所に小柱穴を有している。

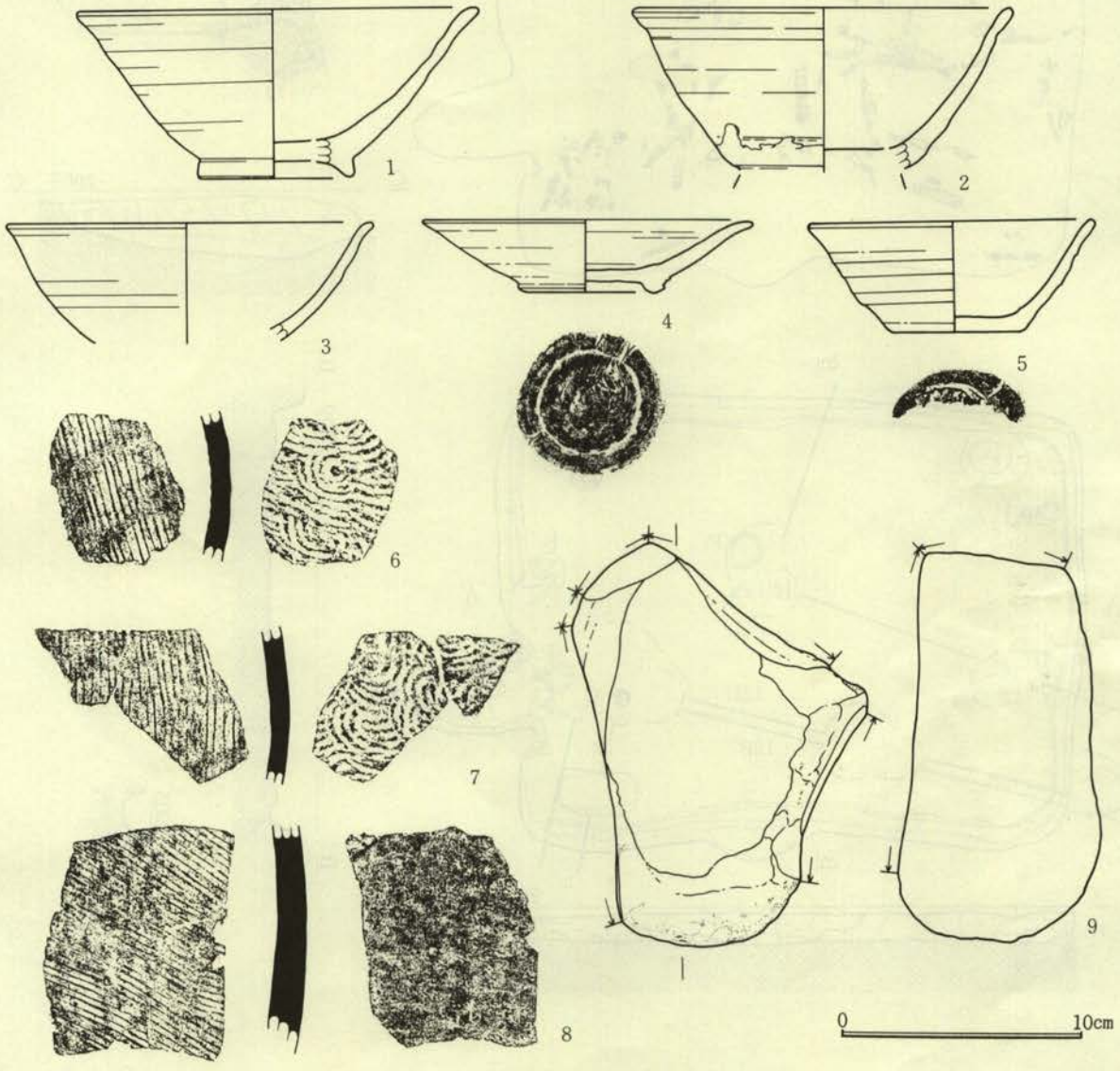
貯蔵穴は南東隅やや西寄りに設けられ、1m×75cmの楕円形を呈する。深さは24cmを測る。貯蔵穴の掘り込みから更に西方に蛇行した掘り込みが続き、P_1～P_3が検出された。入り口部に拘わる掘り込みと考えられる。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されている。

遺物は、周溝沿いに散在し、西壁中央やや南よりで須恵器高台付坏(4)、北壁中央部の周溝上より砥石(9)、その他に須恵器高台付碗、須恵器坏、須恵器甕片が出土。

16号住居跡出土遺物観察表（第101図1～9）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	高台付碗（還元焔）	口径（16.4）	器高 7.0	底径（6.2）	微砂粒	良好	灰褐色	
2	高台付碗（還元焔）	口径（15.5）	坏部器高 6.7		微砂粒	良好	灰褐色	
3	高台付碗（還元焔）	口径（15.0）	残存器高 5.0		粗砂粒	良好	灰褐色	

4	高台付坏	(還元焔)	口径 13.5	器高 3.1	底径 5.5	粗砂粒	良 好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
5	碗	(還元焔)	口径 (11.9)	器高 4.5	底径(5.6)	微砂粒	良 好	灰褐色	底部回転糸きり未調整口唇部に油痕
6	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面平行叩目、内面は青海波の当て目
7	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面平行叩目、内面は青海波の当て目
8	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	黒褐色	外面平行叩目
9	砥石	(石製品)	長さ 16.3	幅 12.4	厚さ 8.4	重 量 1353g			石材は輝石安山岩

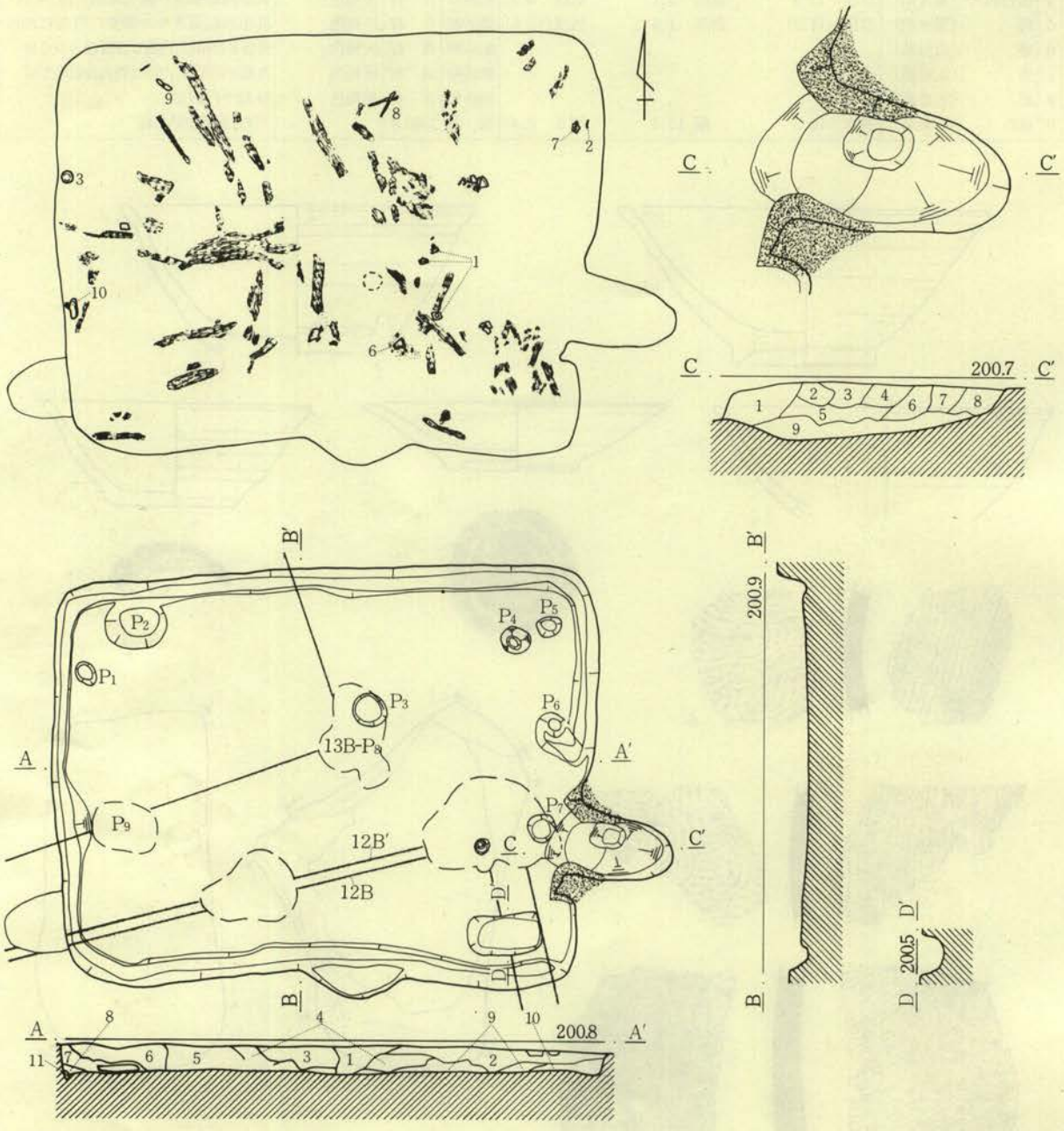


第101図　16号住居跡出土遺物

17号住居跡（第102図）

2区J・K－32G、標高200.70～80mに検出された。11・12号掘立柱建物跡と重複し、東方に18号住居跡・10・10′号掘立柱建物跡が位置する。11・12号掘立柱建物跡との新旧関係は、17号住居跡が新しい。焼失住居で床面に建築部材等の炭化材が残る。

平面形は東西に長い隅丸方形を呈し、南壁の中央部分が内湾気味に歪む。規模は東西長4.9m、南北長最大3.8mを測る。主軸はN－89°－Eを示す。壁は15～34cmが残存する。周溝はカマドの両脇と貯蔵穴部



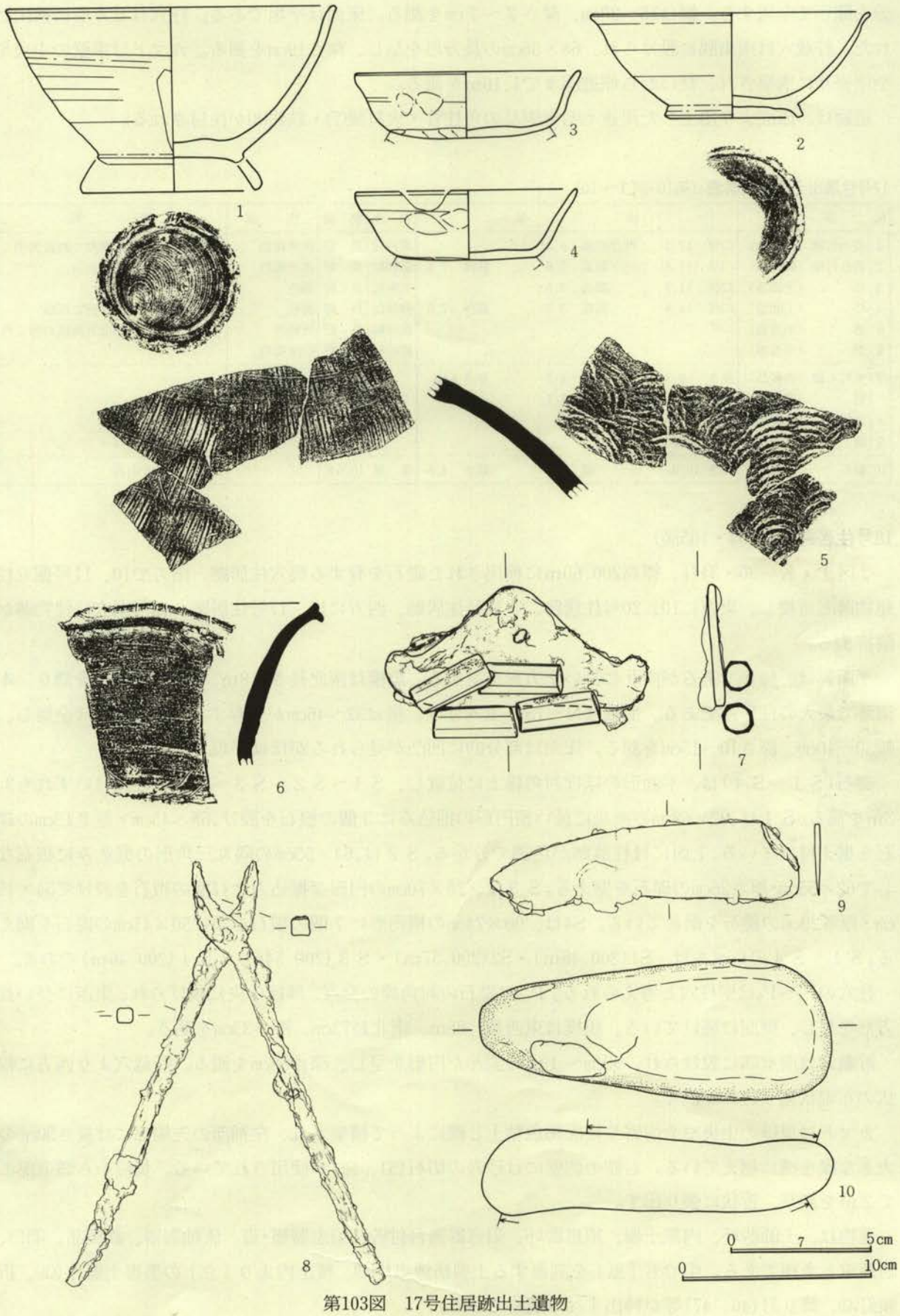
17号住居跡土層

1層　暗褐色土でローム粒、ロームB、カーボン粒を含む
2層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼土粒、カーボン粒を含む
3層　暗褐色土でローム粒、カーボン粒を含む
4層　暗褐色土でロームB、ローム粒、カーボン粒を含む
5層　暗褐色土でロームB、ローム粒、カーボン粒、焼土粒を含む
6層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼土B、カーボン粒を含む
7層　暗褐色土で炭化材、カーボン粒、焼土粒、ローム粒を含む
8層　暗褐色土でロームB、ローム粒、カーボン粒を含む
9層　黒褐色土でカーボン粒、焼土B、焼土粒、ローム粒を含む
10層　暗褐色土でローム粒、カーボン粒を含む

17号住居カマド

1層　黒褐色土で焼土B、焼土粒、カーボン粒を含む
2層　灰白色粘土で黒褐色土を含む
3層　暗褐色土で灰白色粘土、カーボン粒、焼土粒を含む
4層　暗褐色土で焼土粒、ローム粒を含む
5層　暗褐色土で焼土粒、カーボン粒を含む
6層　暗褐色土で焼土B、焼土粒を含む
7層　暗褐色土で焼土B、焼土粒を多量に含む
8層　暗褐色土で灰白色粘土、焼土粒、カーボン粒を含む
9層　暗褐色土で灰白色粘土B、焼土粒、ローム粒を多量に含む

第102図　17号住居跡・カマド跡



第103図　17号住居跡出土遺物

分を除いて全周する。幅は15～20cm、深さ２～７cmを測る。床面は平坦である。柱穴は６カ所に検出された。貯蔵穴は南東隅に設けられ、68×36cmの長方形を呈し、深さ19cmを測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築され、焚口から煙道部まで1.16mを測る。

遺物は、床面より出土した用途不明青銅品の角柱管・火打鎌(7)・鉄鉗(8)が注目される。

17号住居出土遺物観察表（第103図１～10）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	高台付碗（酸化焔）	口径 17.3	残存器高 8.3		微砂粒	良好	淡黄褐色	底部回転糸きり未調整　高台欠損
2	高台付碗（酸化焔）	口径 (14.8)	器高 5.6	底径 7.4	微砂粒	良好	淡黒褐色	底部回転糸きり後付高台
3	坏（土師器）	口径 11.9	器高 3.5		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	坏（土師器）	口径 11.8	器高 3.7	底径 7.5	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削　体部に爪痕
5	甕（須恵器）				微砂粒	良好	灰褐色	外面平行叩目、内面青海波の当て目
6	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	暗灰褐色	
7	火打ち鎌（鉄製品）	長さ 9.3	高さ 4.3	厚さ４㎜				
	管（銅製品）	長さ 4.0前後	径 1.1					
8	金鉗（鉄製品）	長さ						
9	鎌（鉄製品）	長さ 16.6						
10	砥石（石製品）	長さ 18.9	幅 7.4	厚さ 4.6	重量 1026ｇ			石材は輝石安山岩

18号住居跡（第104・105図）

２区Ｊ・Ｋ－30・31Ｇ、標高200.60mに検出された礎石を有する竪穴住居跡。南方で10、11号掘立柱建物跡と重複し、東方に19、20号住居跡、Ｊ13号住居跡、西方に16、17号住居跡、12号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形は、僅かであるが南北に長い正方形を呈する。規模は南北長さ7.8m、東西長7.3mを測り、本遺跡で最大の住居跡である。主軸はＮ－75°－Ｅを示す。壁は32～46cmが残存する。周溝はほぼ全周し、幅30～40cm、深さ10～15cmを測る。床面は部分的に凹凸が見られるがほぼ平坦である。

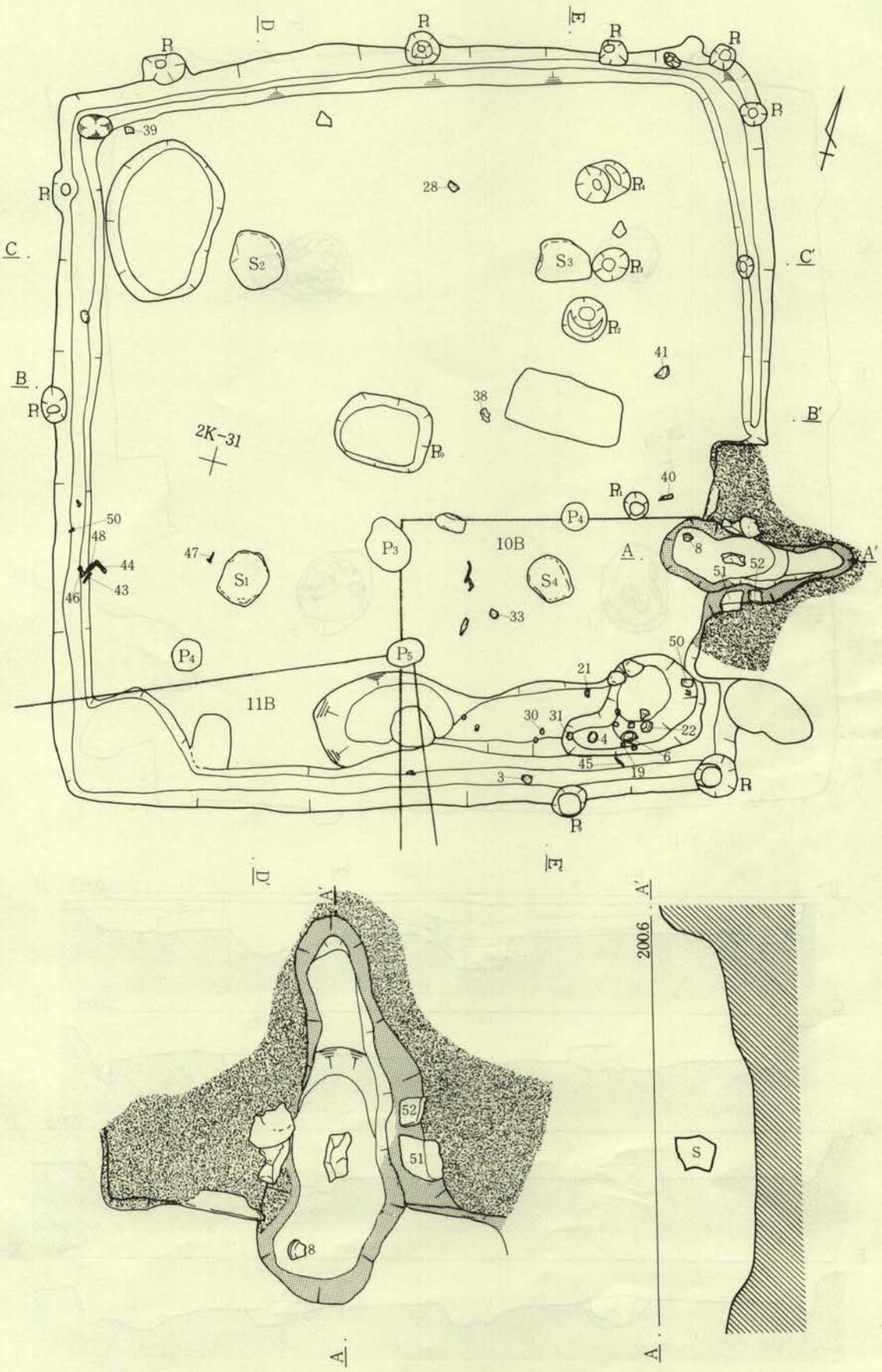
礎石（Ｓ１～Ｓ４）は、平面形のほぼ対角線上に位置し、Ｓ１～Ｓ２～Ｓ３～Ｓ４の柱間はいずれも3.3mを測る。Ｓ１は、92×68cmの南北に長い楕円形の掘込みに３個の根石を設け、58×45cm・厚さ19cmの礎石を据え付けている。上面には柱痕跡が色調で分かる。Ｓ２は、64×55cmの隅丸三角形の掘込みに根石なしで62×55cm・厚さ26cmの礎石を据える。Ｓ３は、75×70cmの円形な掘込みに11個の根石を設けて54×45cm・厚さ29cmの礎石を据えている。S4は、90×74cmの楕円形に７個の根石を設け50×41cmの礎石を据える。Ｓ１～Ｓ４のレベルは、S1(200.48m)・S2(200.57m)・Ｓ３(200.54m)・Ｓ４(200.46m)である。

柱穴のP_1～P_9は壁柱穴と考えられる。P_{10}は礎石の対角線の交点、ほぼ中央に設けられ、東西に長い長方形を呈し、壁面は焼けている。規模は東西長1.08m、南北長73cm、深さ33cmを測る。

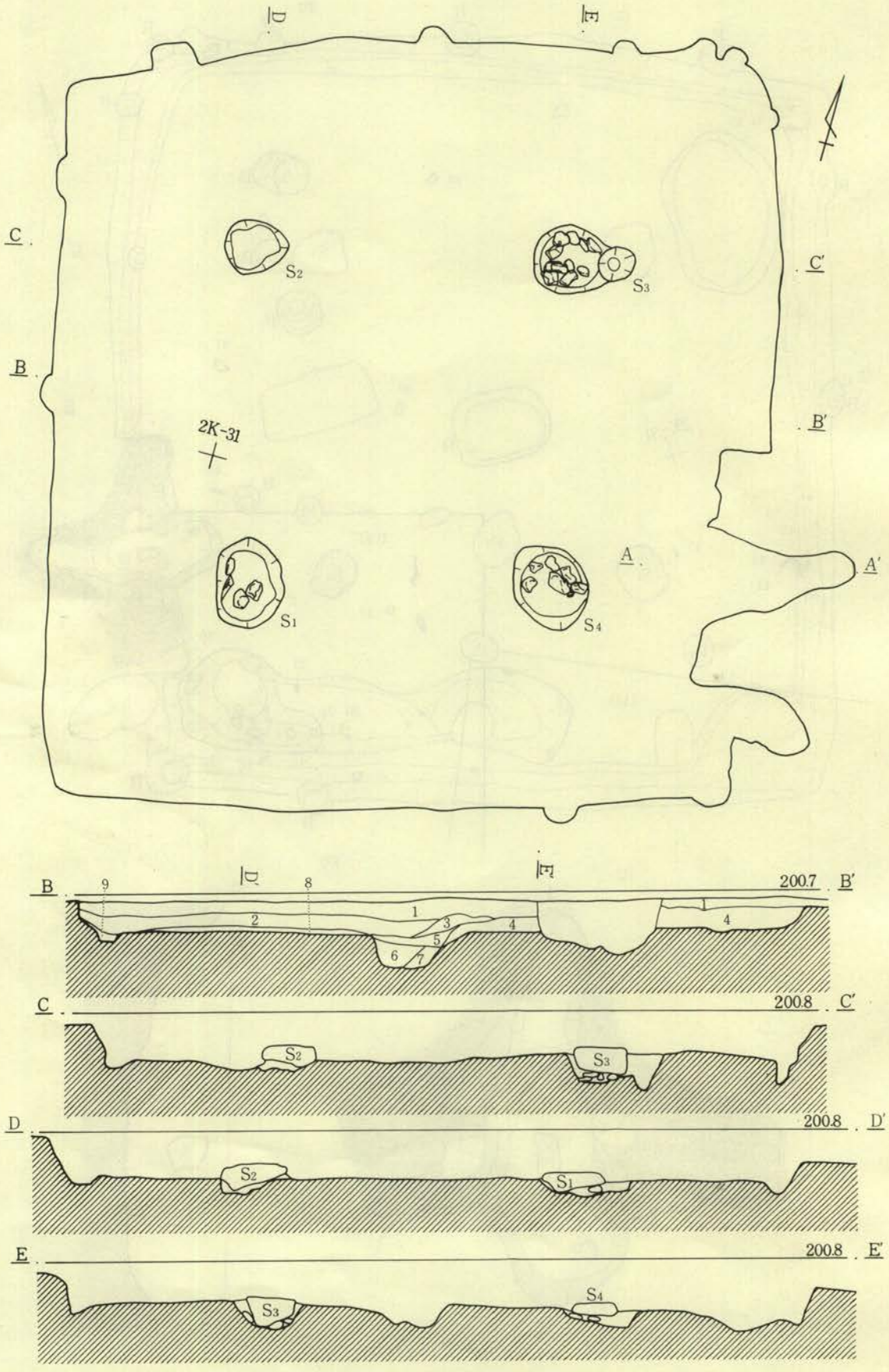
貯蔵穴は南東隅に設けられ、90cm～１mの歪んだ円形を呈し、深さ58cmを測る。貯蔵穴より西方に幅広の布堀状掘り込みが続く。

カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土と礫によって構築され、左袖部の先端部には長さ50cmの大きな礫を横に据えている。右側の側壁には砂岩の切石(51、52)が使用されている。焚口から煙道部まで２mを測り、舌状に張り出す。

遺物は、土師器坏、内黒土器、須恵器坏、須恵器高台付碗、須恵器甕・壺、灰釉陶器、鉄製品、羽口、紡錘車と多種である。中でも「里」を刻書する土製紡錘車片(42)、覆土内より「立」の墨書土器片((35)、折頭釘(43)、飾り釘(46、47)等が特出すべき遺物である。



第104図　18号住居跡・カマド跡



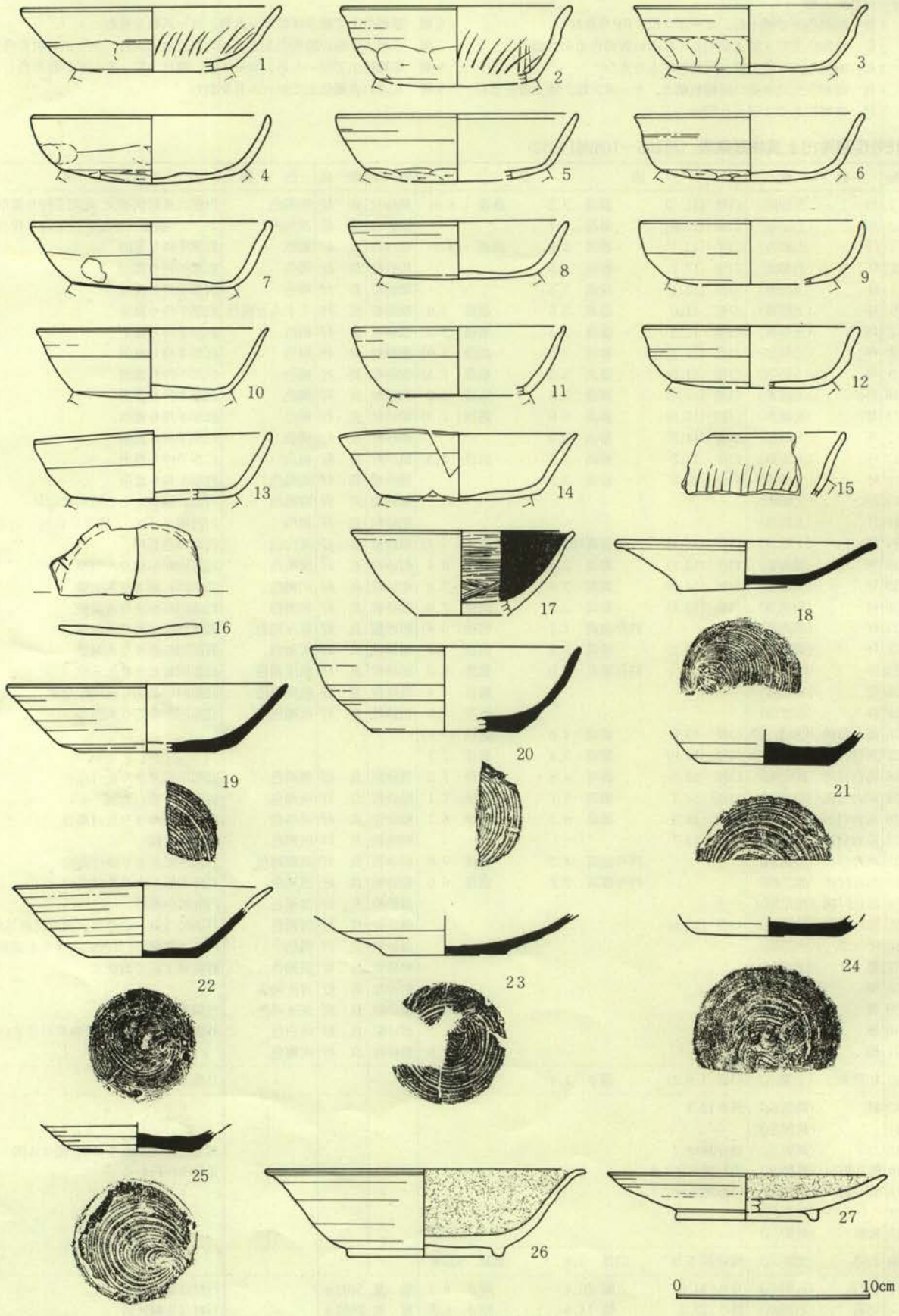
第105図　18号住居跡礎石掘り方

18号住居跡土層

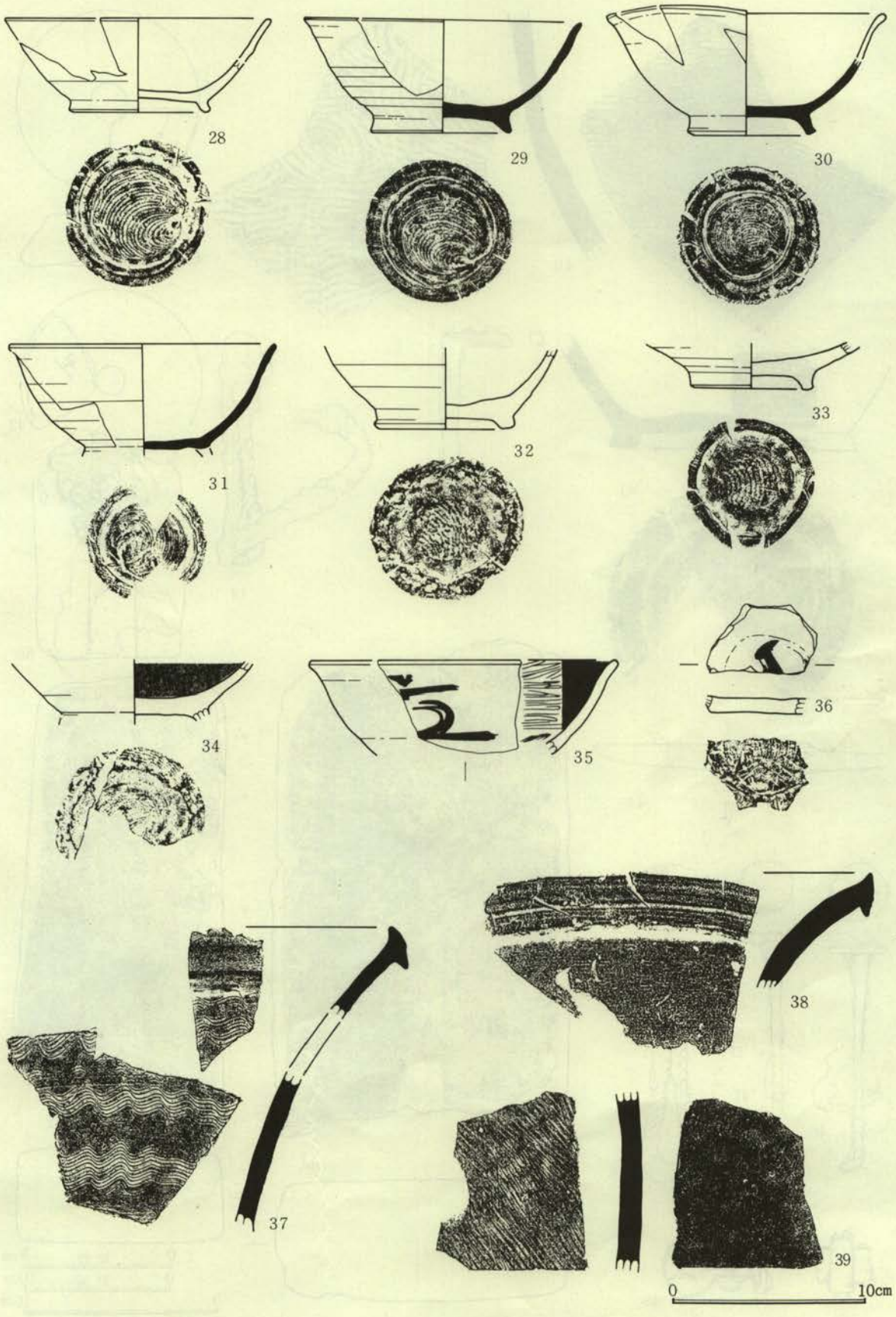
1層　暗褐色土で焼土粒、カーボン粒、FPを含む
2層　暗褐色土で1層より明るくにぶい黄褐色土を含む
3層　暗褐色土で焼土粒、灰褐色粘土を含む
4層　暗褐色土で多量の灰褐色粘土、カーボン粒、焼土粒を含む
5層　暗褐色土で3層より暗い
6層　暗褐色土で斑点状にロームB、ローム粒を含む
7層　5層より暗い暗褐色土でロームB、ローム粒、カーボン粒を含む
8層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼け土粒、カーボン粒を含む
9層　にぶい黄褐色土でロームBを含む

18号住居跡出土遺物観察表（第106～108図1～52）

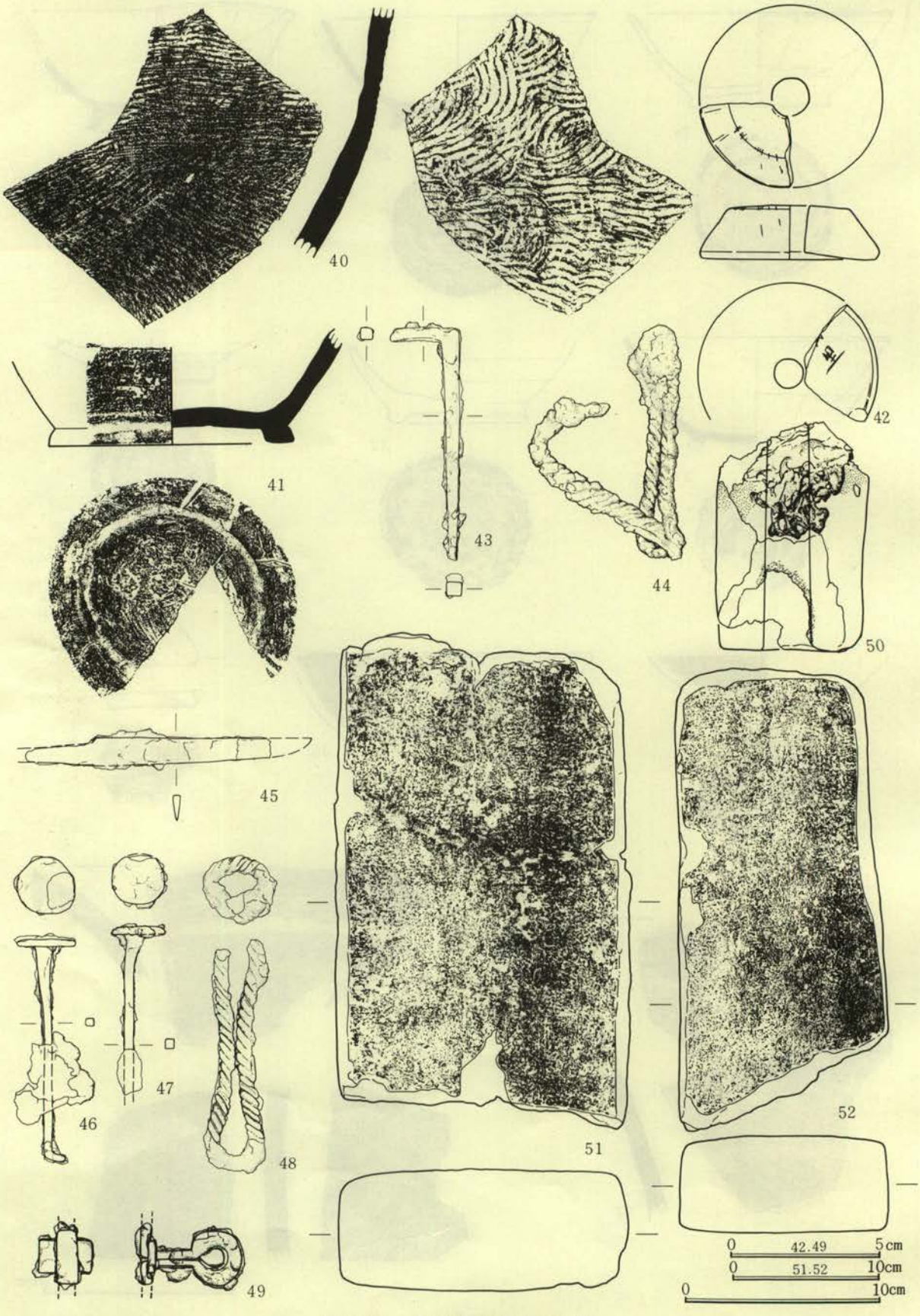
No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（土師器）	口径（13.3）　器高 3.3　底径（ 8.0）	微砂粒	良好	明褐色	内面に放射状暗文 底部手持ち篦削
2	坏（土師器）	口径（11.8）　器高 4.1	微砂粒	良好	淡褐色	〃　底部と体部中位手持ち篦削
3	坏（土師器）	口径（12.1）　器高 3.5　底径 8.3	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	坏（土師器）	口径 12.2　器高 4.5	粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
5	坏（土師器）	口径（12.4）　器高 3.5	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
6	坏（土師器）	口径 11.6　器高 3.5　底径 9.0	微砂粒	良好	くすんだ褐色	底部手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径 12.3　器高 3.5　底径 8.3	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
8	坏（土師器）	口径（11.2）　器高 3.0　底径（ 7.9）	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
9	坏（土師器）	口径（11.6）　器高 3.3　底径（ 8.5）	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
10	坏（土師器）	口径（12.0）　器高 3.6　底径 8.2	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
11	坏（土師器）	口径（11.0）　器高 3.6　底径（ 7.3）	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
12	坏（土師器）	口径（11.2）　器高 3.2	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
13	坏（土師器）	口径 12.3　器高 3.6　底径 8.3	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
14	坏（土師器）	口径 12.3　器高 3.5	微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
15	坏（土師器）		微砂粒	良好	暗褐色	内面に線刻による放射状暗文
16	坏（土師器）		粗砂粒	良好	褐色	内底面に「×」、体部に線刻の暗文
17	坏（土師器）	口径（11.4）　器高(84.4)　底径（ 5.4）	微砂粒	良好	灰白色	内面黒色処理
18	坏（須恵器）	口径（13.1）　器高 2.4　底径 6.4	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
19	坏（須恵器）	口径（14.3）　器高 3.4　底径 7.0	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
20	坏（須恵器）	口径（13.8）　器高 3.4　底径 7.6	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
21	坏（須恵器）	残存器高 1.7　底径（ 6.8）	粗砂粒	良好	青灰褐色	底部回転糸きり未調整
22	坏（須恵器）	口径 13.2　器高 3.8　底径 5.7	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整
23	坏（須恵器）	残存器高 2.0　底径 6.3	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸きり未調整
24	坏（須恵器）	底径 7.4	微砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り後回転篦削
25	坏（須恵器）	底径 6.5	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
26	高台付碗(灰釉陶器)	口径 15.6　器高 4.6　底径（8.0）				
27	高台付坏(灰釉陶器)	口径（14.0）　器高 2.4　底径 7.3				
28	高台付碗（酸化焔）	口径 13.6　器高 4.8　底径 7.2	微砂粒	良好	黒褐色	底部回転糸きり後付高台
29	高台付碗（須恵器）	口径 14.1　器高 5.7　底径 7.1	粗砂粒	良好	灰褐色	底部に墨書（判読不能）
30	高台付碗（須恵器）	口径 14.2　器高 6.3　底径 6.7	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
31	高台付碗（須恵器）	口径 13.7	粗砂粒	良好	灰褐色	高台部欠損
32	高台付碗（酸化焔）	残存器高 4.3　底径 7.0	粗砂粒	良好	淡黒褐色	底部回転糸きり後付高台
33	高台付坏（酸化焔）	残存器高 2.2　底径 6.0	粗砂粒	良好	淡褐色	底部回転糸きり後付高台
34	高台付碗（酸化焔）		微砂粒	良好	淡褐色	内面黒色処理
35	高台付碗（酸化焔）	口径（15.6）	微砂粒	良好	淡褐色	外面に「立」の墨書、内面黒色処理
36	坏（土師器）		微砂粒	良好	褐色	内底に墨痕 底部回転糸きり未調整
37	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	黒褐色	櫛歯状工具で波状文
38	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	青灰褐色	
39	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	淡灰褐色	外面平行叩目
40	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰白色	外面平行叩目 内面青海波の当て目
41	壺（須恵器）	底径 12.8	粗砂粒	良好	灰褐色	
42	紡錘車（土製品）	口径（ 6.2）　高さ 1.4　重量14.8g				？里の刻書
43	釘（鉄製品）	長さ12.1				
44	（鉄製品）					
45	刀子（鉄製品）	残存長12.7				刃先と柄先端部を欠損 関は両関
46	飾り釘（鉄製品）	円形頭部径3.0				先端部が折れる
47	飾り釘（鉄製品）	円形頭部径2.7				
48	（鉄製品）					
49	環頭（鉄製品）					
50	羽口（土製品）	残存長 5.9　口径 3.8　重量 535g				
51	切石（石製品）	長さ 34.0　幅 20.4　厚さ 8.5	重量 5102g			石材は凝灰岩
52	切石（石製品）	長さ 32.2　幅 14.5　厚さ 6.8	重量 2602g			石材は先凝灰岩



第106図　18号住居跡出土遺物(1)



第107図　18号住居跡出土遺物(2)



第108図　18号住居跡出土遺物(3)

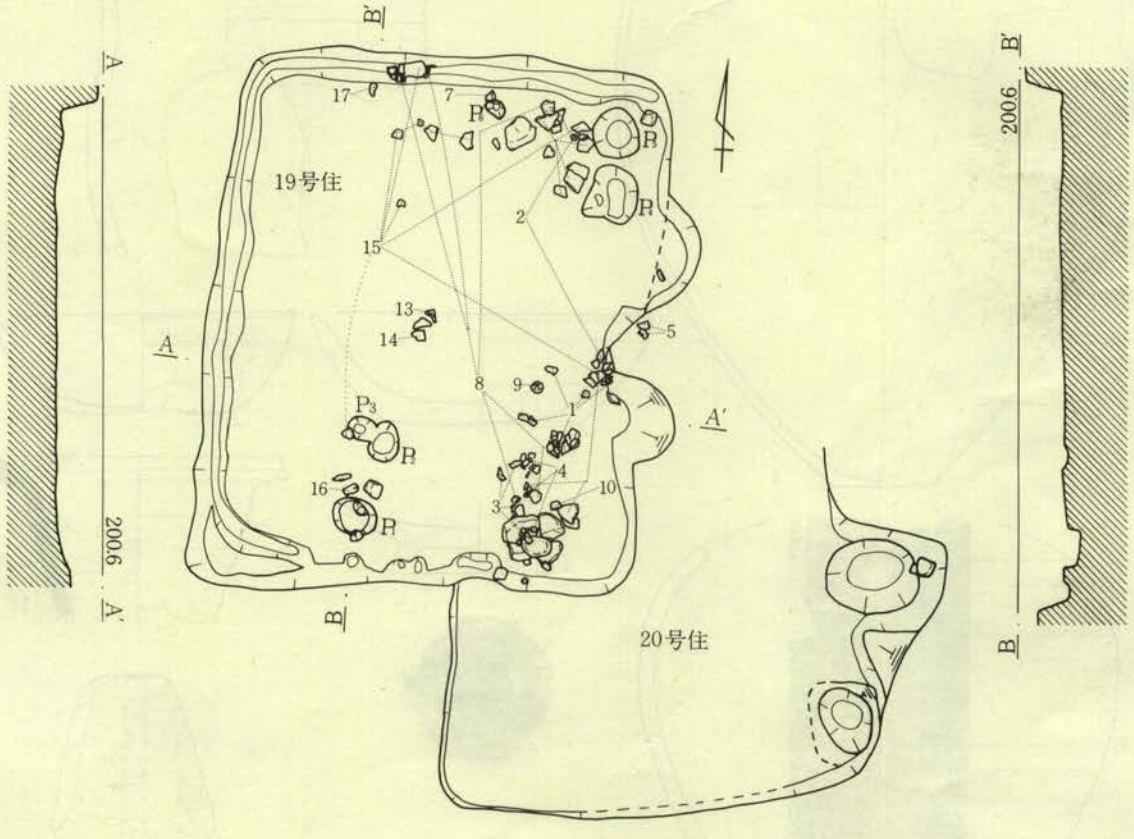
19号住居跡（第109図）

２区Ｊ－28・29Ｇ、標高200.40～50ｍに検出された。南東部で20号・Ｊ13号住居跡と重複し、西方には18号住居跡、10・11号掘立柱建物跡が隣接する。本住居跡より20号住居跡が新しい。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長4.4ｍ、東西3.4ｍを測る。主軸はほぼ真東を示す。壁は16～33㎝が残存する。周溝は南西隅から北東隅まで連結する。幅は15～25㎝、深さ２㎝前後を測る。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_6が検出された。

貯蔵穴の掘り込みは検出されなかったが南東隅に５個の礫集中する。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築されている。

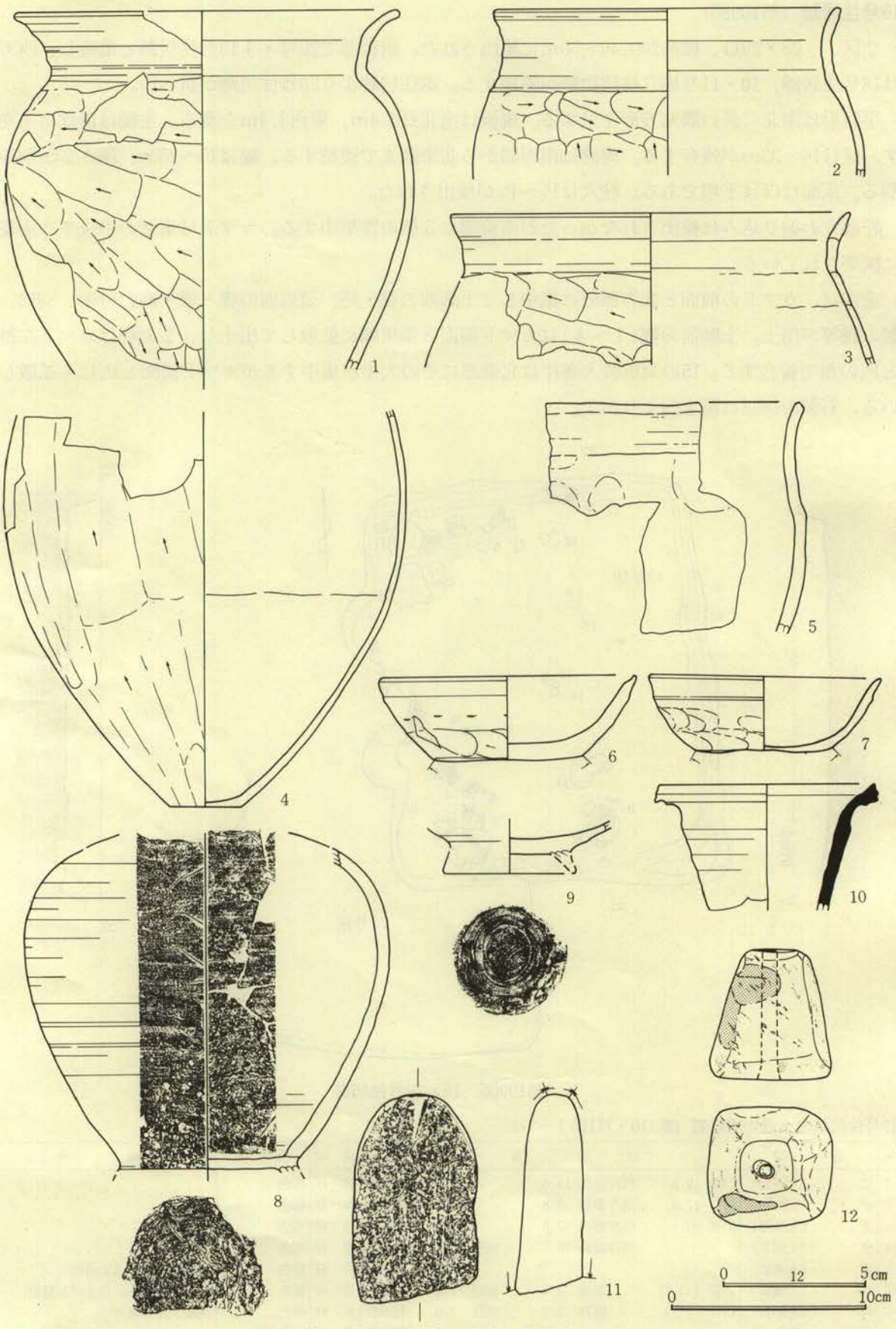
遺物は、カマドの前面と北方部分に集中して土師器の甕・坏、須恵器の甕・壺・高台付碗、羽口、鉄製の鎌等が出土。土師器の甕（１～４）はカマド前面と南東隅に拡散して出土し、２の甕はカマド左袖部とP_5の西で接合する。15の須恵器大甕片は北壁部にその大半が集中するがカマド前面とP_3にも拡散している。石製の錘⑿は覆土内より出土。



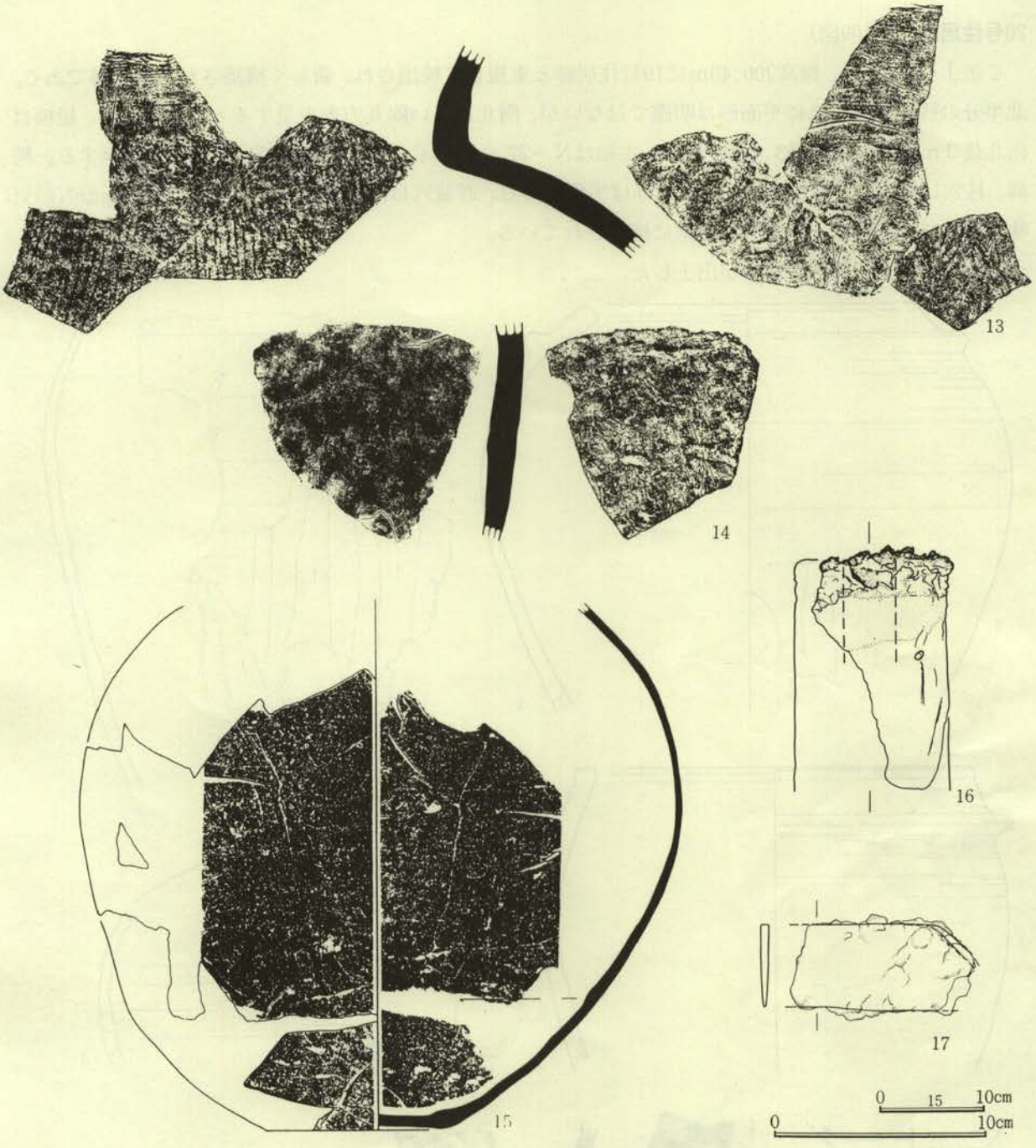
第109図　19・20号住居跡

19号住居跡出土遺物観察表（第110・111図１～17）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 19.5	残存器高 18.6		粗砂粒	良好	褐色	
2	甕（土師器）	口径 17.8	残存器高 8.8		微砂粒	良好	褐色	
3	甕（土師器）	口径 20.4	残存器高 7.9		微砂粒	良好	褐色	
4	甕（土師器）		残存器高 20.5	底径 3.7	微砂粒	良好	褐色	
5	甕（土師器）				粗砂粒	良好	褐色	20号住居跡の出土遺物
6	坏（土師器）	口径（13.4）	器高 4.4	底径 7.5	粗砂粒	良好	褐色	底部、体部中位は手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径 11.9	器高 3.2	底径 7.0	粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
8	壺（酸化焔）				粗砂粒	良好	淡黒褐色	



第110図　19号住居跡出土遺物(1)



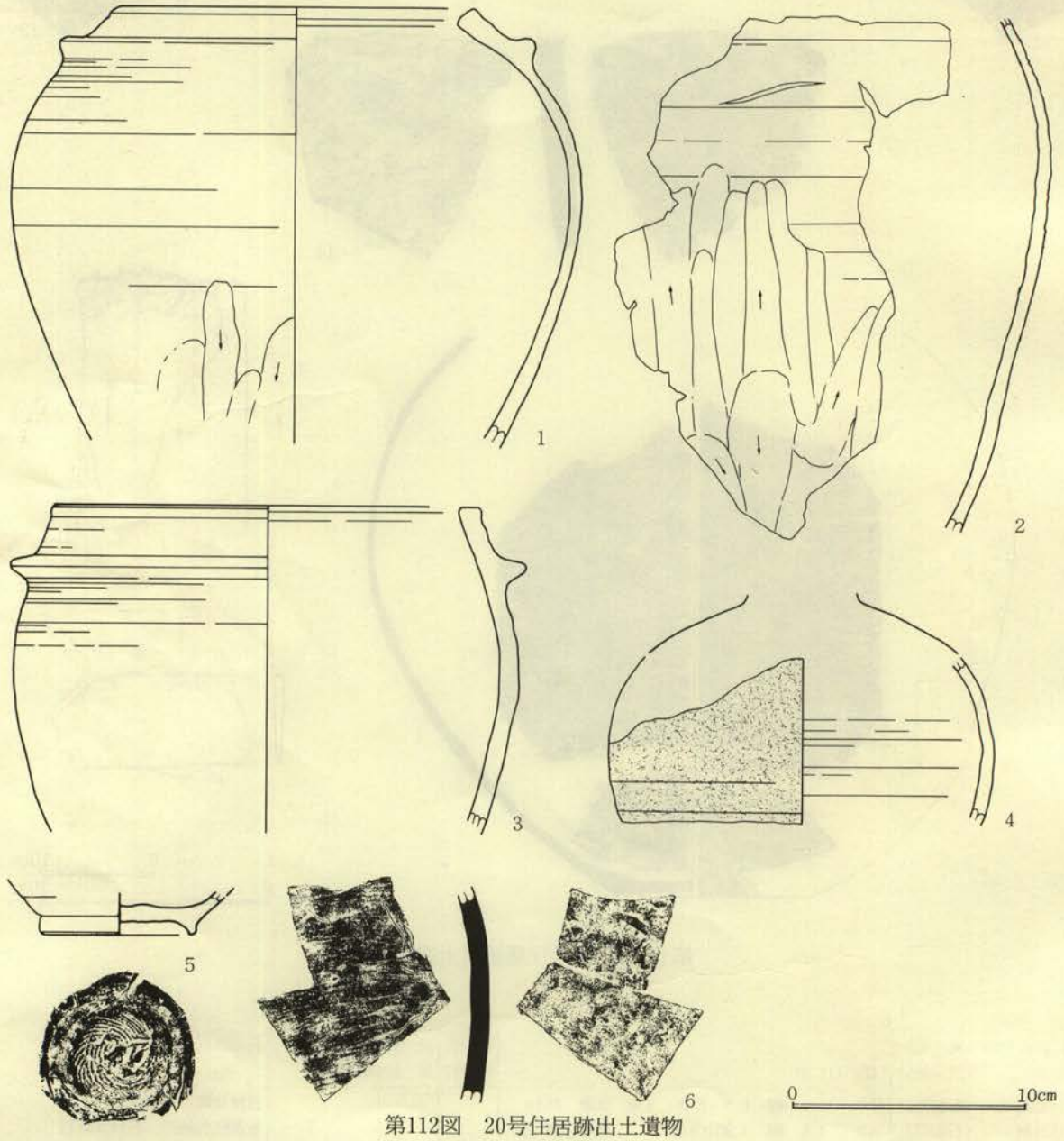
第111図　19号住居跡出土遺物(2)

9	高台付坏 (酸化焔)		粗砂粒	良 好	淡褐色	底部回転糸きり後付高台
10	壺 (還元焔)	口径 (11.3)	微砂粒	良 好	淡灰褐色	
11	砥石 (石製品)	長さ 10.9 幅 6.5 厚さ 3.6 重量 383g				石材は輝石安山岩
12	石錘 (石製品)	高さ 4.6 幅 4.35×4.2 重量 38.4g				断頭四角錘形、石材は軽石
13	甕 (須恵器)		粗砂粒	良 好	黒褐色	肩部平行叩目、内面青海波の当て目
14	甕 (須恵器)		粗砂粒	良 好	淡灰褐色	
15	甕 (須恵器)					
16	羽口 (土製品)					
17	鎌 (鉄製品)	残存長 8.7 幅 4.1				先端部と基部の一部を欠く

20号住居跡（第109図）

2区J・K－28G、標高200.40mに19号住居跡と重複して検出され、新しく構築された住居跡である。北半分の残存が悪い為に平面形は明確ではないが、南北に長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北長3m以上、東西長3.4mを測る。主軸はN－77°－Eを示す。壁は南壁で10cm前後が残存する。周溝、柱穴は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は南東隅に設けられ、65×55cmの方形気味で深さ35cmを測る。カマドは東壁に構築されている。

遺物は、羽釜、灰釉陶器等が出土した。



第112図　20号住居跡出土遺物

20号住居跡出土遺物観察表（第112図1～6）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	羽釜（還元焔）	口径（15.4） 残存器高 18.9 胴部最大径 25.0	粗砂粒	良好	灰褐色	
2	羽釜（還元焔）		粗砂粒	良好	灰褐色	胴部片
3	羽釜（還元焔）	口径（18.2） 残存器高 14.2 胴部最大径 22.0	粗砂粒	良好	灰褐色	

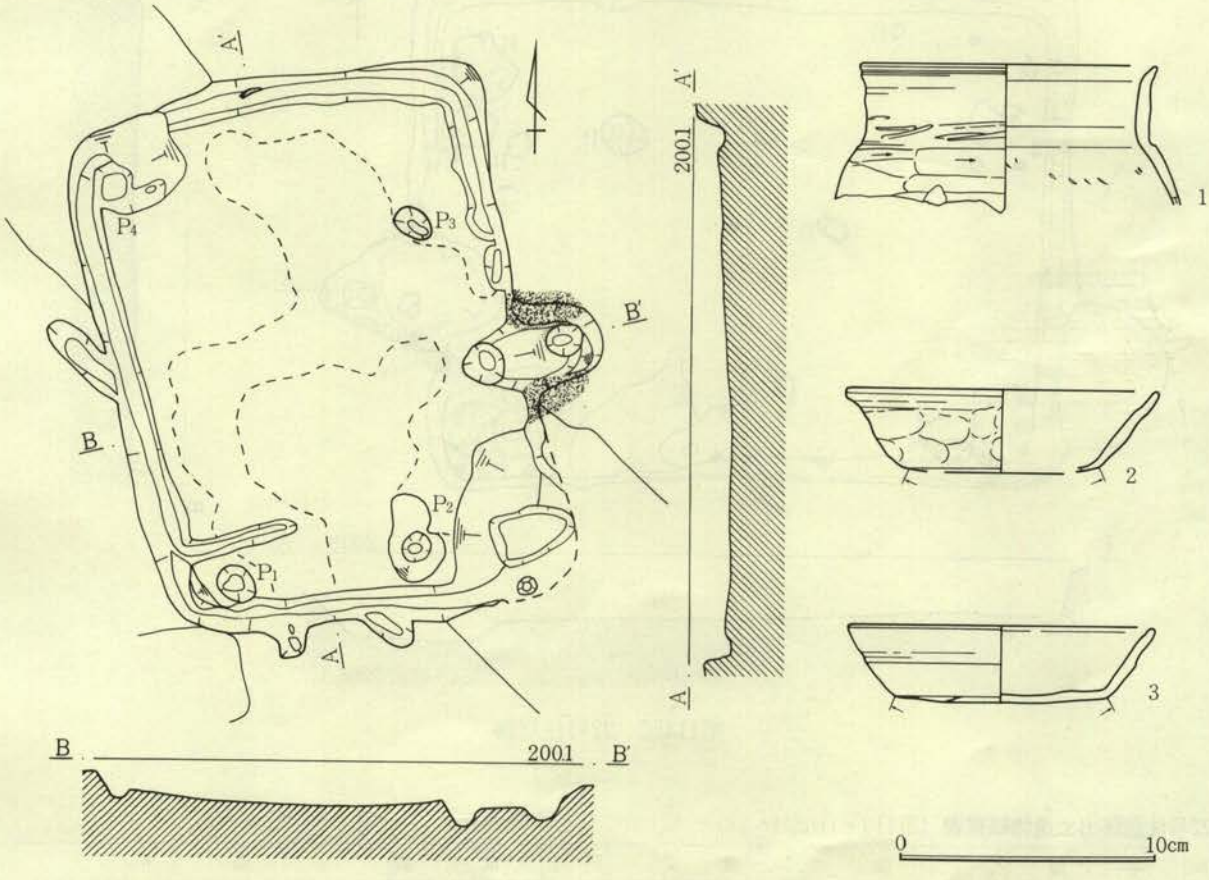
4	壺　（灰釉陶器）						
5	高台付碗（酸化焔）	残存器高　2.3	底径　6.3	微砂粒	良　好	淡黄褐色	底部回転糸きり後付高台
6	甕　（須恵器）			粗砂粒	良　好	灰褐色	

21号住居跡（第113図）

２区Ｉ・Ｊ－25Ｇ、標高200.00m付近に検出された。南西に14号掘立柱建物跡、北西に15号掘立柱建物跡が隣接し、住居跡の南東から北西を近世の道路址が横断している。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長4.5m、東西長3.4mを測る。主軸はＮ－76°－Ｅを示す。壁は道路址との切り合いが無い箇所で15cm前後を測る。周溝はほぼ全周し、幅20cm前後、深さ５cm程である。床面は中央部やや南寄りが皿状にやや窪む。柱穴P_1～P_4の４カ所に検出されたが本住居跡に帰属するかは不明。貯蔵穴は南東隅に設けられ、65×40cmの東部分が尖り気味の長方形を呈し、深さ15cmほどを測る。カマドは東壁の中央付近に暗褐色粘土によって構築されている。

遺物は、土師質の小型甕(1)、土師器坏（２、３）が出土した。



第113図　21号住居跡・出土遺物

21号住居跡出土遺物観察表（第113図１～３）

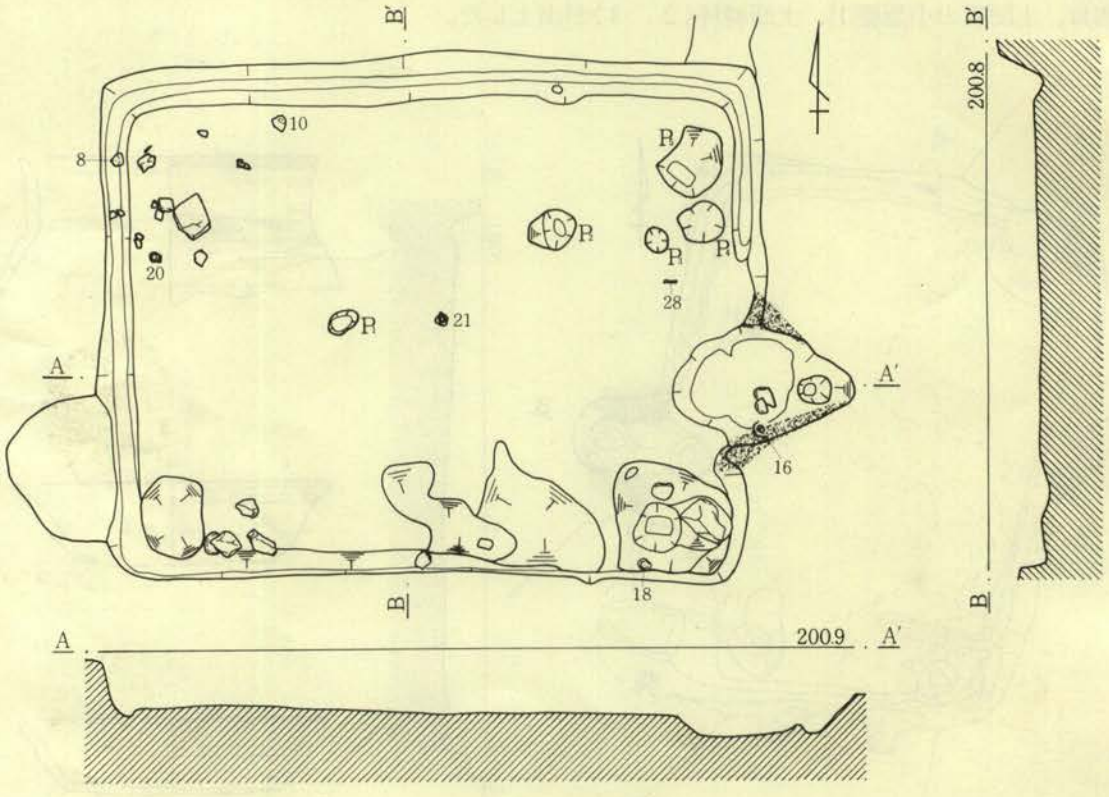
No.	器　種	法　量			胎　土	焼　成	色　調	備　考
1	小型甕　（土師器）	口径（11.6）	残存器高　5.7		微砂粒	良　好	褐色	内面に爪痕
2	坏　（土師器）	口径　12.2	器高（3.2）	底径　7.7	微砂粒	良　好	淡褐色	底部手持ち篦削
3	坏　（土師器）	口径　12.0	器高　3.0	底径　8.4	微砂粒	良　好	淡褐色	底部手持ち篦削

22号住居跡（第114図）

2区H・I－28・29G、標高200.70mに検出された。北方に28・29号住居跡が隣接し、東方に15号掘立柱建物跡、南方に18～20号住居跡が位置する。

平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は東西長5.25m、南北長4.15mを測る。主軸はE－1°－Sを示す。壁は20～40cmが残存する。周溝は南壁の中央から東壁中央やや北寄りに連結する。幅は15～25cm、深さ2～8cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_5が検出されたが主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に設けられ、90×85cmの歪んだ掘り込み内に一段低い35cm前後の方形を呈する掘り込みを有する。最深部で33cmを測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されている。

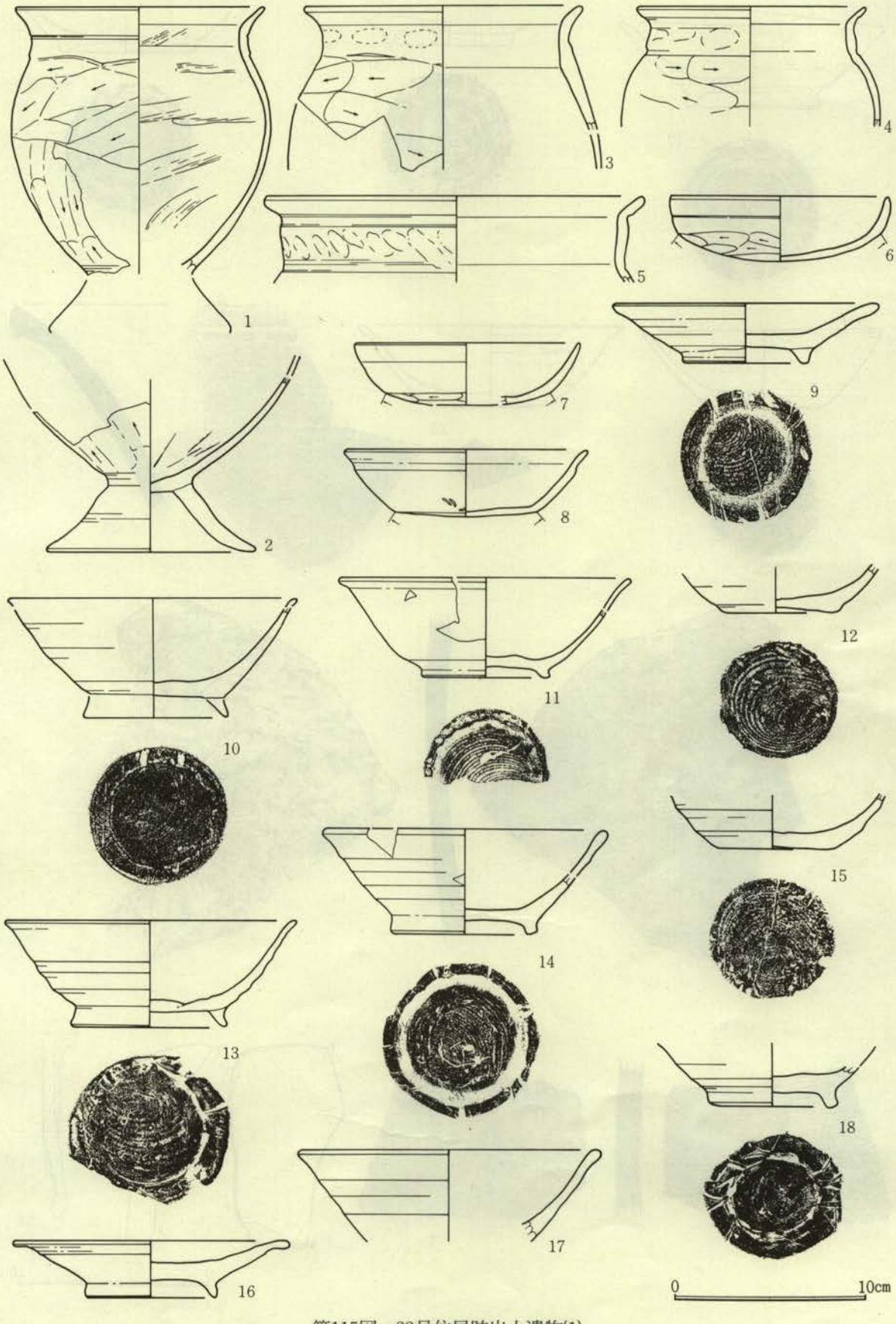
遺物は、北西隅に集中し、中央部・貯蔵穴周辺に拡散して土師器の甕・脚台付甕・坏、須恵器の坏・高台付碗・高台付坏、甕、砥石、釘等が出土。



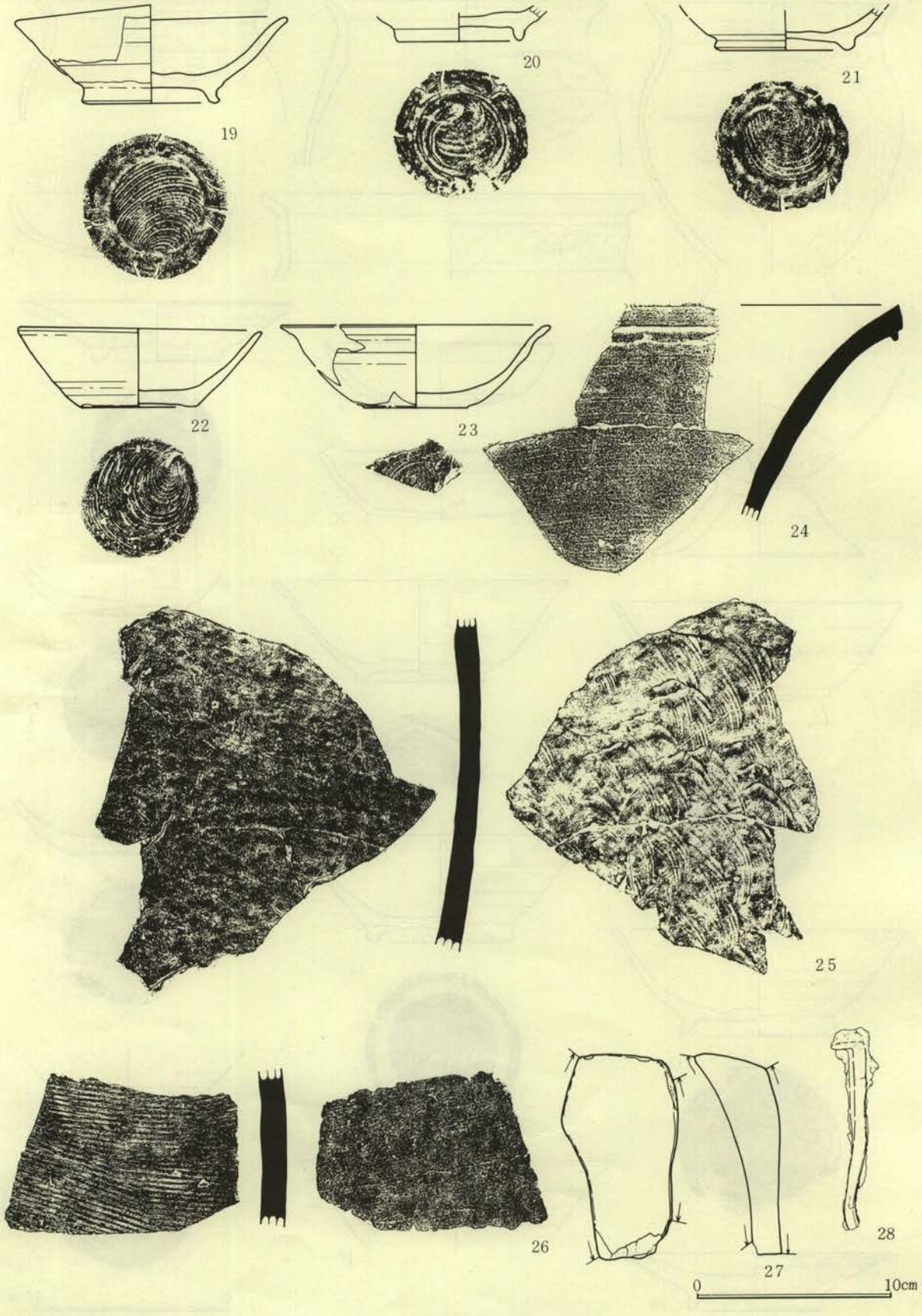
第114図　22号住居跡

22号住居跡出土遺物観察表（第115・116図1～28）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	脚台付甕（土師器）	口径（12.8）	残存器高 14.0		微砂粒	良好	褐色	
2	脚台付甕（土師器）		残存器高 10.3	脚底径 10.8	微砂粒	良好	褐色	
3	小型甕（土師器）	口径 14.4	残存器高 8.6		微砂粒	良好	褐色	
4	小型甕（土師器）	口径 11.8	残存器高 6.2		微砂粒	良好	褐色	
5	甕（土師器）	口径 19.5	残存器高 4.5		微砂粒	良好	淡褐色	
6	坏（土師器）	口径（11.3）	器高 3.4		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径（11.7）	器高 3.2		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
8	坏（土師器）	口径（12.3）	器高 4.5		粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削 外面に爪痕
9	高台付坏（酸化焔）	口径（13.7）	器高 3.1	底径 6.7	微砂粒	良好	淡褐色	底部回転糸きり後付高台
10	高台付碗（還元焔）	口径 15.0			粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり未調整 高台欠損



第115図　22号住居跡出土遺物(1)



第116図　22号住居跡出土遺物(2)

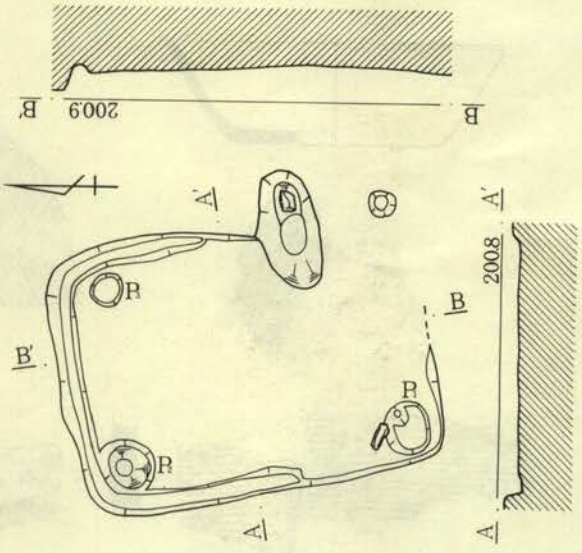
11	高台付碗	(還元焔)	口径 15.1	器高 5.2	底径 6.7	粗砂粒	良 好	黒褐色	底部回転糸きり後付高台
12	坏	(酸化焔)		残存器高 2.3	底径 5.8	粗砂粒	良 好	淡黄褐色	底部回転糸きり未調整
13	高台付碗	(還元焔)	口径 (15.0)	器高 5.5	底径 7.8	粗砂粒	良	灰褐色	内面底部に補修粘土痕
14	高台付碗	(還元焔)	口径 14.3	器高 5.3	底径 7.2	粗砂粒	良 好	灰褐色	底部外面に爪痕
15	坏	(須恵器)			底径 5.8	粗砂粒	良 好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
16	高台付坏	(還元焔)	口径 13.4	器高 3.0	底径 6.5	粗砂粒	良 好	灰白色	
17	高台付碗	(還元焔)	口径 (15.4)			粗砂粒	良 好	灰褐色	
18	高台付碗	(還元焔)		残存器高 3.3	底径 6.3	粗砂粒	良 好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
19	高台付碗	(還元焔)	口径 13.6	器高 4.3	底径 7.1	粗砂粒	良 好	灰回転	底部回転糸きり後付高台
20	高台付碗	(酸化焔)			底径 6.2	微砂粒	良 好	赤褐色	底部回転糸きり後付高台
21	高台付碗	(還元焔)			底径 6.5	微砂粒	良 好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
22	坏	(還元焔)	口径 12.5	器高 4.0	底径 6.0	微砂粒	良 好	淡灰褐色	底部回転糸きり未調整
23	坏	(還元焔)	口径 (13.8)	器高 4.3	底径 5.4	粗砂粒	良 好	淡灰褐色	底部回転糸きり未調整
24	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	暗灰褐色	
25	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面平行の叩目、内面は青海波の当て目
26	甕	(須恵器)				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面平行叩目
27	砥石	(石製品)	長さ 10.7	幅 5.9	厚さ 4.3	重 量 220 g			石材は流紋岩
28	釘	(鉄製品)							

23号住居跡（第117図）

2区N・O－35・36G、標高200.30mに検出された。南西に6号住居跡、北西に32号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長2.95m、東西長2.15mを測る。主軸はN－80°－Eを示す。壁は残存の良好な西壁で10cmを測る。周溝は西壁の中央やや南寄りから東壁の中央付近まで連結する。幅は15cm前後、深さ5cm程である。床面はほぼ平坦である。柱穴は南東隅を除いて各コーナーにP_1～P_3が検出された。貯蔵穴は明確を欠くが南東隅に設けられた20cm前後の円形の掘り込みと考えられる。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築され、焚口から煙道部まで95cmを測る。

遺物は、微量であった。



第117図　23号住居跡

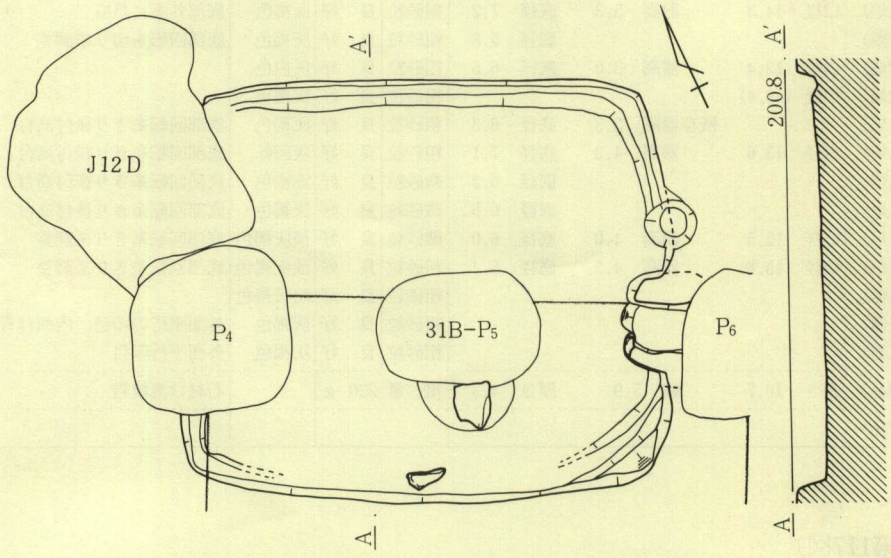
24号住居跡（第118図）

2区K・L－33・34Gに検出された。ほぼ中央部分に31号掘立柱建物の梁行柱穴列のP_4～P_6、北西隅にJ12号土坑が重複する。東方に12号、北東に13号、西方に32・33号掘立柱建物跡が隣接している。重複する31号掘立柱建物跡は本住居跡を切って構築されている。

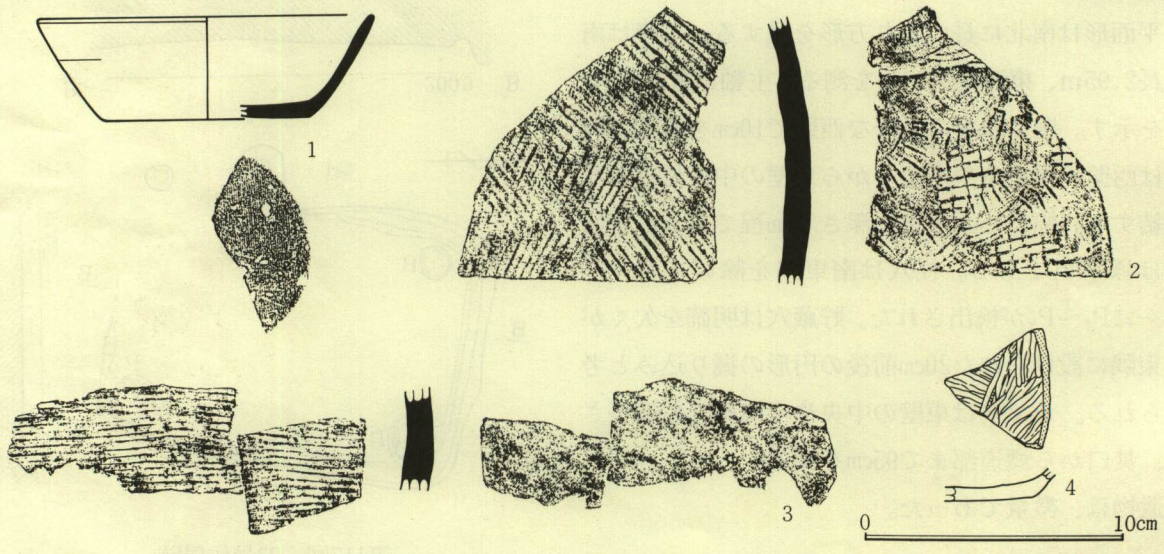
平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.9m、南北長3.3mを測る。主軸はN－77°－Eを示す。壁は11～24cmが残存する。周溝は南壁の中央部分で消滅しているが他の部分では検出された。幅は15～20cm前後、深さ5cmほどである。床面はほぼ平坦である。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築されているが、煙道部分が31号掘立柱建物跡の柱穴P_6によって切られている。

遺物は、覆土内より須恵器坏、須恵器甕片、内黒土器片が出土。



第118図　24号住居跡



第119図　24号住居跡出土遺物

24号住居跡出土遺物観察表（第119図１～４）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（須恵器）	口径（13.0）　器高 4.0　底径（8.0）	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転篦削
2	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	灰褐色	外面は平行叩目、内面は格子状当て目
3	甕（須恵器）		粗砂粒	良好	暗灰褐色	外面は平行叩目
4	坏（土師器）					内黒、底部回転糸切り後周縁部篦削

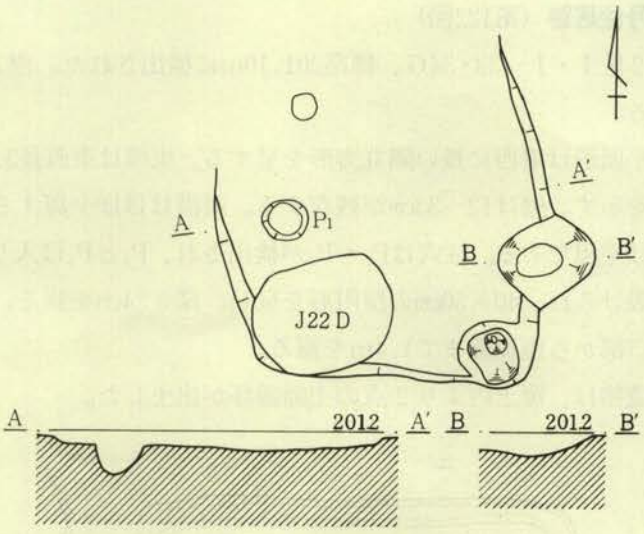
25号住居跡（第120図）

２区Ｌ－36・37Ｇ、標高201.10ｍに検出された。東方に32・33号掘立柱建物跡、西方に36号住居跡、南方に35号掘立柱建物跡が位置し、南東隅でＪ22号土坑と重複する。

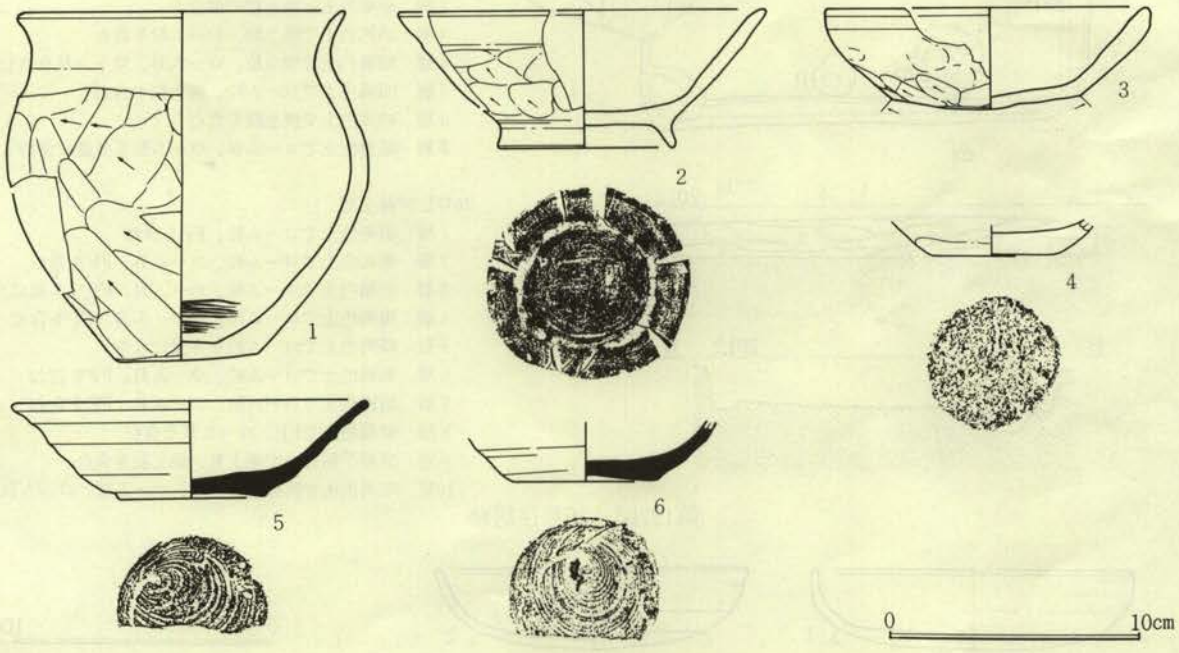
平面形は残存が悪い為に不明確であるが南北に長いやや歪んだ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北長2.6m以上、東西2.6mを測る。主軸はN－83°－Eを示す。壁は残存の良い南壁で10cmを測る。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴状の掘り込みは本住居跡に帰属するものではない。

貯蔵穴は南東隅に設けられ、55cm前後のやや歪んだ円形で内部に一段低い掘り込みを有する。最深部で16cmを測る。カマドは東壁の南寄りに構築されている。

遺物は、カマド内と覆土内より土師器の小型甕・坏・高台付碗、須恵器の坏が出土した。



第120図　25号住居跡



第121図　25号住居跡出土遺物

25号住居跡出土遺物観察表（第121図1～6）

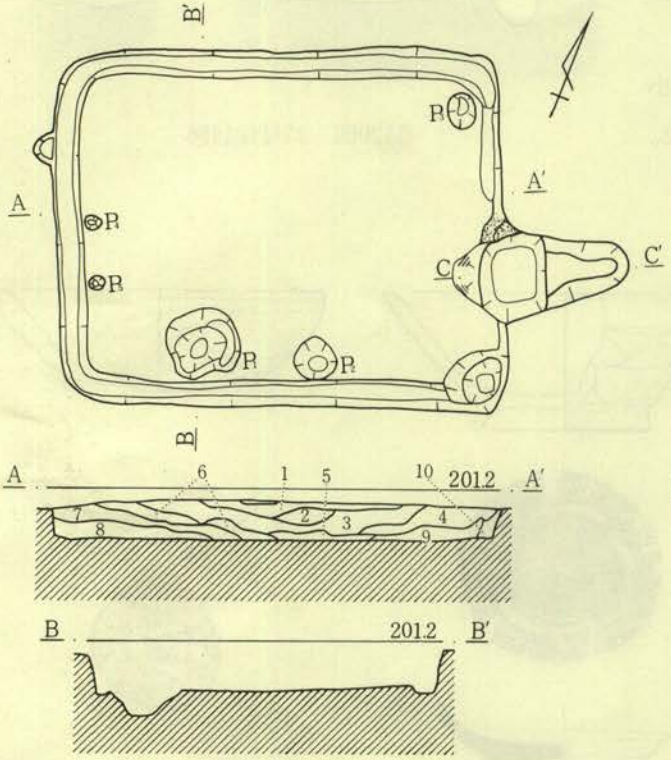
No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	小型甕（土師器）	口径 12.5	器高 13.6	底径 5.1	粗砂粒	良好	くすんだ褐色	底部と体部篦削
2	高台付碗（土師器）	口径 (14.4)	器高 5.4	底径 7.2	粗砂粒	良好	暗褐色	底部篦削り後付高台
3	坏（土師器）	口径 11.6	器高 4.0	底径 7.5	粗砂粒	良好	赤褐色	底部と体部中位篦削
4	坏（酸化焔）			底径 5.0	粗砂粒	良好	褐色	底部は砂目底
5	坏（須恵器）	口径 14.0	器高 3.8	底径 5.8	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
6	坏（酸化焔）			底径 5.8	微砂粒	良好	黄白色	底部回転糸きり未調整

26号住居跡（第122図）

２区Ｉ・Ｊ－33・34Ｇ、標高201.10mに検出された。南方に13号、北方に29・30号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.65m、南北長2.85mを測る。主軸はＮ－65°－Ｅを示す。壁は12～33cmが残存する。周溝はほぼ全周する。幅15～20cm、深さ３～４cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_5が検出され、P_4とP_5は入り口部に拘わると考えられる。貯蔵穴は南東隅に設けられ、40×50cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築され、焚口部から煙道部まで1.4mを測る。

遺物は、覆土内より２点の土師器坏が出土した。



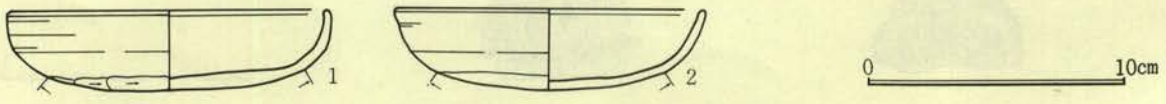
26号住居跡カマド

1層　灰褐色粘土と焼土粒の混合土
2層　暗褐色土と焼土粒の混合土
3層　黒褐色土で焼土粒、ローム粒を含む
4層　暗褐色土で焼土粒、ロームB、ローム粒を含む
5層　暗褐色土でローム粒、焼土粒を含む
6層　暗褐色土で焼土粒を含む
7層　暗褐色土でロームB、ローム粒を多量に含む

26号住居跡土層

1層　黒褐色土でローム粒、FPを含む
2層　黒褐色土でローム粒、ロームB、FPを含む
3層　暗褐色土でローム粒、ロームB、FPを多量に含む
4層　黒褐色土でローム粒、小ロームB、FPを含む
5層　暗褐色土でローム粒を多量に含む
6層　黒褐色土でローム粒、ロームB、FPを含む
7層　暗褐色土でローム粒、ロームB、FPを含む
8層　暗褐色土でFP、ロームBを含む
9層　暗褐色粘質土で焼土B、焼土粒を含む
10層　暗褐色土で灰褐色粘土粒、ローム粒、ロームBを含む

第122図　26号住居跡



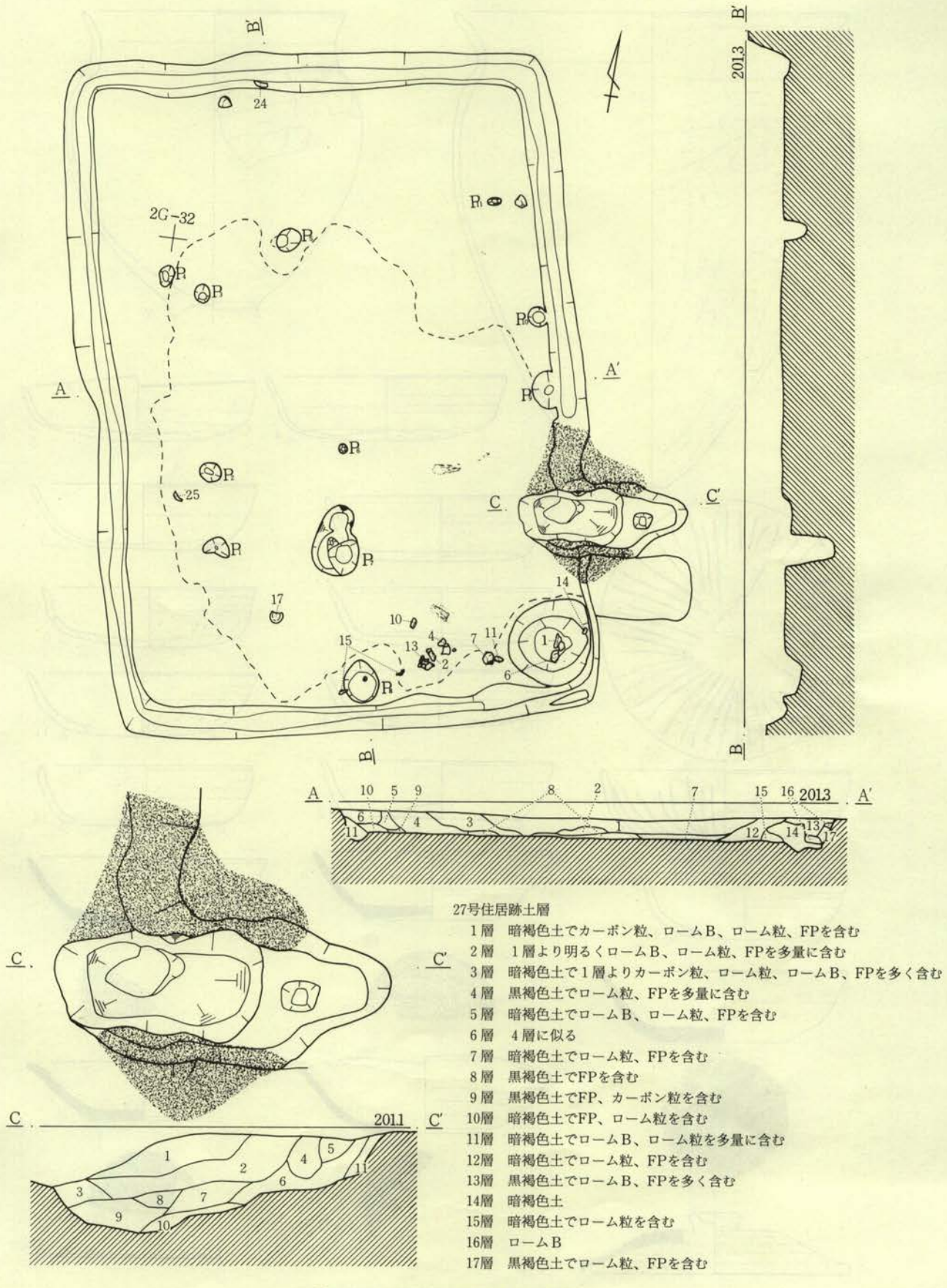
第123図　26号住居跡出土遺物

26号住居跡出土遺物（第123図１、２）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（土師器）	口径 12.4　器高 3.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
2	坏（土師器）	口径 (12.1)　器高 3.2	微砂粒	良好	褐色	〃

27号住居跡（第124図）

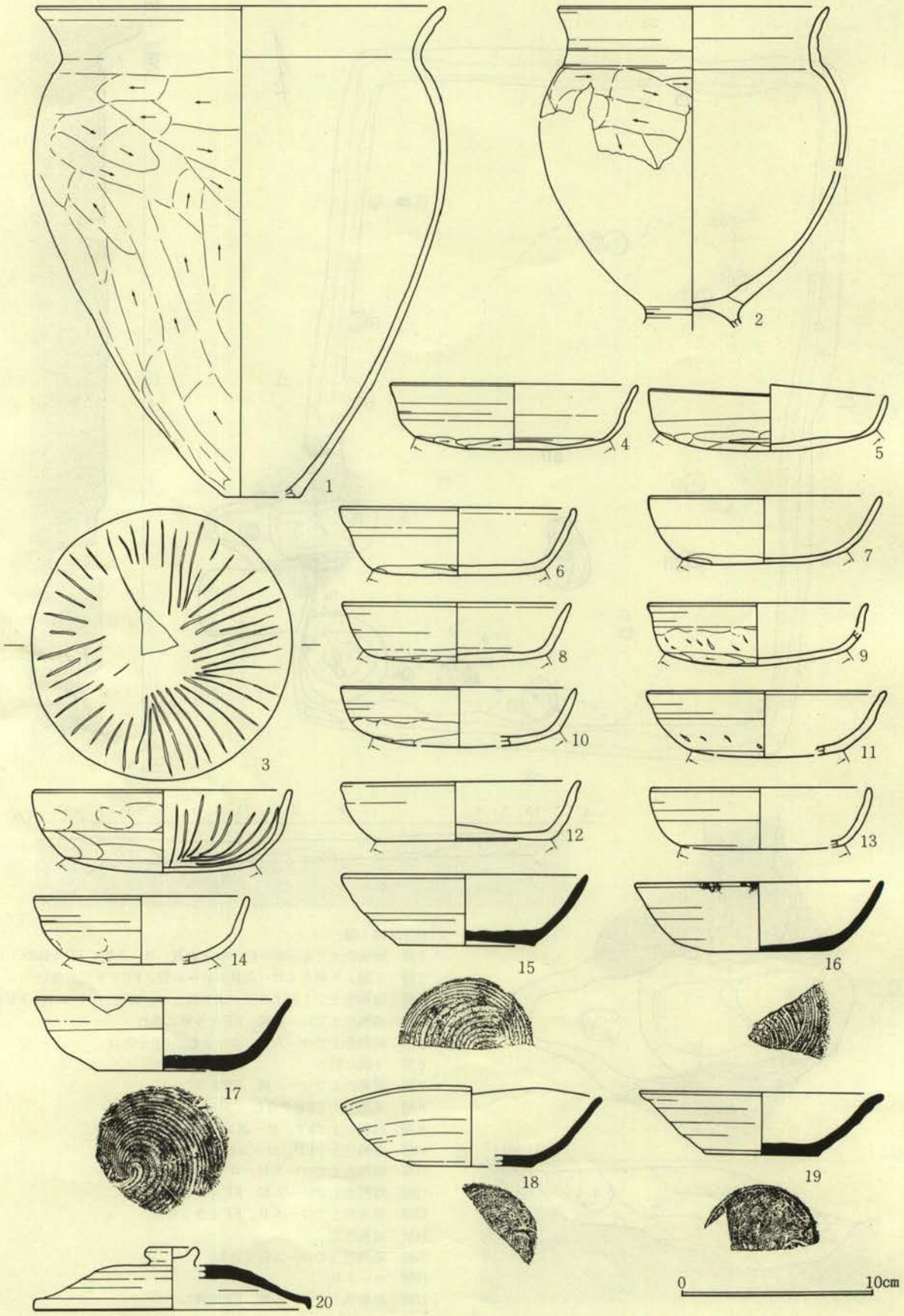
２区Ｆ・Ｇ－31・32Ｇ、標高201.10～20mに検出された。北方に18号掘立柱建物跡が隣接し、南東方向に22・28・29号住居跡が位置する。



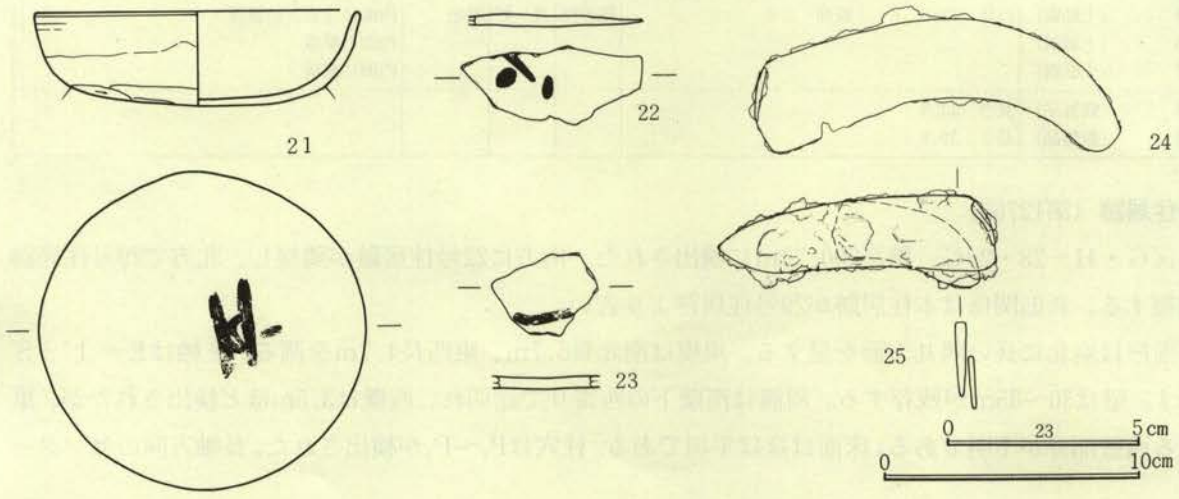
27号住居跡土層

1層　暗褐色土でカーボン粒、ロームB、ローム粒、FPを含む
2層　1層より明るくロームB、ローム粒、FPを多量に含む
3層　暗褐色土で1層よりカーボン粒、ローム粒、ロームB、FPを多く含む
4層　黒褐色土でローム粒、FPを多量に含む
5層　暗褐色土でロームB、ローム粒、FPを含む
6層　4層に似る
7層　暗褐色土でローム粒、FPを含む
8層　黒褐色土でFPを含む
9層　黒褐色土でFP、カーボン粒を含む
10層　暗褐色土でFP、ローム粒を含む
11層　暗褐色土でロームB、ローム粒を多量に含む
12層　暗褐色土でローム粒、FPを含む
13層　黒褐色土でロームB、FPを多く含む
14層　暗褐色土
15層　暗褐色土でローム粒を含む
16層　ロームB
17層　黒褐色土でローム粒、FPを含む

第124図　27号住居跡・カマド跡



第125図　27号住居跡出土遺物(1)



第126図　27号住居跡出土遺物(2)

27号住居カマド跡

1層　暗褐色土でカーボン粒、焼土粒、ローム粒、灰白色粘土を含む
2層　灰褐色粘質土で焼土B、焼土粒、ローム粒を含む
3層　暗褐色土で焼土B、焼土粒、ローム粒、灰白色粘土を含む
4層　暗褐色土で焼土B、焼土粒、ローム粒、FPを含む
5層　2層と同じ
6層　灰褐色土で焼土B、焼土粒、灰白色粘土を含む
7層　暗褐色土でロームB、焼土B、焼土粒、灰白色粘土を含む
8層　暗褐色土で焼土B、焼土粒、FP、灰白色粘土を含む
9層　暗褐色土で焼土B、ロームB、ローム粒、灰白色粘土を含む
10層　暗褐色土でロームB、ローム粒、焼土粒を含む
11層　にぶい黄褐色土でロームBを含む

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長7.3m、東西長5.4mを測る。主軸はN－80°－Eを示す。壁は18～40cmが残存する。周溝はほぼ全周し、幅20～30cm、深さ4～11cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_{11}が検出された。貯蔵穴は南東隅に設けられ、90cm×1mの円形を呈し、深さ42cmを測る。カマドは東壁の南寄りに構築され、焚口より煙道部まで1.8mを測る。

遺物は、貯蔵穴とその周辺に集中し、土師器の甕・坏、須恵器の坏・蓋等が出土している。特に内底に「立」を墨書する土師坏(21)、3点の鎌が注目される。

27号住居跡出土遺物（第125・126図1～25）

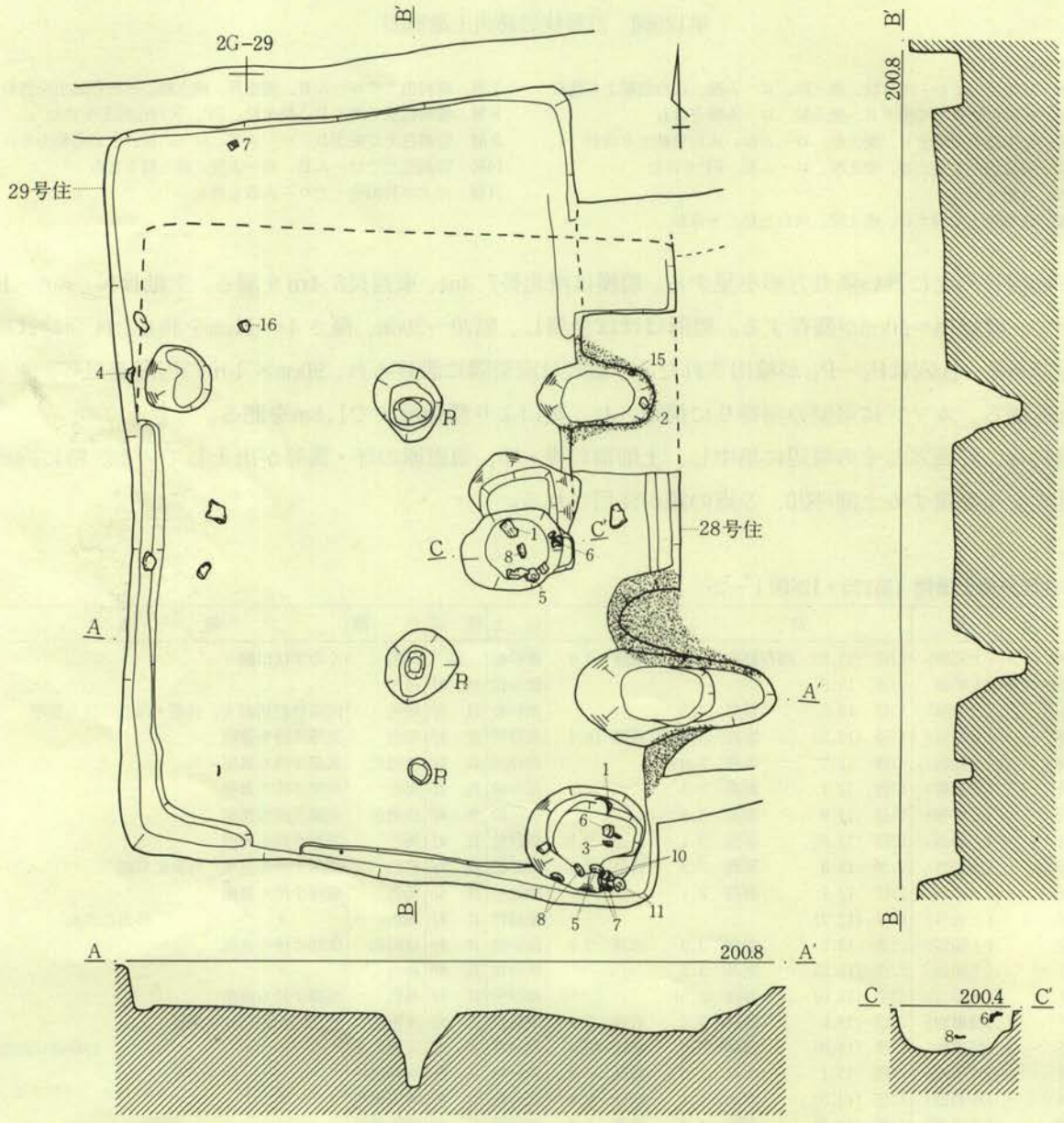
No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（21.0）　残存器高 25.4　底径 4.0	微砂粒	良	褐色	くの字状口縁
2	脚台付甕（土師器）	口径 13.8	微砂粒	良好	褐色	
3	坏（土師器）	口径 13.3　器高 4.3	微砂粒	良好	褐色	内面放射状暗文、底部・体部手持ち篦削
4	坏（土師器）	口径（12.8）　器高 3.4　底径 10.2	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
5	坏（土師器）	口径 11.7　器高 3.0	微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
6	坏（土師器）	口径 12.1　器高 3.5	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径 11.9　器高 3.5	微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
8	坏（土師器）	口径（11.8）　器高 3.1　底径 9.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
9	坏（土師器）	口径 11.3　器高 3.3　底径 9.5	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削　外面に爪痕
10	坏（土師器）	口径 12.1　器高 3.1	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
11	坏（土師器）	口径（12.2）	微砂粒	良好	褐色	〃　外面に爪痕
12	坏（土師器）	口径 12.2　器高 3.0　底径 9.0	微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
13	坏（土師器）	口径（11.3）　器高 3.1	微砂粒	良好	褐色	〃
14	坏（土師器）	口径（11.0）　器高（3.5）	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
15	坏（須恵器）	口径 13.0　器高 3.7　底径 7.4	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
16	坏（須恵器）	口径（13.0）　器高 3.6　底径（6.4）	微砂粒	良好	灰黄褐色	〃　口唇部に油痕
17	坏（須恵器）	口径 13.1　器高 3.8　底径 6.8	微砂粒	良好	灰褐色	〃
18	坏（須恵器）	口径（13.5）　器高 4.1　底径 6.1	粗砂粒	良好	暗灰褐色	〃
19	坏（須恵器）	口径（12.7）　器高 4.2　底径 5.8	粗砂粒	良好	暗灰褐色	〃
20	蓋（須恵器）	口径 14.2　残存器高 3.4	微砂粒	良好	灰褐色	

21	坏	(土師器)	口径 12.0	器高 3.8	微砂粒	良 好	褐色	内面に「立」の墨書
22	坏	(土師器)						内面に墨痕
23	坏	(土師器)						内面に墨痕
24	鎌	(鉄製品)	長さ 14.5					
25	鎌	(鉄製品)	長さ 10.9					

28号住居跡（第127図）

2区G・H－28・29G、標高200.70mに検出された。南方に22号住居跡が隣接し、北方で29号住居跡と重複する。新旧関係は本住居跡が29号住居跡より古い。

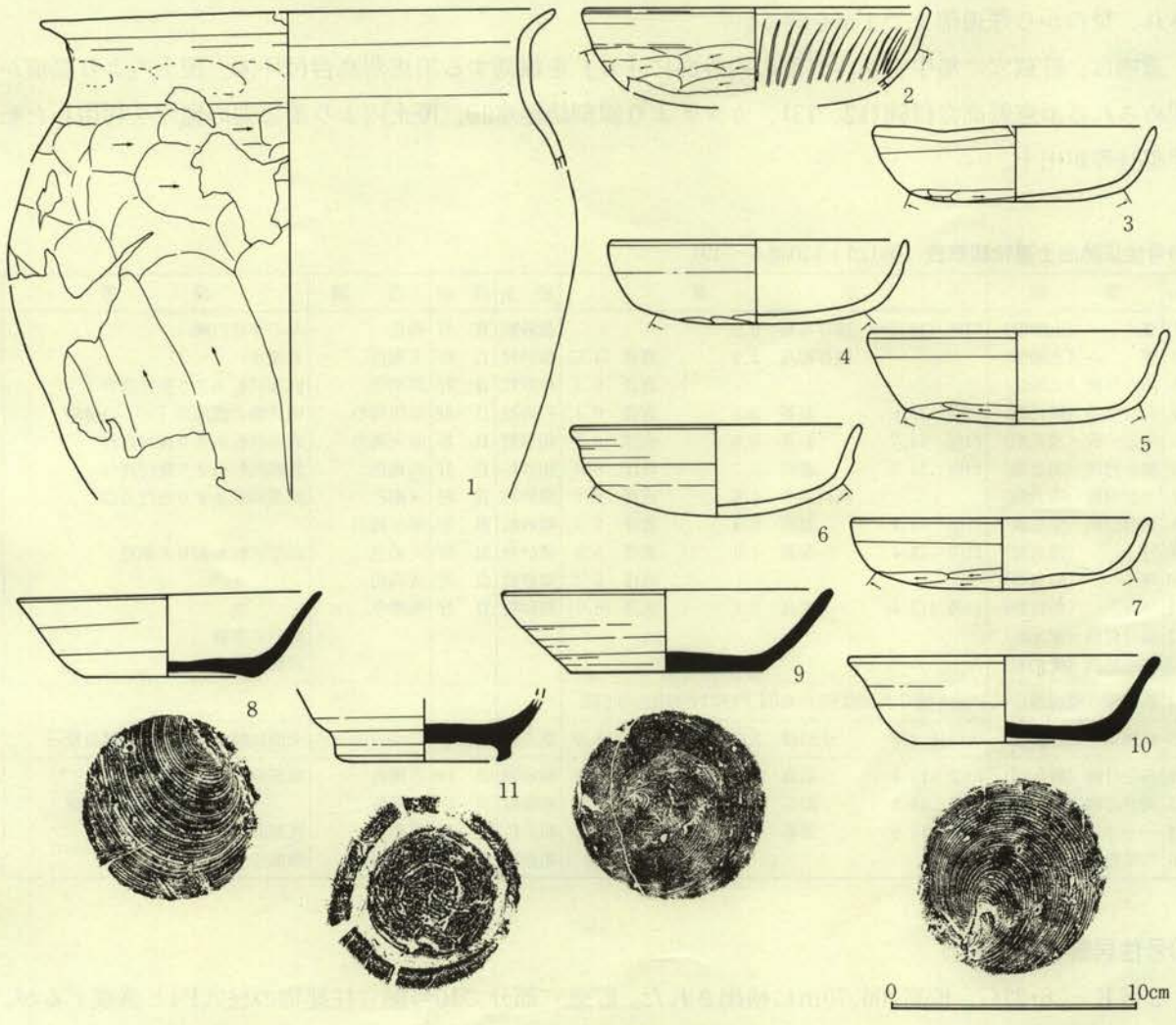
平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長5.7m、東西長4.7mを測る。主軸はE－1°－Sを示す。壁は30～35cmが残存する。周溝は南壁下の西寄りで途切れ、西壁は3.5mほど検出されたが、重複する西壁部分が不明である。床面はほぼ平坦である。柱穴はP_1～P_3が検出された。長軸方向のセンター



第127図　28・29号住居跡

ライン上にP_1～P_3が配する。P_2とP_3が主柱穴と考えられ、50～60cmの楕円形を呈し、60cm前後の深さを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ、90cm×１mの楕円形で深さ30cm程を測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで1.7mを測る。

遺物の多くは貯蔵穴に集中して土師器の甕・坏、須恵器の坏・高台付碗が出土。



第128図　28号住居跡出土遺物

28号住居跡出土遺物観察表（第128図１～11）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 20.4	残存器高 19.5		微砂粒	良好	褐色	コの字状口縁
2	坏（土師器）	口径 (13.7)	残存器高 3.4		微砂粒	良好	淡褐色	内面に放射状暗文
3	坏（土師器）	口径 11.4	器高 3.0		微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
4	坏（土師器）	口径 (11.7)	器高 3.4		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
5	坏（土師器）	口径 12.0	器高 3.7		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
6	坏（土師器）	口径 (11.6)	器高 3.7		微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
7	坏（土師器）	口径 11.9	器高 2.9		微砂粒	良好	淡褐色	底部手持ち篦削
8	坏（須恵器）	口径 12.2	器高 3.3	底径 6.9	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
9	坏（須恵器）	口径 13.1	器高 3.2	底径 7.8	粗砂粒	良好	淡褐色	底部回転糸切り後周縁部回転篦削
10	坏（須恵器）	口径 12.2	器高 3.4	底径 7.5	微砂粒	良好	灰白色	底部回転糸切り未調整
11	高台付碗（須恵器）			底径 7.0	粗砂粒	良好	灰褐色	〃　・底部外面に爪痕

29号住居跡（第127図）

２区Ｇ－28・29Ｇ、標高200.80ｍに検出された。28号住居跡を切って構築されている。平面形は東西長4.05ｍ、南北長4.35ｍの方形を呈する。主軸は28号住居跡と同じ真東を示す。壁は残存の良い西壁で40㎝前後を測る。周溝と柱穴は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は南東隅に設けられ、90×70㎝の楕円形を呈し、深さ37㎝を測る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで１ｍを測る。

遺物は、貯蔵穴に集中する。底部の内外面に「×」を線刻する須恵器高台付坏(4)、覆土内より墨痕が認められる須恵器高台付碗(12、13)、カマドより線刻紡錘車(15)、覆土内より須恵器の甕片を利用した転用硯(14)等が出土。

29号住居跡出土遺物観察表（第129・130図１～19）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（19.5）	残存器高 9.3		微砂粒	良好	褐色	コの字状口縁
2	甕（土師器）		残存器高 5.2	底径（4.0）	微砂粒	良好	赤褐色	底部片
3	高台付碗（土師質）			底径 6.3	微砂粒	良好	黒褐色	底部回転糸きり後付高台
4	高台付坏（酸化焔）	口径 13.6	器高 3.1	底径 6.4	粗砂粒	良好	淡黒褐色	内外面の底部に「×」の線刻
5	高台付碗（還元焔）	口径 14.7	器高 5.6	底径 6.3	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸きり後付高台
6	高台付碗（須恵器）	口径 14.3	器高 5.7	底径 6.6	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
7	高台付碗（還元焔）		残存器高 4.6	底径 6.1	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸きり後付高台
8	高台付碗（須恵器）	口径 14.4	器高 5.4	底径 7.3	粗砂粒	良好	黒灰褐色	
9	坏（須恵器）	口径 12.4	器高 4.0	底径 5.6	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
10	坏（須恵器）			底径 5.2	微砂粒	良好	灰褐色	〃
11	坏（須恵器）	口径（13.4）	器高 3.8	底径（6.0）	粗砂粒	良好	灰褐色	〃
12	高台付碗（還元焔）							底部に墨痕
13	高台付碗（酸化焔）							底部に墨痕
14	転用硯（須恵器）	内面を使用(外面は平行の叩目､内面は青海波の当て目)						
15	紡錘車（石製品）	大口径 4.6	小口径 3.3	高さ 1.6	重量 49.8ｇ			全面に線刻を施す。石材は滑石
16	高台付碗（酸化焔）	口径 14.1	器高 6.3	底径 6.8	微砂粒	良好	赤褐色	底部回転糸きり後付高台
17	高台付碗（酸化焔）	口径 14.3	器高 3.5	底径 7.3	粗砂粒	良好	淡褐色	〃　底部外面に爪痕
18	坏（須恵器）	口径 13.9	器高 4.3	底径 5.8	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
19	長頸壺（須恵器）				粗砂粒	良好	淡灰褐色	頸部片

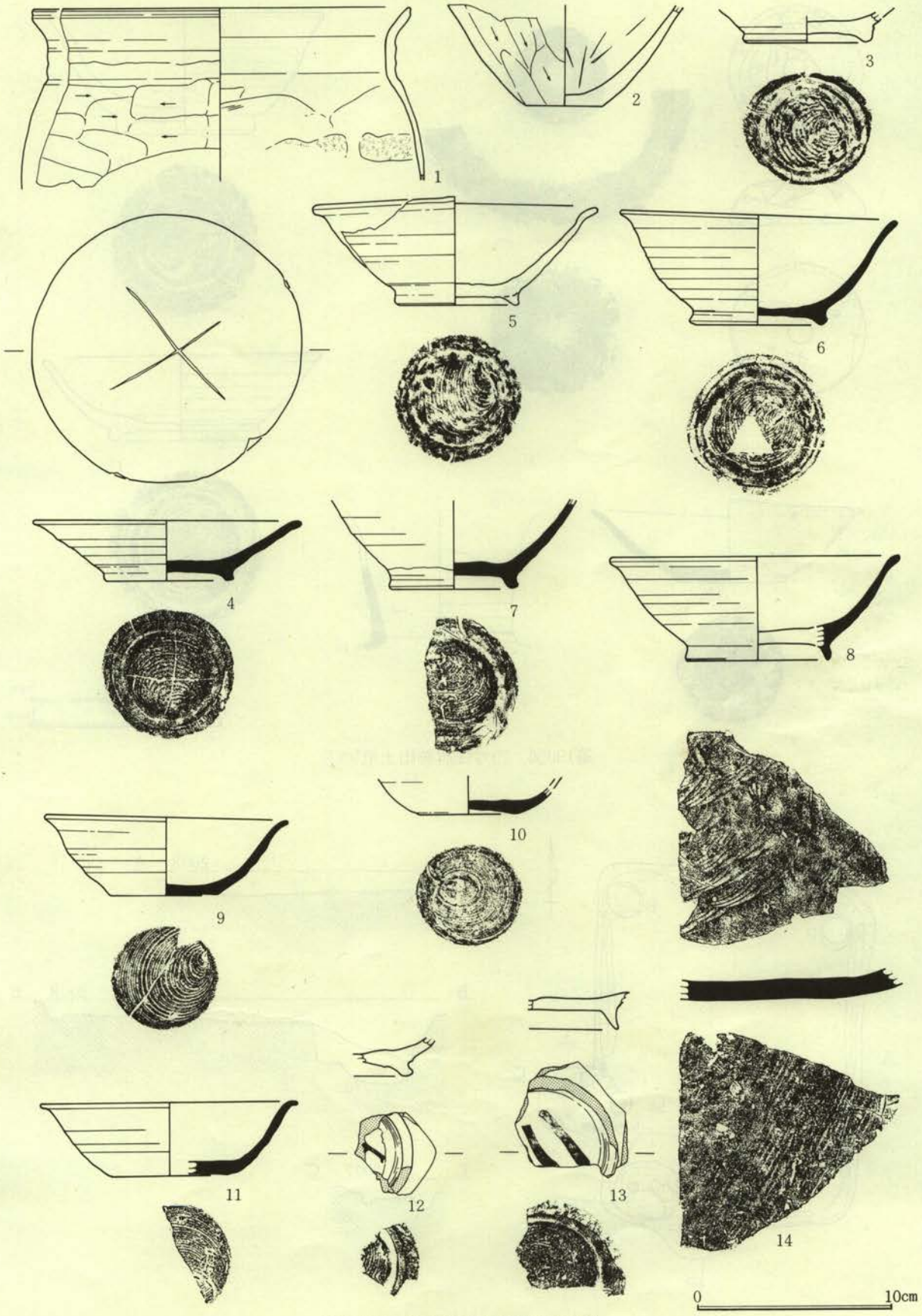
30号住居跡（第131図）

２区Ｅ－26･27Ｇ、標高200.70ｍに検出された。貯蔵穴部分で16号掘立柱建物の柱穴P4と重複するが。新旧関係は本住居跡が新しい。西方には近世の道路址、17号掘立柱建物跡、北方に22・23号掘立柱建物跡が位置する。

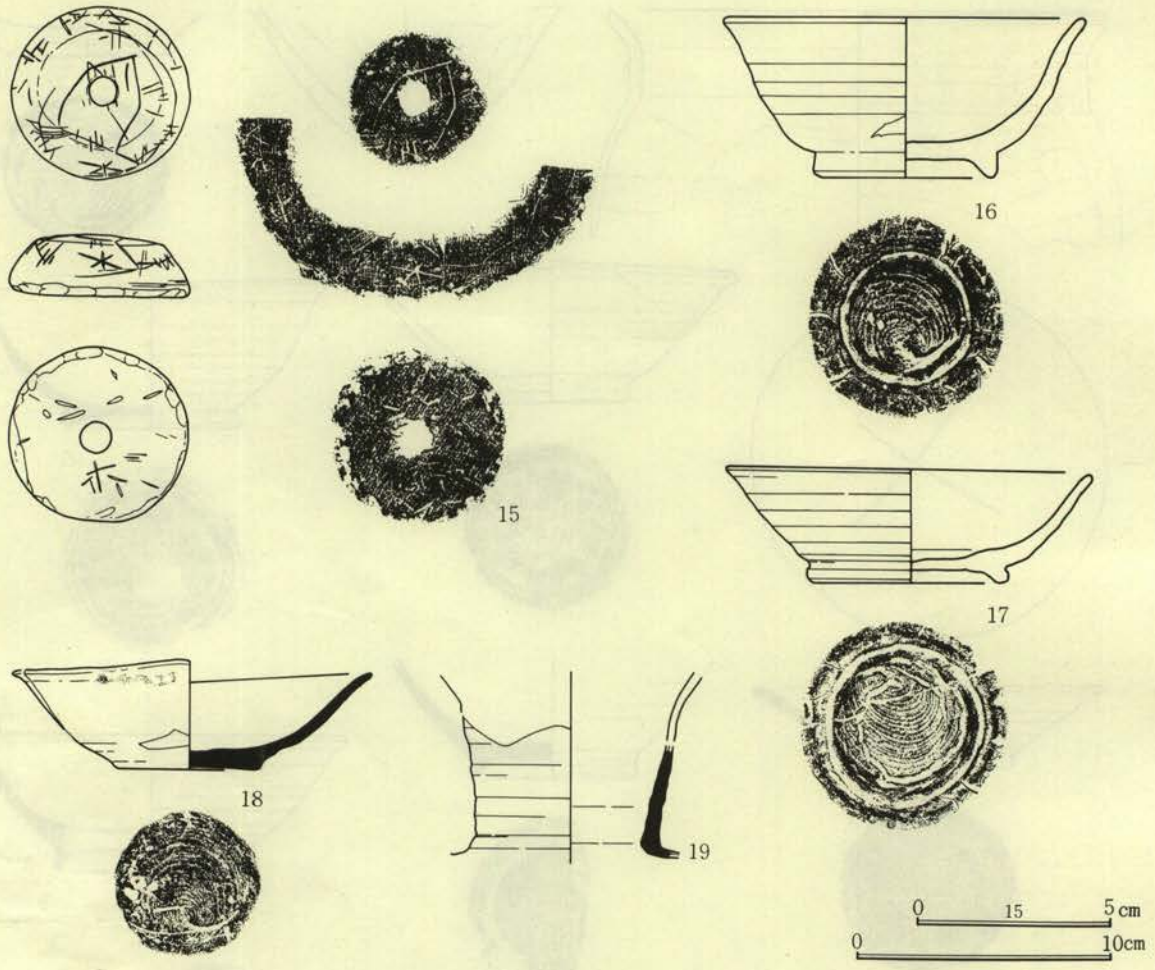
平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長3.8ｍ、東西長2.8ｍを測る。主軸はＮ－87°－Ｅを示す。壁は10～15㎝が残存する。周溝は北東と北西隅が途切れる。幅は10～15㎝、深さ３～５㎝と浅い。床面はほぼ平坦である。柱穴は北東と北西隅の２カ所にP_1とP_2が検出された。

貯蔵穴は南東隅に設けられ、60～65㎝の方形を呈し、深さ38㎝を測り、礫が入る。カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土と礫によって構築され、焚口から煙道部まで80㎝を測る。張り出し部は方形状を呈している。

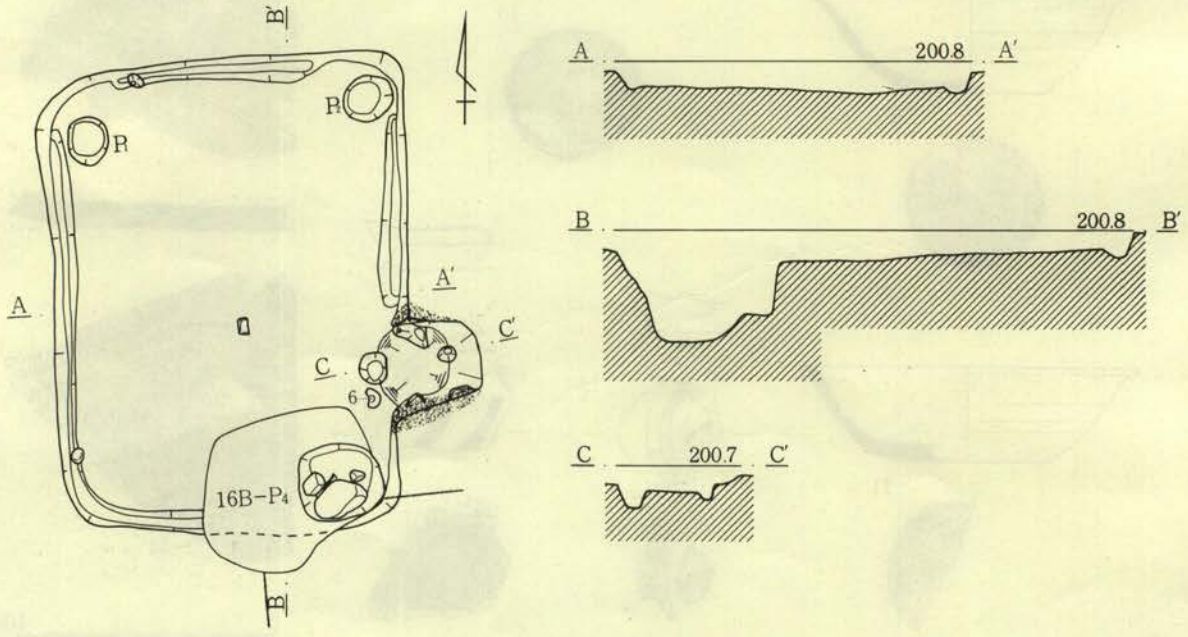
遺物は、カマドに集中して出土。燃焼部で土師器の甕(1)、前面に土師質の高台付碗(6)、覆土内からは１点墨痕が残る土師器の坏片(7)等が出土した。



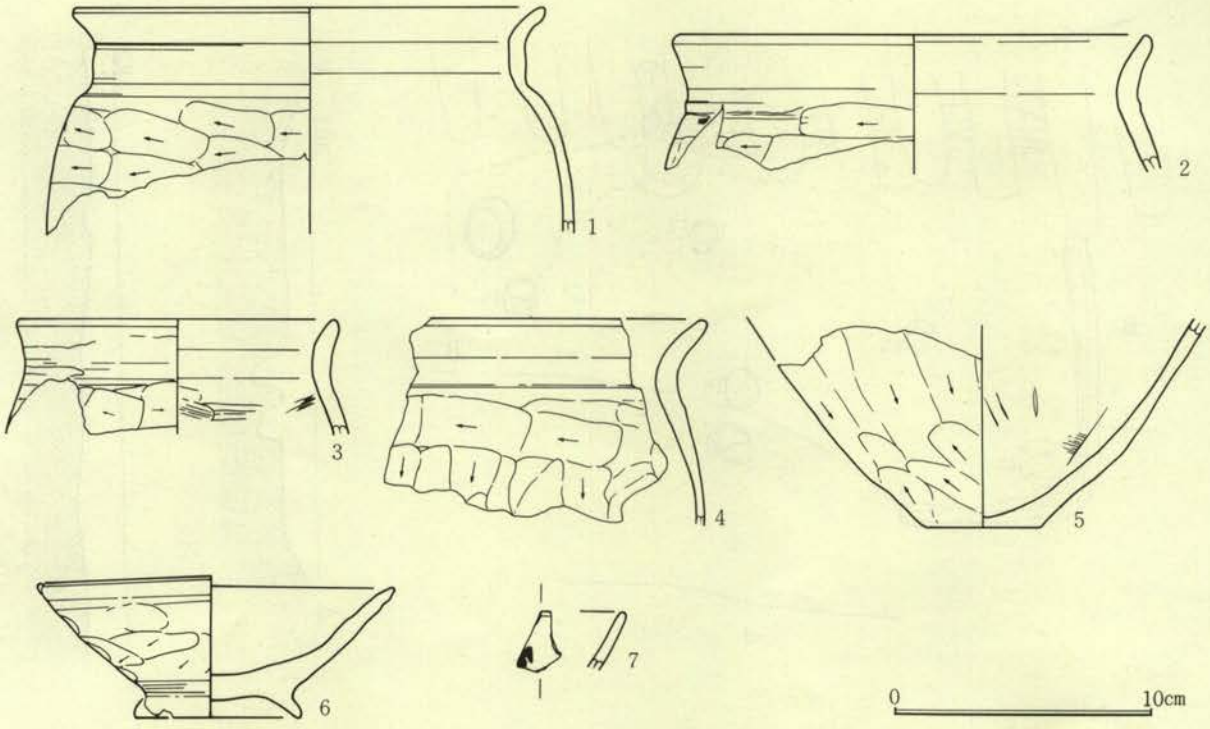
第129図　29号住居跡出土遺物(1)



第130図　29号住居跡出土遺物(2)



第131図　30号住居跡



第132図　30号住居跡出土遺物

30号住居跡出土遺物観察表（第132図１～７）

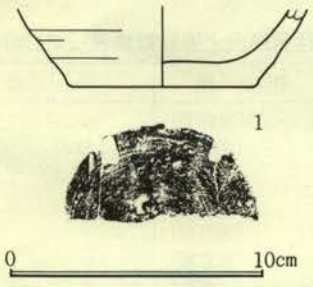
No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（18.4）　残存器高　8.9	粗砂粒	良　好	褐色	
2	甕（土師器）	口径（18.6）　残存器高　5.3	微砂粒	良　好	褐色	
3	小型甕（土師器）	口径（12.4）　残存器高　4.5	粗砂粒	良　好	暗褐色	
4	甕（土師器）		粗砂粒	良　好	暗褐色	
5	甕（土師器）		粗砂粒	良　好	褐色	底部～胴部下半
6	高台付碗（土師器）	口径　14.0　器高　5.6　底径（6.6）	粗砂粒	良	淡褐色	底部と体部中位手持ち篦削
7	坏（土師器）					外面に墨痕

31号住居跡（第134図）

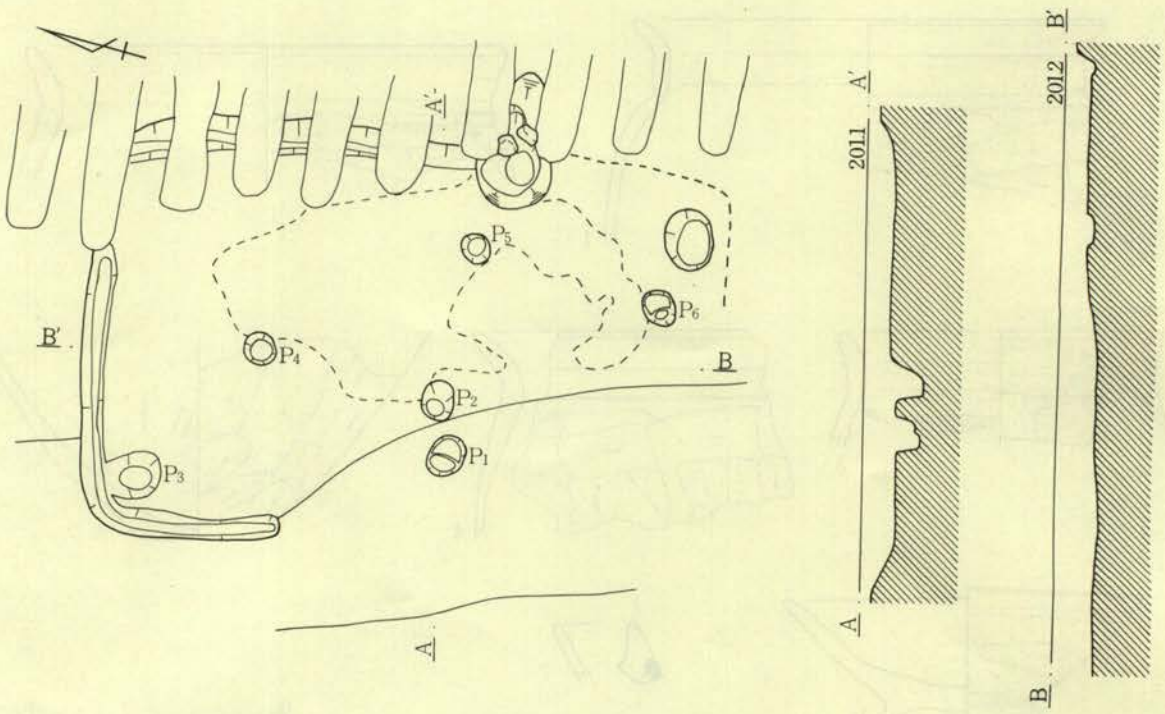
２区Ｃ・Ｄ－27・28Ｇ、標高201.00ｍに検出された。カマドを付す東壁部分には耕作溝が東西に走行し、南西部分には道路址が走行する。耕作溝はカマドの両袖部から北壁の中央やや北寄りまで及んでいる。南西方向には16号、北東方向には21号掘立柱建物跡が隣接する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北長約５ｍ、東西長3.3ｍを測る。主軸はＮ－83°－Ｅを示す。壁は残存の良い北壁で21cmを測る。周溝は北西隅と東壁下に巡る。幅は15cm前後、深さ２cmと浅い。床面はカマド前面から中央部分に硬化面が広がり、やや南方部分が歪みを呈する。柱穴はP_1～P_6が検出されたが本住居に帰属するかは不明である。貯蔵穴は南東隅に設けられた40×50cm、深さ27cmの掘り込みと考えられる。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築されているが、耕作溝による切断で残存が悪い。焚口から煙道部まで1.1ｍを測る。

遺物は、覆土内より土師器の坏片のみが出土した。



第133図　31号住居跡出土遺物



第134図　31号住居跡

31号住居跡出土遺物観察表（第133図１）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（酸化焔）	残存器高 3.2　底径（7.5）	微砂粒	良好	淡褐色	底部回転糸きり未調整

32号住居跡（第135図）

２区Ａ－26・27Ｇ、Ｂ－27Ｇ、標高201.30m付近に検出された。南方に22・23号掘立柱建物跡が隣接し、北西隅は礎石遺構に伴う小礫が覆土上面を覆っている。

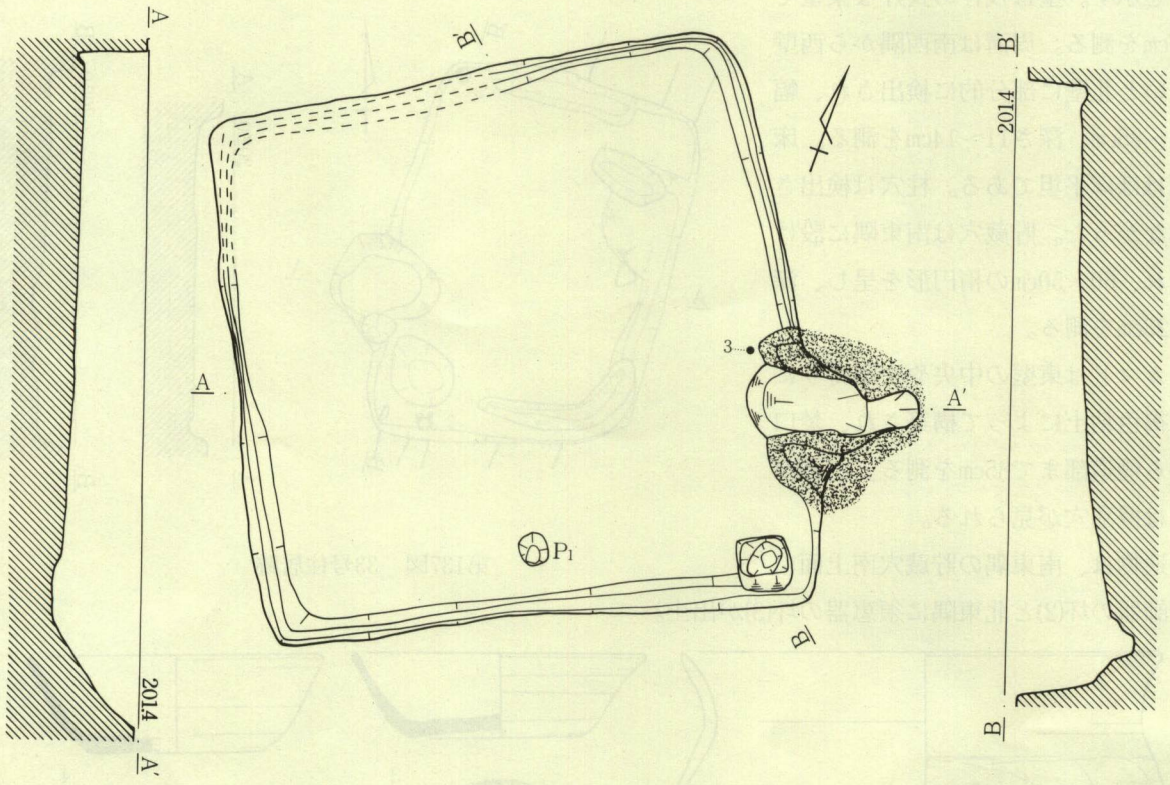
平面形は一辺が4.55mの正方形を呈し、主軸はＮ－63°－Ｅを示す。壁は32～58cmが残存し、垂直に近い掘り込みである。周溝はカマド左袖部脇より貯蔵穴まで連続し、幅10～20cm、深さ３～９cmを測る。床面はカマド前面から南東隅部分が緩やかに傾斜する。

柱穴は南壁下のほぼ中央にP_1が検出されただけである。貯蔵穴は南東隅に設けられ、40×45cmの方形で深さ38cmを測る。カマドは東壁の南寄りに灰褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで1.35mを測る。

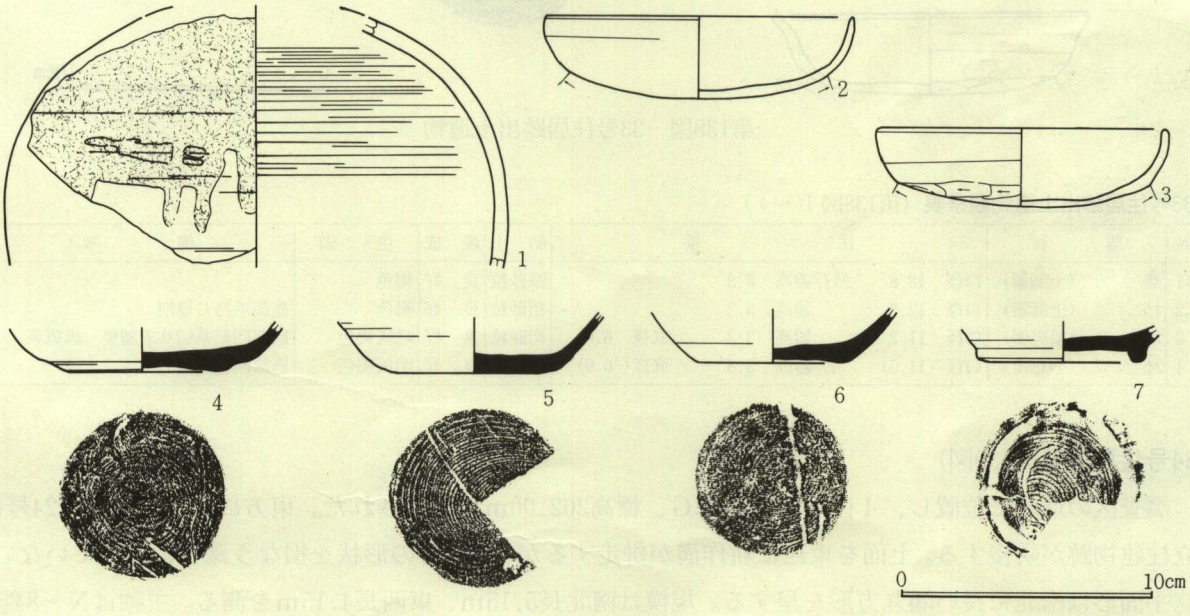
遺物は、覆土内より灰釉陶器、土師器の坏、須恵器の坏・高台付碗が出土した。

32号住居跡出土遺物観察表（第136図１～７）

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	壺（灰釉陶器）					長頸壺の肩部片
2	坏（土師器）	口径 12.0　器高 3.2	微砂粒	良	淡赤褐色	底部手持ち篦削
3	坏（土師器）	口径 11.3　器高 3.1	微砂粒	良	淡褐色	底部手持ち篦削
4	坏（須恵器）	底径 6.2	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
5	坏（須恵器）	底径 6.7	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
6	坏（須恵器）	底径 5.9	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
7	高台付碗（土師質）	底径 6.6	微砂粒	良好	赤褐色	底部回転糸切り後付高台



第135図　32号住居跡



第136図　32号住居跡出土遺物

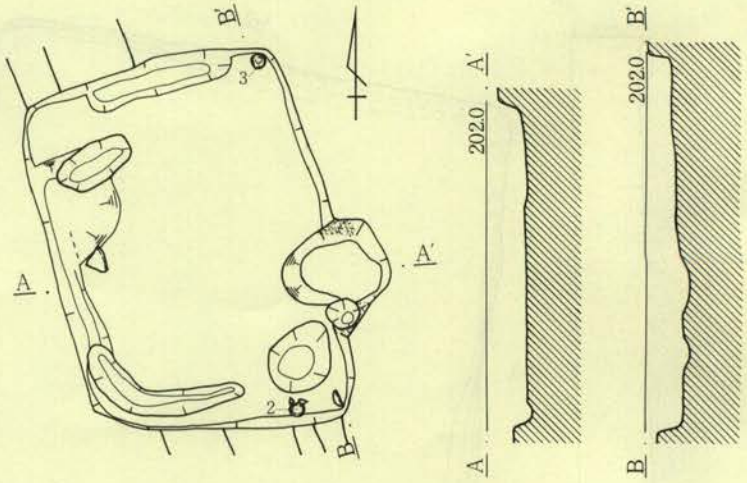
33号住居跡（第137図）

1区S－29G、標高201.90mに検出された。北東方向に24号掘立柱建物跡が位置し、本住居跡の西半分の部分に近世の道路址が走行する。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長3.05m、東西長2.25mを測る。主軸はN－85°－

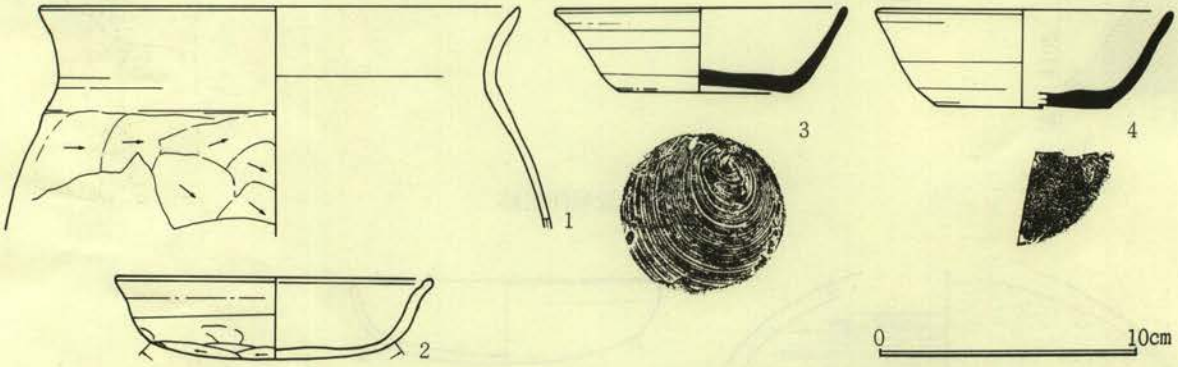
Eを示す。壁は残存の良好な東壁で27cmを測る。周溝は南西隅から西壁沿いと北壁に部分的に検出され、幅15～25cm、深さ11～14cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に設けられ、60×50cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで85cmを測る。右袖部には攪乱穴が見られる。



第137図　33号住居跡

遺物は、南東隅の貯蔵穴南上面に土師器の坏(2)と北東隅に須恵器の坏(3)が出土。



第138図　33号住居跡出土遺物

33号住居跡出土遺物観察表（第138図１～４）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 18.8	残存器高 8.8		微砂粒	良好	褐色	
2	坏（土師器）	口径 12.3	器高 3.2		粗砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
3	坏（須恵器）	口径 11.2	器高 3.3	底径 6.6	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り未調整　黒斑多
4	坏（須恵器）	口径 (11.5)	器高 3.8	底径(6.9)	微砂粒	良好	明灰褐色	底部回転篦削

34号住居跡（第139図）

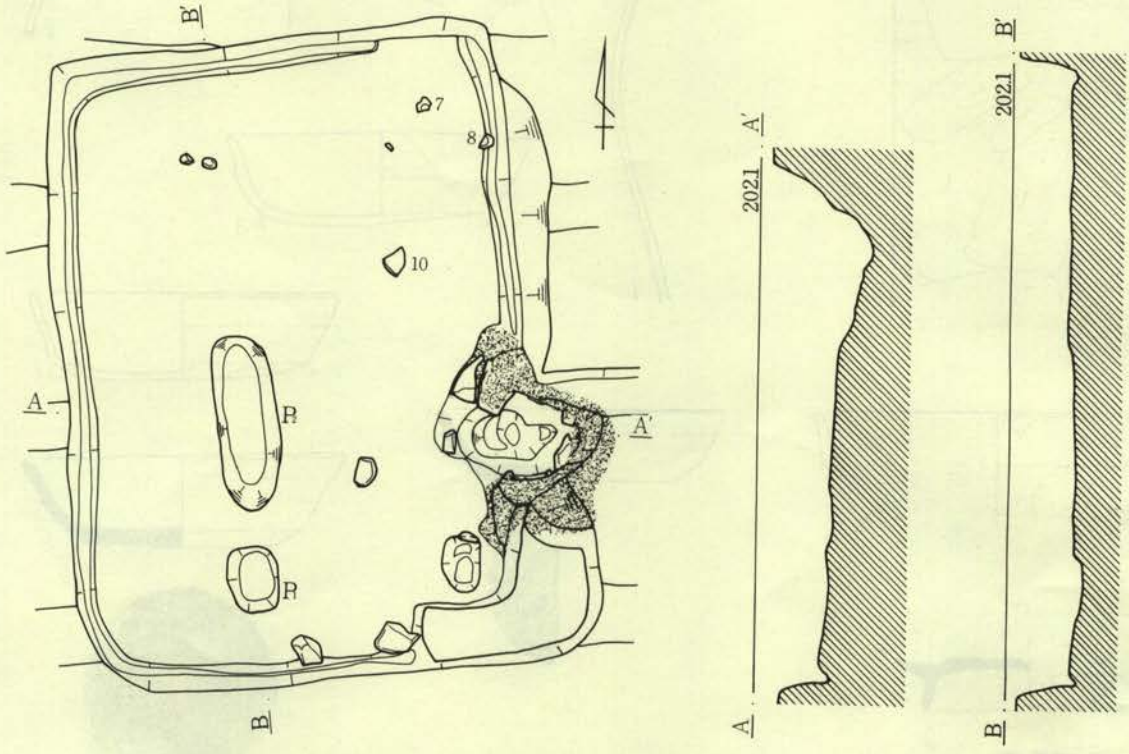
調査区の最北に位置し、１区P・Q－27G、標高202.00mに検出された。東方に25号、南西に24号掘立柱建物跡が隣接する。上面を東西に耕作溝が併走するが、住居跡の形状を損なう深さに達していない。

平面形は南北に長い隅丸方形を呈する。規模は南北長5.15m、東西長4.15mを測る。主軸はN－84°－Eを示す。壁は41～60cmが残存する。周溝は北壁の東に途切れる部分がある。幅は15～25cm、深さ４～10cmを測る。床面はカマド前面がやや高まる。柱穴は検出されなかった。P_1は50×40cmの隅丸方形で深さ５cm、P_2は長さ1.4m、幅45cmの長楕円形で深さ２～３cmの皿状の掘り込みを呈する。貯蔵穴はカマドの左袖部分前面に設けられ、43×30cmの方形で深さ42cmを測る。

カマドは東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土と礫によって構築され、焚口から煙道部まで1.15mを測

る。カマドの左袖分から南東隅に貯蔵穴を囲む様にＬ字形の高まりがある。

遺物は、カマド内より土師器の甕（１・２）、北東隅部分に須恵器の坏(7)と高台付碗(8)、覆土内から土師器の坏、須恵器の大甕片等が出土。



第139図　34号住居跡

34号住居跡出土遺物観察表（第140図１～10）

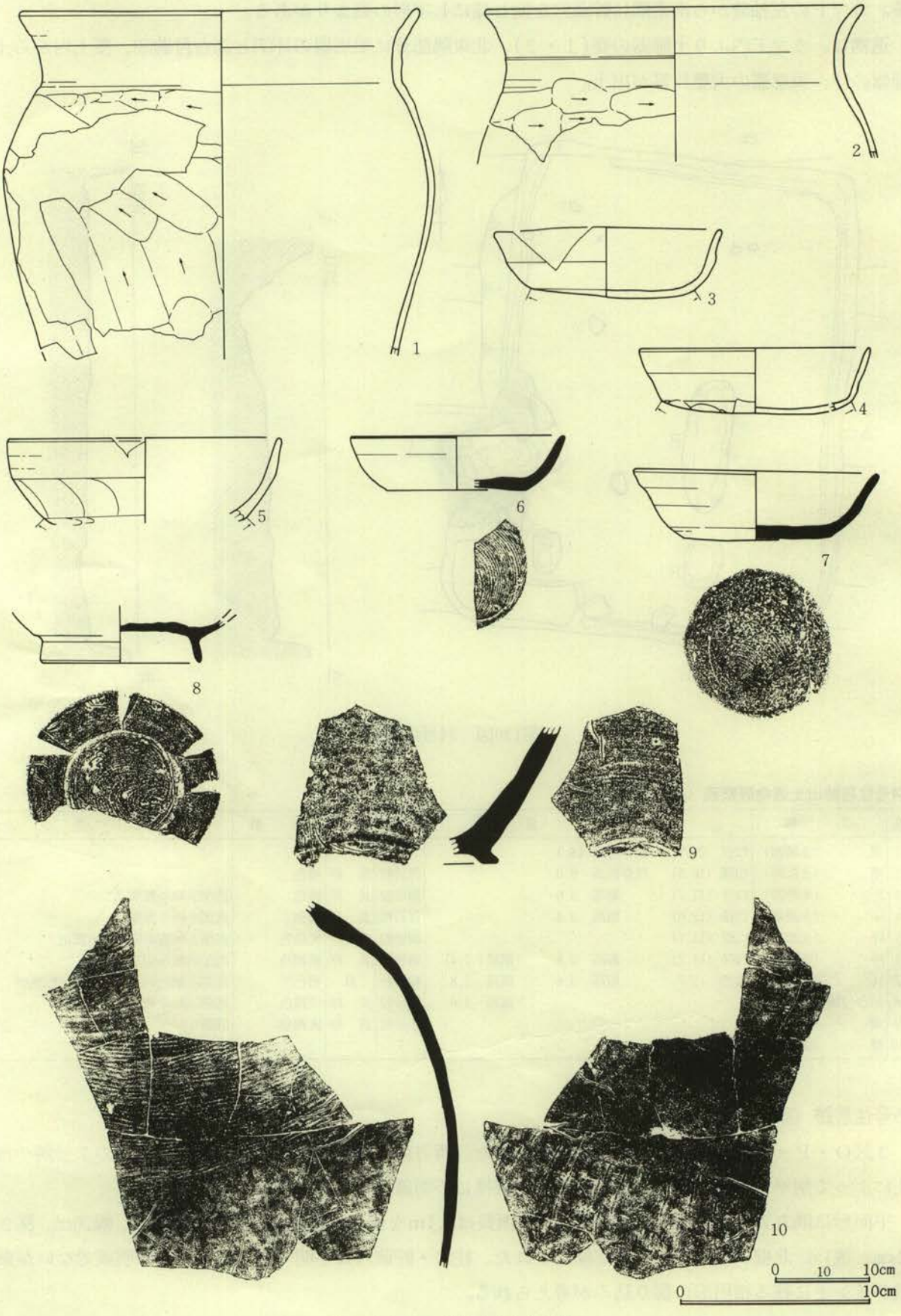
No	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 20.7	残存器高 18.1					
2	甕（土師器）	口径 (19.6)	残存器高 8.0		微砂粒	良好	褐色	
3	坏（土師器）	口径 (11.7)	器高 3.6		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	坏（土師器）	口径 (12.0)	器高 3.4		微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
5	坏（土師器）	口径 (14.1)			微砂粒	良好	乳白色	底部と体部中位手持ち篦削
6	坏（須恵器）	口径 (11.2)	器高 2.8	底径(7.4)	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
7	坏（須恵器）	口径 12.7	器高 3.6	底径 7.8	粗砂粒	良	褐色	底部回転糸切り後周縁部回転篦削
8	高台付碗（須恵器）			底径 8.0	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り後付高台
9	壺（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	底部片
10	甕（須恵器）							

35号住居跡（第141図）

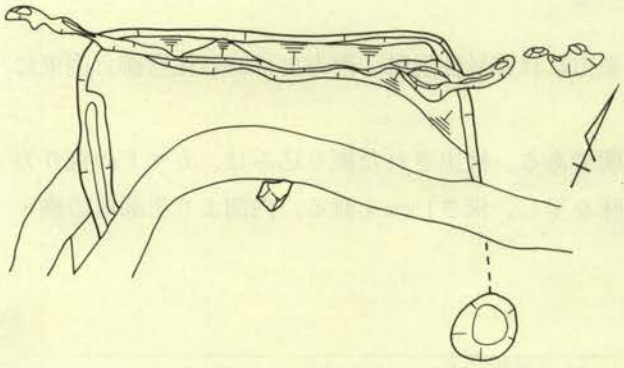
２区Ｏ・Ｐ－22Ｇ、標高198.60ｍに検出された。西方に14号住居跡が位置する。地割りの７号溝や攪乱によって削平されている為に全体の形状・規模は不明確である。

平面形は隅丸方形と考えられ、残存する東西長は3.1ｍを測る。周溝は西壁に検出され、幅20cm、深さ２cmと浅い。北壁に沿って地割れが検出された。柱穴・貯蔵穴は不明である。カマドは明確でないが東壁ライン上に残る楕円形の掘り込みが考えられる。

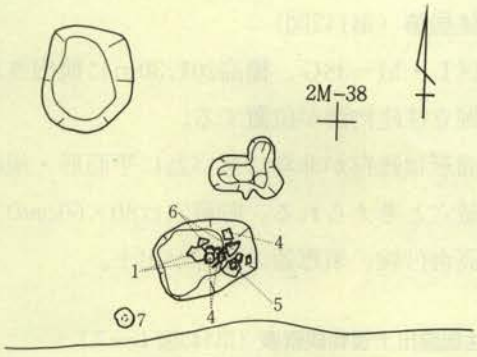
遺物は、須恵器の甕の小片のみであった。



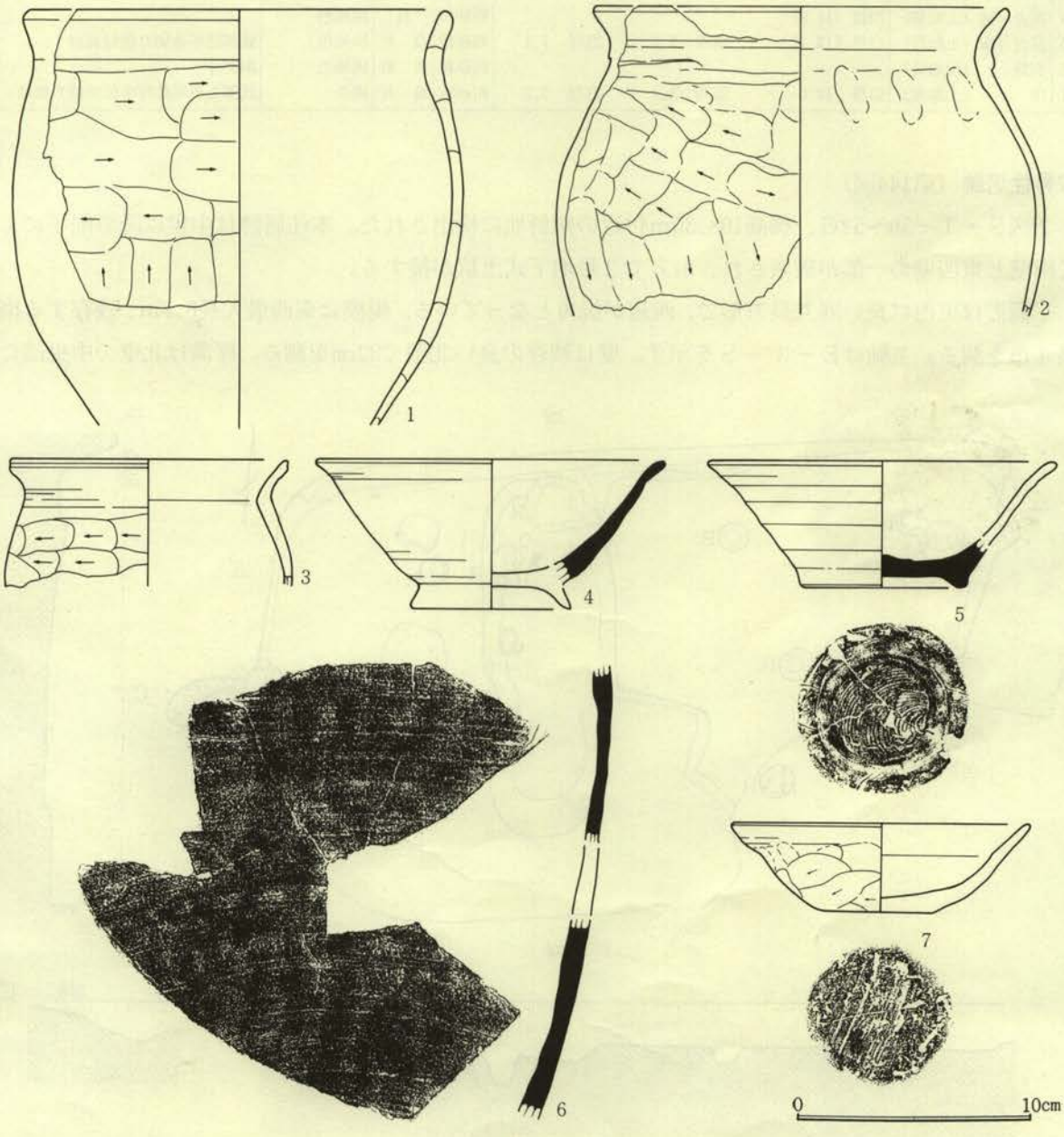
第140図　34号住居跡出土遺物



第141図　35号住居跡



第142図　36号住居跡



第143図　36号住居跡出土遺物

36号住居跡（第142図）

２区Ｌ・Ｍ－38Ｇ、標高201.30ｍに検出された。東方には25号住居跡、西方には38号住居跡、南東に35号掘立柱建物跡が位置する。

平面形は残存が非常に悪い為に平面形・規模は不明である。検出された掘り込みは、カマドの掘り方と貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴は80×60cmの方形気味を呈し、深さ15cmを測る。内部より土師器の甕・坏・高台付碗、須恵器の甕等が出土。

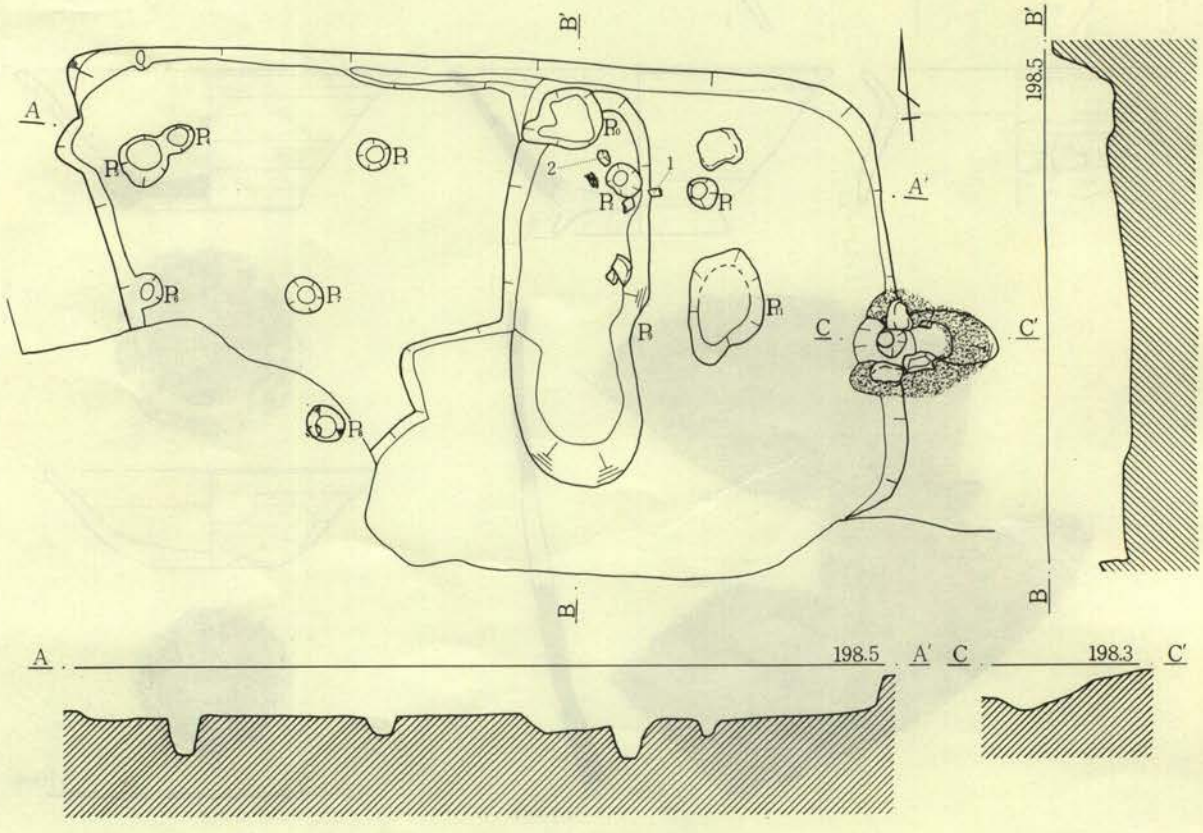
36号住居跡出土遺物観察表（第143図１～７）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径（18.0）	残存器高 18.0		粗砂粒	良	赤褐色	
2	甕（土師器）	口径（17.7）	残存器高 13.2		粗砂粒	良好	暗褐色	
3	小型甕（土師器）	口径（12.0）	残存器高 5.5		粗砂粒	良好	褐色	
4	高台付碗（土師質）	口径（14.8）			粗砂粒	良	淡褐色	
5	高台付碗（土師質）	口径（15.2）	器高 5.5	底径 7.1	粗砂粒	良好	淡褐色	底部回転糸切り後付高台
6	羽釜（須恵質）				粗砂粒	良好	灰褐色	胴部片
7	坏（土師器）	口径 12.9	器高 3.8	底径 5.2	粗砂粒	良好	褐色	底部と外面体部中位手持ち篦削

37号住居跡（第144図）

２区Ｓ・Ｔ－50～52Ｇ、標高198.30ｍ付近の傾斜地に検出された。本住居跡は中世以降の削平によって南壁と東西壁の一部が破壊され、南方で２号地下式土坑が接する。

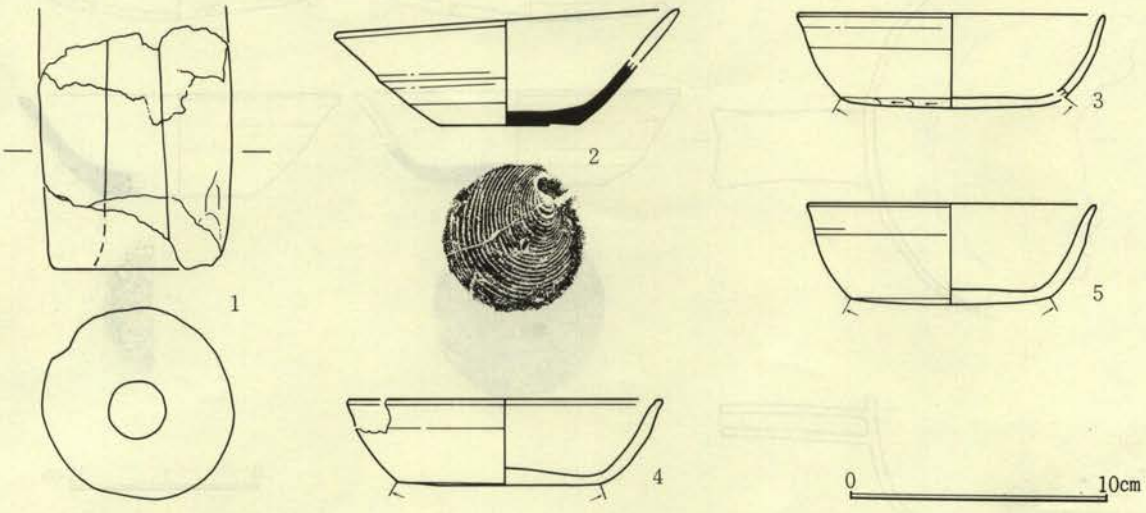
平面形は東西に長い隅丸長方形で、西辺が鋭角となっている。規模は東西最大長6.7ｍ、残存する南北長４ｍを測る。主軸はＥ－３°－Ｓを示す。壁は残存の良い北壁で32cmを測る。周溝は北壁の中央部に検



第144図　37号住居跡

出された。残存床面はほぼ平坦である。柱穴・土坑状の掘り込みはP_1～P_{11}が検出された。P_9は床面の中央やや東寄りに設けられ、南北3.1m、東西１～1.15mの長楕円形を呈し、最深部で17cmを測る。貯蔵穴は検出されなかった。カマドは東壁の中央に灰白色粘土と礫によって構築され、焚口から煙道部まで1.15mを測る。

遺物は、P_9の土坑状掘り込みに集中して羽口(1)、須恵器の坏(2)、土師器の坏(３～５)が出土した。



第145図　37号住居跡出土遺物

37号住居跡出土遺物観察表（第145図１～５）

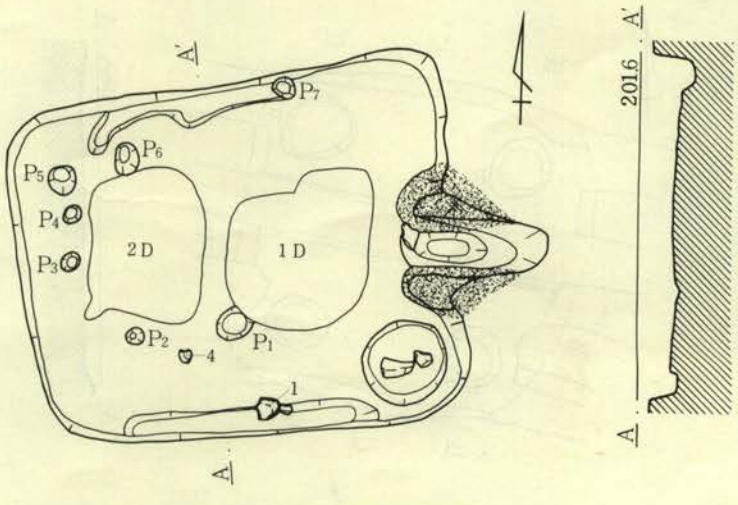
No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	羽口 (土製品)	口径 7.5	残存長 9.6	孔径 2.2	重量 337 g			
2	坏 (須恵器)	口径 13.4	器高 4.1	底径 5.3	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
3	坏 (土師器)	口径 12.0	器高 3.7	底径 8.8	微砂粒	良好	赤褐色	底部手持ち篦削
4	坏 (土師器)	口径 12.3	器高 3.4	底径 8.0	微砂粒	良好	淡赤褐色	底部手持ち篦削
5	坏 (土師器)	口径 (11.4)	器高 4.0	底径 7.9	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削

38号住居跡（第146図）

２区Ｌ・Ｍ－39・40Ｇ、標高201.50mに検出された。集落の西方に配され、東方に36号住居跡、南西方向に４号住居跡が位置する。

平面形は東西に長い隅丸方形を呈し、中央部の床面を２カ所の土坑が住居跡を切って掘り込んでいる。規模は東西長3.5m、南北長最大2.95mを測る。

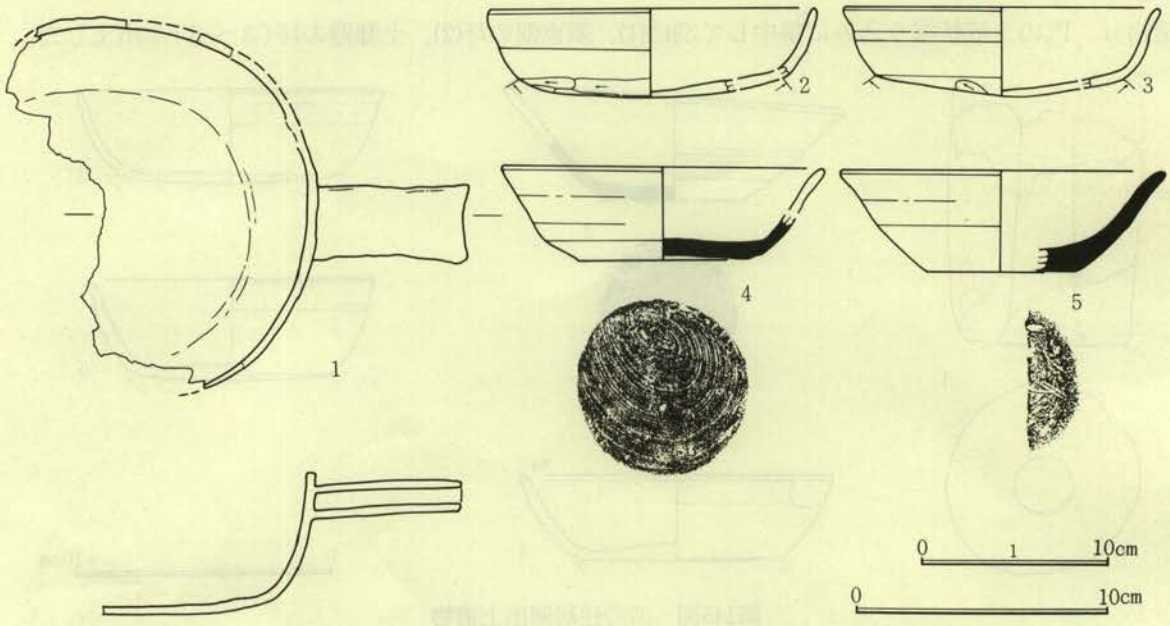
主軸はＮ－89°－Ｅを示す。壁は17～22cmが残存する。周溝は南北壁の中央部分に検出され、幅15～20cm、深さ５～９cmを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴は15～20cm前後の円形で15cm程の深さのものが検出されたが住居跡との帰属は明確でない。貯蔵穴は南東隅に設けられ、62×



第146図　38号住居跡

70cmの楕円形で深さ20cmを測る。カマドは東壁の中央部に黒褐色粘土によって構築され、焚口から煙道部まで1.28mを測る。

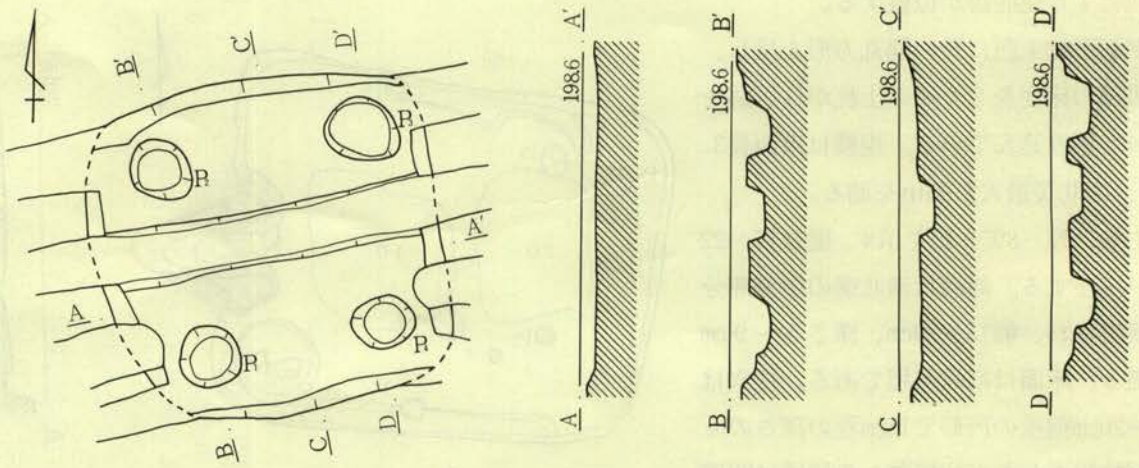
遺物は、南周溝の中央部で把手付鉄鍋(1)と覆土内より土師器の坏と須恵器の坏が出土した。



第147図　38号住居跡出土遺物

38号住居跡出土遺物観察表（第147図1～5）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	把手付鍋（鉄製品）	身部径16前後	高さ 6	把手部長6.2 幅 3				
2	坏（土師器）	口径 12.7	器高 3.5	底径 10.2	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
3	坏（土師器）	口径 (12.1)	器高 3.5	底径 9.8	微砂粒	良好	褐色	底部手持ち篦削
4	坏（須恵器）	口径 12.1	器高 4.1	底径 6.8	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
5	坏（酸化焔）	口径 (12.3)	器高 4.0	底径 (5.8)	粗砂粒	良	淡黄褐色	底部回転糸切り未調整



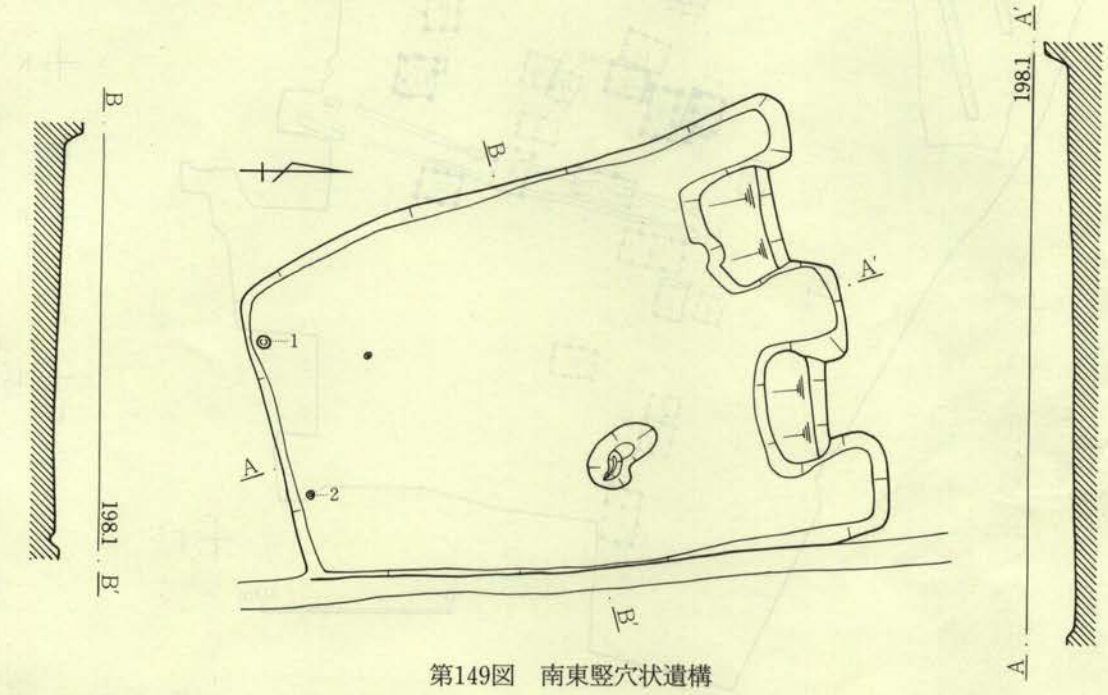
第148図　39号住居跡

39号住居跡（第148図）

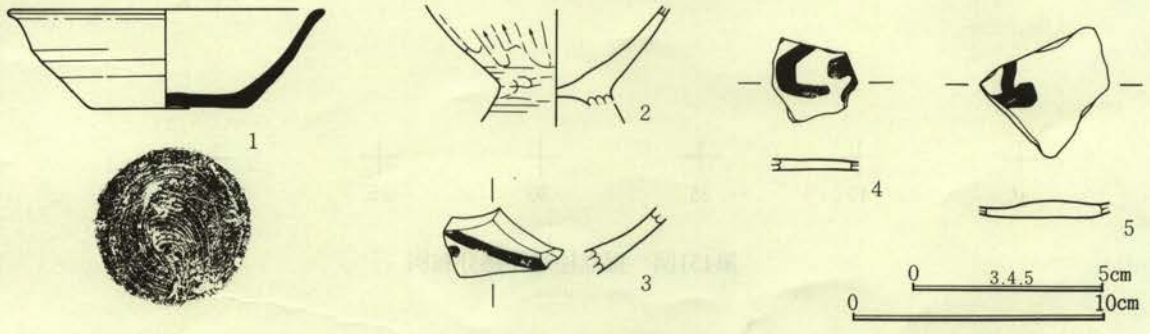
3区G－32Gに検出された。上面を耕作溝が東西に走行している。平面形は隅丸の正方形を呈する。規模は東西・南北長とも2.7mを測る。壁は5～8cmが残存する。周溝・貯蔵穴・カマドは検出されなかった。床面は柱穴はP_1～P_4が検出され、各柱間は1.5mと考えられる。遺物は、皆無であった。

竪穴状遺構（第149図）

A調査区の南東、3C－22・23Gに検出された。東辺部分に沿って地割りの7号溝が走行する。平面形は南北に長い方形を呈し、南北長(突出部を含)6.25m、東西長4.5m前後を測る。長軸方向はN－17°－Wを示す。壁は残存の良い北西部分で31cmを測る。周溝、柱穴、カマドは不明である。北辺には3カ所の突出部がある。遺物は南壁沿いに集中し、須恵器の坏、土師器の脚台付甕等が出土した。



第149図　南東竪穴状遺構

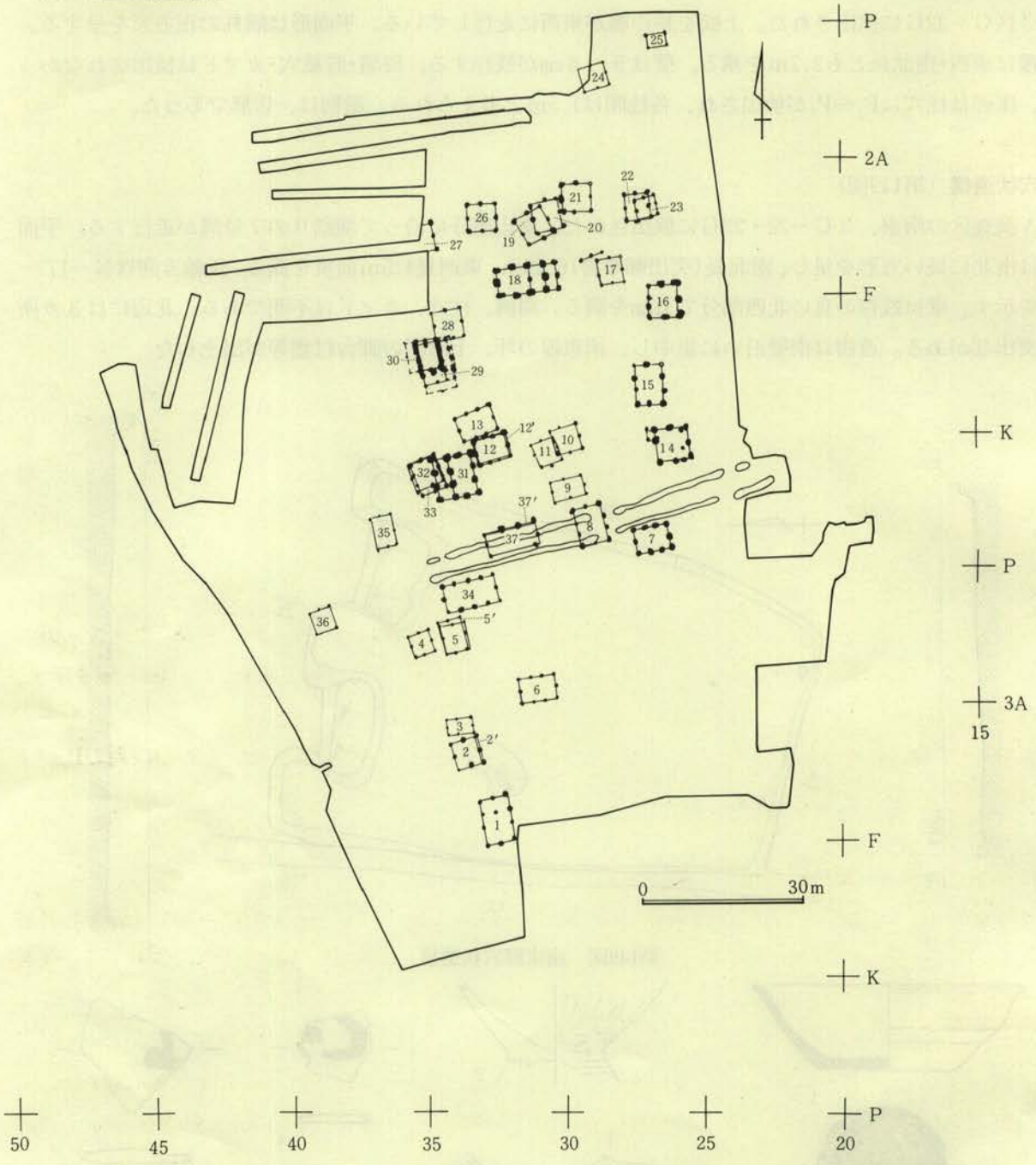


第150図　南東竪穴状遺構出土遺物

南東竪穴状遺構観察表(第150図1～5)

No.	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	坏（須恵器）	口径 12.2　器高 3.9　底径 6.3	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
2	脚台付甕（土師器）		粗砂粒	良好	褐色	
3	坏（土師器）		微砂粒	良好	灰褐色	外面に墨痕 内面黒色処理
4	坏（土師器）		微砂粒	良好	赤褐色	内面底部に墨痕
5	坏（土師器）		微砂粒	良好	褐色	内面底部に墨痕

(2) 柱立柱建物跡



第151図　掘立柱建物跡分布図

1号掘立柱建物跡（第152図）

3区D－31～33G・E－31～33Gに検出された。北西方向に2号住居跡が隣接する。棟方向(桁行方向)は南北でN－11°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_4・P_6～P_9) 3間・梁行(P_1－P_{10}－P_9・P_4～P_6) 2間。P_{11}は深さ15cm前後と浅く、間仕切の柱穴であろうか。

柱間寸法は、桁行の東・西列共に南より9尺－8尺－9尺、梁行の南・北列も東より8.5尺－8.5尺で対応する。規模は桁行7.80m、梁行5.10m、面積39.78㎡である。柱穴は円形を基調とする。

2・2′号掘立柱建物跡（第153図）

3区B－33・34G、C－33・34Gに検出された。P_1は2号住居跡と重複する。新旧関係は2号住居跡によって切られている。棟方向(桁行方向)は南北でN－16°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7) 2間・梁行P_1－P_8－P_7・P_3～P_5) 2間。

柱間寸法は桁行の東・西列は8.5尺－8.5尺である。梁行の南・北列は8尺－8尺であるがP_5～P_7の東列を1尺ほど拡張してP_3～P_9・P_1～P_{11}間の柱間を8.5尺としている。規模は拡張前(2号)で桁行5.7m、梁行4.8m、拡張後が桁行・梁行5.7mで面積26.01㎡である。柱穴は円形を基調とする。

3号掘立柱建物跡（第154図）

3区A－33・34G、B－33・34Gに検出された。2号掘立柱建物跡とP_7が接し、北方に3号住居跡が位置する。棟方向(桁行方向)は東西でN－85°－Eを示す。構造は桁行(P_1－P_8－P_9・P_3～P_5) 2間・梁行(P_1～P_3・P_5～P_7) 2間。

柱間寸法は桁行の南・北列とも東より9尺－6尺、梁行の東・西列は南より4.5尺－4.5尺である。規模は桁行4.50m、梁行2.70m、面積12.15㎡である。柱穴は円形を基調とする。

4号掘立柱建物跡（第155図）

2区R－34・35G、S－34Gに検出された。東方に5号掘立柱建物跡、北方に1号溝・7号住居跡が隣接する。P_7は2号溝によって切られている。棟方向(桁行方向)は南北と考えられ、N－19°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7) 2間・梁行(P_1－P_8－P_7・P_3～P_5) 2間。

柱間寸法は桁・梁行とも6尺－6尺である。規模は各列が3.60m、面積12.96㎡。梁行の南列のP_8が1尺ほど南に突出する。柱穴は円形を基調とする。

5号掘立柱建物跡（第156図）

2区Q－33・34G、R－33・34G、S－34Gに検出された。5号と5′号は梁行の南列を基軸として建て替えられている。2号溝と重複し、西方に4号掘立柱建物跡、北方に31号掘立柱建物跡・7号住居跡がある。

棟方向(桁行方向)は南北でN－14′－Wを示す。構造は、桁行(P_1－P_2－P_9・P_{11}－P_6－P_7) 2間・梁行(P_8～P_{11}・P_1－P_8－P_7) 2間。柱間寸法は桁行の東・西列とも北より7尺－10尺、梁行の北列は7尺、南列は東より8尺－6尺でP_8が西よりに擦れている。規模は桁行5.10m、梁行4.20m、面積21.42㎡。柱穴は円形を基調とする。

5′号掘立柱建物跡（第156図）

棟方向(桁行方向)は南北でN－16°－Wで5号より2′西に振れている。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7) 2間・梁行(P_3～P_5・P_1－P_8－P_7) 2間。

柱間寸法は桁行の南・北列とも10尺－10尺。梁行は東より6.5尺－6.5尺で桁行の東列のP_6が1尺程擦れている。規模は桁行6m、梁行3.90m、面積23.40㎡。柱穴は円形を基調とする。

6号掘立柱建物跡（第157図）

2区S－30・31G、T－30・31Gに検出された。1号地下式土坑を覆う様に位置している。棟方向(桁行方向)は東西でN－10°－Wを示す。構造は、桁行(P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6)3間・梁行(P_1～P_3・P_6～P_8)2間。

柱間寸法は桁行・梁行とも7尺である。規模は桁行6.30m、梁行4.20m、面積26.46㎡。柱穴は円形を基調とする。

7号掘立柱建物跡（第158図）

2区N－26・27G、O－26・27Gに検出された。南東に14号住居跡、北方に道路跡が隣接する。棟方向(桁行方向)は東西でN－77°－Eを示す。構造は桁行(P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6)3間・梁行(P_1～P_3・P_6～P_8)2間。

柱間寸法は桁行の南・北列とも西より7尺－7尺－7尺の設計と考えられる。梁行も7尺－7尺である。規模は桁行6m、梁行4.2m、面積25.2㎡。柱穴は70cm～1m前後の辺を測る方形を基調とし、平坦な底面を呈し、柱痕部分の掘り方が窪むものがある。

遺物は、P_2より墨痕が認められる土師坏の底部片(15)と須恵器の大甕片(27)、P_7より須恵器の坏片(22)が出土した。

8号掘立柱建物跡（第159図）

2区M・N・O－28・29Gに検出された。南方に13号住居跡、北方に9号掘立柱建物跡・15号住居跡が隣接し、道路跡と重複する。棟方向(桁行方向)は南北でN－16°－Wを示す。構造は、桁行(P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6)3間・梁間(P_1～P_3・P_6～P_8)2間。

柱間寸法は桁行の東・西列とも南より7尺－7尺－8尺、梁行は8尺－8尺である。P_{11}は10cm前後の浅い掘り込みで、間仕切の柱穴であろうか。規模は桁行6.60m、梁行4.80m、面積31.68㎡。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、P_5より土師器の坏片(8)が出土した。

9号掘立柱建物跡（第160図）

2区L－29・30G、M－29・30Gに検出された。15号住居跡とP_2～P_4が重複する。棟方向(桁行方向)は東西でN－74°－Eを示す。構造は桁行(P_1－P_8－P_7・P_3～P_5)2間・梁行(P_1～P_3・P_5～P_7)2間。

柱間寸法は桁行の南列が10尺－10尺である。北列が東より11尺－9尺でP_4が西よりに位置する。梁行の東・西列は6尺－6尺である。規模は桁行6m、梁行3.60m、面積21.60㎡。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、P_8より土師器の脚台付甕の脚部片(1)が出土した。

10号掘立柱建物跡（第161図）

2区J－29・30G、K－29・30Gに検出された。18号住居跡・11号掘立柱建物跡と重複する。棟方向(P_1～P_3)は南北でN－17°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)2間・梁行(P_1－P_8－P_7)2間。

柱間寸法は桁行の東列8尺－8尺である。西列が南より9尺－7尺、梁行の南列8尺－8尺で北列が東より10尺－6尺とする。規模は桁行4.80m、梁行4.80m、面積23.04㎡。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、P_1より土師器の坏片(13)、P_5より須恵器の底部片(30)が出土した。

11号掘立柱建物跡（第161図）

2区K－30・31G、L－30・31Gに検出された。10号掘立柱建物跡の西で重複し、18号住居跡とも重複する。棟方向（P_1～P_3）は南北でN－24°－Wを示す。構造は桁行（P_1～P_3・P_5～P_7）2間・梁行（P_1－P_8－P_7・P_3～P_5）2間。

柱間寸法は桁行・梁行とも7尺－7尺で、P_4が1尺ほど北にずれている。規模は桁行・梁行4.20m、面積17.64㎡。柱穴は円形を基調とする。

12・12′号掘立柱建物跡（第162図）

2区K－32・33G、L－32・33Gに検出された。桁行の南列で16号住居跡、北列で17号住居跡・13号掘立柱建物跡と重複する。本建物跡は12号と12′号が重複する建て替えの建物跡である。

棟方向（桁行方向）は2軒とも東西でN－74°－Eを示し、構造は桁行3間・梁行2間。12号（P_1～P_{10}）の柱間寸法は桁行の北列（P_3～P_6）は7尺－7尺－7尺、南列（P_8～P_{10}－P_{11}）は東から9尺－5尺－7尺。梁行は東列（P_6～P_8）・西列（P_1～P_3）とも7尺－7尺である。

12′号の柱間寸法は桁行の北列（P_{13}～P_{16}）・梁行の東列（P_{16}～P_{18}）・西列（P_{11}～P_{13}）とも7尺、桁行の南列（P_{18}～P_{20}－P_{11}）は東より10尺－4尺－7尺である。規模は両者とも桁行6.30m、梁行4.20m、面積26.46㎡。12′号は東西に1尺、南北に0.5尺移動して建て替えている。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、12号か12′号に伴うかは不明であるが、P_3で折頭釘㉕、P_{10}かP_{18}で土師器の坏片⑨が出土した。

13号掘立柱建物跡（第163図）

2区J－32～34G、K－32・33Gに検出された。南東部分で17号住居跡・12号掘立柱建物跡、南西隅の柱穴が24号住居跡と重複し、北西方向に26号住居跡が隣接する。

棟方向（桁行方向）は東西でN－70°－Eを示す。構造は桁行（P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6）3間・梁行（P_1～P_3・P_6～P_8）2間。

柱間寸法は桁行の南・北列とも東より7尺－8尺－7尺。梁行8尺－8尺である。規模は桁行6.60m、梁行4.8m、面積31.68㎡。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、P_3で須恵器の高台付碗の底部片⑲とP_{10}からは須恵器の蓋片㉔と土師器の坏片⑥が出土した。

14号掘立柱建物址（第164図）

2区J・K・L－25・26Gに検出された。北東方向に21号住居跡、北西に15号掘立柱建物跡が位置する。棟方向（桁行方向）は南北でN－6°－Wを示す。構造は梁行（P_1～P_3・P_5～P_7）2間・桁行（P_3～P_5・P_7－P_8～P_1）2間と考えられる。

柱間寸法は梁行の東列が南より9.5尺－9.5尺で西列は南より12尺－7尺である。桁行の南列は東より10尺－9尺、北列は東より9尺－10尺。梁行に並走してP_9～P_{11}が見られるが本建物跡に拘わるものかは不明である。P_2とP_3の西には5尺の間隔で7尺幅の庇が設けられていたのであろうか。身舎の規模は桁行・梁行5.7mで面積32.49㎡。庇部分を含めると35.64㎡。柱穴は1辺が80cm～1.4mほどの隅丸方形を基調とし、底面に柱痕の掘り方を認めるものもある。

遺物は、P_3から須恵器の高台付坏⑰、P_4からは土師質須恵器の高台付碗⑱、須恵器の高台付碗㉑、須恵甕の胴部片㉙、P_8とP_9では土師器の坏片（4・12）が出土した。

15号掘立柱建物跡（第165図）

2区H・I・J－26・27Gに検出された。東方に21号住居跡、南方に14号掘立柱建物跡、北西には22・28・29号住居跡、南西には19・20号住居跡が隣接する。

棟方向（桁行方向）は南北でN－4°－Wを示す。構造は桁行（P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6）3間・梁行（P_1～P_3・P_6～P_8）2間。P_3は道路址と重複し、不明確であった。

柱間寸法は桁行の東列が南より8尺－9尺－7尺、西列が9尺－8尺－7尺、梁行は南・北列とも東より8.5尺－8.5尺である。規模は桁行7.20m、梁行5.10m、面積36.72㎡。P_{11}は本建物に帰属する掘り込みかは不明であるがP_2～P_7の梁行ライン上に位置し、12尺の柱間を測る。柱穴は円形と隅丸方形のものが見られる。

遺物は、P_2より土師器の坏片(7)と須恵器の大甕の口縁部片(26)がある。

16号掘立柱建物跡（第166図）

2区E・F－25～27Gに検出された。P_4が30号住居跡と重複し、30号住居跡が本建物跡より新しい。棟方向（桁行方向）は南北で方位はN－7°－Wを示す。構造は桁行（P_1～P_4・P_6～P_8）の東列は2間、西列は3間、梁行2間（P_4～P_6・P_8－P_9－P_1）である。

柱間寸法は桁行の東列が南より10尺－9尺、西列が南より7尺－6尺－6尺、梁行9尺－9尺である。規模は桁行5.7m、梁行5.4mで面積30.78㎡。P_3は入り口部に拘わる柱穴の可能性が考えられる。柱穴は1辺が70cm～1.7mの方形を基調とし、底面に据え方の掘り込みをもつ。

遺物は、P_4より土師器の坏片(14)、P_8からは土師器の坏片2点（3・10）と須恵器の蓋片(23)が出土した。

17号掘立柱建物跡（第167図）

2区D・E－28Gに検出された。北東で31号住居跡と重複し、東方に30号住居跡が隣接する。棟方向は東列の柱穴部分が道路址によって破壊されているので不明確であるが、残存するP_1～P_3を主軸方向とするとN－11°－Wを示す。構造は桁行・梁行2間と考えられる。P_1～P_3の柱間は6尺－9尺、P_1～P_5は7尺、P_3～P_4は8尺。規模は桁行と梁行が同距離とした場合、P_1～P_3の4.5m×4.5mで面積20.25㎡。柱穴は円形を基調とする。

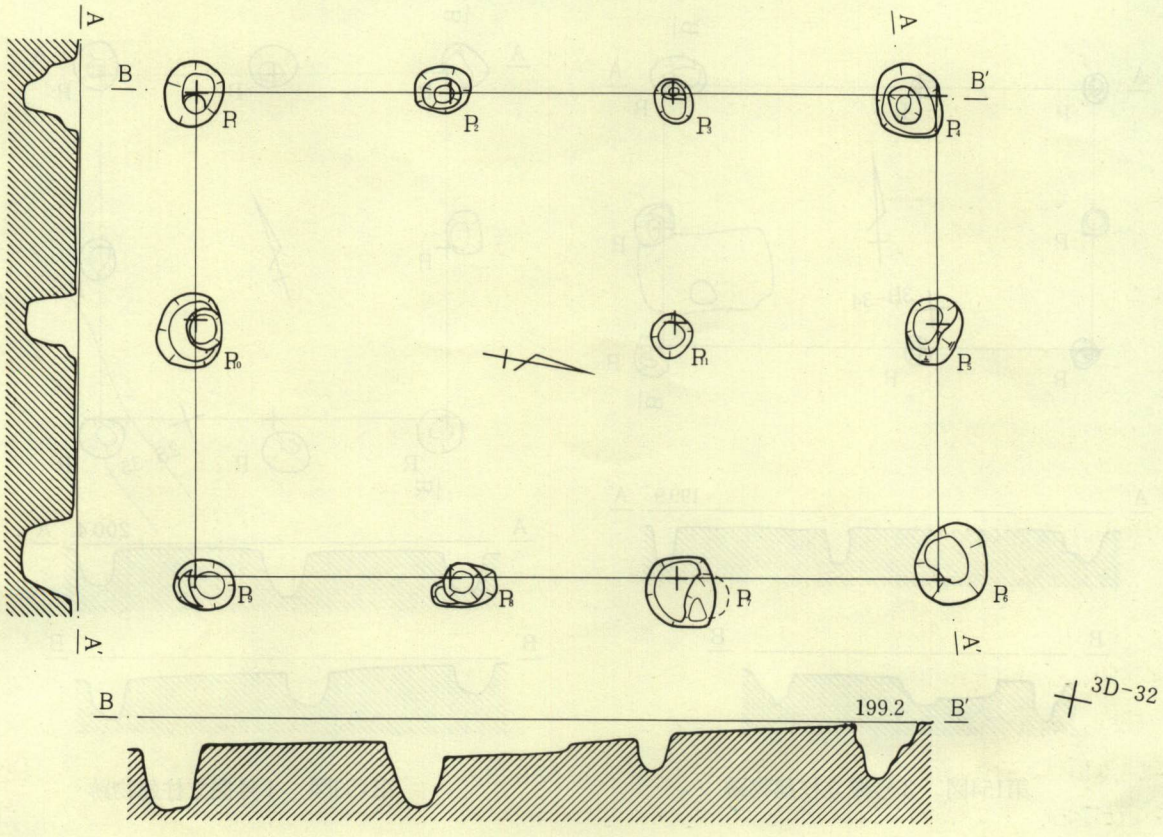
18号掘立柱建物跡（第168図）

2区D・E－30・31G、E－32G、F－31・32Gに検出された。南方に27号住居跡、北方に19・20号掘立柱建物跡等が位置する。

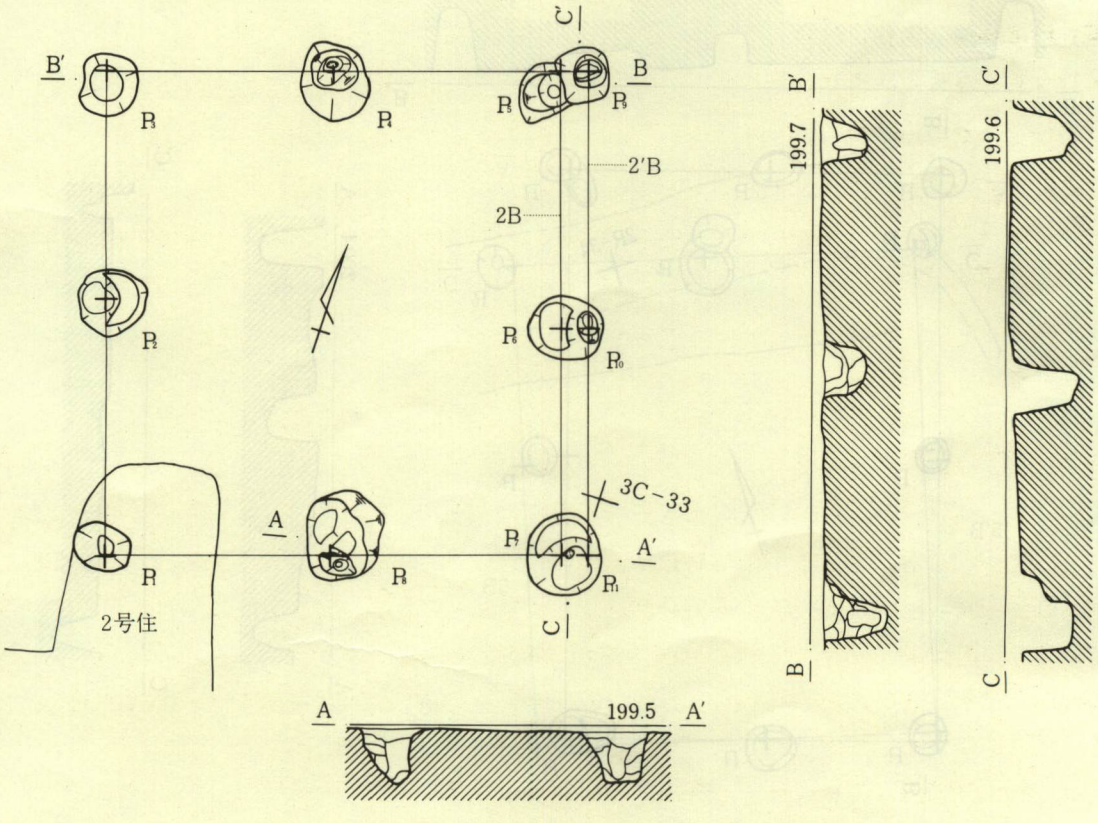
棟方向（桁行方向）は東西でN－82°－Eを示す。構造は、身舎が桁行（P_1～P_{10}～P_8・P_3～P_6）3間、梁行（P_1～P_3・P_6～P_8）2間で東に庇（P_{12}～P_{14}）を構える。

柱間寸法は身舎の桁行9尺－9尺－9尺で梁行8尺－8尺である。庇は梁行の東列より7尺の間隔で設けている。規模は身舎が桁行8.10m、梁行4.80mで面積38.88cm。庇を含めると総面積48.96cm。P_{11}は間仕切の柱穴であろうか。柱穴は身舎部分が1辺が90cm～1.3mの方形を基調とし、庇部分は円形を基調としている。

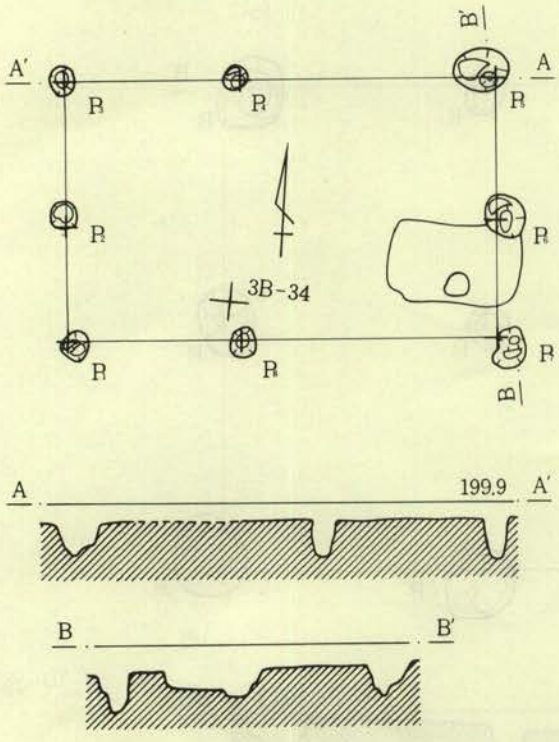
遺物は、P_2より須恵器の高台付碗の底部片(20)が出土した。



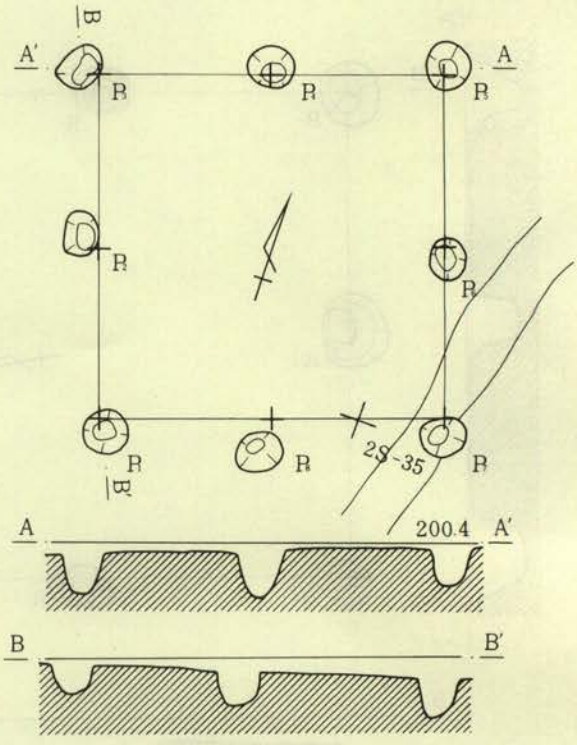
第152図　1号掘立柱建物跡



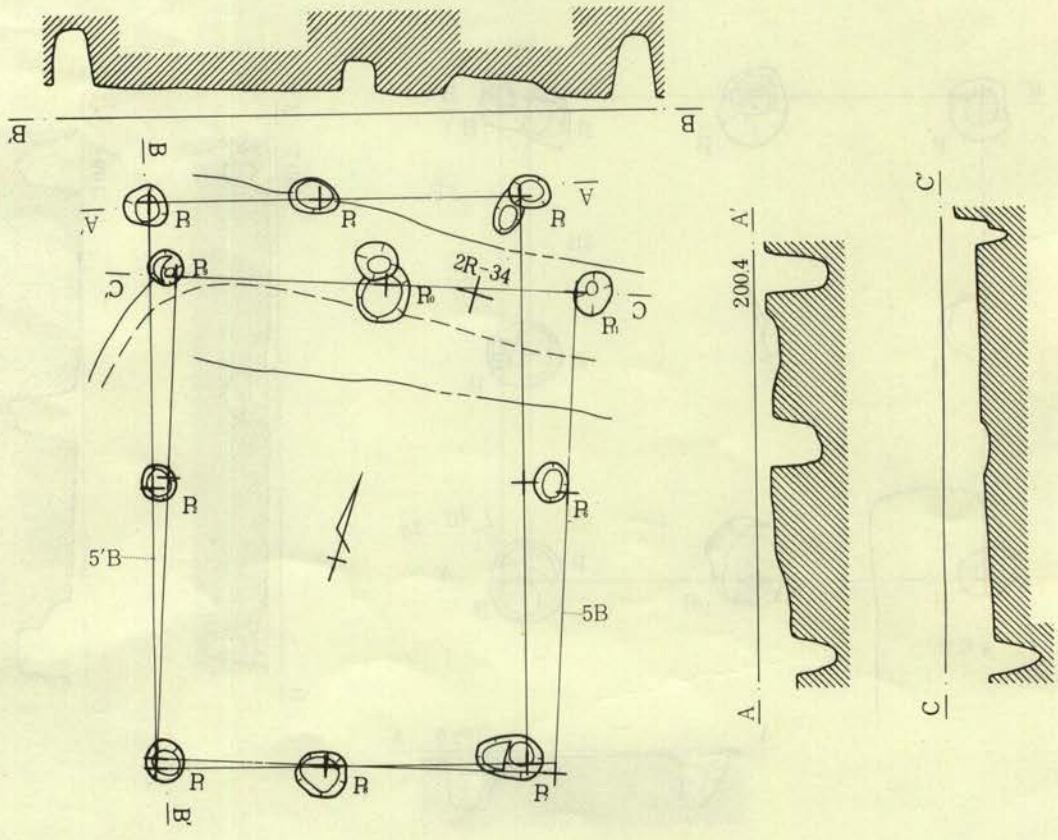
第153図　2号掘立柱建物跡



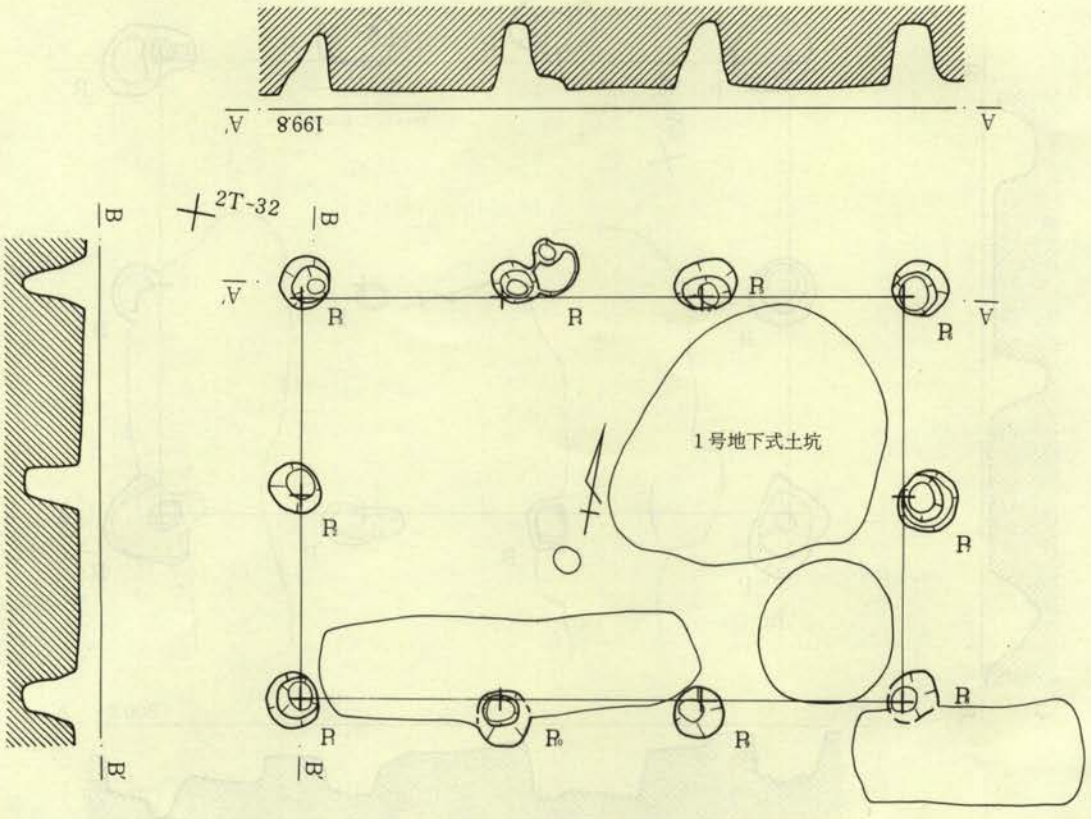
第154図　3号掘立柱建物跡



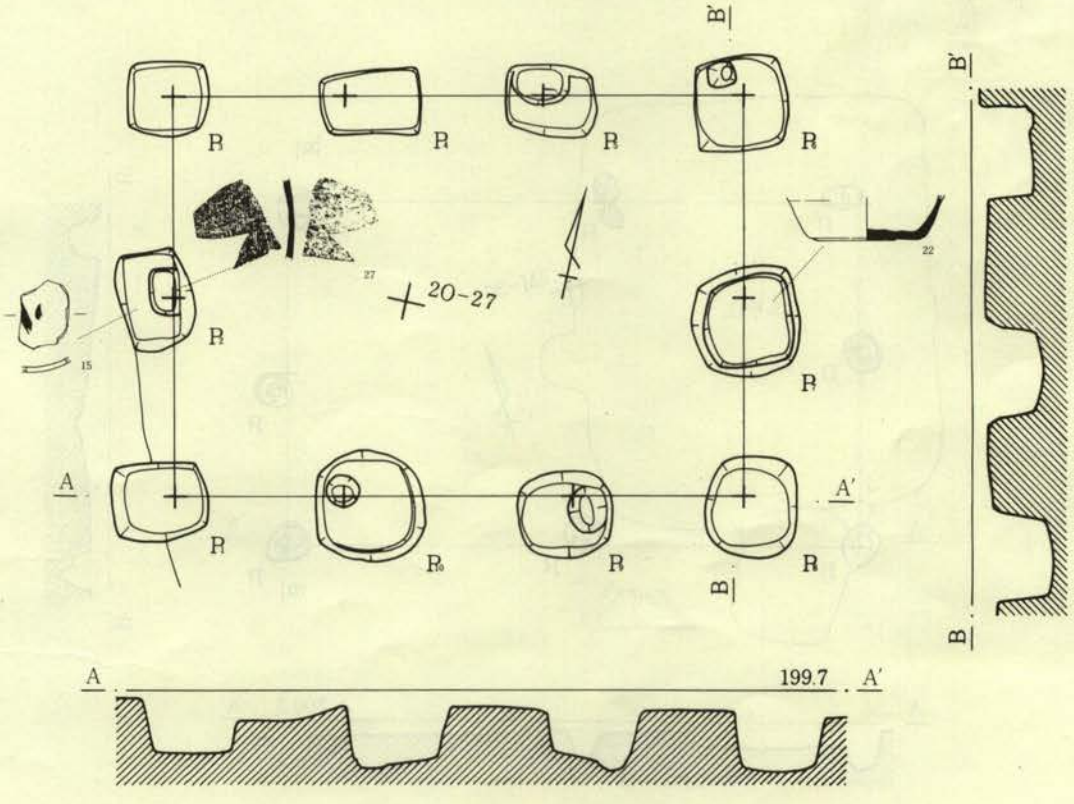
第155図　4号掘立柱建物跡



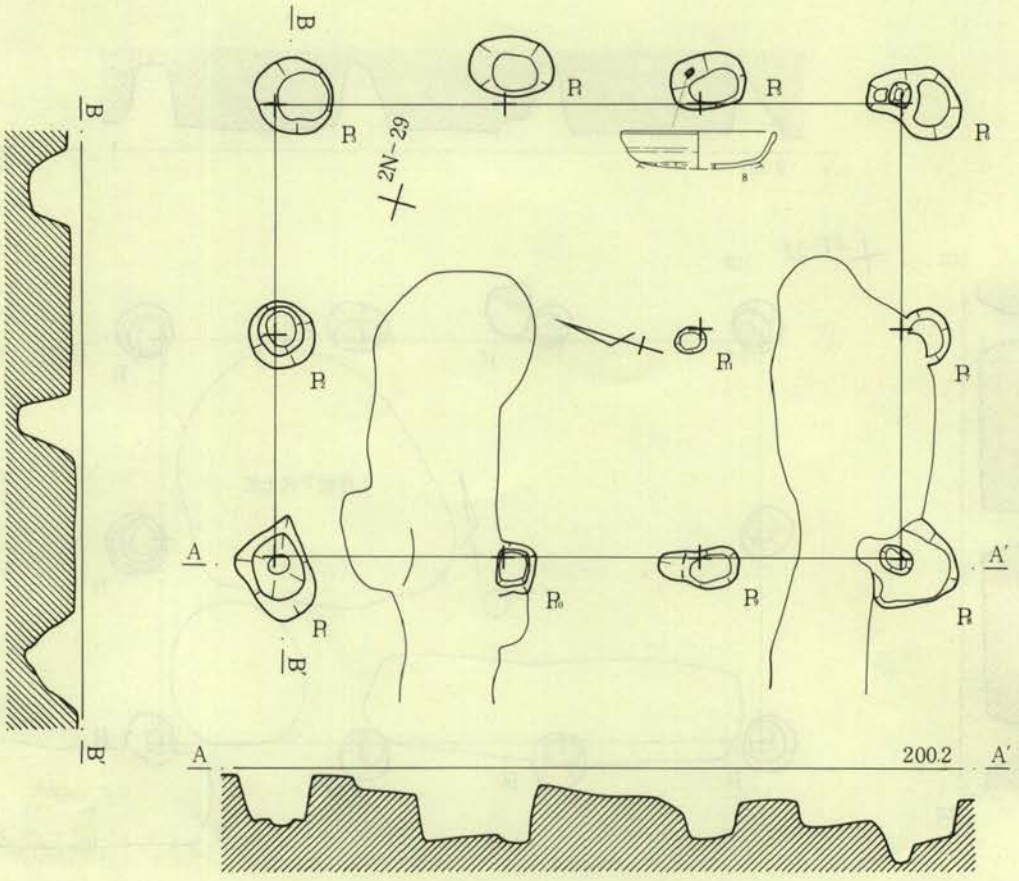
第156図　5・5'号掘立柱建物跡



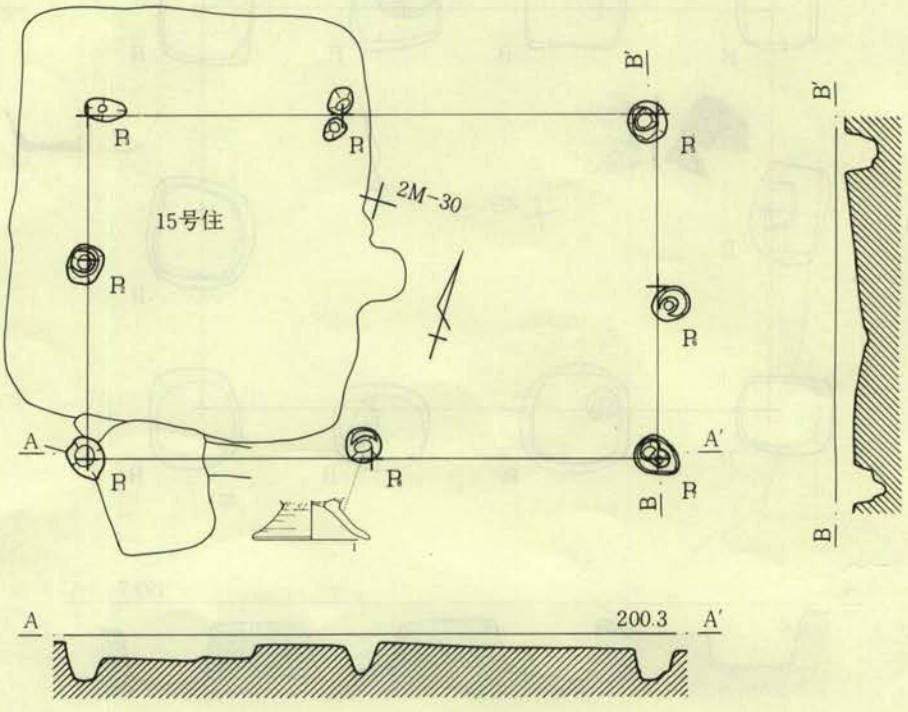
第157図　6号掘立柱建物跡



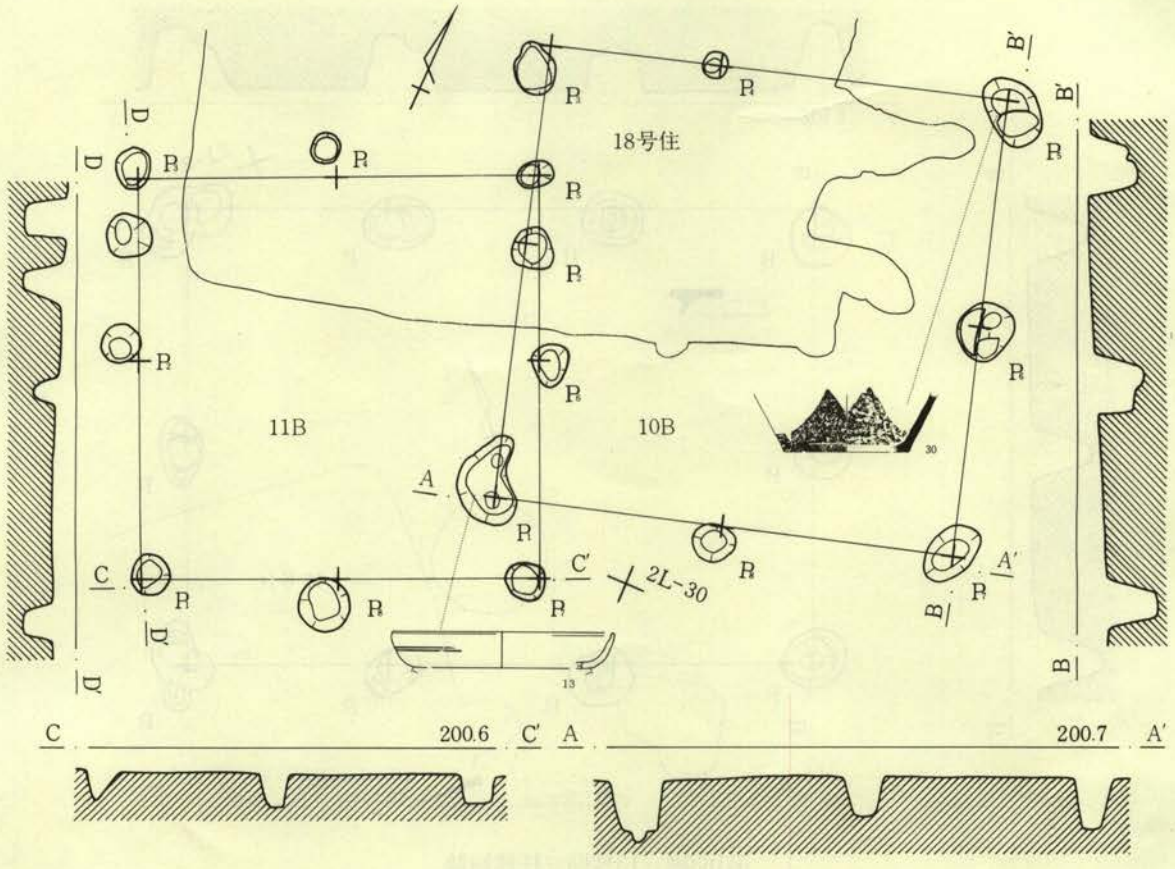
第158図　7号掘立柱建物跡



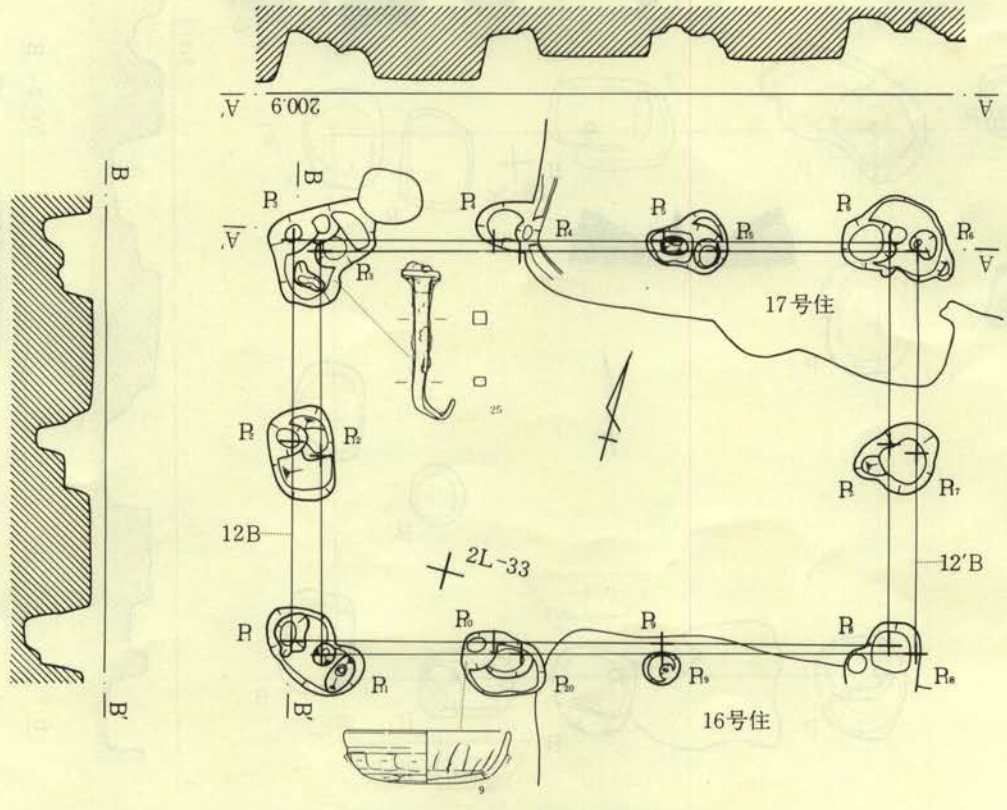
第159図　8号掘立柱建物跡



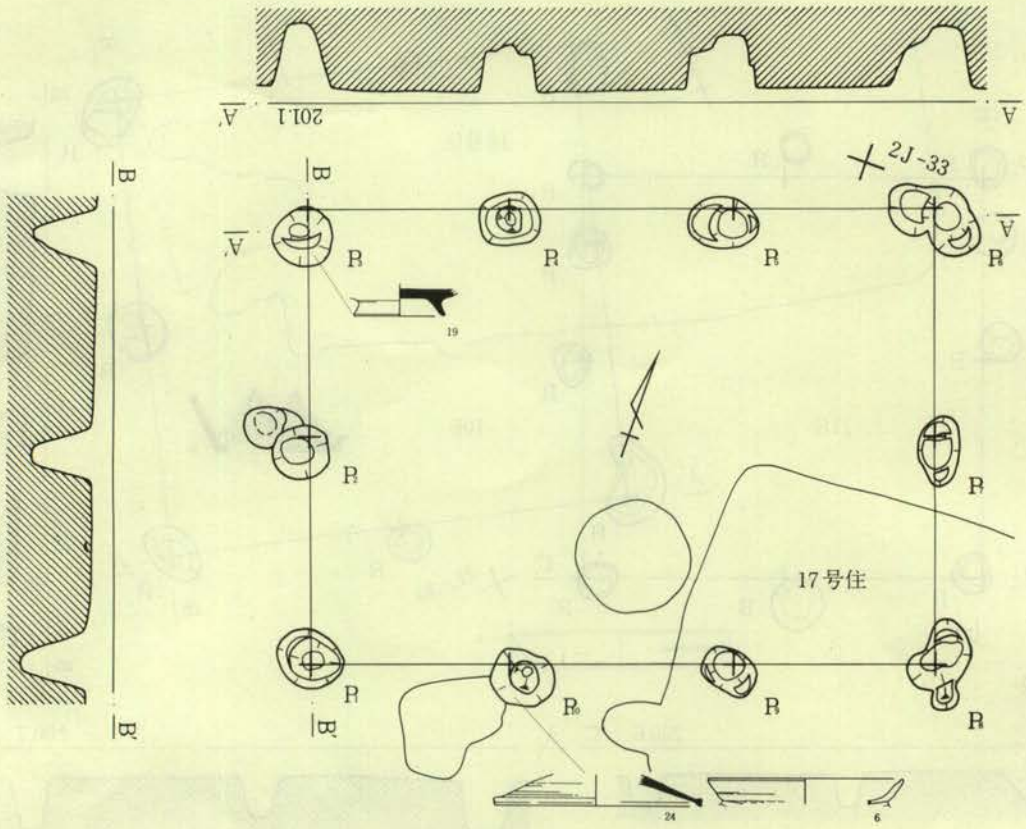
第160図　9号掘立柱建物跡



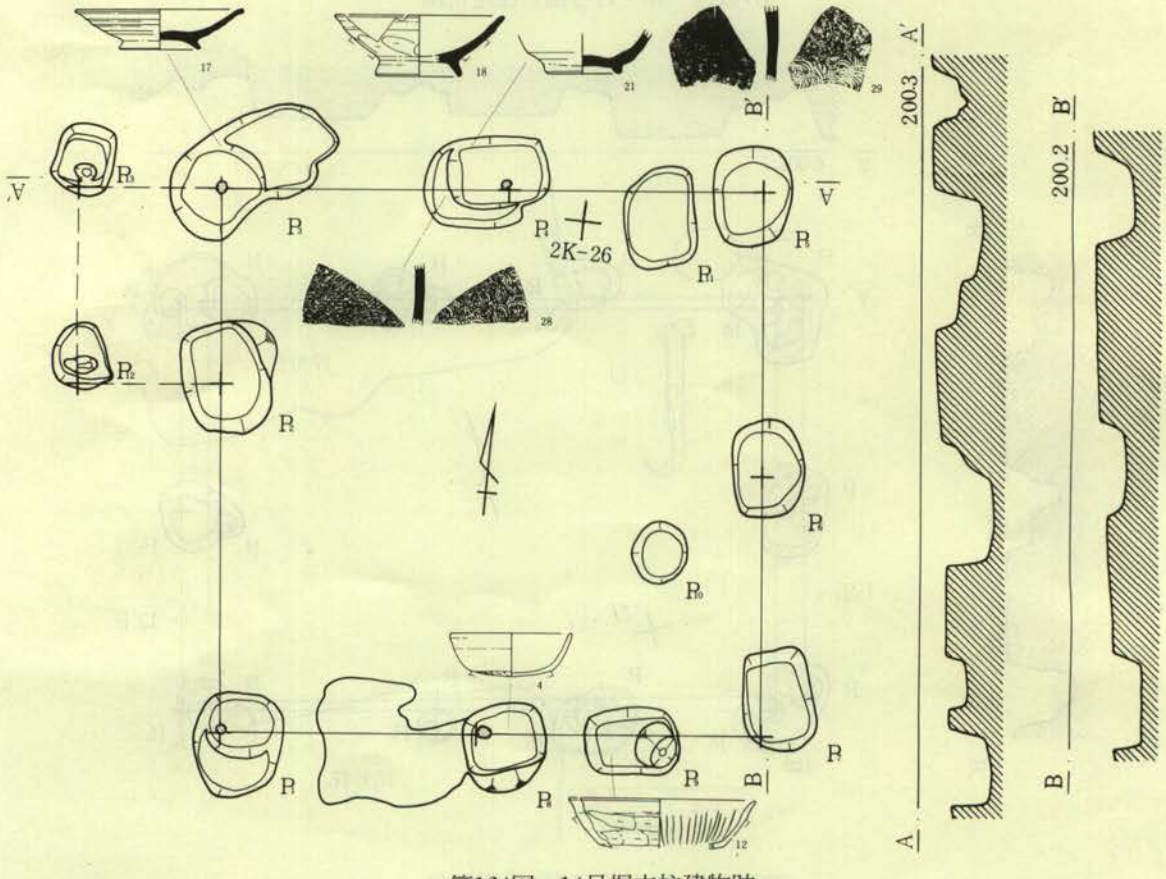
第161図　10・11号掘立柱建物跡



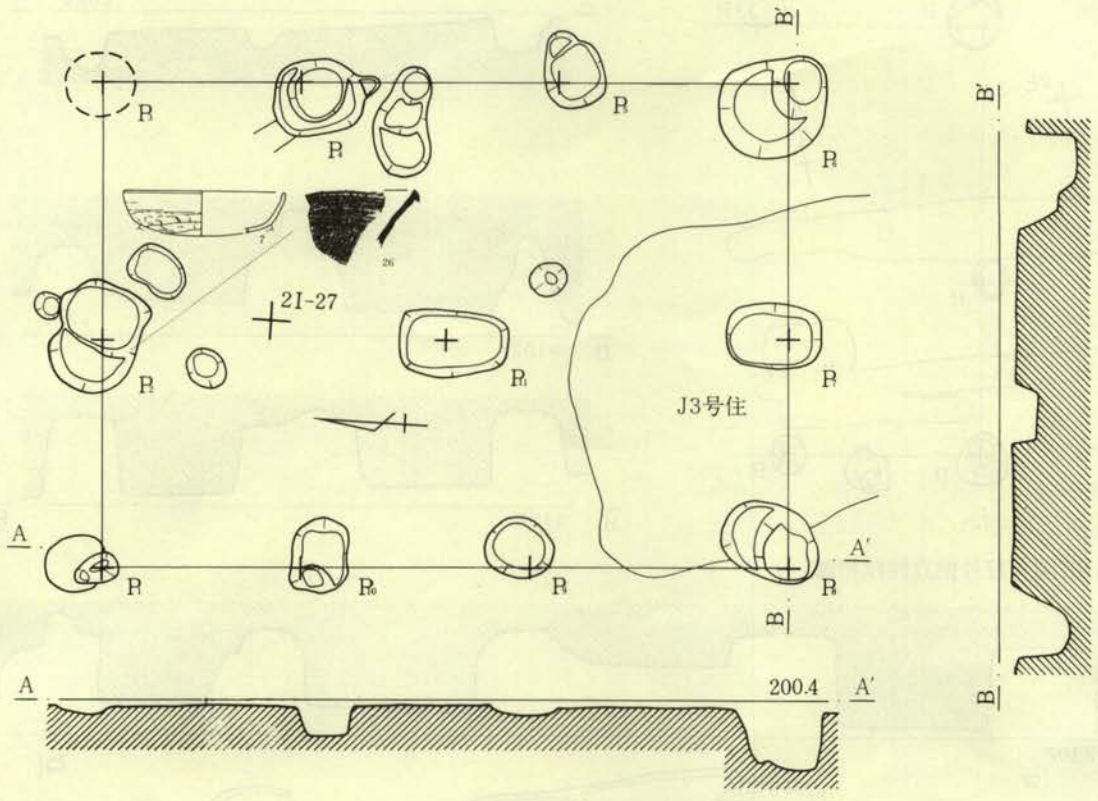
第162図　12・12'号掘立柱建物跡



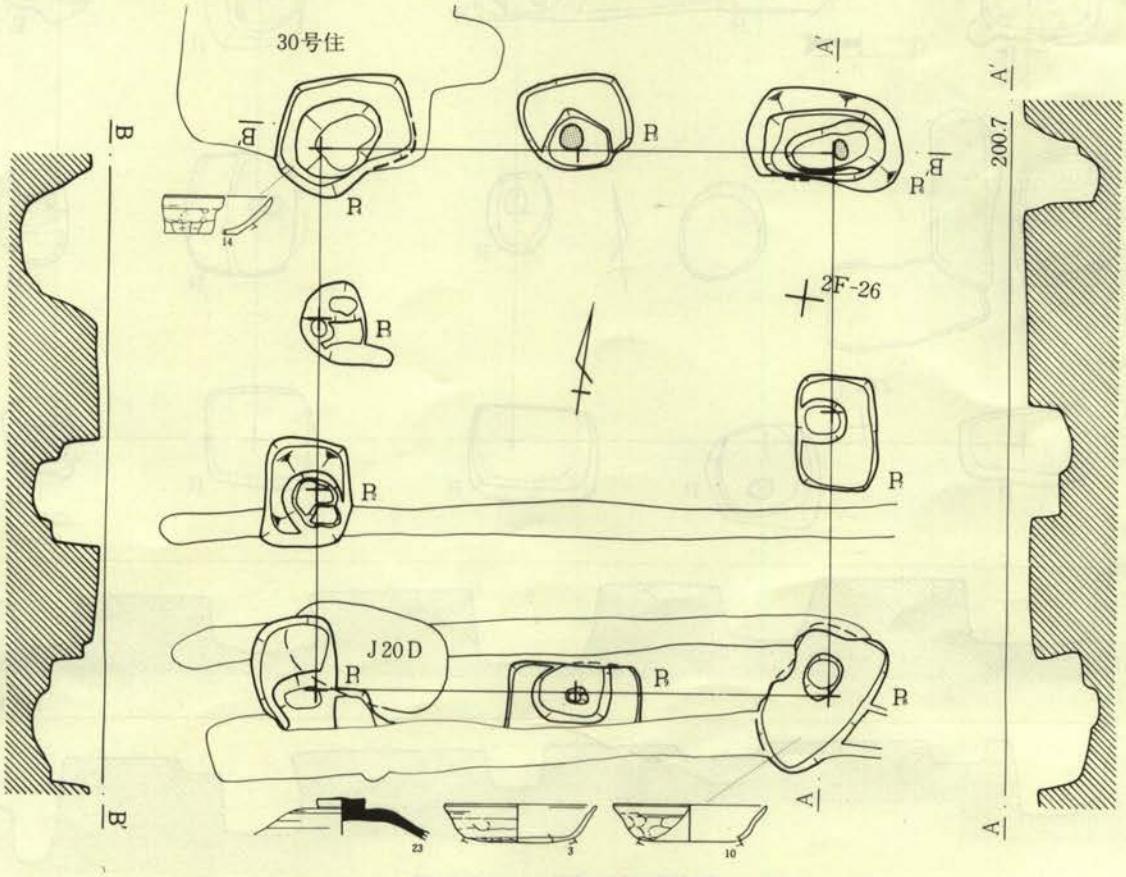
第163図　13号掘立柱建物跡



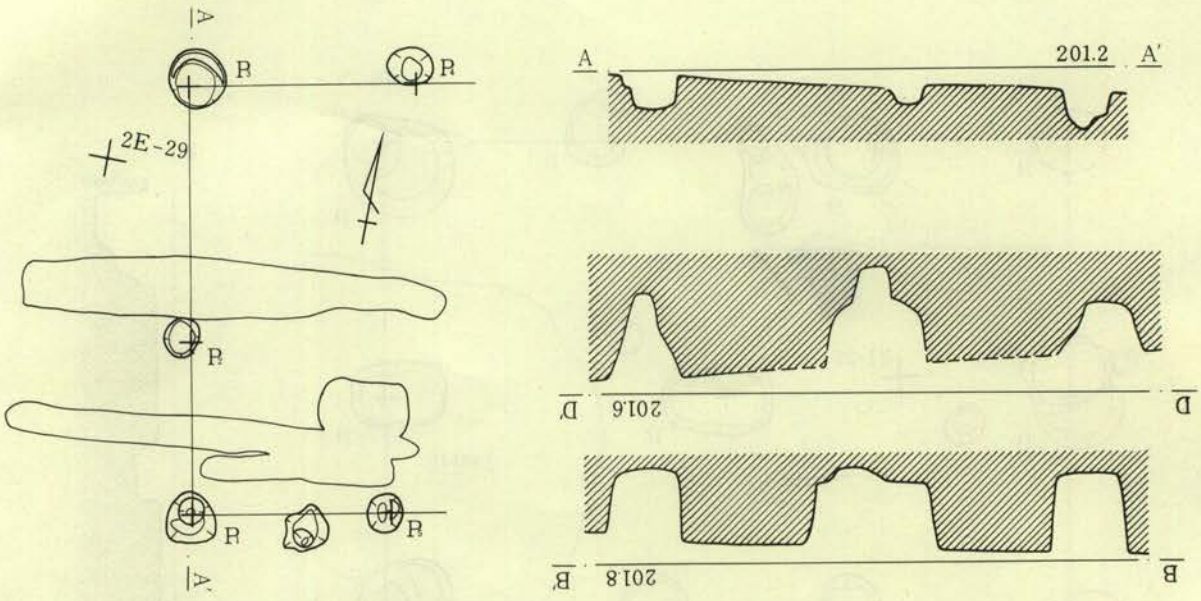
第164図　14号掘立柱建物跡



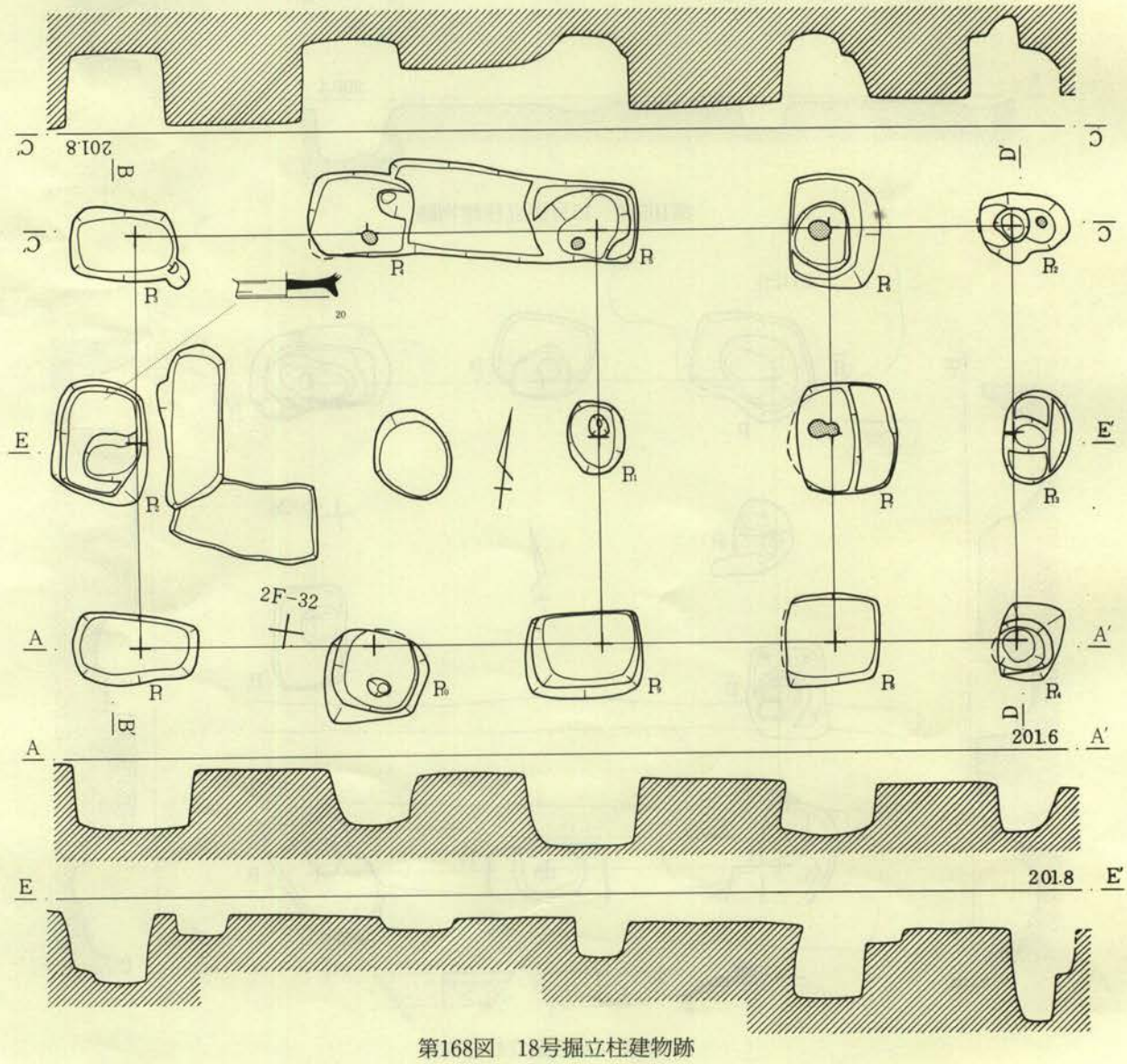
第165図　15号掘立柱建物跡



第166図　16号掘立柱建物跡



第167図　17号掘立柱建物跡



第168図　18号掘立柱建物跡

19号掘立柱建物跡（第169図）

2区B・C－30・31G、D－31Gに検出された。20号掘立柱建物跡と重複し、南方に18号掘立柱建物跡、北西に26号掘立柱建物跡が位置する。

棟方向(P_1～P_3)は南北と考えられ、N－30°－Wを示す。構造は桁行2間・梁行2間。柱間寸法は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)の東・西列とも南より8.5尺－8.5尺、梁行(P_3～P_5・P_7～P_1)の南・北列ともに東より8.5尺－8.5尺である。規模は桁行と梁行5.10mで面積26.01㎡。柱穴は円形を基調とする。

20号掘立柱建物跡（第169図）

2区B・C－30・31Gに検出された。南西部分で19号、西列で21号掘立柱建物跡と重複する。棟方向(P_1～P_3)は南北でN－15°－Wを示す。構造は桁行2間・梁行2間。

柱間寸法は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)の東・西列とも南より8.5尺－8.5尺、梁行(P_3～P_5・P_7～P_1)の南・北列とも東より7尺－10尺である。規模は桁行と梁行5.10mで面積26.01㎡。柱穴は円形を基調とする。

21号掘立柱建物跡（第170図）

2区A－29G、B－29・30Gに検出された。P_1が20号掘立柱建物跡のP_6と重複する。棟方向(P_1～P_3)は南北でN－4°－Wを示す。構造は桁行2間・梁行2間。

柱間寸法は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)の東・西列とも南より8.5尺－8.5尺、梁行(P_3～P_5・P_7～P_1)の南列は東より11尺－6尺、北列は東より8.5尺－8.5尺である。規模は桁行と梁行5.10mで面積26.01㎡。柱穴は円形を基調とする。

22号掘立柱建物址（第171図）

2区B・C－26・27Gに検出された。23号掘立柱建物跡と重複し、北方に32号住居跡、南西に31号住居跡が位置する。棟方向(桁行方向)は南北でN－6°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)2間・梁行(P_1－P_8－P_7・P_3～P_5)2間。

柱間寸法は桁行の東西列は8尺－8尺、梁行は北列7尺－7尺で南列は西より8尺－6尺である。規模は桁行4.80m、梁行4.20m、面積20.16㎡。柱穴は円形を基調とする。

23号掘立柱建物跡（第171図）

22号掘立柱建物跡と同様のグリットに検出された。棟方向(桁行方向)は南北でN－13°－Wを示す。構造は桁行(P_1～P_3・P_5～P_7)2間・梁行(P_1－P_8－P_7・P_3～P_5)2間。

柱間寸法は桁行の東・西列ともに6.5尺－6.5尺、梁行は南列が東より5尺－7尺、北列は6尺－6尺である。規模は桁行3.90m、梁行3.60m、面積14.04㎡。柱穴は円形を基調とする。

24号掘立柱建物跡（第172図）

1区Q・R－28・29Gに検出された。北東には34号住居跡、南西には33号住居跡が位置する。棟方向(桁行方向)は東西でN－73°－Eを示す。構造はP_2とP_3が調査区外のために不明であるが桁行2間・梁行2間と考えられる。

柱間寸法は南列(P_1－P_8－P_7)・北列(P_3～P_5)とも7.5尺－7.5尺、梁行は7尺－7尺である。規模は梁

行4.50m、梁行4.20m、面積18.90㎡。柱穴は円形を基調とする。

25号掘立柱建物跡（第173図）

1区P・Q－26Gに検出された。西方には34号住居跡が隣接する。棟方向（桁行方向）は東西でN－80°－Eを示す。構造は桁行（P_1－P_4・P_2－P_3）1間・梁行（P_1－P_2・P_3－P_4）1間。柱間寸法は桁行12尺、梁行8尺。規模は桁行3.60m、梁行2.40m、面積8.64㎡。柱穴は円形を基調とする。

26号掘立柱建物跡（第174図）

2区B・C－32・33Gに検出された。東方に19～21号掘立柱建物跡、西方に27号掘立柱建物跡が位置する。棟方向（桁行方向）は東西でN－88°－Eを示す。構造は桁行（P_1－P_8－P_7・P_3～P_5）2間・梁行（P_1～P_3・P_5～P_6）2間。

柱間寸法は桁行の南・北列とも8.5尺－8.5尺、梁行の東・西列とも8尺－8尺である。規模は桁行方5.10m、梁行4.80m、面積24.48㎡。柱穴は円形を基調とする。

27号掘立柱建物跡（第175図）

2区C・D－34・35Gに検出された。その大半が調査区外であり、明確を欠く。棟方向（P_1～P_3）はN－13°－Wを示す。構造は桁行・梁行2間と考えられる。

P_1～P_3の柱間寸法は8.5尺－8.5尺である。P_1～P_3は5.10mを測る。推察される規模は桁行5.10m、梁行5.10mで面積26.01㎡。柱穴は円形を基調とする。

28号掘立柱建物跡（第176図）

2区F・G－33・34Gに検出された。南方で29、30号掘立柱建物跡と重複し、東方に27号住居跡が位置する。棟方向（桁行方向）は南北でN－10°－Wを示す。構造は桁行（P_1～P_3・P_5～P_7）2間・梁行（P_3～P_5・P_1－P_8－P_7）2間。

柱間寸法は桁行の東・西列が9尺－9尺、梁行の南列は東より7尺－10尺、北列は東より8.5尺－8.5尺である。規模は桁行5.40m、梁行5.10m、面積27.54㎡。柱穴は円形を基調とする。

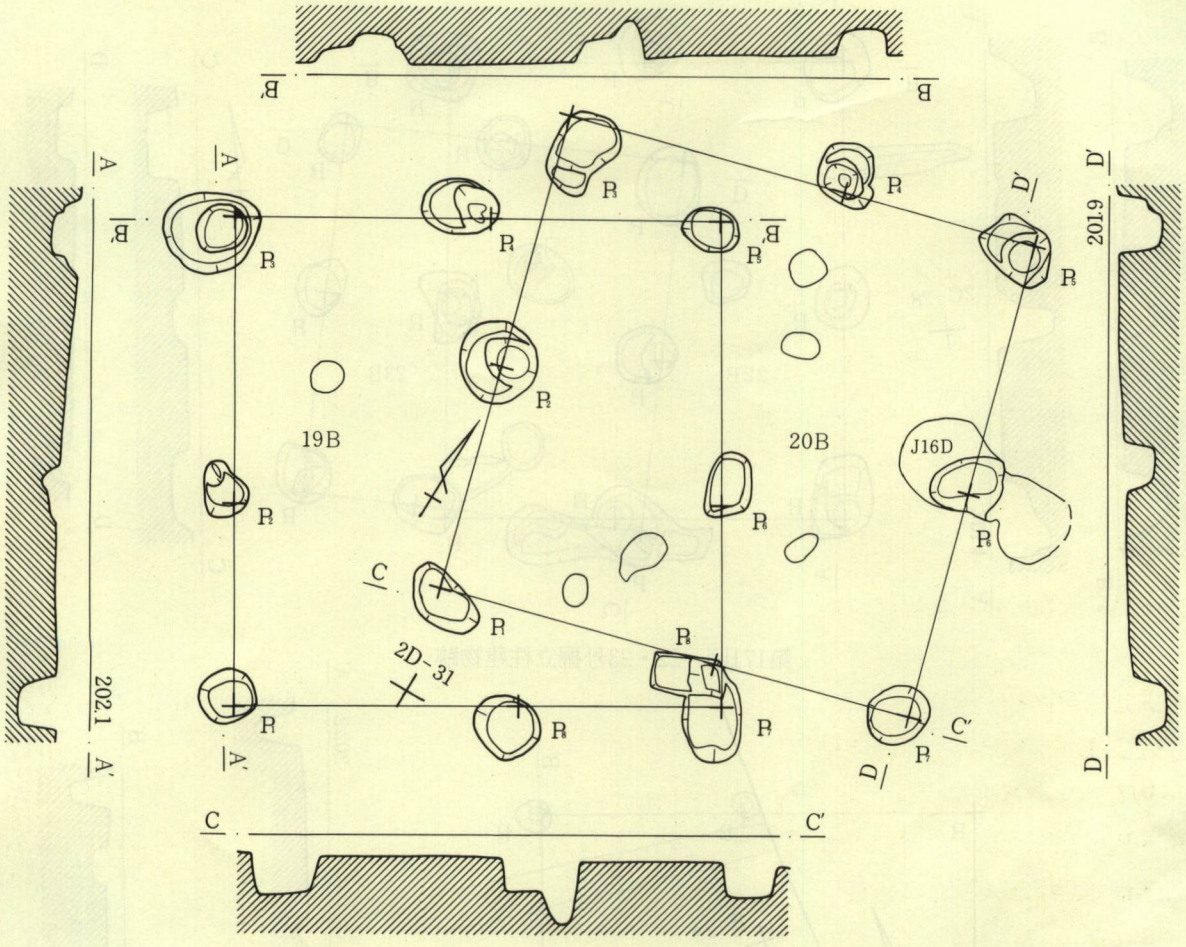
29号掘立柱建物跡（第177図）

2区G・H・I－34・35Gに検出された。28、30号掘立柱穴建物跡と重複し、南方に26号住居跡が位置する。棟方向（桁行方向）は南北でN－15°－Wを示す。

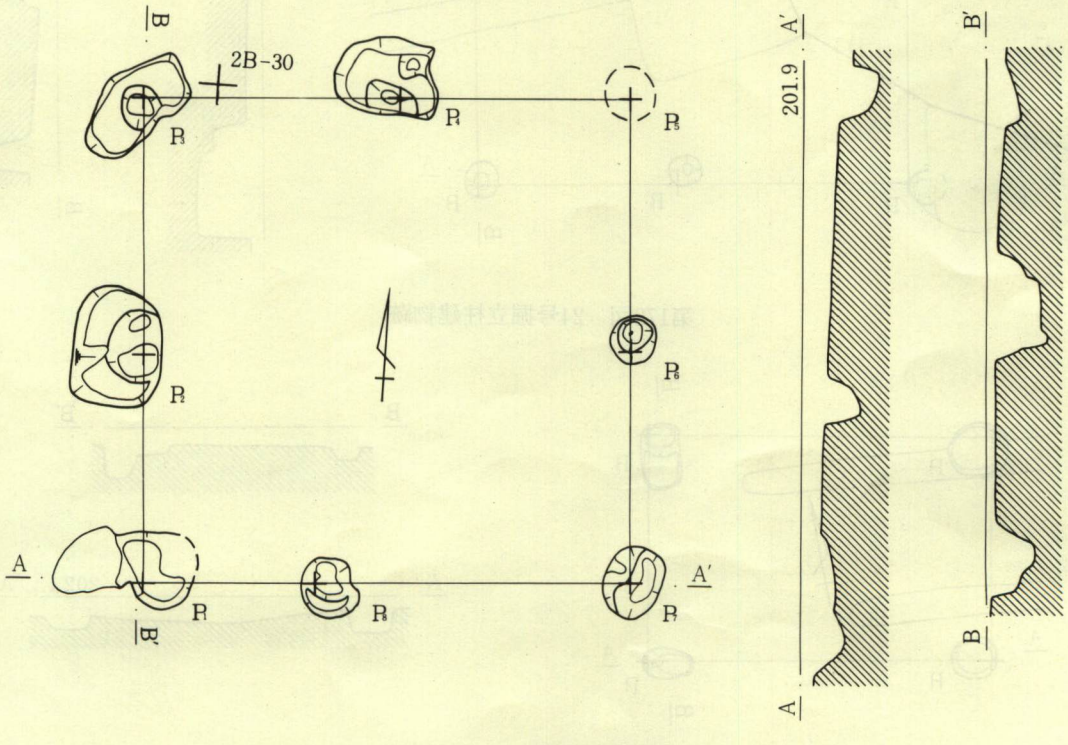
構造は身舎が桁行（P_3～P_7・P_9～P_{12}－P_1）4間、梁行（P_1～P_3・P_7～P_9）2間で東方に5間（P_{14}～P_{19}）と南方に2間（P_{19}～P_{21}）で身舎より5尺の距離を隔てて庇を設けている。

身舎の柱間寸法は桁行の東・西列が6尺－6尺－6尺－6尺、梁行の南北列は6.5尺－6.5尺である。P_{13}は間仕切の柱穴であろうか。規模は桁行7.20m、梁行3.90m、面積28.08㎡。庇を含む規模は桁行8.70m、梁行5.40m、総面積46.98㎡。柱穴は円形を基調とする。

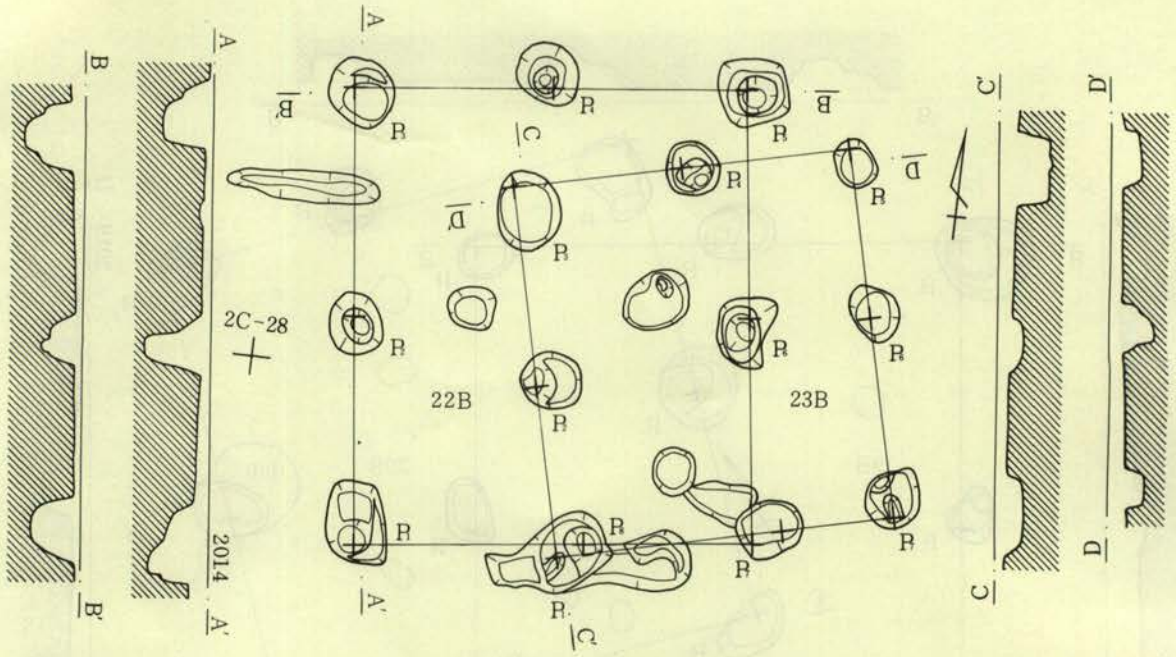
遺物は、P_3より暗文を施す土師器の坏片⑯、P_7より土師器の坏片（2・5）が2点出土した。



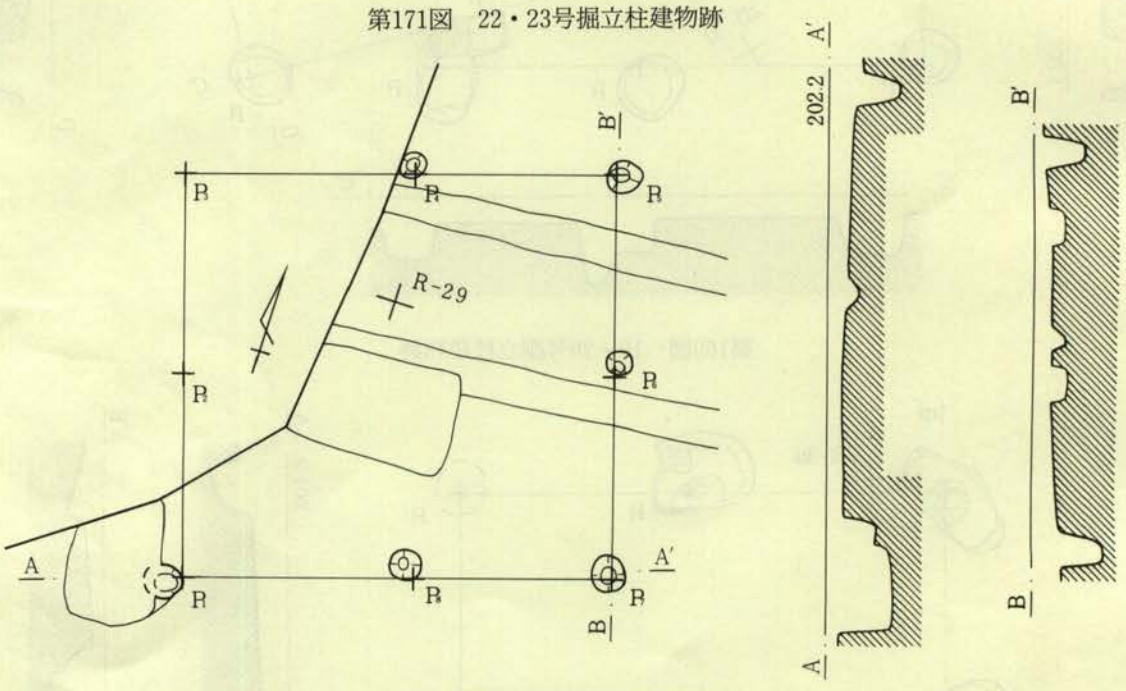
第169図　19・20号掘立柱建物跡



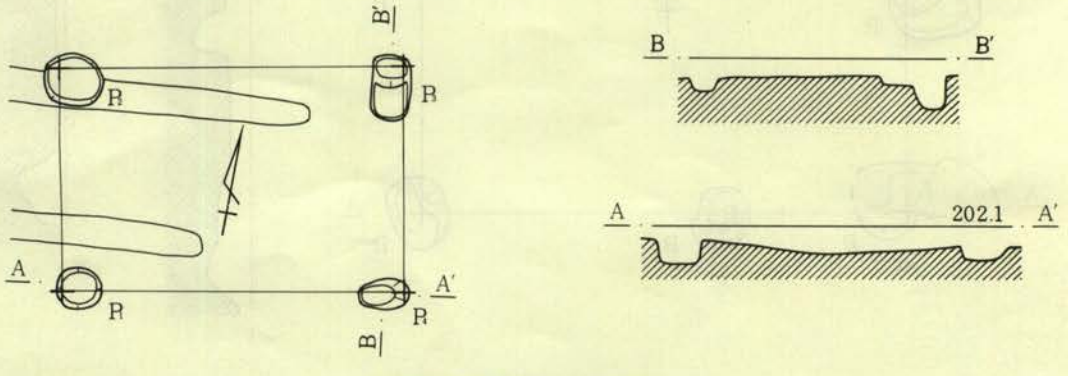
第170図　21号掘立柱建物跡



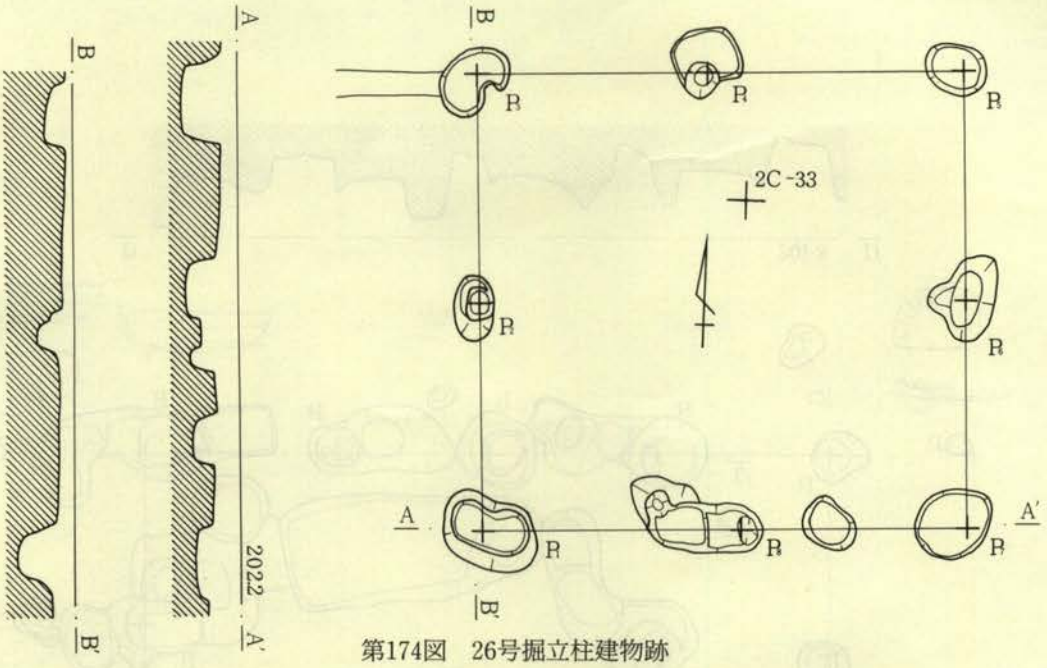
第171図　22・23号掘立柱建物跡



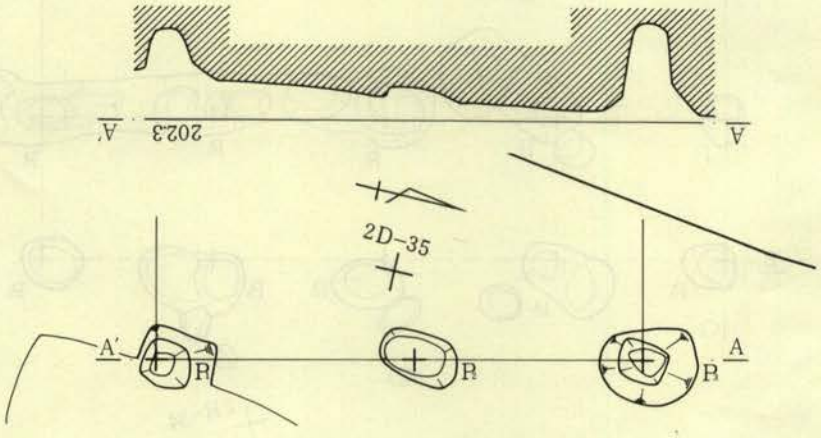
第172図　24号掘立柱建物跡



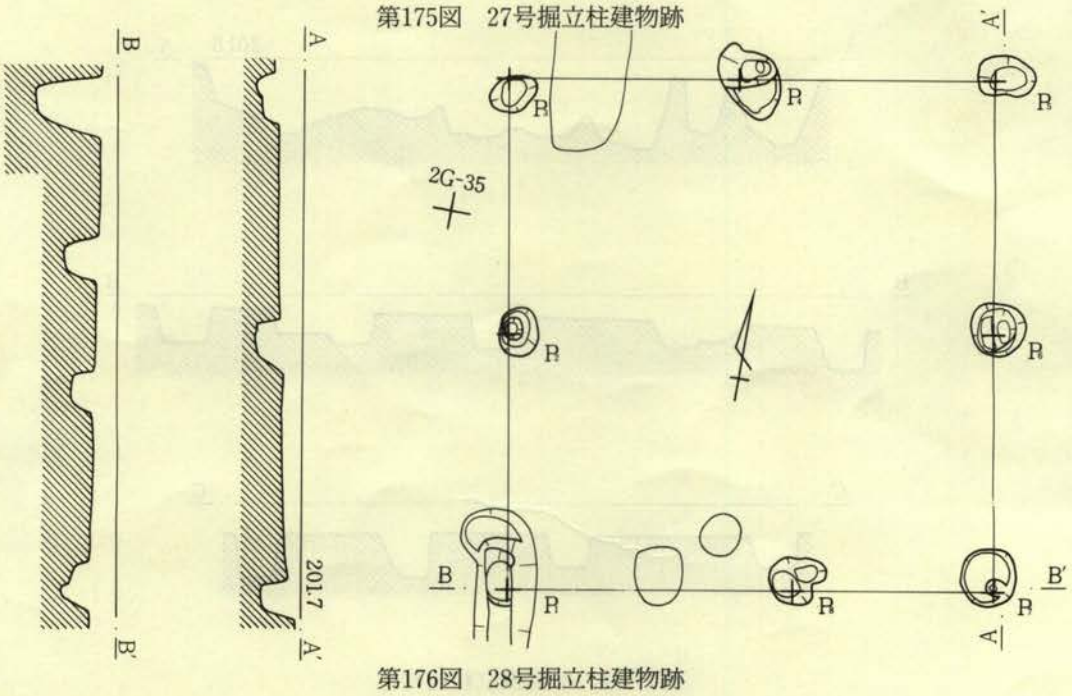
第173図　25号掘立柱建物跡



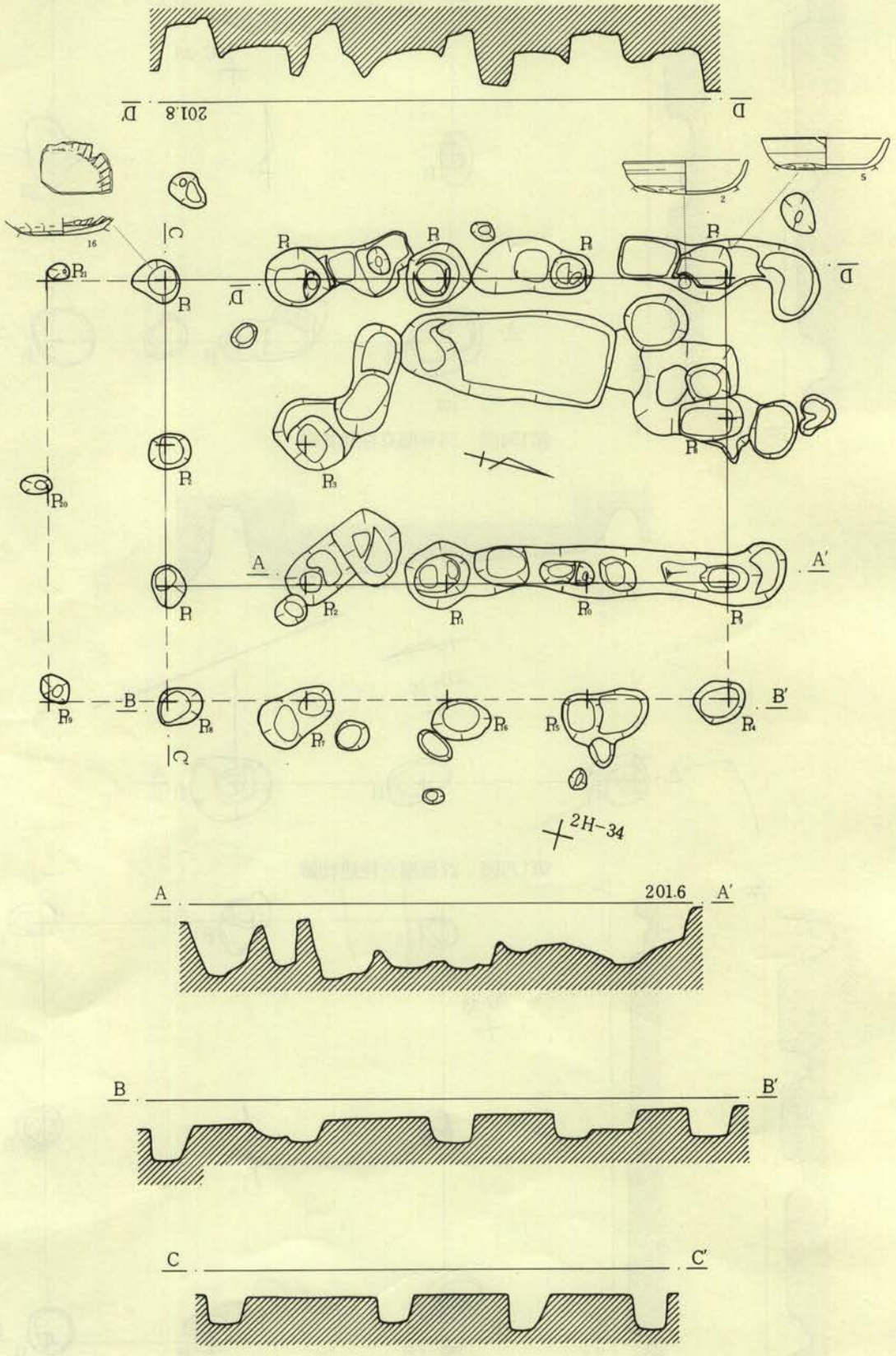
第174図　26号掘立柱建物跡



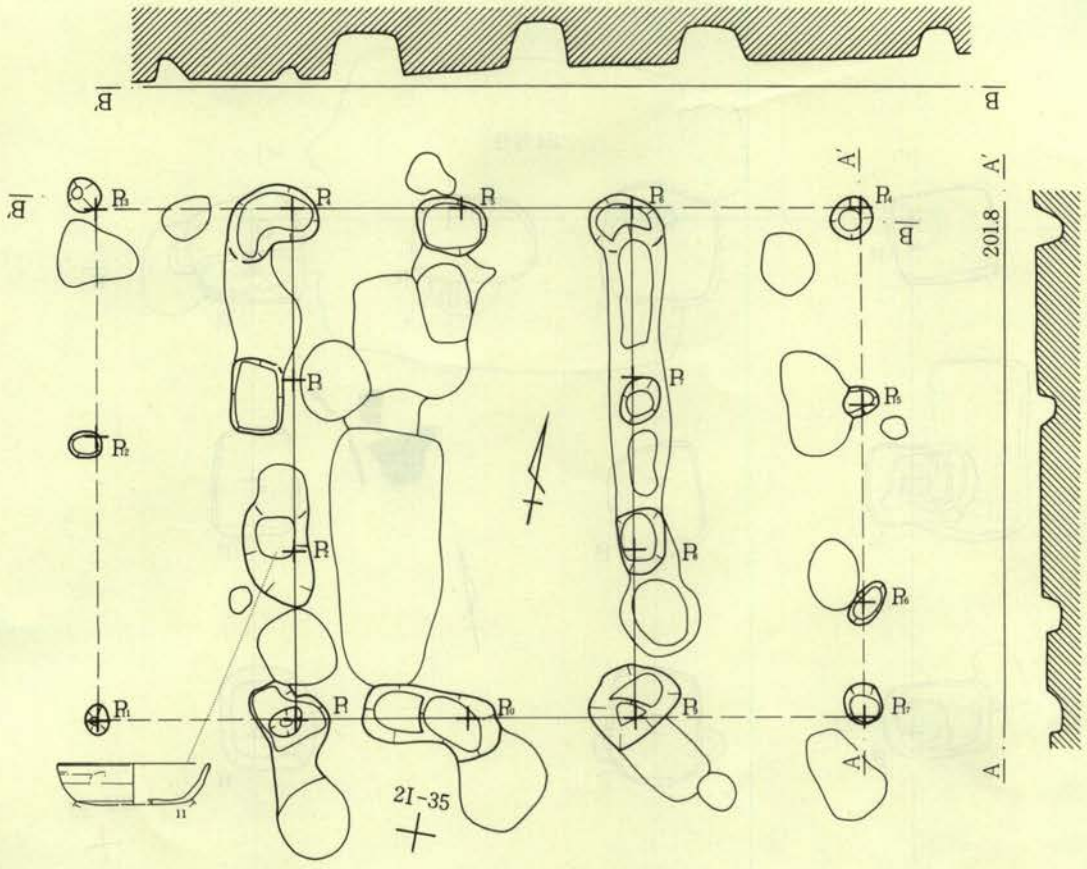
第175図　27号掘立柱建物跡



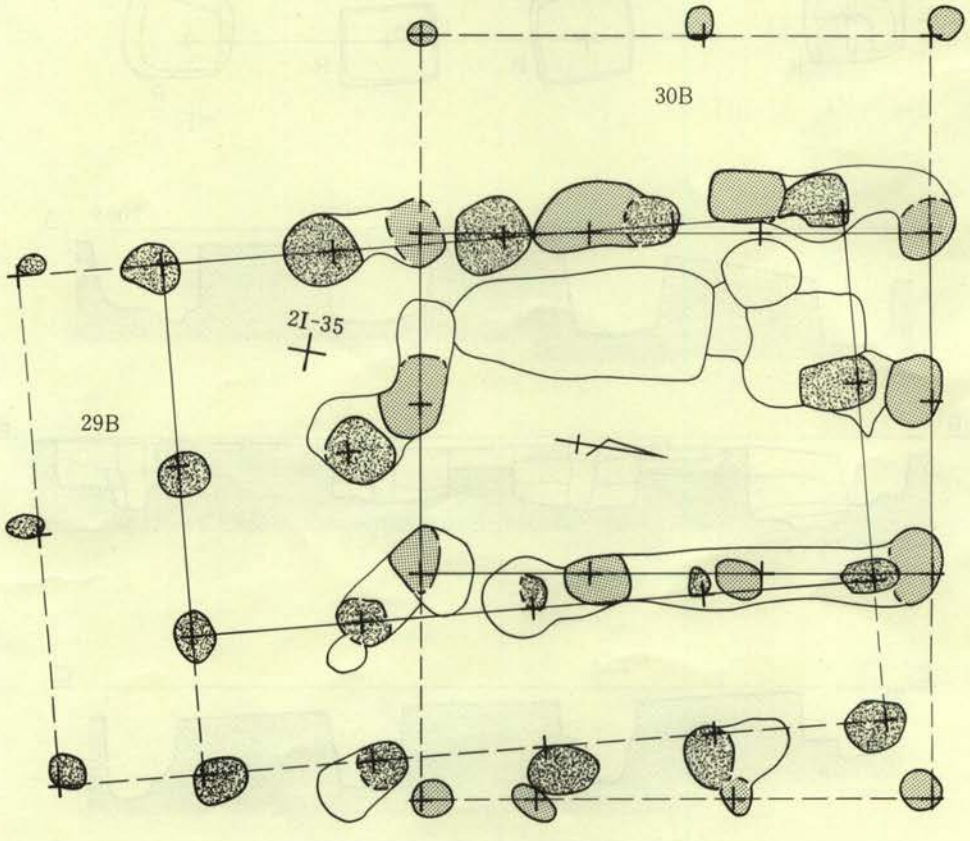
第176図　28号掘立柱建物跡



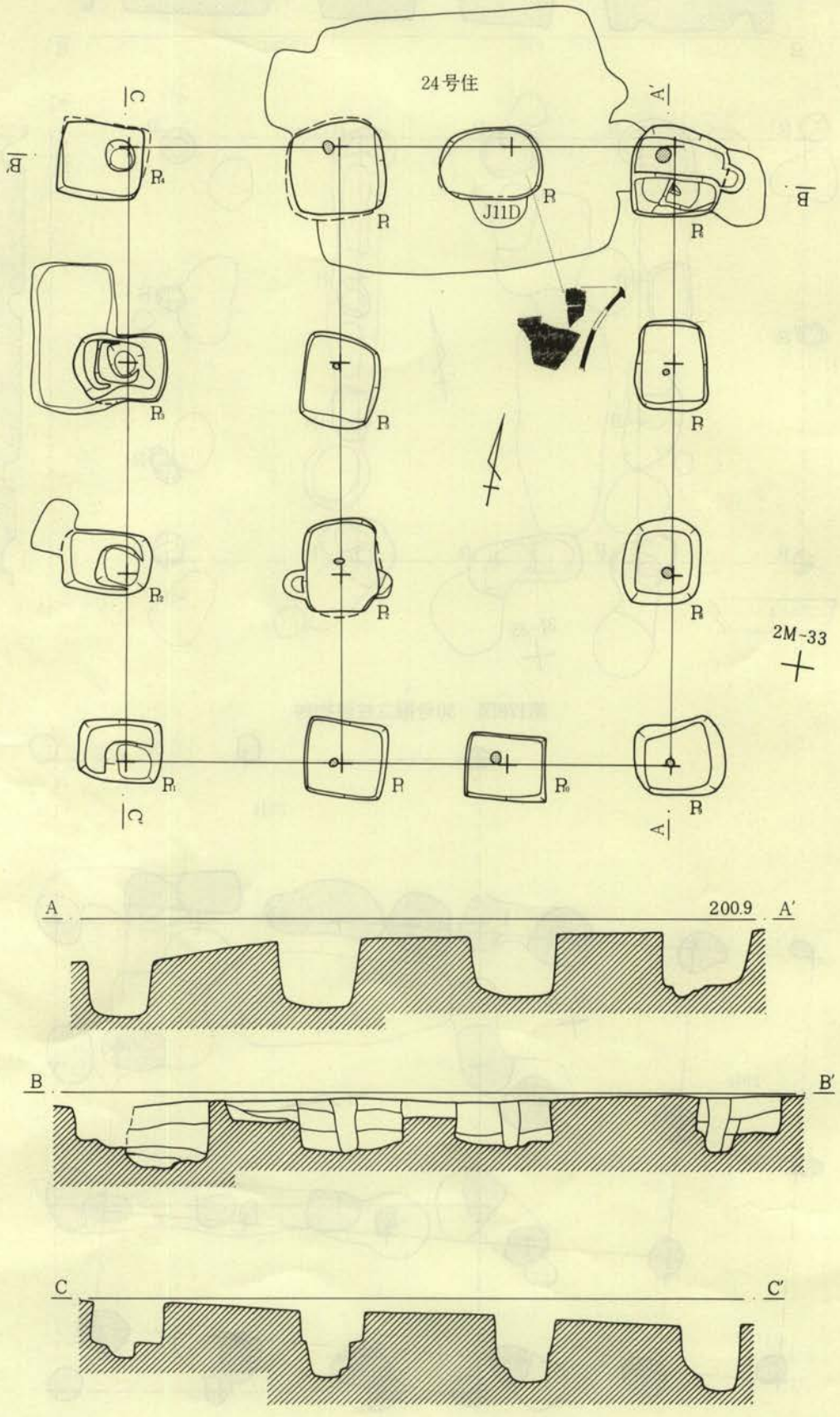
第177図　29号掘立柱建物跡



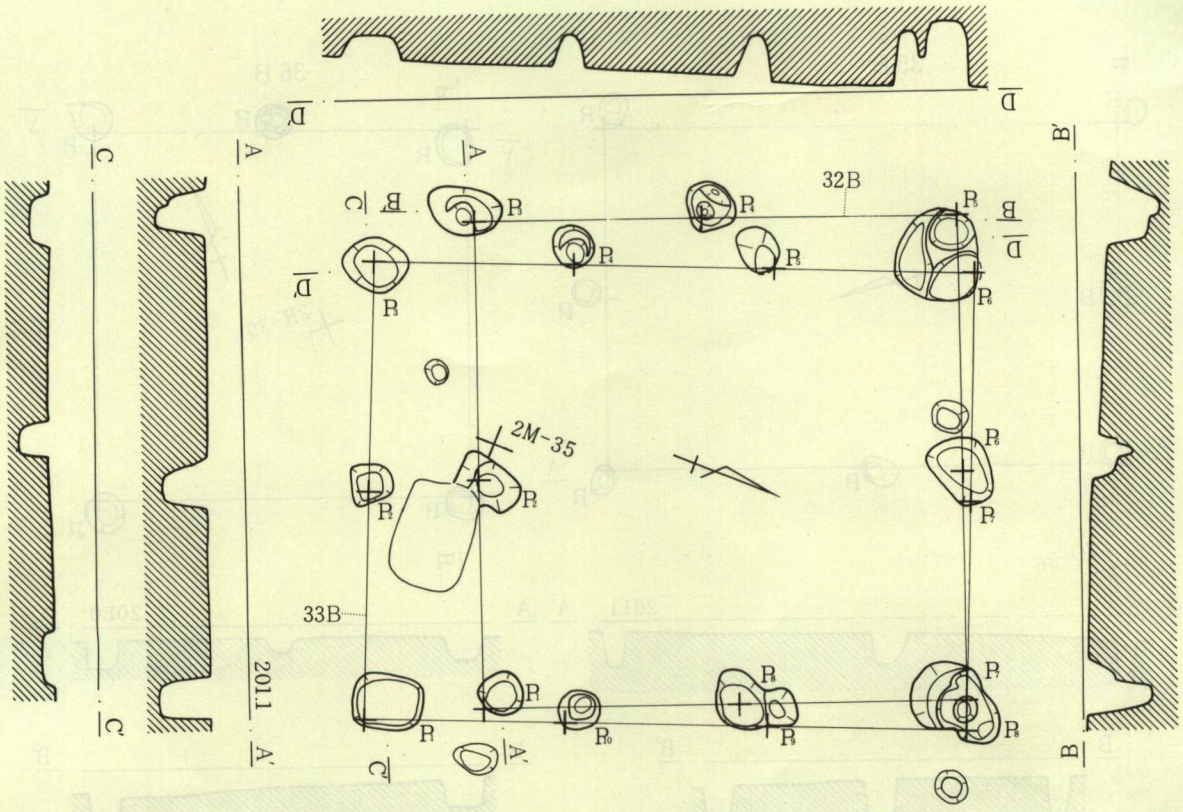
第178図　30号掘立柱建物跡



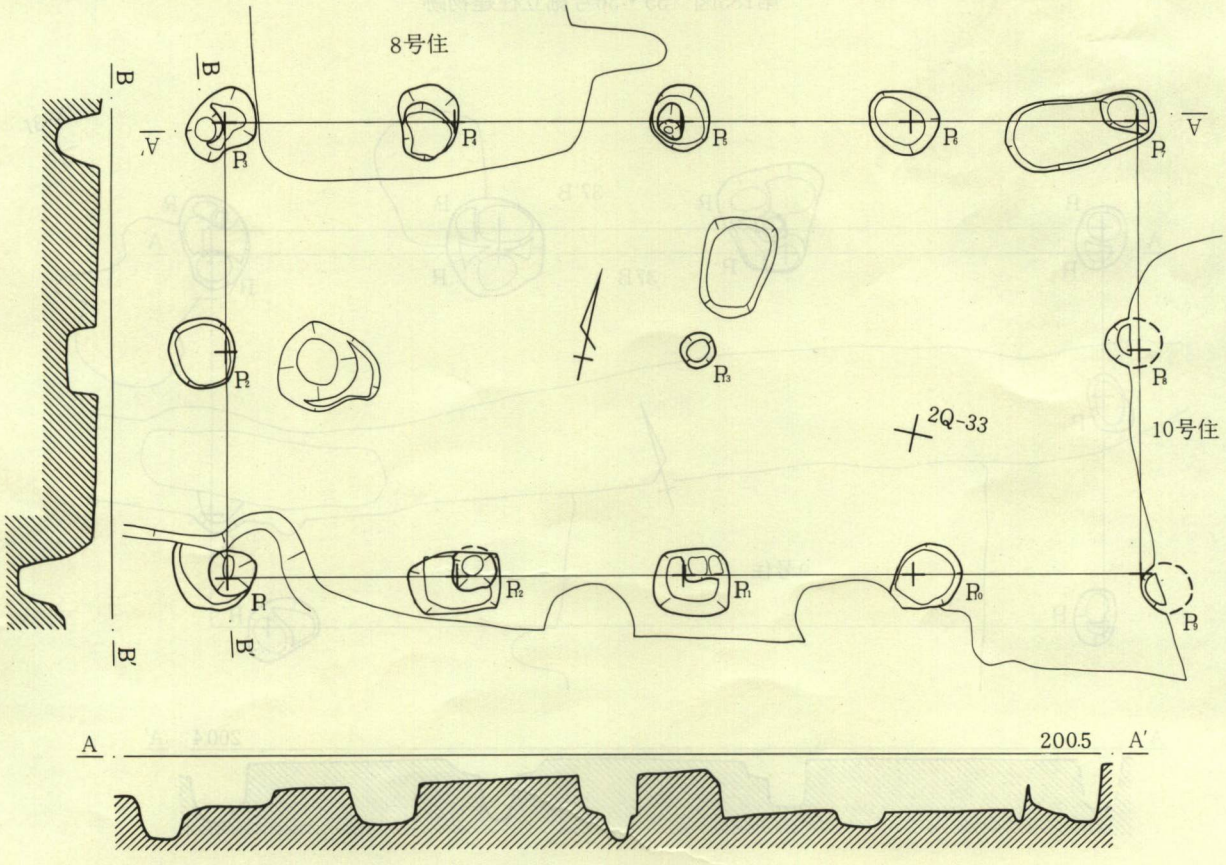
第179図　29・30号掘立柱建物跡模式図



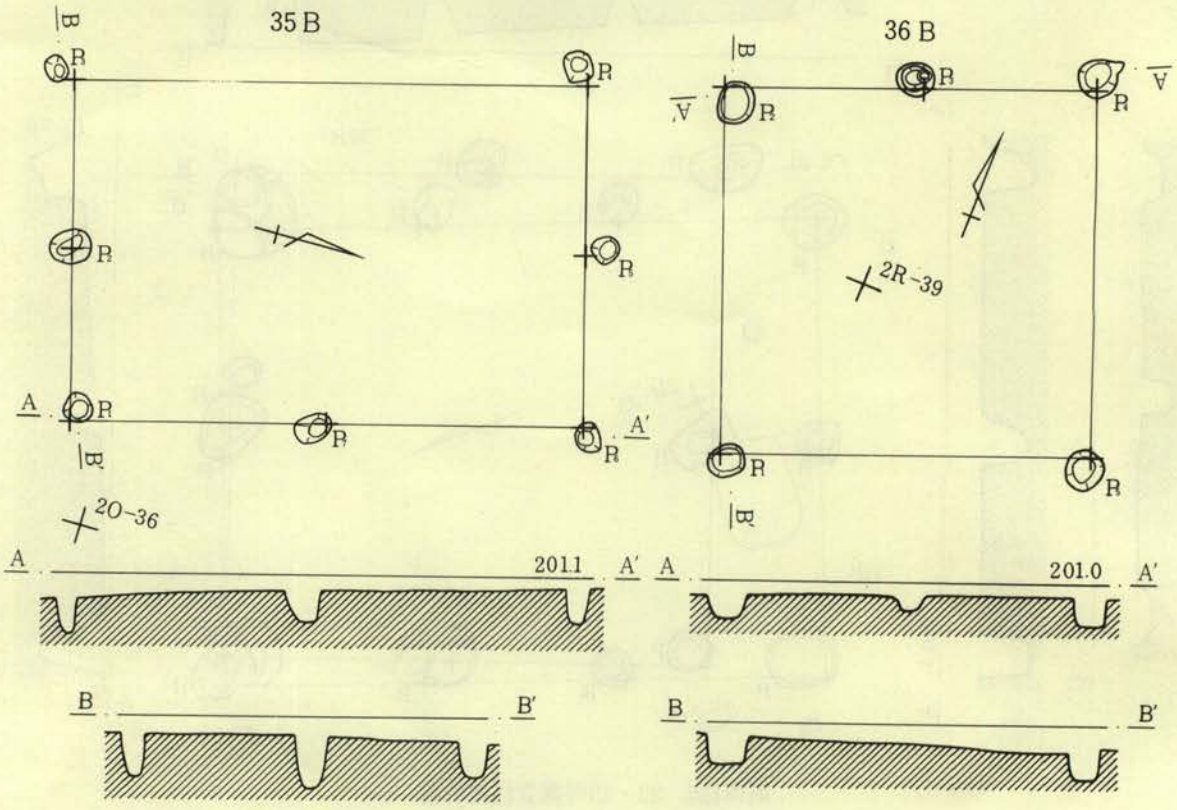
第180図　31号掘立柱建物跡



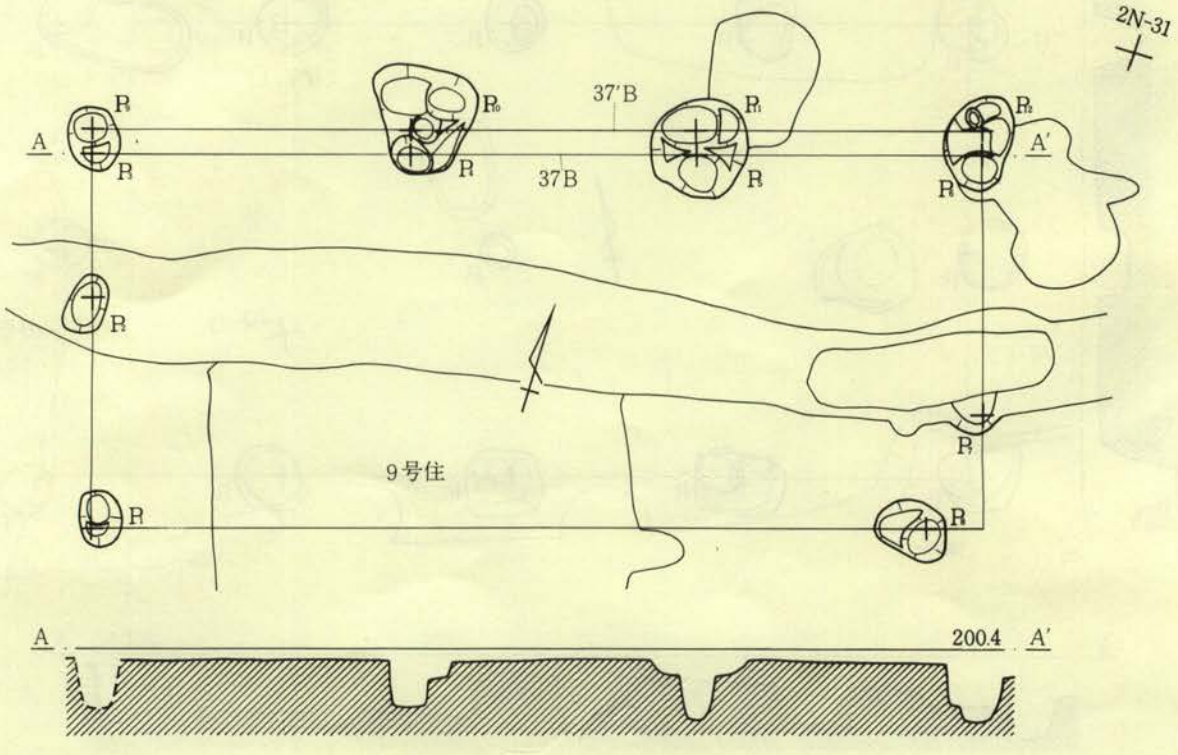
第181図　32・33号掘立柱建物跡



第182図　34号掘立柱建物跡



第183図　35・36号掘立柱建物跡



第184図　37・37'号掘立柱建物跡

30号掘立柱建物跡（第178図）

28・29号掘立柱建物跡と重複する。棟方向(桁行方向)は南北でN－11°－Wを示す。構造は身舎が桁行3間・梁行2間。東西に庇を設ける。東庇は3間(柱間は南より4尺－7尺－7尺)、東列の桁行より8尺、西庇は2間(柱間は南より10尺、8尺)、西列の桁行より7尺の距離に設けられている。

身舎の柱間寸法は桁行の東・西列とも6尺－6尺－6尺－6尺、梁行の南・北列とも6尺－6尺である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44㎡。庇部分を含めた面積は43.74㎡。柱穴は円形を基調とする。

遺物は、P_2より土師器の坏片(11)が出土した。

31号掘立柱建物跡（第180図）

2区L・M・N－33・34Gに検出された。西方で32・33号掘立柱建物跡、北方で24号住居跡と重複する。新旧関係は31号掘立柱穴建物跡が重複する建物跡と住居跡より新しい。

棟方向(桁行方向)は南北でN－10°－Wを示す。構造は身舎が桁行(P_1～P_4・P_6～P_9)3間・梁行(P_1－P_{10}－P_9・P_4～P_6)2間で西方に3間の庇(P_{11}～P_{14})を設ける。

柱間寸法は身舎の桁行は東・西列とも南より8尺－9尺－9尺、梁行は南・北列とも7尺－7尺。庇は9尺の距離を隔てて桁行と同じ柱間を有する。身舎の規模は桁行7.80m、梁行4.20m、面積32.76㎡。庇を含む総面積は53.82㎡。柱穴は1辺が80cm～1.2mの方形を基調とする。

遺物は、P_5より須恵器大甕の口縁部片が出土した。

32号掘立柱建物跡（第181図）

2区L・M－34・35Gに検出された。31・33号掘立柱建物跡と重複する。棟方向は南北と考えられ、N－22°－Wを示す。構造は桁行(P_1－P_8－P_7・P_3～P_5)・梁行(P_1～P_3・P_5～P_7)2間。

柱間寸法は桁行の東・西列、梁行の南・北列とも8.5尺－8.5尺である。規模は桁行、梁行とも5.10m、面積26.01㎡。柱穴は円形を基調とする。

33号掘立柱建物跡（第181図）

32号掘立柱建物跡と同一のグリットに検出された。棟方向(桁行方向)は南北でN－20°－Wを示す。構造は桁行(P_1－P_{10}～P_8・P_3～P_6)3間・梁行(P_1～P_3・P_6～P_8)2間。

柱間寸法は桁行の東・西列は7尺－7尺－7尺－7尺、梁行の南・北列は8尺－8尺である。規模は桁行6.30m、梁行4.80m、面積30.24㎡。柱穴は円形を基調とする。

34号掘立柱建物跡（第182図）

2区P・Q－32・33・34Gに検出された。東で10号住居跡、北西で8号住居跡と重複し、西方に7号住居跡が位置する。棟方向(桁行方向)は東西でN－77°－Eを示す。構造は桁行(P_1－P_{12}～P_9・P_3～P_7)4間・梁行(P_1～P_3・P_7～P_9)2間。

柱間寸法は桁行・梁行とも8尺と均等である。P_5とP_{11}の梁行ライン上にP_{13}が検出された。規模は桁行9.60m、梁行4.80m、面積46.08㎡。柱穴は円形や隅丸方形のものが見られる。

35号掘立柱建物跡（第183図）

2区N－36・37G、O－36Gに検出された。南東に23号住居跡、南に6号住居跡が隣接する。棟方向（桁行方向）は南北でN－16°－Wを示す。構造は桁行東列（P_1－P_7－P_6）2間、西列（P_3－P_4）は1間、梁行（P_1～P_3・P_4～P_6）2間。

柱間寸法は桁行の東列が9尺－9尺、西列が18尺、梁行は南・北列とも6尺－6尺である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44㎡。柱穴は円形を基調とする。

36号掘立柱建物跡（第183図）

2区Q・R－38・39Gに検出された。北東方向に5号住居跡が位置する。棟方向（P_1～P_8）はN－21°－Wを示す。構造は桁行（P_1～P_3・P_4～P_5）1間、梁行のP_2～P_4は2間、P_5～P_1は1間。

柱間寸法は桁行の東・西列、梁行の南列が13尺、梁行の北列は東より6.5尺－6.5尺である。規模は桁行3.90m、梁行3.90m、面積15.21㎡。柱穴は円形を基調とする。

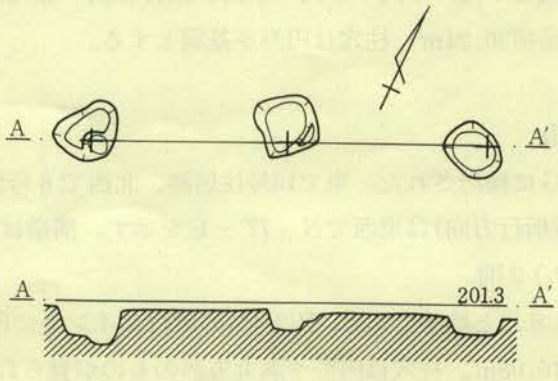
37号掘立柱建物跡（第184図）

2区N－31～33G、O－31・32Gに検出された。9号住居跡とM2Dと重複する。棟方向（桁行方向）は東西でN－73°－Eを示す。構造は桁行の南列（P_1～P_8）は明確でない。北列（P_3～P_6・P_9～P_{12}）は3間で1尺のずれで建て替えをしている。梁行（P_1～P_3・P_4、P_6・P_{12}～P_8）2間。

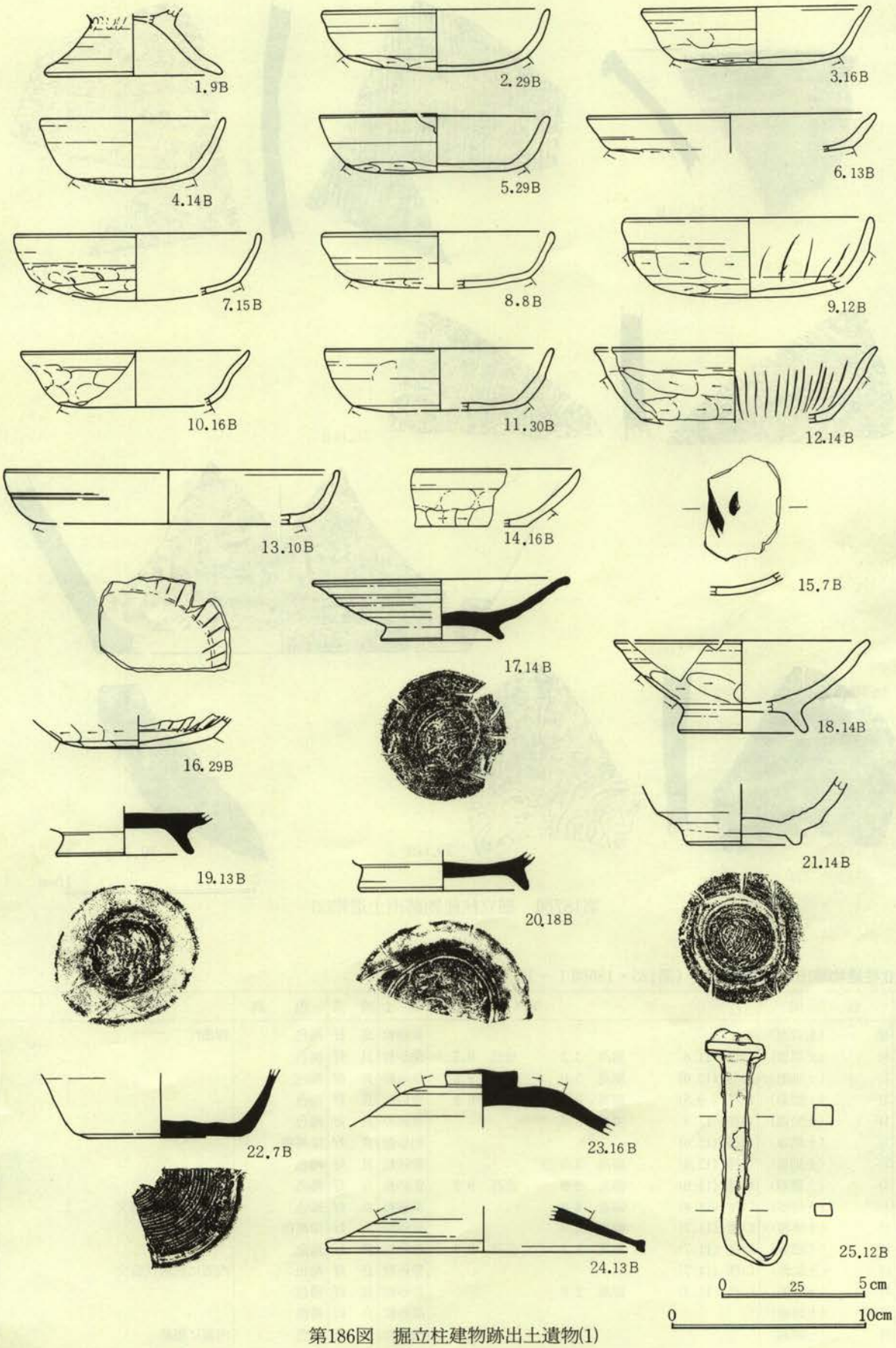
柱間寸法は桁行の北列が東より10尺－10尺－11尺、梁行の西列はP_1～P_3が南より8尺－5尺、P_1－P_2－P_9が南より8尺－6尺。東列はP_6－P_7が9尺、P_{12}－P_7が10尺、P_7－P_8が4尺で、P_8は2尺ほど西にずれている。規模は桁行9.30m、梁行3.90m、（拡張時4.20m）で面積は36.27㎡、（拡張時39.06㎡）。柱穴は円形を基調とする。

1号柱列（第185図）

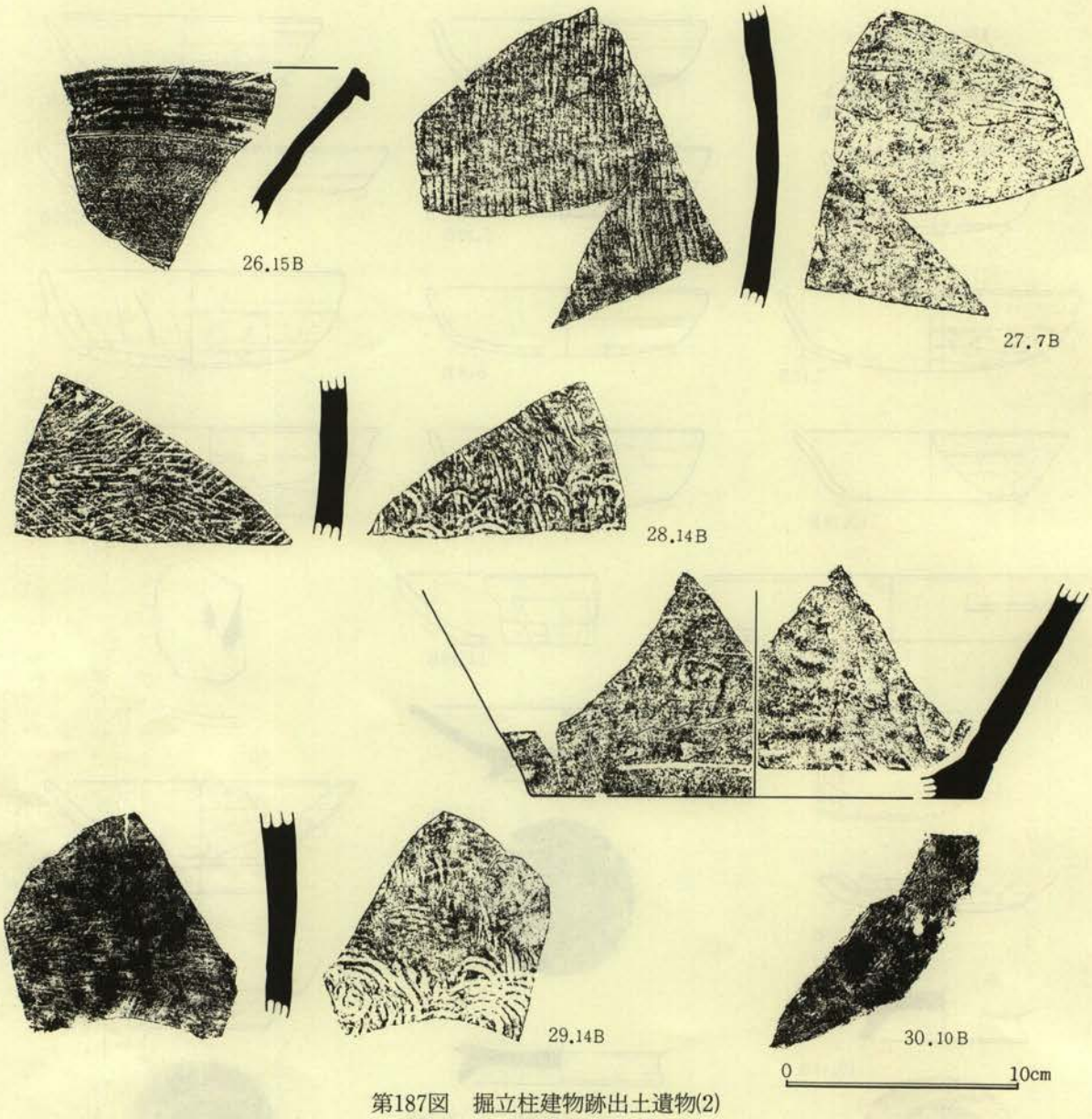
2区D－28・29Gに検出された。南方に17号掘立柱建物跡が接近している。軸方向はN－66°－Eを示し、2間の柱列である。柱間寸法は7尺－7尺で2.1mを測る。



第185図　1号柱列



第186図　掘立柱建物跡出土遺物(1)



第187図　掘立柱建物跡出土遺物(2)

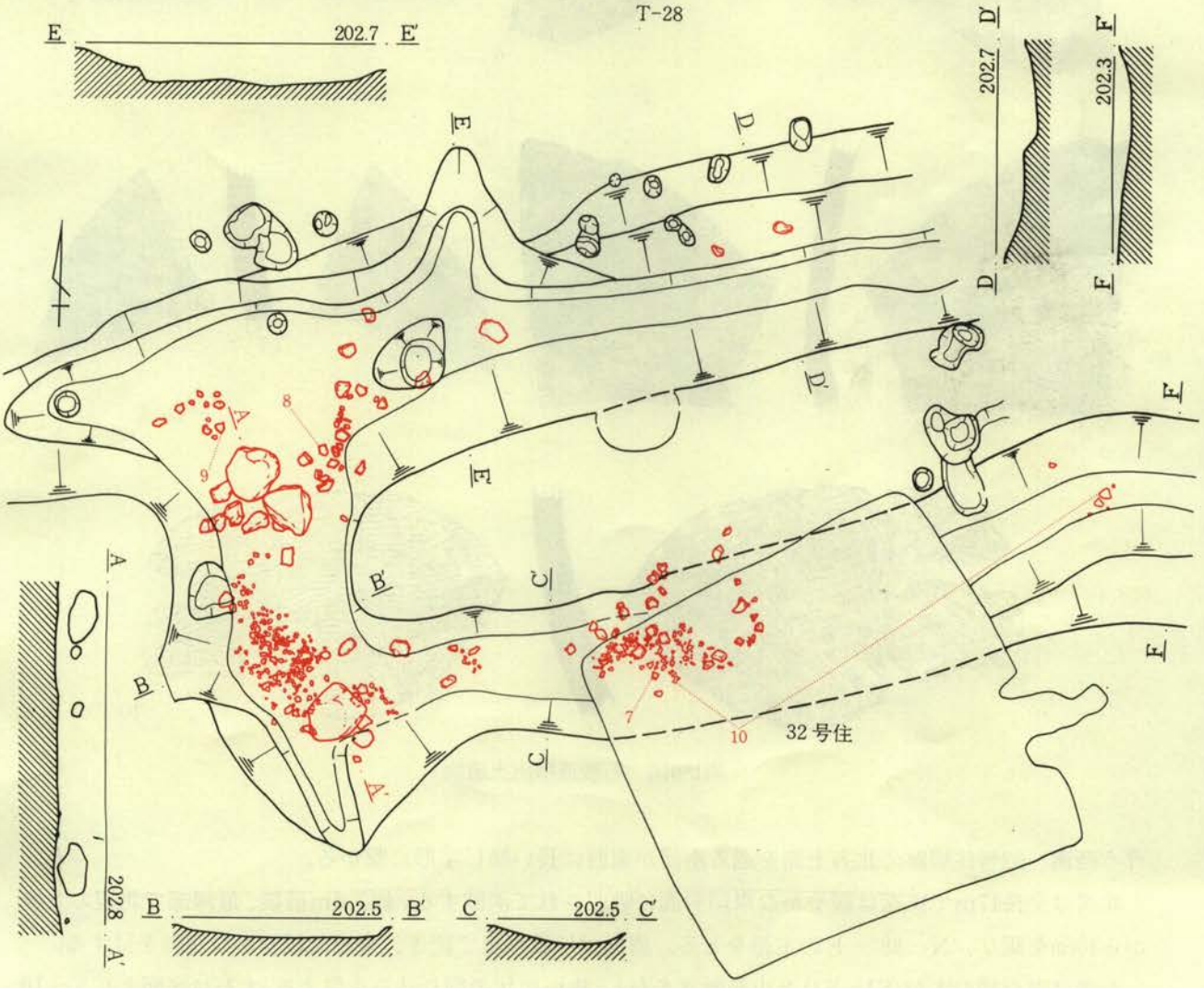
掘立柱建物跡出土遺物観察表（第185・186図1～30）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕 (土師器)				微砂粒	良好	褐色	脚部片
2	坏 (土師器)	口径 11.6	器高 3.2	底径 9.5	微砂粒	良好	褐色	
3	坏 (土師器)	口径 (12.0)	器高 3.0	底径 8.6	微砂粒	良好	褐色	
4	坏 (土師器)	口径 (9.5)	器高 3.5	底径 6.2	微砂粒	良好	褐色	
5	坏 (土師器)	口径 11.8	器高 3.0		微砂粒	良好	褐色	
6	坏 (土師器)	口径 (15.0)			粗砂粒	良好	淡褐色	
7	坏 (土師器)	口径 (12.6)	器高 3.5		微砂粒	良好	褐色	
8	坏 (土師器)	口径 (11.9)	器高 2.9	底径 9.2	粗砂粒	良好	褐色	
9	坏 (土師器)	口径 (12.8)	器高 4.2		微砂粒	良好	褐色	内面に放射状暗文
10	坏 (土師器)	口径 (11.7)	器高 2.9		微砂粒	良好	赤褐色	
11	坏 (土師器)	口径 (11.7)	器高 3.2	底径 9.0	微砂粒	良好	褐色	
12	坏 (土師器)	口径 (14.7)			微砂粒	良好	褐色	内面に放射状暗文
13	坏 (土師器)	口径 (17.3)	器高 2.8		微砂粒	良好	褐色	
14	坏 (土師器)				微砂粒	良好	褐色	
15	坏 (土師器)				微砂粒	良好	褐色	内面に墨痕

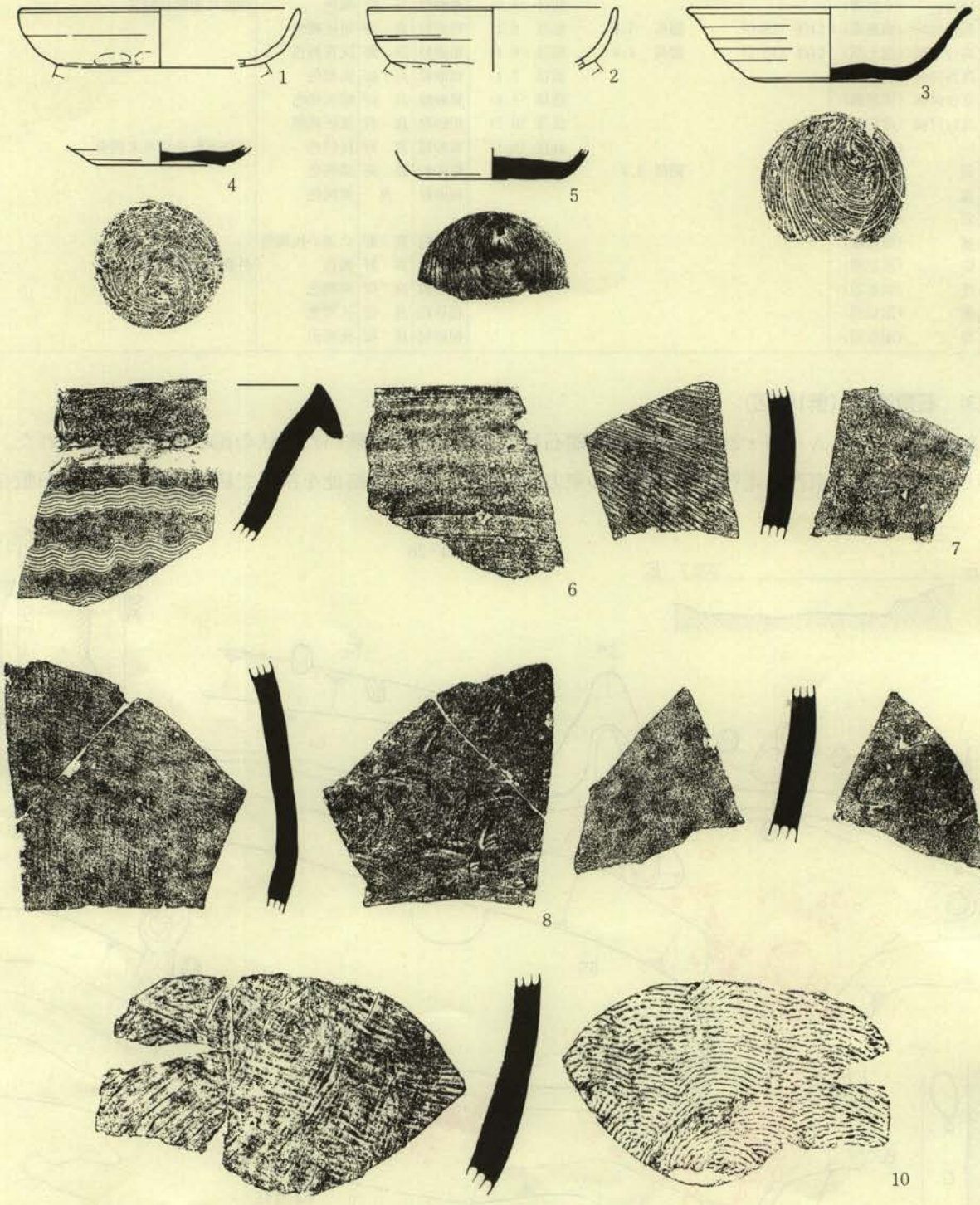
16	坏	(土師器)			底径 (8.0)	微砂粒	良	好	褐色	内面に放射状暗文
17	高台付坏	(須恵器)	口径 (13.0)	器高 3.1	底径 6.2	粗砂粒	良	好	暗灰褐色	
18	高台付碗	(還元焔)	口径 (13.1)	器高 4.8	底径 (6.4)	粗砂粒	良	好	灰黄褐色	
19	高台付碗	(須恵器)			底径 7.1	粗砂粒	良	好	灰褐色	
20	高台付碗	(須恵器)			底径 (8.8)	粗砂粒	良	好	暗灰褐色	
21	高台付碗	(還元焔)			底径 (6.2)	粗砂粒	良	好	淡灰褐色	
22	坏	(須恵器)			底径 (8.1)	微砂粒	良	好	灰白色	底部回転糸切り未調整
23	蓋	(須恵器)		鈕径 3.7		粗砂粒	良	好	淡褐色	
24	蓋	(須恵器)				粗砂粒	良		淡褐色	
25	釘	(鉄製品)								
26	甕	(須恵器)				粗砂粒	良	好	にぶい灰褐色	
27	甕	(須恵器)				粗砂粒	良	好	褐色	外面平行叩き目
28	甕	(須恵器)				粗砂粒	良	好	灰褐色	
29	甕	(須恵器)				粗砂粒	良	好	灰褐色	
30	壺	(須恵器)				粗砂粒	良	好	灰褐色	

(3) 石敷遺構 (第188図)

A調査区T・2A－27・28Gに跨がって礎石状の大石と小石を敷いた溝状の掘り込みが検出された。溝状掘り込みは、東西に走行する4号溝の東方の延長上に近世道路址を挟んで続く北溝、大石と石敷を



第188図　石敷遺構



第189図　石敷遺構出土遺物

伴う西溝、32号住居跡の北方上面を過る南溝が東西に長い横U字形に繋がる。

北溝は全長17mで東端は緩やかな東傾斜面に吸収されて消滅する。幅2.5m前後、最深部で北辺の上場から40cmを測り、N－88°－Eの主軸をとる。底面はほぼ平坦で続き、東端で緩やかな傾斜を呈する。

西溝は礎石状の大石(S1～S3)と小石敷きを有し、浅い皿状の掘り込みを呈する。大石は底面より5～10cm浮いた状態で根石を嚙ませている。S1は65×55cm、厚さ35cm、S2は60×50cm、厚さ30cm、S3は63×

55cm、厚さ32cmを測る。S1－S3の軸はN－20°－Wをとり、心々3mを測る。S1－S2は北溝と直角のN－12°－Wをとり、心々2.4mを測る。

南溝はS1から32号住居跡の北方上面を過り、東方で大きく湾曲して南方に走行する。32号住居跡の北西部に小石が集中して敷かれている。この小石の集中部分には空白部が存在することから礎石状の大石が据えられていた可能性が考えられる。この可能性から礎石建の建物跡が憶測される。

北溝の北縁部には検出された小さい柱穴は、柵列状の施設かも知れない。

遺物は、小石間に須恵器の大甕片、覆土内からは土師器と須恵器の坏片が出土した。

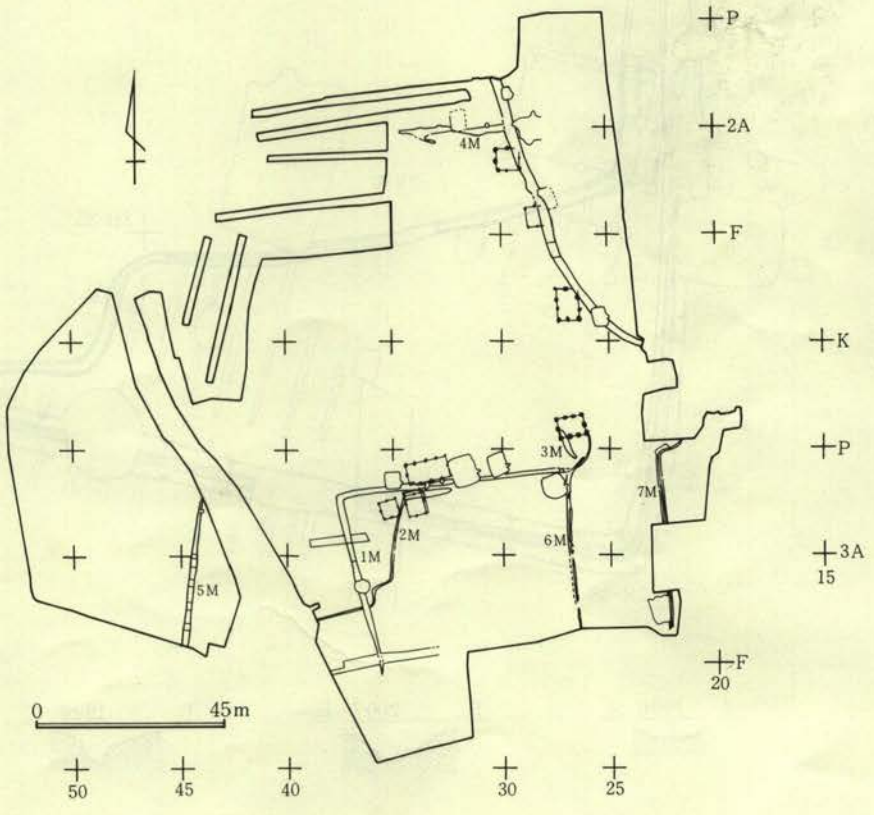
石敷遺構出土遺物観察表（第189図1～10）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	坏（土師器）	口径（13.2）	器高 2.8	底径 9.8	粗砂土	良好	淡褐色	
2	坏（土師器）	口径（11.8）	器高 2.9		微砂粒	良好	褐色	
3	坏（須恵器）	口径 13.2	器高 3.5	底径 6.9	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸切り未調整
4	坏（須恵器）			底径 6.0	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
5	坏（須恵器）			底径 6.9	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
6	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	外面に波状文
7	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	青灰褐色	外面は平行叩き目
8	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	暗灰褐色	
9	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	
10	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	外画は平行叩き目、内面は青海波の当て目

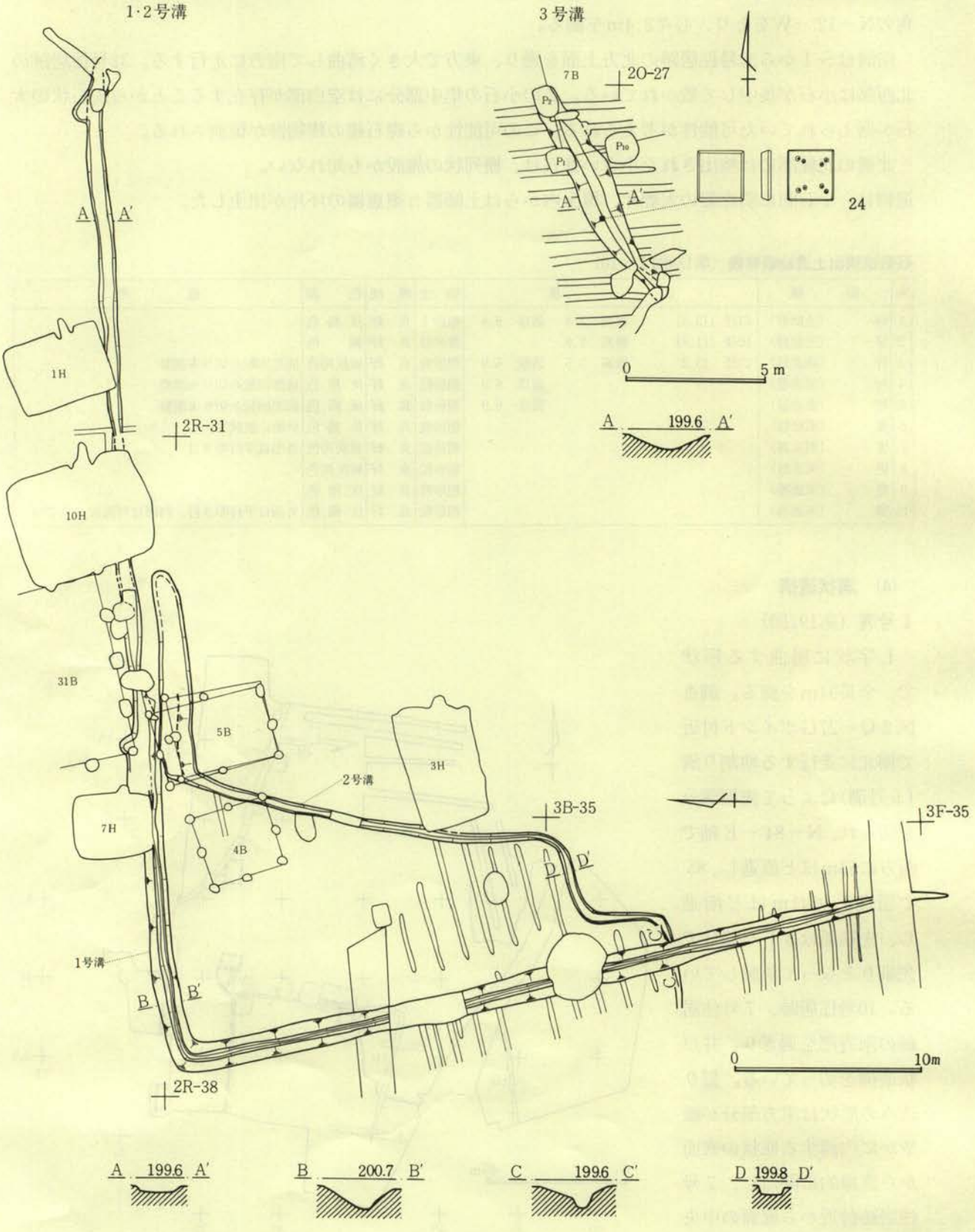
(4) 溝状遺構

1号溝（第191図）

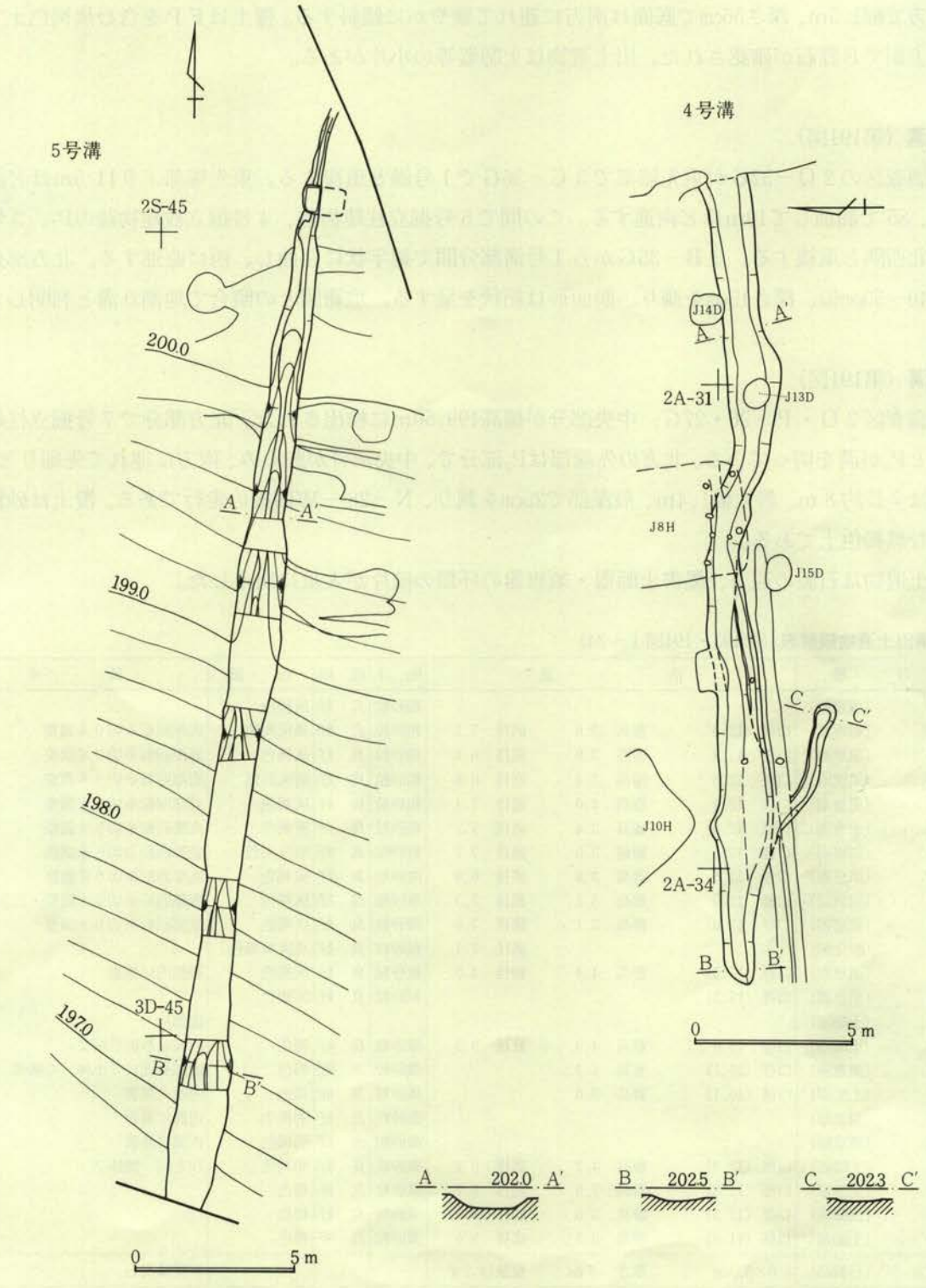
L字状に屈曲する形状で、全長94mを測る。調査区2Q－27Gポイント付近で南北に走行する地割り溝（6号溝）によって先端部分を切られ、N－84°－E軸で西方に53mほど直進し、85°で屈曲して41mほど南進し、先端部は3F－35Gで先細りとなって消滅している。10号住居跡、7号住居跡の南方部を過ぎり、井戸状遺構を切っている。掘り込みの形状は東方部分が緩やかに内湾する皿状の底面から直線的に開口し、7号住居跡付近から底面の中央部分がU字形として上方が広く開口する。井戸状遺構



第190図　溝状遺構分布図


1·2号溝
3号溝
7B
2O-27
P2
P10
P1
A
A'
24
0
5 m
A 199.6 A'
1H
2R-31
10H
31B
5B
3H
2号溝
3B-35
3F-35
7H
4B
D
D'
1号溝
B
B'
0
10m
2R-38
A 199.6 A'
B 200.7 B'
C 199.6 C'
D 199.8 D'

第191図　1～3号溝


5号溝
2S-45
200.0
A
A'
199.0
198.0
3D-45
197.0
B
B'
0
5 m
4号溝
J14D
A
A'
2A-31
J13D
J8H
J15D
C
C'
J10H
2A-34
B
B'
0
5 m
A 202.0 A'
B 202.5 B'
C 202.3 C'
A 199.6 A'
B 197.4 B'

第192図　4・5号溝

の北方で幅1.5m、深さ56cmで底面は南方に連れて緩やかに傾斜する。覆土はＦＰを含む黒褐色土で部分的に上面でＢ軽石が確認された。出土遺物は土師器等の小片がある。

２号溝（第191図）

Ａ調査区の２Ｑ－32Ｇが東先端部で３Ｃ－36Ｇで１号溝と重複する。東先端部より11.5mほど西に直進し、85°で屈曲して19mほど南進する。この間で５号掘立柱建物跡、４号掘立柱建物跡のP_7、３号住居跡の北西隅と重複する。３Ｂ－35Ｇから１号溝部分間で鍵字状に屈曲し、西に直進する。北方部分を除いて40～50cm幅、深さ15cmを測り、断面形は箱状を呈する。地籍図との照合で地割り溝と判明した。

３号溝（第191図）

Ａ調査区２Ｏ・Ｐ－26・27Ｇ、中央部分が標高199.50mに検出された。北方部分で７号掘立柱建物跡のP_1とP_2が溝を切っている。北方の先端部はP_2部分で、中央部分が膨らみ、南方に連れて先細りとなる。規模は全長約８m、最大幅1.4m、最深部で25cmを測り、Ｎ－28°－Ｗ前後の走行である。覆土は砂粒を多く含む黒褐色土である。

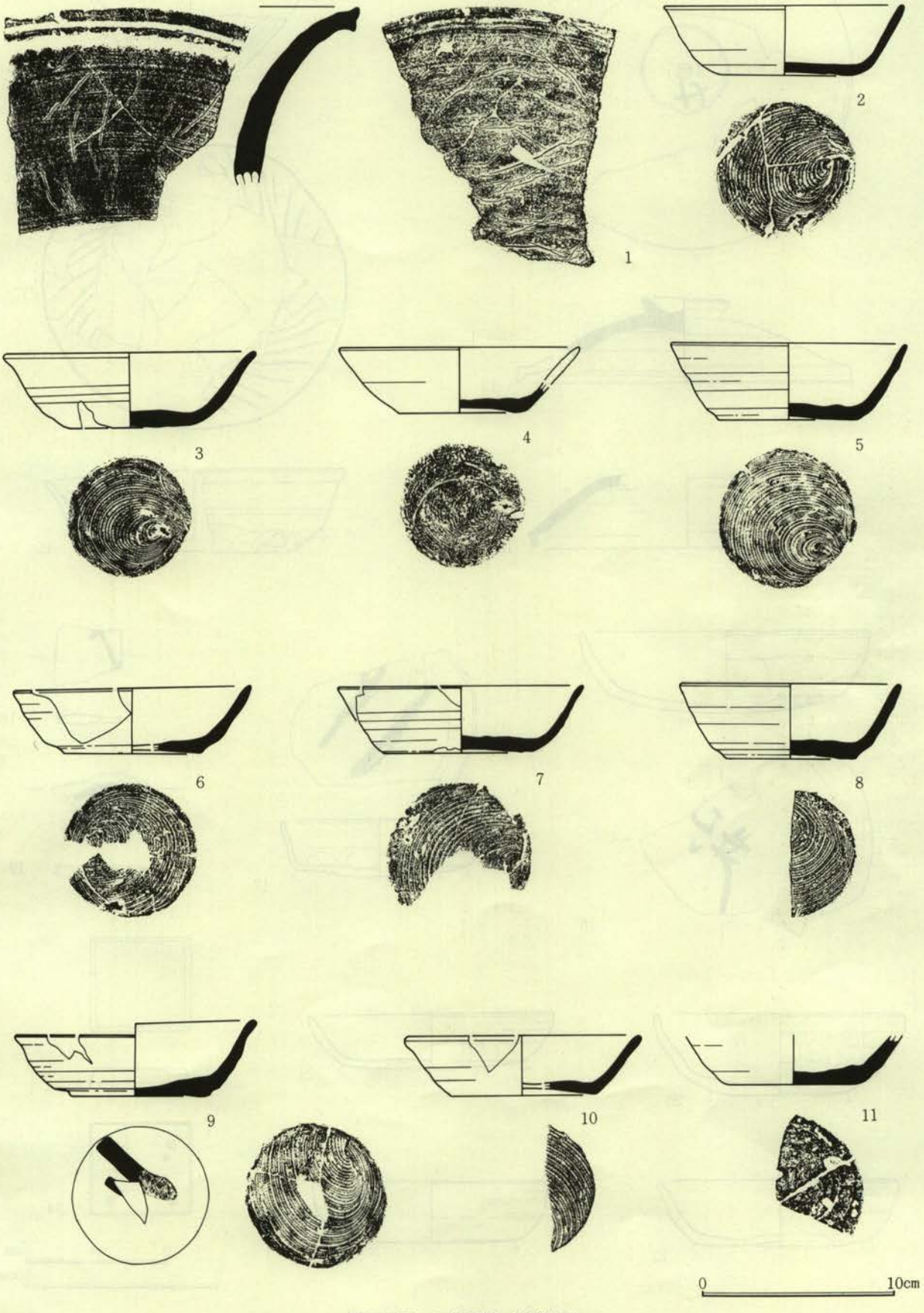
出土遺物は石製の巡方、墨書土師器・須恵器の坏類の破片が大量に出土した。

３号溝出土遺物観察表（第193・194図１～24）

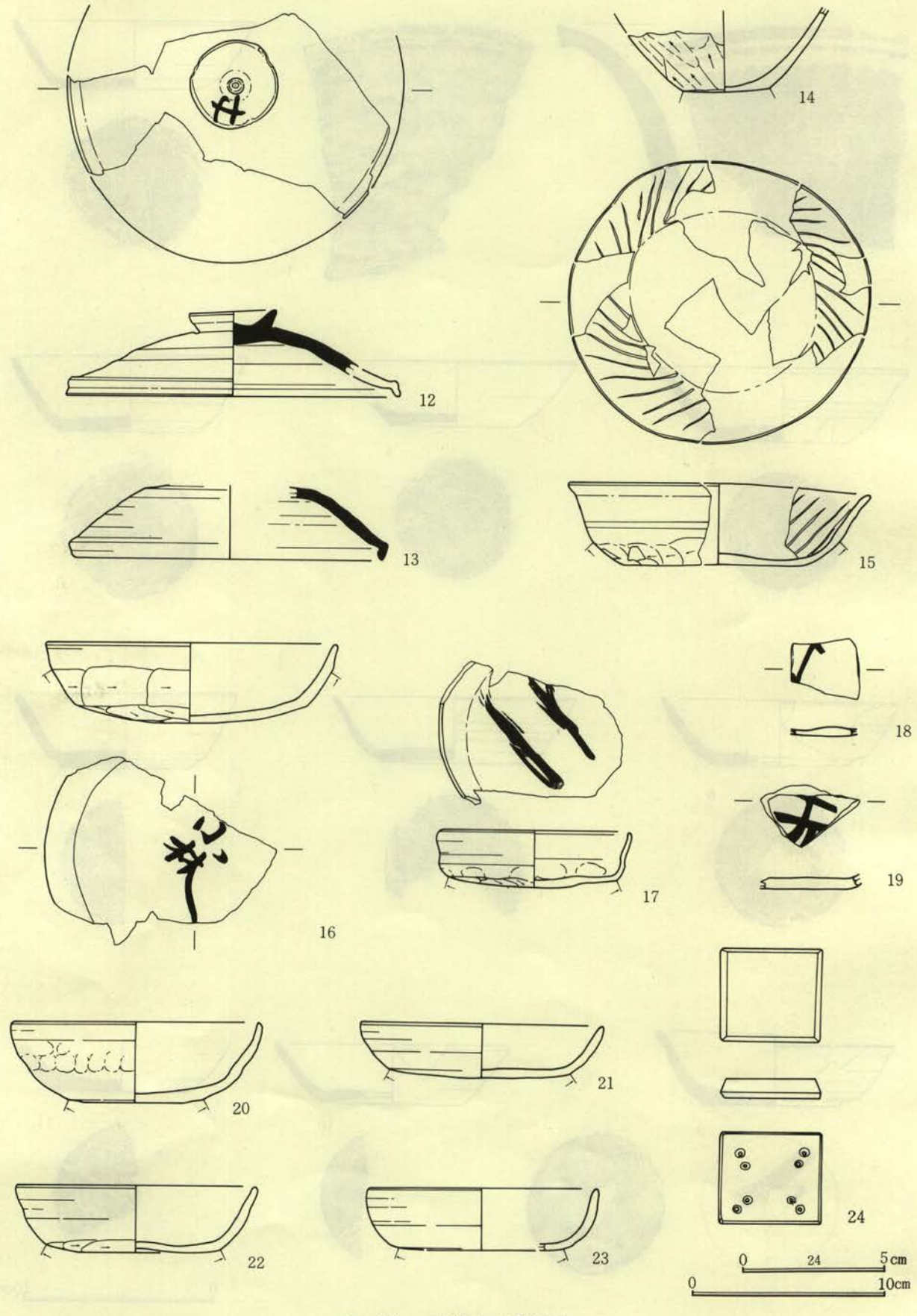
No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	灰褐色	
2	坏（須恵器）	口径 12.0	器高 3.6	底径 7.1	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸切り未調整
3	坏（須恵器）	口径 12.8	器高 3.9	底径 6.4	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
4	坏（須恵器）	口径 12.6	器高 3.4	底径 6.8	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り未調整
5	坏（須恵器）	口径 12.4	器高 4.0	底径 7.4	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
6	坏（須恵器）	口径 12.3	器高 3.4	底径 7.2	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
7	坏（須恵器）	口径 12.6	器高 3.5	底径 7.7	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り未調整
8	坏（須恵器）	口径 11.6	器高 3.9	底径 6.9	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
9	坏（須恵器）	口径 12.5	器高 3.2	底径 7.3	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整・底部に墨痕
10	坏（須恵器）	口径 12.0	器高 3.1	底径 7.6	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
11	坏（酸化焔）			底径 7.1	粗砂粒	良好	淡灰黄褐色	
12	蓋（須恵器）	口径 (17.5)	器高 4.4	鈕径 4.3	粗砂粒	良好	灰褐色	鈕部内に墨書
13	蓋（須恵器）	口径 (16.3)			粗砂粒	良好	灰褐色	
14	甕（土師器）							底部片
15	坏（土師器）	口径 15.6	器高 4.3	底径 9.3	微砂粒	良好	褐色	内面に放射状暗文
16	坏（須恵器）	口径 (15.1)	器高 4.2		微砂粒	良好	褐色	底部外面に「小林」の墨書
17	坏（土師器）	口径 (10.1)	器高 3.0		微砂粒	良好	褐色	内面に墨書
18	坏（須恵器）				微砂粒	良好	明褐色	内面に墨書
19	坏（須恵器）				微砂粒	良好	明褐色	内面に墨書
20	坏（土師器）	口径 (12.9)	器高 4.2	底径 6.2	微砂粒	良好	明褐色	19と同一個体？
21	坏（土師器）	口径 (11.8)	器高 2.9	底径 9.7	微砂粒	良好	褐色	
22	坏（土師器）	口径 (12.5)	器高 3.5	底径 9.3	微砂粒	良好	褐色	
23	坏（土師器）	口径 (11.9)	器高 3.3	底径 8.6	微砂粒	良好	褐色	
24	巡方（石製品）	3.6×3.3cm	厚さ 7mm	重量18.2g				石材は滑石

４号溝（第192図）

Ａ調査区の北方、２Ａ－29～34Ｇを東西に走行する。東方は道路址により破壊され、石敷遺構の溝状掘り込みに連続する可能性が考えられる。道路址から西方先端部まで25mで、皿状の掘り込みを呈する。幅は1.5～1.8mで最深部で30cmを測る。石敷遺構の掘り込みに連続と全長45m以上である。出土遺物は僅かな土器の小片のみであった。



第193図　3号溝出土遺物(1)



第194図　3号溝出土遺物(2)

5号溝（第192図）

B調査区の南東部2R－43G～3A－44G、標高200.70m付近を先端部として南北に走行する。検出された全長は35mである。断面形はV字状の薬研で上面にB軽石が堆積する。

6号溝・7号溝

6号溝は、A調査区の7号掘立柱建物跡のP_7の東から12号住居跡のカマドを切って南走する。この溝と併走する様に7号溝は、東に35号住居跡と南東竪穴遺構を切って22～23m間隔で南北に走行する。両者とも地割り溝である。

(5) 道路遺構（第195図）

A調査区の中央やや南寄りを東西に併走して連続する土坑状の掘り込みが続く。南北に側溝を有する道路址である。検出時には側溝間の平坦部を焼土が覆い、その焼土はコンクリートの様に堅く締まっていたのでバックホーによる除去を行ってしまった。その堆積は10cm程はあったと記憶する。

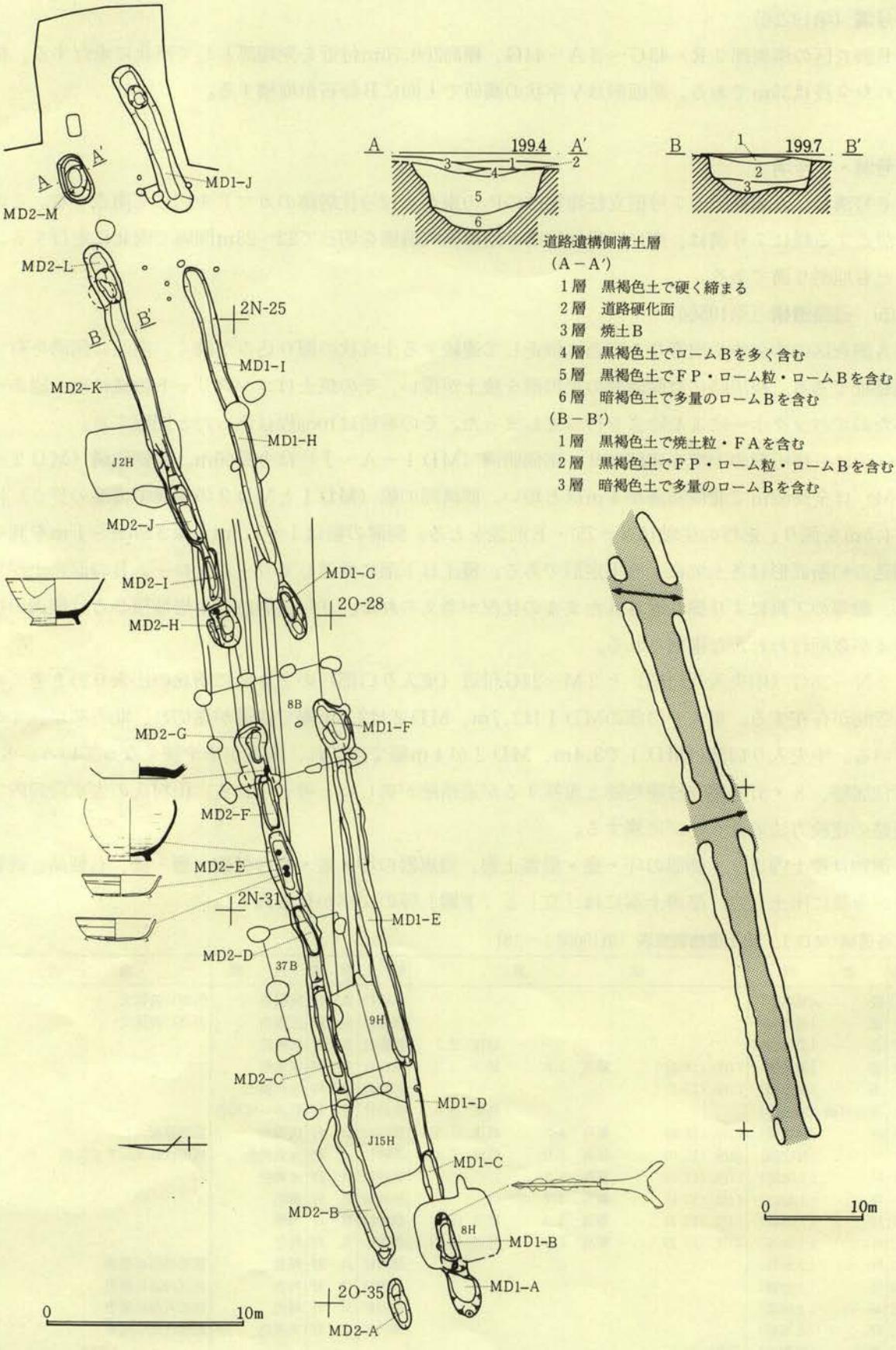
側溝は長楕円形の土坑を連続させ、南側側溝（MD1－A～J）は全長66m、北側側溝（MD2－A～M）は全長62mで北側側溝が4mほど短い。側溝間の幅（MD1とMD2の側溝中央部の長さ）は3～4.5mを測り、走行の主軸はN－75°－E前後をとる。側溝の幅は1～1.5m、深さ57cm～1mを測る。掘込みの断面形は各土坑により不定形である。覆土は下部に共通してローム・ロームBの混合土が見られ、鋤等の工具により掘り返されたままの状況が考えられる。9号住居跡の土層堆積からは側溝の掘り替えが数回行われたと推察される。

2N－28G（中央入り口部）と2M－24G付近（東入り口部）の2カ所に南北の出入り口と考えられる空間が存在する。東入り口部のMD1は2.7m、MD2は2.2m幅で側溝が途切れ、北方部が狭くなっている。中央入り口部はMD1で3.4m、MD2が4m幅で途切れ、南方がやや狭くなっている。8・9号住居跡、8・37号掘立柱建物跡と重複するが道路跡が新しいと考えられる。山村氏の太宰府管内での道路の建設方法のAタイプに属する。

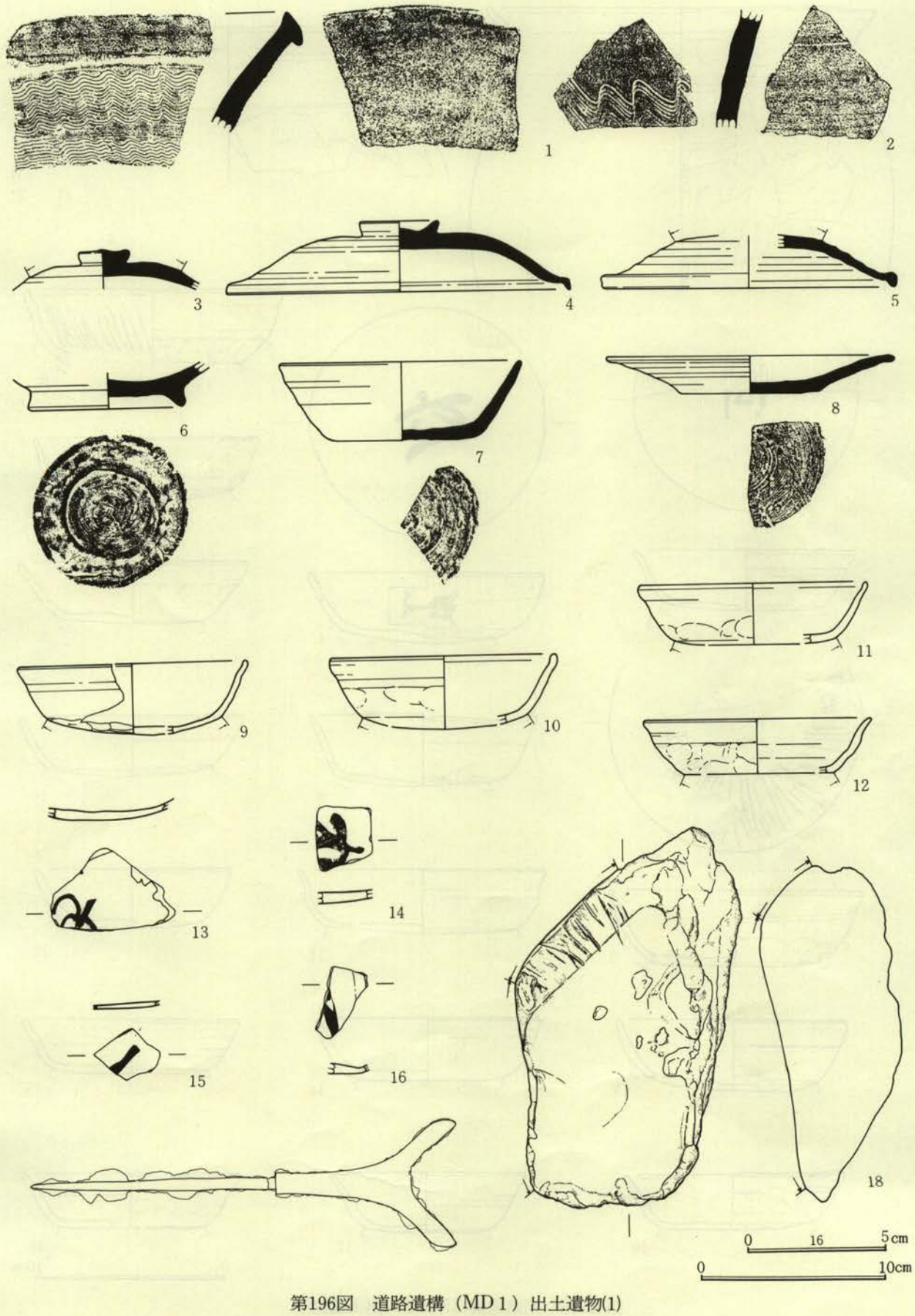
遺物は覆土内より土師器の坏・甕・墨書土器、須恵器の坏・蓋・高台付碗・壺・甕、石製品、鉄製品等が多量に出土した。墨書土器には「立」と「下殿」等の文字が見られる。

道路遺構（MD1）出土遺物観察表（第196図1～18）

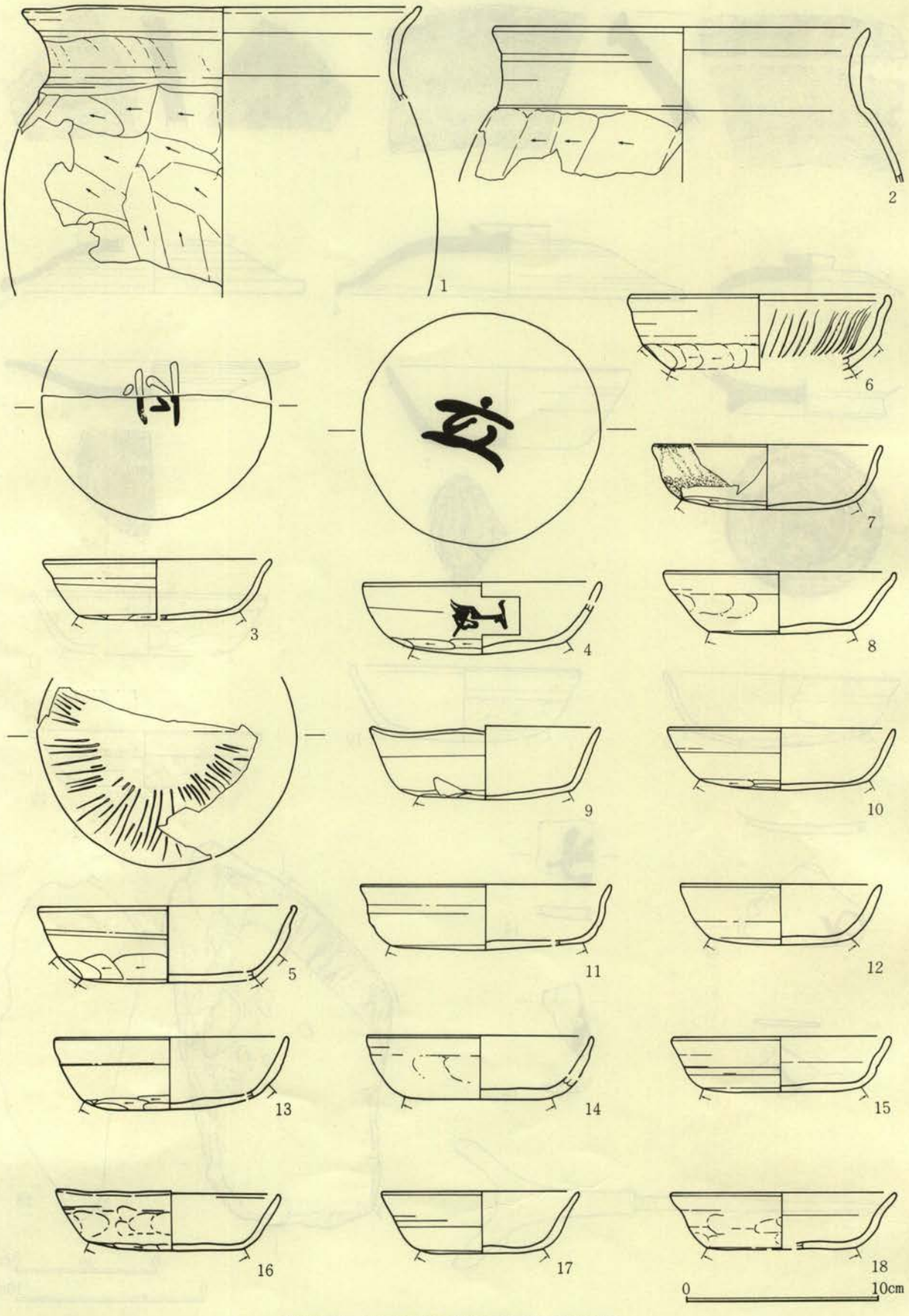
No.	器種		法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕	（須恵器）				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面に波状文
2	甕	（須恵器）				粗砂粒	良 好	灰褐色	外面に波状文
3	蓋	（須恵器）			鈕径 2.7	粗砂粒	良 好	灰褐色	
4	蓋	（須恵器）	口径 (18.2)	器高 3.8	鈕径 4.2	微砂粒	良 好	灰褐色	
5	蓋	（須恵器）	口径 (15.7)			粗砂粒	良 好	暗灰褐色	
6	高台付碗	（須恵器）			底径 8.0	微砂粒	良 好	にぶい灰褐色	
7	坏	（須恵器）	口径 (12.8)	器高 4.2	底径 (7.5)	微砂粒	良 好	灰褐色	底部篦起こし
8	坏	（酸化焔）	口径 (15.0)	器高 2.0	底径 (7.4)	微砂粒	良 好	灰黄褐色	底部回転糸切り未調整
9	坏	（土師器）	口径 (12.1)	器高 3.2		微砂粒	良 好	淡褐色	
10	坏	（土師器）	口径 (12.0)	器高 3.7		微砂粒	良 好	褐色	
11	坏	（土師器）	口径 (12.3)	器高 3.3	底径 (8.8)	微砂粒	良 好	褐色	
12	坏	（土師器）	口径 (12.2)	器高 2.9	底径 (8.2)	微砂粒	良 好	褐色	
13	坏	（土師器）				微砂粒	良 好	褐色	底部外面に墨書
14	坏	（土師器）				微砂粒	良 好	褐色	底部内面に墨書
15	坏	（土師器）				微砂粒	良 好	褐色	底部外面に墨書
16	坏	（土師器）				微砂粒	良 好	淡褐色	底部内面に墨書
17	鉄鏃	（鉄製品）	全長 22.9						
18	砥石	（石製品）	重量 1390g						石材は輝石安山岩



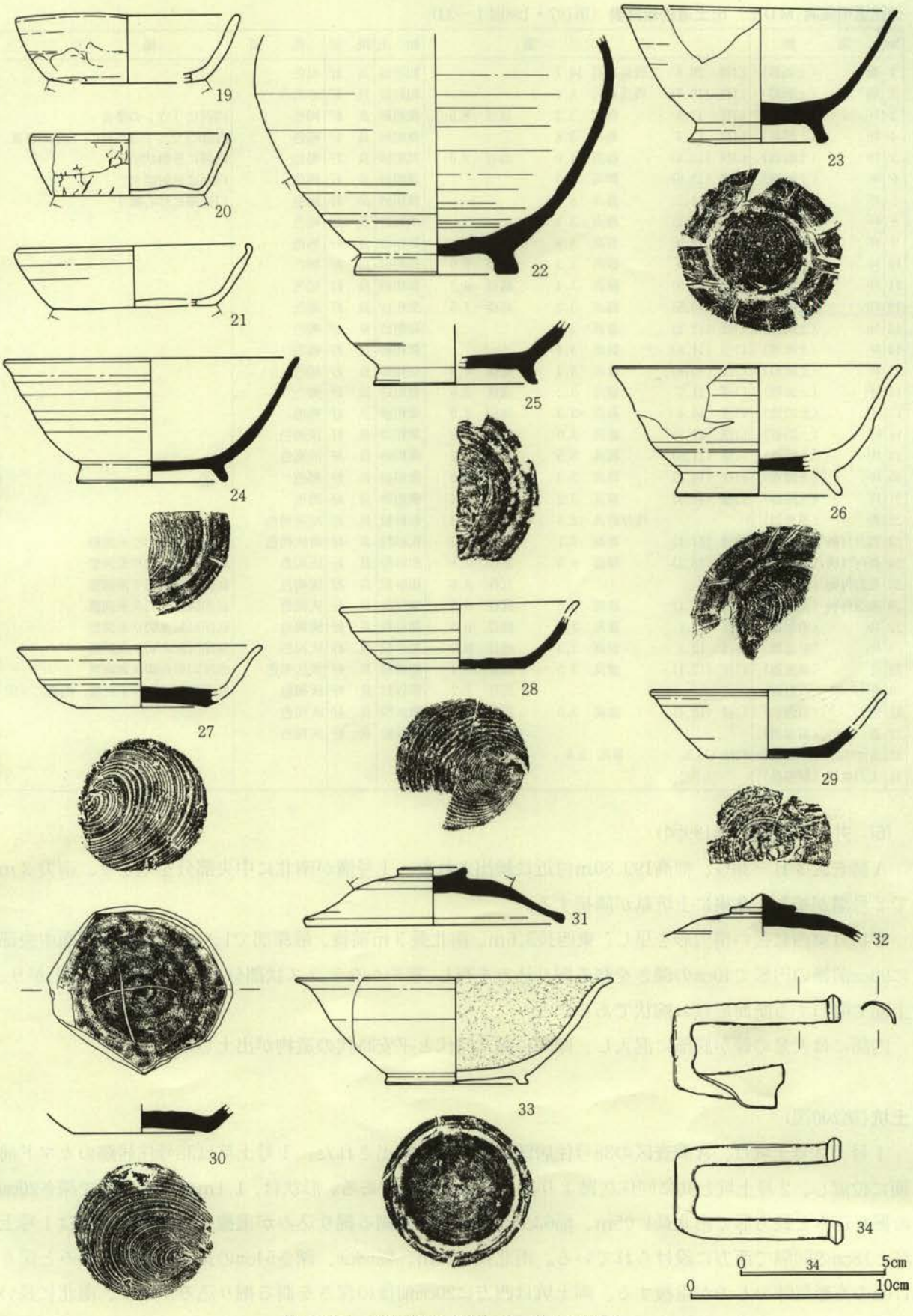
第195図　歴史時代道路遺構（MD）



第196図　道路遺構（MD１）出土遺物(1)



第197図　道路遺構（MD２）出土遺物(2)



第198図　道路遺構（MD２）出土遺物(3)

道路遺構側溝（ＭＤ２）出土遺物観察表（第197・198図１～34）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	甕（土師器）	口径 20.8	残高器高 14.7		粗砂粒	良好	褐色	
2	甕（土師器）	口径 (19.7)	残高器高 8.1		粗砂粒	良好	赤褐色	
3	坏（土師器）	口径 11.9	器高 3.2	底径 8.5	微粗砂	良好	褐色	内面に「立」の墨書
4	坏（土師器）	口径 12.4	器高 3.8		微粗砂	良好	褐色	内面に「立」、体部外面に「下段」の墨書
5	坏（土師器）	口径 (13.4)	器高 4.0	底径 9.0	微粗砂	良好	褐色	内面に放射状暗文
6	坏（土師器）	口径 (13.6)	器高 4.0		微粗砂	良好	褐色	内面に放射暗文
7	坏（土師器）	口径 11.7	器高 3.4		微粗砂	良好	褐色	口縁部に灯心痕？
8	坏（土師器）	口径 (12.2)	器高 3.3		微粗砂	良好	褐色	
9	坏（土師器）	口径 12.0	器高 3.9		微粗砂	良好	褐色	
10	坏（土師器）	口径 11.9	器高 3.3	底径 9.0	微粗砂	良好	褐色	
11	坏（土師器）	口径 (13.0)	器高 3.4	底径 9.9	微粗砂	良好	褐色	
12	坏（土師器）	口径 (10.5)	器高 3.2	底径 7.5	微粗砂	良好	褐色	
13	坏（土師器）	口径 (12.2)	器高 3.8		微粗砂	良好	褐色	
14	坏（土師器）	口径 (11.8)	器高 3.4		微粗砂	良好	褐色	
15	坏（土師器）	口径 (10.8)	器高 3.4	底径 8.3	微粗砂	良好	褐色	
16	坏（土師器）	口径 11.7	器高 3.2	底径 8.0	微粗砂	良好	褐色	
17	坏（土師器）	口径 10.4	器高 3.3	底径 6.0	微粗砂	良好	褐色	
18	坏（土師器）	口径 (11.7)	器高 3.0	底径 7.9	微粗砂	良好	淡褐色	
19	坏（土師器）	口径 (11.5)	器高 3.5	底径 8.2	微粗砂	良好	淡褐色	
20	坏（土師器）	口径 (10.2)	器高 3.3	底径 8.0	微粗砂	良好	褐色	
21	坏（土師器）	口径 (11.9)	器高 3.2	底径 8.4	微粗砂	良好	褐色	
22	壺（須恵器）		残存器高 12.5	底径 8.3	粗砂粒	良好	暗灰褐色	
23	高台付碗（須恵器）	口径 (14.4)	器高 7.1	底径 7.3	粗砂粒	良好	暗灰褐色	底部回転糸切り未調整
24	高台付碗（須恵器）	口径 (15.3)	器高 6.5	底径 7.8	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
25	高台付碗（須恵器）			底径 8.6	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
26	高台付碗（須恵器）	口径 (15.1)	器高 6.8	底径 8.6	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
27	坏（須恵器）	口径 12.7	器高 3.2	底径 6.9	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
28	坏（須恵器）	口径 12.3	器高 3.3	底径 6.9	粗砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整
29	坏（須恵器）	口径 (12.1)	器高 3.5	底径 6.4	粗砂粒	良好	淡灰褐色	底部回転糸切り未調整
30	坏（須恵器）			底径 7.2	微砂粒	良好	灰褐色	底部回転糸切り未調整、内面に×印
31	蓋（須恵器）	口径 (13.4)	器高 3.0	鈕径 3.6	微砂粒	良好	灰褐色	
32	蓋（須恵器）			鈕径 3.5	粗砂粒	良好	灰褐色	
33	高台付碗（灰釉陶器）	口径 (16.5)	器高 5.6	底径 7.6				
34	太刀金具（銅製品）							

(6) 井戸状遺構（第199図）

Ａ調査区３Ｂ－36Ｇ、標高199.80m付近に検出された。１号溝が南北に中央部分を過ぎり、南方３ｍで２号溝が接し、北東に土坑墓が隣接する。

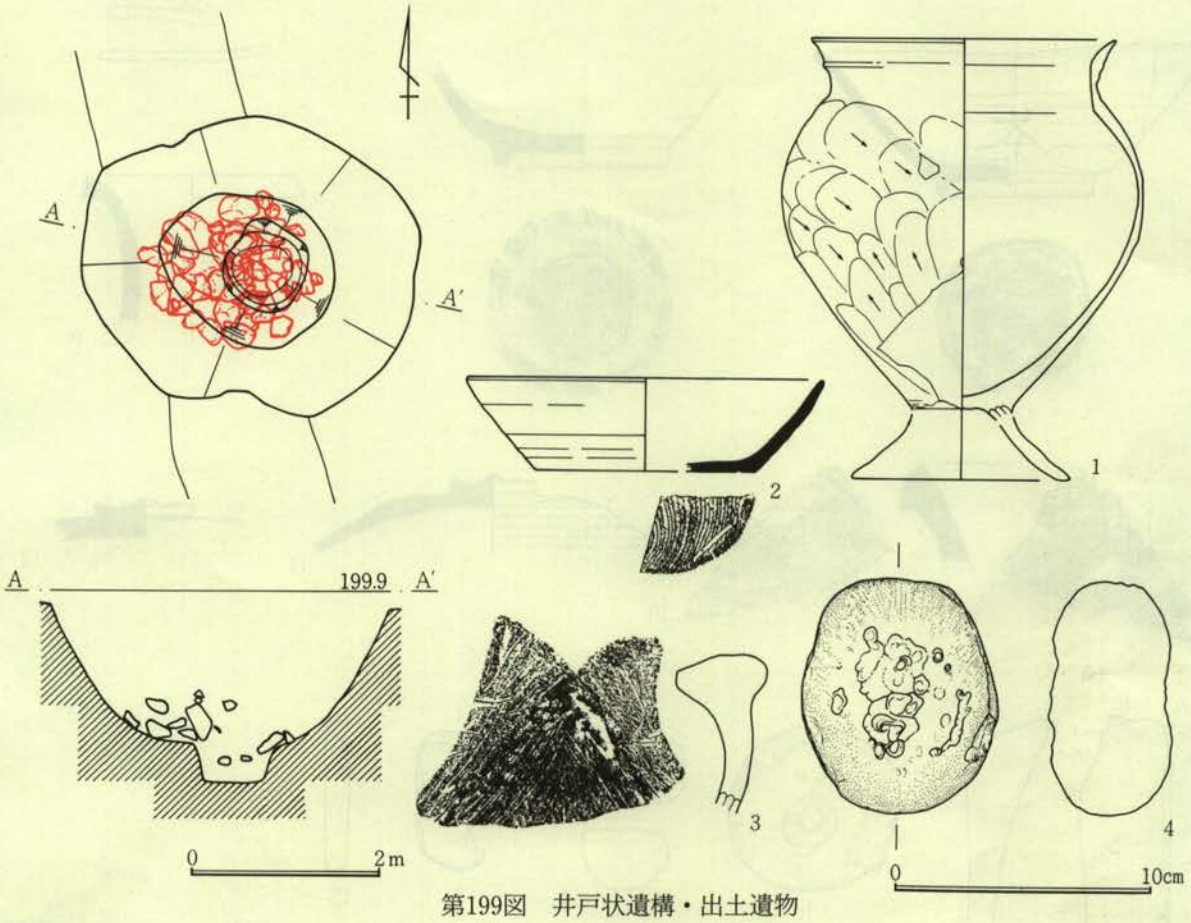
形状は東西に長い楕円形を呈し、東西長3.6m、南北長３ｍ前後、最深部で1.85mを測る。底面中央部に90cm前後の円形で40cmの深さを測る掘り込みを有し、緩やかなテラス状部分から内湾して立ち上がり、上部で開口する断面形はお椀状である。

内部には大量の礫が底部に混入し、礫間に縄文時代と平安時代の遺物が出土した。

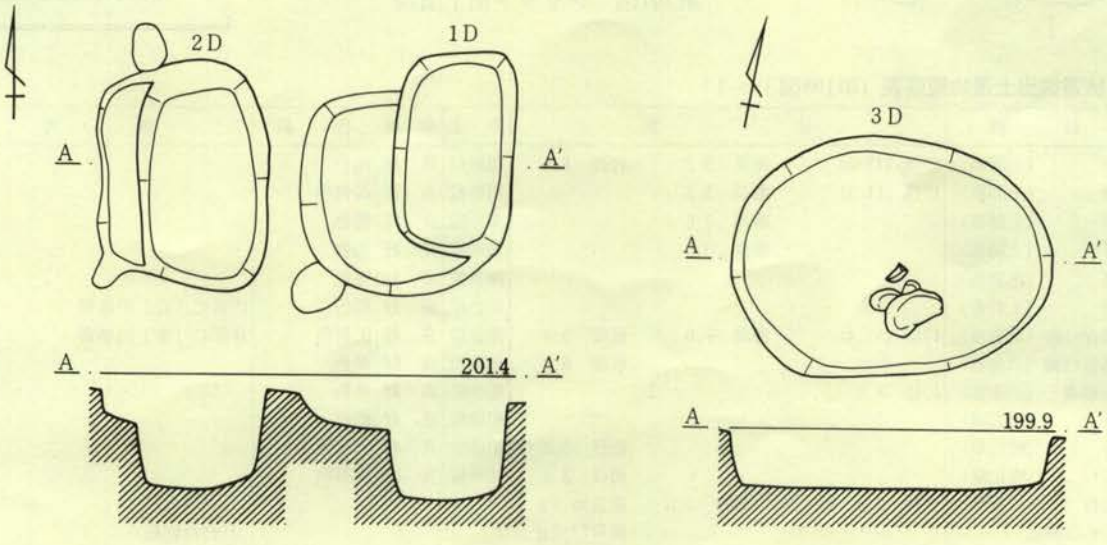
土坑（第200図）

１号・２号土坑は、Ａ調査区の38号住居跡の中央部に検出された。１号土坑は38号住居跡のカマド前面に位置し、２号土坑と共に同住居跡より後出の掘り込みである。形状は、1.1m前後の円形で深さ20cmの掘り込みと長方形で南北長1.05m、幅63cm、深さ54cmを測る掘り込みが重複する。２号土坑は１号土坑と18cmの間隔で西方に設けられている。南北長1.22m、幅68cm、深さ54cmの長方形の掘り込みと深さ17cmの方形気味のものが重複する。両土坑は西方に20cm前後の深さを測る掘り込みがあり、南北に長い長方形の土坑は規模・形状が類似する。出土遺物は皆無であった。

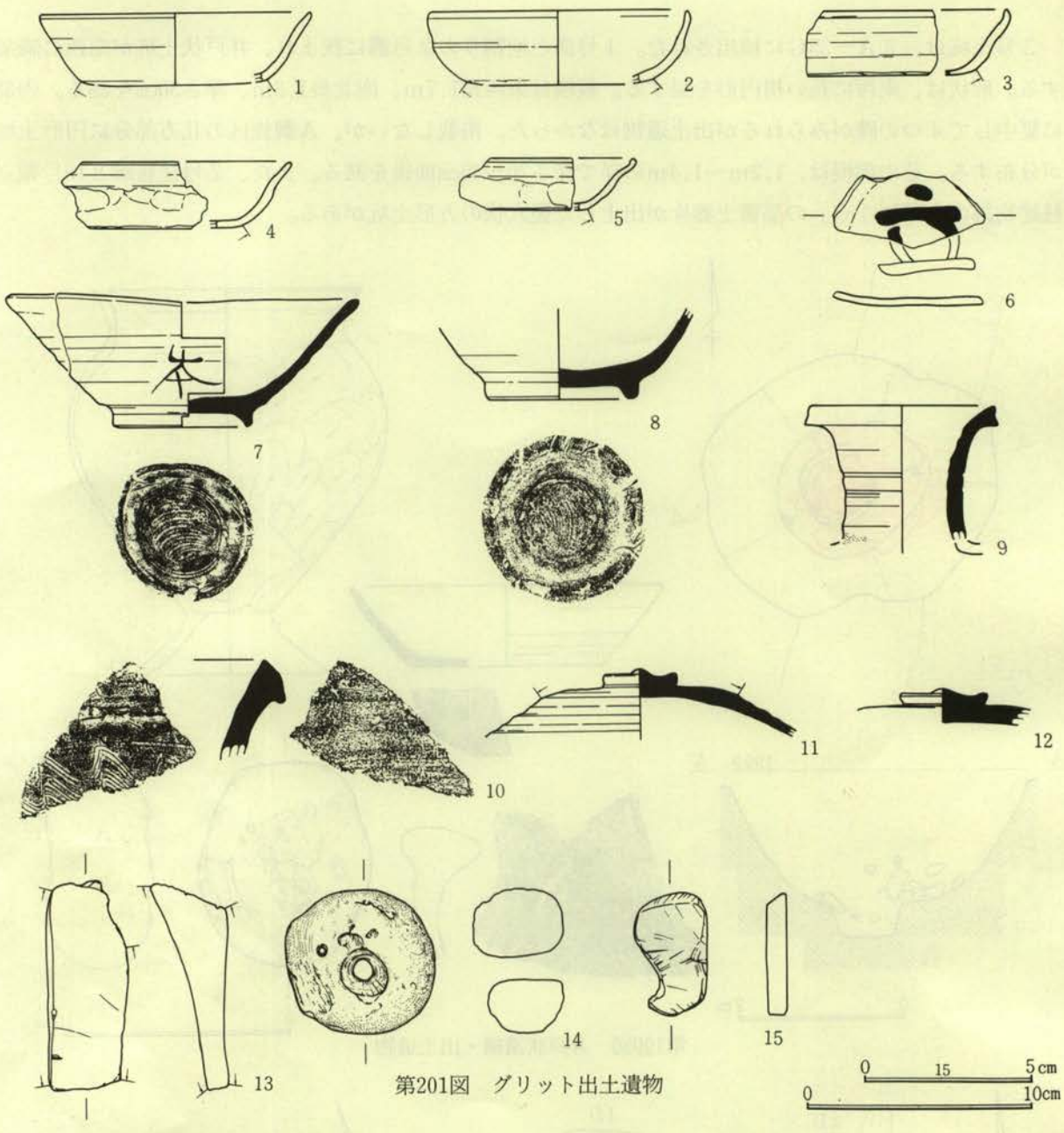
3号土坑は、3A－35Gに検出された。1号溝と地割りの2号溝に挟まれ、井戸状土坑が南西に隣接する。形状は、東西に長い楕円形を呈する。規模は東西長1.7m、南北長1.3m、深さ30cmを測る。内部に集中して4つの礫がみられるが出土遺物はなかった。掲載しないが、A調査区の北方部分に円形土坑が分布する。その規模は、1.2m～1.4mの径で深さ20～40cm前後を測る。また、2号住居跡と16号掘立柱建物跡の中間に「立」の墨書土器片が出土した竪穴状の方形土坑がある。



第199図　井戸状遺構・出土遺物



第200図　土　　坑



第201図　グリット出土遺物

井戸状遺構出土遺物観察表（第198図１～４）

No.	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
1	坏（土師器）	口径（12.0）	器高 3.2	底径 8.4	粗砂粒	良好	褐色	
2	坏（土師器）	口径（11.5）	器高 3.3		粗砂粒	良好	淡褐色	
3	坏（土師器）		器高 2.9		微砂粒	良好	褐色	
4	坏（土師器）		器高 3.0		微砂粒	良好	褐色	
5	坏（土師器）				微砂粒	良好	褐色	
6	坏（土師器）				微砂粒	良好	褐色	内面に「立」の墨書
7	高台付碗（須恵器）	口径（15.4）	器高 7.0	底部 5.8	微砂粒	良好	灰褐色	体部に「本」の墨書
8	高台付碗（須恵器）			底部 6.3	粗砂粒	良好	褐色	
9	長頸壷（須恵器）	口径 8.2			粗砂粒	良好	褐色	
10	甕（須恵器）				粗砂粒	良好	褐色	
11	蓋（酸化焔）			鈕径 3.2	粗砂粒	良好	灰褐色	
12	蓋（酸化焔）			鈕径 3.8	粗砂粒	良好	灰褐色	
13	砥石（石製品）	全長 9.2	幅 3.7	厚み 3.5	重量98.5g			石材は流紋岩
14	有孔石製品				重量72.5g			石材は軽石
15	勾玉状石製品	全長 3.7	幅 2.3	厚み 0.6	重量 8.8g			石材は滑石

第５節　中近世の遺構と遺物

１号地下式土坑（第202図）

Ａ調査区２Ｔ－30Ｇ、標高199.50ｍ前後に検出され、全体を覆う様に６号掘立柱建物跡が重複する。バックホーによる表土剝ぎ作業中に主体部の天井部が陥没した。

入り口部は1.5ｍ前後の円形で開口している。50㎝ほどロート状に掘り下げ、上面が１辺85㎝の正方形で、深さ1.4ｍほどの箱状に掘り下げている。そして北西方向に高さ90㎝、幅70㎝のアーチ状のトンネルで主体部に連結する。主体部は南辺が短い台形を呈し、東辺は中央部分がやや胴張り気味で３ｍ、北辺2.2ｍ、西辺２ｍ、南辺2.3ｍを測る。床面は僅かであるが入り口部に向けて傾斜する。天井部の高さは推定で1.6ｍ前後である。入り口部はＮ－23°－Ｗ、主体部はＮ－43°－Ｗに主軸をとる。

遺物は、主体部の床面より茶臼(4)、入り口部に塞ぐ流入土より土鍋片(1)、臼(2)、石皿片(3)が出土。

出土遺物（第202図１～４）

１は内耳土鍋の口縁部片。復元口径は27㎝、残存器高5.4㎝を測る。２は輝石安山岩の穀物臼の下臼片。３は緑色片岩の石皿片。４は輝石安山岩の茶臼の上臼。上下面の径は18.7㎝、中央部最大径20.1㎝、厚み13.7㎝、上縁幅２㎝、上縁の高さ1.7㎝、挽手穴は一辺が２㎝の方形で4.5㎝の深さ、ふくみは５㎜、分割は８分画。重量は８㎏。側面は敲打痕。

２号地下式土坑（第203図）

Ｂ調査区の南西隅部は傾斜面をＬ字形に削平している。この削平面と傾斜面を利用して３Ａ－51Ｇポイントに構築され、上部に37号住居跡が接する。

入り口部は削平面から階段を有するものと竪穴状の２カ所に設けられているが、同時に使用されたものか、作り替えなのかは不明である。

階段状の入り口部は、全長１ｍ、65～80㎝幅で30㎝前後の踏場を３段設けて主体部に入る。竪穴状入り口は、全長1.7ｍ、70～80㎝幅で深さ85㎝前後を測り、主体部と床面と平坦で連結する。天井部は崩落していたが、床面から天井部までの高さは1.4ｍ前後と推定される。

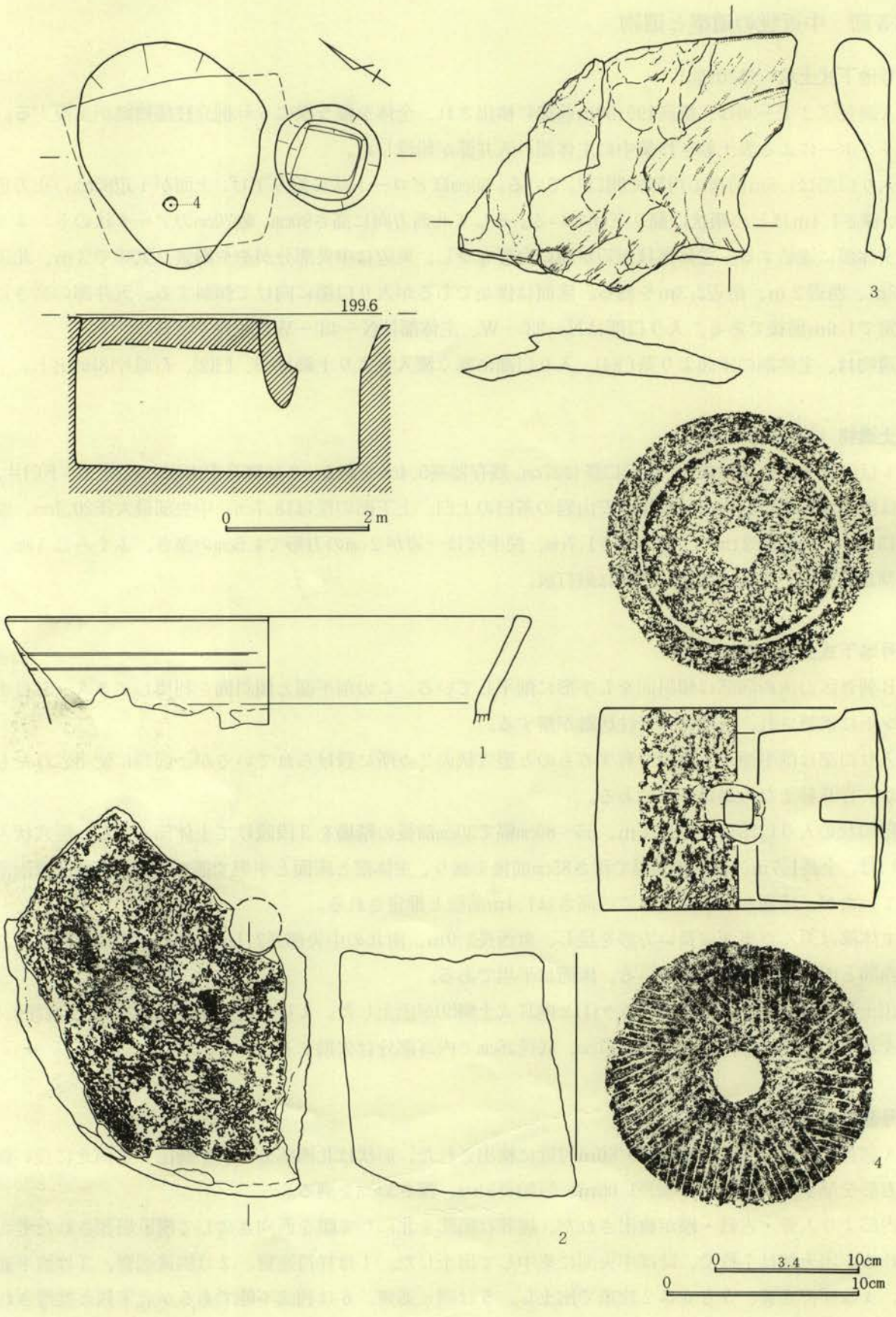
主体部は歪んだ東西に長い方形を呈し、東西長2.9ｍ、南北の中央部長2.1ｍを測る。東辺は直線的、北西隅と西隅は丸みを呈している。床面は平坦である。

出土遺物は、覆土内よりカワラケ(1)と内耳式土鍋(2)が出土した。１は口径17㎝、器高3.8㎝、底径9.4㎝を測る。２は口径32㎝、器高16.7㎝、底径26㎝で内耳部分は欠損する。

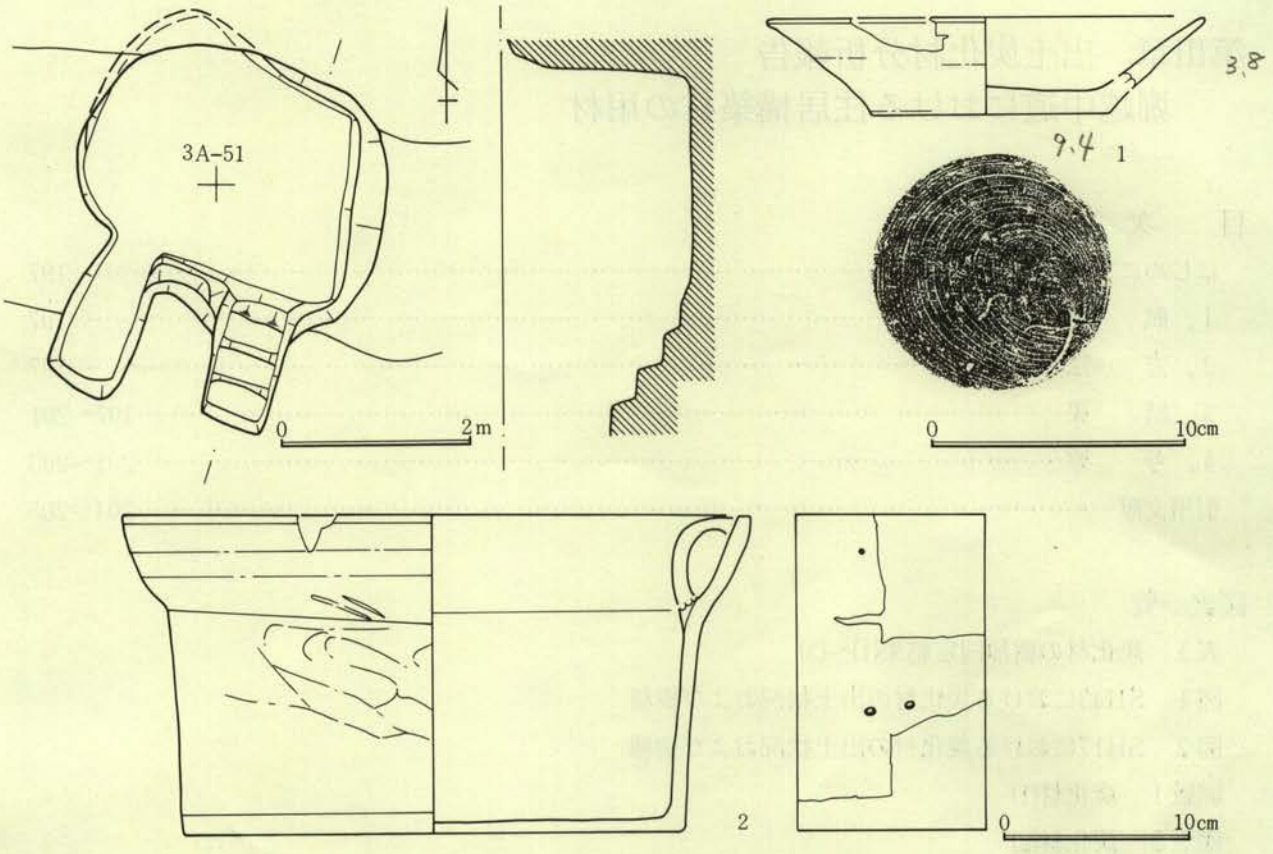
１号墓坑（第204図）

Ａ調査区３Ｂ－34Ｇ、標高199.60ｍ付近に検出された。形状は北西部分がやや突出する南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸長1.05ｍ、短軸長84㎝、深さ33㎝を測る。

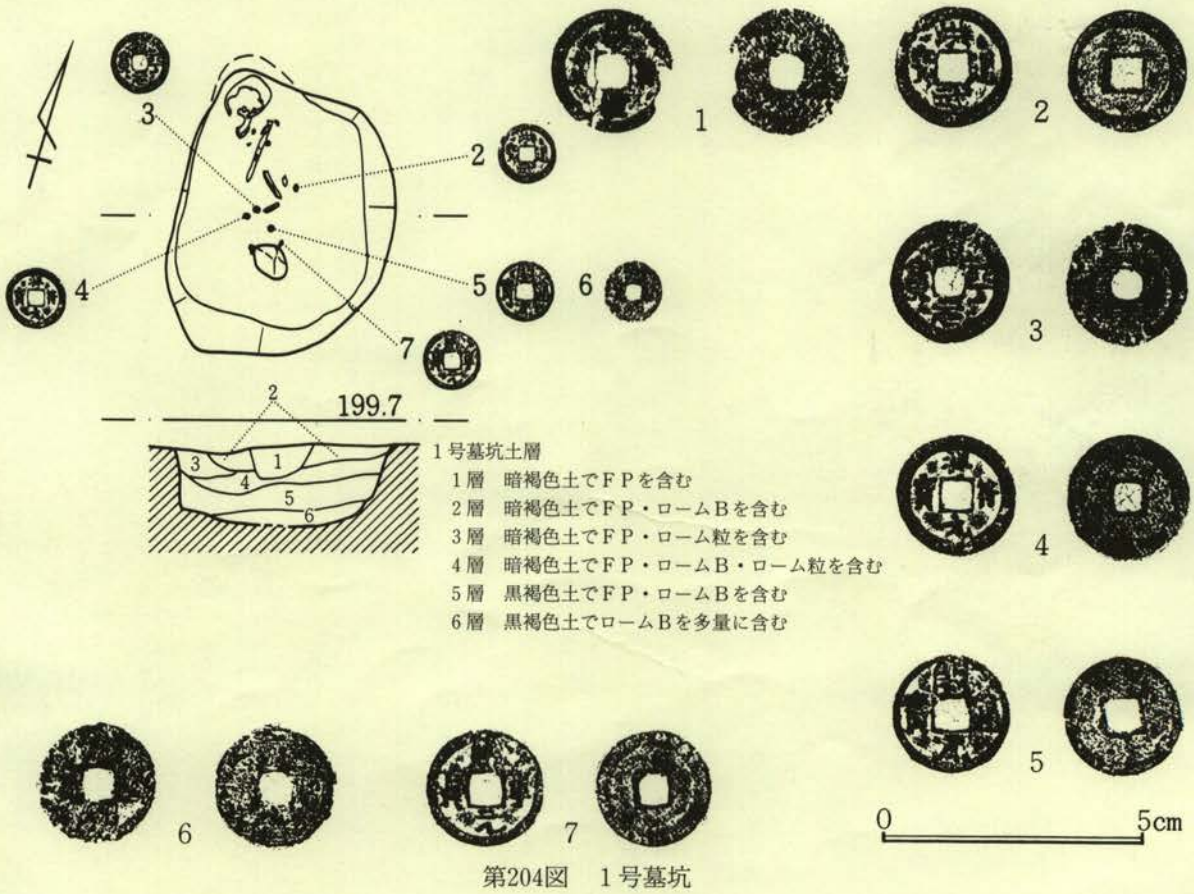
内部より人骨・古銭・礫が検出された。埋葬は頭部を北にして顔を西向きにして横臥屈葬された考えられる。出土銭は７枚で、ほぼ中央部に集中して出土した。１は祥符通寶、２は洪武通寶、３は治平通寶、４は祥符元寶、５と６は２枚重で出土し、５は開元通寶、６は判読不能であるが北宋銭と推察される。７は熙寧元寶。



第202図　1号地下式土坑・出土遺物



第203図　2号地下式土坑・出土遺物



第204図　1号墓坑

第III章　出土炭化材分析報告
堀越中道における住居構築材の用材

目　次

はじめに……197
1．試　料……197
2．方　法……197
3．結　果……197～201
4．考　察……201～203
引用文献……204～205

図表一覧

表1　炭化材の樹種同定結果(1)～(3)
図1　SH43における炭化材の出土状況および樹種
図2　SH17における炭化材の出土状況および樹種
図版1　炭化材(1)
図版2　炭化材(2)

堀越中道における住居構築材の用材

高橋　敦・橋本真紀夫
（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

堀越中道遺跡で検出された平安時代の住居跡の中には、火災によって炭化した住居構築材が認められるものがあった。同様の住居構築材は、各地で出土例があり、出土状況から住居の構造を解明したり、樹種同定から用材選択が明らかにされたりしている。関東地方では、同時代でも地域によって用材が異なることが明らかになっているが、その背景にはそれぞれの地域の植生や生業等が深く関係していると考えられている（高橋・植木，1994）。また群馬県では、榛名山東麓を中心に調査例が知られているが、同時代でも立地条件の微妙な違いや建物の用途等によって使用樹種が異なる可能性が指摘されている（橋本ほか，1996）。

本報告では、3軒の焼失家屋から出土した炭化材の樹種を明らかにし、周辺の事例などと比較しながら用材選択に関する考察を行う。

1．試　料

試料は、3軒の焼失住居跡（SH3,SH43,SH17）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材109点である。このうち、SH04番号無し試料は4袋、SH17番号無し試料は3袋に小分けされていたため、全ての袋から試料を採取した。そのため合計点数は114点となる。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2．方　法

横断面（木口）・放射断面（柾目）・接線断面（板目）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結　果

樹種同定結果を表1に記す。SH3Gには2種類が認められた。これらの炭化材には、針葉樹1種類(ヒノキ属)、広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ウコギ属）とイネ科タケ亜科が同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis*）　　**ヒノキ科**

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限っ

表 1　炭化材の樹種同定結果(1)

遺構名	時代・時期	試料番号	用途など	樹種
SH3	9 世紀代	A	住居構築材	クリ
		B	住居構築材	クリ
		C	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		D	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		E	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		F	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		G	住居構築材	クリ
			住居構築材	ウコギ属
		H	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		I	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		番号なし	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SH43	4 世紀代	A	住居構築材	ヒノキ属
		B	住居構築材(垂木？)	クリ
		C	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		D	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		E	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		F	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		G	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		H	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		I	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		J	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		K	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		L	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		M	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		N	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		O	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		P	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Q	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		R	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		S	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		T	住居構築材(壁材？)	イネ科タケ亜科
		U	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		V	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		W	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		X	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Y	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Z	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		A′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		B′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C′	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		D′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		E′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		F′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		G′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		H′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		I′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		J′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		K′	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		L′	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		M′	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表1　炭化材の樹種同定結果(2)

遺構名	時代・時期	試料番号	用途など	樹　　種
SH43	9世紀代	N′	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		O′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		P′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		Q′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		R′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		S′	住居構築材	クリ
		T′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		U′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		V′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		W′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		X′	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		Y′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Z′	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		a	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		b	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		c	住居構築材(横木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		d	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		e	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		f	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		g	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		h	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		i	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		k	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		l	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		m	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		n	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		o	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		p	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		q	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		r	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		s	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		t	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		番号無し	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SH17	9世紀代	A	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		B	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		D	住居構築材（垂木）	クリ
		E	住居構築材（垂木）	クリ
		F	住居構築材（垂木）	クリ
		G	住居構築材（垂木）	クリ
		H	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		I	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		J	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		K	住居構築材	クリ
		L	住居構築材（垂木）	クリ
		M	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		N	住居構築材（垂木）	クリ

表1　炭化材の樹種同定結果(3)

遺構名	時代・時期	試料番号	用途など	樹　　種
SH17	9世紀代	O	住居構築材（垂木）	クリ
		P	住居構築材（垂木）	クリ
		Q	住居構築材（垂木）	クリ
		R	住居構築材(垂木？)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		S	住居構築材(垂木？)	クリ
		T	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		U	住居構築材（垂木）	クリ
		V	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		W	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		X	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Y	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Z	住居構築材（垂木）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		番号無し	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

て認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～スギ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　　ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　　**ブナ科**

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　**ブナ科クリ属**

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有するが、小道管に稀に階段穿孔が認められる試料がある。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・ウコギ属（*Acanthopanax*）　　**ウコギ科**

散孔材～紋様孔材で、道管は単独または2～8個が斜～放射方向に複合し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～8細胞幅、数細胞高のものから100細胞高近いものまである。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、いわゆるタケ・ササ類である。これらを解剖学的特徴では区別することは困難であるが、試料の外観的特徴からはササ類の可能性が高い。

4．考　察

3軒の住居跡から出土した、住居構築材と考えられる炭化材には、合計6種類が確認され、クヌギ節とコナラ節がとくに多い種類構成であった（表2）。住居構築材は、出土状況（図1・2）から、その多くは垂木と考えられるが、一部の試料については横木の可能性がある。また、SH04のイネ科タケ亜科(T)は、材質や出土状況から、壁材や屋根材の一部と考えられる。

試料数が多く、出土状況も明らかなSH43およびSH17を見ると、クヌギ節とコナラ節の比率はほぼ同じであり、使用状況に違いも見られない。このことから、クヌギ節とコナラ節はほぼ同様に扱われ、種類による使い分けなどは行われていなかったことが推定される。クヌギ節・コナラ節は共に強度が高く、各地で住居構築材に確認されている。とくに関東地方では、古墳時代以降大量に使用されていたことが明らかになっている（高橋・植木,1994）。群馬県においても、赤城村勝保沢中ノ山遺跡や北橘村北町遺跡で古墳時代の住居構築材にクヌギ節・コナラ節が多数認められている。（鈴木・能城,1988；長谷川・高橋,1996）。しかし、実際にはクヌギ節・コナラ節以外の種類が確認された例が多い（山内,1983；千野,1984；三野,1985；パリノ・サーヴェイ株式会社,1989,1992ａ）。とくに、高崎市周辺では、関東地方南部の沿海地などで確認例の多いアカガシ亜属が住居構築材に使用されていた例もある（高橋,1996）。また、遺跡によって種類構成の違いが大きく、中には同じ集落内でも建物の構造や用途などによって種類構成が異なる例もある（高橋,1988ａ；橋本ほか,1993,1996）。平安時代については、渋川市半田中原・南原遺跡、北橘村芝山遺跡、安中市細田遺跡、富岡市田篠上平遺跡等で調査例が知られている（高橋,1988b；パリノ・サーヴェイ株式会社,1993；橋本ほか,1994；金原,1994）。その結果を見ると、古墳時代と同様に比較的種類数が豊富で、遺跡間での種類構成の違いも大きい。それらの結果と比較すると、今回の結果は関東地方南部の資料に比較的近い。

住居構築材の用材は、基本的には遺跡周辺の植生を反映する（高橋・植木,1994）。群馬県で種類数が多い遺跡は、榛名山東麓地域など山地に接した地域に集中している。榛名山東麓に位置する渋川市中村遺跡では、花粉分析の結果などから豊富な種類構成の落葉樹林が存在しており、そこから木材を得ていた可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1986；高橋,1988a）。

本遺跡の北約1.5kmには、今回と同時期の製鉄炉や炭窯が検出された、乙西尾引遺跡がある（藤坂,1994）。本地域の製鉄は、八ヶ峰生産址遺構の発掘調査で砂鉄溜と考えられる施設が検出されていることから（山下,1986）、砂鉄を原料としていたことが推定される。砂鉄から鉄を精製するには還元が必要であり（岸本,1984）、炭窯は製鉄のための木炭を製炭していたと考えられる。乙西尾引遺跡の製鉄炉や炭窯から検出された、製鉄燃料と考えられる炭化材の樹種同定結果は、そのほとんどがクヌギ節であり、他にはコナラ節が少数認められたのみであった（高橋・鶴原,1994）。同様の結果は、渋川市金井製鉄遺跡の製鉄炉出土炭化材や、富岡市野上塩之入遺跡の炭窯出土炭化材の樹種同定結果（大澤,1975；鈴木・能城,1991）でも確認されている。これらの結果から、クヌギ節の木材を選択的に利用していたことが推定される。これは、江戸時代の「鉄山秘書」で、製鉄燃料にはナラ類がよいとされていること（窪田,1987）と一致しており、適材を選択していたことがうかがえる。

製鉄には、燃料とするための良質の木炭が大量に必要である（窪田,1987,1991）。二之宮千足遺跡で行

表2　遺構別樹種構成

遺構名	時代・時期	樹種 部位など	ヒノキ属	クヌギ属	コナラ節	クリ	ウゴキ属	タケ亜科	合計
SH 3	9 世紀代	部位不明		7		3	1		11
SH43	4 世紀代	垂木？		12	12	1			25
		横木？		6	2				8
		部位不明	1	16	23	1		1	42
SH17	9 世紀代	垂木		13	10				23
		垂木？			1	1			2
		部位不明		2	1	1			4
合　計			1	56	49	7	1	1	115

われた花粉分析結果では、基本的に1万年前以降コナラ亜属の花粉化石が優占しており、周辺の植生がコナラ亜属を主としたものであったことが推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1992ｂ）。製鉄遺跡の立地には、原料となる砂鉄と良質の木炭となる木材が大量に得られることが条件と考えられるが、赤城山南麓では良質の砂鉄も採取できることからその条件を満たしているといえる。そのことが、赤城山南麓に製鉄遺跡が立地した背景に指摘されている（高橋・藤坂,1994)。また、薪炭を継続的に得るために、人為的な管理が行われていた可能性も指摘されている（高橋・鶴原,1994)。以上の点を考慮すれば、乙西尾引遺跡や本遺跡周辺では、クヌギ節やコナラ節を中心とした植生が見られた可能性がある。これは、住居構築材が周辺の植生を反映すると考えられることとも調和的である。本遺跡は、発掘調査の所見から官衙的な性格が指摘されており（藤坂,1996)、乙西尾引遺跡と関係があることも考えられている。その点を考慮すれば、製鉄燃料材と同じ場所から住居構築材の木材を得ていた可能性がある。

クヌギ節・コナラ節以外では、全ての住居跡でクリが見られた。クリは、推定される植生などを考慮すれば、周辺に生育していた可能性がある。乙西尾引遺跡の製鉄燃料には全く確認されていないが、それはクリが木炭としては良質ではないこと（岸本・杉浦,1980；岸本,1984）が挙げられる。一方、強度を必要とする用途には向いており、本遺跡の他にも北橘村芝山遺跡でも住居構築材に多数確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1993)。これらの結果から、各木材の材質を知った上で適材適所の選択を行っていた様子がうかがえる。またクリは、最近の研究から、縄文時代には栽培されていたことが指摘されている(辻,1996；山中ほか,1996)。クリが重要な食糧であったことを考慮すれば、平安時代においてもクリが栽培されていた可能性がある。

垂木は、渋川市中筋遺跡の例（橋本ほか,1996）から、真っ直ぐな部分が4ｍ以上ある木材を利用したと考えられる。先端の細い部分が使用できないことを考慮すれば、実際には5～6mの木材が必要であったといえる。野生のクリの巨木の中には、枝で垂木に充分な木材が得られる場合があるが、多くの場合枝から垂木を得ることは難しい。千野（1983）は、縄文時代におけるクリの管理・栽培は、収量の落ち

た老木を木材として利用し、その跡に収量の多い若木を育てていたことを指摘している。似たような管理が平安時代にも行われており、種実の収穫と木材利用という相反する利用方法を可能にしていたのかもしれない。

SH43からは針葉樹のヒノキ属が1点確認されている。ヒノキ属は、二之宮千足遺跡の奈良・平安時代の木製品にも多数確認されている（藤根,1992)。その多くは曲物であり、その他の用途も板状の加工を施すものが多い。これは、ヒノキ属の材質を生かした用材といえる。今回同定した試料は、いずれも年輪で割れており、その外観的特徴から板目板の可能性がある。しかし、焼失・埋積の過程において年輪部分で割れた可能性もあり、断定することは困難である。板材だと仮定した場合、試料は厚さ5㎜以上であったと推定される。また、壁際から出土していることから、住居の壁材が炭化した可能性がある。

SH3からは、ウコギ属が1点確認された。ウコギ属は一般に小径の灌木であり、今回の試料も直径が4㎝程度の丸棒である。試料の出土状況が不明であるが、試料の特徴およびウコギ属の材質などを考慮すれば、少なくとも垂木ではない。横木など、小径木でも利用できる部位に使用されたと考えられる。

引用文献

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　—南関東地方を中心に—．東京都埋蔵文化財センター研究論集，II，p.27-42.

千野裕道（1984）御正作遺跡より出土した木質遺存体の樹種について．「御正作遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.402-403，大泉町教育委員会．

藤根　久（1992）二之宮千足遺跡出土材の樹種．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集「二之宮千足遺跡　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（自然科学・分析編）」，p.30-49，建設省・群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査　事業団．

藤坂和延（1994）乙西尾引遺跡．「大胡西北部遺跡群　乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡　「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」，p.９-40，群馬県勢多郡大胡町教育委員会．

藤坂和延（1996）堀越中道遺跡．「群馬発掘最前線」，p.53，群馬県教育委員会．

長谷川福次・高橋　敦（1996）北橘村北町遺跡の焼失住居の構築材について．日本文化財科学会　第13回大会研究発表要旨集，p.94-95，日本文化財科学会．

橋本真紀夫・高橋　敦・大塚昌彦（1996）群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.92-93．

橋本真紀夫・馬場健二・田中義文・高橋　敦（1993）渋川市中筋遺跡（第７次調査）の自然科学分析調査．渋川市発掘調査報告書34集「中筋遺跡　第７次発掘調査報告書」，p.40-60，群馬県渋川市教育委員会．

橋本真紀夫・馬場健二・中根秀二・高橋　敦・田中義文（1994）自然科学分析．渋川市発掘調査報告書第41集「半田中原・南原遺跡」，p.731-753，群馬県企業局・渋川市教育委員会．

金原　明（1994）炭化材の分析．「中野谷地区遺跡群　—県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—　自然科学編」，p.79-84，群馬県安中市教育委員会．

岸本定吉（1984）木炭の博物誌．260p.，総合科学出版．

岸本定吉・杉浦銀治（1980）日曜炭焼き師入門．250p.，総合科学出版．

窪田蔵郎（1987）改訂　鉄の考古学．308p.，雄山閣．

窪田蔵郎（1991）鉄の文明史．262p.，雄山閣．

三野紀雄（1985）炭化した木材片の樹種同定．「糸井宮前遺跡Ⅰ　—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第８集—」，p.285-288，群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団．

大沢正己（1975）製鉄原料（砂鉄、木炭、粘土）と鉄滓の科学的分析および結果の考察．渋川市文化財発掘調査報告１「金井製鉄遺跡発掘調査報告書　—吾妻川下流域における製鉄遺跡—」，p.14-24，群馬県渋川市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986）自然化学的分析．「中村遺跡　—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC-Ⅲ）—」，p.538-596，渋川市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989）炭化材同定．「恵光寺付近遺跡　昭和63年度発掘調査概報」，p.19．山武考古学研究所．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992ａ）前畑遺跡出土材同定報告．「関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　前畑遺跡・内出Ⅰ遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡」，p.307-310，山武考古学研究所．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992ｂ）二之宮千足遺の古環境解析．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集「二之宮千足遺跡　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（自然科学・分析編）」，p.61-111，建設省・群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）芝山遺跡　炭化材・種子同定．北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第11集・北橘遺跡群発掘調査報告書Ⅲ「芝山遺跡　平成２・３年度県営富士見・北橘地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.164-170，北橘村教育委員会．

鈴木三男・能城修一（1988）群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種．「勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ」，p.180-192，群馬県教育委員会．

鈴木三男・能城修一（1991）野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種．「野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡」，p.132-134，（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団．

高橋利彦（1988a）中筋遺跡出土炭化材の樹種．渋川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡　第２次発掘調査概要報告書」，p.42-47，群馬県渋川市教育委員会．

高橋利彦（1988b）炭化材の樹種．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第84集「関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　田篠上平遺跡　後期古墳と奈良・平安時代の集落跡の調査」，p.287-293，群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・　日本道路公団．

高橋　敦（1996）群馬県から出土した鍬・鋤の用材．群馬考古学手帳，６，p.119-127，群馬県土器観会．

高橋　敦・藤坂和延（1994）赤城山南麓地域における平安時代の製鉄と植生．季刊地理学，46，p.195-196，東北地理学会．

高橋　敦・鶴原　明（1994）乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について．「大胡西北部遺跡群　乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡　「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」，p.41-49，群馬県勢多郡大胡町教育委員会．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO，p.５-18．

辻　誠一郎（1996）森のシンフォニー．「縄文の扉」，p.28-29，「縄文まほろば博」実行委員会．

山中槇介・岡田康博・佐藤洋一郎（1996）青森・三内丸山遺跡出土クリ遺体のＤＮＡ解析．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.18-19．

山内　文（1983）検出された炭化材と材木について．「井出村東遺跡　―上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　３分冊の１　本文編」，p.163，群馬県井出村東遺跡調査会．

山下歳信（1986）製鉄址遺構．大胡町発掘調査報告Ⅲ「上大屋・樋越地区遺跡群　主要地方道、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.273-279，群馬県勢多郡大胡町教育委員会．

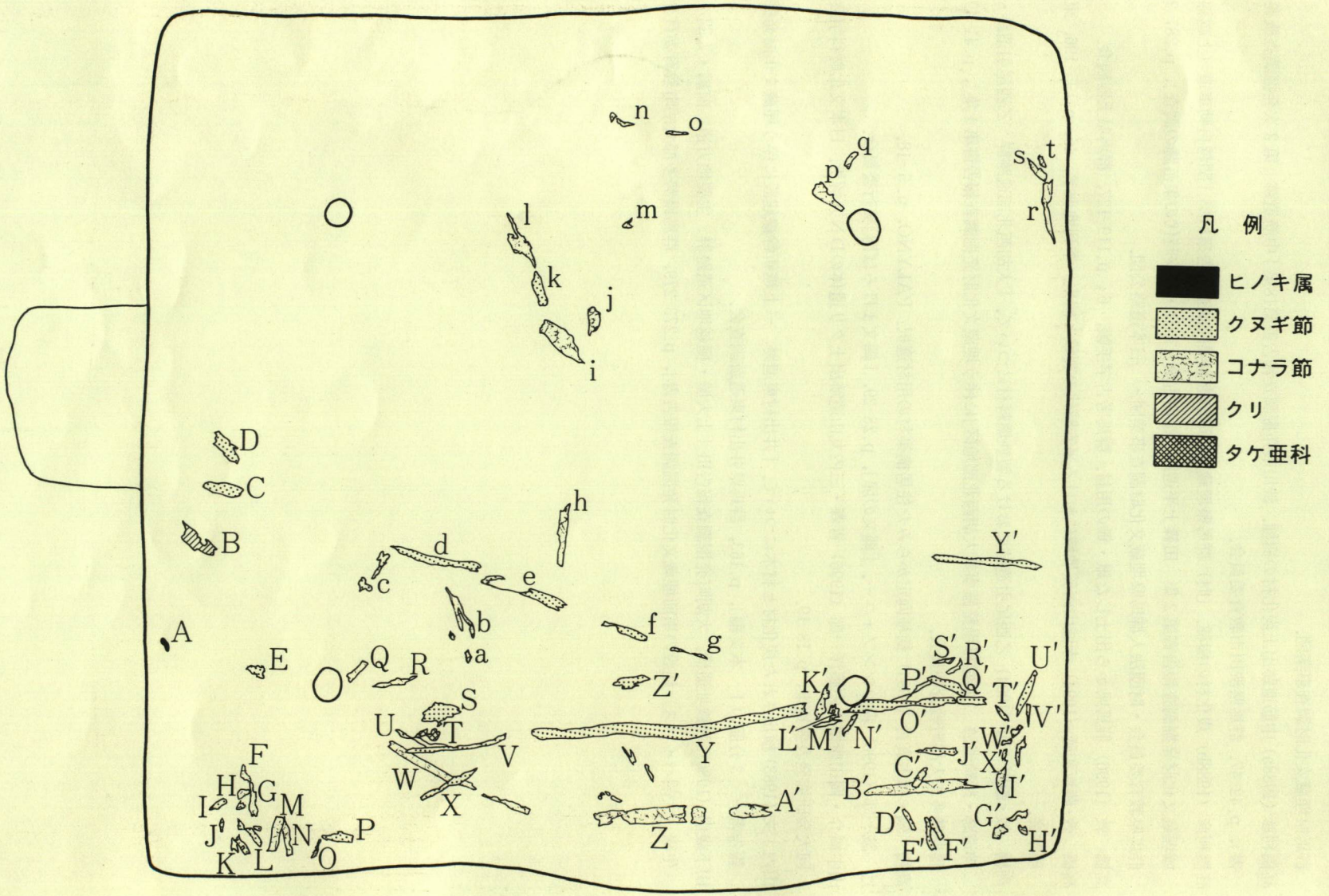


図1　43号における炭化材の出土状況および樹種

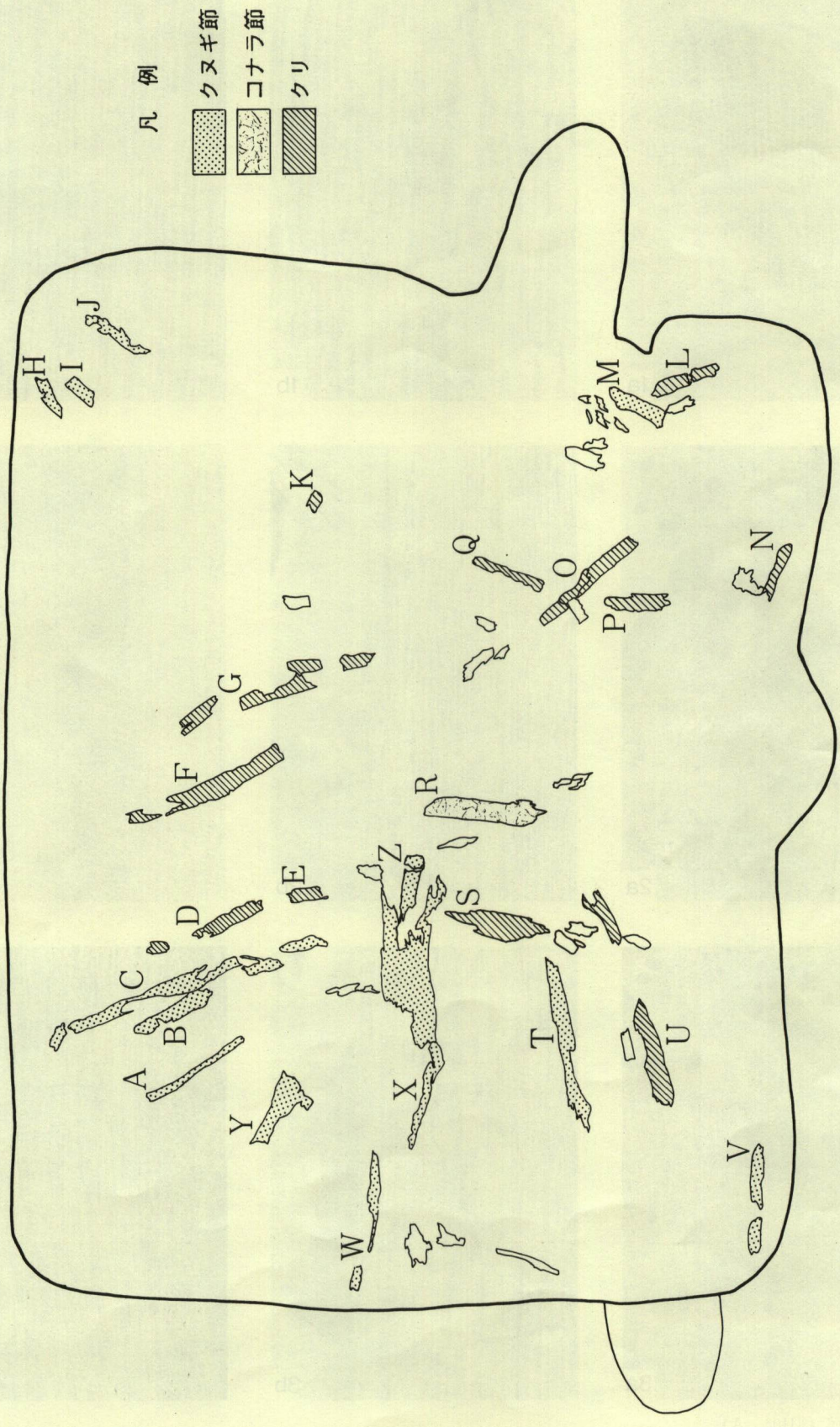
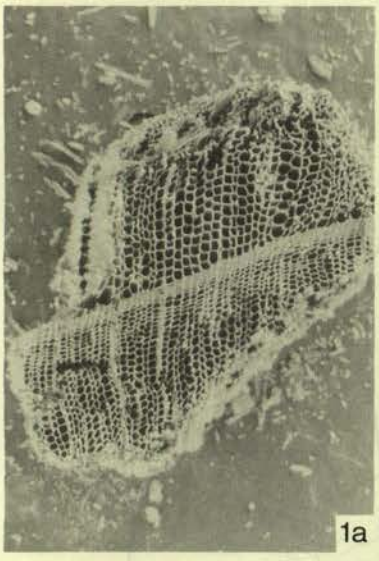
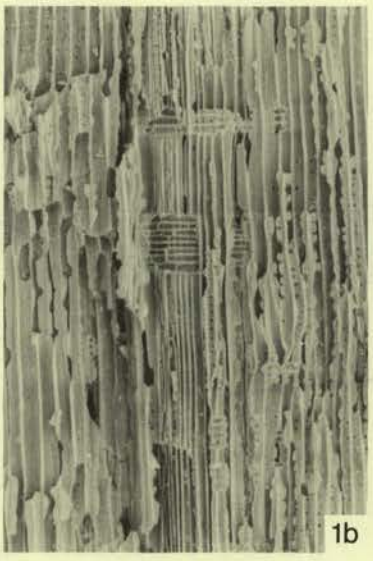


図2　17号住居における炭化材の出土状況および機種

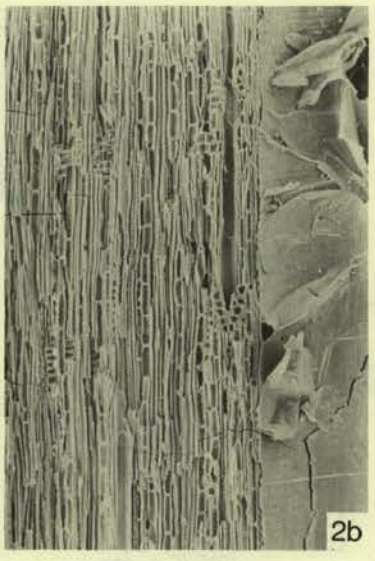
図版1　炭化材(1)

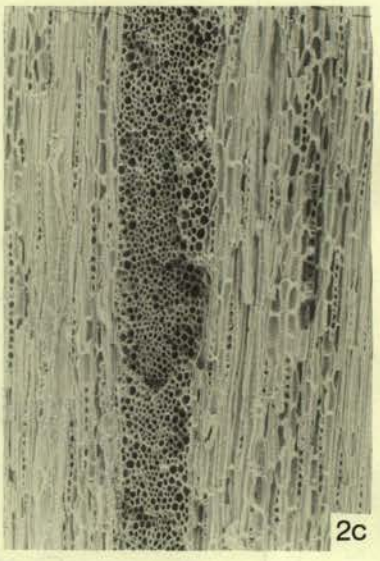

1a

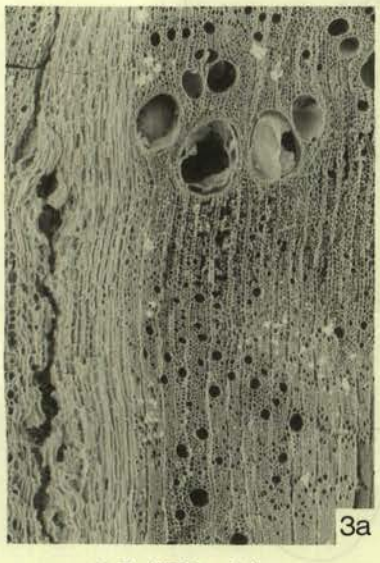

1b

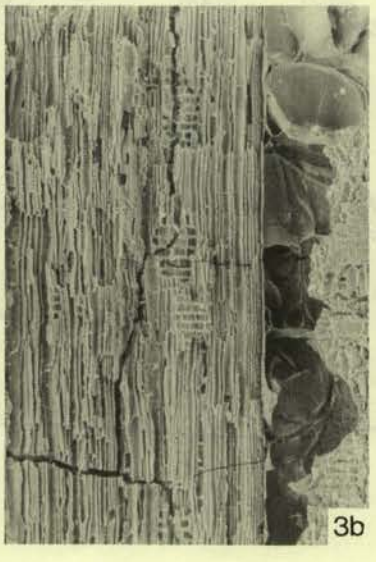
1c

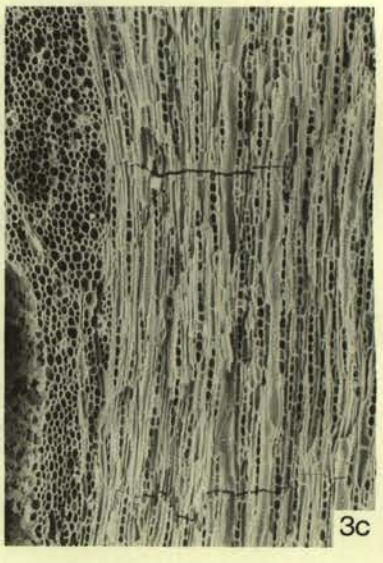
2a


2b


2c


3a

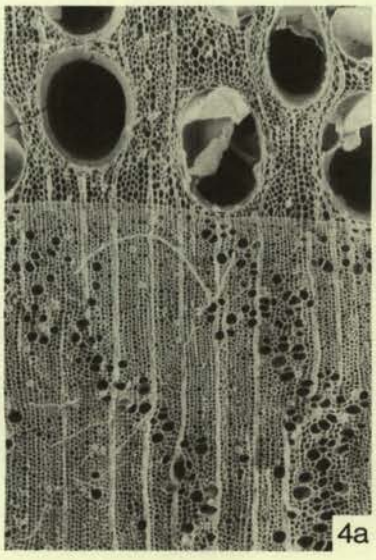

3b

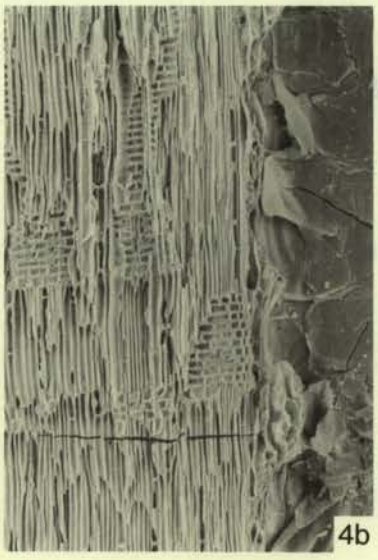

3c

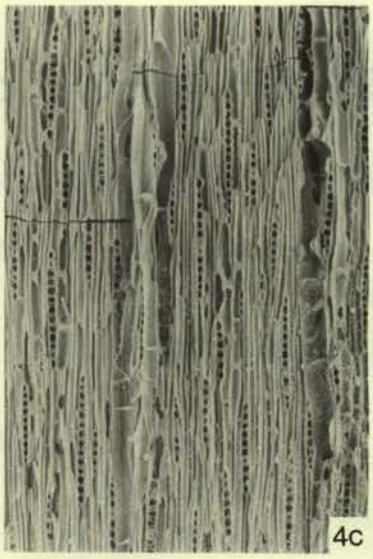
1．ヒノキ属（SH04　A）
2．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SH04　Y）
3．コナラ属コナラ亜属コナラ節（SH04　ネ）
a：横断面．b：放射断面．c　接線断面

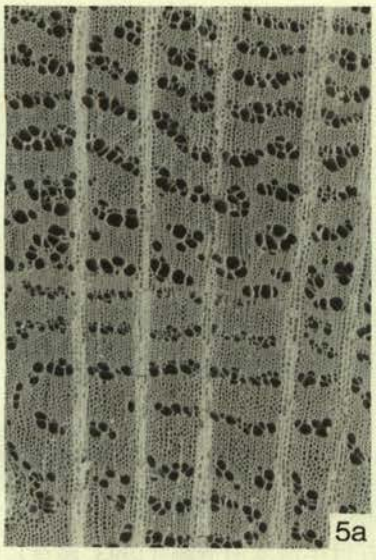
200μm：a
200μm：b，c

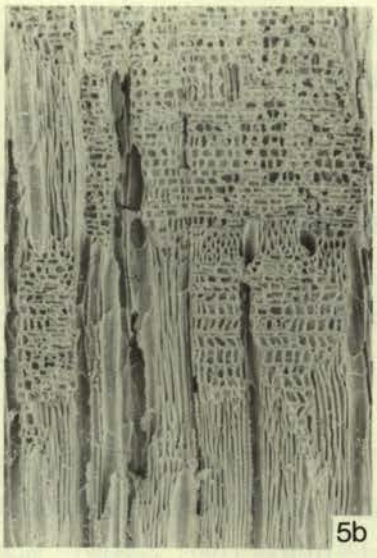
図版 2　炭化材(2)

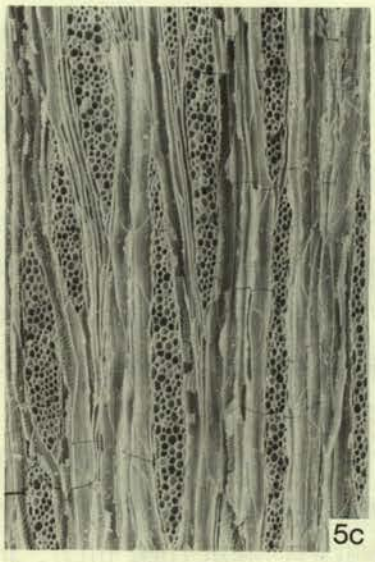

4a

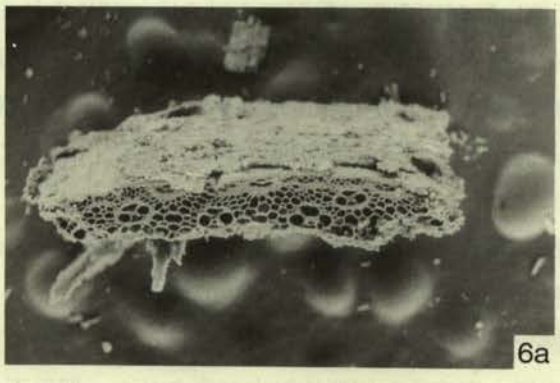

4b


4c


5a


5b


5c


6a

4．クリ（SH13　A）
5．ウゴキ属（SH 3　G）
6．イネ科タケ亜科（SH04　T）
　a：横断面．b：放射断面．c：接線断面

200μm
200μm

第Ⅳ章　調査のまとめ

第１節　縄文時代の遺物について

本遺跡から出土した土器は、縄文時代前期・中期・後期のものがある。これらの土器を大別的に分類すると、以下の通りとなる。

第Ⅰ群土器（繊維含有土器）

　第１類　二ッ木式土器

　第２類　黒浜・有尾式土器

第Ⅱ群土器（前期後葉）

　第１類　諸磯式土器

　第２類　十三菩提式土器

第Ⅲ群土器　中期加曽利Ｅ式土器を中心として

第Ⅳ群土器　後期堀之内式・加曽利Ｂ式

これらの時期で本遺跡の主体をなすのは、第Ⅰ群土器第１類の二ッ木式土器である。二ッ木式の前段階の花積下層式と関山式の中間に位置すると考えられたものとして提唱された。花積下層式は、埼玉県春日部市花積貝塚の下部貝層出土土器を標識資料として、1935年に甲野勇氏によって設定され、二ッ木式は、「千葉県東葛飾郡二ッ木貝塚」の報告書（1995年篠遠喜彦）で提唱された。

以来、多くの研究者によって諸説が発表されているが、二ッ木式土器に対しては否定的な見解もあり、未だに漠然とした認識に止まっているのが現状である。その要因は、花積下層式と関山式土器の理解及び位置づけである。

近年、群馬県における縄文前期前葉の報告事例は、赤城村諏訪西遺跡（1986 谷藤）、同村三原田城遺跡（1987 谷藤）、同村勝保沢中ノ山遺跡（1988 石坂）、前橋市芳賀東部団地遺跡Ⅲ（1990 富澤他）、赤堀町五目牛南組（1992 山口）、北橘村芝山遺跡（1993 谷藤他）、赤堀町五目牛清水田遺跡（1993 藤巻）、当町堀越芝山遺跡（1996 山下他）等が知られ、着実に資料の増加が見られる。

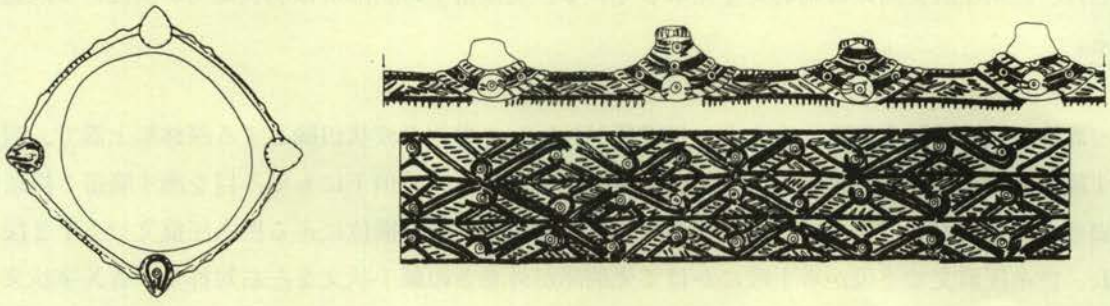
三原田城遺跡では、県内の花積下層式土器の様相が初めて報告され、谷藤氏は該期の分類と他型式との比較を行い、五目牛南組遺跡では、山口氏が花積下層土器の口縁部文様の構成について検討している。二ッ木式土器については、谷藤氏が諏訪西遺跡での細分をふまえて、「群馬の考古学」（1988）で型式確認・土器の変遷・細分を検討している。

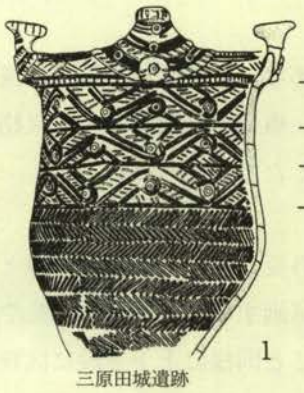
本書では、本遺跡出土の花積下層式土器の撚糸圧痕文をもつ深鉢形土器との比較を三原田城の出土土器を基準として県内の事例と併せて比較して見たい。（第205図参照）

１　**三原田城遺跡** 7号住居跡出土の深鉢形土器は、有段口縁を呈し、獣足を模したと思われる把手が２対で４カ所に配され、環状の撚糸圧痕文と円形竹管文が施される。把手下の口縁部には刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文が対で２本弧状に付され、中央で円形の隆帯が繋がり中に円形竹管を押す。

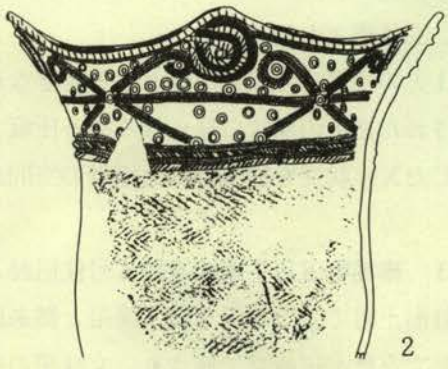
把手間の口縁部文様帯は、口唇端部と胴部との変換部分に刻み目を連続させ、撚糸圧痕文と併せて区画し、区画内を４本単位の刺切文を鋸歯状に充填する。（この口縁部分文様帯を第１文様帯とする）

胴部上半には撚糸圧痕文で区画された３帯の文様帯（上から第２・第３・第４文様帯とする）を持ち、先端部を蕨手状とする撚糸圧痕文を山形に連続し、上下の文様が対称となる。円形竹管は蕨手状の内部

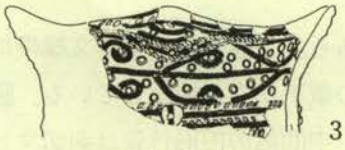




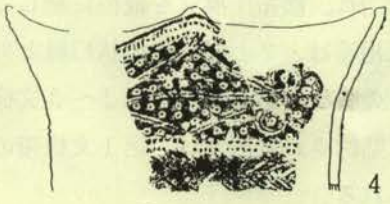
1
三原田城遺跡



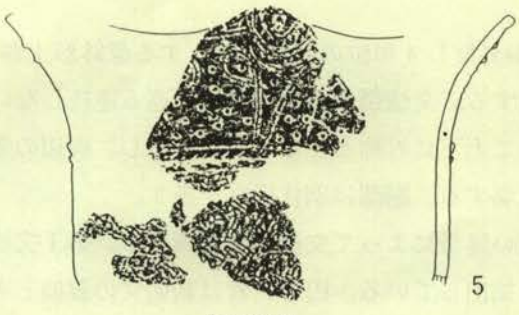
2
芝山遺跡



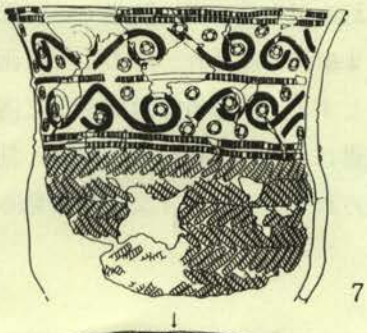
3
五目牛南組遺跡



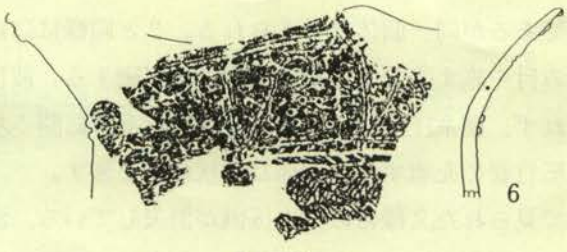
4
J 3号住居



5
J 10号住居



7



6
J 9号住居

J 3号住居

4～7　堀越中道遺跡

第205図　撚糸圧痕文を持つ土器

に押され、撚糸圧痕文間には刺切文を充填している。文様帯下の胴部には羽状縄文が横位に多段施文している。

2　**北橘村芝山遺跡**ＪＰ１より出土。口縁部が外反し４単位の波状口縁とする深鉢形土器で、刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文を併せて口縁部分文様帯を区画する。波頂下にも刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文で渦巻き状文を配し、中央に円形竹管を押す。文様帯の中央を横位に巡る撚糸圧痕文で上下２段に区画され、撚糸圧痕文で下段から上段にかけて先端部が外巻きの蕨手状文を左右対称とするＸ字状文を４単位に施す。円形竹管は起点・交点・蕨手状文内に規則的に施し、空間部をランダムに充填する。胴部は、羽状縄文を施す。

１との相違は、波状口縁とする大きな違いと刻み目を施す隆帯区画である。文様帯は、第１文様帯に付された把手の環状に見られる撚糸圧痕文と円形竹管が波頂下に配され、重畳された第２～４文様帯に生じたＸ字状文を抽出し、文様帯の空間部には刺切文を円形竹管に置換したと考えられる。

3　**赤堀町五目牛南組遺跡**４号住居跡より出土。２と同様に口縁部が外反し４単位の波状口縁とする深鉢形土器で、刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文を併せて口縁部文様帯を区画する。波頂下にはややだれた弧文が撚糸圧痕文で施され、文様帯の中央を横位に巡る撚糸圧痕文で２と同様に上下２段に区画し、上下対称気味の蕨手状文を施す。円形竹管は蕨手状文内と空間部に充填する。胴部との区画帯には円文が貼付され、撚糸圧痕文を縦位に施している。

１と相違は、２と同様に波状口縁と刻み目を施す隆帯区画である。文様帯は、第１文様帯に付された把手下の弧文が継承され、第２～３文様帯に見られる上下対称の蕨手状文を抽出している。胴部との区画帯に貼付された円文は、第１文様帯の弧文に貼付される円文、空間部の円形竹管は刺切文との置換と考えられる。

4　**本遺跡Ｊ３号住居跡**より出土。２と同様に口縁部が外反し４単位の波状口縁とする深鉢形土器で、２本１組の刻み目を施す細い隆帯で口縁部文様帯を区画する。文様帯の中央を横位に巡る連続しない撚糸圧痕文が４単位で施され、その中央区画文を底辺として上下に対称とする三角文を配し、両辺の先端部を蕨手状とする。円形竹管は蕨手状文内と空間部に充填する。胴部は羽状縄文を施す。

１との相違は、２と同様に波状口縁と刻み目を施す細い隆帯によって文様帯を区画する。第１文様帯の継承は見られず、第２～４文様帯に見られる菱形文を抽出している。円形竹管は刺切文の置換と考えられる。

5　**本遺跡Ｊ10号住居跡**、６はＪ９号住居跡の出土であるが同一個体と考えられる。２と同様に口縁部が外反し４単位の波状口縁とする深鉢形土器で、刻み目を施す隆帯で口縁部文様帯を区画する。波頂下にも同じ隆帯を弧状に配する。区画内の細分は見られず、撚糸圧痕文で胴部区画帯から上方に開く左右対称となる２本１組の蕨手状文を施す。空間部は円形竹管で充填する。胴部は羽状縄文を施す。

１との相違は、２と同様に波状口縁であるが２や３で見られた文様帯の中央区画が消失している。波頂下には第１文様帯に見られる弧文が残存する。主文様は撚糸圧痕文による蕨手状文である。空間部は刺切文を円形竹管に置換して充填したと考えられる。丘陵第11号には澁谷氏が紹介している多摩ニュー

タウンNo.27遺跡で類似するものが出土している。

7　本遺跡J3号住居跡より4と共伴して出土。1～5と大きな相違は、平口縁である。刻み目を施す2本1組の隆帯で口縁部文様帯を区画し、内部を同じ隆帯1本で上下区画する。上下の区画内は撚糸圧痕文で蕨手状文を上下に対称として施す。円形竹管は蕨手状文内と空間部に施す。

1との相違は、平口縁と刻み目を施す隆帯区画にある。文様帯の土器に占める割合を考えると第1と第2文様帯部分を欠く比率で、第3と第4文様帯部分を継承し、蕨手状文のみを抽出している。

1と2～7の比較では、有段口縁が見られなくなり、7を除き波状口縁を呈する。1の緩やかな波状を呈す波頂部に付された把手部分を欠如すると7を除く波状口縁となる。1に見られた特徴は2・3・5の波頂下に見られ、撚糸圧痕文による環状の渦巻き文は2、弧文は3と5、3の胴部区画帯に見られる円文は1の弧文に貼付された円文の移動貼付として継承されたと推察される。

文様帯区画は、2・3・5・6が第一文様帯と同じ様に刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文を併せて巡らすが、4は2本1組の刻み目を施す細い隆帯に変化している。2～4の区画内の細分は第2～第4文様帯の継承と考えられる。5は単帯に変化している。

区画内の文様は、第2～4文様帯からの抽出が看取され、上下か左右対称に蕨手状を施し、1の刺切文が円形竹管に置換され、空間部等を加飾している。

7は第1文様帯の有段口縁を欠く文様構成の土器に転化すると考えられ、撚糸圧痕文から刻み目を施す細い隆帯で区画する変化が4と同様に見られる。

2～6に見られる波状口縁とする深鉢形土器は、撚糸圧痕文による蕨手状文を主文様とし、1に見られる撚糸圧痕文による蕨手状文・刺切文・円形竹管等による器面加飾の飽和状態から脱却した様相を見せる。1の土器に占める第1と第2文様帯部分が、2～6は胴部上半から大きく外反する単帯の口縁部文様帯に集約している。その区画は、1の系譜につながる刻み目を施す隆帯と撚糸圧痕文を併せて用いるものと新しい要素である刻み目を施す細い隆帯のものが見られる。この単帯の文様帯に第1文様帯に見られる渦巻き文や弧文を波頂下に継承し、多段化した第2～4文様帯の主文様である撚糸圧痕文による蕨手状文を抽出して上下か左右対称の文様を施している。

空間部の加飾は、1が把手下を除き円形竹管を第2～4文様帯の蕨手状文内のみに使用し、他の空間部分は刺切文を充填する。2～7は円形竹管のみで充填している。

1の土器は、菊名貝塚や黒川東遺跡に見られる蕨手状文の先端が巻ききらない撚糸圧痕文を主文様として多段文様帯に施す系統として理解され、花積下層III式の様相である。1との比較の中でスムーズな文様の抽出が看取されたが、2～7との大きな相違は谷藤氏が花積下層式と二ッ木式との型式を分離する最大の要素として刻み目を施す隆帯で文様帯区画することを提示し、文様抽出の変化を「撚糸圧痕→刻み細隆帯→併行沈線への移行・置き換え」として二ッ木式の細分し、二ッ木1式を「肥厚口縁から刻み隆帯への変化、文様の重畳から単一的な文様変化、さらに撚糸側面圧痕と共に刻み隆帯をも併せた文様」とした。

この細分に準拠すると花積下層III式の要素を色濃く継承する二ッ木1式の古段階と理解され、4や7に見られる刻み目細隆帯が後出し、継続すると考えられる。本町の横沢新屋敷遺跡や堀越芝山遺跡に見られる 二ッ木式を概観すると代表的な主文様である蕨手状文の変化は、「撚糸圧痕文→撚糸圧痕文＋刻み目細隆帯→併行沈線」が見られ、谷藤氏の細分案に同調するものである。

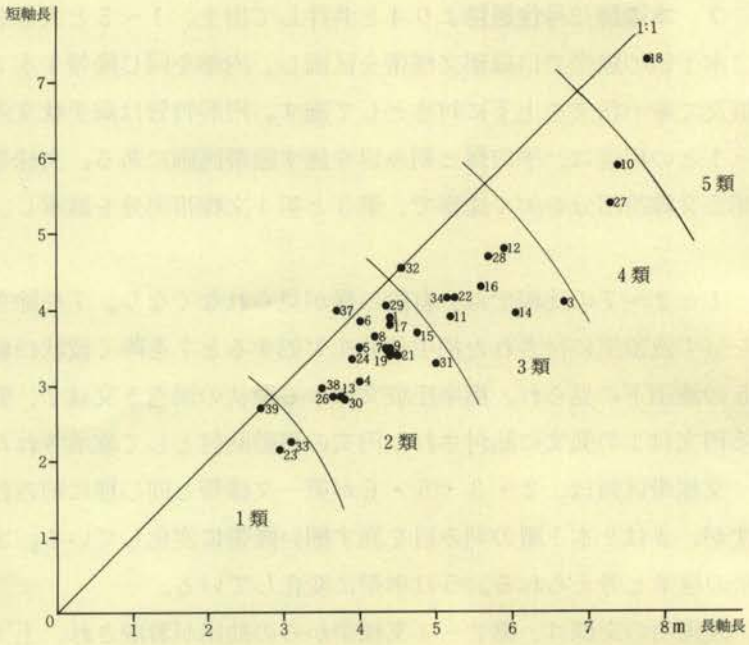
第2節　歴史時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

長軸長と短軸長による規模分類を第1表に（計測可能な住居跡34軒）まとめた。1～5分類し、1類―小型、2類―中型、3類―大型、4類―特大型、5類―超特大型とした。

面積分類では10㎡から5㎡刻みでI～IX類の9分類とした。

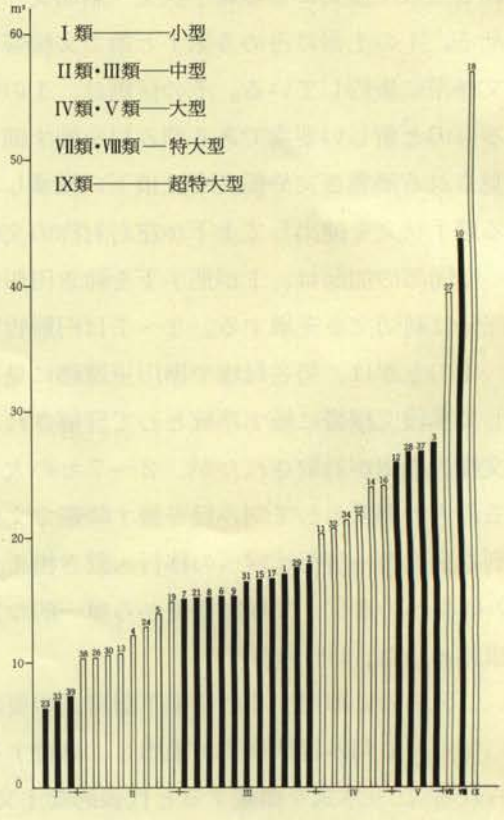
1類―小型は、面積分類I類の10㎡以下の3軒である。その分布は、北方、中央寄り、南方に分散している。2類―中型は、19軒で56%を占め、面積分類のII・III類に37号住居跡を除いて10～20㎡の範囲に該当する。その分布は、中央部の東西に集中する。3類―大型は7軒で20%を占め、IVとV類の20～30㎡の範囲である。その分布は南北の縦長で東寄りにある。4類―特大型は2軒で、35～45㎡の面積で中央部の南北に位置する。5類の18号住居跡は、一辺が7mを越える方形で面積は57㎡であり、集落跡で異彩を放つ超特大型の住居跡である。



第1表　竪穴住居跡規模分類

面積分類（第2表）

I類	10㎡以下	23 33 39
II類	10～15㎡	4 5 13 19 24 26 30 38
III類	15～20㎡	1 2 6 7 8 9 15 17 21 29 31
IV類	20～25㎡	11 14 16 22 32 34
V類	25～30㎡	3 12 28 37
VI類	30～35㎡	
VII類	35～40㎡	27
VIII類	40～45㎡	10
IX類	45㎡以上	18



第2表　竪穴住居跡面積分類

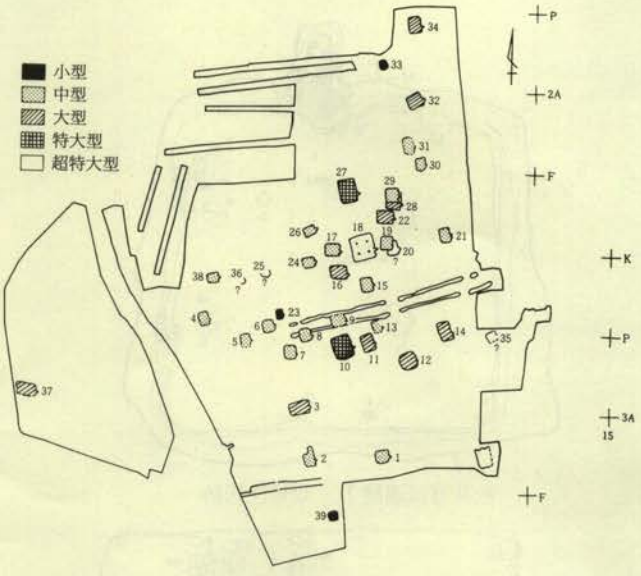
超特大型の18号住居跡は礎石を有し、特大型の10号住居跡は主柱穴の存在が考えられる粘土化した皿状窪みが検出されている。主柱穴の荷重により生じたものか、構築時の普請なのか明確でない。同じく特大型の27号住居跡、大型の28号・12号住居跡は2本柱穴である。

中型～小型の住居跡には主柱穴と考えられる柱穴は検出

されなかった。所謂、無柱穴の住居跡である。礎石・柱穴を有する住居跡の優位性が認められる。

当集落の竪穴住居跡の核となる18号礎石建ち竪穴住居跡は、北壁に検出された柱穴から一般住居より大きな加重に耐えられる骨組構造が考えられ、大きく高い垂木を地面に立てない側壁式(1986 宮本) の上屋が推察される。

県内では、糸井宮前遺跡Ⅰ (1985 石守他) の9世紀後半に位置付けされた32号住居址が知られている。4本柱穴から礎石に移行し、礎石に加工痕が認められるものが存在し、同報文に津金沢氏はその加工痕について、分割途中で加工が中止されているが、その加工技術は専門的知識を有した人物によるものと推察している。



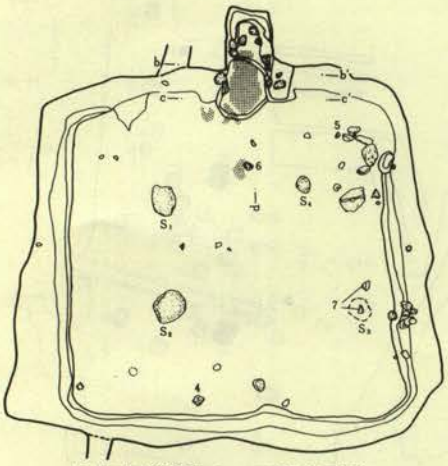
第206図　竪穴住居跡規模分類図

山梨県では、青木北遺跡 (1992 森)・前田遺跡の2例がある。青木北遺跡の4号住居跡は、壁沿いに礎石がある。掘立柱建物を竪穴住居に導入した形態である。9世紀中葉から後半の首長層の住居と考えられ、大陸系文化の影響を受けている可能性を示唆している。

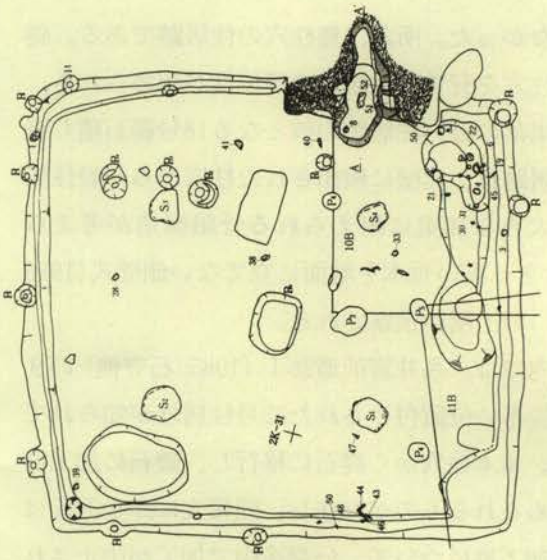
岐阜県では、国府町の2例が知られている。塚田遺跡と桜木遺跡で4本柱の主柱穴部分に礎石をもつ住居跡が検出されており、本遺跡と類似する。飛騨考古学会会報　第50号に礎石をもつ住居跡について「寺院建築の技術が取り入れられたものと解され、当時飛騨から都へ上がり、寺院建築にかかわったのではないか」と八賀教授のコメントがのせられている。

長野県では、松本盆地を中心とした中央自動車道長野線関連の発掘調査で礎石を有する大型住居跡が多く検出されている。北方遺跡 (1989 小口他)、下神遺跡 (1990 石上他)、南栗遺跡 (1990 市村他)、三の宮遺跡 (1990 望月他)、北栗遺跡 (1990 百瀬他)、他に駒ヶ根市反目南遺跡、箕輪町中道遺跡等が報告されている。これらの累積した資料に基づき、総論編 (1990 望月他) で竪穴住居跡等の遺構・遺物の考察をおこなっている。礎石を有する竪穴住居跡は、4本の主柱穴が礎石に替わり4本建ちの上屋構造を取るものと掘立柱とする建物を竪穴住居内に据えた礎石上に構築するものに大別される。これらは、一辺が5mを越える大型のものであり、各集落で際立つ存在である。9～10世紀半頃に礎石・柱穴を有する住居跡の優位性が示されているとしている。

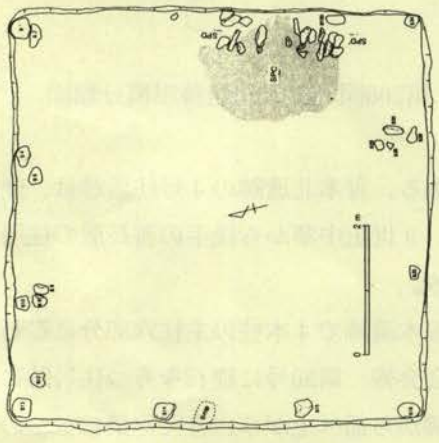
埼玉県では、阿知越遺跡 (1983 鈴木) の6号住居跡では、一部に礎石を使用した例が見られる。出土品から下級官人層に連なる者の住居跡と推定している。



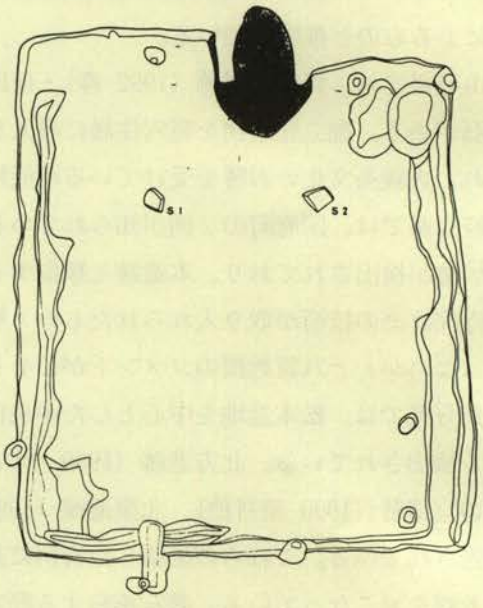
糸井宮前遺跡Ⅰ　32号住居跡



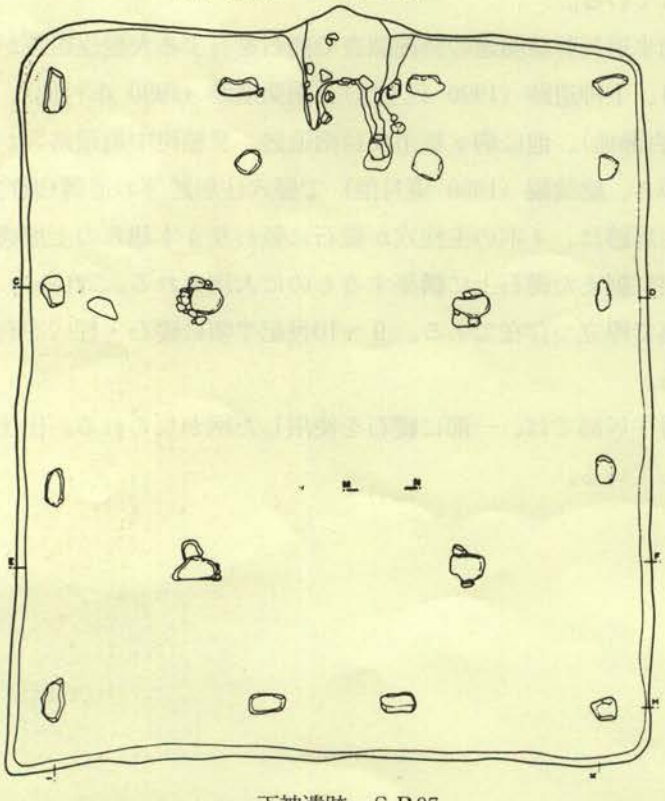
堀越中道遺跡　18号住居跡



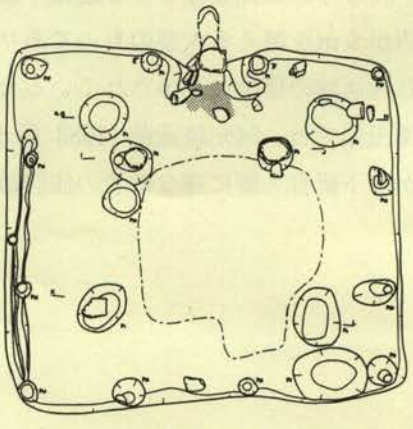
青木北遺跡　4号住居跡



阿知越遺跡Ⅰ　6号住居跡



下神遺跡　SB97



南栗遺跡　SB555

第207図　礎石建ち竪穴住居跡集成

(2) 掘立柱建物跡

本遺跡は、掘立柱建物跡（拡張を含め）41棟と竪穴住居跡（南東竪穴遺構を含め）40軒とほぼ同数に近い割合で遺構が検出され、県内を概観しても特異な状況である。

構造分類（梁行と桁行の柱間）でA～H類の8分類(第3表)、面積分類で5分種(第4表)、棟方向分類の分類（第5表）に基づき、掘立柱建物跡模式図分類（第208図）を作成した。

構造分類　　[　] は庇付建物の身舎部分

A類　1間×1間　25

B類　2間×1間　36

C類　2間×2間　2　2′3　4　5　5′
9　10　11　14　16　17
19　20　21　22　23　24
26　[27]　28　32　35

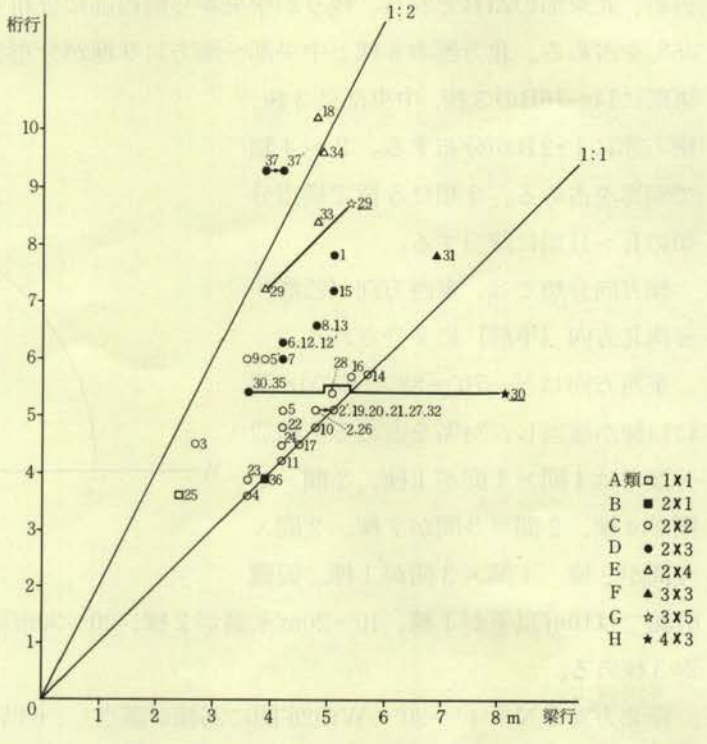
D類　2間×3間　1　6　7　8　12　12’
13　15　[18]　[30]　33
37　37′

E類　2間×4間　18　[29]　34

F類　3間×3間　31

G類　3間×5間　29

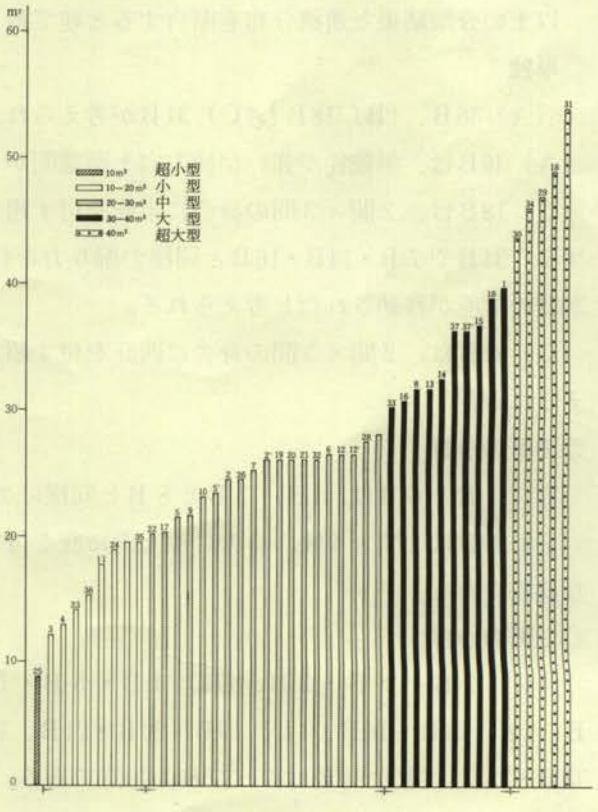
H類　4間×3間　30



第3表　構造分類

検出された41棟(建て替え、拡張を含む)は、その総てがA調査区に確認された。梁行と桁行の構造分類（庇部分を含める）では、A～H類の8種に分かれ、C類の2間×2間が23棟で56%、次にD類の2間×3間が13棟で32%である。両者の26棟で88%をしめている。

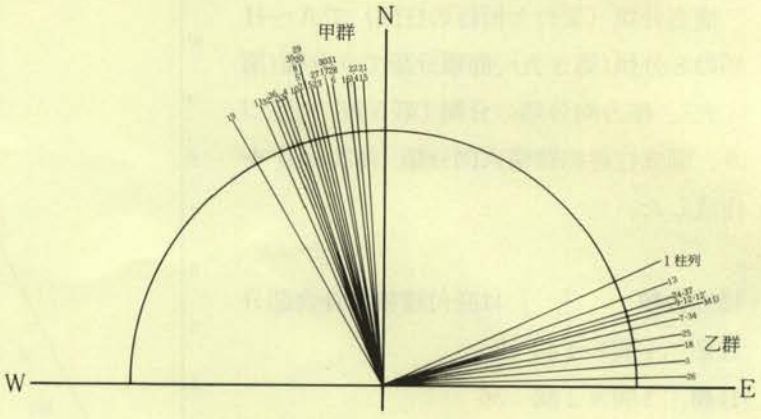
A類の25Bは北東隅、B類の36Bは最も西よりに位置する。両者とも掘立柱建物跡の集中部より外縁にある。C類は全体に分布し、2～5B・35Bが南北に縦列し、24Bを除いて環状気味に分布する。D類は中央部やや北寄りから南方に分布する。E類～H類の大型建物跡5棟は、29～31B・33・34Bが南北に縦列して分布し、18Bを中心としてB類が環



第4表　面積分類

状気味に配置されている。

面積分類は5分類し、1類（10㎡以下）は1間×1間の25Bがあり、2類（10～20㎡）は7棟で18%を占め、北東部の23Bと24B、残りが中央から南西部に分布する。3類（20～30㎡）は19棟が検出され、46%を占める。北方部の8棟と中央部～南方に9棟が分布する。4類（30～40㎡）は9棟で22%を占め、東部に14～16Bの3棟、中央部に3棟、南方部に1・2Bが分布する。2～4類で85%を占める。5類は5棟で構造分類のE～H類に該当する。



第5表　棟方向分類

棟方向分類では、東西方向（乙群）と南北方向（甲群）に2分される。

東西方向はN—70°～88°—Eの18°間に14棟が該当し、34%を占める。構造分類では1間×1間が1棟、2間×2間が4棟、2間×3間が7棟、2間×4間が2棟、4間×3間が1棟。面積分類では10㎡以下が1棟、10～20㎡未満が2棟、20～30㎡未満が6棟、30～40㎡未満が3棟、40㎡以上が3棟ある。

南北方向はN—4°～30°—Wの26°間に26棟が該当し、63%を占める。構造分類では2間×1間が1棟、2間×2間が19棟、2間×3間が4棟、3間×3間と4間×5間が1棟づつである。面積分類では10～20㎡以下が5棟、20～30㎡以下が12棟、30～40㎡以下が6棟、40㎡以上が2棟である。

以上の分類結果と遺構分布を照合すると建て替え・移動の状況が小群（第209図）で観察される。

◎単独

（A）36B、（B）18B、（C）31Bが考えられ、18Bと31Bは核となる建物である。

（A）36Bは、単独性が強いが棟方向と距離間から（J）や（Q）との関連が推察される。

（B）18Bは、2間×3間の身舎に東庇を付す超大型の建物で、道路址の中央入り口のほぼ正面に位置する。31Bや7B・14B・16Bと同様の掘り方を有することから同時期の構築が推察され、（F）29B・30Bの機能が移動されたと考えられる。

（C）31Bは、2間×3間の身舎に西庇を付す超大型の建物で、周辺の建物機能が集約された建物と考えられる。

◎2軒の小群

（D）1Bと6Bは、（E）7Bと8Bと同様に2間×3間の構造で、両者は棟方向がほぼ直角である。

（F）29Bは2間×4間の身舎に東と南に庇を付し、30Bは2間×3間の身舎に東と西に庇を付す特種な建物である。

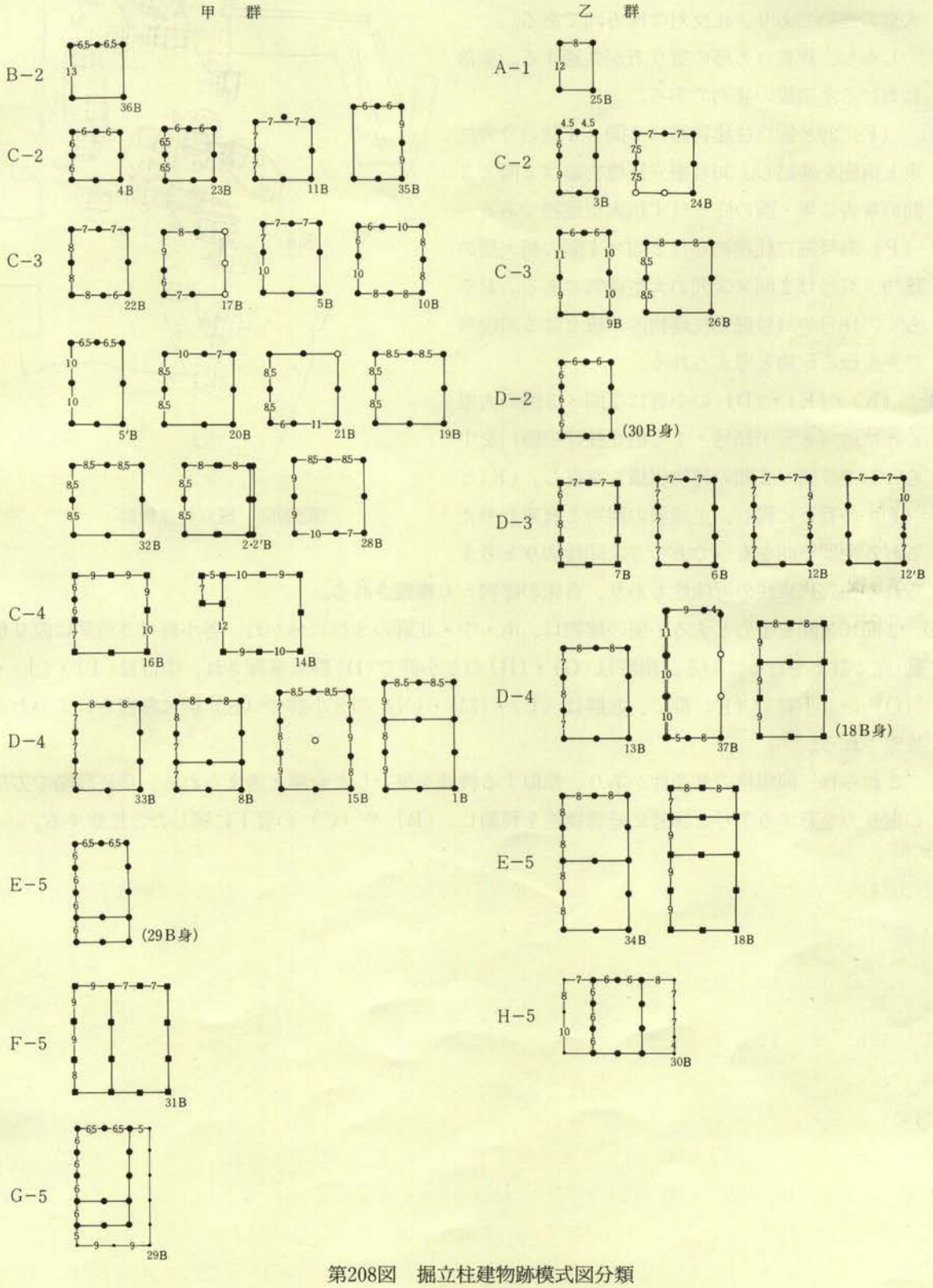
◎3軒の小群

（G）2B・2′B・3B、（H）4B・5B・5′B、（I）9B・10B・11B、（J）12B・12′B・13B、（K）14B～16B、（L）19B・20B・21B、（M）17B・22B・23B、（N）26～28B、（O）32B・33B・35B、（P）34Bと37・37′Bの10群である。2間×2間の同じ構造の群は、（G）・（H）・（I）と南部群と（L）・（M）・（N）の北部群に2分される。（K）と（O）は2間×2間と2間×3間、（P）

は2間×3間と2間×4間の特大～超特大の建物である。

◎その他

（Q）24Bと25Bの2棟はL～Mと隔たって位置する。



第208図　掘立柱建物跡模式図分類

これらを総合して掘立柱建物の構成を推測する。

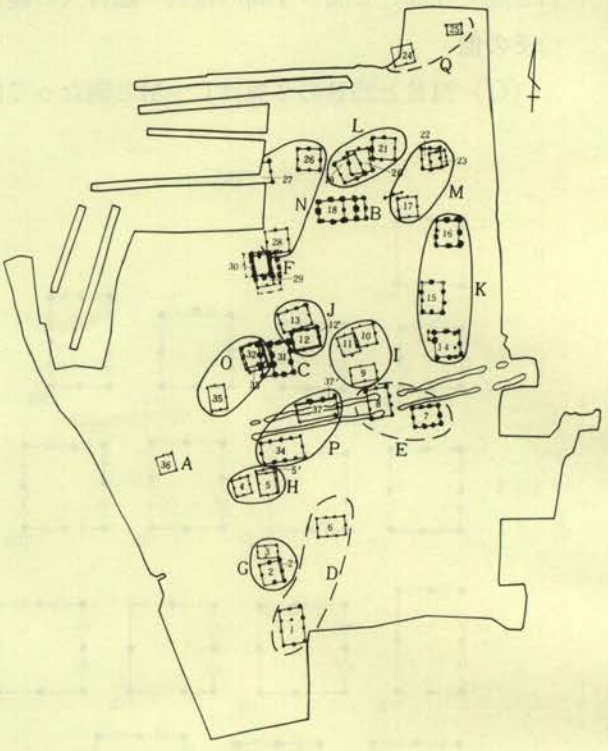
(1) 核となる超大型の建物跡で、(B)18号掘立柱建物跡は2間×4間の身舎に東庇を付し、(C)31号掘立柱建物跡は2間×3間の身舎の西庇を付す超大型の建物であり、正反対な棟方向である。

しかし、両者は方形の掘り方が共通する。集落における主屋級の建物である。

(2) (F) 29号掘立柱建物跡は2間×4間の身舎に東と南庇を連結し、30号掘立柱建物跡は2間×3間の身舎に東・西の庇を付す超大型建物である。

(P) 34号掘立柱建物跡は2間×4間の超大型の建物、37号は2間×3間の大型建物である。おそらく、18号や31号掘立柱建物跡が核となる前段階の主屋級の建物と考えられる。

(3) (K)・(E)・(D) の小群は2間×3間の大型の建物跡 (8号・15号・1号掘立柱建物跡) を中心として2間×2間の建物組織を掌握し、(F)と (P) の管下に属し、主屋級の建物と倉庫と考えられる中間機能をもつであろう。間仕切りと考えられる柱穴は束柱の可能性もあり、有床の建物とも推察される。



第209図　掘立柱建物群

(4) 2間×2間を中心とする小型の建物は、南・中・北群の3群に分かれ、各小群は3時期に渡り移動・建て替えを行っている。南群は(G)・(H)の2小群で(D)群に掌握され、中群は(I)・(J)・(O)の3小群で (E) 群に、北群は (L)・(M)・(N) の3小群で (K) 群に掌握されていたと推察される。

これらは、同規格の共通性があり、類似する機能を果たした倉庫と考えられる。最終段階で方形の掘り方を有する7号と16号に建物機能を移動し、(B) や (C) の管下に属したと推察する。

(3) 出土遺物について

本遺跡では、A調査区を主体として竪穴住居跡、掘立柱建物跡、道路址、土坑、井戸状遺構、石敷遺構などが検出され、遺構に伴って平安時代を主体とする多数の遺物が出土した。

こうした歴史時代の土器を中心とした研究は、井上氏により「群馬県下の歴史時代の土器」（群馬県史研究 第八号 1978）で先鞭が付けられ、筆者も本町の天神風呂遺跡（1981）の報文で遺跡内の編年試案を提示した。以後、多くの研究者により遺跡調査報告書で個別遺跡の土器様相と変遷が追求されてきた。

坂口・三浦氏は「奈良・平安時代の土器編年」（群馬県史研究 第二十四号 1986）で中尾遺跡の出土遺物を根幹として県内全域の対応を四半世紀刻みで試み、現在でも、編年研究に大きく寄与している。（以後は坂口・三浦論文）

各遺構から出土した土器には、土師器坏、高台付碗、甕、黒色土器、須恵器坏、坏蓋、灰釉陶器などが見られ、これらの中で住居跡から普遍的に出土している土師器坏、須恵器坏、高台付碗、甕についてその形態と整形技法の分類を行い、各住居跡の出土遺物の共伴関係を考慮して堀越中道遺跡の集落変遷を考えるうえでの時期設定を行う。先ず、時期設定の前後関係を検証する資料として重複関係にある28号と29号住居跡、19号と20号住居跡の出土遺物を考察する。

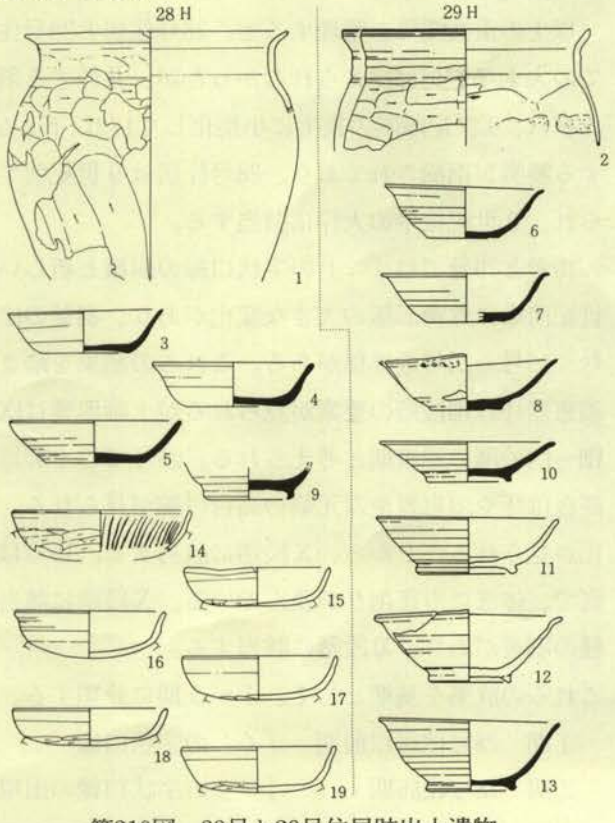
◎28号と29号住居跡の遺物（第210図）

両者の新旧関係は29号が28号住居跡より新しく、貯蔵穴部分に集中して土器の出土が見られた。両住居の共通の伴出遺物は、土師器甕と須恵器坏、高台付碗がある。

1と2の土師器甕は、所謂「コ」の字状口縁を呈する。両者を明確に区分する形態の差異は認められないが、1は口縁部が外反して開き、胴部上半はやや肩張り状で、2の口縁部は内湾気味に短く開き、1と比べて撫で肩の胴部上半である。

須恵器坏は、5が底部回転糸切り後周縁部を回転篦削りの調整を施すが、他は回転糸きり未調整である。28号住居遺物の器形は、3が底部より直線的に開く体部、4は口縁部を玉縁状とし、5は内湾気味に立ち上がる。底径と口径の比率は0.57～0.62である。29号住居遺物は、全体に28号より器肉が薄く、ロクロ目も顕著に残る。器形は、6と7が底部より内湾して口唇部を短く外反させ、8は緩やかな内湾で大きく開く体部としている。底径と口径の比率は0.42～0.45である。

高台付碗は28号では1点のみであり、29号住居との明確な比較材料としては不適当であるが、28号の9は、高台部が内湾し、体部が内湾から直立気味となる器形と考えられる。29号は10の様な高台付坏のものから11～13の様な深さの違うものがあり、形態差が見られる。



第210図　28号と29号住居跡出土遺物

土師器坏では、14では内面に射状暗文を施し、体部中位まで篦削りが及ぶもの、丸底と平底気味のものに分類される。

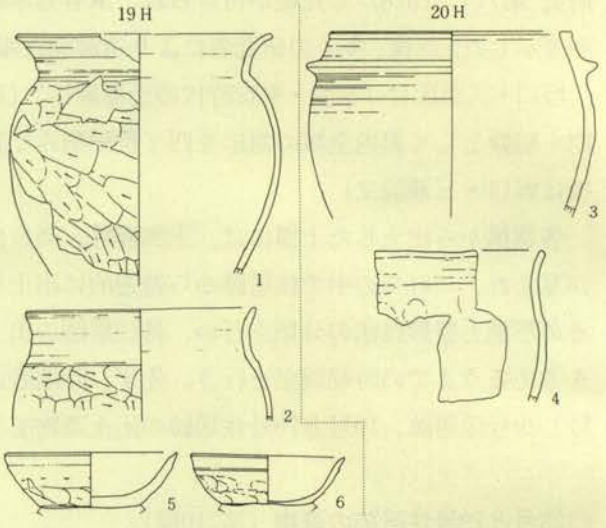
28号と29号では、良好な比較材料としては須恵器坏があり、28号では回転糸きり後周縁部を回転篦削りを施し、他は回転糸きり未調整である。底径と口径の比率では、明確な差が生じている。

◎19号と20号住居跡の遺物（第211図）

両者の新旧関係は20号が19号住居跡より新しく、20号住居跡の残存は悪い。両住居の共通の伴出遺物は、煮沸具である。19号の１と２は、「コ」の字状口縁の崩れが観察される。20号では３に見られる羽釜の出現と19号の２の系譜を引くと考えられる４の甕がある。

19号出土の土師器坏は平底を呈し、体部下半まで篦削りが及び、５には製作時に残された爪痕が特徴的である。

19号住居の出土遺物は、甕の特徴から「コ」字状口縁の崩壊時の状態を示し、20号住居では、羽釜が出現している。



第211図　19号と20号住居跡出土遺物

以上の重複関係を整理すると、28号住居と29号住居の出土遺物では「コ」の字状口縁を特徴とする甕での大きな変化は捉えられなかったが、共伴する須恵器坏に差異を見い出せた。一般的に口径と底径の比率は、９世紀段階の後半に小型化して1/2以下となり、底部は大半のものが回転糸きり未調整とするとする特徴が指摘されており、28号住居は９世紀前半、29号住居跡には形態を異にする高台付碗が多く見られ、９世紀後半の大枠に該当する。

19号と20号では「コ」の字状口縁の崩壊と新しい器種の羽釜の出現がある。坂口・三浦論文では、10世紀前半に煮沸形態の大きな変化があり、羽釜の出現時期としている。これらを総合すると、28号→29号＜19号→20号の推移がある。これらの結果を踏まえて、坂口・三浦論文の編年に照合すると、28号は須恵器坏はⅧ段階の要素が見られるが土師器甕はⅨ段階である。土師器坏は多種の形態があることから、Ⅷ～Ⅸ段階の過渡期と考えられる。29号では土師器甕が「コ」の字状口縁を呈し、Ⅸ段階から見られる高台付坏や須恵質や還元焔の高台付碗が見られる。須恵器坏は回転糸きり未調整の底部で、底径の小型化が見られることから、Ｘ段階に該当する。19号は土師器甕の「コ」の字状口縁が崩れ、土師器坏は平底で、体部にも篦削りが及んでいる。Ｘ段階に該当するが、29号より後出の要素である。20号は、新器種の羽釜があり、Ⅺ段階に該当する。

これらの成果を基準として、１～５期に分類する。

１期　28号住居以前期　「く」の字状口縁
２期　28号住居期　「コ」の字状口縁の出現期
３期　29号住居期　「コ」の字状口縁の全盛期
４期　19号住居期　「コ」の字状口縁の崩壊期
５期　20号住居期　羽釜の出現期

《住居跡出土土器段階分類》

1号住居跡

土師器甕は、「く」の字状を呈し、胴部が肩張り状で最大径となる。小型甕の口縁部は「く」の字状～「コ」の字状への変化期の形態が見られる。須恵器坏は口径11.5～12.8cmで直線的に開く体部を呈し、回転糸きり未調整の底部である。口径と底径比率は1/2以上である。掲載できなかったが、カマド内より「コ」の字状口縁の破片が見られる。2期に該当する。

2号住居跡

覆土より土師器坏と須恵器短頸壺が出土した。

3号住居跡

須恵器広口壺、高台付碗、須恵器坏、酸化焔坏、土師器坏、焼印等が出土。高台付碗は、高台が短く「ハ」の字状に開くものと角状のものがあり、底部との接合は丁寧である。須恵器坏と酸化焔坏は、回転糸きり未調整の底部であり、酸化焔坏は薄い器肉の体部で硬質の焼成である。3期に該当しよう。

4号住居跡

土師器甕、土師器小型甕、還元焔坏、高台付碗が出土し、高台付碗に「立」の墨書がある。土師器甕と土師器小型甕の口縁部は、「コ」の字状から崩れの状態である。還元焔坏は、回転糸きり未調整の底部で、口径と底径比率は、1/2以下である。高台付碗の高台は、短くやや幅広で底部との接合もやや雑な傾向にある。3期に該当する。

5号住居跡

酸化焔坏、高台付碗等が出土し、酸化焔坏には2点の墨書土器がある。酸化焔坏はやや内湾する体部から直線的に開いて口縁部に移行する。底部は回転糸きり未調整で、口径と底径比率は1/2以上である。高台付碗は大型のもので、高台部は短く、丁寧な接合である。3期に該当する。

6号住居跡

須恵器広口壺、土師器坏、高台付坏・高台付碗等が出土。土師器坏には暗文を施すものも見られる。底部は、その大半が平底である。高台付坏・高台付碗は、角状の高台を短く付している。3期が考えられる。

7号住居跡

土師器甕、須恵器広口壺、須恵器坏、高台付皿、土師器坏等が出土。土師器甕は、「コ」の字状口縁を呈する。須恵器坏は回転糸きり未調整の底部である。土師器坏は平底を呈し、口縁部が強い横撫で括れ、短く外反する。体部の未調整部分には爪痕が見られる。灰釉陶器の模倣から出現したと考えられる高台付皿、「コ」の字状口縁から3期と考えられる。

8号住居跡

土師器台付甕、灰釉陶器、土師器坏、須恵器坏等が出土。土師器台付甕は、「コ」の字状口縁を呈し、胴部上半が肩張り状とする。須恵器坏は11.9～12.9cmの口径で、回転糸きり未調整の底部である。口径と底径の比率は1/2以上である。2期段階に該当しよう。

9号住居跡

時期設定資料が乏しいが、道路址（MD）より古い。

10号住居跡

土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋等が出土。土師器坏には、放射状暗文を施すものや体部中位に篦削り

が及ぶものがある。底部は丸底状の底部と平底気味の底部があり、口縁部形態は直線的・内湾・直立気味のものがある。高台付碗の高台は、底部周縁よりやや内側に設けられている。須恵器坏は、回転糸きり後周縁部篦削り調整のものと回転糸きり未調整のものがあり、口径と底径比率は1/2以上である。須恵器蓋は、リング状の鈕を付す。2期段階に該当しよう。

11号住居跡

土師器甕、土師器坏、還元焔の坏と高台付碗等が出土。土師器甕は「く」の字状口縁を呈する。土師器坏は、丸底状の底部から口縁部を直立気味とする。還元焔の坏は、回転糸きり後周縁部回転篦削りのものと回転糸きり未調整がある。高台付碗は短い角状の高台を付し、体部は直線的に開く。1期に該当しよう。

12号住居跡

土師器甕、須恵器坏、高台付碗等が出土。土師器甕は、「く」から「コ」の字状口縁のへ変化するものと「コ」の字状の両者が見られる。須恵器坏は回転糸きり未調整の底部で、口径と底径比率は底部径から推察すると1/2以上である。2期段階と考えられる。

13号住居跡

土師器甕、還元焔の坏・高台付碗等が出土。土師器甕は、「コ」の字状口縁の崩壊状態である。坏は、小径の底部より緩やかに内湾して口縁部をやや外反させる。4期に該当する。

14号住居跡

土師器甕、土師器坏、須恵器高台付碗、須恵器蓋等が出土。土師器甕は、「く」の字状口縁を呈する。土師器坏は丸底を呈し、直立気味に内湾する。高台付碗は、やや細目で長い高台を底部周縁よりやや内側に付し、体部は直線的に開く。1期段階に該当する。

15号住居跡

須恵器坏と土師器坏の2点が出土。須恵器坏は、篦起こしの底部である。土師器坏は、丸底状を呈して内湾気味の体部とする。この2点から推察すると1期と考えられる。

16号住居跡

還元焔の坏・高台付坏・高台付碗等が出土。X期段階と推察される。高台付碗は直線的に開くものと内湾して開くものがあり、底径に比べて口径が大きくて器高もある。高台は短く、底部との接合は雑なものが見られる。4期に該当しよう。

17号住居跡

酸化焔の高台付鉢、還元焔の高台付碗、土師器坏、鉄製品等が出土。酸化焔の高台付鉢は回転糸きり未調整の底部で、内湾する体部から直立気味の口縁部に移行する。高台付碗は短く「ハ」の字状に開く高台より内湾して口縁部を短く外反させる。土師器坏は平底状で、直線的に開く口縁部である。3期に該当しよう。

18号住居跡

土師器坏、黒色土器の坏・高台付碗、須恵器坏、高台付碗、灰釉陶器等が出土。土師器坏には放射状暗文を施すものがある。底部は丸底・平底状・平底が見られ、その大半は平底状である。須恵器坏には回転糸きり後周縁部回転篦削りのものと回転糸きり未調整のものがあり、形態も多種である。灰釉陶器には高台付坏と高台付皿が見られ、K－14窯式に似る。3期の様相であろうか。

19号住居跡

土師器甕、土師器坏等が出土。土師器甕は、「コ」の字状口縁の崩壊状態である。土師器坏は平底を呈し、体部下半にまで篦削りが及ぶものがあり、体部に爪痕を付すものも見られる。4期の様相を呈する。

20号住居跡

羽釜と土師器甕等が出土。5期に該当する。

21号住居跡

土師器小型甕と土師器坏が出土。土師器小型甕は、胴部より直立する口縁部で、「コ」の字状の形態が僅かに残存する。土師器坏は平底を呈し、直線的に開く体部とする。体部に指頭圧痕を残すものがある。4期に該当する。

22号住居跡

土師器甕、土師器台付甕、土師器坏、還元焔坏、高台付坏・碗等が出土。土師器甕は「コ」の字状口縁を呈するものがあるが、土師器台付甕には「コ」の字状口縁が崩れる状態のものが見られる。土師器坏は丸底と平底のものがあり、平底のものは7号住居跡に類似するものがある。還元焔の坏は回転糸きり未調整の底部で、口径と底径比率が1/2以下のものがある。3期に該当する。

23号住居跡

該当時期を設定する資料がない。

24号住居跡

覆土より須恵器坏と須恵器甕、黒色土器が出土。時期設定は明確でないが31Bより古い。

25号住居跡

土師器小型甕、土師器坏、土師器高台付碗、須恵器坏等が出土。土師器小型甕は屈曲の弱い「く」の字状口縁を呈し、厚めの器肉である。土師器高台付碗は体部に篦削りが及び、土師器坏は雑な篦削りの平底から直線的に開く体部で口縁部を肉厚とする。同坏の底部に砂底のものがある。須恵器坏は、回転糸きり未調整の底部で、直線的に開くものと内湾するものがある。4期前後の過渡期の様相を呈する。

26号住居跡

土師器坏が2点出土。丸底と平底状のものがある。時期設定は明確にできないが、1期が想定される。

27号住居跡

土師器甕、土師器坏、須恵器坏等が出土。土師器甕は「コ」の字状口縁から崩れた「く」の字状を呈する。土師器台付甕の口縁もやや「コ」の字状の括れが弱い。土師器坏には放射状暗文を施すものがある。底部は平底状と平底のものがあり、7号住居等で出土している爪痕を残すものがある。須恵器坏は回転糸きり未調整の底部で、口径と底径比率は1/2を前後する。3期に該当しよう。

28号住居跡

前頁で記載。2期に該当しよう。

29号住居跡

前頁で記載。3期に該当しよう。

30号住居跡

土師器甕、土師器高台付碗が出土。土師器甕は、「コ」の字状口縁が崩れて直立気味か「く」の字状となる。土師器高台付碗は、25号住居に類似のものがある。4期前後の過渡期の様相を呈する。

31号住居跡

酸化焔の坏のみが出土。時期設定は明確にできない。

32号住居跡

土師器坏、須恵器坏、灰釉陶器等が出土。土師器坏は丸底と丸底状のものがあり、体部は直立気味に内湾する。須恵器坏は、回転糸きり後周縁部回転篦削りのものと回転糸きり未調整のものがある。2期段階の前後と考えられる。

33号住居跡

土師器甕、土師器坏、須恵器坏が出土。土師器甕は、「く」の字状口縁を呈する。土師器坏は平底状で内湾して開き、口縁部を短く外反させる。須恵器坏は回転糸きり未調整のものと篦調整を施すものがあり、口径と底径比率は1/2以上である。1期段階に該当する。

34号住居跡

土師器甕、土師器坏、須恵器坏、須恵器高台付碗等が出土。土師器甕の口縁は、「く」の字状～「コ」の字状の転換期の状態を呈する。土師器坏は体部に篦削りが及ぶものと平底状の底部から直立気味に開くものがある。須恵器坏は回転糸きり後周縁部回転篦削りのものと回転糸きり未調整のものがあり、口径と底径比率は1/2以上である。須恵器高台付碗は、細くやや長めの高台を付す。2期前後の様相を呈する。

35号住居跡

時期設定する資料がない。

36号住居跡

土師器甕、土師器小型甕、高台付碗、土師器坏等が出土。土師器甕は、口縁部が屈曲の弱い「く」の字状のものと「コ」の字状が崩れ、口縁部が短く外反するものがある。高台付碗には高台部と体部の境が明瞭で無いものもある。土師器坏は小径の底部から緩やかに内湾して口縁部が開くもので、底部と体部に篦削りが及ぶ。4期の様相を呈する。

37号住居跡

須恵器坏、土師器坏等が出土。須恵器坏は小径の底部から直線的に開く。土師器坏は平底を呈し、直線的に開き体部の未調整部分と口縁部の横撫の区分が明瞭である。4期に該当する。

38号住居跡

須恵器坏、土師器坏と鉄製把手付鍋が出土。土師器坏は平底状を呈し、内湾気味のものと直線的に開くものがある。須恵器坏は回転糸きり未調整の底部で、口径と底径比率は1/2前後である。2期に該当しよう。

39号住居跡

時期設定は不明。

南東竪穴状遺構

須恵器坏、土師器台付甕等が出土。須恵器坏の様相から3期頃に該当しよう。

以上を整理すると、

1期	11	14	15	26	33					
2期	1	8	10	12	28	32	34	38		
3期	3	4	5	6	7	17	18	22	27	29
4期	13	16	19	21	25	30	36	37		
5期	20									

これらの結果を踏まえて、各期の土器様相を概観する。

1期　器種は、土師器甕・土師器坏・須恵器坏・須恵器高台付碗・須恵器蓋等がある。土師器甕は、「く」の字状口縁を呈する。土師器坏は丸底を呈するものが主体である。須恵器坏は篦起こし・回転糸きり後周縁部回転篦削り・回転糸きり未調整のものがある。須恵器高台付碗は、底部周縁よりやや内側に高台を付すものがある。

2期　器種は、土師器甕・土師器脚台付甕・土師器坏・須恵器坏・須恵器高台付碗・須恵器蓋等がある。土師器甕は、「く」～「コ」の字状口縁へと変化する。土師器坏は丸底～平底状のものがあり、僅かであるが放射状暗文を施すものが見られる。須恵器坏は、回転糸きり後周縁部回転篦削りのものと回転糸きり未調整のものがあり、口径と底径の比率は1/2以上のものが多い。

3期　器種は、土師器甕・土師器小型甕・土師器坏・須恵器坏・須恵器高台付碗・須恵器高台付坏・須恵器広口壺・須恵器大甕・灰釉陶器・内黒土器等がある。

土師器甕は、「コ」の字状口縁の全盛期である。土師器坏は平底が一般的となり、放射状暗文を施すものや内面黒色処理土器が見られる。須恵器坏は底部回転糸きり未調整もので、多種の形態がある。高台付碗は、硬質の焼成のものと還元焔の両者が見られ、高台付坏や高台付皿の器種が出現する。灰釉陶器はK－14窯式に類似するのである。

4期　器種は、土師器甕・土師器小型甕・土師器坏・土師器高台付碗・須恵器高台付碗・須恵器大甕等がある。土師器甕は、「コ」の字状口縁の甕の口縁部形態の変化が著しく、「コ」の字形の直立部が短くなるもの、「く」の字形のものが見られる。土師器坏は平底を呈し、体部に篦削りが及ぶものや砂底のものも見られ、土師器高台付碗もある。高台付碗は、焼成の悪い還元焔のものが主体を占め、3期のものより雑な成型のものが多い。3期で見られた高台付坏は存続する。須恵器坏は3期より底径の小型化が進んでいる。

5期　20号住居だけの検出であった。新器種の羽釜の出現で4期との区分される。しかし、「コ」の字状口縁の崩れた形態のものとの羽釜の共伴事例は他の遺跡にはあり4期の可能性もあるが19号住居との重複から区分される。

県内の年代基準としての資料は、新里村砂田遺跡1号水路出土遺物（1991 坂口）・松井田町愛宕山遺跡4号住居跡（1992 綿貫）・吉井町黒熊中西遺跡10号住居跡（1996 高島）がある。

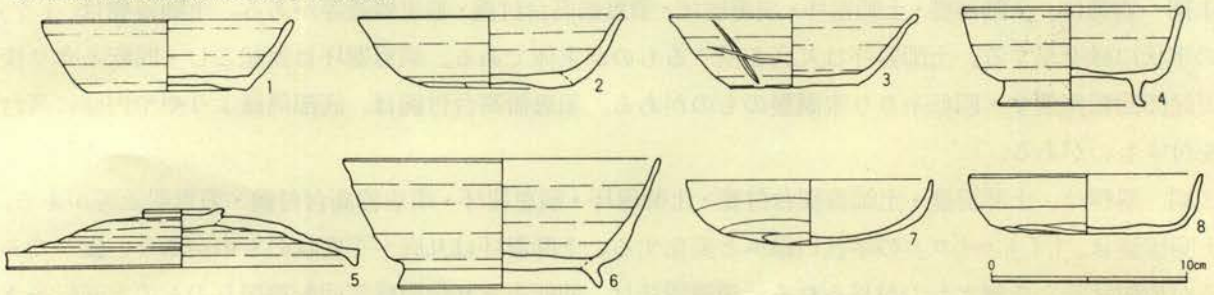
砂田遺跡の資料は、弘仁九年に発生した地震に起因する泥流で堆積した水路より出土。「類聚国史」弘仁九年（818）の地震による山崩れ崩壊土の泥流で埋没することから坂口・三浦編年の9世紀第1四半期に位置づけている。

愛宕山遺跡4号住居跡の資料では、井上氏（1978 群馬県史研究8）が「萬年通寶」の出土から、その初鋳年代を上限として皇朝十二銭の使用禁止を下限とした8世紀末・9世紀初頭～9世紀中葉の時期を設定した。綿貫氏は、同住居跡の金属製と石製の腰帯の関わりから796～810年の年代を提起している。

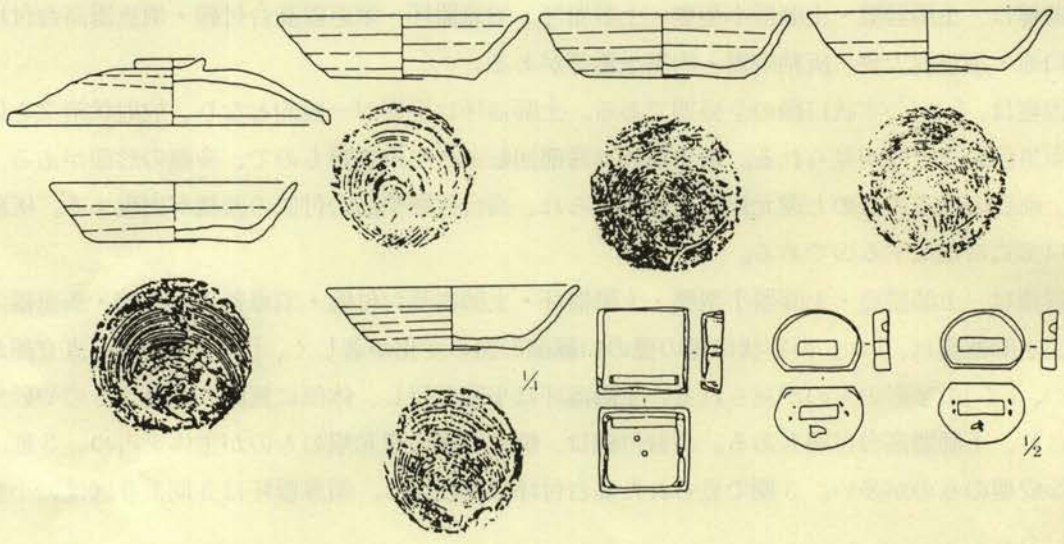
本遺跡の1期として分類した14号住居跡は、弘仁九年の地震による地割れで擦れを生じている。このことから、818年を下限とする9世紀第1四半期に該当する。

黒熊中西遺跡10号住居跡の資料では、「元慶四年（880年）」銘砥石の使用を推論した上で、時間経過のあまり経ない時期を想定している。本遺跡の4期が該当し、9世紀第4四半期に位置づけられる。

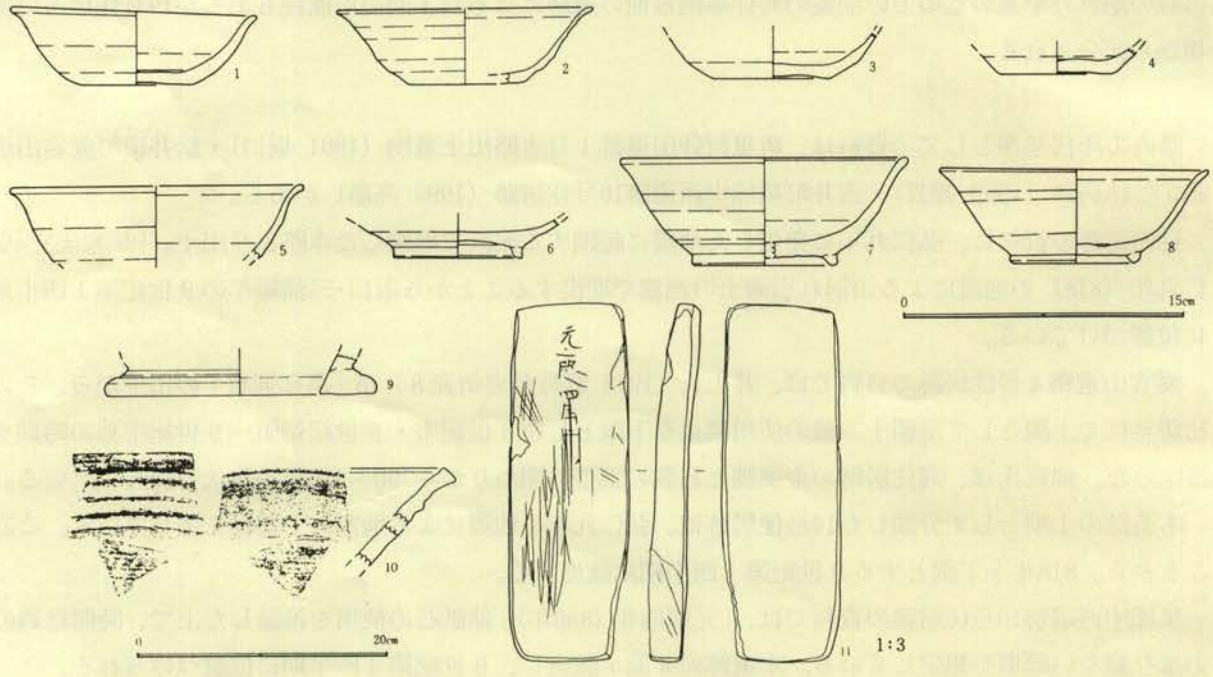
砂田遺跡（「赤城山麓の歴史地震」より引用）



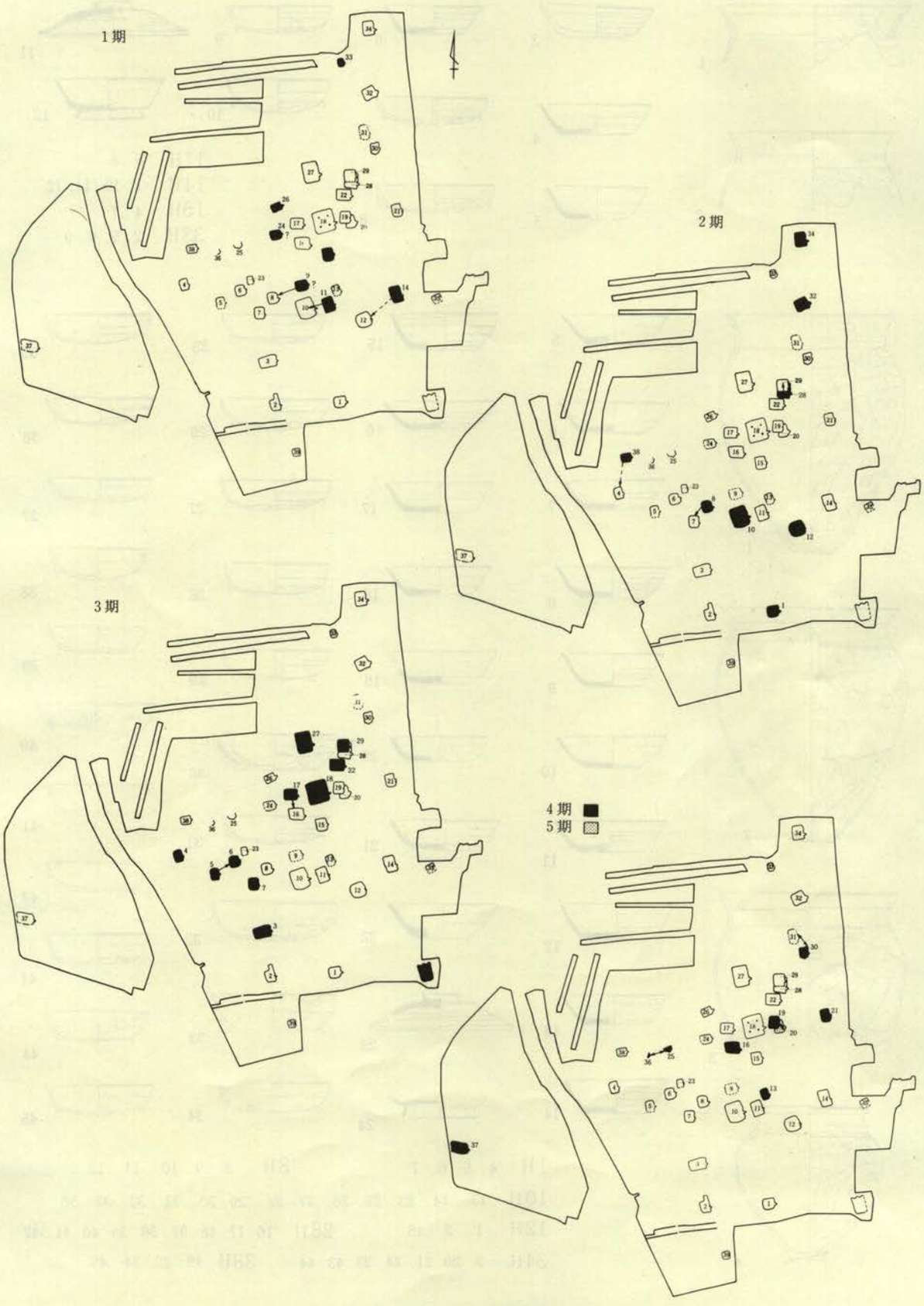
愛岩山遺跡（「群馬県における歴史時代の土器について」より引用）



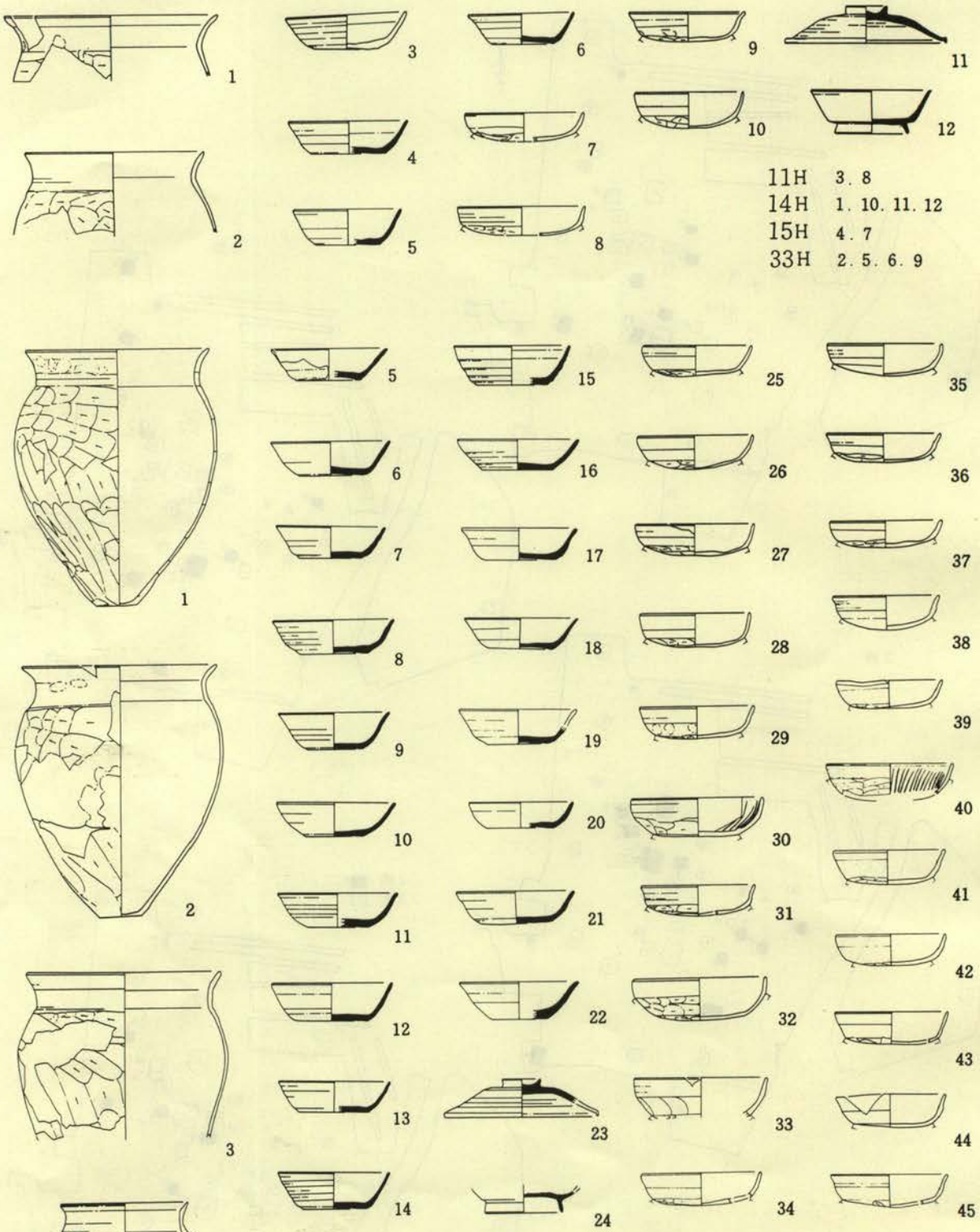
黒熊中西遺跡



第212図　編年基準資料



第213図　竪穴住居跡時期分類



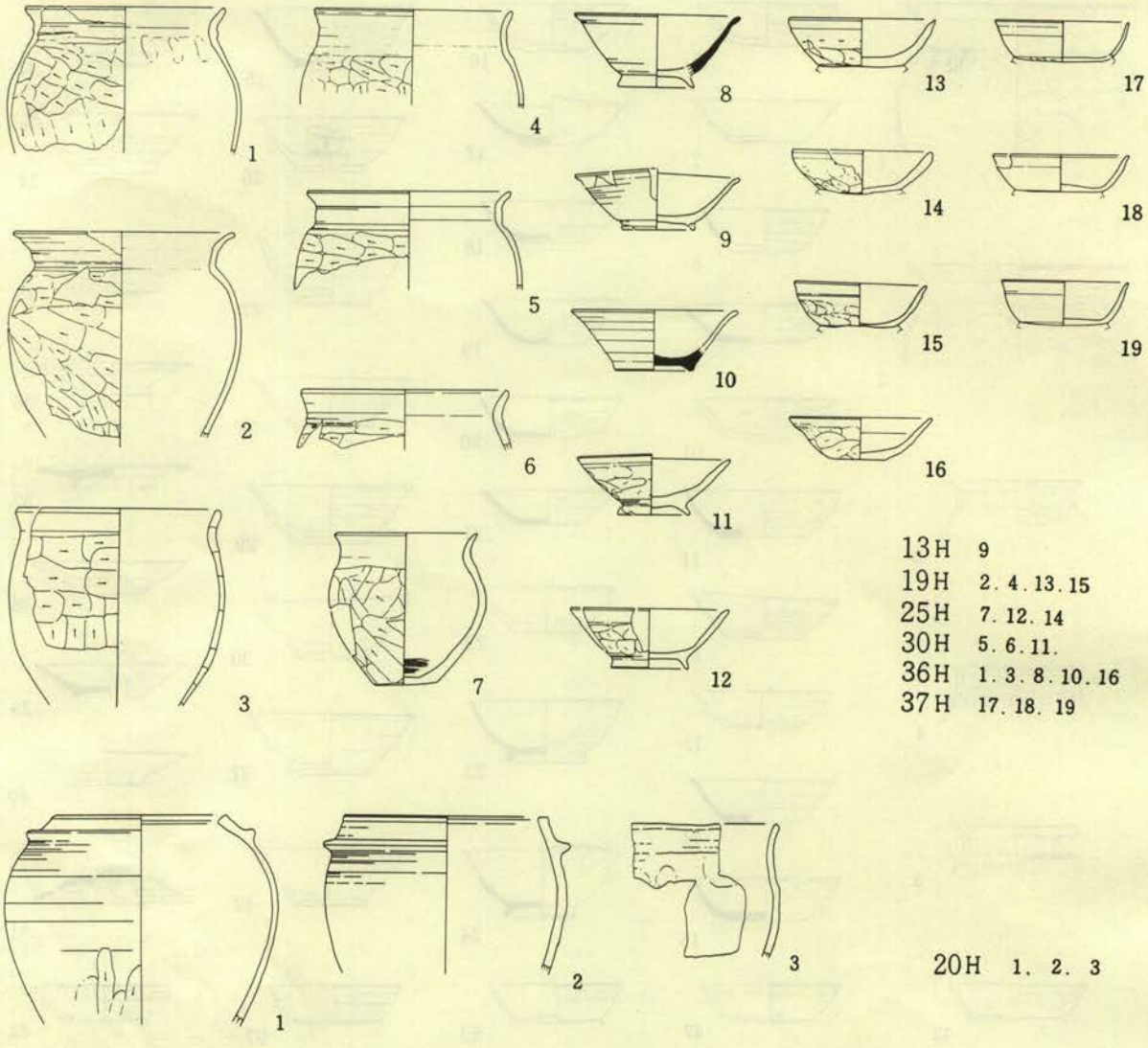
11H　3. 8
14H　1. 10. 11. 12
15H　4. 7
33H　2. 5. 6. 9

1H　4. 5. 6. 7　　8H　8. 9. 10. 11. 12
10H　13. 14. 23. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 35. 36
12H　1. 2. 15　　28H　16. 17. 18. 37. 38. 39. 40. 41. 42
34H　3. 20. 21. 24. 33. 43. 44　　38H　19. 22. 34. 45

第214図　1・2期土器群

3H　5. 7. 8. 12. 13. 32. 43
4H　4. 10. 26. 30
6H　29. 40. 42. 49
7H　1. 6. 37. 48
17H　31. 45. 53
18H　9. 11. 23. 24. 44. 46. 50. 51. 52. 54. 55. 56. 57. 61
22H　3. 16. 22. 34. 35. 36. 38. 47
27H　15. 18. 20. 21. 41. 58. 59. 60. 62. 63. 64
29H　2. 14. 17. 19. 25. 27. 28. 33. 39

第215図　3期土器群



第216図　4・5期土器群

(4) 文字関係資料

本遺跡出土の文字関係資料には墨書土器、刻書土器、刻書紡錘車、焼印がある。

1）墨書土器（第217図1～43・第218図）

出土した総数は43点（第217図）を数える。読み取り可能な字句は15点で、最も多いのが焼印の印文と同じ「立」である。8点の「立」（1～8）は、その書体から複数の書き手が予想される。焼印と同一文字の墨書土器の出土遺跡は、「焼印の印文はその集落内における、ある種の集団の標識的文字の一つであり、しかもその集落を代表する文字―言い換えれば集落内における最も有力な集団を象徴する標識文字である場合が多い」(1994 高島)と指摘されている。

焼印は出土していないが、書上上原之城遺跡の分析（1989 井上　以後井上論文）で、竪穴住居跡と掘立柱建物跡がセットになる群に共通する墨書土器を捕らえ、同族家父長集団の可能性を示唆している。

第217図　墨書集成

8の「立」は土師器坏の内面底部に墨書され、体部外面には横位に「下殿」を書いている。12は「平」を一字する。13は「本」と墨書され、細い筆跡である。15は「益」と考えられる。

2文字には「下殿」（9）、「山椎」（10）、「小林」（11）の3点の墨書文字がある。「下殿」は県内では初見であるが、「○殿」を記すものには下佐野II遺跡（1986 外山・女屋他）の「田殿」、太田東部遺跡群清水田遺跡（1985 飯塚他）に「神殿」、芳賀東部団地遺跡（1988 唐沢他）に「林殿」、後田遺跡（1988 大江他）で「内殿」が知られている。井上論文では、○殿と書かれたものを「公的な施設と限定する必要はなく、在地における支配者層の拠点となる屋敷の建物の一つを示すようなもの」を想定している。

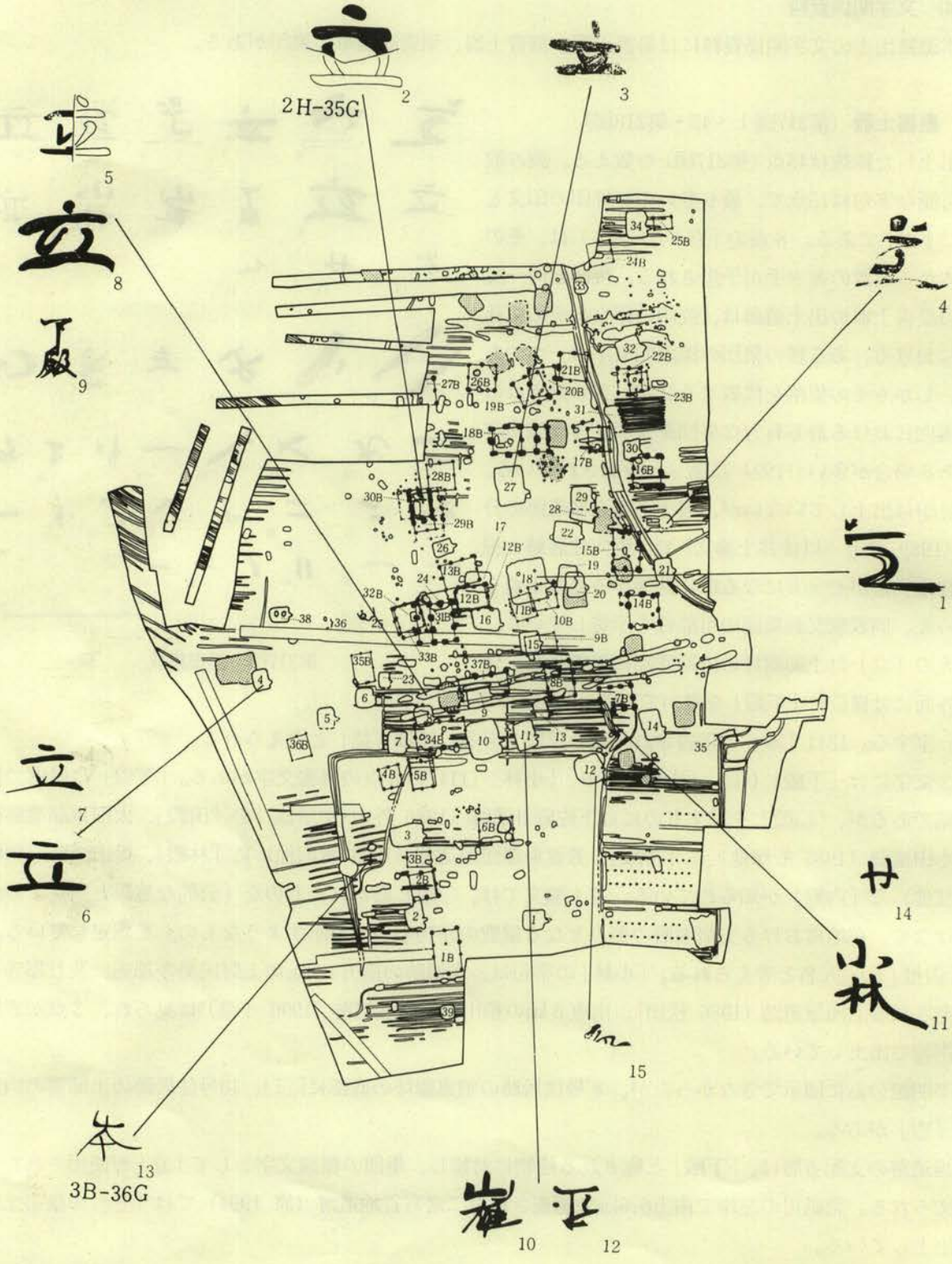
「山椎」は、人名と考えられる。「小林」の字句は、本遺跡の南方4.2kmの上野国勢多郡衙、及び郡寺と推定される上西原遺跡（1986 松田）、南東5kmの粕川村内西迎遺跡（1990 小島）に見られ、3点が赤城山南麓で出土している。

不明瞭の為に図示できなかったが、8号住居跡の須恵器坏の底部に「三」、10号住居跡の土師器の内底に「吉」がある。

当遺跡の支配者層は、「下殿」と称される建物に君臨し、集団の標識文字として「立」が使用されたと考えられる。荒砥川の左岸で南方6.6kmで調査された二之宮谷地遺跡（原 1994）では「仝」の墨書土器が出土している。

2）刻書土器

土器焼成前と後に線刻されたものに分類する。土器焼成前に線刻が施されたものには、×印が共通する。3号住居跡の壺形須恵器の肩部、6・18号住居跡の暗文を施す土師坏の内底、MD2の須恵器坏の内底に見られる。



第218図　墨書文字分布

土器焼成後に線刻されたものは２点ある。29号住居跡の高台付坏の内外面の底部には、焼成後に施されている×印が見られる。これらから×印は焼成前も後も集落において共通認識が存在したのではないのであろうか。もう１点は、３号住居跡の貯蔵穴より出土した須恵器の坏内底に囲桁状「卌」に線刻が

施されている。残存部分には並走する5本線に2本線が直角に交差している。

全容はつかめないが、九字「卌」と称される図形と考えられる。県内では初見のものであるが、埼玉県狭山市の揚櫨木遺跡（1986 石塚他）で墨書による「九字」がある。

「九字」（ドーマン）とは、陰陽道で用いる代表的な呪術図形である。「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前」の9個の字をいい、一種の呪句で、これを唱えつつ縦4本、横5本の線を空中に描けば、災いが除かれ幸福を得るという。中国道家（註）から移入されたもので、修験道や密教でも用いられ、「九字を切る」という。修験道が悪魔や邪気を祓いのけるために指で宙に「九字」を描いて使われる。現在でも伊勢、志摩方面の海女の魔除け（1991 平川）として使用されたり、民間陰陽道系の呪術祈禱（1993 学研）等にも多く見られる。

「九字」の他に呪術的な記号として「☆」マークがある。「五芒星」（ペンタグラム）であり、国分僧寺・尼寺中間地域（1992 高島）や新田町市野井萩原で出土している。高島氏は、「☆」と「井」関連に追及し、「井」は、九字の略記号としている。

さらに、「九字」と「五芒星」を対にして用いる事例として、新潟県馬場屋敷遺跡出土の呪符木簡、三重県上野市の勧請縄に用いる祈禱札、小児疳の虫封じの呪符を紹介している。

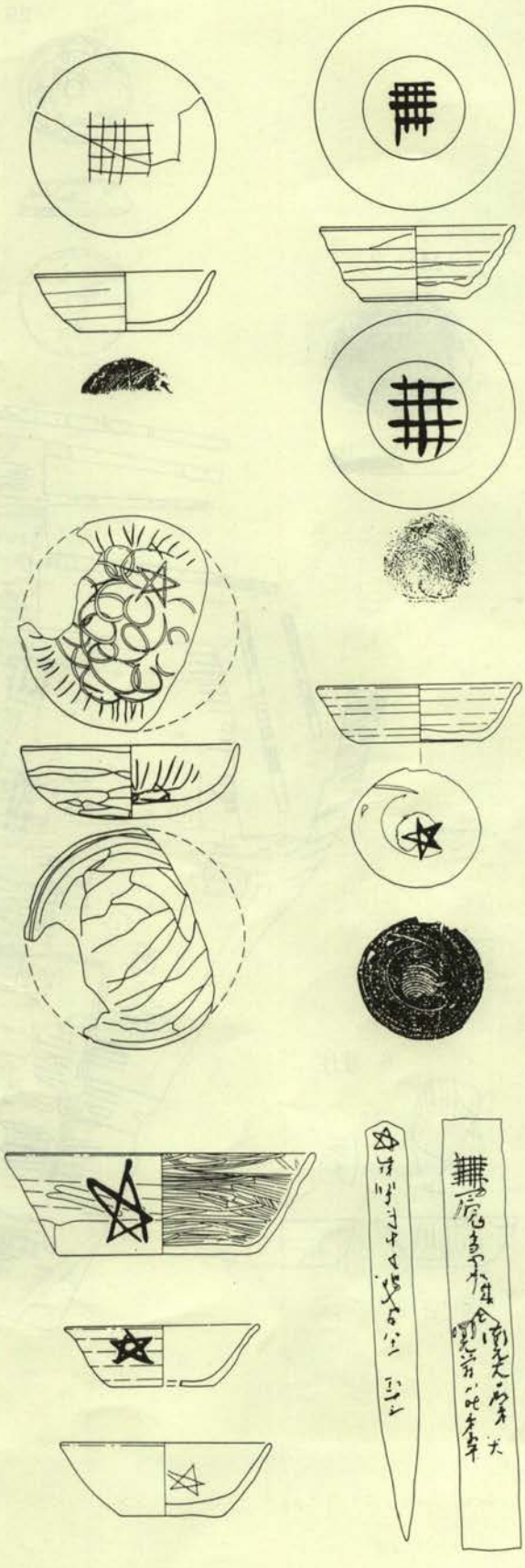
修験道の「三年封じ」の呪法にも見られる。無病息災を祈るもので、病を封じる秘文をしたためた内符を紙で包み、上書に「九字」と「五芒星」を書き付け、4つの穴をあけてそこに水引を通して特殊な結び方で病を縛ってしまう祈願方法である。（1993 学研）

これらの刻書土器に施された印は、律令制下の祭祀に関わるものと考えられる。

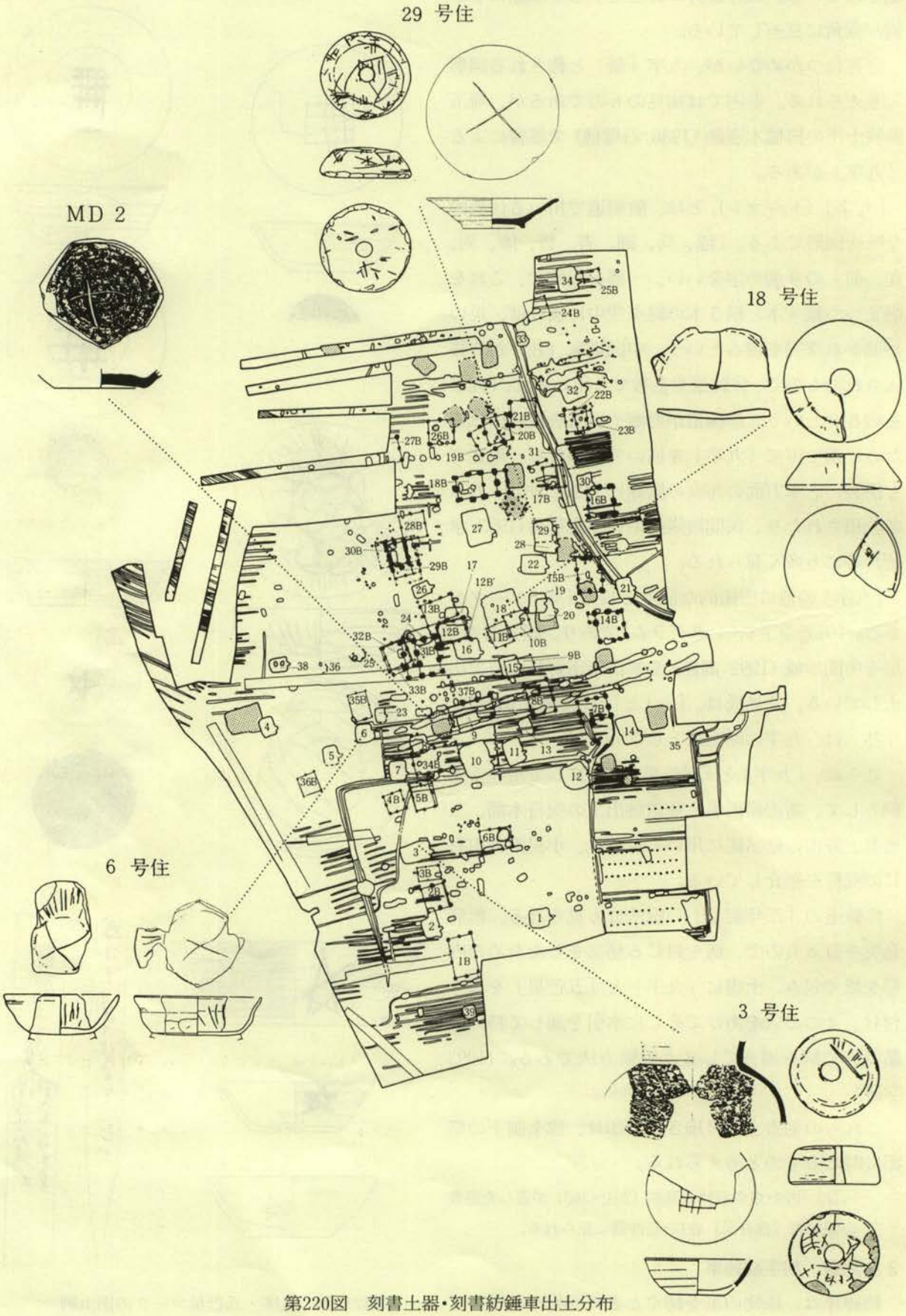
（註）中国・東晋時代の葛洪（284～363）が著した道教の理論書『抱朴子』巻17・登渉篇に見られる。

3）刻書・刻字紡錘車

紡錘車は、織物の糸を紡ぐときに回転を利用して



第219図　九字・五芒星マークの出土例



第220図　刻書土器・刻書紡錘車出土分布

糸に縒りをかけるために糸巻棒をさし、錘を回転させて糸を縒るもので、県内では、土・石・鉄・土器片の2次利用したものが知られている。その中に文字・記号等を刻むものが群馬県を中心として埼玉県北部まで分布している。

紡錘車の刻字することの意味・目的については、井上氏は「群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2)」(1992 井上他) で人名・地名・官職・社会構成のと関連する文字から宝器的が呪術的に扱われたものと推察した。

高島氏は「群馬県吉井町黒熊中西遺跡出土元慶四年銘砥石をめぐって」(1996 栃木史学) と題して古代文字資料の分析で、刻字紡錘車を所有・所属関係のみを示すもののみならず生産工場を願う共同体、あるいは成員個人の名を示したものとみて「機織祭祀をはじめとする村落内の祭祀に伴って刻字されたもの」と解している。

当遺跡には5点の紡錘車が出土した。9号住居跡のものは土器片の2次利用、10号住居跡からは鉄製紡錘車の軸が出土。3号住居跡は刻書紡錘車で、小径面の縁に放射状の刻線を施している。大径面には×印・葉脈状・ハングライダー形の文様が見られる。

18号住居跡のものは土製の刻字紡錘車。全体の4分の3を欠くが、3号住居跡とものと同じように小径面の縁に放射状の刻線を施し、大径面に○里と線刻する。

29号住居跡のものは刻字紡錘車で大径面に木と読める文字がある。側面には×印等、小径面には雑であるが縁に放射状の刻線、円孔を挟んで剣先状の線文を描いている。

3点に共通する小径面の放射状の線文は、中世備蓄銭に混じって検出されることが多い「雨乞銭」に似ている。「雨乞銭」には縁の部分に放射状の刻みが施される。適切な事例ではないが、中世社会と共通する自然界に恵みを託す表現ではなかろうか。

(5) 鉄・銅製品

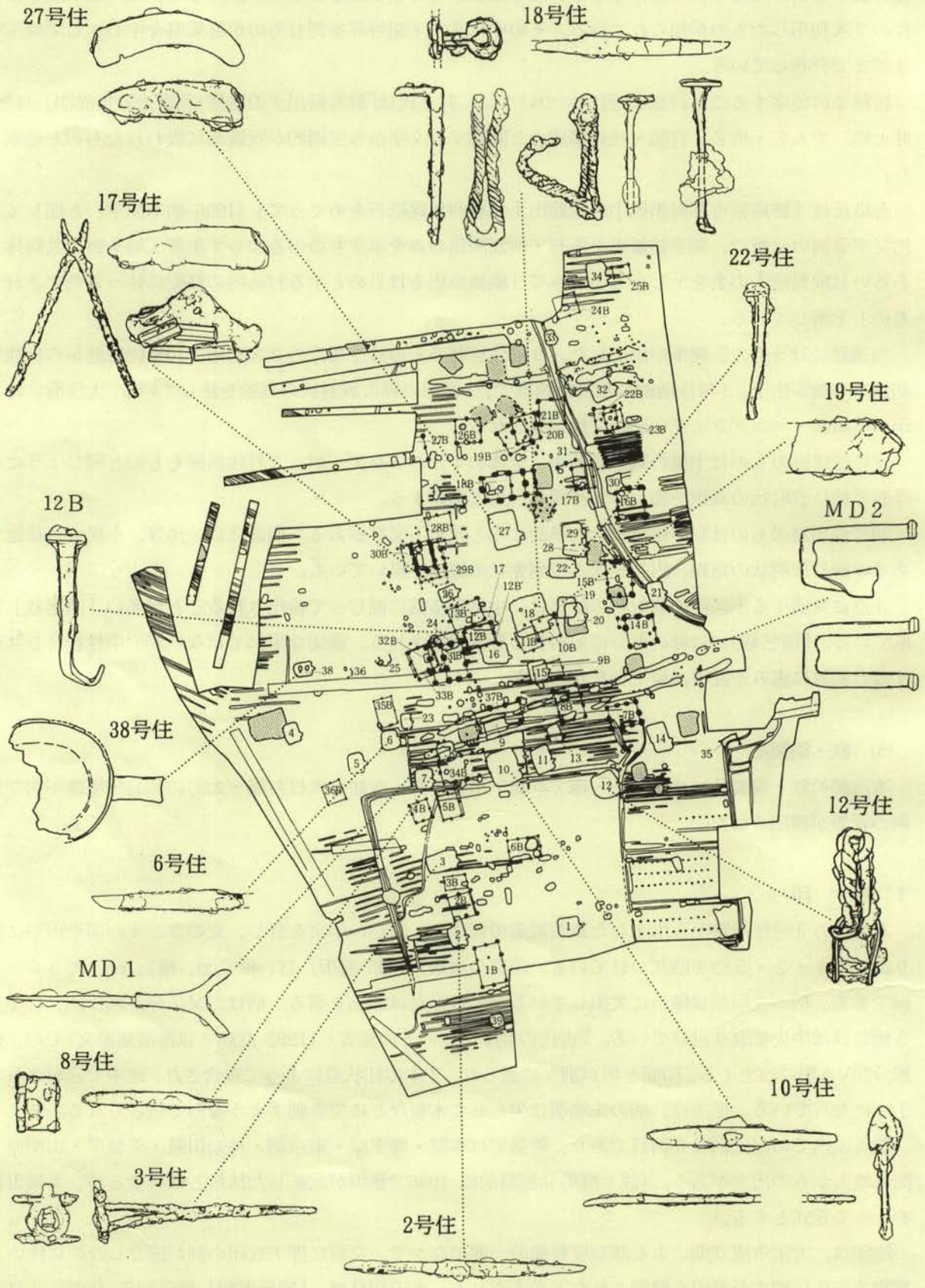
本遺跡の鉄・銅製品には、刀子・鎌・鉄鏃・馬具・釘・金鉗・火打ち鎌・太刀の部品・用途不明な青銅の管等が検出された。

1) 焼　印

本遺跡の3号住居跡から出土した鉄製鍛造の焼印は、「立」の印文を有し、立の3と4画部を円形に作り出して1・2・5画を貼りつけている。印文の法量 (1996 藤坂) は、縦6cm、横7.1cm、厚さ6～7mmである。柄の先端部は僅かに欠損しているが、残存長は23cmを測る。柄は二又に分かれて印文の2と5画のほぼ中央で取り付けている。「古代の焼印についての覚書」(1992 高島　以後高島論文) での、形態分類VA類に該当する。印面と柄が別々に造られ、2本の柱状鉄によって接合され、途中で合わされて1つになっている。把手は、柄の先端部は尖らせて木製などに突き刺すような形で付けられる。

群馬県内での出土例は6例目であり、管見では本県・埼玉県・東京都・神奈川県・茨城県・山梨県と関東地方からの出土がある。(註：群馬発掘最前線 1996で藤坂が記載した法量とは異なるが、本報告書をもって正式とする。)

焼印は、大宝令成立期による諸制度整備の一連のなかで、文章に押す官印の制が確立したのに伴い、官牧の牛馬に押す畜産印も整備されたと考えられる。その初見は、『続日本紀』慶雲四年 (707) 3月26日条に、給二鉄印于摂津・伊勢等　三国一、使レ印二牧駒・犢一とあり、全国均一に牧がおかれたわけではな



第221図　鉄・銅製品出土分布

いことがわかる。その使用については、廐牧令駒犢条に「凡在レ牧犢、至二二歳一者、毎レ年九月、国司共二牧長一対、以二官字印、〜」と記されている。検印の作業は国司の立ち会いで2歳になった駒の左後肢の外がわに官の印文の焼印をおしている。古代の文献資料から知り得る焼印は、いずれも牧における牛馬に対するものであり、施印することで所有・所属・識別し、他のものと区別する目的の施術であった。

『類聚三代格』所引の延暦十五年（796）2月25日付太政官符では、私馬牛の焼印について「定二百姓私馬牛印一事　長二寸、廣一寸五分以下。〜」と記している。「百姓私牛馬印」から焼印が村落内でもごく一般的に使用されたことを示し、その出土例も一般的な竪穴住居跡からが多いことからも推察される。また、私馬牛の焼印を「長二寸、広一寸五分以下」と規定することは、官印と私印の区別を謀る目的であり、焼印が官衙・官牧・寺院などに限られた使用でなく、一般に使用されたことを示している。延暦15年太政官符によって官私を問わず牛馬に焼印を施印し、その所有・所属・識別が行われていた。

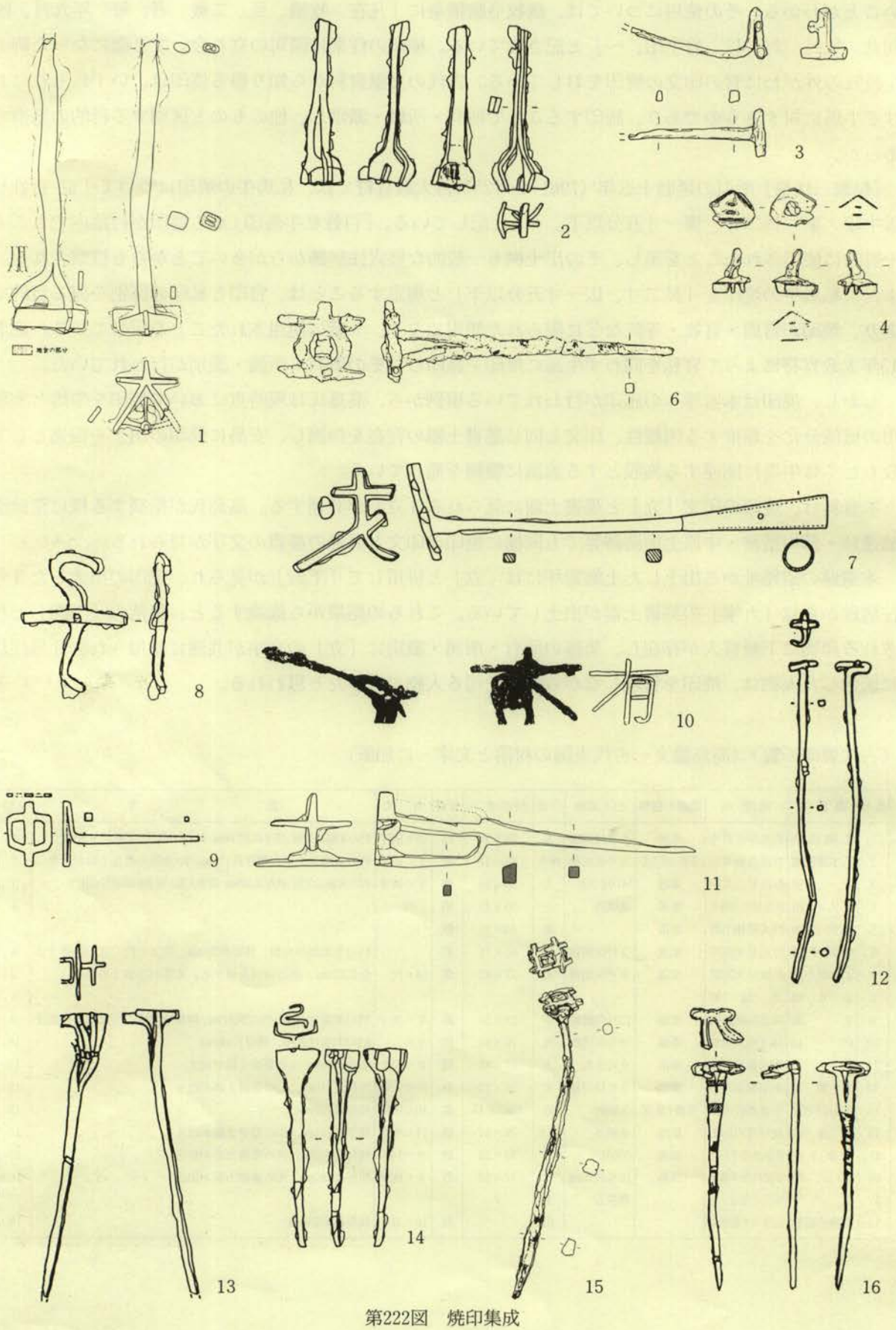
しかし、焼印は木器等への施印が行われている事例から、高島氏は現時点において焼印を牛馬と木器用の機能分化を類推する困難性、印文と同じ墨書土器の存在を指摘し、安易に焼印の出土を根拠として牧もしくは牛馬に関連する施設とする論議に警鐘を発している。

本資料は、焼印の印文「立」と墨書土器に見られる「立」が共通する。高島氏が指摘する様に荒砥洗橋遺跡・落川遺跡・中原上宿遺跡等でも同様に焼印の印文と共通の墨書の文字が見られる。

本遺跡の道路址から出土した土師器坏には「立」と併用して「下殿」が見られ、焼印の出土した3号住居跡からは「九字」の刻書土器が出土している。これらの結果から推論すると、集落の「下殿」と称される建物に下級官人が存在し、集落の所有・所属・識別に「立」の文字が共通に使用され、3号住居に居住した人物は、焼印を管理しながら祭司を司る人物であったと思われる。

《古代焼印一覧》（高島論文—古代東国の村落と文字—に加筆）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	出土遺構	印文	法量(縦×横ミリ)	材質	年代	備考	文献
1	荒砥洗橋	群馬県前橋市	集落	9号住居跡	太	58×52	鉄	10c前半	柄の末端は欠損、残存長さ216㎜ 大上・大郷長等の墨書土器が出土	1
2	八木連荒畑	群馬県妙義町	集落・山岳寺院	20号住居跡	泳カ	35×41	鉄	9c前半	柄の末端は欠損、残存長132㎜ 水・連等の墨書土器が出土	2
3	矢田	群馬県吉井町	集落	647号住居跡	上	40×35	鉄	9c後半	柄の末端は欠損、残存長108㎜ 墨書土器・刻字紡錘車等が出土	3
4	藪田	群馬県月夜野町	集落	遺構外	仝	30×35	銅	不明		4
5	高浜広神	群馬県榛名町	集落		第	44×37	鉄			5
6	堀越中道	群馬県大胡町	集落	3号住居跡	立	60×71	鉄		柄の先端部が欠損、残存長230㎜ 印文と同じ立の墨書土器	6
7	上村田小中	茨城県大宮町	集落	8号住居跡	丈	77×82	鉄	10c代	全長330㎜、柄は袋状を呈する。丈等の墨書土器が出土	7
8	金木場	茨城県			子					8
9	北坂	埼玉県岡部町	集落	13号住居跡	中	51×34	鉄	9c後半	柄の末端は欠損、残存長97㎜、隣接地で中の刻書土器が出土	9
10	円山	埼玉県大里村	集落	18号住居跡	有	70×80	鉄	9c	柄の末端は欠損、残存長260㎜	10
11	落川	東京都日野市	集落	9号土坑	土	57×81	鉄	9〜11c	全長250㎜、土の墨書土器が出土	11
12	中耕地	東京都調布市	集落	3号住居跡	七	26×23	鉄	平安中期	残存長249㎜、七の墨書土器が出土	12
13	武蔵国府関連	東京都府中市	官衙・集落	住居跡	吉	(39)×45	鉄	10c中葉	残存長250㎜	13
14	川島谷	東京都町田市	集落	遺構外	山カ	29×34	鉄	11c中葉	残存長161㎜、山の墨書土器が出土	14
15	中原上宿	神奈川県平塚市	集落	SX01	井	33×22	鉄	9〜10c	残存長230㎜、井の墨書土器が出土	15
16	向原	神奈川県平塚市	集落	16号住居跡	兀	37×32	鉄	9c後半	残存長187㎜、兀の墨書土器が出土	16
17	池子	神奈川県厨子市		埋没谷	土	?				17
18	上野原狐原	山梨県上野原町			山		鉄	10〜11c	残存長約200㎜	18



第222図　焼印集成

参考文献

1　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 「荒砥洗橋・荒砥宮西遺跡」　1989
2　妙義町遺跡調査会 「古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡」1990
3　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 「矢田遺跡」 III 1992
4　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 「藪田遺跡」 1985
5　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 「高浜広神遺跡」　96群馬発掘最前線
6　本報告書
7　大宮町教育委員会 「上村田小中遺跡」　1988
8　茨城県教育財団 「金木場遺跡・向畑遺跡」 一般国道6号（日立バイパス）改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 茨城県教育財団文化財調査報告書59
9　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 「関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告」 IX 1981
10　若松良一 「大里村円山遺跡の調査」（埼玉県遺跡発掘調査報告会要旨）19 埼玉考古学会 1986
11　日野市落川遺跡調査会 「日野市落川遺跡調査概報」 VI 1988
12　乙益重隆・十時俊作「調布市中耕地遺跡第3地点の調査」（東京都遺跡調査研究発表会要旨 XI 東京都教育委員会） 1986
13　塚原二郎「最近の発掘調査から」（あるむぜお）19 府中市郷土の森博物館
14　町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会 「町田市川島谷遺跡群」 1984
15　中原上宿遺跡発掘調査団 「中原上宿」 1981 「井」墨書土器とSX01からの「井」焼印は、井戸や小河川等の水を管理または支配していた者の住まいと推察されている。
16　神奈川県立埋蔵文化センター 「向原遺跡」　1982
17　甦る池子の歴史―池子遺跡群発掘調査の記録―　財団法人 かながわ考古学財団 1995
18　月刊 文化財発掘出土情報 1996 12 通巻171 山梨日々96、10、10 初見として町教委では「年貢の流通基地として役割を果たした集落跡とし、年貢の特産物を中央に送る木札などに焼印を押していた」との可能性を指摘、県立考古博物館の末木健氏は「貴族や神社などが使用した」との可能性を考えている。

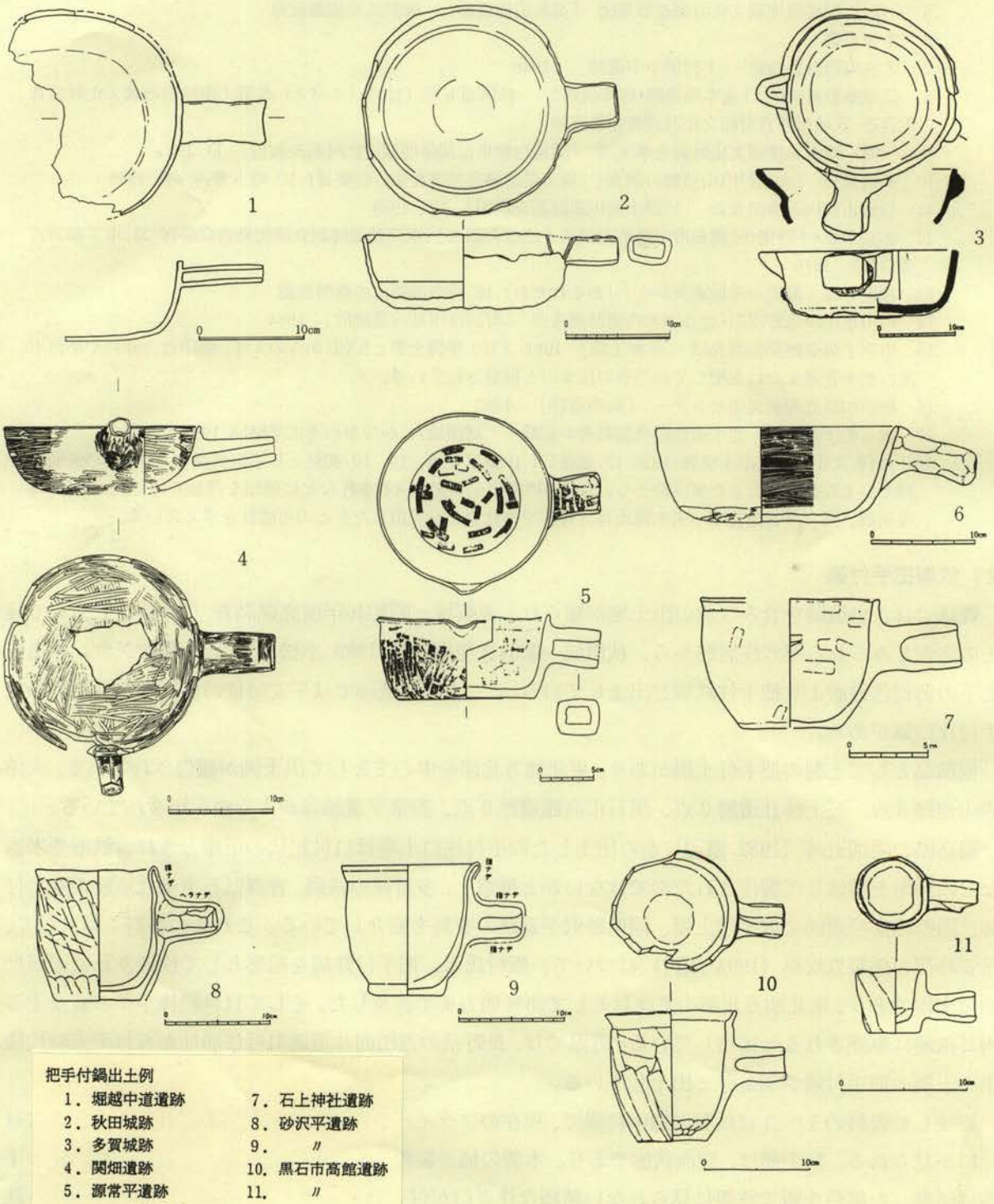
2）鉄製把手付鍋

管見では、当遺跡を含み3点の出土地が知られ、多賀城―昭和46年度発掘調査（1991 桑原他）で兵士の宿舎とみられる竪穴住居跡から、秋田城―第54次発掘調査(1989 小松他)、元小学校グランド造成土下の黄褐色砂層より把手付鉄鍋が出土している。三ッ木皿沼遺跡では平安時代の住居跡から銅製の把手付片口鍋がある。

模倣品として土製の把手付土器があり、東北地方北部を中心てとして出土例が報告されている。大館森山遺跡3点、石上神社遺跡2点、黒石市高館遺跡9点、源常平遺跡等が古くから知られている。

福島県の関畑遺跡（1982 渡辺）から出土した取手付注口土器は11世紀代の所産とされ、鉄器や木器などの形態を模倣して製作されたのではないかと推察し、多賀城の鉄鍋、青森県石上神社遺跡の取手付鉢、同県源常平遺跡の取手付土器、同県砂沢平遺跡の資料を紹介している。これらの資料を基にして、平安時代の鉄製煮炊具（1994 飯村）について、飯村氏は、把手付鉄鍋を祖形として模倣されたのが把手付土器であり、東北地方北部の煮炊具として津軽地方まで普及した。そして11世紀後半から普及する内耳鉄鍋に駆逐されると推察している。近県では、長野県の吉田向井遺跡31号住居址からは平安時代後半の土製の把手付鍋が羽釜等と出土している。

集成した資料の1～3は鉄製の把手付鍋で、現在のフライパンを連想させる。多賀城出土のものには片口が見られる。把手部は、空洞状態であり、木製の柄を装着したと考えられる。4は、器面全体を丁寧に研磨した黒色土器で鉄製に見られない精巧な注ぎ口が付されている。5と6は、規模・形状から鉄製の模倣品と考えられる。7～10は、小型の甕形土器に把手を装着したもので、鉄製のものから発想されたものであろうか。11は、更に小型となっている。



把手付鍋出土例

1．堀越中道遺跡
2．秋田城跡
3．多賀城跡
4．関畑遺跡
5．源常平遺跡
6．吉田向井遺跡
7．石上神社遺跡
8．砂沢平遺跡
9．〃
10．黒石市高館遺跡
11．〃

第223図　把手付鍋の集成

第3節　結　　語

縄文時代の遺構は、前期前半の花積下層式と関山式の両型式の中間型式として提唱された「二ッ木式」土器を三原田城出土の花積下層式土器と県内の撚糸圧痕文を持つ土器を比較した。その文様系譜は花積下層式土器から抽出され、撚糸圧痕文→撚糸圧痕文＋刻み目細隆帯への推移が見られ、「花積下層III式」の要素を色濃く継承する「二ッ木1式」の古段階に位置付けした。

今後の課題として、本遺跡と大胡西北部遺跡群第2集の新屋敷遺跡、堀越芝山遺跡の総論を試みる必要があり、新田野貝塚より出土した土器との比較問題、関山式と二ッ木式との区分問題等を検証したい。

歴史時代の集落址は、9世紀第1四半紀～10世紀前半に至る約100年の間に営まれ、遺構・遺物からも一般集落とは異にする特殊性が検出された。

竪穴住居跡では、県内2例目の検出である礎石建ちの18号住居跡がある。その規模は、集落内で最大のものであり、4本主柱穴に替えて礎石を有する。礎石は掘り方に根石を設けて安定したレベルに据えられており、寺院等の建築に拘わる人物が介在したと推察される。

この住居の中央部には火床を伴う土坑が有り、刀子・飾り釘・環頭金具・馬具に拘わる？鉄製品や羽口や鉄滓の出土から鍛治に拘わる中心的な建物と推察され、17号住居では、金鉗・火打ち鎌・鎌・青銅管が出土している。37号住居は、中央部に南北に長い楕円形の掘り込みがあり、羽口が出土している。8号と10号住居からは刀子の未製品と思われるものがあり、鉄製品に拘わる専業集団と推察される。

当町では、八ヶ峰遺跡と乙西尾引遺跡で製鉄址が調査されており、当町の北に続く宮城村でも片並木遺跡が知られている。また、小谷地が放射状に続く地形と表採から製鉄址の存在が考えられ場所も多くあり、製鉄址の生産年代にも符合する。

掘立柱建物跡は、居住性が考えられる庇を付す大型建物や倉庫群が検出された。明確ではないが、集落の中央部を東西に走行する側溝もちの道路址の存在から、集落で生産された鉄製品等の運搬に使用されると考えられる牛馬の小屋もあったと推察される。

この集団は、「立」を共通の標識文字として、「下殿」の墨書土器や石製巡方、刀金具の出土から下級官人の支配下にあり、九字や紡錘車に見られる祭祀を操る祭祀者も存在したのであろう。鉄製把手付鍋は本県では初見であり、その出土例も限られており、焼印やK－14窯式の灰釉陶器の出土は、本集落の重要性と特殊性を暗示している。

これらの推測が許されれば、本集落は官衙等と深くリンクし、本町地域周辺の鉄生産を掌握するターミナル的な集落と考えられる。

最後に、本報告書をまとめるにあたり縄文時代では谷藤保彦氏に公私多忙にも拘わらず浅学の筆者の無学に御助言・御指導をいただき、歴史時代では高島英之氏に文字資料に関する多くの資料提示と御助言、百瀬長秀氏には長野県の資料協力をいただき謝意を表します。

付表《縄文時代石器計測表》

遺構名 番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
J 1 H－9	9.3	5.8	1.0	30.4
J 2 H－10	14.7	9.5	5.8	881.0
－11	16.6	8.5	5.1	955.0
－12	14.8	7.9	4.2	610.0
－13	13.8	6.8	5.3	765.0
－14	10.0	7.3	5.1	510.0
－15	10.2	8.2	4.1	503.0
－16	11.2	7.5	4.3	421.0
－17	8.7	7.2	1.7	70.0
－18	8.6	4.7	2.1	88.0
－19	7.2	3.6	1.2	39.4
J3H－14	14.3	11.2	7.7	1353.0
－15	13.1	8.9	4.1	628.0
－16	11.9	7.1	4.9	522.0
－17	11.0	6.9	4.2	412.0
－18	10.2	3.7	2.0	111.0
J 4 H－6	20.1	15.7	4.4	1559.0
－7	11.3	8.2	4.1	557.0
－8	10.3	8.4	5.8	537.0
－9	12.4	8.0	4.3	566.0
－10	11.0	7.1	4.5	503.0
－11	8.3	7.4	4.2	254.0
－12	2.9	1.8	0.6	4.7
－13	5.9	3.0	1.0	16.0
J 5 H－6	18.5	7.6	4.3	789.0
J 6 H－36	11.5	8.0	5.0	639.0
－37	11.5	7.7	5.1	423.0
－38	8.6	3.0	1.1	22.2
－39	7.0	3.5	0.7	17.0
J 7 H－11	11.6	8.1	5.2	687.0
－12	14.8	3.9	1.5	121.0
J 9 H－8	12.2	1.0	3.8	609.0
－9	11.4	8.5	5.5	676.0
－10	9.2	8.1	3.7	361.0
J 10H－18	9.2	7.0	4.2	297.0
－19	23.9	21.3	6.1	3244.0
－20	18.1	12.1	6.7	1417.0
－21	5.6	7.9	1.1	41.8
－22	2.6	1.7	0.5	1.7
－23	10.6	6.3	1.7	115.0
－24	9.4	4.6	2.1	91.5
－25	6.6	7.0	1.6	56.5
J 11H－4	14.2	7.2	3.2	485.0
J 13H－43	21.4	9.1	4.2	1067.0
－44	11.5	7.1	4.4	479.0
－45	7.8	5.5	5.2	244.0
－46	9.3	8.1	4.3	330.0
－47	10.4	8.2	5.1	542.0
－48	14.2	8.2	4.5	564.0
－49	18.4	8.1	3.6	507.0
－50	12.6	7.6	3.8	566.0
－51	27.4	20.0	4.2	2802.0
－52	19.4	19.3	5.0	961.0
J14H－3	14.8	7.8	4.5	716.0
－4	10.0	5.4	2.1	115.0
－5	8.0	4.8	1.7	59.0
J15H－5	11.2	9.5	4.2	545.0
J16H－28	6.3	4.5	1.4	53.0
－29	5.1	3.1	0.5	8.7
－30	4.0	5.8	1.2	16.8
－31	3.3	5.8	0.8	10.4
－32	6.5	6.5	3.2	177.0
－33	15.8	8.5	4.6	918.0
－34	13.6	8.5	3.3	560.0
－35	8.8	5.9	3.0	186.0
－36	11.0	7.2	4.2	497.0
－37	10.3	8.2	5.5	600.0
－38	10.0	7.4	4.1	334.0
－39	9.8	8.3	4.5	440.0
－40	14.9	12.0	9.7	2019.0
－41	16.2	15.0	6.3	1721.0
－42	22.5	18.5	5.2	1439.0
J17H－4	19.2	17.5	6.5	2568.0
－5	11.9	6.9	3.8	471.0
－6	12.5	4.8	1.5	121.0
表土・グリット－91	1.8	1.5	0.35	0.7
－92	1.7	1.5	0.5	0.8
－93	11.7	6.7	4.2	483.0
－94	7.5	3.5	1.2	21.0
－95	4.6	6.4	0.8	20.2
－96	7.1	2.8	1.0	16.0
－97	6.1	3.9	2.8	65.0
－98	7.7	6.0	1.7	64.0
－99	9.7	6.4	2.5	161.0
－100	12.2	7.1	2.2	210.0
－101	12.1	6.8	2.3	155.0
－102	18.1	8.8	5.2	1065.0
－103	12.5	8.6	5.1	702.0
－104	11.6	6.7	3.2	352.0
－105	10.5	9.6	4.9	651.0
－106	9.4	9.3	5.6	708.0
－107	10.3	8.9	3.0	352.0
－108	12.2	7.7	4.0	517.0
－109	16.3	12.2	5.2	1135.0
－110	17.6	17.6	7.0	1779.0
－111	28.2	31.4	12.2	12kg

参考文献

新井和之　上長者台遺跡―リゾートマンション建設に伴う遺跡発掘調査報告書―上長者台遺跡調査会 1992

石坂　茂　勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ―関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集―1988 群馬県埋蔵文化財事業団

市村勝巳他　南栗遺跡　中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書７―松本市内 その４―1990　長野県埋蔵文化財センター他

石野博信　古代住居のはなし　吉川弘文館 1995

石塚和則他　楊櫨木遺跡　狭山市文化財報告12 1986 狭山市教育委員会

石守　晃他　糸井宮前遺跡Ⅰ　―関越自動車（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第８集―1985 群馬県埋蔵文化財調査事業団

井上唯雄　―群馬県下の歴史時代の土器―　群馬県史研究 第八号 昭和53年

大胡町役場　大胡町誌　1976

大胡町　まんが大胡町誌　1995

木本元治他　関畑遺跡　本宮町文化財調査報告書第５集 1982 本宮町教育委員会

群馬県教育委員会　群馬県出土の墨書・刻書土器集成(1) 1989

群馬県教育委員会　群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2) 1992

群馬県教育委員会　新発見考古速報展96　群馬県地域展示 群馬発掘最前線 1996

桑原滋郎他　多賀城市史　４　考古資料

小島純一　西迎遺跡　粕川村文化財調査報告書第11集 1990

小松正夫他　秋田城跡　平成元年度秋田城跡発掘調査概報 秋田市遺跡保存会 秋田城跡発掘調査事務所

瓦吹　堅　茨城県北部の墨書土器―常陸国多珂郡を中心に―標葉文化論究 1996

斎藤利昭　平成８年度調査遺跡発表会　三ッ木皿沼遺跡　1996 群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口一・三浦京子　奈良・平安時代の土器の編年　群馬県史研究 第24号

坂口　一他　資料集　赤城山麓の歴史地震　1991 新里村教育委員会

澁谷昌彦　花積下層式土器研究史と福島県内資料の型式分類　みちのく発掘

澁谷昌彦　花積下層式土器の研究―側面圧痕文土器を中心として―　丘陵第11号 1984

鈴木徳雄　阿知越遺跡Ⅰ　1983　児玉町教育委員会

関根慎二　群馬県における前期終末の様相　第６回 縄文セミナー 前期終末の諸様相 1993

高島英之　古代の焼印についての覚書　古代史研究第11号 1992

高島英之　古代東国の村落と文字　古代東国の民衆と社会　古代王権と交流２ 1994 名著出版

高島英之　群馬県吉井町黒熊中西遺跡出土元慶四年銘砥石をめぐって　1996　栃木史学 第十号

谷藤保彦他　中畦遺跡・諏訪西遺跡―関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第９集-1986 群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦他　三原田城遺跡他-関越自動車（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集　1987 群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦　二ツ木式土器　1988 群馬の考古学 創立十周年記念論集

谷藤保彦他　芝山遺跡　北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　1993

谷藤保彦　群馬県における早期末・前期初頭の土器　第７回 縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相 1994

徳江秀夫　グンマ古代史　飾り大刀の世界　群馬風土記VOL.21　３・４月号 1991

富澤敏弘　芳賀東部団地遺跡Ⅲ―縄文・中近世編―芳賀団地遺跡群 第３巻 1990

豊島泰国他　Books Esoterica　６　陰陽道の本

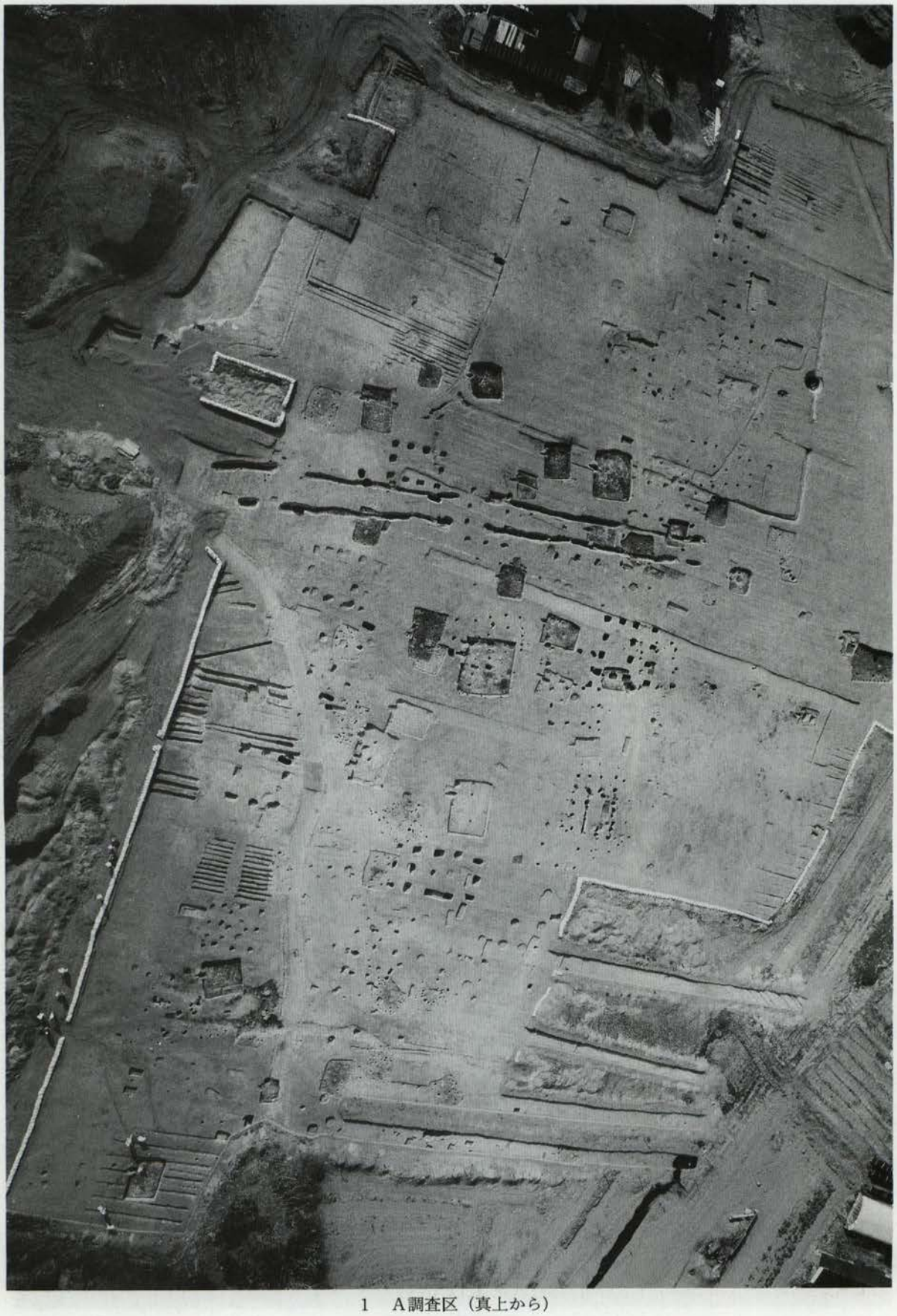
成田誠治他　黒石市高館遺跡発掘調査報告書（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査）　青森県埋蔵文化財調査報告書第40集 1978

羽田守快他　BooKs Esoterica 8 修験道の本
原　雅信　二之宮谷地遺跡 一般国道17号（上武国道）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1994年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
平川　南　墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―
福田健司他　落川遺跡調査概報 VI 日野市落川遺跡調査会 1988
藤坂和延　中川原遺跡群 小林・山神・大畑遺跡 団体営中川原地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（II） 1992
藤坂和延他　大胡西北部遺跡群 乙西尾引・西天神・柴崎遺跡「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1994
藤巻幸男　五目牛清水田遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（縄文編） 1993 群馬県埋蔵文化財調査事業団
松田　猛　群馬県における文字瓦と墨書土器―前橋市上西原遺跡の文字資料― 信濃 第38巻 第11号
望月　映　中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4―松本市内その1―総論編 1990 長野県埋蔵文化財センター他
森 和敏他　青木北遺跡・梅の木遺跡 県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 1992 山梨県教育委員会
山口逸弘他　五目牛南組遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（縄文時代編） 1992 群馬県埋蔵文化財調査事業団
山下歳信　天神風呂遺跡 主要地方道 前橋・大間々桐生線〈仮称大胡バイパス〉建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書 1981 大胡町教育委員会
山下歳信　大胡城保存管理計画書 1988 大胡町教育委員会
山下歳信　中川原遺跡群 上ノ山遺跡 団体営中川原地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1992 大胡町教育委員会
山下歳信　西小路遺跡 （ゴルフ練習場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告） 1994 大胡町教育委員会
山下歳信　日光道東遺跡 団体営日光道東地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I 1994 大胡町教育委員会
山下歳信　浅見遺跡 団体営日光道東地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II 1995 大胡町教育委員会
山下歳信　茂木遺跡群 稲荷窪A地点遺跡 「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I 1996 大胡町教育委員会
山下歳信他　堀越芝山遺跡 「大胡町総合運動公園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1996 大胡町教育委員会
山村信榮　太宰府周辺の道路遺構 季刊考古学 第46号 特集古代の道と考古学 1994
綿貫邦男　群馬県における歴史時代の土器について 群馬考古学手帳 Vol. 3 1992
綿貫邦男他　群馬県における灰釉陶器の様相について(1)―消費地からのアプローチ―研究紀要9 1992 群馬県埋蔵文化財調査事業団

写真図版

作業風景スナップ

図版 1

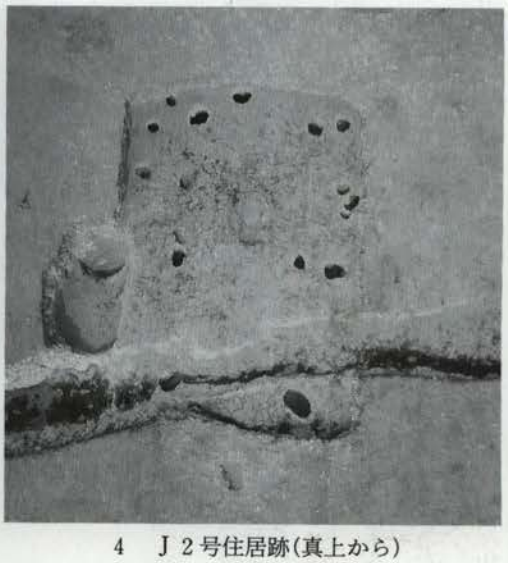


1　A調査区（真上から）

1　Ｊ１号住居跡(東から)

2　Ｊ１号住居跡(真上から)

3　Ｊ２号住居跡(西から)



4　Ｊ２号住居跡(真上から)

5　Ｊ３号住居跡(北から)

6　Ｊ３号住居跡(真上から)

図版３

1　Ｊ３号住居跡遺物出土状況

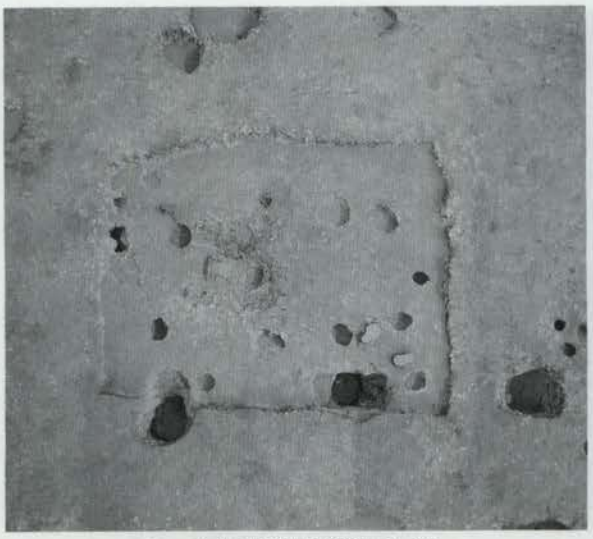
2　Ｊ４号住居跡(東から)

3　Ｊ４号住居炉址

4　Ｊ５号住居跡(東から)

5　Ｊ５号住居炉址

6　Ｊ６号住居跡(東から)



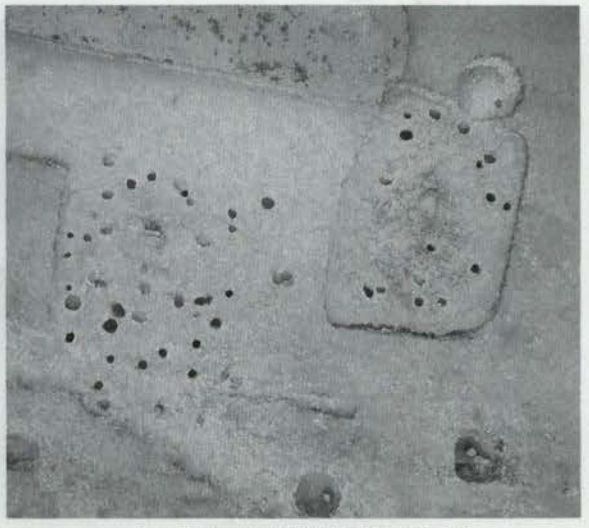
1　Ｊ６号住居跡(真上から)

2　Ｊ６号住居炉址

3　Ｊ７号住居跡(南東から)

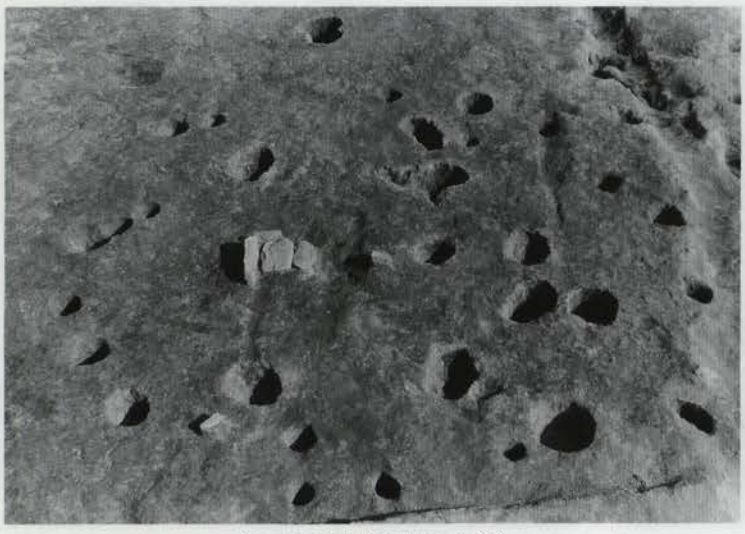
4　Ｊ７・11号住居跡(真上から)

5　Ｊ７号住居炉址



6　Ｊ８・９号住居跡(真上から)

図版 5



1　J 8 号住居跡(西から)

2　J 8 号住居炉址

3　J 9 号住居跡

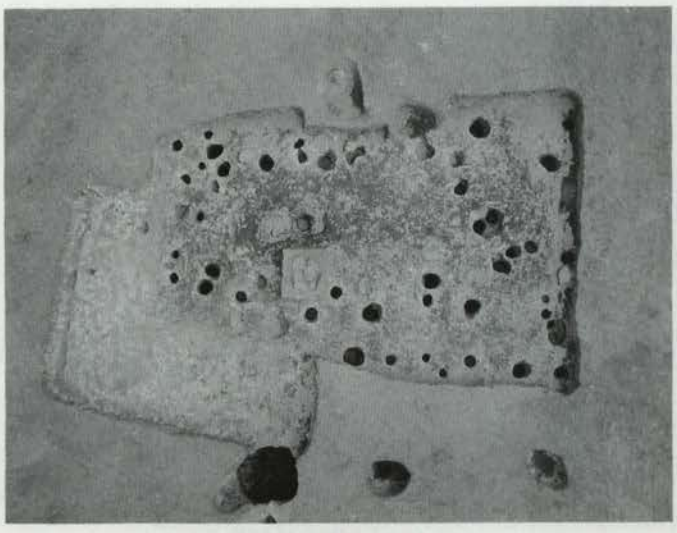
4　J 9 号住居炉址

5　J10号住居跡(南東から)

6　J10号住居跡(真上から)

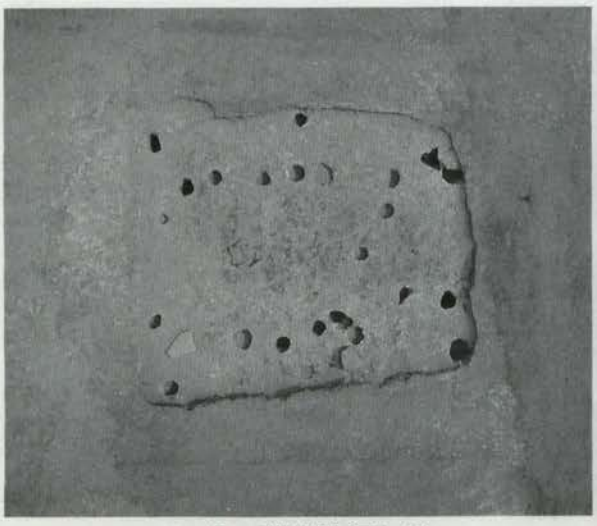
1　J 10号住居炉址

2　J 10号住居跡遺物出土状況

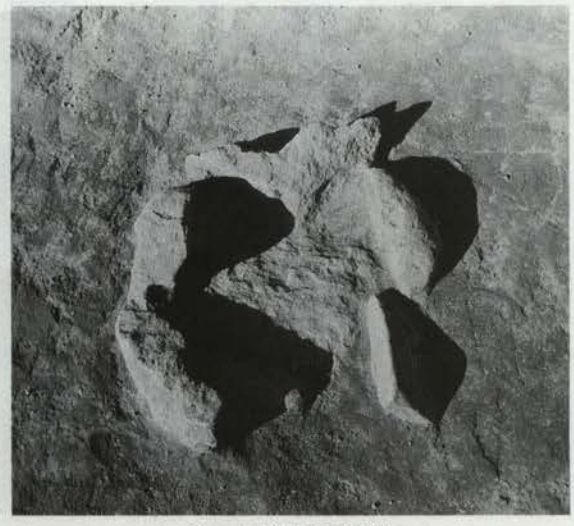


3　J 13号住居跡(真上から)

4　J 13号住居炉址

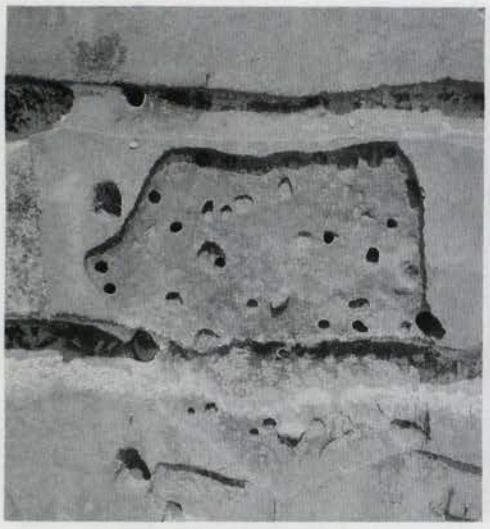


5　J 14号住居跡(西から)



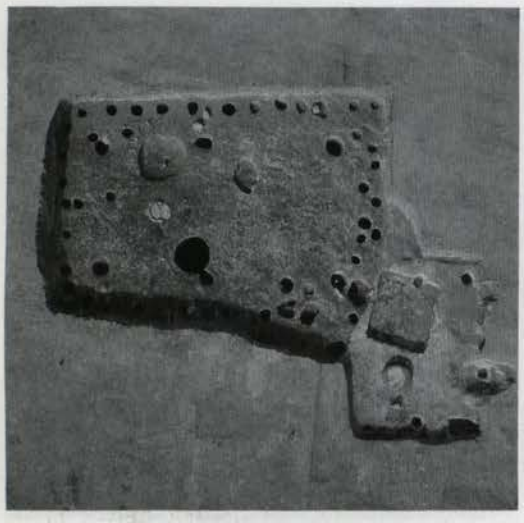
6　J 14号住居炉址

図版 7



1　J 15号住居跡(真上から)

2　J 16号住居跡(東から)



3　J 16号住居跡(真上から)

4　J 16号住居炉址

5　J 17号住居跡(南から)

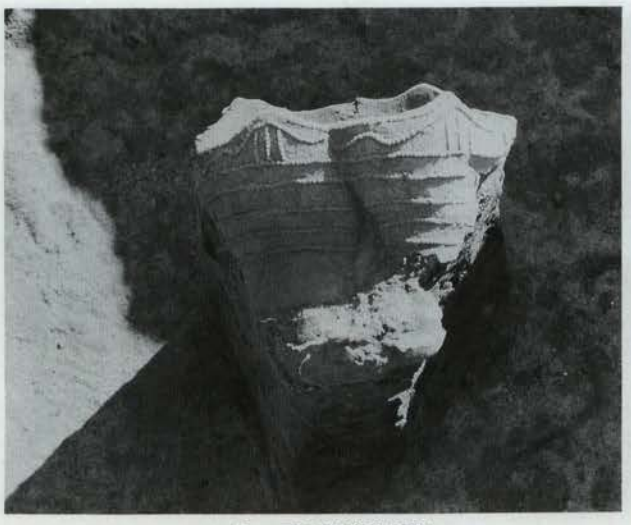
6　J 18号住居跡(東から)

1　J18号住居跡遺物出土状況

2　J19号住居跡(西から)

3　J 4 号土坑

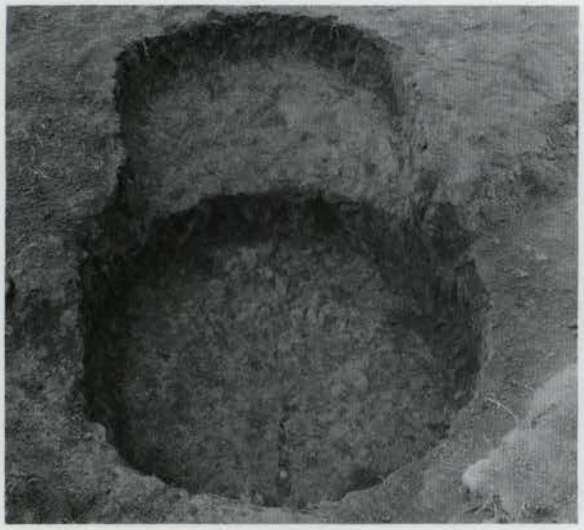
4　J 5 土坑



5　J 5 号土坑遺物近撮

6　J14号土坑

図版 9



1　J 23号土坑

2　J 25号土坑

3　D調査区全景（東より）

4　40号住居跡(真上から)

5　40号住居跡遺物出土状況

1　41号住居跡(真上から)

2　42号住居跡(真上から)

3　43号住居跡(真上から)

4　1号住居跡(真上から)

5　1号住居跡セクション

6　1号住居跡遺物出土状況

図版11

1　2号住居跡(真上から)

2　2号住居跡セクション

3　3号住居跡(真上から)

4　3号住居跡炭化材出土状況

5　3号住居跡焼印出土状況

6　4号住居跡(西から)

1　5号住居跡(西から)

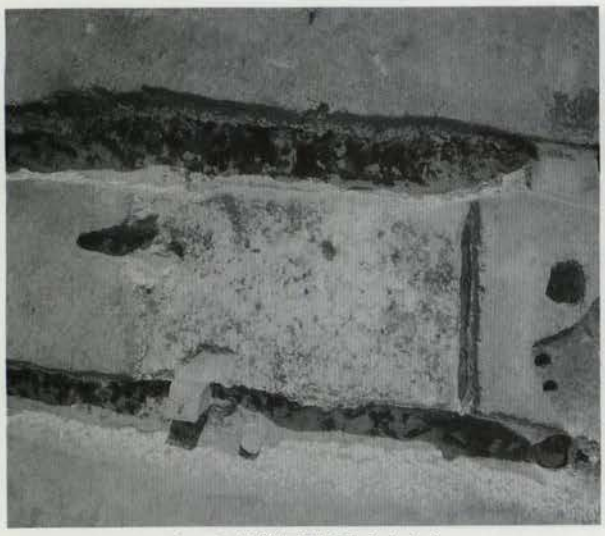
2　6号住居跡(真上から)

3　6号住居跡(西から)

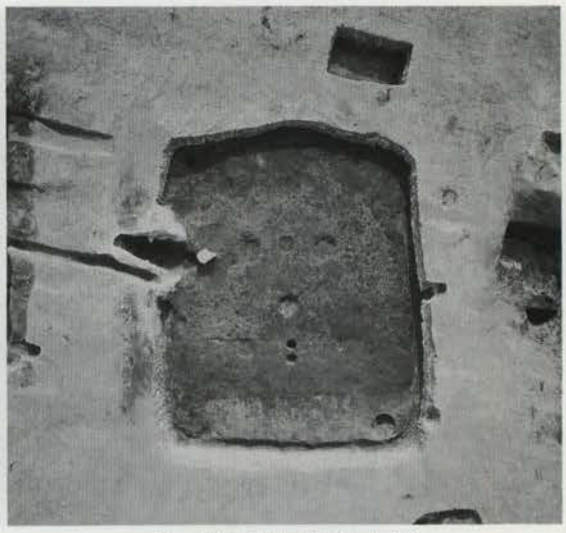
4　7号住居跡(真上から)

5　8号住居跡(真上から)

図版13



1　9号住居跡(真上から)



2　10号住居跡(真上から)

3　10号住居カマドセクション

4　10号住居跡遺物出土状況

5　10号住居跡遺物出土状況

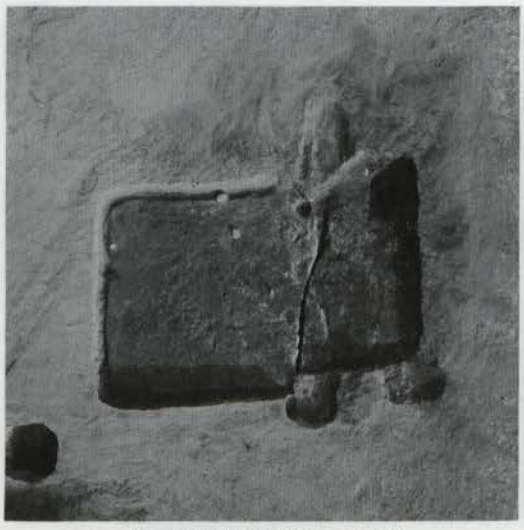
6　11号住居跡(真上から)

1　11号住居跡セクション

2　12号住居跡(真上から)

3　12号住居跡遺物出土状況

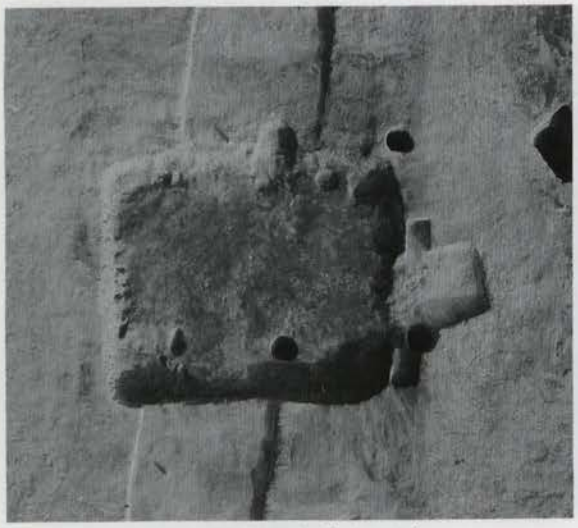
4　13号住居跡(真上から)



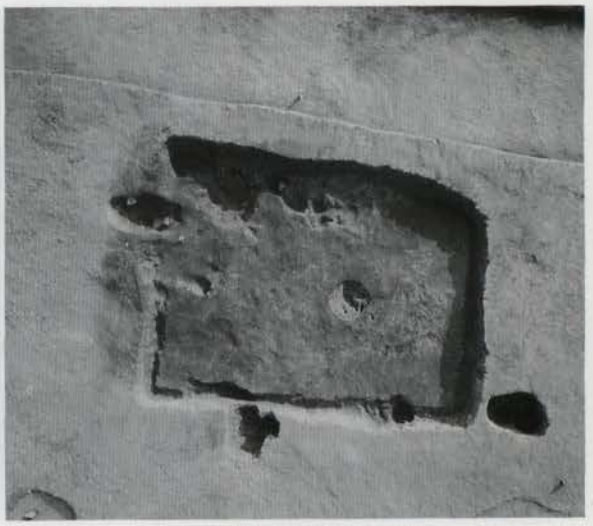
5　14号住居跡(真上から)

6　14号住居跡セクション

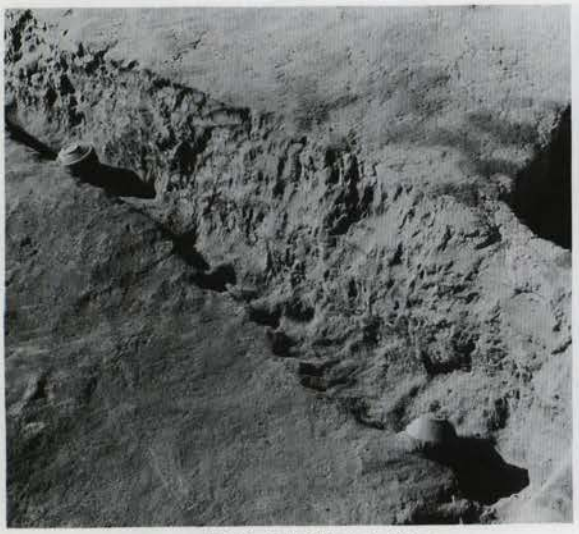
図版15



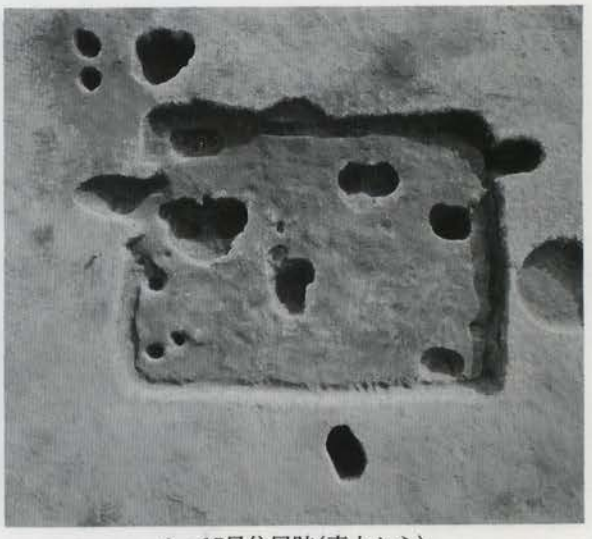
1　15号住居跡(真上から)



2　16号住居跡(真上から)



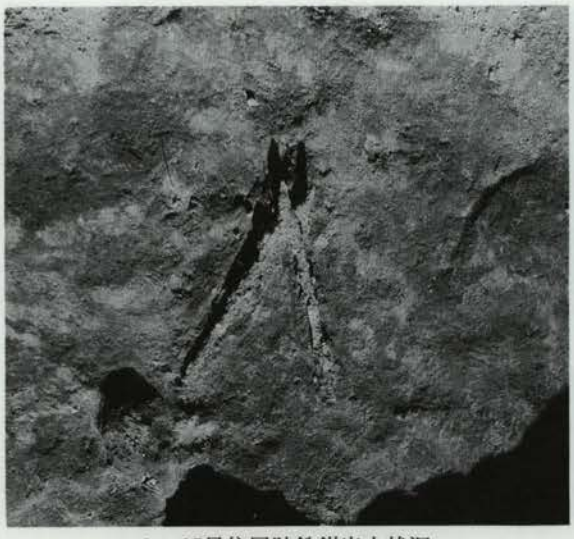
3　16号住居跡遺物出土状況



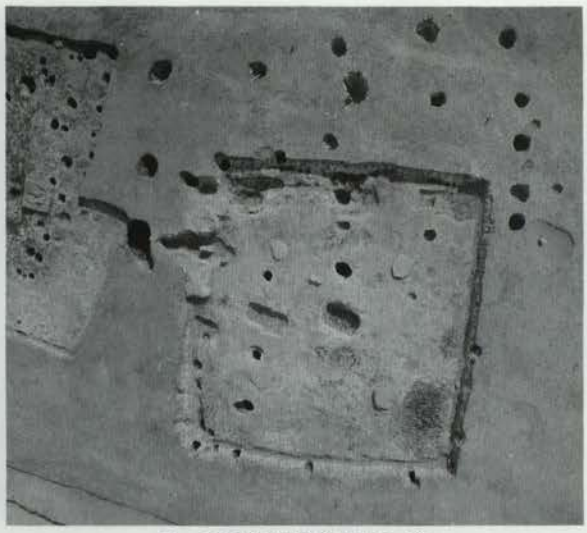
4　17号住居跡(真上から)

5　17号住居跡炭化材出土状況

6　17号住居跡鎌出土状況



1　17号住居跡鉄鉗出土状況



2　18号住居跡(真上から)

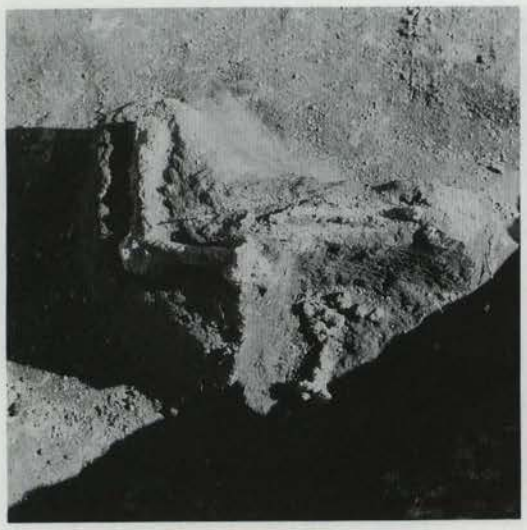
3　18号住居跡礎石(S 1)

4　18号住居跡礎石(S 2)

5　18号住居跡礎石(S 3)

6　18号住居跡礎石(S 4)

図版17



1　18号住居跡鉄製品出土状況

2　19号住居跡(北から)

3　21号住居跡(西から)

4　21号住居跡カマド

5　22号住居跡(西から)

6　22号住居跡遺物出土状況

1　23号住居跡(西から)

2　23号住居跡カマド

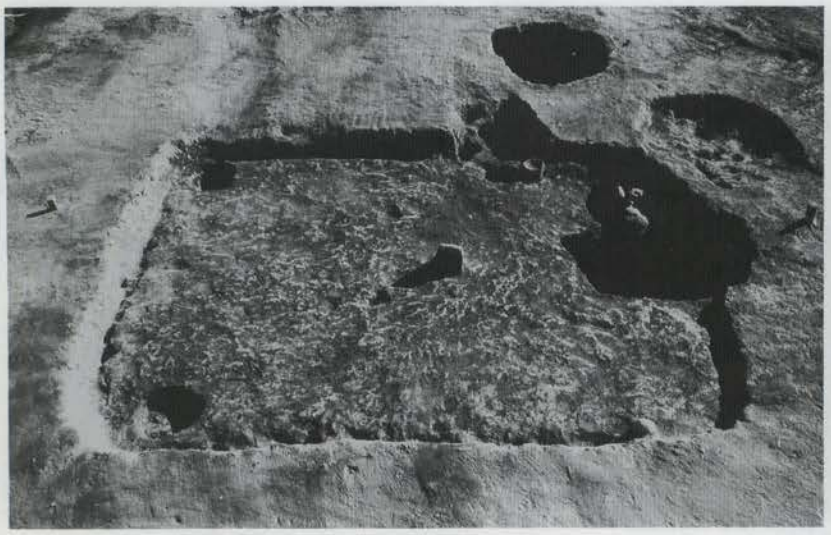
3　25号住居跡(西から)

4　26号住居跡(真上から)

5　27号住居跡(真上から)

6　28・29号住居跡(西から)

図版19



1　30号住居跡(西から)

2　31号住居跡(真上から)

3　32号住居跡(真上から)

4　33号住居跡(真上から)

5　34号住居跡(真上から)

6　36号住居跡遺物出土状況

1　37号住居跡(西から)

2　38号住居跡(真上から)

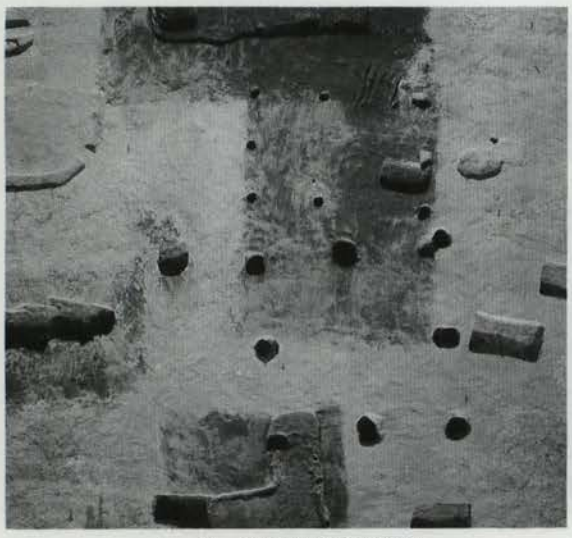
3　把手付鉄鍋出土状況

4　39号住居跡(西から)

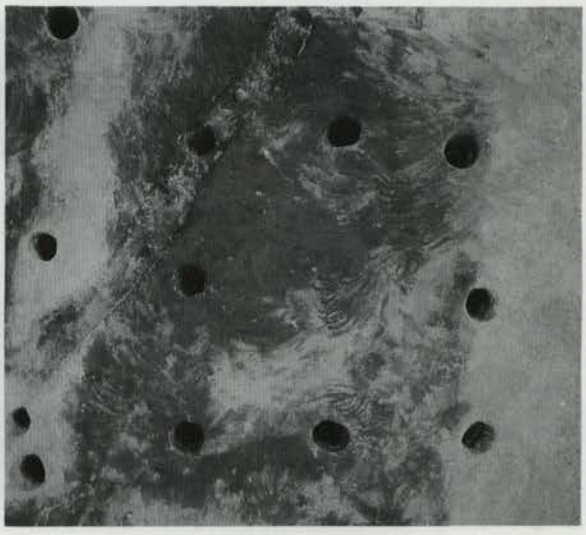
5　南東竪穴遺構

6　1号掘立柱建物跡

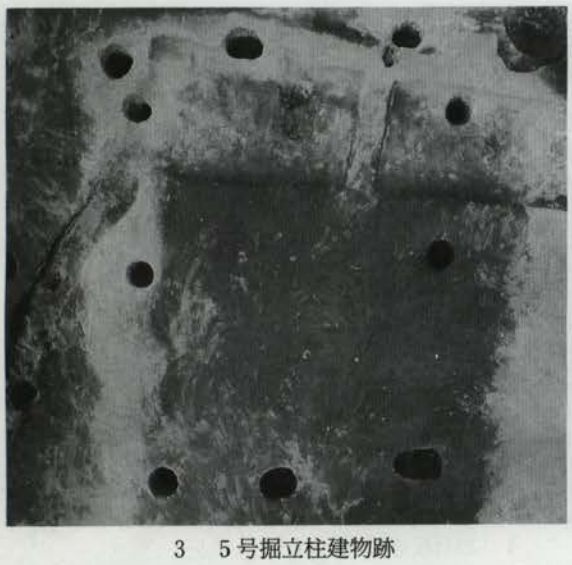
図版21



1　2・3号掘立柱建物跡

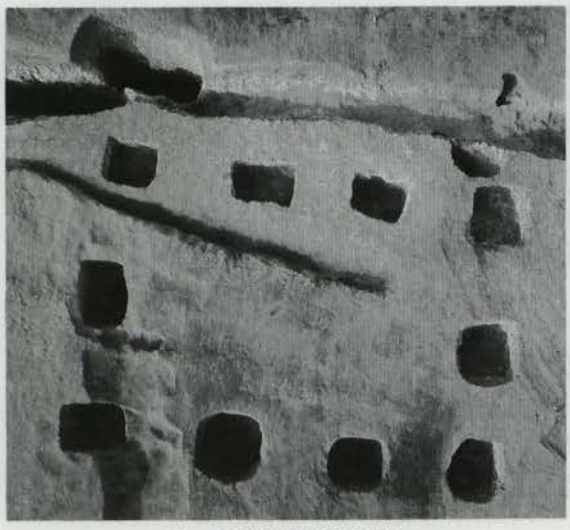


2　4号掘立柱建物跡



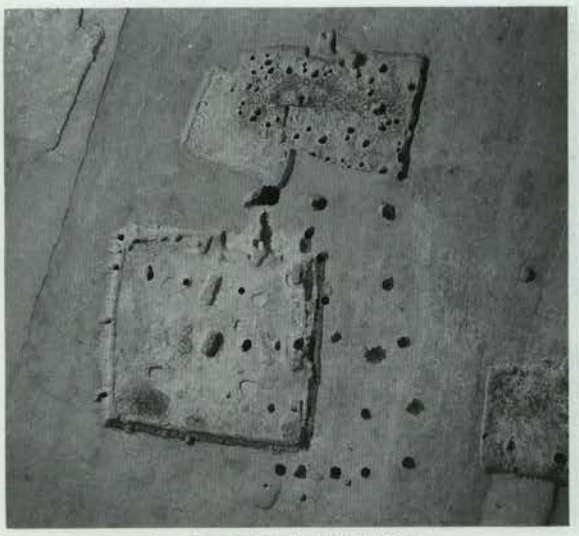
3　5号掘立柱建物跡

4　6号掘立柱建物跡



5　7号掘立柱建物跡

6　8号掘立柱建物跡

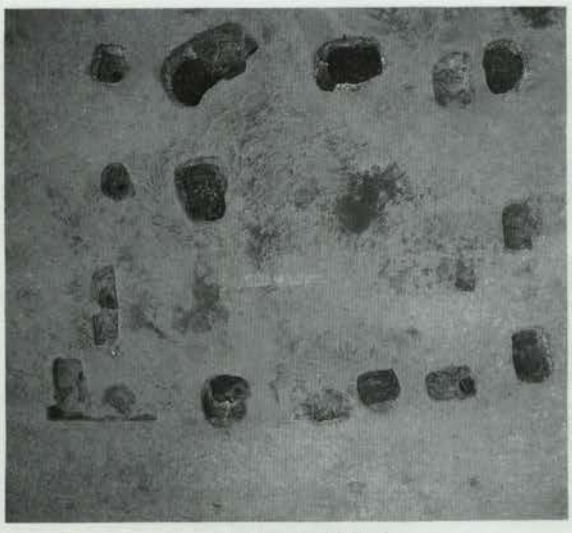


1　10・11号掘立柱建物跡

2　11号掘立柱建物跡

3　12・12′号掘立柱建物跡

4　13号掘立柱建物跡



5　14号掘立柱建物跡

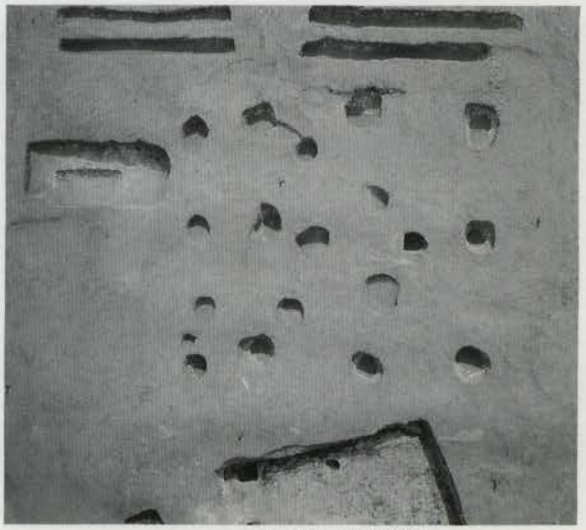
6　16号掘立柱建物跡

図版23

1　17号掘立柱建物跡

2　20号掘立柱建物跡

3　21号掘立柱建物跡



4　22・23号掘立柱建物跡

5　24号掘立柱建物跡

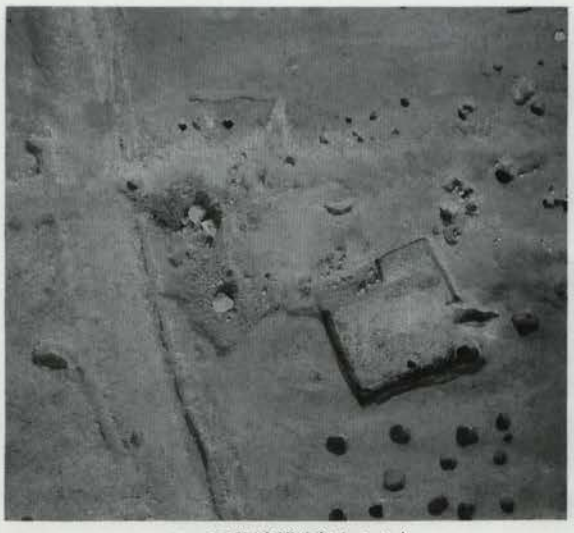
6　25号掘立柱建物跡

1　26号掘立柱建物跡

2　28号掘立柱建物跡

3　29・30号掘立柱建物跡

4　31号掘立柱建物跡



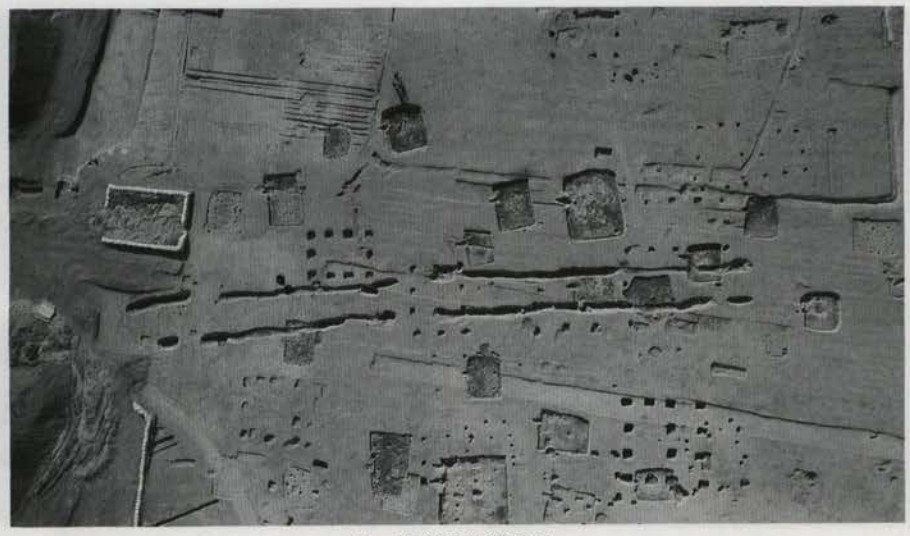
5　石敷遺構(真上から)

6　石敷遺構(西から)

図版25

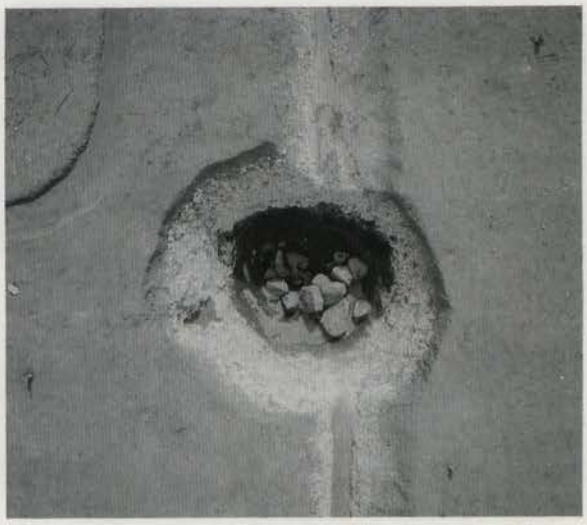
1　石敷遺構(北から)

2　石敷遺構（S２・３）



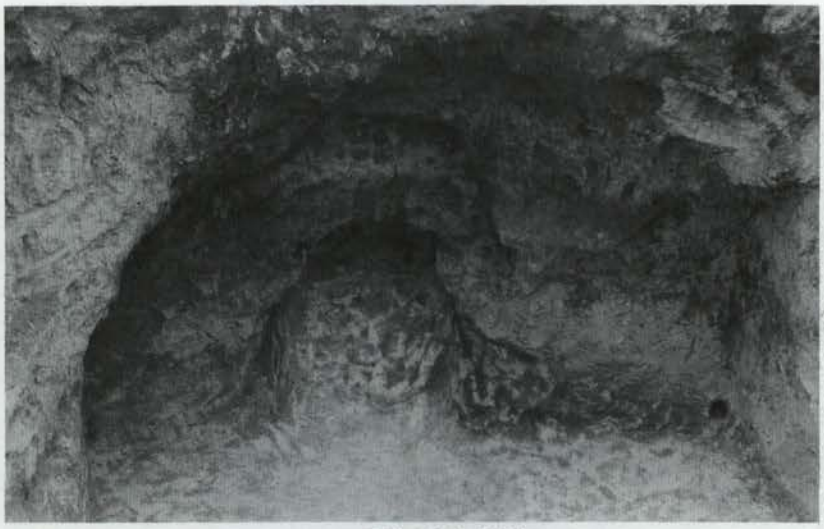
3　平安時代道路址

4　道路址側溝雁股鏃出土状況



5　井戸状遺構

1　1号地下式土坑



2　1号地下式土坑内部

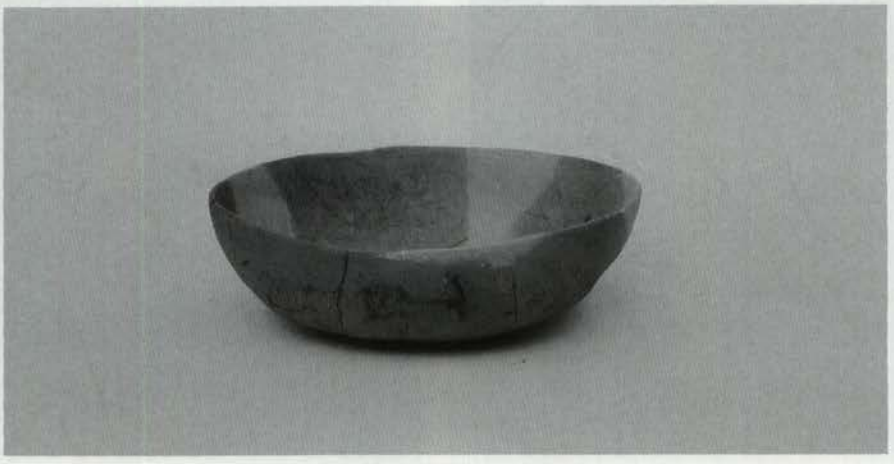
3　同内茶臼出土状況

4　土坑墓

図版27

1　Ｊ５号土坑出土十三菩提式土器

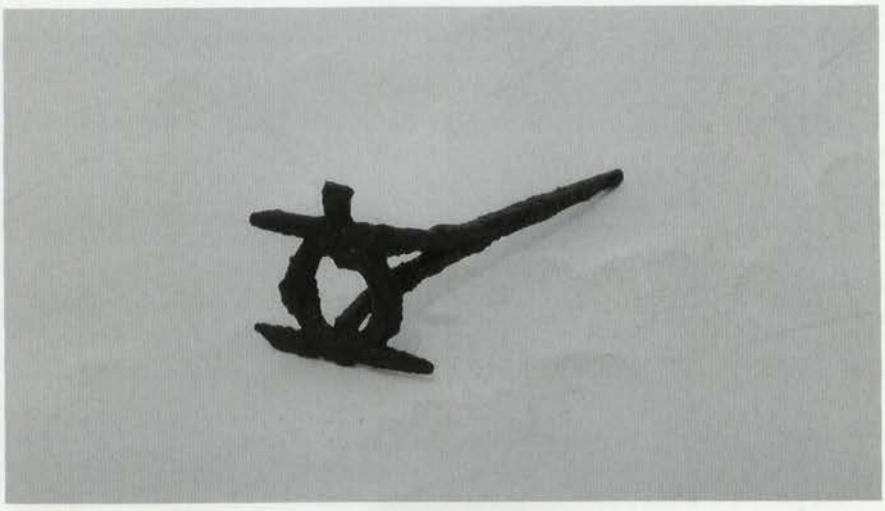
2　道路址(MD2)出土№４遺物・墨書「立」



3　同遺物・墨書「下殿」

1　11号住居跡出土遺物・墨書「山椎」

2　3号住居跡出土遺物「九字」



3　3号住居跡出土焼印

大胡西北部遺跡群発掘調査報告書第３集

堀越中道遺跡

平成９年３月31日

編　　集　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　　行　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-02　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115
☎027（283）1111

印刷製本　　朝日印刷工業株式会社